

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02992 9007







不特其理

身計者 休思身精治

相繼者 山顯明鳴

相繼者 平 莊 登

相繼者 三 陸 膠

大正二年三月十日
大正二年三月十日

平定府知府
官印

(西山製本)

大正二年三月十日印刷
大正二年三月十三日發行

有朋堂文庫
平安朝物語集
(非賣品)

東京市神田區錦町一丁目十九番地

編輯兼發行者
三浦理

東京市本所區番場町四番地

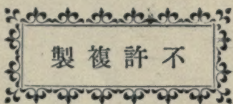
印刷者
平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所
凸版印刷株式會社分工場

東京市神田區錦町一丁目十九番地

發行所
有朋堂書店



不許複製

○小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

〇小畑 〇小畑 〇小畑

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

平

坊の前に歌を書く

人に答ふる歌

○越前權守兼盛

○衛府督、衛府佐

○衛府司

○ふみまけて

○衛門の督

○衛門佐

ヲ

○嗚呼がまし

○嗚呼なる者

○なさなおひ

○なさくし

○鴛鴦

○處女塚

○小野

○小野房守

○尾張

○姨捨山の話

○小總の驛

一五三ノ九

一五三ノ五

一五七ノ一〇

一一二ノ五

四四六ノ一

五〇九ノ五

三〇〇ノ一一

四二〇ノ四

五六三ノ一二

三五五ノ一〇

五〇三ノ九

一一四ノ七

五四八ノ三

二二一ノ一

一一〇ノ一

一五ノ一〇

五八ノ一

二三五ノ六

二三三ノ三

○女郎花

一四八ノ四

平安朝物語集索引終

わすれなむ 三二二ノ二
 わすれにし 四三〇ノ五
 わだつうみの 一五六ノ二〇
 わだつみと 二二三ノ四
 わだつみの(かざし) 一二四ノ九
 わだつのみ(そことも) 四八ノ二一
 わだつのみ(なかに) 二〇二ノ六
 わびぬれば 一三七ノ九
 われさへや 六三〇ノ二
 われとのみ 三三〇ノ二
 われならで 八〇ノ一
 われならぬ 四七六ノ五
 われにつゆ 二七〇ノ七
 わればかり 七〇ノ七
 わればさは 一六四ノ三
 われみても 二二八ノ三
 われもしか 二二九ノ三
 糸にかける 五八七ノ五
 をぎのはの 一八八ノ二
 をぐらやま 一七九ノ六
 をしめども(しひて) 四八七ノ五

をしめども(はるの) 一五ノ二〇
 をちこちの 一五八ノ五
 をみなへし 一四八ノ五
 をりつれば 二五〇ノ三
 をるひとの 二二三ノ四
 二七〇ノ二
 〇わかうどほり腹 三九七ノ七
 〇若君(落窪物語) 四六七ノ二
 誕生 四六九ノ二
 春宮の殿上 四九二ノ一
 年の賀の舞 四九三ノ五
 御冠 四九四ノ二
 兵衛佐少將に進む 四九四ノ二
 左大將 五五九ノ二
 誕生 五六一ノ三
 〇若狭の御 五六九ノ七
 〇若菜まゐる 一四二ノ九
 〇若姫君 四三六ノ八
 誕生 五六一ノ一

女御となる 五八九ノ八
 〇わかんどほり腹 二六七ノ三
 〇わぎばみ 三三八ノ五
 〇忘るも草 六二七ノ八
 〇忘草 二二ノ九
 〇渡守 六二ノ二
 〇わたらひ 二二三ノ一
 〇わび歌 三ノ七
 〇蕪屋にはゞき 五四九ノ六
 〇わりげなし 二八九ノ七
 〇膝行歩く 六〇九ノ一
 〇ゐだけ 三二五ノ八
 〇井手の山吹 一五九ノ八
 〇田舎わたらひ 七二ノ二
 〇院の帝 一四九ノ二

〇裏秀 一五三ノ四
 御驗者

ゆくすゑの(すくせも)

ゆくすゑの(すくせを)

ゆくひとは

ゆくほたる

ゆくみづと

ゆくみづに

ゆふぐれに

ゆふされば

ゆゆしくも

ゆゆしとて(いみける)

ゆゆしとて(いむとも)

よしおもへ

よそながら

よそにては

よととも

よなよなに

よにふるを

よにふれど

よのなかに(いかで)

よのなかに(さらぬ)

よのなかに(たえて)

一九八ノ三

二六三ノ六

一八三ノ五

八四ノ九

八八ノ一

八六ノ二

二四ノ五

一五七ノ二

一八九ノ二

一七五ノ二

一七五ノ一〇

一七二ノ四

一四八ノ二

二九五ノ九

五〇九ノ四

一八九ノ六

二九八ノ二

二四ノ三

二六九ノ七

二二ノ一

二〇八ノ三

よのなかの

よのひとの

よにはいでて

よひごとに

よひよひに

よもあけば

よもぎおひて

よをうみの

よをそむく

よをわぶる

わがうへに

わがかたに

わがかどに

わがこころ

わがごとく

わがそでば

わがたのむ

わがために

わがたもと

わがのりし

わがやどに(いる)

二六〇ノ二〇

三六五ノ九

二〇九ノ七

二三五ノ九

一六五ノ七

六四ノ九

二五ノ二

二二ノ二〇

二四九ノ八

一八五ノ七

九〇ノ五

六三ノ二

二〇四ノ七

二二六ノ七

五四八ノ四

八九ノ三

二二ノ一

一八八ノ七

一三ノ六

一九一ノ五

一五六ノ二

わがやどに(まだ)

わがやどの

わがやどは

わがやどを

わがよをば

わかるべき

わかるれど

わかれにし

わきもこが

わすらるな

わすらるる(ときは)

わすらるる(みはわれ)

わするなよ

わするやと

わするらむ

わすれぐさ(ううと)

わすれぐさ(おふる)

同

わすれじと

わすれては

五八ノ五

二〇〇ノ二

二六三ノ七

一六五ノ二

二二ノ二

一六七ノ七

二二三ノ二

六〇三ノ七

三二九ノ二

一六三ノ五

一九〇ノ一

一八九ノ九

一七〇ノ二

六三ノ五

一六〇ノ一

七〇ノ九

七〇ノ七

二二ノ二

二四ノ二

一七〇ノ二

二〇ノ五

ほどもなき	五二六ノ九
ほにいでて	二七五ノ四
まがきする	一五三ノ二
まくらとて	一〇九ノ二〇
まことかと	一四ノ九
まそかがみ	五八ノ二〇
みがくれに	二〇七ノ三
みかりする	二〇九ノ二
みくまのに	三八八ノ二
みじかしと	三四ノ二
みずもあらず	一二ノ五
みそぎする	四四八ノ二
みちとせに	四四八ノ五
みちのくの(あだちが)	一五八ノ一〇
みちのくの(あだちの)	一六五ノ一〇
みちのくの(しのぶ)	四九ノ七
みなくちに	七九ノ九
みなひとほ	二四六ノ三
みなひとの	二三ノ二
みのうみの	二六ノ一
みひとつに	一三三ノ四

みもみずも	二四三ノ二〇
みよしのの	六二ノ二
みるたびに(うらみ)	五七九ノ四
みるたびに(なみだ)	五六六ノ三
みるめかる	一〇〇ノ一
みるめなき	七九ノ一
みをうしと	二二〇ノ四
みをさらぬ	二九五ノ二
みをなげて	二三〇ノ五
みをわけて	四八八ノ一
むかしきて	一九二ノ七
むかしより	一九五ノ一
むぐらおひて	八九ノ二
むぐらおふ	三五ノ二
むさしあぶみ	六四ノ一
むさしのの	五三ノ二
むさしのは	六三ノ九
むつまじと	一八八ノ五
むらさきの(いろこき)	八二ノ九
むらさきの(くもの)	五九〇ノ五
めかるとも	八五ノ四

めぐりあふ	六二二ノ八
めにはみて	一〇〇ノ二
ものおもふと	一七六ノ二
ものごと	六〇〇ノ九
ももしきの	一八二ノ二〇
ももとせに	九二ノ二〇
もろともに(いざとは)	一九五ノ六
もろともに(かさねし)	六〇三ノ四
もろともに(つきみむ)	五七ノ二〇
もろともに(にしき)	六〇九ノ七
もろともに(みしに)	五七八ノ二
もろともに(あでの)	一九二ノ九
やそさかを	四四九ノ二
やどちかく	一六七ノ二
やまざとに	一七三ノ二
やましろの	一一九ノ六
やまのみな	一〇二ノ三
ゆかりまで	五三ノ八
ゆきてみぬ	一五四ノ三
ゆきふかく	四四九ノ一〇
ゆきやらぬ	八八ノ二

れぬるよの
 れのひして
 のがるとも
 のとならば
 のぼりゆく
 はかなくて
 はつぐさの
 はつごゑは(けふぞ)
 はつごゑは(めづらし)
 はつしぐれ
 はなざかり(すぎもや)
 はなざかり(はるは)
 はなすすき
 はなにあかぬ
 はなのいろを
 はなよりも
 はまちどり(あと)
 はまちどり(とび)
 はるがすみ
 はるのの(おひじ)
 はるのの(みどり)

一三三ノ六
 五一八ノ一
 一五三ノ九
 二二九ノ二二
 一五三ノ七
 三六三ノ二〇
 八六ノ三
 五二八ノ九
 五二八ノ七
 五〇四ノ六
 一五九ノ一
 一九六ノ九
 二〇九ノ二二
 七八ノ一
 一五六ノ八
 二二五ノ二一
 五四七ノ五
 二二四ノ四
 五二五ノ二
 一四三ノ四
 一九八ノ一

はるののは
 はるばただ
 はるばると
 はるはるの
 はるるよの
 ひかりさす
 ひぐらしに
 ひこぼしに
 ひさかたの
 ひさしくは
 ひとごころ(うきには)
 ひとごころ(うしみつ)
 ひとしれず(おもふ)
 ひとしれず(われこそ)
 ひとしれぬ(ごころ)
 ひとしれぬ(わが)
 ひとすちに
 ひととせに
 ひとのあきに
 ひとのうへと
 ひとのおやの

一四三ノ二
 二〇二ノ四
 四八六ノ九
 一六六ノ二二
 一一四ノ五
 六〇六ノ一三
 一四六ノ四
 二七〇ノ六
 一四〇ノ九
 一四〇ノ五
 二八五ノ二一
 二四四ノ九
 三九九ノ八
 一一五ノ三
 二五三ノ二一
 五三ノ八
 三二〇ノ四
 二〇九ノ一
 二六三ノ一
 四四三ノ四
 一五三ノ二二

ひとはいさ
 ひとりして
 ひとをとく
 ひとをまつ
 ひにそへて
 ふえたけの
 ふくかぜに(ごぞの)
 ふくかぜに(わがみ)
 ふじのねの(けぶり)
 ふじのねの(たえぬ)
 ふたりこし
 ふたりして
 ふぢのはな
 ふれもいぬ
 ふるさとと
 ふるさとと
 ふるさとを
 ふればこそ
 へだてける
 ほととぎす(ながなく)
 ほととぎす(まちつる)

七〇ノ三
 二二三ノ二二
 二〇七ノ一〇
 二〇一ノ二一
 二六八ノ五
 一九六ノ二一
 八六ノ九
 九三ノ五
 五〇九ノ九
 二五三ノ一
 三〇ノ二二
 八〇ノ三
 一六二ノ一
 二七〇ノ六
 一四三ノ二二
 一三四ノ六
 一九九ノ二一
 一九〇ノ七
 二八八ノ二〇
 八三ノ七
 四四八ノ七

ちはやぶる(かみよも)

ちよまでと

ちりぬれば

ちればこそ

つかのまも

つきやあらぬ

つつめども

つつあづつ

つひにゆく

つみもなき

つゆしげみ

つれづれと

つれづれの

つれなきを

てもふれで

てるつきを

てををりて

ときしらぬ

ときならぬ

としだにも
としをへて(おもひ)

二二四ノ四

五六ノ二一

一七九ノ二一

一〇八ノ五

二二九ノ二一

五三ノ二

一五二ノ六

七三ノ二

一三二ノ五

七九ノ六

一九四ノ二一

二四三ノ二二

二二四ノ二〇

二七八ノ二二

五二五ノ二一

二〇二ノ九

六七ノ一

六〇ノ二〇

四四九ノ五

六七ノ二
五二六ノ七

としをへて(すみこし)

としをへて(なみ)

としをへて(ぬれ)

とへばいふ

とりとめぬ

とりのこを

ながからぬ

ながきよを

ながけくも

なかぞらに

なかなかに

ながるとも

なきなのみ

なきひとの

なきひとを

なくなれど

なげきつつ

なげきのみ

なげばとて

なごりなく
なさげなき

二二九ノ二〇

三二ノ二

一五九ノ二〇

六四ノ三

九三ノ七

八六ノ五

一七ノ一

一六八ノ八

一九四ノ九

七〇ノ二一

六四ノ六

二四〇ノ九

五三九ノ二一

一七七ノ五

一四二ノ五

一九〇ノ三

二六ノ一六

一六三ノ二〇

三四六ノ二〇
一九ノ二一
六二六ノ九

などてかく

なにごとを

なにしおはば(あだに)

なにしおはば(いざ)

なにせむに

なにだにぞ

なにばかり

なにはづを

なのみして

なべてよの

なみだがは

なみのうつ

なみまより

ならのきの

ならはれば

ぬきみだる

ぬぐをのみ

ぬしもなき

ぬばたまの
ぬまみづに
ぬれつつぞ

七七ノ二一

三〇三ノ七

九二ノ五

六一ノ六

六〇ノ二二

一〇一ノ二〇

一五三ノ三

九七ノ一

八三ノ九

二八三ノ二一

四四八ノ四

一七八ノ五

一三七ノ二二

二六五ノ一

八〇ノ七

一一四ノ一

一四九ノ一

一四六ノ八

二〇〇ノ二二
二六二ノ二一
一〇四ノ二二

しらくもの(このへ) 一五〇ノ二
 しらくもの(このかた) 二〇二ノ一
 しらくもの(たつそら) 四八七ノ八
 しらくもの(やどる) 二五〇ノ一
 しらざりし 六〇七ノ四
 しらたまか 五六ノ七
 しらつゆと 五二四ノ三
 しらつゆの 一五四ノ五
 しらつゆは 一二四ノ二
 しらやまに(あへば) 八ノ八
 しらやまに(ふりにし) 一七二ノ二
 しらゆきの 五二二ノ一〇
 しるしらぬ 一二一ノ七
 しをりして 一五七ノ五
 すがたこそ 五九八ノ九
 すまのあまの 一二六ノ二
 すみぞめの 一八七ノ二
 すみのえの 一四〇ノ三
 すみよしの(あまと) 五四一ノ二
 すみよしの(まつの) 五五八ノ二
 すみわびぬ(いまば) 九〇ノ三

すみわびぬ(わがみ) 二二八ノ六
 すもりにと 一七二ノ七
 するがなる 六〇ノ八
 せかなくに 一四六ノ一
 せきがほの 一八九ノ三
 そでくだす 四八八ノ六
 そでぬれて 一〇一ノ六
 そでをしも 一九四ノ三
 そむくとて 一二三ノ一
 そめかばを 九ノ三
 それをだに 一四六ノ二
 たえなむと 五三三ノ一〇
 たえはてむ 五三三ノ二
 たがあきに 二六三ノ三
 たかくとも 一七五ノ四
 たがみそぎ 二二三ノ一〇
 たぐひなき 五八三ノ七
 たぐへやる 一五八ノ一
 たけとりが 一六八ノ二
 たちよらむ 一四九ノ八
 たつたがは(いはれ) 二二三ノ二

たつたがは(もみちば) 二三〇ノ五
 たつたがは(もみぢみ) 二三〇ノ七
 たづぬべき 五五一ノ二
 たづねかれ 五四九ノ二
 たにせばみ 七九ノ二
 たびびとの 四四九ノ七
 たまかづら 一三八ノ七
 たまくしげ 一三七ノ四
 たまさかに(とふひと) 一五〇ノ一〇
 たまくしげ(みちくる) 五三四ノ七
 たましひは 一七五ノ二
 たますだれ 一六三ノ八
 たまもの 二〇四ノ一〇
 たまのをを 七九ノ九
 たもととも 一四三ノ九
 ちぎりおきし 五八二ノ九
 ちぎりてぞ 五三六ノ五
 ちぢのあき 一七二ノ一
 ちぢのいろに 一五五ノ二
 ちぢのねは 一九七ノ一
 ちはやぶる(かみの) 一〇〇ノ四

くれがたき

八四ノ二〇

くれたけの(たけとり)

一三ノ三

くれたけの(みやこと)

一五〇ノ四

くれなゐに(にほふが)

六八ノ四

くれなゐに(にほふは)

六八ノ二

くれなゐに(なみだ)

六九ノ二

けふこすば

六七ノ二

けふそへに

一七六ノ六

けふよりほ

一七二ノ八

こころから

五五八ノ四

こころをし

一七四ノ二

こちかぜは

一九三ノ三

ことならは

一四七ノ二

ことわりや

五八四ノ三

こぬひとを

二〇八ノ一

このよには

一九ノ二

こひしくば

一〇〇ノ六

こひしくも

二八九ノ八

こひしきに

一八七ノ二

こひしとほ

一三六ノ九

こひせじと

九四ノ八

こひわたる

五八〇ノ八

こひわびて

五七八ノ八

こひわびぬ

八九ノ五

こまにこそ

一五八ノ二

こもりえに

七九ノ三

こよひこそ

一六八ノ六

こりすまの

一六九ノ五

これならぬ

一七三ノ二

これもなほ

三六ノ二

これやこの(あまの)

六七ノ五

これやこの(われに)

九三ノ一

こゑたてて

四四八ノ七

さきにほひ

一六六ノ一〇

さくほなの

一三三ノ七

さくらばな(けふこそ)

一一五ノ七

さくらばな(ちりかひ)

一一九ノ二〇

さくらばな(ちるてふ)

四四八ノ三

さざらなみ

二五六ノ五

さそふなる

三九〇ノ三

さつきまつ

九〇ノ二

さてもきみ

一八八ノ五

さとはいふ

一五二ノ六

さむしろに

九三ノ一

さもあらばあれ

五七五ノ四

さもこそは

一六二ノ九

さよふけて

一六四ノ七

さらでこそ

三〇九ノ九

さりともと

九六ノ七

さるさばの

二五〇ノ二

さわぐなる

二〇五ノ四

しかのねは

二〇一ノ三

しきかへす

二〇八ノ七

しぐれのみ

一四九ノ四

したひもの

一二六ノ七

しづみつつ

五七六ノ七

しなのなる

五八ノ七

しれとてや

一六三ノ二

しのづかの

一六六ノ五

しのぶやま

六六ノ三

しほがまに

一〇六ノ五

しほがまの

一五九ノ六

しもゆきの

二五八ノ二〇

かずならぬ

かぜふけば(おきつ)

同

かぜふけば(とほに)

かたかげの

かたみこそ

かたをかに

かたをかの

かちびとの

かちまげも

かどすぎて

かひばかり

かへるさの

かまがほの

からくして(おもひ)

からくして(をしみ)

からころも(きつと)

からころも(きてみむ)

からころも(しでの)

からころも(たつを)

からにだに

一四ノ二一

七三ノ二〇

二三八ノ四

二三五ノ七

一三五ノ五

二二八ノ九

一七ノ二〇

五二五ノ五

九九ノ六

二二〇ノ一

二六五ノ三

三ノ五

三五ノ九

一六五ノ二

一八八ノ三

一九五ノ四

六〇ノ三

三五七ノ二

五三ノ二

二〇八ノ二

一八七ノ四

かりくらし

かりそめに

かりなきて

かりにのみ

かれはてて

きえかへり

きかましや

きたれども

きてみれど

きのくにの(ゆく)

きのくにの(ゆき)

きのふけふ

きみありと

きみがあたり(いまぞ)

きみがあたり(みつと)

きみがうへ

きみがかく

きみがため(しるもの)

きみがため(たをれる)

きみがゆく

一〇八ノ二〇

一九ノ一

二二三ノ九

七九ノ九

二〇五ノ二〇

三四七ノ八

三三三ノ三

五七四ノ一〇

二五七ノ二

一六九ノ八

一七〇ノ七

一七三ノ九

九七ノ九

二七三ノ四

五二五ノ一

七四ノ三

三六六ノ六

二八五ノ八

二五八ノ三

六九ノ三

一六八ノ二

きみこふる

きみこんと

きみとわれ

きみなくて

きみにより

きみやこし

きみをおもひ(なま)

きみをおもひ(ひま)

きるひとの

くさのばに

くさまくら

くもとりの

くもならで

くもまなき

くももなく

くもぬにて

くやしくぞ

くやしくも

くらべこし

くりこまの

くりはらの

五八四ノ二

七四ノ六

五二五ノ七

三六ノ二

八〇ノ五

九八ノ二〇

一六〇ノ四

一六四ノ二

三三ノ二

一九七ノ二

二〇八ノ九

二九九ノ二〇

一五六ノ四

二七五ノ七

四四九ノ一

一九〇ノ五

一八ノ七

二六四ノ二〇

七五ノ四

一七〇ノ五

六四ノ二

おいのよに	三六七ノ一〇
おきつかぜ	一四八ノ二〇
おきなさび	二二七ノ五
おきのゐて	二二七ノ二〇
おきもせず	五二ノ四
おくつゆの(ひかりを)	八ノ六
おくつゆの(ほどをも)	一五二ノ一
おくやまに	一五四ノ七
おくれゐて	五七七ノ七
おもなべて	一〇九ノ六
おそくとく	一九六ノ二
おなじえに	二二〇ノ七
おなじえを	一五九ノ六
おふなおふな	一六六ノ三
おほかたの	一五九ノ五
おほかたは	一一五ノ一
おほさばの	一三九ノ一
おほそらの	一五九ノ四
おほそらは	一九二ノ七
おほそらも	一九二ノ二
おほぞらを	一五四ノ一〇

おほぬさと(なにこそ)	八五ノ九
おほぬさと(なりぬる)	二四〇ノ七
おほぬさの	八五ノ七
おほほらや(まつも)	一〇三ノ三
おほほらや(やまも)	二四二ノ六
おほよどの(はま)	一〇二ノ四
おほよどの(まつ)	一〇〇ノ一
おほはずは	八九ノ一
おもひあまり	一六六ノ二
おもひあらば	五一ノ六
同	二四二ノ一
おもひいづや	四四〇ノ五
おもひきや(すぎにし)	二四三ノ三
おもひきや(ただ)	六一五ノ四
おもひしる	六三三ノ二
おもふかひ	七〇ノ一
おもふこと	一三二ノ三
おもふてふ	一六三ノ四
おもふには	九三ノ二
おもふひと	一七〇ノ九
おもふらむ	二〇三ノ四

おもへども(かひな)	二二三ノ二
おもへども(みをし)	二二一ノ七
おもほえず	七七ノ四
おやにこそ	六一九ノ二
かかもの	二二一ノ一〇
かかもの	二六三ノ二
かきくらす	九八ノ二
かきたえて	二七六ノ六
かきほなる	一七四ノ一〇
かぎりなき	二四八ノ四
かぎりなく	二二九ノ七
かくさける	一五〇ノ七
かくれにし	一七八ノ八
かくれぬの	二〇七ノ一
かげとのみ	二二九ノ九
かささぎの	一九八ノ九
かしほぎに	一六五ノ四
かしほぎの(おいぬ)	一四四ノ二
かしほぎの(おいの)	一四四ノ二
かすかすに	一三五ノ四
かすがのの	二四九ノ五

いさぎよく	五九五ノ五
いささめに	二五三ノ七
いせのうみ	一七六ノ二〇
いたづらに(みはなし)	一〇ノ四
いたづらに(ゆきて)	九六ノ九
いづこにか	二二九ノ九
いつのまに	六九ノ五
いつとは	二二三ノ六
いつぱりを	二六三ノ四
いでていなば(こころ)	六九ノ九
いでていなば(かぎり)	八ノ二
いでていなば(たれか)	八八ノ二
いでてこし	八三ノ二
いでてゆく	八四ノ三
いとあはれ	八一ノ四
いとどしく(すぎゆく)	五八ノ三
いとどしく(なぐさめ)	六三〇ノ九
いなやきじ	二四四ノ三
いにしへに(ありへし)	五七三ノ二
いにしへに(たがはぬ)	四四ノ八
いにしへの(しづの)	七九ノ九

いにしへの(にほひ)	九二ノ二〇
いにしへは	二六ノ五
いのちあらば	五三ノ一
いのちだに(あらばと)	三三六ノ七
いのちだに(こころに)	二四四ノ六
いはねふみ	二〇ノ二
いはのうへに	二四九ノ六
いはまより	一〇ノ八
いひつつも	一五三ノ一
いへばえに	七九ノ六
いほりおほき	八三ノ二
いまこむと	一五七ノ八
いまぞしる	八五ノ二
いまはとて(あまの)	四六ノ二〇
いまはとて(しまこぎ)	四九〇ノ七
いまはとて(わするる)	七〇ノ五
いまはわれ	二四七ノ六
いままで	二二ノ二
いろぞとは	一四九ノ二〇
いろにいで	二六三ノ八
うかりける	三〇ノ九

うきことに	三九〇ノ一
うきことの	四三三ノ六
うきことを	三五八ノ二
うきたつた	三六〇ノ九
うきながら	七一ノ二
うきふしに	三九八ノ九
うきよぞと	六二〇ノ二〇
うきよには	二六〇ノ六
うぐひすの(かさば)	二九ノ四
うぐひすの(かさも)	二九ノ一
うちつけに	一六九ノ三
うちとけて	一五ノ三
うちむれて	四〇九ノ三
うちわびて	九〇ノ一
うづみびの	三三ノ二
うみやまの	八ノ四
うらわかみ	八六ノ一
うゑしうゑば	八八ノ四
同	二四二ノ二
おいきとぞ	三三七ノ四
おいぬれば	一〇ノ二

あきやくる 六七ノ七
 あくといへば 一四〇ノ九
 あげくれば 四一九ノ二
 あげぬとて 一七四ノ六
 あげやらぬ 六〇五ノ四
 あさかやま 二三五ノ二
 あさぎりの 一四七ノ一〇
 あさくこそ 一八九ノ一
 あさつゆは 八六ノ七
 あさばらけ(かすみで) 四四八ノ一
 あさばらけ(わがみは) 一五三ノ八
 あさましや 六三四ノ二一
 あさまだき 二六五ノ五
 あさみこそ 二四〇ノ二二
 あさみどり 二二五ノ三
 あさゆふに 五三三ノ六
 あしからじ 二三七ノ四
 あしのやの 一一二ノ三
 あしべこぐ 一一五ノ二
 あしべより 七九ノ一
 あじろより 一七四ノ四

あだなりと(おもひ) 三六ノ四
 あだなりと(なにこそ) 六七ノ九
 あだびとの 一四五ノ六
 あづさゆみ(ひけど) 七六ノ四
 あづさゆみ(まゆみ) 七五ノ二
 あはれてふ 一四九ノ二
 あひみては 七二ノ四
 あひみても 一九七ノ六
 あふことの(ありそ) 四七五ノ一〇
 あふことの(かたく) 三三三ノ二〇
 あふことの(かたさ) 一三八ノ九
 あふことの(かたみ) 二二〇ノ二
 あふことの(なみの) 一九四ノ一
 あふことの(ねがふ) 一九〇ノ九
 あふことば(いまを) 一三八ノ五
 あふことば(たまのを) 七八ノ三
 あふことも 四七ノ九
 あふみなる 一三八ノ二
 あまぐもの(よそにのみ) 六八ノ一〇
 あまぐもの(よそにも) 六八ノ八
 あまのがは(くもの) 二五五ノ九

あまのがは(そらなる) 一八五ノ一
 あまのほら 五三ノ三
 あまのかる 九六ノ三
 あやめかり 八八ノ六
 同 二四三ノ五
 あらたまの(としの) 七四ノ二
 あらたまの(としは) 一四三ノ八
 あらばこそ 一五九ノ七
 あらはれる 二六二ノ六
 ありはてぬ 二二ノ八
 あれにけり 八九ノ九
 あをやぎの(いとうち) 一五五ノ八
 あをやぎの(いとなら) 二五三ノ五
 いかでかく 一九六ノ五
 いかでかは 八八ノ九
 いかでなほ 一七四ノ三
 いかなれば 一九七ノ八
 いかなれや 二八八ノ二
 いかにして(かくおもふ) 一七六ノ四
 いかにして(われは) 一七四ノ八
 いげはなほ 一六七ノ四

○よもの振舞

○よりくみ

○夜のふすま

○夜のもの

○悦びひらけ

ラ

○羅蓋

リ

○六衛のつかさ

○驪山宮

○律

○梁鴻

○夏少將

○兵衛佐の頃

○太刀の緒の事

○丑三連句

○帝の崩御に遁世す

○妻初瀬に詣づ

○少將に逢へど知らず

五四ノ六

一三四ノ二

五三九ノ二

六七ノ二

六二一ノ七

四三ノ二

四〇ノ二〇

五六ノ二二

五五一ノ四

五七四ノ二三

一四ノ二一

一四九ノ四

二四四ノ七

二四五ノ二

二四五ノ二

二四六ノ五

御服ぬぎに歌奉る

内旨にて行衛を探る

終に世に出です

清水にて小町に返歌す

出でて花山寺にすむ

長子を僧となす

他出に雨に遭ふ

遁世の後復甲ふ

○呂后

○龍頭樂人

○陵園妾

○臨時祭

ロ

○六角堂の別當法師

○六條わたり

○弄玉

○緑珠

ワ

○王卿

二四六ノ二

二四七ノ四

二四八ノ二

二四九ノ七

二四九ノ二

二五〇ノ二

二五六ノ七

二五八ノ九

五九〇ノ九

四五〇ノ一

五八五ノ六

三三ノ二

五三ノ五

一〇四ノ二

五八三ノ二

五七六ノ二〇

一五ノ八

○王子猷山陰の人を訪ふ

○王昭君

○和歌

あかつきの

あかつきは

あかでのみ

あかなくに

あかねども

あきかけて

あきかぜに

あきかぜの

あきはぎを

あきののに

あきののを(いろどる)

あきののを(わくらむ)

あきのよの(くさば)

あきのよの(なすらひて)

あきのよの(なせりと)

あきのよは

あきのよな

あきもこす

五七ノ一

六三ノ一

一九五ノ一

一九五ノ九

二〇四ノ三

二〇九ノ四

二〇四ノ三

二一九ノ三

一四三ノ七

二〇二ノ二

二四〇ノ一

七六ノ二

二四〇ノ三

一五七ノ一

五三ノ三

七二ノ六

七二ノ八

二一六ノ二

一九四ノ五

一九四ノ七

○桃園宰相

一七二ノ二

○桃園兵部卿宮

一三九ノ三

○百轉の鶯の聲

六二〇ノ七

○母屋

四一ノ一

○母屋のすみ

五三九ノ九

○母屋の廂

四二五ノ三

○唐土

七ノ二

○唐土新羅

三〇〇ノ二

○唐土船

一五ノ八

○もろ心

四四七ノ八

○文徳天皇

九九ノ二〇

ヤ

○焼米

二七九ノ二

○やい軸

四四三ノ八

○楊貴妃(玄宗を見よ)

五九五ノ八

○楊國忠

五九五ノ八

○陽成院のすけの御繼父に

贈歌

一四三ノ一

○陽成院の二の皇子

一四五ノ八

○焼石

三四二ノ二

○やしまの鼎

三〇ノ一

○八つの苦

六〇七ノ八

○八橋

五八ノ二〇

○山崎

一〇六ノ二

○山科の禪師の親王

一〇三ノ五

○大和

六八ノ二

○やまと歌

一〇六ノ二

○大和葛城の男女の話

二二七ノ六

○大和掾

二〇九ノ三

○大和國十市郡

七ノ二

○大和國の夫妻の話

二二七ノ九

○大和の女

二二三ノ五

○やまと繪

五五三ノ一

○山梨

三二五ノ二

○山の井を鏡とす

二三四ノ二

○やもめ

一六ノ二

○鏝夫ぶし

三六二ノ二

○遣戸

三六ノ二

ユ

○遊女の白

二四ノ一

○靱負督一條君を迎ふ

一五〇ノ九

○行水に數かく

五〇七ノ三

○滑(ユスル)

三二ノ二

○湯漬

四五四ノ二

○夕なみ千鳥

五五ノ三

○夕まどひ

三四ノ五

○夢語

九三ノ四

ヨ

○ようさり

三七ノ二〇

○よぎ道

四〇〇ノ一〇

○横がみ

四〇三ノ二

○よ心

九二ノ三

○喜種桂の皇女に通ふ

一六八ノ四

○良利大徳

一三四ノ五

○よづかぬ心地

二八五ノ九

○世づかぬ文

三七ノ五

○淀

五三六ノ九

○夜半の煙

五八七ノ一

○よぶ子

一五一ノ二〇

○西方の楢

五一二ノ四

○命婦

二五二ノ三

○都鳥

六一ノ五

○御息所

九六ノ一

○宮づかへ

六八ノ五

○宮の典侍

四三ノ八

○宮腹

八九ノ七

○御湯殿

三九七ノ九

○三よしのの里

六一ノ二

○みるめかりほす

五四ノ五

ム

○昔を今になす世

五五ノ二

○むかひ腹

二六八ノ八

○むくつけし

一一九ノ六

○むくつけ女

五三六ノ二

三の君の乳母

繼母と心を合す

姫を盗み出す計

繼母の意を迎ふ

落魄

○無期

五三九ノ二
五五八ノ七
五九ノ二
五九ノ三

○むこがね

六一ノ二〇

○むさしあぶみ

六三ノ二

○武藏野

六三ノ六

○武藏守の女

一八二ノ二

○武藏野の草のゆかり

五五ノ四

○武藏の國

一六〇ノ二

○蒸物

二五八ノ一

○むつかる

三五九ノ五

○六つの道

五九八ノ七

○無徳

三七七ノ三

○宗子の女

一九四ノ二

閑院のおほい君

眞樹との贈答

○紫の草のゆかり

一九五ノ二

○無量壽經

五九六ノ九

メ

○目かるれば

四四〇ノ七

○めとりぐくり

八五ノ二

○目ならぶ

一五五ノ六

○めもあや

四〇〇ノ七
五七六ノ六

○目も口もはだかる

四二ノ七

○めやすし

四五〇ノ八

モ

○餅

二七九ノ二

○響は塵ばかり

四〇三ノ二

○本の上

二六ノ一

○物忌の姫君

二八一ノ四

○物語

二四三ノ二

○物ぐるほし

四八九ノ五

○物ごし

一一九ノ五

○ものし

二八九ノ五

○物士

三三三ノ二

○ものしきさま

二五七ノ五

○物の哀

五四七ノ二

○物の蓋

二九七ノ八

○物のゆゑ知る友

二六二ノ四

○ものものし

四七七ノ八

○物病

八四ノ五

○物折る

三三九ノ九

○紅葉重の薄様

五〇四ノ五

○ますだのれぬなは

五四六ノ六

○斑なる犬

六三ノ九

○松ひき

五三ノ八

○祭の使

一七五ノ五

○まな／＼と

四〇三ノ四

○まはゆし

三三四ノ六

○まほ

三三〇ノ七

○繼子の徳

四八三ノ二

○まめ男

五ノ二

○まらうどざれ

一一二ノ一

○政所別當

四二〇ノ三

こ

○帝(竹取物語)

ふさ子に命ず

三ノ八

翁を召す

三三ノ一

御狩行幸

三四ノ八

御戀

三七ノ三

御文通

三七ノ五

兵をして守らしむ

四〇ノ二〇

遺書御覽

四七ノ五

薬を焼かしめらる

四七ノ三

○三日のまうけ

二九六ノ七

○三河國

五八ノ二〇

○御髪おろし

一〇九ノ二

○御櫛笏殿

四九四ノ二

○御心惑

六〇二ノ一

○御曹子

一〇三ノ二〇

○御隨身

一〇三ノ一

○みそか言

九四ノ一

○御だいあはせ

三〇四ノ九

○御臺經營

三三三ノ四

○御給

四三三ノ九

○亂心地

一八ノ二

○陸奥の圖

五七四ノ一

逢隈河

二五〇ノ九

岩手郡

一五八ノ八

黒塚

一六六ノ一

事なき人妻

六四ノ四

すゝろに行く

一七〇ノ八

男女すむ

二五二ノ二

○御幣使

○御調度

二九二ノ二

○水熱湯にたぎる

二三八ノ八

○躬恒

一四九ノ七

院にて歌詠

二〇三ノ六

弓張月の歌

六六ノ二〇

○水尾の御時

四三三ノ三

○みつ葉よつ葉

一〇九ノ七

○水無瀬

一〇六ノ九

親王通ひ給ふ

八〇ノ二

山崎のあなた

一三四ノ九

○源至

一三九ノ二

○源大納言

二二三ノ五

宰相なりし時

一八九ノ八

東の方に通ふ

一九八ノ二

○箕輪の里

一九八ノ二

○壬生忠岑

一九八ノ二

時平邸にて歌

一九八ノ二

女が事

一九八ノ二

○耳辯

一九八ノ二

○御室

一九八ノ二

○三室戸齋部秋田

二ノ四

○深草の帝
○不死の薬
○ふじの山

同

○二葉の小萩

○藤氏

○藤の花

○藤原

○藤原常行

人々に歌を召す

山科の禪師の親王に謁す

す

○藤原敏行

○ふとば忘れじ

○ふりはへ来る

○ふるき都

○ふるき宮腹の女

光る程の女君

病氣、薨去

へ

一三三ノ三

四八ノ一

四八ノ一

六〇ノ九

四九八ノ七

一三三ノ八

一〇四ノ九

六二ノ一〇

一〇二ノ九

一〇三ノ四

一二四ノ六

二七ノ七

三三ノ四

四二〇ノ四

四九七ノ四

四九七ノ四

四九七ノ七

○平原君

○平仲

閑院の御に贈答

女を妻の側に置く

市に行き武藏守の女に

歌を贈る

女の尼となれるに驚く

○變化の者

○辨の君

○昞々

ホ

○蓬萊

○蓬萊宮

○蓬萊不死の薬

○鳳凰

○北面

○菩提樹の緒

○ほだす

○ほたる

○佛一はしら

六二四ノ二

一五四ノ二

一六二ノ一〇

一八二ノ六

一八五ノ二

五ノ三

三八三ノ九

五七八ノ四

一三ノ五

六〇四ノ二

五八八ノ一

五八三ノ四

三五二ノ一

四四二ノ二

九四ノ二

八〇ノ二

四四〇ノ八

○佛の御石の鉢

○佛の御しるし

○郭公

○ほとぶる

○煩杖

○堀河大臣

同

○ほれんし

○本院の北方

わらは名

平仲歌を贈る

マ

○孟光

○真人の小盗人

○まがき

○まがし

○まかり申し

○まげじ心のいらはやさ

○まさぐる

○勝りさま

六ノ二

五四九ノ一

八三ノ六

六〇ノ四

二九九ノ四

五六ノ九

一一九ノ八

五八ノ三

一四三ノ六

一九七ノ二

五七四ノ二

三〇〇ノ六

五〇五ノ二〇

四七二ノ八

四八八ノ二

五七二ノ二

二八二ノ二〇

五〇〇ノ九

○額に四海の波をたもむ

五三ノ一

○左大臣

一〇四ノ二

○人はなちげ

三九ノ二

○日根(和泉國)

一三四ノ三

○火鼠の裘

七ノ二

同

○琵琶行の譯文

一七ノ八

○檜皮の棧敷

五七ノ二

○檜皮屋

三五ノ二

○枇杷殿柏木を折らす

二五ノ八

○枇杷大臣太政大臣よりの

一六四ノ二

歌

○姫君(住吉物語)

一九五ノ二

八歳母を亡ふ

四九ノ三

父邸に移り四對に住む

五〇ノ二

少將の文を受く

五〇ノ五

徒然に琴ひく

五二ノ二〇

嵯峨野行

五三ノ四

少將に見つけらる

五四ノ四

乳母を見舞ふ

五九ノ二

少將に返歌す

五三ノ五

護に泣く

五八ノ二

謀を聞いて泣く

五三ノ七

途に家を脱け出づ

五八ノ一

住吉に著く

五四ノ三

牛存を京に報す

五四ノ七

少將の夢を見る

五四ノ八

少將に逢ふ

五四ノ一

尼と別れて歸京

五五ノ八

二條京極に住む

五五ノ二〇

男子平産

五五ノ二一

常に父を思ふ

五六ノ七

女君平産

五六ノ一

父を隙見して泣く

五七ノ二

父の再来

五七ノ一〇

久し振の對面

五七ノ四

二妹を迎ふ

五九ノ四

○姫君(落窪物語)

八歳

四六ノ二

御裳著

四九ノ一

内裏に參る

四九ノ三

立后

四九ノ三

○兵部卿宮

中興の女に通す

一八八ノ一〇

志賀に住む

二〇五ノ六

中納言君に通す

二〇七ノ五

昇大納言の女に婚す

二〇八ノ三

○兵部少輔

治部卿の太郎

二一ノ六

少將との問答

二一ノ二

少將の代りに四君に婚す

四四ノ八

四君に贈物す

四九ノ二

病にて法師となる

四九ノ二

○兵衛佐

○比翼連理

五八ノ一〇

○廣幡中納言

六〇ノ六

○ひろろぐ

二五ノ五

○ひんしれ人

三四ノ六

○寶頭廬

三六ノ六

フ

八ノ一

○深草

二九ノ八

フ

○深草

二九ノ八

○方士 六〇五ノ七

○望夫石 五八三ノ二

○八講 四六ノ八

○博奕 一五七ノ二

○はぐくみ 五九七ノ四

○白樂天 五七三ノ二

○ばくり 三三九ノ一

○はざま 一一二ノ九

○はしたなげ 三四四ノ二

○はしたなし 二七三ノ四

○はした者 五〇三ノ六

○はし殿 一九七ノ四

○端の妻戸 六一八ノ一〇

○はぢを棄つ 八ノ二〇

○初瀬 五四八ノ六

○鼻(怒鼻の形容) 三八五ノ八

○鼻たからか 四一七ノ七

○花の賀 七ノ二

○花のしなひ 一三三ノ三

○花の扇 六〇五ノ三

○花めかす 五九ノ八

○花やぎまさる 四六ノ三

○母北方 三六〇ノ四

落窪の噂を聞き少將を 諫む 三六〇ノ四

落窪を悦ぶ 三六〇ノ二〇

落窪に對面を求む 三九四ノ四

落窪をいたはる 三九六ノ四

孫を養ふ 三九八ノ九

八講への捧げ物 四一ノ二〇

○法事 四一八ノ二

○法師童子 三七九ノ三

○はふらかす 二七四ノ四

○はふれる 一五八ノ三

○はやき風 二二七ノ七

○腹ぎたなし 二八六ノ二

○はらぐる 二九六ノ六

○祓 二八六ノ二

○播磨の明石の濱 二四二ノ一

○播安仁秋興の賦 六三三ノ四

○反魂香 四八七ノ六

○盤渉調 五五ノ四

ヒ

○比叡山 二一〇ノ一

親王閑居 二四六ノ六

山籠の事 一五三ノ四

横川 二〇〇ノ五

○檜垣の御 二〇〇ノ九

戦亂に遭ふ 二〇〇ノ二

野大貳に逢ふ 二〇一ノ六

紅葉の歌 二二ノ八

若者と連句 五九ノ四

○東の五條 九〇ノ二

大后宮 二九六ノ六

忍ぶ男 二八八ノ三

○東山 二九六ノ六

○ひがみ癒れたる 二八八ノ三

○ひきばし 二九六ノ六

○廂に御座敷く 二八八ノ三

○鹿尾柴 二九六ノ六

○ひそみにひそむ 二八八ノ三

○一向 二六〇ノ二

立田川の御製

御覽の事

東宮の御歌

○なり所

○なり瓢

○南海

○南院の今君

床夏の花を奉る

巨城の牛を借る

人に歌を贈る

○南院の五郎伊豫の御に懸想す

二三〇ノ四

二五〇ノ九

二三一ノ二二

四六〇ノ四

五九五ノ一

二三ノ二二

一九〇ノ二

一九二ノ三

一九二ノ六

一六三ノ六

○二條の後

忍び参る

女御との關係

仕ふる男

○二なき志

○二人の男一女をよばへる

話

○女御

立后

八講への御贈物

○女御殿

○女五の皇女

○仁王堂のおこなひ

○仁和の帝

五三ノ九

五ノ八

一七ノ二

六三ノ五

二五九ノ五

四七ノ八

四三ノ八

二七八ノ五

一五ノ八

三九ノ八

一七ノ二

ネ

○れくたれ髪

○れたましかけて

○れびまさる

○念覺

ノ

○のうさん淨藏と贈答

○ののしり

○乗物

網代車

同

同

櫻奥

檳榔毛車

女車

ハ

坊

寶かむるり

五五ノ二

五七ノ五

五八ノ八

一四六ノ六

一六二ノ二

三二ノ一

三五ノ三

四〇ノ三

五二ノ四

二五ノ四

四〇ノ三

八〇ノ一〇

四七ノ八

一三ノ六

二五ノ七

五四ノ二二

六〇九ノ八

五二ノ一

五〇ノ四

二六七ノ二

三五ノ三

五二ノ一

雨夜に千兼を待つ
柏木を折られて歌

一六四ノ八
一六四ノ二二

志賀詣で

一九七ノ二

古宮を見る

二〇五ノ八

○としみ

二九三ノ八

○舍人

一〇三ノ二

○主殿大夫

五〇三ノ七

○主殿寮

九四ノ三

○友則

一四八ノ一

○問言

七九ノ二〇

○飛車

四三ノ二

○苜屋

五四ノ五

○とみの事

一一〇ノ九

○とむらふ

三六〇ノ九

○鳥飼の院

二二四ノ八

○とをちの山

五四七ノ三

ナ

○内記

二四ノ六

○尙侍君

一九〇ノ二〇

○轎をそむけて車を走らす

六〇七ノ二

○中興の近江介の女（近江介を見よ）

三九ノ四

○なから

一七ノ二

○中務宮

三二ノ八

○中臣ふさ子

三九ノ三

○中の劣

五〇〇ノ二

○中の君（住吉物語）

五一三ノ四

兵衛佐を増取

五一五ノ五

嵯峨野行

五三ノ二

少將と歌の唱和

五四ノ五

姫を哀れむ

五五ノ二

姫を憶ふ

五九ノ二

姫の無事を悦ぶ

五九ノ二

兵衛佐踈遠

五九ノ二

姫に迎へらる

五九ノ四

○中君（落窪物語）

二六七ノ一

増どり

二七六ノ二〇

夫は右中辨

五〇七ノ一

○眺めがち

八九ノ六

○長岡

一一〇ノ七

○同

○名だたし

三六ノ二

○菜種の大夫

三九ノ六

○名取の御湯

一五九ノ二

○七々日

一〇三ノ三

○難波

九ノ二

○難波の浦人の話

三二ノ二

○難波わたり

五五ノ二

○なほ人

六二ノ九

○なまいどむ

二六〇ノ七

○生暗き折

二四ノ四

○なま心

六七ノ二

○なま宮づかへ

一一二ノ五

○南無西方極樂教主阿彌陀

四四ノ二

○なめし

一一三ノ三

○なよらか

六一ノ五

○奈良坂

二六四ノ一

○櫓の木

二六四ノ五

○奈良の京春日の里

四九ノ一

○平城帝

三九ノ九

○采女の投身

三九ノ九

中隔の障子

三〇五ノ二

幣袋

四八六ノ三

匱盥

二九三ノ二

火打筭

二四九ノ二

ひげこ

一三四ノ二〇

一餌袋

二七九ノ二

琵琶

五七三ノ五

火桶

三六三ノ八

笛

九六ノ四

笛袋

三六八ノ七

文箱

一二五ノ一

文挾

一三ノ七

朴の櫃

二九七ノ四

まがり

三〇五ノ七

御髪の箱

三三三ノ一〇

御盒器

三〇七ノ二

御太刀

二二一ノ五

御厨司

二九三ノ三

簀笠

一三五ノ五

胡蓀

三六ノ三

わらぶだ

一三ノ九

○朝拜の威儀の命婦

一六九ノ一

○手がらみ

三六三ノ九

○殿上の駒

三〇ノ二

○天上のたのしみ

六〇七ノ九

○天竺

六ノ二

○天人

一三ノ三

○典薬助

三五ノ二

北方の叔父

三五ノ九

落窪を得むと悦ぶ

三四〇ノ四

安瀟と語る

三四二ノ一

落窪を慰む

三四九ノ七

醜態

三四四ノ七

北方に叱らる

四〇一ノ七

祭見に打たる

四九二ノ三

病死

四九二ノ三

○天王寺

三四九ノ二

ト

○春宮の御息所

一〇一ノ二

○頭中將

四六ノ二

○東方朔仙宮より来る

五八八ノ三

○咎をあがふ

五九〇ノ三

○屠岸賈

六一〇ノ九

○時の受領

二九六ノ九

○ときめかす

三三九ノ三

○ときめかむ

五二五ノ二〇

○徳言

五八〇ノ二

○轉(トコシバリ)

四〇三ノ九

○床夏

一九〇ノ二

○所あらはし

三七〇ノ二

○所狭がる

二五三ノ一〇

○俊隆中將の女

一四五ノ八

○としぎり

一九六ノ五

○とし干

一九九ノ四

北方に歌奉る

一四〇ノ一〇

千兼の妻

一四六ノ九

念覺の妹

一五一ノ七

源大納言に参る

一六四ノ六

千兼を待つ

一六四ノ六

○土の帶刀 三三七ノ四
 ○土やぐら 二五ノ八
 ○つゝしむべき年 四九二ノ二〇
 ○つゝましき 五二ノ八
 ○堤中納言 一四九ノ二一
 内裏の御使 一五〇ノ三
 伊勢へ勅使 一五三ノ九
 御息所を奉る 一六六ノ八
 式部卿宮を悼む 一六七ノ五
 國守へ餞す 一七〇ノ九
 櫻の枯れざまなるに歌 一七二ノ二
 加賀守を送る 二〇四ノ七
 三條右大臣の女に通ず 二七〇ノ一
 ○つとめて 六六ノ二一
 ○津の國 七八ノ二一
 ○津國菟原郡 一一二ノ二
 同 一二五ノ八
 ○常のことぐさ 七〇ノ三
 ○燕の子安貝 二七〇ノ五
 同 三七一ノ三
 ○つばり 三七一ノ三

○つぶく 四三七ノ二二
 ○壺なる薬 四五ノ二一
 ○爪弾 三三七ノ二
 ○つまもさだめぬ岸の姫松 五〇四ノ九
 ○面櫛〔ツラグシ〕 二二九ノ二
 ○貫之 一四八ノ一
 ○釣殿 五五ノ六
 ○釣殿の宮 一四二ノ九
 テ
 ○手あたりけはひ 四七四ノ一〇
 ○程嬰杵臼 六二〇ノ二
 ○亭子院の帝 一三三ノ一
 おり居 一三三ノ六
 山踏し給ふ 一三九ノ九
 御賀 一七九ノ五
 大井の行幸 二二四ノ一
 河尻の行幸 二二四ノ二〇
 玉淵の女を召す 二五〇ノ九
 石山行幸 六〇九ノ一〇
 ○趙朔 六〇九ノ一〇

○調度 七四ノ一
 飯匙、籠子 五七三ノ二
 飯匙、筍子 二八二ノ七
 几帳、屏風 五八八ノ二
 櫛の筍 四三二ノ八
 腰さし 四三〇ノ七
 腰佩 五七三ノ七
 琴 四九〇ノ二
 衣箱 二六八ノ八
 箏の琴 一六二ノ二
 四尺の屏風 三〇ノ六
 脂燭 二七三ノ二
 紙燭 一一二ノ四
 銀の金碗 四四七ノ二
 しるかねの鏡 四九〇ノ二
 邊箱 四六八ノ二
 篋の笛 四八八ノ九
 杉唐櫃 七七ノ五
 盥 二五ノ一三
 燈臺 四〇二ノ一
 長扇 四〇二ノ一

○中納言(住吉物語)

妻二人

宮腹の妻を失ふ

姫を憫む

姫を迎へ取る

姫を内へ奉らむとす

繼母の讒

左兵衛督に婚せむとす

姫に對する慈愛

姫の不在に泣く

文を見て剃髪せむとす

姫を憶うて老衰す

大納言按察使となる

袴着に招かる

小徒を受けて驚く

姫等に逢ふ

四の君を迎ふ

先妻の子三人

筑紫へ下る

任はてて歸京

大納言に進む

四七ノ五

四七ノ二

四八ノ二

四九ノ三

四九五ノ一

四九七ノ一

四九八ノ三

四九八ノ九

四九九ノ二〇

五二五ノ七

五二六ノ一

五二八ノ八

五三七ノ五

五三九ノ四

五四七ノ九

五五八ノ九

五六〇ノ二

五六一ノ五

五六三ノ七

五六四ノ四

歸りて妻を謀る

妻を捨て三條へ移る

○中納言の君

○中納言行平

○筑前

右大臣家にて人の品

評

少將の文使

同

繼母の計に従ふ

少將より責めらる

○千排

○千入の紅

○千々の金

○血の涙

○治部卿

○定業の命

○ちやうぢむ

○張文成

○重陽の宴

○塵もつかじ

五六五ノ四

五六八ノ二

二〇七ノ六

一〇四ノ八

五三〇ノ八

五〇四ノ四

五〇六ノ三

五〇九ノ八

五二一ノ七

一〇二ノ七

六〇〇ノ三

六二一ノ二

八一ノ九

三六一ノ六

四三三ノ八

五九七ノ五

五九九ノ九

五六一ノ一

五七二ノ七

○沈

○陳氏

○沈の船

○陳平張良

ツ

○築地の崩

同

○續松

○司長官

○司召

○使實

○つきなし

○つきのいばがきは

○月の顔見るを忌む

○月の都の人

○筑紫

同

○筑紫の女の話

○作物寮

○葛の紅葉

四四〇ノ二

五八〇ノ二

四九〇ノ五

五九〇ノ二

五三ノ五

一六三ノ九

九九ノ七

一八四ノ二

三七四ノ六

九八ノ三

三三三ノ一

四七ノ二〇

五七ノ八

五九ノ二

八ノ二

九一ノ一

二〇一ノ二〇

一三ノ八

二六ノ七

衛門尉、三河守となる
左少辨となる

四七ノ一
四九ノ七
九〇ノ二〇

○橘

○橘の枝

○橘良利

○たち腹

○たづ

○立田河

○龍田山

○龍の首の玉

○龍は鳴神の類

○手礫

○織女牽牛

○たまさかる

○玉の月ざし

○田村の帝

○太郎

越前守

左大臣へ使す

三條殿へ使す

安濃に逢ふ

三五六ノ二

四一三ノ二

四一八ノ三

四二〇ノ三

父の供して酒に酔はさ
る
家司を兼ね
北方の心に呆る
播磨守となる
帥を饗する用意
辨に進む

四三〇ノ一〇

四三八ノ四

四六二ノ七

四六六ノ一

四八四ノ二

四九三ノ六

二四九ノ一

○陀羅尼

○彈正の親王監の命婦に懸
想

一六九ノ一

子

○血あへる

○千里の濱

○血沼男菟原男の戀争ひ

○張尙書

○中有の旅の空

○中宮

○中納言(落窪の父)

女多し

左近少將を婿に望む

五五〇ノ三

一〇三ノ九

二二七ノ一

五七八ノ四

六〇一ノ二〇

三三三ノ七

二六七ノ一

三二九ノ四

讒を信ず

四君に婿取す

兵部少輔を憫む

四君を責む

落窪に與へたる地所を
領す

祭見の場所争

三條殿の件を訴ふ

越前守の復命

同

三條殿に行く

督より事情を聽く

八講を受く

若君に笛を與ふ

病氣重る

大納言に進む

落窪の見舞

薨去

○中納言(落窪物語)

筑紫の帥

四の君に婚す

三六ノ八

三五七ノ三

三七一ノ四

三七一ノ二〇

三九九ノ三

四〇〇ノ二

四二二ノ九

四二六ノ四

四二二ノ四

四二五ノ二

四二六ノ二〇

四四〇ノ六

四四五ノ二〇

四五二ノ一

四五二ノ六

四五三ノ二二

四五七ノ一

四六九ノ八

四七四ノ八

辭世

○忘々し

○對の簀子

○峯館所

○大輔春宮を奉悼

○平兼盛

中興の女に歌

陸奥にある女に歌

式部輔宮にて歌

大納言殿にて歌

○崇子

四院帝のみこ

女御

亡せて後

○高瀬船

○高杯

○高野大圃

○高安郡

○寶の君

○たきもの

○竹

○竹取の翁

其本名

姫を得て養育す

姫に婚を説く

難題の取次ぎ

玉の枝に驚く

裘を愛づ

帝命を承る

姫の歎を問ふ

八月十五夜の問答

物思にやつる

帝使と計を定む

空中の人と問答

遺書に泣く

○多氣の都

○但馬に通ふ兵庫頭

雪降の歌

紀伊國に下る

○只今の第一の人

○たゞさむるもの

○たゞならぬ事

一ノ二

一ノ三

五ノ一

七ノ五

一〇ノ二〇

一八ノ二一

三三ノ三

三八ノ二

四〇ノ三

四一ノ三

四三ノ四

四七ノ二

一五〇ノ五

一七二ノ三

一七三ノ六

三三ノ五

二〇九ノ二〇

六二〇ノ三

○忠平(太政大臣、左大臣)

北方を失ふ

后宮に参る

小倉山の紅葉

枇杷大臣に贈歌

やまとの戀

○忠頼(中納言(落窪の父)を見よ)

○帶刀

落窪の君の事を少將に

告ぐ

少將の文の取次

安濃に文通

常に少將の伴す

雨を冒して行く

文を落す

安濃と際合す

落窪を盗み出す

二條殿に奉仕す

女の乳母を諫む

藏人となる

祭見に典藥助を打つ

一七八ノ六

一七八ノ二一

一七九ノ三

一六九ノ一

二五二ノ

二七〇ノ九

二七六ノ八

二七八ノ一

二九〇ノ二〇

二九九ノ二二

三二〇ノ九

三五〇ノ二〇

三五二ノ七

三五三ノ七

三五九ノ二〇

三五九ノ二二

四三三ノ一

○簾史

○少納言

物縫に行く

姫と物語す

交野少將の文取次

二條殿に参る

若君の乳母となる

○戚夫人

○石季倫

○世間世界

○雪々

○芥川の行幸

○芹を摘み榻に臥す

○前齋宮柔子

○宣旨

○禪師

○善智識

ソ

○増茶法師とし子と歌の贈

答

五八三ノ一

三七〇ノ一〇

三八ノ五

三三八ノ五

三八三ノ九

三九八ノ一

五九三ノ二

五七六ノ二〇

二四五ノ二

六二五ノ二

一七〇ノ三

五七九ノ一〇

一五〇ノ三

四五二ノ六

一一一ノ四

五二五ノ五

一九七ノ五

○宋玉

○則天皇后

○そらろく

○外腹の親王

○楚莊王

○側光る程

○そばむく

○染草

○染殿の后

○染殿の内侍

能有大臣通ふ

在中將通ふ

○そよ／＼ほら／＼

○孫秀

タ

○太液の芙蓉未央の柳

○太公望

○大七

○大車肥馬

○大將

五七〇ノ二

五八〇ノ二〇

五五五ノ二

五九〇ノ二〇

六一五ノ二〇

五〇五ノ七

五八〇ノ七

四〇七ノ九

六六ノ二〇

二二九ノ六

二二九ノ二

三七八ノ二

五七六ノ二

五七六ノ二

六〇〇ノ六

五九四ノ六

一六六ノ六

五七六ノ三

少將の父

落窪をいたはる

兼大臣となる

衛門督を戒む

中納言の訴を裁す

八講の贈り物

大將を辭す

中納言に贈物

太政大臣に進む

弟太郎を愛す

年の賀

辭職

弟太郎鍾愛

薨去

○太政大臣良房

仕へ男の風流

榮花の盛

○大膳大夫公平の女

備前守信明に通す

兵衛尉庶忠に通す

物見に行く

二七〇ノ八

三九六ノ二〇

三九八ノ三

四〇三ノ二

四二二ノ四

四四一ノ六

四四六ノ二

四五〇ノ六

四六五ノ八

四六八ノ五

四六九ノ一

四九二ノ八

四九三ノ五

四九四ノ一〇

二二九ノ二

一三二ノ八

一九二ノ九

一九二ノ九

一九二ノ五

姫に文を送る

五〇四ノ五

同

五〇六ノ二

繼母に謀らる

五〇九ノ二

寢殿の東面に住む

五二〇ノ五

三の君の話に悟る

五二一ノ五

自ら文を送る

五二二ノ八

姫を見つく

五二四ノ四

姫達と歌詠

五二五ノ二

戀情に堪へ兼ね

五二九ノ七

三の君の許に行く

五三三ノ五

姫の隠れしを泣く

五三九ノ八

中納言家に来る

五四七ノ二

三位中將に進む

五四八ノ一

初瀬に籠る

五四八ノ六

示現により住吉に行く

五四九ノ一

姫を探し出す

五五一ノ九

宿志始めて遂ぐ

五五四ノ一

姫を作うて歸京

五五六ノ六

中納言、右大將に昇進

五六一ノ一

中納言と語る

五六一ノ四

關白に進む

五六九ノ六

○しをりこゝろす

五七〇ノ九

○晉景公

六〇九ノ一〇

○寢殿

一六七ノ九

ス

○透垣

五五二ノ一

○菅原君

一七八ノ九

○色好步行「スキアリキ」

一八五ノ五

○すきくし

五〇六ノ一

○杉のしるし

四三三ノ五

○すき者

八九ノ八

○修行者

六〇ノ六

○宿世

九四ノ二

○洲濱

四九〇ノ四

○修法

四五一ノ一

○季繩少將

一六九ノ九

右近の父

一七九ノ九

大井に住む

一八二ノ一

病死の光景

一八二ノ一

○すまふ

一三三ノ五

○角田河

六一ノ五

○住の江

五四一ノ三

○純友がさわぎ

一三三ノ一〇

○住吉

五三二ノ五

○住吉郡

九七ノ七

○住吉の濱

一三八ノ二

○修理の君

一七三ノ一〇

右馬頭とすむ

一七三ノ一〇

兵部卿宮の消息

一七三ノ三

○受領

三三七ノ五

○駿河國

四七ノ七

○隨身處へ下さる

五五四ノ七

○末の松山

三二一ノ九

セ

○齊眉の禮

四七五ノ三

○生老病死の下界

四八九ノ七

○四王母

四八八ノ一

○西院の帝

八〇ノ八

○道遙

九七ノ三

同

一八四ノ三

○小柑子

一一二ノ九

裝束一具
 櫻がされの御衣
 奴袴〔サシヌキ〕
 下襲
 信夫摺の狩衣
 淨衣
 白き御衣
 白き袷
 白き小袷
 白き生
 白張の單衣襲
 紫苑色のほり綿
 すくよかなる衣
 蘇芳襲
 墨染の袖
 摺狩衣
 長衣
 直衣
 直衣の腰
 直衣の袖
 鈍色の衿の衣

四一七ノ三
 五一四ノ三
 三〇〇ノ一〇
 三二四ノ八
 四九ノ四
 五四九ノ六
 二九九ノ二一
 三三三ノ九
 五〇八ノ二一
 四〇九ノ一
 四〇八ノ九
 二九二ノ九
 四八二ノ二〇
 一七八ノ二一
 五八ノ八
 一二七ノ三
 三三三ノ六
 三三三ノ四
 五二二ノ二
 四九八ノ八
 四一ノ二

二藍の裳
 二藍の織物の袷
 藤の衣
 單衣
 日の裝束
 平張
 めとりぐくりの狩衣
 裳
 裳の裾
 線袷
 女郎花色の濃き綾の袷
 尉の君
 上陽人
 麝香の香
 朱買臣
 舜
 菊夾の女
 承香殿
 昇僊橋
 諸大夫の女(繼母)
 女君二人

四〇八ノ九
 三九五ノ二
 六一三ノ九
 二八五ノ三
 四三二ノ五
 二六〇ノ一〇
 一六五ノ六
 八四ノ二
 五二二ノ八
 八二ノ八
 四三八ノ八
 一八四ノ九
 六二〇ノ五
 三〇一ノ三
 六〇八ノ三
 五八四ノ七
 六二六ノ二
 一六三ノ六
 五七六ノ三
 四九七ノ二

表面に姫を憫む
 詐計
 再び悪計を運す
 讒訴、謀計
 泣くよしす
 娘等を叱る
 中納言に毒言す
 大將を恨む
 姫の事を聞きて驚く
 衰へはてて死す
 〇しらじらし
 〇しり顔
 〇白銀を根とし黄金を莖とし白玉を實として立てる木
 〇白き鳥の嘴と脚と赤き
 〇しわぐみ
 〇しわびる
 〇四位少將
 右大臣の子
 筑前と物語

五〇〇ノ五
 五〇八ノ五
 五二五ノ二
 五二六ノ五
 五三九ノ七
 五四四ノ七
 五五八ノ二一
 五六三ノ三
 五六五ノ二〇
 五六九ノ一一
 三二五ノ七
 四四五ノ一〇
 七ノ一
 六一ノ四
 五二九ノ一〇
 二二六ノ六
 五〇三ノ五
 五〇三ノ二

○下廂

三三ノ七

○下紐解く

五八〇ノ一

○下待ち

一八三ノ三

○下もえ

五八二ノ一

同

○實様

六三三ノ五

○死出の山

二二三ノ三

○しとく

五二〇ノ五

○しとく

一四八ノ六

○しとく

二二五ノ五

○蓐

五二二ノ三

○蓐さげ渡す

二六二ノ九

○信濃國

五八ノ六

○四の君

二六七ノ二

裳者

少將に謀られて少輔に

婚す

翌日の懊惱

三六四ノ八

懐妊

三七一ノ三

生みし姫

四三三ノ七

悠歎

四三二ノ二

落窪の文

四三三ノ三

中納言に婚す

四七三ノ一〇

北方と訣別

四八八ノ三

筑紫に下る

四八九ノ二

おもしろの胸の贈物

四九〇ノ二

○篠塚驛

一六六ノ二

○忍びたる車

五七〇ノ一

○忍草

一三二ノ二〇

○しひ米

二九六ノ二

○しひたる世

四三三ノ三

○鹽竈

一〇六ノ七

○しほさき

三三八ノ三

○鹽尻

六〇ノ二

○しめやか

四二五ノ七

○しめやか

三二一ノ六

○下野國の男女の話

二六二ノ二〇

○下野國

六〇ノ二

○下部屋

三六八ノ二〇

○淨藏

二六三ノ二

のうさんと贈答

一八七ノ六

中興が女と通す

一八七ノ六

○商山の四皓

九一ノ三

○生死の罪障

五八九ノ五

○相如

五七五ノ七

○精進潔齋

二四九ノ五

○装束

二〇一ノ一

袷一襲

二〇一ノ一

綾のはり縮

三七四ノ八

薄色の穀の裳

四〇八ノ二〇

羅のかされの裳

四四三ノ六

羅の濃き二藍の小袷

三九五ノ二

羅の直衣

四〇九ノ一

袷

五二五ノ二

袍

八二ノ五

うへのきぬ

二七六ノ二〇

うへのほかま

二七四ノ六

搦練の袷

二八一ノ八

汗衫

三八四ノ九

朽木形の經かたびら

三九三ノ二

朽葉の唐衣

四四三ノ三

朽葉最温の一襲

四四三ノ二

紅の綾のうちあはせ

三九五ノ二

濃い搦練

一八二ノ一

○小夜 五二ノ九

○猿澤池 三九ノ九

○ざれたり 二九ノ七

○ざれたる女童 二七ノ九

○左衛門佐 四四ノ四

○左衛門の陣 二五三ノ四

○三界、九品 六〇七ノ二

○三條右大臣 一四八ノ二

○女郎花の詠 一七五ノ五

○祭の使 一七六ノ二

○中務宮同居 一七七ノ九

○御息所の事 一九四ノ四

○頭の頃の歌 二六七ノ二

○裳著 二六九ノ三

○藏人少將に婚す 二七ノ二〇

○御手水 三〇ノ二〇

○拾ひ文を見る 三三ノ四

○安濃の願 三三ノ四

○北方に叱らる 三三ノ四

○藏人少將に捨てらる 三三ノ六

○侍女等を奪はる 四〇七ノ二

○尼にならむと歎く 四三ノ九

○中納言を見て泣く 四三九ノ二

○中後の御櫛笥殿 四九四ノ二

○三の君(住吉物語) 五〇九ノ六

○欺かれて少將に婚す 五一ノ三

○琴の主を説明す 五一三ノ四

○嵯峨野行 五三九ノ九

○姫の遺書 五四四ノ五

○姫を憶ふ 五六九ノ四

○姫に迎へらる 二〇五ノ六

○志賀の山越 六一ノ四

○鳴 四二〇ノ二

○職事 五七ノ二

○式部 五五ノ五

○對の方に心をよす 五八ノ二

○繼母の謀を對につぐ 二五ノ八

○時めき榮ゆ 二五ノ八

○式部卿宮 二五ノ八

○しきりたる 四四六ノ七

○滋幹少將 一八七ノ一

○祇承 九〇ノ九

○順 八一ノ五

○したくづれ 三九三ノ九

○した心 三七三ノ三

○侍従 五〇ノ一

○乳母の子 五〇五ノ四

○少將の文取次 五一八ノ二

○少將に責めらる 五三〇ノ二

○母を失ふ 五三〇ノ二

○常に姫を慰む 五三〇ノ六

○打臥勝に過す 五三三ノ二

○姫の供して去る 五三八ノ一

○住吉に著く 五四一ノ三

○少將の來るに驚く 五五二ノ二

○歸京 五五六ノ六

○内侍となる 五六九ノ九

○侍従君 四〇七ノ二

○下簾 一三二ノ三

を聞く

三九ノ九

交野少將を批評す

三二ノ二

笛を忘れ歸る

三五ノ二〇

北方の所行を憤る

三四ノ一

落窪を盗まむと謀る

三四ノ五

文通

三四ノ五

落窪を盗む

三四ノ七

北方に報復を謀る

三五ノ二四

四君の婚に代人を送る

三六ノ六

報復の成功

三九ノ八

少將の家庭

三七ノ九

中將に進む

三七ノ六

清水詣、車争、局争

三七ノ五

北方を笑はす

三七ノ五

酔うて歸る

三五ノ九

無實の嫌疑

三六ノ二

落窪を母に引合す

三五ノ九

若君誕生

三七ノ七

中納言に昇任

三九ノ二

衛門督兼任

三九ノ五

祭見の場處争

四〇ノ二

父より戒めらる

四〇三ノ二

三條殿を取らむとす

四〇六ノ七

三條殿に移る

四二七ノ八

鏡の箱の事

四二八ノ八

中納言を招く

四三〇ノ一〇

事情を話す

四三三ノ五

八講を計る

四三七ノ四

大納言に昇る

四三七ノ九

八講をつとむ

四四〇ノ六

大將に進む

四四六ノ二

中納言の七十の賀

四四六ノ七

中納言の慶を歎く

四五七ノ三

譲られし物を處分す

四五九ノ四

左大臣となる

四六五ノ八

父の六十の賀

四六九ノ一

四の君婚姻

四六九ノ二

任太政大臣

四九三ノ二

○さゝがに

四九三ノ二

○さゝめき合す

五三七ノ三

○さしはへ

三三三ノ九

○左少辨

四六五ノ二

○貞數親王

一〇四ノ八

○左中辨藤原良近

一一三ノ一

○さななり

三五三ノ五

○讃岐造鷹(竹取の翁を見よ)

一九六ノ二〇

○實任少貳の女

二二一ノ二二

○左兵衛督

一七三

同

一七三

同

五二八ノ七

○三郎君

二六八ノ八

琴を習ふ

三三四ノ九

小さき子

三五九ノ二

文使

三五九ノ二〇

童なる子

四三〇ノ二一

大夫となる

四三三ノ六

落窪虐待の昔を語る

四三五ノ二〇

落窪に愛せらる

四四三ノ九

左衛門佐となる

四六四ノ二

北方に困じ恨む

四六六ノ一

少將となる

四七〇ノ五

四の君の事周旋

四九三ノ四

中將、中宮亮に進む

四九三ノ四

○強飯

三四ノ八

○こぼき物怪

五九四ノ三

○故御息所

二二ノ五

○小薬師久曾

二〇六ノ二

○子安貝(燕の子安貝を見よ)

二七八ノ二〇

○こゆびさす

二二〇ノ五

○こりすま

二二〇ノ五

○惟喬親王

九九ノ二〇

齋宮の御兄

一〇六ノ九

花見

二〇九ノ二

小野の幽居

二〇九ノ二

○惟成(帶刀を見よ)

二〇九ノ二

○伊衡宰相

二五三ノ一

兵部卿家の別當

二五三ノ三

命婦との贈答

五二一ノ三

○衣のつま

五四五ノ三

○小童

四四〇ノ二

○紺の紙に黄金の泥

四四〇ノ二

サ

○齋宮

九七ノ二

○齋宮の頭

九九ノ二

○在五中將

九二ノ六

○在次君

二二七

五條の御に婚す

二二三ノ三

他國がよひ

二二三ノ三

○在中將

二四〇ノ二

二條后に通ふ

二四〇ノ二

忘草の歌

二四二ノ八

菊召されし時の歌

二四二ノ一

飾粽の歌

二四二ノ五

辨御息所に通ふ

二四二ノ五

物見に出でし事

二四三ノ六

○齋院皇女

二四三ノ六

先帝の御歌

一五四ノ二

内裏へ御歌

一五九ノ五

○雑色

三〇〇ノ三

○雑色所

三〇〇ノ三

○正身(サウヅミ)

三〇六ノ九

○庄の物

三九九ノ五

○處分(サウブン)

四五四ノ三

○さがなもの

三六一ノ五

○嵯峨野

五三ノ二

○坂上のとほみち陽成院の
女に逢ふ

一六六ノ二

○嵯峨院

一六六ノ二

○酒井人眞(土佐守)

一八二ノ三

○前おひちらす

三六六ノ一

○前追ふ

三〇〇ノ二

○さくじり

三九ノ二〇

○左近少將

二七〇ノ八

左大將の息

二七〇ノ一

帶刀との問答

二七二ノ九

落窪に文

二七五ノ三

同(泚にさして)

二八〇ノ八

忍びて落窪を訪ふ

二八三ノ二

落窪に通ず

二八六ノ五

單衣を贈る

二九二ノ〇

第二夜の往訪

二九九ノ二

雨中の歩行

三〇六ノ六

几帳の陰に隠る

三〇六ノ六

落窪との夜話

三〇六ノ六

少納言より我身上の話

三〇六ノ六

陳支禮東宮に申して楊

國忠を亡ふ

五九ノ八

貴妃を殺す

六〇ノ七

益州の貢到る

六〇ノ三

蜀山に幸す

六〇ノ四

東宮即位

六〇ノ八

馬嵬坡を弔す

六〇ノ一

仙人貴妃を尋ね

六〇ノ四

貴妃祕語を語る

六〇ノ四

帝復命を得て崩す

六〇ノ二

○監の命婦

方塞り

一三八ノ七

栗田に行く

一五九ノ九

柏木の歌

一五九ノ二

良少將の歌

一四五ノ四

忠文の子に通す

一六五ノ五

親王に懸想せらる

一六九ノ一

コ

○江州

○小路ぎり

五七ノ一

三〇ノ二

○後涼殿

二六ノ二〇

○金の使

一六六ノ七

○弘徽殿

一三三ノ一

○極樂世界の瑠璃の池

五九七ノ一

○こやし

三三三ノ八

○心肝

三五四ノ一

○心けさうす

三四〇ノ三

○心しらひ

三三三ノ一

○心づきなきこと

五七六ノ一

○心づきなし

五七六ノ六

○心ときめく

五八五ノ二

○心よせ

五七〇ノ二

○心をくだくつま

五八七ノ二〇

○故權中納言

一七六ノ一

○左大臣の女と通す

一七六ノ一

○齊宮の皇女に通す

一七六ノ七

○故式部卿宮

一四二ノ一〇

○若菜の歌

一四四ノ二

○秋の歌

一四四ノ二

○月の歌

一四四ノ七

○碁の遊

一四八ノ二

桂の皇女に住む

一五二ノ二

兼盛參殿

一六七ノ一

○五節

五五ノ八

○御達

六八ノ五

○御達の局

七六ノ四

○五條

七二ノ二

○五條の後

六九ノ二〇

○五條の御

一六〇ノ二

男の方に繪を贈る

二二二ノ七

在次君に婚す

五五六ノ六

○ことんくし

二六九ノ二〇

○ことぎみ取り

一六三ノ一

○異世界

一一一ノ五

○ことだつ

一六二ノ二

○小舎人童

四九八ノ五

○ことのは

五九七ノ二二

○事のみだれ

四四八ノ六

○事はじめ

四四二ノ三

○五の巻の挿物の目

一〇一ノ二

○近衛府

一八二ノ二〇

○近衛御門

一八二ノ二〇

ク

- くさばひ
- 草枕
- 口舌
- 口入れ
- 朽葉の下簾
- 口ふたげ
- くど
- 宮内卿もちよし
- 國經中納言
- 國の司
- 蜘蛛
- 蜘蛛手に思ひ亂る
- 雲鳥の紋の綾
- 雲の梯
- くらつ鷹
- 鞍馬
- 鞍馬籠り
- 栗の實

三〇二ノ二
 三〇五ノ五
 五四九ノ九
 一七ノ二
 五〇五ノ三
 三五一ノ二〇
 三九二ノ九
 九ノ七
 一一四ノ三
 五六ノ九
 二五ノ一
 五八ノ二一
 二六四ノ九
 二二九ノ八
 五八〇ノ四
 二七ノ五
 五八ノ三
 一八七ノ七
 一一二ノ九

- 車持皇子
- 赫映姫を戀ふ
- 玉の枝を造る
- 蓬萊海中の物語
- 六人の工匠の訴
- 深山に入る
- くるくど
- 吳竹
- 紅染
- 紅の涙
- 黒塚
- 黒主
- 藏人少將
- 三の君と婚す
- 落窪の工を賞す
- 帶刀を召す
- 臨時祭の舞人となる
- おもしろの駒を笑ふ
- 殿上にて恥しめらる
- 三の君に遠ざかる
- 中の君に婚す

三ノ三
 九ノ七
 一一ノ三
 一三ノ七
 一五ノ五
 三九ノ四
 五八四ノ二一
 五六二ノ八
 五八四ノ二〇
 一八ノ八
 二五ノ二
 二九ノ三
 二七四ノ二一
 三二〇ノ七
 三三三ノ二
 三三八ノ三
 三七三ノ五
 三七四ノ二
 三八二ノ六

ケ

- 中將に進む
- 中納言となる
- 郭突
- 寛蓮大徳
- 霓裳羽衣の舞
- 家司
- 現形
- 顯證
- 懸想人
- げすばら
- 氣の上る
- 下臈
- 券
- 玄宗皇帝
- 貴妃を得
- 寵愛無雙
- 天下の政を忘る
- 七夕の宴
- 安祿山反す

三九八ノ二
 四三七ノ九
 六一七ノ九
 一三四ノ七
 五九六ノ二二
 四一〇ノ三
 一一八ノ四
 四四三ノ八
 五五三ノ二
 五五五ノ六
 二九〇ノ八
 五六ノ二〇
 四〇六ノ六
 五九五ノ二二
 五九六ノ一
 五九七ノ四
 五九八ノ四
 五九九ノ一

○漢の高祖

五九〇ノ九

○韓厥

六二二ノ八

○漢元帝

六二二ノ一

○甘泉殿

五八七ノ三

○勳當

二四〇ノ七

○巫(カンナギ)

九四〇ノ六

○神主の大夫殿

五五〇ノ九

○漢武帝

五八六ノ五

○閑院の御

一五四ノ四

キ

○雉

八八ノ七

○きたなげなき童

二〇四ノ一

○北方

落窪君虐待

二六七ノ四

夫との問答

二七四ノ一

石山より歸る

三〇四ノ六

鏡の箱を奪ふ

三〇六ノ三

姫の室内を覗ふ

三〇七ノ八

拾ひ文を見る

三二二ノ三

姫に裁縫を命ず

三二四ノ一

夫に告口す

三六ノ三

少將を見て驚く

三三ノ八

讒訴

三六ノ五

姫を監禁す

三九ノ三

祭見に行く

三五ノ七

歸りて驚愕す

三五ノ五

典藥助を叱る

三五ノ七

四君の婚を急ぐ

三五ノ二

少將に謀らる

三六ノ八

四君の代筆す

三七ノ九

偽塔なるを知り四君を

責む

三七ノ二〇

清水詣、車争、局争

三七ノ二〇

憤に堪へ兼ね

三八ノ七

祭見に恥辱を重ぬ

四〇ノ一

三條に移らむとす

四〇ノ一

事情判明す

四二ノ七

落窪を妬み恨む

四二ノ二

漸く悔悟す

四六ノ五

夫を恨む

四五ノ二〇

夫を亡ふ

四六ノ二

深く心に悔ゆ

四七ノ五

繼子の徳を悟る

四八ノ二

出家、死

四九ノ五

○紀有常

六六ノ五

尼となりし妻

八〇ノ四

宅を問ふ

一〇八ノ二

御供

一〇九ノ五

親王の代詠

一〇九ノ九

○紀國の千里の濱

一〇三ノ九

○京極御息所

一五〇ノ八

一條君の主人

一六〇ノ六

河原院に渡る

一四四ノ七

○刑部君

一四四ノ七

○許由巢父

五九ノ九

○きら／＼し

四七ノ八

○切懸のけぶりくづ

一五二ノ九

○蟋蟀

五一ノ九

○金谷の園

五七ノ九

○禁色

三八ノ二

○公忠(近江守公忠を見よ)

二六ノ二

○きんぢ

二六ノ二

石上麻呂を弔ふ
 天聴に達す
 天使に逢はず
 勅命を受けず
 影となる
 帝との文通
 月を見て泣く
 身の上を明す
 恩を謝す
 月の迎來る
 最後の訣別
 遺書を書く
 天に昇る
 ○娥皇女英
 ○かけづる
 ○かけらふ
 ○瘡
 ○汗疹の袖
 ○飾粽
 ○飾をおろす
 ○賈氏巧射妻を笑ましむ

三ノ一
 三ノ八
 三ノ四
 三ノ八
 三ノ五
 三ノ五
 三ノ二〇
 三ノ二
 四ノ九
 四ノ五
 四ノ五
 四ノ一
 五八四ノ一
 三三ノ二七
 五八ノ三
 一七ノ二〇
 一五ノ四
 八ノ五
 六三ノ二
 五七四ノ四

○かしこまり
 ○櫛
 ○主計助
 ○員より外の大納言
 ○堅櫛を着とす
 ○交野
 ○交野少將
 ○かたは
 ○方塞がり
 ○かたみ
 ○乞兒(カタキ)
 ○かたぬ翁
 ○かづきせさす
 ○桂の皇女
 式部卿宮よりの歌
 逢ふまじき人に逢ふ
 式部卿宮すみ給ふ
 母君喜種を拒む
 七夕に逢ふ
 よしたねに贈詠
 ○かてうげ

四九ノ五
 二四ノ八
 五九ノ七
 四一ノ二
 二五ノ二
 一〇六ノ二
 三〇ノ二
 九三ノ二
 一七三ノ二〇
 八八ノ二
 三三ノ七
 一〇六ノ三
 五五ノ四
 一四ノ七
 一四ノ二
 一五ノ二
 一六八ノ四
 一九四ノ二
 一九四ノ二
 二九ノ二〇

○門の間
 ○鏡に水を入れて胸にすう
 ○河尻
 ○河内國生駒山
 ○蝙蝠
 ○かはらけ
 ○河原院
 ○かひすみて
 ○螺すりたる櫛
 ○かひの白根
 ○髪上
 ○賀茂川
 ○賀茂の祭
 ○掃部助
 ○賀陽親王
 ○唐櫃
 ○からみまばさす
 ○雁
 ○狩の使
 ○鮎
 ○かれんく

一六八ノ五
 二八ノ七
 五四ノ八
 九七ノ四
 二五七ノ七
 九〇ノ九
 一六〇ノ五
 二七ノ二
 四八ノ一
 五二ノ五
 一ノ九
 一〇四ノ二
 一三ノ九
 一八ノ二
 八三ノ四
 三〇ノ九
 五五ノ三
 五八ノ四
 九七ノ二
 五八ノ二
 五九ノ二

おほみき

○大御息所

色許されし

染殿の后

○大淀

○おぼろげの志

○おまし所

○おもしろの駒

○おもだたし

○おもておこし

○おもてぶせ

○思ひあがる

○思ひうんず

○おもひづま

○思ふさまなる人

○およすげ

○およづけ

○およびの血

○大井の行幸

○御あへづらひ

○御弟

一〇九ノ八

九三ノ八

九六ノ二〇

九九ノ二二

三三四ノ二

二九〇ノ九

美八ノ二二

四三三ノ二二

三七五ノ七

四三六ノ七

一八三ノ一

二二三ノ二一

六二四ノ三

五〇三ノ五

三〇六ノ二一

三三六ノ一

七六ノ六

一七九ノ七

三二一ノ五

侍従

宰相に進む

○御族〔オンゾウ〕

○御手鷹

○御前の御身

○御前ゆるさる

○陰陽師

○御乳母

姫を慰む

宮仕を中納言に訴ふ

同

死去

力

○かいせう

あらはひの事

父亡ひし事

登山の歌

○かいむれく

○掻いわがぬ

○更衣

三七三ノ一〇

四三七ノ九

四七八ノ二〇

二二〇ノ一

三二九ノ二〇

三三四ノ二〇

九四ノ六

四九八ノ七

四九九ノ五

五〇三ノ二

五二〇ノ一〇

勘事

○かうぼうす

○冠賜はる

○冠の櫻

○高力士

○加階賜はり

○かまぐりよる

○鏡(亡母の記念)

○かやり船

○かきあひ縫はす

○燕子花

○柿本人丸

○かくしの方

○赫突姫

三寸ばかりなる人

翁との問答

五人に難題を出す

鉢の光を見る

玉の枝に歎く

工匠等に縁かづく

裘を焼く

三三〇ノ六

四〇〇ノ二一

四六九ノ二二

六二五ノ二二

五五九ノ二二

一三五ノ二一

四三三ノ二

二九二ノ二

五四一ノ八

二六九ノ一

八ノ二二

三三九ノ二一

四八二ノ二〇

一ノ三

五ノ一

六ノ二一

八ノ五

一〇ノ八

一四ノ二二

一八ノ八

○おいらか 三五八ノ二〇

○おき口 四〇〇ノ二一

○沖井手 一七〇ノ九

○おこなひの妨 五三三ノ六

○おそばへ 三三五ノ四

○落窪の君 二六七ノ五

北の方の冷遇 二六八ノ二〇

裁縫 二七七ノ三

石山詣の留守居 二七九ノ六

少將の繪を見る 二八三ノ七

少將に逢ふ 二九二ノ一〇

同第二夜 二九七ノ八

同第三夜 三〇九ノ一

北方来る 三六〇ノ二

裁縫を怠りて叱責せらる 三八九ノ九

少納言と語る 三五五ノ二一

笛を返す 三九ノ三

部屋に幽せらる 三三八ノ七

笛袋を縫ふ 三五七ノ二

部屋を遁れ出づ

二條殿に住む 三五三ノ三

母北方と文通 三六〇ノ一〇

四君を憫む 三六六ノ五

清水詣 三七五ノ二一

少納言を召す 三八三ノ一〇

中將の心を疑ふ 三八七ノ二一

懷妊 三九四ノ二

母北方に對面 三九五ノ一〇

男子出産 三九七ノ七

二男出生 三九八ノ九

父中納言と語る 四二八ノ二一

大夫を愛す 四三〇ノ一〇

八講を計る 四三七ノ一

中納言の家に行く 四三八ノ七

中納言の年の賀 四四六ノ七

中納言の薨に遭ふ 四五七ノ一

七七日の後歸る 四六五ノ二

子多く榮ゆ 四六七ノ二一

歳二十八 四七四ノ三

北方を帥に逢はす 四八〇ノ六

愈々榮ゆ 四九三ノ二

○大臣がね 五四四ノ二二

○おどろき馬 三五〇ノ一

○鬼一口 五六一ノ四

○大内山 一四九ノ二一

○大江玉淵 二二四ノ二〇

○大后の宮 五二ノ八

○大君 二六七ノ一

○大櫛を面櫛にさしかく 三三九ノ二

○大鷹の鷹飼 一七〇ノ三

○大殿 四六六ノ二二

○大殿ごもる 一〇九ノ二一

○大殿油 三八八ノ八

○大伴御行 三ノ四

赫映姫を戀ふ 三ノ四

龍の玉取りを命ず 二ノ四

舊妻を去る 三三ノ二一

自ら出船、暴風 二五ノ一

李の様なる玉 二六ノ三

○大原野 二四ノ二

○大炊寮 二六ノ九

○おほみき 一〇八ノ八

雨夜の詠

一七〇ノ六

忘れし男に贈詠

一七〇ノ二

桃園宰相に贈詠

一七〇ノ二

○右近の馬場のひをりの日

二二〇ノ三

○宇佐の使

九〇ノ八

○うしろめたう

四九七ノ八

○後めたし

八二ノ二

○うしろめたなし

四九七ノ七

○うそを吹く

六ノ五

○右大臣(落窪物語)

三六ノ七

女を中將に婚せむとす

三六ノ七

○右大臣(住吉物語)

五〇三ノ五

少將の父

五〇三ノ五

任關白

五〇八ノ一

子息中將の住吉行

五〇四ノ六

關白を讓る

五九ノ六

○右大臣女御(大和物語)

一四六ノ二

うへを待奉る

一四六ノ二

齋宮に奉る歌

一六六ノ三

○内裏邊(ウチワタリ)

一六九ノ二

○打出の演

二五〇ノ二

○氏神

二〇一ノ二

○打杖

四〇一ノ八

○内ざし

三四八ノ二

○内匠

九ノ五

○うちだて

三五二ノ六

○内裏の殿上

二〇四ノ九

○内の御方

三七四ノ五

○内の御使

一〇〇ノ二

○うちはなちに

五五三ノ四

○内參

五〇六ノ八

○うちゆりたる

五二二ノ四

○現心

四六一ノ七

○宇津の山

六〇ノ五

○討手の使

一三五ノ二〇

○内舍人

二五〇ノ三

○優曇華の花

九ノ二

○うなゐ

一五〇ノ二

○采女

二二九ノ四

○上毛の霜

五四五ノ一

○後妻前妻(ウハナナリコナ)

二二〇ノ九

○うばらからたち

九二ノ二

○莢原男血沼男の戀争ひ

二二六ノ一

○初冠

四九ノ一

○産養

五七ノ二

○馬頭歌詠のかずく

一〇八ノ二

○右馬頭戀歌のかずく

一七三ノ二〇

○馬允

七三ノ八

○馬のはなむけ

八三ノ三

同

八五ノ二〇

同

一三七ノ九

○馬槽

二二六ノ二三

○梅のつくり枝に雉つく

二二九ノ二

○梅壺

二二九ノ一

○うしれ木

五〇六ノ二〇

エ

○頰川に耳を洗ふ

五九四ノ二〇

○燕子樓

五七九ノ一

オ

○老のひがめ

五三三ノ八

○伊勢齋宮の御占 一七六ノ八

○伊勢守もろみちの女 一五〇ノ二

○伊勢の御歌を壁に書く 一三三ノ一

○石上麻呂 三ノ四

○赫映姫を戀ふ 二六ノ五

○子安貝の問答 二八ノ二〇

○自ら荒籠にのる 三〇ノ一

○鼎上に落つ 三〇ノ九

○腰を折る 三三ノ六

○病死 四三ノ一〇

○いだし車 一四〇ノ二

○一條君 一五〇ノ八

○とし子と歌の贈答 三九五ノ二

○靱負督の妻 三八〇ノ七

○一條の大路 三九五ノ五

○一人 三五五ノ四

○一佛淨土 六〇七ノ九

○一念隨喜 二九二ノ二

○五つのおとろへ 二九二ノ二

○和泉守と其妻 二九二ノ二

○安瀨に調度を貸す 二九二ノ二

餅を贈る

童を送る

○和泉國

同

同

○泉大將

○出雲

○温泉「イデユ」

○犬に通じたる女の話

○岩江

○岩ほの中

○云ひあざむ

○いひすさぶ

○家刀自

同

○今參

○いもゐ

○いらなく

○いららぐ

○いられ死ぬ

○入間郡

二九七ノ三

三五八ノ四

九七ノ三

九七ノ七

一三〇ノ三

一九八ノ五

一五〇ノ六

五九六ノ三

六三三ノ二

二〇五ノ六

二八三ノ八

四三九ノ九

五三三ノ六

八四ノ一

九〇ノ七

六〇ノ一

二二ノ三

三三ノ五

三六ノ四

三二ノ六

六二ノ七

○色黄なる雀 五八八ノ五

○色なる人 四三〇ノ八

○色許さる 九三ノ八

○隠瑜 六一七ノ二

ウ

○浮海松 二一四ノ七

○右京大夫宗子 一四八ノ八

海松の歌 一四八ノ二

監の命婦に歌 一四九ノ一

亭子の帝に歌を奉る 一四九ノ九

女より歌 一五〇ノ二

正明の妻に歌を送る 一五七ノ二

三耶他國す 一六二ノ七

女の親を恨む歌 一六九ノ六

宇多院の花の詠 一九〇ノ二

今君の父 五二八ノ四

○鶯の初音 一六九ノ九

○右近 一七〇ノ四

敦忠に贈詠 一七〇ノ四

雄子を贈らる

○あたらちの

○あだわざ

○東の方

○あなない

○淡路島

○近江守公忠

野大貳へ文

季繩の死

鳴かぬ鶯の歌

醍醐帝の御供

○近江介平申興の女

父の死

物の怪

浄藏との戀

兵部卿宮と通す

○泥障(アフリ)

○あへなし

○阿倍の御主人

かぐや姫を戀ふ

火鼠の裘を求む

妻焼く

三〇ノ七

三九ノ二〇

五八ノ五

二七ノ二

五四ノ八

一三七ノ二

一八ノ二一

二〇ノ三

二〇三ノ一

一五八ノ三

一八七ノ五

一八七ノ二〇

一八八ノ二〇

二二五ノ七

二二ノ三

三三ノ三

一五ノ九

一九ノ九

○天が下の色好み

○天が下の鬼神

○天が下の親

○尼君(住吉物語)

侍従よりの文

姫君を迎ふ

中將を姫君に逢はす

姫と惜別

○天河

○天の逆手

○あして

○天の羽衣

同

○阿彌陀經

○阿彌陀の三尊

○あやつ子

○漢部内贖

○あやむ

○あらし世

○あらしはひ

○あらましこと

八〇ノ二

四三九ノ二

四二六ノ一

五三二ノ八

五三七ノ一

五五三ノ四

五五六ノ七

二〇八ノ七

一一九ノ六

五四一ノ六

四四一ノ二〇

五四六ノ五

四四〇ノ八

五四一ノ二〇

一五二ノ九

一三三ノ八

五九九ノ二

五四一ノ二二

一四七ノ二

○ありつかはし

○在原

○在原行平

○あるじまうけ

○あるべかしくす

○白馬

○青き瑠璃の壺

○案

○安祥寺

イ

○いきざし

○窮鬼(イキスタマ)

○生田川

○生駒山

○石作皇子

鉢映姫を戀ふ

にせ鉢の失敗

○石山詣

○伊勢

同

五〇ノ二

九三ノ九

一三二ノ二

一三三ノ四

五六一ノ九

三七二ノ六

四四一ノ九

一三四ノ八

一〇二ノ六

五九六ノ一

三八二ノ八

二二六ノ二〇

九七ノ四

三三ノ三

七二ノ二

二七二ノ二

五八ノ一

九七ノ二

平安朝物語集索引

(語句は歴史的假名遣に従つて五
十音順に排列しんは最末に置く)

ア

○あいなし

四六ノ九

○縣

八三ノ二

○縣井戸

一九ノ九

○あが佛

三八ノ五

○あからさま

四八〇ノ九

○あからめ

二七ノ八

○あがりくぼ

三九ノ七

○白日〔アカルヒ〕

三五四ノ六

○惡趣

六〇八ノ二

○芥川

五三ノ三

○あぐら

二六ノ一〇

○安濃〔アコギ〕

二六八ノ二

後見

帶刀と通す

二七〇ノ四

石山參詣を辭す

二七ノ八

帶刀を恨む

二八四ノ二

姫君に辯疏

二八七ノ二

しつらひに心を碎く

二九二ノ一

三日の夜の餅を調ふ

二九四ノ二

餅を參らす

三〇三ノ二

北方の詰責

三八ノ二

三の君に歎きつく

三三〇ノ四

深夜落窪を訪ふ

三三二ノ七

落窪に文を送る

三三四ノ七

落窪を慰む

三三三ノ七

姫を盗み出す

三五二ノ七

童を求む

三五三ノ二

衛門と改名

三五〇ノ三

少將と三條殿の事を

四〇六ノ三

謀る

四〇六ノ三

越前守に鏡の筈を託す

四一九ノ二〇

辨の北方

四九二ノ七

宮の内侍となる

四九四ノ九

典侍となる

四九五ノ五

○安積山の話

二三四ノ七

○朝顔

三四一ノ六

○朝座夕座

四四一ノ一

○朝忠中將

一三七ノ二〇

○淺間嶽

五八ノ六

○足しろき盗人

三〇〇ノ二

○脚の氣の病

四四一ノ七

○蘆屋の里

一一二ノ二

○綱代車

三五四ノ三

同

四〇〇ノ三

同

五一三ノ四

○飛鳥本

二六三ノ三

○遊者

四八八ノ三

○あだくらべ

八八ノ二

唐
物
語
終

らず。いかばかりかはこの道みちに入らじと思ひ取りしかど、契もぎりの深きにあひぬれば、かしこきもはかなきも、さながら遁のがれがたきことにや。この犬いぬの名をば雪せつ々とぞいひける。

ければ、この犬にうちとけにけり。さるべき前の世の契ちりや深ふかかりけむ、犬の思おもはしさ限なく覺おぼえけるを、我ながらあさましく心憂うれくぞ思おもひ知られける。かくて主しゆのゐたる所へ來こて、來こし方行末かたゆくすえの事など、うち語らひつゝゐたりけるに、夏の衣きぬ疊たもとりなく透すきたるより、この乳母子めのごの肩かたに、犬の足跡多あしあとつきたりけるを、この人見つけてけり、「それはいかなる事ぞ」と尋たづね問とひければ、ありのまよにいはむも心憂うれく、けしからず覺おぼえて、何かと言いひまぎらはすを、強しひて責せめ問とひければ、あらがふべきかたなくて、「我居所わがゐるをさりけなくて時々見給へ」と教おしふるを、怪あやしと思おもひながら、その後は常に窺うかがひ見るに、うちたへて、この犬と二人寝たり。この人これを見るに、堪たふべくも覺おぼえず侍るを、まづは心もとなく佗わづしかりければ、忽たちまちにその犬を呼び取りてあひにけり。思おもはしく悲かなしくぞおほえける。

昔のちぎり

―前世の宿

縁

あさましやなどけだもののうちとくるさこそ昔のちぎりなりとも

人の身にして犬に契ちりを結びける、類たぐひなき程のことなれど、物ものの心こころを知らむ人はうとむべか

親しきあた
り―親族

思ひ放つ人
―疎む人

子を思ふ道
は―後撰集
兼輔「人の
親の心はや
みにあらね
ども子を思
ふ道に惑ひ
ぬるかなし

などまめやかにうきことに云ひけり。親しきあたりまでも、限なく思ひ歎きけれども、心強く思ひ立ちにけり。遂に乳母子なりける者一人を具して、何方となく失せにけり。この乳母子も、容いとをかしけにて、思ひ放つ人なかりけれども、この人と同じ心にて、人に見えむ事うるさしとや思ひけむ、鳥の聲もせぬ深き山の中に入りて、おのく草の庵を引き結びつと、住み渡りける程に、この女の父母、二なき志ばかりをしるべにて、山林を分けつと尋ね來にけり。うち見るまよに血の涙を流せども、諸共に立ち歸るべき氣色更になし。誰も、子を思ふ道は惑はぬ人なければ、さるべきものなど懇に營みやりけるを、猶うるさしとや思ひけむ、「又住所を改めて外へ逃げ失せむ」などいひければ、只二人の心に任せて過させける程に、斑なる犬の美しけなるが、何處よりも見えぬ。この乳母子の庵の前に、尾打ちふりてゐたりけるを、物など喰はせて撫で興じけるに隨ひて、この犬殊の外に馴れむつれけり。徒然なるまよに、懐になどうち臥せて、只これ
を愛し弄びつと明し暮しける程に、いとむつかしく心亂れて、あらぬすぢにのみ物の覺え

で、事に觸れ折節につけて、憂の涙かわく間もなし。この人は、鏡のかけ曇なきをのみたのみて、人の心の濁れるを知らざりけり。

〔二十六〕晉書卷五十五 潘安仁傳

〔第二十六〕昔、潘安仁と申す人ありけり。姿有種類なくなまめかしく濟けにて、その容は、玉などの如く光るやうにぞ見えける。秋の衰を述べて賦に作り、事に觸れて情深く

賦につくり
一秋興賦文
選に載せた
り

やさしかりければ、世の中にありける女、さながら名を聞き容を見るより、下燃の煙絶ゆる時なかりけり。車に乗りて道を行くに、道に逢ひける女、思ひのあまりにや、橋の枝を探りて、車の物見よりうち入れけり。人ごとにかくしければ、果物車にあまりけり、

下燃の煙
人知れず戀
ふる思

めぐりあふ事もありやとから車積みあまるまで折れるたちばな

物見一窓
〔二十七〕出
所不詳

〔第二十七〕昔、都に人の女ありけり。眉目容なまめかしく美しかりければ、荒き風にもあてずして、深き窓の内にかしづき養はれけり。齡やう／＼人となる程に、父母世にあ

世にあらむ
事一娘の婚
姻の用意

らむ事をかせぎ營む。この人これを聞きて、娘からず厭しきやうになむ思ひけるを、父はしひて怨み歎きけり。「我もしさる事あらば、只家を出て飾をおろして、世にもあらじ」

(二十五)西
京雜記

數多の―多
數の女御后
たちの

人の教―他
人の教唆

いとなみ―
政治

〔第二十五〕昔、漢の元帝と申す帝おはしましけり。三千人の女御后の中に、王昭君と申す人なむ、花やかなることは誰にも勝れ給へりけるを、此人帝にま近くむつれ仕う奉り給はど、我等定めて物の數ならじ、と數多の御心にうとましく思しけり。此時に夷の王なりける者の参りて申さく、「三千人まで候ひあひ給へる女御后、いづれにても一人賜はらむ」と申すに、上みづから御覽じ盡さむこともわづらひありければ、その容を繪に書かせて見給ふに、人の教にやありけむ、この王昭君の容貌をなむ、見にくき程に寫したりければ、夷の王たまはりて、悦びひらけつよ、我が國へ具して歸るに、故郷を戀ふる涙は、道の露にもまさり、親同胞に立ち別れぬるなけきは、繁き山の行末はるかなりかよるまよには、只音をのみなけども、何のかひかはあるべき。

うき世ぞとかつはしるしるはかなくも鏡のかけをたのみつるかな

哀を知らず情深からぬ武夫なれども、らうたき姿にめでて、かしづき敬ふこと、その國のいとなみにも過ぎたり。かよれども、ふりにし都を立ち別れにしより、今日に至るま

男入り来て見るに、いかどおほえなむ、暫ばかり死に入りておきもあがらず。

我さへや慕ひやしなむちぎりける人ゆるゑ人の絶ゆるいのちに

時の人々悲み泣きけり。この女は穎川の荀爽が女、南陽の隱瑜が妻なり。今の男は太子師郭奕といふ人なり。

(二十四)白

氏文集卷三

新樂府

上陽人一人

名に非ず上

陽宮に閉ぢ

籠められた

る宮人の義

内裏一唐の

玄宗の後宮

〔第二十四〕昔、上陽人、上陽宮に閉籠られて、多くの年月を送りけり。秋の夜春の日あ
 げくれ、月の光蟲の聲より外に、又さし入り音なふ人なかりけり。嵐にたぐふ紅葉の
 鐘、百轉の鶯の聲も、我が爲はいと情なき心地す。夜の雨窓を打つ音にも、憂の涙い
 とど増りけり。

いとどしくなぐさめがたき秋の夜に窓うつ雨のおとぞわりなき

この人昔内裏に参りけるに、その姿花やかにをかしけなるを頼みて、楊貴妃などを争
 ふ心やありけむ、一生終に空しき床をのみ守りつゝ、花のかたちいたづらにしをれて、
 烏玉の黒髪白くなりけり。

ぶべき理ことわりなければ、今はかぎりの我身わがみとは知らずや」とて

親おやにこそそむかぬ道みちにいりぬともふるきちぎりをいかが忘れむ

「生きては一つ床ゆかの交り絶ゆる事なく、死しなば又同じ塚つかの塵ちりにもなりなむと誓ちかひし事は、
中有ちゆうの旅の空にも思ふらむ。我も又忘れめや」といひはつれば、らうたき背まなじりより、紅
の涙流れ出づる氣色けしき、誠にほひ異なる八重の紅梅こうばいの、身の朝あしたの雨にしほれて、よそほ
ひ淋さびしきに通ひたり。かくて暫しばしばかりあるに、身の有様ありさまをや思ひ定めけむ、指ゆびより血を
出して、妻戸つまどのうちに書きていはく、

我がかばねをば隠瑜いんゆが墓はかの傍そばに置け

と書きつくるに、人の氣色のしければ、さわぎて、はての文字二三をば書きさしつ。み
づからの帯を解ときて、頸くびを引き纏まとひて、みづからはかなくなりぬ。

くれなるの涙にまがふ水ぐきの末をだにこそかきもながさね

暫しばしあれば絶え入りぬ。女房かよへて泣なき居れども、いふかひなし。かくて明けぬれば

昔の男より
も一親の言
に從はされ
ば死せる夫
よりも親を
輕んずるに
當るを以て
ことから一
態度
嬉しく覺ゆ
る一郭突が
臆せられて
一郭突が

いひけれど、「親の心にしたがはぬは、限なき罪とは知らずや。みづからの心にこそふさはしからずは思ふとも、いかでか親の本意をば違ふべき」など猶云ひけるに、昔の男よりも、生ける親のことはおろかに覺ゆる理に、まけてなまじひに出で立ちつよ、今の男の許へのくくも、袖の霏乾く間もなかりけり。かよりけれども、男の家近くなりければ、色貌を改めて、喜びたるけしきになりぬ。車よりおりつよ、なよらかに歩み入りて、帳の前に火しろくかきたててうち居たる、ことから氣色をみるに、嬉しく覺ゆる事限なし。又物など見たる、うち言ひける言の葉につけても、恥しくつよましくのみ覺えて、忽にま近く寄るべき心地もせず、臆せられて、やよ久しくなる程に、鐘も鳴り、八聲の鳥の聲々鳴きわたりぬれば、この女、何となくすべき事ありがほにもてなして、身親しき女房一人二人を具して、端の妻戸の内に入りぬ。かくて後いたくうちなきて、女房に語りていはく、「我昔の契を思ふに、時の間も堪へ忍ぶべき心地せず。さりながら親に背ける罪を恐れて、なまじひに此所までは來たれど、生きながら二人の人に契を結

心に足れる
—親の心に
満足する

忘るゝ草の
—伊勢物語
に「今ほと
て忘るゝ草
の種をだに
人の心にま
かせずもか
なし」
おこたる—
をさまる

もいつきかしづく事限なし。かよりければ、尊き卑しきさながら心をかけて、懇に挑み
いはせける中に、隠瑜と聞ゆる人、心に足れる事やありけむ、この女に婚せてけり。男
志し深くて、またなきものに思ひけるも、誠に理深く見えけり。三年ばかりになり
ければ、月日の過ぐるまよには、いとど類なくのみ覺えて、様々に浅からず契り置きけ
る事ども數多たびになりぬ。かよるほどに、この男病に煩ひて後、幾程なくて終にはか
なくなりぬ。女の氣色あるにもあらず、悲びのあまりにや、命も絶えぬとぞ見えける。
餘所に見る人さへ、いとはしたなき程に覺えけり。月日はあらたまれども、別の涙は乾
く時なかりけり。父母いかにして、忘るゝ草の種をだに取りてしがなと思へど、更に叶
ふべくも見えず。この時に同じ里に住みける郭突といふ人、世に取りて賤しからず、時
に用ゐられたり。この男、思の外に年比住み渡りける妻はかなくなりて、歎やうくお
こたるほどに、此女を、あはれいかでかと思ふに、堪へぬ氣色いろに出でぬ。これによ
りて、父母煩ひなく聽してけり。この女悲しと思ひて、様々にさるまじきよしを懇に

思はずに―
案外に

を哀み情深くおはしければ、燈火消えたる程に、「これに侍る人々おの／＼縷を取りて奉るべし。その後燈火はともすべし」と宣はするに、この男、涙もこぼれて痛しく覺えけり。かてく燈火あきらかなれど、誰も皆縷なかりければ、その人と見えざりけり。かよればこの人、いかなるわざしてか君の情を報い奉らむ、と心の中に思へりけるに、あるじ、敵の國にせめられて危き程におはしけるを、この人一人身を棄てて戦ひければ、主勝たせ給ひにけり。この事を思はずに怪しくおほして、その故を尋ね問はせ給ふに、この人申していはく、「我昔後に縷を取られ奉りて、思ひ遣るかたなく侍りしに、誰となく紛はし給ひし事、我今に忘れ侍らず」と泣く／＼申しけり。

なさけなき言の葉ならば今までに露のいのちのかよらましやは

主これを聞かせ給ふにも、猶人として情あるべき事にこそと思しけり。

〔第二十三〕昔、後漢の代に荀爽といふ人ありけり。心賢く顔美しき女をぞ持ちたりける。みめ心の類なきのみにあらず、ざえ才學並びなくて、せぬわざなかりけり。これを父母

（二十三）後
漢書卷八十
四列女傳

くならば、何をたのもしと思ひてか、身を捨て心を勵して君に仕へ奉るべき」といへり。主あるじこれを聞きて、淺あさからぬ年比としごらのむつまじさを願かへりみず、この女を忽こゝろに殺してけり。かたは人これを見て心こゝろゆきぬ。又その外のつかはれ人ども、もとの如くかへりにけり。

思ひきやただうちゑみし言の葉の死出の山路に散らむものとは

跛あしなえたるつかはれ人一人に、顔美かほしき人を代へけるもいと情なさけなきしわざなりや。大かたこれのみならず、唐國からくにの習ならひにて、怪あやしきものなれども、云ひ立ちぬることを、帝みかどもその志を破やぶらせ給はぬにや。

〔第二十二〕昔、楚その莊王さうわうと申す人、群臣ぐんしんを集めて終夜よらすまがらあそび給ひけり。其御傍そのおんかたはらに、淺あさからず思ひ聞えさせ給ひつる后きさきさぶらひ給ふを、人知れずいかでかと思ひ奉る臣下しんかありけり。燈火ともしびの風に消えたりける隙ひまに、后の御袖おんそでを取りて引きたりけるを、限かぎりなく、憤いきどほり深くやしけむ、御手おんてをさしやりて、この男の冠かぶりの纓えいを取りて、「かよる事なむ侍る。早く火をともして、纓えいなからむ人をそれと知らせ給へ」と申し給ふを、あるじ、素もとより人

（二十二）韓
非子、說苑

をば趙武とぞいひける。

(廿二)史記
卷七十六平
原君列傳
おしひづま
—龍姫

うれふる—
愁訴する
おのれ—跛
者

(第二十一)昔、平原君と聞ゆる人、三千人のつかはれ人を集めて、これを憐み懇に思ひけるに、此主のおもひづま高き樓の上に居て四方を見渡しけるに、跛えたる者の這ふ這ふ膝行りつゝ水を汲みに行きけり。左右の膝よりも頭猶引き入りて、人の姿にも似ず世にをかしけなりければ、この女、思ひわくかたもなくて打ち笑ひてけり。このかたは人、笑ふ聲を聞きて、「我かよる病に煩ひて年月久しくなりぬ、今始めて人の笑ひ嗤るべきにあらず。これ偏に、君の色を好みてつかはれ人を軽しめ給ふ故なり。若し我を棄てぬ御心ならば、笑ひつる人を失ひ給ふべし」と強て半にうれふるに、おのれが憤をやむべしとは云ひながら、さすがにあるべくもなき事なれば、その後月日を経るに、三千人のつかはれ人、やうく數少くなりゆくを、「我聊も過つことなし。然れども怨を抱きて遁れ去る心知り難し」と各に云ひくだしけり。この中に、事に詳なるもの申していはく、「君このかたは人を賤し給へり。これ我らが身の上にあらずや。若しかくの如

主君―趙武

そらだのめ
―無約束

藤の衣―喪
服程嬰の爲
に著たる也

になりての後、本意の如く親の讎を滅し失ひつ。さるべき事にやありけむ、何事につけても世に用ゐられ、人に恥ぢられ、二十にもなりぬれば、程嬰心安くおほえけり。かくて後、この主に暇をこひていはく、「我は早く死に侍りなむ」といふ時に、主物覺えず心あわてよ、「こはいかに」といふに、程嬰がいはいはく、「我昔杵臼に誓ひき。安きにつけて先づ死なば、我は恩の深きによりて、難き事を遂げて必ず報ゆべし、と申しき。然るを我今死なずば、杵臼にそらだのめするにあらずや。賢き人は云ひつる事を違へず」とばかりいひて、遂に我身を刺し殺しつ。この時に、主あやなく思ひて、かゝる事を見ながら、世にあらむ事は恥なり、と覺えけれど、空しく父の跡を斷たむ事は本意ならず覺えければ、命をば棄てずして、藤の衣をぞ三年まで脱がざりける。歎き悲しむ事年月を経れども、更におこたらざりけり。

思ひ知る心はたれも深けれどかかるためしはまたもあらじな

このつかはれ人二人が後の事より外のいとなみなかりけるも、誠に理なり。あるじの名

主人—晉侯
いと大事に
—危篤に
世をなきに
しなし—傍
若無人に

ば殺すべき。今我を失はむことは、その由縁なきにあらず。稚き子におきては何の罪かはあるべき。願はくは生けよ」と叫びけれど、忽に二人ながら殺しつ。その後、實の子をば程嬰とりて山の中に隠せり。年月を経れども敵疑ふ心なければ、またそのわづらひなくて十五年になりぬ。その後主病に煩ひ給ひて、いと大事におはしけり。この事を占はしめ給ふに、「罪なくして罪を蒙れる人の祟」とトひ申しけり。「趙朔を滅すことは、全く我が心より起らず。只屠岸賈みづからの憤によりて、世をなきにしなしてふるまへる故に、我今この病を受けたり、天の下にあるじとして、あるまじき事をするものを退けぬは、もはら我が咎なり。然ればいかなる事をしてか、この病をやむべき」と宣ふに、韓厥といふ人、萬に暗き事なかりければ、計ひ申していはく、「趙朔が後をつかはせ給ふべし。十五になる子一人平らかにて侍り。事の有様をば細に知らせ給はずや」と申しけり。あさましと思して、忽に召し取りて見給ふに、昔はかなくなりし親に、露ばかりも違はず似たりけるを、哀にいみじくおほして、いつしか父の跡を繼がせ、官位身にあまる程

音無かりければ―聲立てざりければ

子孫長く絶ゆべきものならば、早く泣くべし」と心の中に思ひつゝ深く隠れるたるに、
本意の如く音無かりければ、敵求めかねて歸りぬ。母の心よろこび深し。然れどもこの
憂におきては、絶ゆる時あるべからず、と歎き侘びつゝ、程嬰に杵臼語らひていはく、
「この子を事なく養ひ立てよ父の跡を繼がせむと、命を捨てむといづれか難かるべき」
程嬰答へて曰く、「死なむは易し。平らかに養ひ立てむ事はいと難し」といふに、杵臼が
曰く、「恩の深き事は君我に勝れりき。易きにつけても我まづ死なば、その後難き事を遂
けて、必ず仇を報い給へ」と言ひつゝ、幼き兒を一人抱きて深き山の中に隠れ居たり。
程嬰敵に告げて偽りていはく、「我求め給へる子の在所を知れり。願はくは金千兩を賜ひ
て教へ奉らむ」といへるを、敵喜びさわぎて、忽に千兩を與へつ。をこがましくば覺え
ながら、しるべして此所に行き向へるに、杵臼子をうち抱きて、あきれたる氣色にてゐ
たり。敵これを見て、いつしか殺さむとするに、杵臼さけびていはく、「愚なるかな程嬰、
昔の恩を忘れて諸共に人となさずといふとも、いかでか千々の金に耽りて、一人の子を

せて
やすめ難く
―すて置き
難く
たゞならぬ
事―懐胎の

ざりければ、心の中に憤深くて明し暮すに、猶やすめ難くや覺えけむ、趙朔をはじめとして、兄弟さながら亡し失ひてけり。其中に年比相具したりける妻なむ、一人この事に免れにける。折しもたゞならぬ事さへありて、隠れ惑ふにつけても、わりなく悲しかりけるを、杵臼、程嬰といふ二人のつかはれ人、主を思ふ心深かりければ、人知れず隠しはぐくみて、若し生れたらむ子男子ならば、親の敵をも思ひ知りなむ、只いかにもして、事なく人とならむ事を思ひ計れりけるを、敵漏れ聞きて、目ざましくなむ覺えければ、猶尋ね求めて、その跡を滅し失はむと思へりけり。これによりて、この女隠れ惑ひながら、本意の如く男子を生みてけり。杵臼、程嬰限なく嬉しく思ひけるにも、わりなくして、手づから自ら隠し忍びつゝ養へりける程に、この敵の屠岸賈、この事を聞きつけて、あながちにあさり求めけり。母の心にせむかたなく覺えながら、著たりける袴の中に、この子を入れて教へていはく、「親の跡を繼ぎて、君にも仕へ奉るべきものならば、物の心を知らず、幼しといふとも、聲を立てて泣くことなかれ。若し又この時に當りて、

らす
あひ念ぜよ
—こらへよ
事も斜なら
ず—容體尋
常ならず
いかなる事
にか—如何
なる處分に
逢ふならん

(二十)史記
卷四十三趙
世家
言ひつけて
—言ひかぶ

菜を摘みて膝行歩くを、ゆよしけのものよ有様やと見る程に、我が昔の妻と見なしてけり。猶僻目にやと目を留めて見るに、いかにも違ふ所なかりければ、人知れず悲しく覺えて、くるよや遅きと呼びとりてけり。女、我過つ事もなきに、いかなる事にか當りならむすらむ、と恐れ惑ひけれど、ありし昔の事などを細やかに語らひければ、女あさましく覺えて、この男をうち見るより、いかど思ひけむ、いたく惱み煩ひて、曉がたに絶え入りにけり。

もろともに錦を著てやかへらましうきにたへたる心なりせば

心短きは、何事につけても口惜しき事にこそ。錦を著て故郷に歸るとは、この人のことなり。

〔第二十〕昔、晋の景公といふ人おはしけり。そのつかはれ人趙朔、國の政を執れり。又屠岸賈といふ人、争ふ心やありけむ、やよもすれば、この趙朔を退けむと思ふ心深くて、咎を求め、なき事を云ひつけて、罪に行はるべきよしを、主に云ひけれども、用るられ

五の衰—天人命終の非候、自光不現、花鬘萎悴、兩腋汗流、鉢便臭穢、不樂本座

九品—極樂淨土、九階の等級あり
(十九)前漢書卷六十四朱買臣傳
あらぬさまになりて—離別して—
斯くてしもや—吾此儘に終るべか

極樂をも願はば、苦を集めたる海を渡りて、樂を極めたる國に到らむことは疑ふべからず。ゆめく／＼出で難き惡趣に歸らずして、行き易き淨土にいたるべし。

〔第十九〕昔、朱買臣、會稽といふ所に住みけり。世に貧しくわりなくせむ方なかりけれど、文讀み物學ふ事夜晝怠らず。其隙には薪をこりて、世を渡る計にぞしける。かくて年月を経るに、あひ具したりける女、限なく貧しき住居を堪へ難くや思ひけん、「我も人もあらぬさまになりて世を試みむ」など細やかにうち語らひければ、「斯くてしもやありはつべき。猶今年ばかりは、心強くあひ念ぜよ」と萬にこしらへけれども、終にきかで、その年の内に離れにけり。男戀ひ悲めどもいふかひなくて、次の年にもなりにけり。この人のざえ才學、世に勝れたる事を帝聞かせ給ひて、その國の守になされぬ。始めて國に下りけるありさま、心言葉も及ばずめでたかりけり。かゝれども、猶ありし妻の事を心にかけて、一國の内を尋ね求めさすれども、似たる人なくて明し暮すに、野に出でて狩し遊びける時、事も斜ならず、怪しく佗しけなる賤女が、籠といふものを臂にかけて、

この道―戀
の道

しかじ云々

―白氏文集

李夫人に

「人非木石

皆有情。不

如不遇傾城

色」

八苦―生、

老病、死、

愛別離、怨

憎會、求不

得、五陰盛

方士歸り参りて、このよしを奏せしむるに、御心日を経て惱みまさりつよ、生れ給はむ
ほどをも、猶心もとなくや思しけむ、その年の夏四月に、みづからはかなくならせ給ひ
にけり。

知らざりしたまのありかを聞き得てぞ夜半の烟と君もなりにし

これ一人君のみにもあらず、人と生れて石木ならねば、皆おのづから情あり。古より今

に至るまで、尊きも卑しきも、かしこきもはかなきも、この道に入らぬ人はなし。入り

とし入りぬれば、迷はずといふことなし。しかじ只心を動し色にあはざらむには、大凡

樂み榮もうきもつらきも、この世は皆夢幻の如し。八の苦通るゝ事なければ、厭ひ

ても厭ふべし。天上のたのしみ限なけれども、五のおとろへさとする事なければ、願ふべ

きにも足らず、生れてもよしなし。しかじ只心を一にして、三界を厭ひて九品を願ふべ

し。極樂を願ふとも、この世に執を留めば、纜を解かずして船を出さむが如し。この世

を厭ふとも、極樂を願はずば、轆をそむけて車を走らしめむが如し。この世をも厭ひ、

天にあらば
 一、在天願
 作比翼鳥、
 在地願爲連
 理枝

馬鬼の道—
 馬鬼城は貴
 妃の絞殺さ
 れたる處

りなむとするに、楊貴妃、金の簪を折りつゝ、「我物とて帝に奉れ」と宣はす。方士これ
 を取りて、事淺くや思ひけむ、「金の簪は、世の中に類なきものにもあらず。當時定め
 て人知れる御契ありけむものを、願はくは承りて奏せしめむ」といふに、楊貴妃氣色變
 り涙まさりて、思し亂るゝ事ありと見ゆ。「昔天寶十年の秋七月七日、驪山の宮に侍りし
 時、織女牽牛の逢ひ見る夕、長生殿の内音なくして、夜半の氣色物哀なりしに、帝我に
 立添ひて宣はく、天にあらば羽をかはず鳥となり、地にあらば枝をかはず木とならむと。
 これ君より外に又知る人なし。この契の限なきによりて、必ず下界に生れて、定めて二
 度あひ見て、むつまじき事は古の如くならむ。我この事をかねて知れり。思へばしか
 も悲しく、思へば又嬉しからずや」など聞えさせ給ふ御有様にも、忍び難き御心の中顯
 れて、馬鬼の道の邊に、今は限と見え給へりし夕の怨も、猶只今の様におほせる氣色、
 誠に梨花一枝春の雨をおびたり。

光さす玉のかほばせしをたれてなほそのかみの心地こそすれ

妃只今いね給へり。朝を待つべし」といひて歸り入りぬる後、心もとなくて一人立てり。夕の嵐音なくて、波の上遙に入日さすほど、折からにや哀に心ほそし。かくて夜もやうやう半過ぐる程に、花の扇に白露ひまなくおけるを見て、

明けやらぬ花のとほその露けさにあやなく袖のしをれぬるかな

かよる程に、夜も明け日も出でぬれば、楊貴妃出で給へり。金の簪ひかり鮮やかに、玉のかざり目もかどやくほどなり。まほろしにあひ向ひて、暫は詞に出で給はず、まづ落つる涙をぞ所狭けにおほせる。方士も袖の半ひまなくて、やと久しくなる程に、楊貴妃宣はく、「天寶十四年よりこのかた今日に至る迄、帝の御心の中を思ひやるに、あさましく苦しき事限なし。かばかり妙なる所に生れたれど、契の深きによりて、猶我うき名をとどめし故郷のみぞ心にかよれる。朝夕馴れし里を見おろせど、徒に雲霧のみ隔て見る晴間なし」など様々に宣はする有様、猶霓裳羽衣の舞にぞ似給へる。方士、帝の御心の中を知れりければ、ありのまよに聞えさせつ。互に心のいぶせさをはるけて、方士かへ

心のいぶせ
さをはるけ
て一爵懷を
はらして

六の道云々
 我は普く
 六道の状況
 に通ぜり

いひしらす
 一言語に絶
 して

夜の蟋蟀、枕にすだく聲にも御涙まさり、夕の螢の汀を渡る思も、消え入りぬべく思されけり。壁に背けるのこりの燈火、光かすかにて、朝夕諸共に起き臥し給ひし床の上も塵積りつよ、ふるき枕ふるき衾、空しくて御傍にあれども、誰と共にか御身に觸れさせ給ふべき。かくて二年ばかりにもなりぬれば、まほろしといふ仙人参りて、「我君の御心に、楊貴妃を思せることの、限なきそこを知れり。六の道覺束なき所なし。願くは生れ給ひつらむ所をたづね見て歸り参らむ」と聞えさするに、嬉しくおほさるゝ事限なくて、御物思忽におこたりぬ。この時まほろし、空に昇り地に入りて、到らぬ所なく求むるに、そのしるしなし。雲に乗りつよ、猶東さまへ飛び行くに、大海の中にいと高き山あり。その上に玉の臺金の殿ども、軒を列べ、蓑を連ねたるよそほひ有様、すべてこの世の類にあらず。又その中に仙女數多遊びたはふる。此所に行き向ひて、玉の戸ざしを打ち叩くに、いひしらす、この世ならぬ人出でてまほろしに逢へり。楊貴妃の現れ給へる蓬萊宮これなり、といふを聞くに、嬉しさ限なくて、唐の玄宗の御使なりと聞えさす。「楊貴

つるごとに御心の慰めがたさ、類なく思されける時は、はかなく別れにし野邊に行幸せさせ給ひけれど、淺茅が原に風うち吹きて、夕の露玉と散るを御覽じても、消え入りぬべくおほしける。

もろともに重ねし袖も朽ちはてていづれの野邊に露結ぶらむ

かくのみ思しめされて、涙をおさへて立ち還らせ給ふ御有様のよわくしさも、いはどおろかなるべし。

別れにし道のほとりに尋ね来てかへさは駒にまかせてぞ行く

春の風に花の開くる朝、秋の雨に木の葉散る夕、宮のうち哀に淋しくて、いろくの草の花、庭の面に咲き亂れたり。また紅葉のにしき、階のうへに紅深く見ゆ。昔楊貴妃のま近く使ひ給ひし女房など、月くまなき夜は、昔を戀ふる涙にむせびつよ、琴を調べ琵琶弾きけるにも、いとど御袖の上ひまなく見ゆる心苦しき、餘所の袂までもせきかぬる心地す。忘れてもまどろませ給ふ時なければ、夢の中にも逢ひ見給ふ事はありがたし。

何方いづかたへ行くともおほされす。蜀山しよくさんといふ山峻はげしく阻さかして、とだえがちなる雲くもの架橋かひしを歩あみ渡わたらせたまふ御氣色みけしき、他目よそのめにだに猶なほ忍しのびがたし。百官もりのつかさ人數かずおほ衰おろへ、勢いきほ嚴しいかめしかりし旗はたなどさへ、雨あめに濡ぬれ露つゆにしほれてその物とも見えす。御供おんともにさぶらふ人々、何事なにごとにつけても物心ものこころ細ほそくおほえて、鳥とりの聲こゑもせぬ深山みやまに、假かりの宮みやいと怪あやしきさまなり。月の影かげより外ほかに光ひかりなき心地こころのみして、あるにもあらず淺あやましき程ほどなれど、所ところにつけたる御住居おんすまひはやうかはりて、かよらぬ折をりならばをかしくもありぬべし。これにつけても、九重ここのへの錦にしきの帳とばりの内の玉たまの床ゆかの上に、枕まくらをならべ衣えをへだてざりしむかしは我何事わがなにごとを思おもひけむ、など思おもされけるも誠まことに理ことわりなり。かよるほどに、東宮とうぐうは讓ゆづりをうけて御位みくらんに即すなはちかせ給たまひぬ。惡あしき心こころある者を失うひ、世よの中なかをしづめて、太上たじやうてんわう天皇てんわうを迎むかへ取り奉たづらせ給たまふ。ま近く内裏うちをならべて、萬よろづを申し合せつと、御政おんまつりごとあるべし、と聞きえさせ給たまへどこの御物思ものおもひのあまりにさるべき事こととも思おもされず、世よもたひらぎ、御心おんこころもしづまりて後は、御歎おんなげも分わくかたなく一筋ひとすぢになりぬ。時とき遷うつり事こと變かり、樂たのしび盡つき悲かなしむ來きたる、池いけの蓮はす夏なつひらけ、庭にわの木葉このは秋あき落おち

東宮一齋宗
失ひ一亡ば
し
さるべき事
とも一玄宗
が左様にす
べしと思
はれぬ也

ひとりや
楊貴妃が

只御袖の下より、紅の涙ぞ流れける。御心惑にや、馬の上も危く見えさせ給へば、人々表裏に添ひ奉りて、やうく行かせ給ふに、兵ども糧盡き力疲れて、帝に隨ひ奉らむ事二心なきにあらねば、陳立禮も留むべき心地せず。かゝるほどに益州といふ國より、貢物數しらす運べりけるを、御前に積み置かせて、侍ふ人々に別ち賜はせて宜はく、「我政の清み濁れるを知らざりしより、今日この亂にあへり。我身一つによりて、去り難き親兄弟にも別れ、二なき命をも捨てて猶我に隨へり。我又石木ならねばあはれむ心ふかし。早くこの物を賜うて、おのく故郷へ歸りね」と宣はする御袖のうへ、秋の草葉よりもつゆけく見ゆ。この御ことを承はるもの、皆涙をおさへて申していはく、「命終らむまでは、只君に隨ひ奉るべし」。かくて日も夕暮になるほどに、御傍淋しきにつけても、いかなる中有の旅の空に、ひとりや暗に惑ふらむ、など思し亂れたる心苦しき、哀に悲しなどいふもおろかなり。夜もやうく明方になりぬれば、又出で行かせ給ふに、有明の月西に傾く程、雲る遙に鳴き渡る雁を聞かせ給ふにも、御心のうち搔きくらされて、

大液―禁中
の池の名
芙蓉―蓮
未央―宮名

にければ、御顔おんかほに袖かまを掩おほひて、ともかくも聞えさする事なし。かよる程に、この世に楊貴妃きいひ、いかならむ巖いははの中なりとも、覺束おぼつかなからぬ御住居おんすまひならば、いと心苦しからず思しけるに、思の外いづちたに命絶えぬべきにや、と淺あやからぬ別の涙なみだ、千入ちしほの紅くれないよりも猶色深くて、詮方せんかたなく見え給ひながら、猶々帝みかどに目をかけ奉り給ひて、かくれさせ給ふまで願ねがみ給へる御有様、何なにに譬たとふべしとも見えす。撫子なでしこの露つゆにぬれたるよりもらうたく、青柳あおやなぎの風かぜに隨したがへるよりもなよらかに、大液たいりきの芙蓉ふよう未央みかづの柳かやに通かよひ給へるをしも、情なごひなく道の邊はたぎの寺の中うちにして、絛衣ねもぎぬを御頸おんくびに引き纏まとひつゝ、遂つひにはかなくなし奉りつ。物の哀あはれを知らぬ草木くさくまでも色いろかはり、情なごひなき鳥獸とりけものさへ涙なみだを流せり。

ものごとにかはらぬ色ぞなかりける縁ゆかりのそらも四方よしものこすゑも

御供みまがひにさぶらふ人、心あるも心なきも、猛まがきもたけからぬも、皆涙みななみだにおほれて行くかたも知らず。又帝またみかどの御心みこころのうちには、

何なにせむに玉たまのうてなを磨あがきけむ野邊のべこそつひのやどりなりけれ

あやむる一
制する

この人―楊
貴妃
人の氣色―
隨行者の様
子
思はずに―
意外に

妃の養子に、左大臣安祿山と聞ゆる人、威勢を争ひて、心の中、憤深けれども、これをあやむる人更になし。これによりて、忽に兵十五萬人集めて、遂に楊國忠を亡すに、世の中亂れて騒ぎ罵りあへり。百敷の内までもその恐深ければ、帝外へ逃げさせ給ふ。東宮楊貴妃、御傍にさぶらひ給ふ。楊國忠、高力士、陳玄禮、韋見素、又御供に侍り。かくて蜀といふ國へ退かせ給ふに、いかならむ野の末山の中なりとも、この人とだに二人あらば、生けらむ限思ふことあらじと思さるゝに、人の氣色變りて、兵ども道をゆかず。此時上思はずにおほして故を問はせ給ふに、陳玄禮といふ人、東宮に申していはく、「早く楊國忠、政を亂り人の心を破るゆゑに、君も今日この事にあはせ給へり。君の御敵世の仇にあらずや。しかじ只楊國忠をうしなひて、人の愁をやすめむには」と聞えさす。東宮これを聽し給ふによりて、楊國忠を目の前にはかなくなしつ。帝あさましくはかなく思されながら、この後ゆかむとし給ふに、兵ども立ち廻りつよ、「亂の根猶あり」と申して、心よからぬ氣色ありけり。この時に、上楊貴妃の免るまじき事をさとり給ひ

おこたりー
謝罪し

思おもす心こころや深ふかかりけむ、髪かみの髪かみ一房ひとふさ切りて帝たてに奉たてまつり給たまふ。「我身わがみの膚はだ頭かしらの髪かみならでは皆
これ君きみの賜物たまものにあらずや。然しかるを我今いま御心おんこころに背そむきぬれば、罪つみに伏ふしておこたり申まをすべし」
と、泣なくく聞きえさせ給たまふに、御使おんつかいもいとはしたなきまで覺おぼえつよ、この由よしを奏まをするに、
御心おんこころもあわて、物ものも覺おぼえさせ給たまはずながら、時ときの間に召まし返かへして、世よに猶なほ類たぐひなくもある
心こころばせかなと思おもし續つくるに、御志おんこころの深ふかさ日ひごころには過すぎにけり。初秋はつあきの七日ななひの夕ゆふ、驛山りげん
宮みやに行幸みゆきし給たまひて、織女たにはたのこほし牽牛せうぎゆうの絶たえぬ契ちぎりを羨うらやみて、はかなきこの世よの別わかれ易やすきことをぞ、
かねて歎なげき給たまひける。形かたちは六むの道みちにかはるとも、逢あひ見みむことは絶たゆる時ときあらじと契ちぎら
せ給たまひて、

六の道一佛
説にいふ
天、人、修
羅、餓鬼、畜
生、地獄の
六道

すがたこそはかなき世々よよにかはるとも契ちぎりは朽くちぬものところを聞きけ
など宜よろひつよ、御手おんてを取りかはして涙なみだを流ながし給たまひけるを、末すえの世よに聞きく人ひとさへ袖そでの上うへつ
のけし。かくて年月としづきを送おくらせ給たまふに、右大臣うだいじん楊國忠やうこくちゆう、楊貴妃やうきひの兄あやむにて、世よの政まつりごとを取とれり
けれども、人ひとの心こころに背そむく事こと多おほく積つもりにければ、世よの中なか慎いそ深ふかくなりぬ。その中に、楊貴やうき

のついでに見やりもせず

霓裳羽衣の

舞—玄宗が

曾て仙人と

月宮殿の天

女の舞を觀

て之に擬し

て作れる所

といふ

はぐくみ—

撫育し

心に—楊貴

妃の

あるじ—持

主

へる度に、玉の飾庭に落ち積りて、極樂世界の瑠璃の池もかくやあらむと覺えたり。大凡驪山宮の秋の夕に心を留めぬ人なし。春は春のあそびに隨ひ、夜は夜の短きをぞ歎き給ひける。かくて終夜終日に時をわかず、これより外の御いとなみなかりければ、國の政事の清み濁れるをもさと給はざりけり。凡てこの楊貴妃のはぐくみによりて、世の苦しき事を忘れつゝ、誇り驕れる人その數をしらず。又天下の人尊きも卑しきも、心に違はじと思ひあへるけしきなべてならず。見る人聞く人、羨みめづるさま言ひ盡すべからず。これによりて、女子を産めるものは悦びかしづきて、かゝるたくひを、心にかけてけるもをこがましくこそ。又帝の御弟に寧王と申す人、御傍をはなれず、ま近く床を竝べて、夜晝をわかぬ御遊にも必ず侍ひ給ひけり。この親王の玉の笛を、帳の内に隠し置かせ給へりけるを、楊貴妃取りて、何さなく吹きならし給ふ。帝これを御覽じつけて、「玉の笛はあるじにあらずしては吹く事なし。然るを志の重きに誇りて禮を過てり。事のみだれにはあらずや」と殊の外に御氣色變りにけり。これによりて楊貴妃、痛み

いきざし
氣象

の山の端より高く昇る心地して、そのいきざしは、夏の池に紅の蓮始めて開けたるに
やと見ゆ。一度笑めば百の媚なりて、人の心惑ひぬべし。すべてこの世の人にはあらず、
只天人などの暫し天降れるとぞ見えける。かよりければ、上内裏のうちに忽に温泉を掘
らせて、この人に浴させ給ふ。湯より出でたる姿誠に心苦しく、羅の衣猶重けになむ見
えける。色ざし歩み出で給へるけしき、かるびたるものから、氣高く愛々しくて流石に
思ふ所あるさまにふるまひ給へり。上これを見給ふ度に、嬉しく喜ばしく思さるよこと
たくひなし。只眉目容貌の人に勝れ、しわざ有様の世に雙なきのみにあらず、萬につき
て暗からず、事に觸れて情深くなむ物し給ひける。又上の御心のうちに思せることをば、
さながらそらに知りてふるまひ給ひければ、限なき御志をも、世の人理と思へり。同
じ車一つ床にあらねば、行幸し、いね給ふことなし。三千人の女御后、我もくと侍ひ
給へど、御目のつてにだにかけ給はず、只この人をのみぞ、月日に添へて類なきものに
おほしける。又驪山宮に行幸し給ひては、霓裳羽衣の舞を奏せさせ給ふ。舞の袖風にか

御目のつて
にだにかけ
給はず一日

世の常びたる
一通俗に
ちかき

(十八)白氏
文集卷十二
長恨歌并傳

又水汲む瓢ひきこを、一つ竹の編戸あみこにうち懸かけたりけむが、風の吹くたびに、戸に當りつと鳴なりけるをさへ、うるさしといひて忽わに割すり捨ててけり。是等これらを聞くにも、實ひにとも覺おぼえぬに、この商山しやうざんの四皓しかうはなさけあり、人を助くる心も深くて、誰たれよりも世の常つねびたるさまにこそおほゆれ。

いさぎよく耳をあらひし川水をけがらはしとは誰かいひけむ

〔第十八〕昔、唐けんそうの玄宗と申す帝みかどの御時、世の中めでたく治りて、吹く風も枝をならさず、降る雨も時を違たがへざりければ、皆人天下穩おたしきに誇りて、花を惜をしみ月を弄もてあそぶより外のいとみなし。帝も、色にめで香にのみ耽ひり給へる御心の暇ひまなさや、萬よろづをば楊國忠と聞ゆる人に任まかせて、やうやくみづからの御政事まつりごと怠たらせ給ひにけり。これよりさきに、元げん獻皇后けんくわうこう、武淑妃ぶしやくひなど聞え給ひし后きさき、世に雙ならびなく御志深くおはしましき。それはかなくならせ給ひて後は、數多あまたの中に御心に叶かなひたる人おはせざりけり。これより高力士かうりきしに仰せられて、都の外まで尋ね求めさせ給ふに、楊家やうかの女むすめを得給ひてけり。その容貌かたち、秋の月

に申したりけるに、今一入の僧さまさりて、足手を斬りつよ、その軀には漆を塗りて、世に汚はしく穢き溝に浸して置かれたる有様の、其物とも見えす哀に悲しけなり。その後こはき物怪になりて、程なく呂后を取り殺し奉りけり。これよりさきに商山の四皓は、帝の御有様を心易く見なし奉りて後、暇を申し、もとの住處に還りぬるを、世の人たとひをとりにて譽めていはく、「世の中早にあひ、草木も枯れ土さへ裂けて、人の命も絶えぬべきに、一度雨降りつよ、四方の梢をうるほし、門田の稻葉も露繁く結び居たる後、八重の雨雲山に歸り入るなるべし」となむ云ひけるこそ實にさもと覺ゆれ。又周の文王と申せし帝の御時、太公望と聞ゆる賢人、帝に召し出されて後、官位身に餘れるに、喜びて歸るおもひなかりけり。堯と申す帝、許由に位を譲らむとて、三度まで召しけるを、穢き事を聞きつといひて、潁水といふ川に耳を洗ひけるも、いかなる事にかとをかしき様に聞ゆ。又巢父といふ人、牛を追ひてこの川を渡らむとするに、穢き事聞きて、耳洗ひたる流にしも汚すべきかはとて、遙によけて通りけむも、をこがましくこそおぼゆれ。

許由一高士
傳に出でた
り
巢父一これ
も高士傳

いやましく
一憎く

やましく心憂き事にぞ思しける。かゝる程に帝はかなくなり給ひにければ、東宮位に即きて、萬御心に任せたりけれども、呂后年比の御憤にや、いつしか戚夫人を捕へて、髪を剃り容貌をやつして、あさましく心憂きさまになし給ひつるを、帝「かゝらで侍りなむ。この事定めて先帝の御心に背くらむ」など、様々に諫め奉り給へども、いかにも叫はざりければ、心苦しう思しつゝ過し給ふに、此趙の隱王さへ失はむとし給ひければ、帝夜も晝も、御傍に放たず起き臥し給ひけり。后隙なき事を安からずおほして、毒入れたる酒を、この人にすゝめ給ひけり。帝心得て、「まづ我に」と宣ひければ、あわてよ取りかへしつ。かやうに人知れず懇にし給ひけれど、いかなる隙かありけむ、類なく力強き女房二三人ばかりを遣して、帝の御側に臥し給へりけるを、情なく攪み殺してけり。上あさましくは思しながら、いふかひなくて止みにけり。さてこの戚夫人、月限なかりける夜、心憂く悲しきにつけても、昔の有様や思ひ出でられけむ、そのよしの詩を何となく口ずさび給ひけり。耳辨ありける者のこれを聞き咎めて、「かゝる事なむ侍る」と呂后

思さるゝ一
東宮が

この事一患
帝を廢せん
企

思さるゝ事限なし。かくて年立ちかへる春のあした、東宮内裏に参り給へる御供に、この人ども四人、いと揚々しくふるまひ、氣高き様にて御供に侍りけるを、帝より始めて、仕うまつる人どもも各怪しげに思へり。帝「これは誰にか」と尋ね問はせ給ふに、御供に候ひける人申して曰く、「日比めしつる商山の四皓に侍り」と申しけるに、御心も臆せられて、あさましくぞ思されける。これによりて、帝四皓に問ひて宜はく、「我昔より汝に國の政を任せむと思へり。然れどもあへて行はざりき。然るを今、年わかき稚き東宮に隨へる心知りがたし」四皓申していはく、「君は御心賢くて、世の中を平け國を治め給へども、人をあなづり賢きをまかろめ給ふ。過おはします。東宮は若くおはすれども、御心おきて情ふかく、禮義を正しくし給ふと聞え侍るによりて、参り仕うまつれり」と聞えさせてければ、東宮は我よりも心賢きやと思して、この事を思ひ留まらせ給ひにけり。かゝれば、呂后、陳平、張良より始めて、世にある人々、さながら心安くなりにけり。此趙の隱王の母に、戚夫と聞ゆる人は、帝を怨み妬み奉り給ひけるを、呂后い

こしらへ出して一巧みに釣り出して

恥づる心一高祖が

その御心なり一君等の心次第なり君も一高祖も

官になりて一四老人が

をやすむべき」と宣ひ合するを、實にとや思ひけむ、「叶はざるまでも計ひ侍るべし」と

答へて還りぬ。又この後二人の人も、世の中の亂れなむする事をも思ひ歎きて、おのお

の謀をめぐらしてけり。商山といふ山に世を遁れつゝ、帝の召すにも參らで、籠り居

たる賢人四人あり、それをこしらへ出して、この惠太子に付け奉りたらば、さりとも恥

づる心おはしなむものを、と思ひよりて、此山の中に尋ね行きにけり。四人の人うち見

つゝ驚きていはく、「何事により、いとかく怪しけなる住處には渡り給へるにか」と聞え

さするに、「世の中亂れむと仕うまつれば、我等が身までも歎き深くて、この山に隠れ居

むと思ふ心侍り。しかれども世の中の亡び治らざらむ事は、只その御心なり」といへる

に、この人うち笑ひて、「君も我に恥ぢ給はむ事、いとありがたかるべけれど、空しうか

へし奉らむも、無下に情なきやうなれば、後の事を顧みず、今日ばかりは御送に參るべ

し」といへりければ、限なく嬉しく覺えて、四人の人を具しつゝ、東宮の御許へ參りぬ

忽に學士といふ官になりて、ふるまひ給ふべき有様など、細に教へ奉るに、たのもしく

めぐる雲一
 廻雪は洛川
 の神女の舞
 様を形容す
 る詞

その御床の
 以下四王
 母の詞

あがひて一
 償ひて

(十七)史記
 卷五十五留
 侯世家
 東宮一惠太
 子

え給ひけるより、御心もいたくあくがれぬ。夜やうく明け方になる程に、「其御床の下に隠れ居て待ちける東方朔は、仙宮の人なり。然れども、この三千年に一度なる桃を、三度まで盗める罪によりて、暫時人間に下されけり。咎をあがひて後は、又天上に還り来るべきなり」と宣ひて、紫の雲立ち返りゆきしより、御心そらにあくがれにけり。

紫の雲のゆかりをいかなればたちおくるべき心地せざらむ

この後は、いとど御心も空にあくがれて、いよく仙を願ひ給ひけり。唐國の習にて、かしこき帝には、仙人なども皆使はれ奉るにこそ。はかなくならせ給ひて後も、御身は留まらせ給はざりけるとかや。

(第十七)昔、漢の高祖と申す帝おはしけり。呂后と聞え給ふ后、東宮の母にて、誰よりも御志重く見えさせ給ひけり。外腹の親王に、趙の隠王と申す人を、御志のあまりにや、帝も東宮に立てむと思しける御氣色を、呂后見給ひて、あさましく心憂き事に思して、陳平張良と聞ゆる二人の臣下を寄せて、「かよるいみじき事なむある、いかにしてかこの怨

堪へずげに
—たまらぬ
様に
かひなく—
愚なる我に
も不死の薬
を求むるは
聖帝に似合
しからず思
はる

どかなるに、紫の雲一むらたなびけり。其中より、この世ならず目もあやなる人、百人計おりくだれり。その中にあるじと覺しき人、帝に逢ひ奉りて様々の事共を聞えさす。久しくなる程に、この人桃七つを取り出して、その三つをば帝に奉りけり。これを御口に觸れ給ひけるより、御身も軽く、御心地も涼しくならせ給ひて、空にも飛び昇りぬべく、生死の罪障も解けぬべくや思はせ給ひけむ、「この桃我園に移し植ゑて、種をも取りてしがな」と宣ひけるに、西王母うち笑ひて、「天上の木實の、人間に留まり難くや」となむ言ふにも堪へずけに思せり。又「不死の薬や侍るべき」と尋ねさせ給ふにも、「生老病死の下界に生れ給ひながら、いかでか不死の薬を求めさせ給ふべき。はかなき御心なり」と聞えさす。西王母のみにもあらず、かひなく愚なる心にも、昔の賢き聖の帝の御心とは覺えず。かくて暫ばかりあるに、上元夫人に雲環の瑟うたせて、舉妃瓊と聞ゆる仙人舞ひけり。玉の簪を動かし、錦の袖を翻す有様、めぐる雪にことならず。帝これを見給ふに、思ほえず御袖濡れにけり。すべてこの世の樂の聲は、物の數ならず覺

人間に―此
世に

たのめし―
あてにせし

事を願ひ給ひて、まほろしといふ仙人に仰せて、蓬萊不死の藥をとりて遣しつゝ、はかなき御遊戯にも、この世にながらへておはさむ事をぞ營み給ひける。大凡人の好み願ふ事は、必ず空しからねば、この御時に當りて、東方朔といふ人、仙宮より罪を犯して、暫く人間に下されたりけるを、帝まぢかく召し使ひて、萬覺來なく思せりける事をば、まづ此人にぞ問はせ給ひける。かゝるほどに、宮の内に色黄なる雀の、例の鳥にも似ず怪しきさましたる、飛び遊びけるを、帝、「日ごろかゝる鳥見えず。いかなる事にか」と問ひ給ふに、東方朔がいはいく、「君長生不死の道を好み給ふによりて、御志にめでて、西王母と申す仙女参りて遊び奉らむと、告げ知らする由の使なり」と聞えさするに、帝嬉しく思して、「いかなる有様にて、その人を待つべきぞ」と宣はするに、「宮の中しづかにて、庭の面をきよめ香をたき、様々の床を設け給ふべし」と申しけり。かくてたのめし程にもなりぬれば、帝御心すみて、床のもとに東方朔を隠し置きて、人知れず今や今やと待たせ給ふに、秋八月ばかりの月の光くまなき夜、香しき風うち吹きて、晴の空の

がらあはれ
とぞ見る

まもりー見
つめ

繪にかける
—新樂府李
夫人に「丹
青間出竟何
通。不言不
笑愁殺人」

(十六)西王
母漢武内傳

ほさる。たとひ夜半の烟と立ち昇るとも、いかでそのゆかりを懐しと思はざらむ。只この世にて、今一度あひ見るべきことを、強ひて宣はすれども、遂に聞かではかなくなりければ、帝御心に恨ふかし。甘泉殿のうちに、昔の姿をうつして、朝夕にまもり給ひけれど、物云ひ笑む事なければ、徒に御心のみ疲れにけり。

繪に書ける姿ばかりの悲しきは問へどこたへぬ歎きなりけり

又亡人の魂を反す香をたきて、終夜待たせ給ふに、九重の錦の帳の内かすかにて、夜の燈火の影ほのかなるに、やうやく小夜更け行く程、嵐すさまじく夜静なるに、反魂香の驗あるにや、と覺え給ひけれど、李夫人の容貌あるにもあらず、なきにもあらず、夢の如くまがひて、束の間に消え失せぬ。待つこと久しけれど、還る事は烏玉の髮筋切る程ばかりなり。燈火をそむけ帳を隔てて、もの云ひ答ふる事なければ、なか／＼御心をくだくつまとぞなりにける。

〔第十六〕昔、同じ帝、誰もとは申しながら、限なく此世を惜み給ひけり。命ながらへむ

けり。様々咲き亂れたる白菊の、夕の露に濡れたるを見るにも、昔の重陽の宴といひし事思ひ出でられて、落つる涙いと抑へがたかりけり。

見るたびに涙露けきしら菊の花もむかしや戀しかるらむ

この人、山宮に閉ぢこめられて後、三代の帝にぞ逢ひ奉りける。

〔第十五〕昔、漢の武帝、李夫人はかなくなり給ひて後、思ひ歎かせ給ふ事、年月を經れども更におこたり給はず。そのかみ病せし時、行幸し給ひしかども、いかにも見え奉らざりけり。帝あやしと思して、この由を問はせ給ふに、「我君に慣れ仕うまつりし程、露塵御氣色に違ひ奉らざりき。又御志淺からねば、恨を述ぶる事もなし。しかれども、病に沈み容貌變りて後、御心に背く罪あるべけれども、又思ふ所なきにあらず。紫の草かりまで一旗まで古今集「紫のひともとゆゑに武藏野の草はみな

のゆかりまで恵み給ひ、哀憐を蒙る事は、只君の御志の改まらざる程なり。しかるを今のかたち昔の御心變りなば、はかなきあとにも、愁の涙色まさらむ事を思ふに、衰へたる姿、いと見え奉らま憂し」と聞えさす。帝これを聞かせ給ふに、悲しくわりなくお

(十四)白氏
文集新樂府
陵園妾

なき事―無
實の罪
明くるめも
なき―續詞
花集陵園妾
の心をよめ
る、登蓮法
師「松の戸
をさして歸
りし夕より
あくるめも
なく物をこ
そ思へ」

昔の人は、思ひそめつる事は淺からぬにや。

〔第十四〕昔、陵園りょうえんといふ宮みやの内に、閉籠せいろめられたる人ありけり。玉の肌はだ、花の容貌かたちあざやかにて、世に雙ならびなく美しかりけり。年若かりける時、女御にようごにいつきかしづかれて、内裏うちに参りけるに、親したしき疎うごき、楊貴妃やうきひ、李夫人りふじんの例たのしにも勝りなむと思へりけるを、數多あまたの御方々かた々、めざましき事になむ思しける。その御いきどほりにや、様々さまざまのなき事によりて、陵園りょうえんといふ深き山宮やまみやに閉籠せいろめられて、明くるめもなき物思ひにやつれつよ、眉目容まゆめ貌かたちもありしにもあらずなりにけり。父母ちちはは、生きながら別れぬる事を歎なげき悲しめども、あひ見る事なかりけり。尋常よつねは深き宮みやの内に心すごく、風かぜの音ねのねにつけても思ひ残のこす事なし。かくしつよやうく春にもなり行けば、四方よもの山邊やまべに霞かすみたなびき、野邊のべの早はや蕨ちぢめの雨あめに萌もえ出でて、心地よけなるも、我身の爲ためには羨うらやましく覺えて、花のほひ薫かかり渡るにも、獨寢ひとりねの床の上心ときめきせられつよ、哀あはれを添そへたる臘月おほろづき夜よのみさし入れども問ふに音ねなき影かげばかりほのかにて明あかし暮くすに、春過はるぎ夏なつたけて、暮くれにし秋あきも廻まわり來きに

亡影—亡夫
の

を聞くにつけても、亡き影をのみ心にかけて、時の間も忘るゝ隙なくて、終に命を失ひてけり。その骸は石になりてけり。

ことわりや契りしことのかたければつひには石となりにけるかな

この石をば、その里の人々望夫石とぞいひける。一筋に思ひ取りけむ心のありがたさも、この世の人には似ざりけり。

(十三)博物
志

娥皇女英—
堯の二女
紅紫などの
やうに—優
劣なきこと
の喩

〔第十三〕昔、舜と申す帝おはしましけり。御政より始めて、萬めでたき御代の例には、まづこの御事をのみこそ申すめれ。娥皇女英と聞え給ふ二人の后侍ひ給ひけり。御心ざし、いづれまさり給へりと差別見えす。只紅紫などのやうに、淺からぬ御事にてなむ侍りける。かくて多くの年月をなむ保たせ給ひけれど、この世は限ある所なれば、帝湘浦といふ所にて、はかなくならせ給ひぬ。その後二人の后、紅の涙を流し給ひて、ふるきを思せりければ、籬の吳竹も、御涙にそまりて斑になりにけり。

君こふる涙の色いみのふかきには竹もまだらにそむとこそ聞け

の
心や一夫婦

すまして、全く世の事にほだされず。又簫史といふ樂人あり。秋の月清くすさましき曙に、簫を吹く聲哀に悲しき事限なし。弄玉それにや心を移しけむ、進みて逢ひたまひにけり。世の人、あさましき事に思ひ誇りたれど、いかにも苦しと覺えず、只諸共に臺の上にて簫を吹き、月をのみ眺め給ふ事二心なし。鳳凰といふ鳥、飛び來てなむこれを聞きける。月やうやく西に傾きて、山際近くなるほどに、心やいさぎよかりけむ、此鳥、簫史、弄玉、二人の人を具して飛び去りぬ。

たぐひなく月にこころをすましつつ雲るにいりし人もありけり

むなしき空に立ち昇るばかり、心のすみけむも例少くこそ。又簫の聲にめでて、人のあざけりを忘れ給ひけむも、好ける御心のほど推し量られていとみじ。

〔第十二〕昔、男女あひ住みけり。年などもさかりにて、萬行末の事まで淺からず契りつつありけるに、この男思の外にはかなくなりけり。その後派に沈みて、あるにもあらず覺えけるを、我も我もと懇に挑みいふ人ありけれど、いかにも許さざりけり。これ

録
(十二)幽明

下もえー内
内の苦悶

もなき有様なれど、この鏡の片々を市に出しつゝ、昔の契をのみ心にかけて、尋常は下もえにてのみ過しけるに、鏡のわれもたる人をし尋ねあひて、男女の有様、互に覺束なからず知りかはしつ。女これを聞きけるより、覺えず惱しき心地うち添ひて、現心ならぬ氣色を見咎めて、親王怪しみ問ひ給ふを、さすがにおほえて、暫はいひまぎらはしけれど、強ひて宜はすれば、佗しながらありのまゝに聞えさせつ。親王これを聞き給ふに、御袖もしほりあへず、哀にいみじく思されけるにや、装束嚴しきさまにて出し立て、昔の男の許へ送り遣したるに、徳言かぎりなく嬉しきにつけても、まづ涙ぞさきだちける。

ちぎりおきし心に隈やなかりけむたたびすめる中川の水

賤しからぬ有様を振り捨てて、昔の契を忘れざりけむ人よりも、親王の御なさは、猶頼なくこそおほゆれ。

(十一)列仙
傳

(第十一)昔、秦の穆公の女に、弄玉と申す人ありけり。秋の月のさやけく隈なきに、心を

の中みだ亂れて、ありとある人たか尊きも卑いやしきも、さながら山林やまばやしに隠かくれ惑まどひぬ。去がたり難おき親おや兄あに弟からも四方よもに立たち別わかれて、おのがさまもろも逃にげ彷徨さまよへる中なかに、この人わか別かれを惜たれむ心たれ誰たれにも優すぐれたりければ、人もろ知れず諸もろ共ともにあひ契ちぎりけり。「我わも人いつも何かたとなく失うせなむ後、おのづから世よの中ちゆう静じゆうまりて、又またもあひ見る事ことありなむものを、その程ほどの有あり様さまをば、いかでか互たがひに知しるべき」と聞きえさするに、女おんなの年とし比ひ持もちたりける鏡かがみを中なかより切きりて、おのくその片かた々々を取りて、「月の十五日いぢごとに市いちに出いし、この鏡なの半なかを尋たづねさするものならば、必ずあひ見て、互あひにその有あり様さまを知しるべし」と云いひつよ、いといたう打うち泣なきて別わかれ去いりぬ。その後そのちゆうこの男おとこ戀こひしさわりなくおほえて、徒いたづらに月つき日ひを過すすまよには、いかなる人ひとに心こころをうつして、契ちぎりし事ことを忘わすれぬらむ、と胸むねの苦くるしさ抑おさへ難がたくぞおほえける。

まそかがみわれて契ちぎりしそのかみの影かげはいづちかうつりはてにし

かやうに思おもひ遣やりけるにしも、色いろ姿すがたのなまめかしく花はなやかなるにやめで給たまひけむ、時ときの親おん王わうにておはしける人ひとに、限かぎなく思おもひかしづかれて年とし月げつを經かるに、ありしには似にるべく

われて一強
ちに

のはかなはざりけり」
 榻に臥し「
 『曉の榻の
 はしがきし
 もよかき君
 が來ぬ夜は
 我ぞかすか
 く』
 物やおもふ
 と一拾遺集
 平兼盛「忍
 ぶれど色に
 出でにけり
 我戀は物や
 おもふと人
 の間ふま
 でし

(十) 本事詩
 四京雜記

に、いかなる隙ひまかありけむ、夢ゆめに夢見る心地して、下紐したじゆま解けさせ給ひにけり、血ちの涙袖なみだそでに包むべき心地もせざりけれど、唐國からくにの習慣ならひにて、かやうの事世ことよに聞えぬれば、いみじき大臣公卿だいじんくやうなれども、立所たちどころに命いのちを召さるゝ事なれば、又も逢ひ見給はず、后あまも哀あはれに類たぐひなく思おぼされながら、雲くもの梯かはしとだえがちにて、踏ふみ傳つたふばかりの道みちだになれば、この男おとこ織女たははにの、年に一夜の契ちがひをさへ羨うらやみて、人知れぬ涙なみだのみぞ絶たゆる時なかりける。かよれども、あわただしく色に出す事やなかりけむ、物や思ふと問ふ人だになくて、年月を送るに、わりなくいみじく覺おぼゆるよしの文を作りて、后きさきに奉りける。

戀こひひわたる底の水屑みづくづとなりぬれば逢瀬あひまくやしきものにぞありける

この文は、遊仙窟いうせんくつと申して我國にも傳つたはれり、后きさきこれを見給みたまふ度たうに、御身みみ亡なびぬべく思おぼされけり、唐の高家の后きさきの則すく天皇皇后てんかうきさきの御事なり。

(第十) 昔、徳言とくげんといふ人、陳氏ちんしと聞ゆる人に相具あひぐして侍りけり、容貌かたちいとをかしけにて、心ばへなど思ふさまなりければ、互あひに淺あかからず思ひかはして年月としづきを經たるに、思おもの外ほかに世

れるは共に
見し故なり
しか
ありしばかりの昔程
の
つまー種

(九)典據詳
ならず

張文成ー唐
の才人遊仙
窟の著者
后ー則天武
后

芹を摘みー
「芹摘し昔
の人も我こ
とや心にも

しつゝ月日を過ぎ行けば、燕子樓の中荒れはてよ、床のうへ傍淋しく覺えけるまよには、手づから自ら裁ち著せたりける唐衣を、取り重ねつゝ身に觸るれど、ありしばかりの匂だになかりければ、いとど涙を添ふるつまとなりけり。

見るたびにうらみぞ深き唐ころもたちし月日を隔つとおもへば
かくしつゝ十二年の春秋を送りて、終にはかなくなりけり。

〔第九〕昔、張文成といふ人ありけり。姿有様なまめかしく清けにて、色を好み情身に餘りければ、世にありとある女、さながら心強くは覺えざりけり。そのころ時に逢ひ、花めかせ給ふ后おはしましけり。數多の御中に、萬勝れてなむ聞えさせ給ひければ、この男、人やりならず物思に沈みて、生けるかひなくぞおほえける。かゝる儘には、寢ても覺めてもこの事の忍び難きを、又云ひ合する人だになかりけれど、芹を摘み、榻に臥して年比になりぬれば、さるべきことにや、淺からぬ心の中をそらに知らせ給ひにける。哀にいみじくは思されながら、心に任せぬ御身の振舞なれば、慰む方更になくて明し暮す

めならぶ一
見くらべら
るゝ

ゆかしから
ずば云々一

宋玉も見た
くばありし
ならんが

(八)白氏文
集卷十五燕
手樓

立ちおくれ
たる一生殘
りたる

もろとしに
一昔の月光
の今のに勝

戀こひわびて三年みになりぬ花がたみめならぶ人のまたもなければ

ゆかしからずはなかりけめど、あまり心の優やさにて、人に物を思はせむと思へりけるにや、又さもやなかりけむ。心のうち知りがたし。

〔第八〕昔、町々べんくといふ人、張尙書ちやうしやうしよに契を結びて、幾年いく経れども、露塵互つちちりに心に違ふ事なかりけり。花の春の朝あした、月の秋の夕ゆふべ、諸共もろに舞を見歌を聞きて、遊び戯たはるゝより外のいとなみなし。かよれども、若き老いたる定なき世の恨めしさは、思の外そとにこの男おとこはかなくなりなにけり。その後この女、たち後れたる事を悲しと思ひて、別の涙なみだ乾く事なし。みめかたち心ばせなども、いとめづらかなる程に、世に聞えたりければ、帝より始めて色を好む人々、戀ねんころに挑いさみ云ひけるを、限かぎりなく憂うれしと思ひけり。秋の夜の月限くまなく照らすを見ても、まづ昔のかけのみ思ひ出でられて、

もろともに見しに光やまさりけむいまはこひしき秋の夜の月

命いのちは限かぎりありといひながら、かくても生いける身のつねなさよ、などぞ思ひ亂れける。かく

人傳ならざらん事一人傳ならで言ふよしもがな
の意
身をばかなきに一身を亡ぼすとも女を奪はれじ
この人孫秀
手に隨ひて捕へられ
牽かれて
(七)文選登徒子好色賦
目をだに宋玉が

む事を懇ねんこうに思へりければ、堪へかねて色に出でぬ。石季倫せききりん、身をはかなきになすとも心弱よわからじと思へるを、この人まけじ心のいちはやさに、兵つはものを集め勢いきほひを極めて志をやぶる。この時綠珠ろくじゆは、遙に高き樓ろうの上に居たりけり。石季倫かの人の手に隨ひて、行々目を見合せて、「誰ゆゑにかくはなりぬる」といひけるに、堪へ忍ぶべき心地せざりければ、樓ろうの上より身を投けて死なむとするを、「身に優まさるものやはある」と諫いさむる人数多ありけれど、遂に聞かず。

おくれるて歎かむよりも時の間まに死なむ命いのちはをしからぬかな
いとかく思ひ取りけむ、心の有難ありがたさも云ひ盡くすべからず。

〔第七〕昔、宋玉そうぎよくと聞ゆる人、容貌姿世かたちすがたに類たぐひなく、さえ才學ならび變なかりけり。此人の住みける東隣ひがしきなりに、又世に類たぐひなく美しき女ありけり。この宋玉を、いかでと思ふ心の忍がたひ難がたさに、東の垣かきに夜晝よるひる立ち添そひて窺うかがひけれど、三年みよせまで目をだにみやらざりければ、戀こひ佗わびて、終に逢あふこと知らぬ涙に沈みはてけり。

心つきなき
—不快なる
露塵—少し
も

にあひ具したる事を、いと心づきなきことに思ひとりて、いかにも女の行方を知らざりけれど、露塵苦しと思はでなむ年月を過ぐしける。この男、蜀といふ國へ行きける道に、昇僊橋といふ橋ありけり。それを歩み渡るとて、橋柱に物を書きつけけり。我大車肥馬に乗らずば、又この橋を還り渡らじ、と誓ひて蜀の國にこもりにけり。その後思の如くめでたくなりて、この橋をなむ還り渡りたりける。女年比貧くてあひ具したるかひありて、親しき疎き世の中の人、めもあやに見羨みける。

沈みつつ我が書きつけし言の葉は雲るにのほる橋にぞありける

心長くて身をもてけたぬなむ、今も昔も猶いみじくこそ聞ゆれ。

もてけたの
—自暴自棄
せざる
(六)管書卷
三十三石崇
傳
石季倫—石
崇

〔第六〕昔、石季倫といふ人ありけり。萬の寶に飽きて、世の貧き事を知らざりけり。金谷の園の内に、五百の舞姫を集めて、悦び樂む事夜晝を別かず。この中に綠珠と聞ゆる舞姫なむ、數多の中にも勝れたりければ、身に優りて淺からず思へりけり。かくて月日を送るに、時の政事をとれる人孫秀、この綠珠が顔なき有様を聞く度に、人傳ならざら

鴻傳

梁鴻一篤行

の學者

あひ具して

一つれ添ひ

て

齊眉の禮一

膳を捧ぐる

高さの眉と

齊しき意

(五)史記卷

百十七本傳

題柱の故事

は華陽國志

これのみ

一相如の琴

をのみ

わび人一貧

人

ろくて、これを見る人、心を惑はして騒ぐ程なりけれど、この男を又なきものに思ひて、かしづき敬ふ事思ふにも過ぎたりけり。朝な夕なに飯匙とりて、笥子の器物に盛りつよ、眉の上に捧けて懇にすよめければ、齊眉の禮とぞ今は言ひ傳へたる。

さもあらばあれ玉の姿も何ならず二心なきいもがためには

志だに浅からずば、玉のすがた花のかたちならずとも、誠に口惜しからじかし。されども醜からぬ顔には見え難くこそ。

〔第五〕昔、相如といふ人ありけり。世に類なき程に貧くわりなかりけれど、萬の事を知

り、ざえ才學ならびなうして、琴をぞめでたく弾きける。卓王孫といふ人の許に行きて、

月の明き夜、終夜琴をしらべてるたるに、この家主人のむすめに卓文君といふ人、哀に

いみじく覺えて、常はこれのみ賞で興じけるを、この卓文君が父は、相如に近く事を

厭ひ惡みけれど、琴の音にや哀と思ひしみにけむ、この男にあひにけり。女がたの父卓

王孫は、萬の寶に飽き充ちて、世の佗しき事を知らざりけり。かよれども、このわび人

をなむ留めざりける。

(三)左傳昭

公二十八年

の條

取りかへす
ばかりに—
本にもどし
たき程に
むすぼられ
て—ふさぎ
て

(第三)昔、賈氏かひしといふ人、類たぐひなく容貌かたちわろくて、顔うつくしき妻かみをなむ持ちたりける。此女、かばかり醜みにくき人とも知らずあひそめにければ、悔くやしき事とり返すばかりに覺おぼえけれど、いふかひなくて明あかし暮くすに、善よき事悪あしき事、すべて物も言はずえも笑はで、尋よ常つねはむすほよれてのみ過ぐしけるを、男類たぐひなく憂うれしとおもひて、此女に物を云はせ、うち笑あませて見ばやとしけれども、いかにもかひなくて三年にもなりにけり。春の野に出でて、諸もろ共に遊び侍りけり。雉子けりすといふ鳥の、澤さわの邊はらに立ちる侍りけるを、この男弓矢ゆみこを取りて名を得たりければ、この雉子けりすを立所たちどころに射殺いころしてけり。これを見るに、年比としごらの憎にくさも忘れて、物言ひ打ち笑あみたりければ、男嬉うれしさ類たぐひなくおほえて、聞かましやいもが三年の言の葉を野澤のさわのきとす獲とざらましかば

これを聞くにこそ、萬よろづの事よくせまほしけれ。

(四)後漢書
卷八十三梁

(第四)昔、梁鴻りやうこうといふ人、孟光もうこうにあひ具あして年比としごら住みけり。此孟光、世に類たぐひなくみめわ

取り重ねたる一層の愁を増したる

ありへしこととを一事に琴をかけた琵琶を琵琶のことといへり

商人情なければ、別を惜む事いとあさし。われを懇にせねば、出でていぬる後、立ち歸るほど久し。かへる程おそければ、おのづから待たずしもあらず。かよるまよには、只空しき船を守りつよ、秋の月のすさまじきをのみ見る」といへり。白樂天、「我琵琶の聲を聞きて愁ふかし。又この語らひを聞くに、とり重ねたる心地す。我も君も愁の心おなじからずや、必ずその愁の盡きせぬことを思ひ知るべし。我いにし年の秋より、官を遁れ都をはなれて此所に沈めり。又病の瘥に臥して、立ちゐる事容易からず。いと物心細き折に、浪風より外に立ち交る人もなき住處には、蘆の上葉をわたる嵐、遠近人の舟よばふ音のみ聞えて、いまだ樂の聲を聞かず。今宵の君が琵琶のしらべを聞くに、ほとほと天の樂を聞かむが如し」これを聞く人みな涙を流せり。その中にも、白樂天一人袂くちぬと見えけり。

いにしへにありへしことを盡くさずば袖に涙のかからましやは

この人は、世の中の人の心の皆濁れるを憂しとや思ひけむ、一人すまして、常は都に跡

好きたる一
風流なる

〔二〕白氏文
集卷十二琵琶
行引

白樂天一唐
の詩人白居易
易號香山

我身一つは
一羅波江

の蘆間にや
どる月見れ
ば我身ひと
つはしづま

ざりけり
調花集顯輔
人も渚一渚
無き

てなむ侍りける。

〔第二〕昔、元和十五年の秋、白樂天罪なくして、江州といふ所に流されぬ。其次の年の秋、入江の邊に夜友を送りけり。松風波の音を聞くに、愁の涙いと抑へがたし。かくて小夜更け行くほどに、空すみわたり、月影波に隨へるを見るにつけても、我が身一つは沈まざりけり、と思ひ亂れつゝ、人も渚を心ほそくて歩み行くに、浪の上遙に琵琶の調さまざまに聞えて、搔き合せなどの有様、世に類なきほどなり。これを聞くに、怪しき心おさへがたし。聳人武夫より外に、誰かは又情あるべき、とおほえければ、聲をしるべにて、「誰の人にか」と尋ね問ふに、「我はこれ商人の妻なり。昔齡十三にて、琵琶を習ひ得たること世に勝れたりき。帝の御前にて一度調べしに、百の御引出物を賜はりき。また眉目容貌ありがたく珍しき程なりしかば、見る人聞く人、さながら思ひを懸け心を盡せりき。しかれども春過ぎ秋暮れて、みめかたちありしにもあらず衰へにしかば、世に經る力失せはてよ、せむ方なくなりにしより、商人に契を結びて、この國の民となれりき。

唐物語

(一) 本條の出處は晉書卷八十の本傳

王子猷—王

義之の子

高瀨船—川

船の一種

諸共に—
「本興に乗

じて來る興

盡きて反る

何ぞ必ずし

も安道を見
んや」

〔第一〕昔、王子猷、山陰といふ所に住みけり。世の中の渡らひに羈されずして、只春の花秋の月にのみ心をすましつよ、多くの年月を送りけり。事に觸れて情深き人なりければ、かき曇り降る雪はじめて晴れ、月の光清くすさまじき夜、一人起きるて慰め難くや覺えけむ、高瀨船に棹さしつよ、心に任せて戴安道を尋ね行くに、道のほど遙にて、夜も明け月も傾きぬるを、本意ならずや思ひけむ、かくともいはで、門のもとより立ち歸りけるを、いかにと問ふ人ありければ、

もろともに月見むところ思ひつれかならず人に逢はむものかは

と、ばかりいひて、遂に歸りぬ。心の好きたるほどは、これにて思ひ知るべし。戴安道は、剡縣といふ所に住みけり。この人の年比の友なり。同じ様に心をすましたる人に

む人々は、かまへて人よかりぬべきなりとぞ。

住吉物語終

かれ／＼に
疎遠に

おとな女
女中頭

はや按察使の大納言殿の宮腹の御女とて、さも有難きなからひととて、人々もいひあひけるとかや。この事を聞きて、兵衛佐、中の君ともかれ／＼になりにけり。さるまゝに中の君も、親ながら疎しとぞ思ひける。されば人の遠かるもことわりなりとて、二人ながら音をのみぞ泣き給ひける。姫君この由を聞き給ひて、むつまじかりし人なればとて、迎へ奉りて、過ぎにし方の世のふしぎなる事ども語らひ、明し暮し給ひける。大將もよき事とて、大事のことにぞ思ひ給ひける。年月ゆくほどに、大將殿にはちと關白ゆづり給ひぬ。いよく末の世たのもしくぞ侍りける。若君は元服せさせ給ひて、三位中將とぞ申しける。姫宮は十八にて女御にまゐり給ひける。侍従はおとな女にて、よろづに大事の人にぞ思はれて内侍になりぬ。見聞く人羨みあへり。大將姫君するまで繁昌して、めでたくぞ御坐しける。さて繼母、見聞く人々にうとまれ、朝夕はねをのみ泣きたまひて、世の中おとろへて、遂にはかなくなり給ふ。むくつけ女は、あさましき有様にて、まどひありきけるとかや。昔も今も、人にはらぐろなる人はかよる事なり。これを見聞か

うとましく
— 繼母を

まじろひ—

交際

感ひありき

けむもの—

姫君

首を召すと

も—わが首

をとるとい

はれても

いなみとも

— 誤あるべ

まめやかに

— 眞實に

ばやとて、親ながらも疎しくぞ思されける。大納言よろづくだきたてよ、身にそふべきものよ具ばかり具して、「心うき世にはまじろひも物うし」とて、姫君の母宮の三條堀河なる所へぞわたり給ひける。大將この由を聞き給ひて、いかに候ふまじき事なり。たゞ本のやうにて御坐しますべき由宣へば、大納言殿申されけるは、あさましく感ひありきけむものを、とりおき給ひて見せ給へば、此世ならず首をめすとも、いなみとも思ふべきにあらず、これは如何に宜ふとも、かなふまじきよし申し給ふ。姫君もまめやかに止め申し給へども、聞き入れ給はで渡り給ひければ、三條へさまぐののども奉り給ひて、人々もまゐりあへり。「さても一人おはすべきにあらず。いたはしき」とて大將のをばに對の御かたと申す人にぞすませ給ひける。

その昔對に住みける人々、さながら大將の許にまゐりて、よろづ過ぎにしかたの事どもかたり出でて、泣きみ笑ひみ明しくらしける。その中にも心よせの式部は、又なきものにぞ思しける。關白殿よりはじめて、よろづの人々田舎の人のむすめと知り給へる程に、





り。大將たいしやう、姫君ひめぎみ、侍従じじゆう、おのくははじめより終おはりまでの事ども、かきくどきつと語り給ひ

て、愚おろかならぬよし宣のたまひける時に、世のありさま、昔も今もかゝる例たみしありがたくぞ覺おぼえける。

さて日暮れぬれば、大納言だいなごんかへり給ひて、繼母けいぼに宣のたまふやう、「いでや對の君に尋ね逢ひて

侍りつる。誠にあやしの法師ほうしに具して、東山ひんがしやまにおはしけるとて、たゞ憂きはながらふべ

とて一誤な
るべし

くもなしとて、繼母まごはは「あな嬉しやな。如何いか様やうにておはしつるぞ。こまかに宣のたまへ。おほつ

うとましき

かなきに」といへば、「いかなる人のうとましき事をたばかりにけるにか、思おもひ餘あまりて住

一厭ふべき

吉まで迷ひ行きたりけるを、大將殿、ものまゐりの序ついでにもとめ逢ひて、年比としごひ具しておは

しましけれども、世の中のむくつけさに憚はやりて、かくとも宣のたまはざりけるぞや。あやしの

法師ほうしに具してありしにや、よくく聞き給へ」とありければ、「さてく」とて口うちあ

きて、目しばたよきて、顔かほ赤くなして、言いひ遣やるかたもなくてそどろき居たり。

そどろき一
おちつか
す

中の君、たひらかにて御坐おほしましけることの嬉うれしさよとて喜よろこび、あはれく疾く見奉ら

人目し知ら
ず一人目も
かまはず

とてもかく
てもとど
うでもし
と

なるしの
叶ふしの

しくおはせば参りつるなり。ゆるさせ給へ」とて、昨日たまはりたりし小袴の、我がう
 しなひて候ひしもの、をさなくて著せ初しうちぎにて侍るを、老のひがめにや侍らむ、我
 心にかゝるまよに、人目も知らず走り参りつるなり」と申されければ、このよし姫君聞
 きたまひて、いまくと待ち居給ひければ、大將宜はぬさきに、姫君侍従急ぎくいで、
 涙にくれて物をだにいひ給はねば、大納言これを見て、心も消えかへるほどなり、
 いかにくくとあきれ居給へり。やゝ久しくありて、心しづまりて、大納言姫君をばそむ
 きて、侍従に向ひてくどき給ふやう、「姫君こそ、あやしの親とて、とてもかくでもと思
 して昔つれ給はざらめ。そこをば如何ばかりかは思ひ聞えし。今まで命つれなくてめぐ
 りあひ侍ればこそ、今日は見参に入れ。思ひ消えなましかば、後の世までも、おちひに
 て黄泉路のさはりともなりなましか。わがなれるさま、石木ならずば見給へかし。あ
 なのよしの人の心や、たゞ命のみこそ嬌しけれ。あかし暮しがたくて積りし月日、いく
 ら程までなりぬとか思ひ給ふ。あはれく、人の思ひはなるもの」とて、うち泣き給へ

美しかりつる若君姫君かな。あはれあれを我が孫どもと思はど、いかに嬉しからむ。田舎人のむすめなれども、幸ある人かな。さてもその姫君の、我が喪ひて思ひなけく姫君の稚かりしにさも似たまへるよ。あはれつねに見奉らばや」とのたまへば、繼母、「三の君のもとへおはせし人なれば、その縁とてむつび給ふこそ。あはれその子たちを、三の君の中にまうけ給ひたらば、此處彼處のためにやすかりなむものを。あたら人の」などいへば、むくつけ女、「關白殿は、ゆすばらの子なればとて、もてなし給はぬ」とぞいひける。大納言殿は、小袿のふりたりつるをあやしと思ひて、とりよせて見たまへば、對の君に著せはじめし時の袿に似たり。老のひがめやらむとて、打返しよく見給へば、たゞくそれにてありける。その時に胸さわぎて、如何にしてか持ち給へば、我にしも得させ給へるもあやし、とてたゞ雑色二人ばかり具して、大將のもとへおはして、寢殿のすのこに居たまへり。大將いそぎ出でたまひて、「これへ」とあれば、大納言申されけるは、「申しいづるにつけて、世に嗚呼がましくなめけに侍れども、萬になつか

ゆはむとて
—中納言が

思ひいでて
とて—誤な
るべし

なえらか—
くだ—と
したる也

あらぬさまに衰へて、髪は雪をいたゞき、額に四海の波をたよみ、眼は涙にあらはれて、
ひかりすくなく見え給へり。「あなあさましく」とふしまろび給ひけり。さて若君姫君
いだして、袴の腰のはむとて、うち見つよ、袖を顔におしあてうつぶし給へり。やよ久
しくありて、起きあがりて宜ふやう、「いはひの所にはまがくしとは、さればこそ申し
候ひしものを。姫君の御有様の、わが喪ひて思ひ歎く女の稚かりしに、たがはせたまふ
所なく、その昔さへ思ひ出でてとて、忍びかねつるになむ。ゆるさせ給へ」とてむせび
給へり。これを聞きて、姫君侍従、聲もたてぬべき心地ぞし給ひける。涙の色は、鞋の
袂に紅染の心地するまでぞなりにける。大將これを見たまひて、涙もせきあへず、見
と見きよと聞く人、心あるも心なきも涙流さぬはなかりけり。さて事ども果てぬれば、
人々に引出物さるべき様にし給ひける。その中に大納言殿には、小鞋のなえらかなるを
奉りたれば、あやしなから肩にかけて歸り給ひぬ。

大納言かへるまよに、繼母にむかひて「大將の我をむつまじき者に思してもてなし給ふ。

ことさら申
さむ一特に
御招待申上
ぐべし
まがくし
き一縁起の
わるき
あるべかし
く一行き届
きて
つかさのも
の一同し役
所の官人

斯しつと過ぎ行くほどに、光るほどの女君いでき給ひけり。思ひのまよなれば、おほし
かしづき給ふこと限なし。かやうに泣きみ笑ひみ明し暮すほどに、若君七つ、姫君五つ
までになり給ひけり。「八月袴著といふことせむ序に、大納言殿には知らせ奉らむ」と仰
せられける程に、大將殿も大納言殿もうちに参りあひて、またまづ物語のついでに、「八
月十六日に、稚きものどもに袴著仕らむと思ひ侍るに、ことさら申さむ」と宣へば、大
納言「かしこまりて承りぬ。さりながらも、左様の事にまがくしき身にて」など聞
ゆれば、「如何にも思ひはからひて申すなり。かならず」とのたまへば、「ともかくも仰に
こそ」とて、その日にもなりて、ゆかりある上達部殿上人など参りあへり。大納言も、
すこし日暮るとほどに参り給へり。萬にあるべかしくて、藏人つかさのものなど参りあ
ひて、いとことくしき様なり。時にもなりぬれば、大將、大納言の直衣の袖ひかへて、
内へひき入れ給ひぬ。母屋の御簾の前に、茵敷きてすゑきこえたり。姫君侍従近くより
て、几帳のほころびより覗けば、いかばかり悲しかりけむ、わかく盛におはせし姿の、

かうしつゝ過ぎ行く程に、中將は願はざるに中納言になり給ひて、やがて右大將になり給ひけり。中納言は大納言になりて、按察使かけたまへり。共にうちへ参りあひて、物語のついでに、「老いおとろへてこそ見えさせ給へ」とあれば、大納言まづうち泣きて、「誠にこれにて知らせ給へ。心になはぬものゝ命にて侍るかな。かくても生きて候ふ」とて人めもつゝみ給はざりけり。大將、この序にやいはまし、と思ひながら猶思ひかへして、そごろに涙ぞもれ出でける。さてかへり給ふまゝに、かくなど語り給へば、姫君も侍従も、「親ばかり子は思はぬものぞ、と常は仰せられし言の葉かな。かやうに多くの年月を過ぎしながら、かくとも聞え奉らで、思し歎かせ給ひつる、いかばかり神佛もにくしと思すらむ。あはれ女の身ばかり怨しきものは」とて世につらけに宜へば、大將「誠にことわりなり。幼きものも出できたれば、我も如何ばかりかは見せ奉らまほしけれど、この幼き人までも恐しさにこそ。さりながら知らせ侍るべき事も近くなりたり。暫待たせ給へ」などこしらへ給ひけり。

恐ろしさに
— 繼母の嫉
みの

いとなむう
げにて―甚
いやそうに
て

心あはせた
り―姫君と
かくしたる
人と
住吉に―中
將の詞

御氣色―懷
姫の

この姫君ばかりは覺えず。如何にしてもたひらかにてだにもあらば、嬉しき事にこそ。誰人のいひけるにか。尋ねあひて、生きたるをり今一度見て、死出の山路をもやすく越えむ。うれしく宣ひたり」と宣ひければ、いとなむうけにて、「誠や、たそ。思ひ忘れて」などいへば、むくつけ女、「あのもの候ふぞかし」などぞいひける。中納言心づきなしと思ひてなむ、「阿彌陀佛阿彌陀佛」とぞ申しける。

さて姫君は、「かくて侍るとだに中納言殿に申さばや。心あはせたりとて、神佛にも呪ひ給はむには、誰が爲もいと恐しき事なり。」「住吉におはせば、さてことぞやみなましか。これは遂に聞え給はむずれば、心やすくおほしめせ」と宣へば、姫君、「おほし歎くらむことの悲しくて、世に住むかひなくて」と宣へば、「誠にことわりながらも、只申さむ儘にておはしませ」とて二條京極なる所にわたり給ひけり。明し暮し給ふほどに、姫君過ぎにし年の十月より御氣色ありて、又の年の七月に、いと美しき若君いでき給へり。中將おほしかしづき給ふこと限なし。

住吉の——
本此歌の下
に——と打詠
めければ姫
君琴かき鳴
らしてかく
なむ。琴の
音を尋れて
通へ住吉の
岸の姫松わ
れも悲し
きしとあり
あやしきあ
りきむつか
りながら——
不埒なる旅
行を父の憤
りながらし
すみ——妻に
し

返り給ひければ、漸遠くなり行く程に、一むらの絶間より松の梢遙に見えければ、

すみよしの松の梢の如何ならむとほさかるまで袖のつゆけき

と思ひつゞけられける。かくしつゝ河尻を過ぐれば、遊者どもあまた船につきて、

心からうきたる船に乗りそめて一日もなみに濡れぬ日ぞなき

など唄ひて、淀までぞ著きにける。さても京へ上りつきて、殿にまゐり給へば、あやし

きありきむつかりながら、北の方をしつらひて住ませ給ひける。繼母これを聞きて、「中

將殿はあやしき田舎人の女をこそすみ給ひけれ、あたら人の」など、わくつけ女に言合

せてそねみ居たりける。

中納言月日の重るまよに、思のみまさりて、今一度もとの姿にてあひ見むとおもふ心の

つれなさよ。斯てのみあかし暮すに、などおほす程に、年の程よりも特の外に老いおと

ろへて見え給ひけり。繼母これを見て、「姫君は、たちぬる月とかや、あやしの法師に具

してこそおはしけれ、たしかに人のつけ侍りしなり」と聞のれば、いみじき人のことも



の江に月さやかに澄みわたりて、松風浪の音にたぐひつゝ、淡路島まで通ひて聞ゆるさま、この世ならず面白かりければ、人々住の江にて遊びたはぶれたまへり。三位中將琴藏人少將笛、兵衛佐笙の笛、左衛門佐歌うたひ給ひけり。姫君、侍従、尼君など、これを聞きてはると心地ぞし給ひける。さて夜明けければ、海人ども召してかづきせさせて見給へり。

さて、その日京へのほらせ給ふとて、いとことくしかりけり。姫君をば田舎人のむすめとて、相具し奉りたまふ。姫君をば尼君心やすく見奉りながら、この程のなごり申すばかりなし。尼君には和泉なる所あづけられければ、「行末の事はおもはず。たゞあの姫君の御事のみぞ思ひ侍りつる程に、今は黄泉路やすく」とておくりて、嬉きものから、離れ行くもさすがに哀なり。「とにもかくにも落つる涙かな。佛になりなむ後ぞや止まるべき」とてくどきける。姫君も何となく二年まで住みし所、離れゆくこそあはれなれ。「尼君も如何にならひて、戀しくかたはらさびしく思はむ」など侍従に聞えあはせて見

心安く―安心に
あづけられ
ければ―和泉國の内なる中將の所領を支配せしむる也



初はじめよりの事どもかきくどきつと、なくくのたま宜よひけり。夜もあけ口も出づるほどに、姫君ひめぎみを見奉り給ひければ、嵯峨野さやまのにて見しよりも盛もと見えて、ねくたれ髪かみのおほめきて、なつかしさ云いふも愚おろかなり。かくしつと二日三日ふつかみかにもなりしかば、その邊わたりにも仕つかうまつりし人あまたありければ、おのづから聞きつけてぞ各おの参りあへり。さびしき所ともなく、松のもとにて酒のみのよしりあひければ、その邊あたりのものども驚おどろくほどなりけり。

隨身所ずみじんざゐへくだされ―處あやこ罰ひじりの爲ため思おもはずに―不慮ふりょに―行―精進潔しやうじんけつ齊せいうれしく―中將ちゆうしやうの詞ことば

かゝるほどに京みやこには、中將殿ちゆうしやうどののたゞ一人住吉ぢきよへ参り給ひぬ、と聞きて、關白殿せきはくどの、歸りたるものをば、隨身所ずみじんざゐへくだされにけり。さてゆかりある人々、左衛門さゑもん作のすけ、藏人くらひ少將せうしやう、兵衛ひやゑ佐殿さどのよりはじめて、四位五位しゐごゐなどその數かず、住の江すみのゑにたづね行き給ひて、「いみじくおほつかながらせ給ふに、いかに―などいへば、―示現しげんによりてこれに侍りつる程に、思はずにこの邊あたりにあるものに見つけて―など宜よへば、―神佛かみほとけへ参りては行おこなをこそすれ。ゆゑしき御つとめかな」とて、たはふれてうち笑わらひ給うて、「うれしくこれまで尋たづね給へり。難波なにわわたりも、かゝる序ついでなくばいかでか御覽ごらんすべき」と宜よひつと、夜よふくるほどに、住

とて、袖をひかへて入れけり。紙屏風かみびやうぶにやまと繪かきたる一雙ひとむすぶ立てて、母屋もやのみすに朽木形きがた・きやうの經きやうかたびらかけて、いとあるべかしくしつらひたり。いと美しき足あしに土つきて、所血ところちうちあえて、顔かほさきあかみて、苦しげなる御姿みすがたを見て、尼君にぎみいそぎ出でて聞きこゆるやう、「姫君ひめぎみもこれに御座おはしますになむ。侍従じじゆうあはれとは見奉りながら、若わかき者ものにてうちはなちに申しけるにこそ。尼には、嬉うれきにもつらきにも習ならひて過ぎたる身みにて侍かたじけなれは、忝かたじけなくあはれに見奉る。あなゆよし。いかでか愚おろかには」とて、姫君ひめぎみにこのよしを聞ゆれば、「我われもおろかならずながら、都みやこの聞えつよましさにこそ」と宣のたまへば、「それも理ことわりながら、よろづ事ことのやうにこそよれ。人よしあし知らぬ者の心こゝろなき石木いしきなれども、これ程ほどの事ことにはゆるぎ侍はべるものを。今はこの尼にを重おもく思おぼしめさば、申まうさむまよにおはしませ。さなくば海河うみかはにも入りなむ」といひこしらへて、侍従じじゆうに「たゞ姫君ひめぎみのおはします所ところへ具ぐし參まゐらせよ」といへば、侍従じじゆう、中將ちゆうじやうにこのよし聞ゆれば、「ともかくも」とて嬉うれけにぞ思おぼしける。夜更よふくるほどに、侍従じじゆうさきに立ちてしるべしつ。さてもうちふす事こともおはしませずして、

我も云々―
我も疎略そりやくに
は思はれど
も故郷こきやうへの
聞えを憚おそり
て隠かくれたる
なり
人よしあし
―誤あやあるべ
し

姫君をうし
なひ奉りて
—侍従が詐
るなり

催す—涙を

こゝろに—誤
あるべし

子に立ち寄りてうち叩けば、「いかなる人にや」とて、侍従透垣よりのぞけば、寶子によ
りかよりたる姿、夜めにもしるく見えければ、「あなあさまし。少將殿のおはします。い
かど申すべき」といへば、姫君、「哀にも思したるにこそ。さりながら人聞きみ若しかり
なむ。我はなしと聞えよ」とあれば、侍従出逢て、「如何に怪き所まで御座したるぞ。あ
なゆよし。其後姫君を失ひ奉りて、慰め難さに、かくまで惑ひありき侍るになむ。見奉
るにいよく、古の戀ひし」などいひすさびて、哀なるまよに、涙のかきくれて物も覺
えぬに、中將もいとど催す心地ぞし給ふ。「侍従君の事をば忍びこし物を、怨しくも宜
ふものかな」と、「御聲まで聞えつるものを」とて、淨衣の御袖を顔におしあて給ひて、
「娘さもつらさも半にこそ」と宣へば、侍従理に思えて、さるにても御休み候へ、都の事
もゆかしきにとて、尼君にいひあはすれば、「ありがたき事にこそ。誰もく物の哀を知
り給へかし。まづこれへ入らせ給ふべきよし聞え奉れ」といへば、侍従、「なれくしく
無禮にはべれども、そのゆかりなるこゑに、たびはさのみこそ候へ。立ち入らせ給へ」

き
人ならば—
「住吉の岸
の姫松人な
らば幾世か
經しと問は
ましもの
を」古今集
の歌

聞きなし—
聞く者の心
からそれぞ
と思ふ

さしき人も見えず、いともの哀なり。日も暮れければ、松の本にて、「人ならば問ふべきものを」など打詠めて、たよすみわづらひ給ひける。さらぬだにも旅の空は悲しきに、夕なみ千鳥あはれに鳴渡り、岸の松風物さびしき空にたぐひて、琴の音ほのかに聞えけり。この聲律にしらべて盤渉調にすみわたり、これを聞き給ひけむ心、いへばおろかなり。あなゆよし。人のしわざにはよも、など思ひながら、その音にさそはれて、何となく立ちよりて聞き給へば、釣殿の西面に、若き一人二人がほどきこえてけり。琵琶かきならず人あり。「冬はをさくしくも侍りき。この比は松風浪の音もなつかしく、都にてかよる所も見ざりしものを、あはれしく心ありし人々に見せまほしきよ」と打語らひて、「秋の夕は常よりも旅の空こそあはれなれ」など打詠むるを、侍従に聞きなして、あなあさましと胸うちさわぎで、聞きなしにやとて、心をとどめ聞き給へば、
たづぬべき人もなぎさの住吉に誰まつ風の絶えず吹くらむ
と打詠むるを聞けば姫君なり。あなゆよし佛の御しるしはあらたにこそ、と嬉くて、簀

の御夢おんゆめにこそはべれ。あはれと思さずや」と聞ければ、「石木いしきならねばいかでか」など六ひつと、あはれに思したりけり。

血あへり―
血あえての
誤なるべし

中將はならはぬ様なれば、薬履わづらひにあたりて足より血あへり、のきやらぬ氣色けしきなれば、道行く人ひとあやしき者ども、目をつけてぞ見あひける。さてもなく、酉とりの時ばかりに、はるばると竝ならみたてる松の一むらに、蘆屋あしやところろくにあり。海見うみみえたる所ところに行き著つき給ひぬれども、いづくとも知らず思ひわづらひて、松の下にやすみ給ひけるに、十あまりなる童わらわ、松の落葉おちばひろひけるを呼び給うて、「おのれは何處いづくに住むぞ。この邊わたりをばいづくといふぞ」と問へば、「住吉となむ申す。やがてこれに侍るなり」といへば、いとく、娘むすめしきことと聞きて、「此邊このわたりにさるべき人や住む」と仰せられければ、「神主かみぬしの大夫殿たいふどのこそ」といへば、「さても京みやこなどの人の住む所やある」と仰せらるれば、「住の江殿と申すところこそ、京の尼上あまのうへとておはする」といひければ、こまかに尋ね問ひて行き給ひたれば、江につくりかけたる家の、ものさびしき夕月夜ゆづりよ、木の間まよりほのかにさし入りて、をさを

をさ／＼し
き！然るべ

や人の見え
つらむ夢と
知りせばさ
めざらまし
を」小町の
歌

さて佛の御しるしぞとて、夜の中にいでて、住吉といふ所尋ね見むとて、御供なるものには、「精進のついでに、天王寺住吉などに参らむと思ふなり。おのく歸りて此山を申せ」と仰せられければ、「いかに御供の人なくては侍るべき。すてまるらせて参りたらむに、よき事候ひなむや」と慕ひあひけれども、「示現をかうぶりたれば、そのまよになむ。ことさらに思ふやうあり。いはむまよにてあるべし。いかにも具すましきぞ」とて、御隨身一人ばかりを具して、淨衣のなえらかなるに、薄色の衣に白きひとへ著て、藁履はどきして、龍田山のき隠れ給ひにければ、聞え煩ひて、御供の者は歸りにけり。

住吉には、その曉姫君の御あとに臥したる侍従に聞ゆるやう、「まどろみたりつる夢に少將宣ふやう、心ほそかりつる山の中に、たどひとり草枕して起き臥したまふ所に行きつれば、我を見つけて、袖をかひへて、

たづねかね深き山路に迷ふかな君がすみかをそこと知らせよ
となむありつる」とあはれに語り給へば、侍従「けにいかばかり歎き給ふらむ。まこと

かくて正月の司召つかさどしに、右大臣は關白くわんはくになりたまふ。少將は中將ちゆうじやうになりて三位さんいしたまへり。中將はそれとも思はで、偏ひとへに神佛かみほとけの御前みまへに参りても、姫君ひめぎみの在所かりどころ知らせ給へ、とぞ祈いのり給ひける鞍馬くらまへ参り給ふとて、池いけの渚しづに鴛鴦うんおうの一つありけるを見給ひて、

わがごとくものやかなしき池水いけみづにつがはぬ鴛鴦うんおうのひとりのみゐて

と云いひつよ、祈いのてありき給へども、させる驗しるしもなかりけり。春秋しゆんしゆすぎで、九月くわがつばかりに初瀬はつせに籠かごりて、七日ななひといふ終夜しゆうや行ゆひて、曉あかつき方にすこしまどろみたる夢ゆめに、やんことなき女むすめそばむきて居ゐたり。ひき向むかけて見れば、我が思おもふ人ひとなり。嬉うれしさせむ方かたなくて、「いづくに御座おはしますにか、かくいみじき目をば見せ給ふぞ。いかばかりか思おもひ歎なげくと知り給へる」といへば、うち泣なきて、「かくまでとは思おもはざりしを、いと哀あはれにぞ」といひて、「今は歸かへりなむ」といへば、袖そでをひかへ、

わたつ海うみのそことも知らすわびぬれば住吉すまよしとこそあまはいひけれ

といひて立つを、ひかへて返かへさずと見て、うち驚おどきて、夢ゆめと知りせばと、悲かなしかりけり。

夢ゆめと知りせば
ば「思おもひ
つつぬれば

初瀬はつせにこも
りて「中將ちゆうじやう
が

て著て寢れ
ば思ふこと
を夢に見る
といふ言ひ
傳へあり
あふくま川
を渡る―逢
ふ

さまかへむ
と―出家せ
んと

みちのくの

あふくまがはを

わたるべき

わが身ならねば

ささがにの

くもでにものを

おもふかな

とりのこゑだに

おともせぬ

とをちのやまの

たにふかみ

ひとに知られぬ

としを經て

くちははつとも

なりはてぬべき

濱千鳥はまちどりあとはかりだに知らせねば猶なほたづね見むしほのひるまを

となむありける。これを見て、只哀あはれさ推おしはかるべし。中納言に見せ聞ゆれば、聲こゑも惜し

まず泣なき悲かなみ給ふ事限なし。「此使つかひを失うしなひつらむ事の口惜くちをさよ」とて、これを顔におしあ

てて、うち伏ふして、なか／＼ひたすらに思おもひつるよりは悲かなしくて、如何いかなる所にならば

ぬ心に旅立たぎだちて明あかし暮くらすらむ、と悲かなさまさりて、やがて様さまかへむとし給たまひけるを、從したがへ

る人々、「今一度元ひだりもとの御姿おんすがたにて姫君に逢あひ奉ほうらむこそ、誰たれがためにも本意ほんいなるべき御事

とぞ留とどめ申しける。少將しょうしょうこの事のおほつかなさ、うへのもとにおはしたれば、三の君

しか／＼と袖そでもしほる許あかりに語かたり給たまへは、物ものの哀あはれを知りて、かく宣のたまふよ、と思おもしけり。

と書きすさびて、奥に、

あさがほの

はなのうへなる

つゆよりも

はかなきものは

かけろふの

あるかなきかの

こちして

世をあきかぜの

うちなびき

群れ居るたづを

わかれつつ

ただひとりのみ

ありそ海の

かひなきうらに

しほたるる

あまのはごろも

わがごとく

ほしやわづらふ

日を経つつ

なけきますだの

ねぬなはの

くるひともなき

あしびきの

やましたみづの

あさましく

ながれ出でにし

ふるさとに

かへらむとだに

おもほえず

如何にちぎりし

いにしへの

わが身なりそも

うもれ木と

身はなりはつる

つるの子の

くもるはるかに

たちわかれ

ゆくへも知らず

しらなみの

よるのころもを

かへしつつ

寝る夜のゆめの

ゆめならで

戀ひしきひとを

夜の衣をかへしつゝ一衣を裏返し

なげきますだー大和の益田池は尊菜の名所ねぬなはー尊菜

思ひ残す事
なかりけり
—あらゆる
物思ひをし
たり

とらすれば
—此の下に
脱文あるべ
し

むつましく
て—なつか
しくて

れたる中に、水鳥のつがひ上毛の霜うち拂ふにつけても、思ひ残すことなかりけり。「中納言殿よりはじめて、かたへの人々いかにおほし歎くらむ。親にもものを思はせ奉るは罪深きことにこそ。生きてありとばかり知らせ奉らむ」とて、尼君のもとに小童の京より具したりしに、「しかくくの所に持ちて参りて、何處よりといはで、この文奉りて、さてにけかくれね」とよくく教へてけり。さて文をとらすれば、「いづくより」とて、はしたもので出てとりぬ。名を問へばまうさず。出でて見れば使なし。いかなる事にか、とて文を見れば、姫君の御手にて、

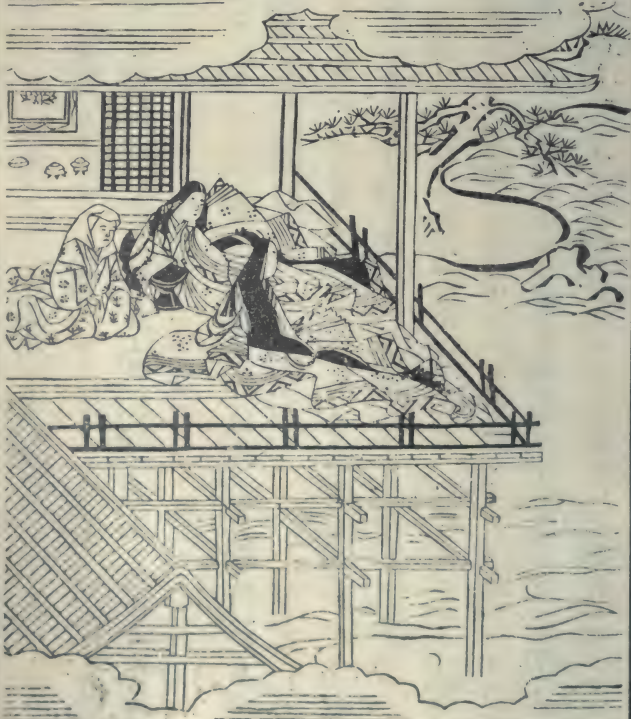
あなゆよし、世の忍びがたさよ。ゆくへも知らぬ程になりにしことを、おほし歎く人もおはすらむ。浅ましながらたびたちつる心、たど思しめしやらせ給へ。慰むかたとては、そなたの風のむつましくて、明しくらすになむ。誰もく御座しますにや。あはれ昔を今になす世なりせばなど。さてもく殿いかに思し歎かせ給ふらむ。ことに罪深くこそ。はかなき命ながらへたりとばかり聞え奉るになむ。

一種の法、
蘆の葉の如
くかく故に
名づく

いかにもな
りたらむに
は一萬一の
事あらば

なりて、おなじさまに」と宣へば、尼君「御髪はとてもかくても侍りなむ。御心にぞよるべき。今はこの老嫗おいらぬが申さむまよに御座おはしまさずば、うちすて奉りてかくれ侍るべし」といへば、これも背そむきがたくて、あけくれは佛の御前みまへにて經きやうをよみ、花を奉りなどぞし給ひける。

中納言は思ひあまりて、「今一度この世に逢ひ見せ給へ」とぞ祈り給ひける。中の君三の君なども、姫君ひめぎみのことにふれてあはれに、侍従じじゆうが萬よろづをかしかりしものを、あはれ如何いかなる所に住みて都みやこの事をおほし出づらむ、と忘るゝ時なく忍しのびつゝ泣き給ふ。繼母きよはは「何事ぞ、いつとなくいましく泣き給ふは。我がいかにもなりたらむには、よも斯かくは思おもさじものを」と腹はらだちければ、親おやながらもなさけなく、うたてにぞ思おもしける。さて住吉には、やうく冬籠ふゆこもれるまよに、いと淋しみしさまさりて、あらしき風吹けば、わが身の上に波立ちかよる心地こころしてける。沖おきより漕こぎくる舟には、あやしき聲こゑにて、「にくさびかけるなど歌うたふも、さすがにをかしかりけり。住の江には霜しもがれのあし氷こほりにむすほよ





いかばかり
なりけむ
この下活字
本には「姫
君ふる里を
うきふねと
のみさしは
なれ心一つ
にこがれこ
そゆけと心
ぼそげによ
み給ひけれ
ば尼君」と
ありて次に
住吉のあま
となりては
の歌あり

あしで一歌
などをかく

何ばかりなりけむ。これを見て、尼君、

すみよしのあまとなりては過しかどかばかり袖をぬらしやはせし

などいひつよ、住吉に行きたれば、住の江とて所々すみあらしたるに、海さし入りたる

につくりかけたれば、簀子の下に魚などあそぶも見えて、南は一むらの里ほのかに見え

て、苦屋どもにみるめかりほし、蘆の屋に心ほそく烟たちのほるけしき、薄墨にかける

あしでに似たり。東には籬につたふ朝顔などかとりて、岸にはいろくの花紅葉植ゑ並

べたり。西には海はるくくと見えわたりて、並み立てる松の木の間より、帆かけたる船

ども、淡路島をゆきかふさまも、波にたどよふかどり船、はかなく見えて、日の入るは

海の中に入るかとあやしまれける。わざとならでは人など來べくもなし。しづかにあは

れなる住家にてぞ侍りける。ちひさやかに造りて、阿彌陀の三尊うつしならべて、月日

の出づるばかりは、尼君西にむかひて、「南無西方極樂教主、阿彌陀如來、後生助け給へ」と

と申したるを見るにつけても、あらぬ世に生れたる心地して、姫君も侍従も「疾く尼に

我も劣らず
—悲しさは
我も御身に
劣らず。

よものふる
まひ—よも
やと思はる
る案外に行
跡

さるほどな
れば—さる
ほどにこれ
はの誤なる
べし

このれば、「いかなる事のありければにや。我にはいひ給ふべきにこそ。親の思ふばかり
子はおもはぬことの心憂き」とて、これを顔に押當ててうつぶし給ひけり。繼母、「男な
どのもとにおはしたるにこそ。よも隠れはて給はじ。いたくな嘆き給ひそ。我も劣らず
こそ」などいひければ、中納言、「おほくの子どもよりも、この君ばかり誰かはある。我
身にもかへまほしけれども、心かなはぬ世なれば」と、うちくどき給へば、繼母、「侍
従にくるはかされて、よもの振舞どもし給ふも知らで」と、つぶやき居たれば、「あなむ
づかし。こは何事ぞ」と嘆き給ひける。

さるほどになれば、尼君などつれて河尻を過ぐれば、をかしうも行き違ふ船に乗りたる
者どもの、あやしき聲々して、「つまもさだめぬ岸のひめ松」と歌ひて漕ぎ行くも、なら
はぬ心地してあはれなり。京の方は霧ふたがりて、そこはかとも見えす。比叡の山ばか
りほのかに見えたる景色、もの思はざらむ空だにあはれなるべし。況やありがたき親に
ひき別れ、情ありし同胞をふり捨てて、いつちと行くらむ、と思ひつゞけむ心の中、如

とりしたる
めたる一取
りかたづけ
たる
思ひ給へり
しかば一ば
はどの誤な
るべし
にがみ一苦
い顔して

散りなむの
ち一我がな
くなりて後

におはするにや」といへば、「心軽くたち出で給ふべき人にもあらず。いかなるべき」と尋ねあへり。夜も明けぬれば、常におはせし所を見れば、傍なる夜のふすまもなく、とりしたよめたる景色なれば、誠に悲くて、おのく忍びねに泣きけり。中納言にしかぐと聞ゆれば、呆れさわぎで、聲をさよけて泣き悲み給ふ事たとへむかたなし。中の君、三の君、「あやしくこの程心うきものに思ひ給へりしかば、かくまでと思はざりしものを」とおのくかなしみ給ひけり。繼母あきれたるさまして、「侍従がさとにか。たづね奉れ」とて、中納言殿の傍に、泣くよしにてにがみ居たり。少將は、かよりければ、なさけある御返事をばし給ひてける、と思ひ續けて、對の簀子にさめぐと泣き居給へり。三の君こよかしこ見ありき給ふ程に、母屋のすみに結びたる薄様ありけり。何となく取りて見れば、姫君の手にて、

なき名のみたつたの山のうすもみぢ散りなむのちを誰かしのばむ

とばかり書き給ひたりけり。これを見給ひて、いよく哀さまさりて、中納言に見せき

程にぞありける。侍従とともにぞ泣き給へり。小夜ふくるほどに車の出で來れば、櫛の筒と御琴ばかりぞ持ち給へる。御車のしりには侍従乗りたり。比は長月二十日あまりの事なれば、有明の月影もあはれなるに、出でて行き給ひけむ心の中、如何ばかり悲しかりけむ。嵐はけしき空に、かす絶えぬ音を鳴きわたる。雁も、折しりがほに聞ゆ。雲間を出づる月の、常よりも我をとぶらふ心地ぞしける。さて尼君の許へ行き、かきくどきこまんと語りければ、「誠におほしたつも御理にこそ。今も昔もまことならぬ親子の有様のゆしさを。繼母ながらも何處を憎しとか見給ふらむ、あさまし。斯るうき世なれば、思ひ捨て侍るものを」とて、墨染の袖をしほるばかりにぞありける。夜の中に淀に著きてけり。

少將その夜對に行きて、兵衛佐といふ女して、侍従を尋ねさすれば、音もせず。姫君の御跡にふしたるかといふ帳を見るに、姫君もおはせざりけり。うちさわぎて人々に尋ねさせけれども、見えさせ給はざりければ、あやしと思ひけり。「さても中の君、三の君の許

かくて候へども一北方には遣はるれども告げられれば一告げればの誤なるべし
顔にふりかけたる一顔を隠す爲に乳母も一乳母の誤か筋ごとにとありとも一本一本に抜き取れども一我

さるほどに住吉すよしの尼君のほりて、かくと告げければ、暮くるゝほどに忍びたる車くるま奉りければ、いひかへして、その程ほどに見苦みぐるしき物ものどもとり認しためてけり。心の中いかばかり哀あはれなりけむ。その時しも中納言ちゅうなごんわたりければ、さりけなくて御坐おほしけれども、この度たびばかりこそ見奉たてまつり侍らむすらめ、と思ひければ、忍しのび難がたき色もあらはれて、顔かまにふりかけたる髪かみのひまより、涙なみだもり出づるを見給ひて、「いかに母宮ははみやの事をおほすにや。乳母めのごの事ことをゆかしとおほし出づるにや、また兵衛ひやうゑの事ことを心づきなく思おもはすにや。ともかくも、何事なにごとにても思おもはむやうに聞え給ふべきこそ。おやの思ふばかり、子は思はぬ事ことの心憂うれさよ。いかばかりにか哀あはれと思ひ侍はべる。頭かしらの髪かみを筋すぢごとにとありとも、いなふべき身みかは」とのたまへば、「母宮ははみやのことも、また乳母めのごの事ことも思おもひ侍はべらず。殿とのをも見奉たてまつらで程ほど経たることもやと、かなしく」などことばの聞えぬ程に、泣なくくきこえ給へば、中納言ちゅうなごんうち泣なき給ひて、「三條さんでうにおはしますとも、まろが生いきたらむほどは離はなれ聞ゆべきにあらず。何かはその事をおほす」とて立ち給ふを、今一度いまひとたびと顔かほふりあけて見給たまふに、目もくれ心もきゆる

命あらばめぐりやあふと津の國のあはれいくたのもりにすまばや

かやうなる程に―斯くある中にも命はほかられず契りてぞ―姉妹と生れたるは淺からぬ宿縁なれば生死を共にせんと也

と口ずさみて、人め怪しき程にぞありける。中の君物のあはれを知り給へば、その事となく涙を拭ひ給ひけり。姫君「露の身のはかなきは、かやうなる程に、いかど」など聞ゆれば、中の君、

契りてぞおなじ草葉にやどるらむともにぞ消えむ夜半のしらつゆ

といひ給へば、姫君も侍従もいとど涙催されて、別れむことを悲しと思ひけり。

中の君、三の君、何となく世のはかなきをあはれと思ひ、常は心をすましておはする人なれば、と大方の事を思ひて、おのゝ歸り給ひけり。心よせの式部、隙もあれば立ち寄り、「たばかり給ふこと近くこそ。如何にせさせ給ふべきにか。いと哀にこそ」と聞ゆれば、「かやうに思したることの忍ばしさに、如何ならむ世までもとこそ思ひ侍れ」とあれば、「誠にかくて候へども、御方をこそ頼み奉りつるに、如何にならせ給ひなむするにか」とて、うち泣きけり。

大方の事を思ひて―姫君にさし迫りたる事ありとは氣付かず





三條一前に
見えたる三
條堀河の家

まがくし
き一縁起の
わるい
いかに戀し
く一汝をば

てす哀におほしたるを、離れ奉りなば、いかにおほし歎かむ、と思ひつゞけて、二人な
がらうつ臥しがちにて侍るに、中納言の見給へば、さりけなくつくろひおはしけれど、
姿もことの外に衰へたるに、涙のもり出でければ、「三條へわたり給はむことも近くなり
たるに、いかにうつぶしがちにて衰へ給ふ」とて、繼母に聞え合せ給へば、「何事を思す
にか、いかなる人を戀ひ給ふにや」とつぶやくを、心得たまはで、様々のもてあそびな
ど奉り、侍従がもとへ遣しければ、「かばかり思したる親を振棄てていなば、おほし歎か
むことの罪ふかさよ」とて、また泣き給へり。中の君三の君わたりて、「いかに常にうつ
ぶしがちには」など聞ゆれば、「この程は、いかなるべきにか、世の中もあぢきなくて、
消えも失せまほしき程になむ。もしさもあらむには思し出でなむや」と、袖も所せく宜
へば、「あなまがくしき。何しにかさる事はあるべき。侍従君いかに戀しくおはせむ」
といへば、侍従「いかならむ世までも、誰か忍びさふらはむ。おもひ侍るに、御戲な
がらもあはれに忘れ難く」とて思へることの涙をとどめて、侍従

戀しさに

其方の戀し

さに此文を

やるぞ

忘草の―が

く我を忘る

るは其地の

名物の忘草

の爲か

おこなひ―

勤行

御みづから

―御は行文

なるべし

り給へ。あなかしこく。なべてなるらむ事には。

などかきてやりける。住吉に行きてしかなくと聞ゆ。

尼君、急ぎあけて泣くく見て、御返事に、

まことに世をそむきて、住吉のわたりに侍りながらも、朝夕その昔の人の御事のみ

心にかゝりて、あかしくらす中に、二葉に見えさせ給ひしをふり棄て奉りしかば、

いかにさても生ひいでさせ給ふらむとゆかしく、おこなひの妨とならせおはしま

せば、わすれ草も名のみして、片時も忘れ奉ることはなけれども、はかなき世の中

の辯にてよな、今々と思ひて過ぐしつる程に、若き御心地どもにおほし出でて、かや

うに仰せられたることの御嬉さよ。さてもく仰のまゝに、急ぎく御みづから、あ

なかしこく。

と書きてまゐらせたりければ、姫君侍従すこし晴るゝ心地して、人知れず出でたとむこ

とを、侍従にいひ合せ給ふうちに、中納言殿のゆゑしきことを聞き給ひながら、思ひ棄

聞ゆれば一侍従が姫君

に

北の方に云

云一繼母を

讒するに落

つべし

これを晴れ

たりとも一

今度の冤を

雪ぎたりと

も

久しきなど

は一久しき

御無沙汰位

の言葉にて

は之を形容

するに足ら

ず

るばかりにて、斯くはいひながら、わかき人々なれば、何處にていかにすべしとも覺えざりければ、姫君「乳母だにあらばともかくも計ひてまし。今はそこをこそ何とも頼みたれ。この月も過ぎなむとす。いかにも計ふべし」と宣へば、侍従も「いかにとも覺えず」などいひつゝ、とかく案ずるほどに、故母宮の乳母なる女の、宮に後れまゐらせて後に、尼になりて、住吉になむ侍りけるを思ひいでて、「覺えさせおはしますにや。しかしか」と聞ゆれば、「然るものありと覺え侍るなり。いかでか告げやるべき」とあれば、侍従が母の許にありける女をよく知りたるを呼びて、遣りける文に、

さても久しきなどはおろかなるにこそ。姫君のおひ出でさせ給ひし時、母宮もはか

なくならせ給ひながらも、いとおとなしくならせ給うて、その後また侍従が母なり

し人も隠れにしかば、誰もく知る人もなくて、其方の戀しさに、あなゆかし。さ

こそ世を背きたまはめ、恨めしくもかき絶え思ふものかな。忘草のしるべとかや。

さてもく人傳ならで、申しあはすべきになむ侍る。よろづを棄てて夜を晝にまゐ

二十日比など一左兵衛頭との婚期は二十日頃との事故十日前に盗ま

せん
おそれは侍れども一北方に對してなりなましかば一尼になりたらばよかりしにこの度はこ

く疾く急がばや」といふ。よく／＼かためて歸りにけり。繼母にしか／＼と聞ゆれば、
忍みたまうて、「たゞ神無月二十日比など聞ゆれば、十日よりさき」とさどめくを、心よ
せの式部、聞きてうちさわぎて侍従に「しか／＼とたばかり給ふなり。恐れは侍れども
ゆゑしく罪深きことに侍れば、あはれさに」など聞ゆれば、「今までながらへておはしま
す心うさよ」とて、「さきの度尼になりなましかば、そこに留めおきて、かゝる事をも聞
かする」とあれば、侍従「かくまでのこととこそ思ひ侍らね。この度は理にてありける」
と、ねをのみ泣き給ひけり。

さて「かくてのみ御坐しますべきにあらず中納言殿に申せ給へかし」と聞ゆれば、「北方
になき事をいひつけ奉るにや。是を晴れたりとも、またも／＼勝りざまの事もあるべ
し。又いかなる事もか猶たばかり給はむすらむ。たゞ聞えざらむ野山の中にて尼になり
て、この世を思ひ離れむ」と聞ゆれば、「此度は理にて侍り。さらば侍従も尼になりて
母の後世をもとぶらひ侍らむ。いかにその時あはれに侍らむ」とて、二人ながら袖も絞

けり。

姫君、「親おやながら思おぼすらむことの恥はづかしさよ。たゞ尼あまになりて聞きえざらむ所にとおもふ」と宣のたまへば、「中納言殿のかくまで思おぼしたらむ、そむき給たまはむはいと本意ほんいなきことにて侍しるべし。北方きたのかたにこそ本意ほんいなくおはしますとも、あり經へむまゝに聞ききひらき給たまひてむ」などぞ、侍従じじういひ慰なぐさめける。繼母まはは猶なほこの事をそねみて、むくつけ女めにさよめき合あせて、「この

姫君を、さしもなからむする下衆ひすに盜ぬすませばや」といへば、むくつけ女めうち笑あみて、「うばが兄あにの主計助かぞへのすけとて、七十ばかりなる翁おきなの、目うち爛たれたるが、このほど年比としごひの妻めにはなれて、人を語かたらはむとするに、聞きき入いるゝ者ものもなきに、思おもひ煩わづらひ侍しるに、このよしを

申まをさばや」と聞きゆれば、「言いひ合あはするかひありて、いと嬉うれしくこそ。疾はやくくと急いそぎて」と宣のたまへば、かしこに行いきてしかくと聞きゆれば、主計助かぞへのすけしわぐみ憎にくさけなる顔かほして、ほ

ほゑみて、「あなうれし。よきことかな。中納言殿や心こころえすおほしめさむすらむ」といへば、「それは北方きたのかたのよくく計はからひて」などいへば、「それはよきこと。あなめでたし。疾はや

語ことばらばむと
する一妻ひとつまに
なれと
しわぐみ一
蹴くよりて

ひきかづき
て一衣をか
ホりて
し得たる一
しすました
る

見せばや一
嫁せばや

この由一姫
君の聲にな
りたき由
さてのみや
ば一其儘に
も過さるま
じ

たむむ目一
來月

や聞き給ふか」といへば、式部、しかなくたばかりの由をいひけり。侍従さわぎで、姫君に聞え合せて、「母なからむものは世に長らふまじき事にこそ」とて、二人ながらひきかつぎて打臥しながら、「この事誰にも聞えさすなとて云はむ程に、あなたこなたの名のたむむことも見苦し」とぞ宣ふ。繼母はし得たる心地して、むくつけ女も、二人下笑に笑みあへり。

中納言、内参こそとどまり侍らめ、さもあらむ人に見せばや、と覺す程に、内大臣の御子に宰相にて侍りける人、左兵衛督にて廿五六ばかりなるが、よろづ人に勝れたるに、この由ほのめかしければ、中納言いとよき事よ、とて、霜月とさだめてけり。おそろしき心とも知り給はず、繼母にいひ合せ給へば、「よき事にこそ」といひて、下にはいと胸いたきことに思へり。中納言對に立ち寄りて、侍従にむかひて、「内参のとどまりしは口惜ながら、さてのみやはとて、たむむ月に左兵衛督にとおもふなり。そのよし心得ておはすべし」とて、母宮の三條堀河なる所をしつらひて、そこに住ませ奉らむ、と營まれ

きてこそ一
つきとめた
る上なれば
こそ斯くは
申上る也
むくつけか
りける一陋
劣なる
思ひまし給
へる一勝り
て愛し給へ
る
うれしく一
嬉しく御相
談ありしよ
ゆきし一忌
はし
いみじき一
大變な
心得ぬ一合
點のゆかぬ

君を、我が女たちに思ひまし給へるが妬さに、とかく言へどもかなはぬ。如何すべき」といへば、むくつけ女、「我もやすからずは侍れども、おもひながらうち過ぐし候ひつるに、嬉しく」とてさよめき合せて、その後三日ありて、あやしき法師をかたらひ、中納言に聞ゆるやうは、「僞とぞおほしたりしに、只今かの法師いづるなり」と聞ゆれば、見給ひけるときに出でにける。「あなゆゑしの事や。をさなくては母に後れて、また乳母さへに離れて、あはれ果報わるきものとは思へども、あさまし」とて入り給ひぬ。さて宮仕のことは思しとまりぬ。

中納言對におはしければ、姫君何心なくなる給ふにむかひて、「いみじきことのみ出でくる事のおさましさよ」と宣まへば姫君も何事にやと思ひたまへり。中納言立ちざまに侍従を喚びて宣ふ。「あさましき事を聞けば、内參はとまりぬ」とばかり宣ひてかへり給へば、心得ぬことなれば、いひやる方なくて止みにけり。さるにても如何なるにか、とて、式部といふ女の對の方に心よせなるに逢ひて、「中納言殿のしかぐ」と仰せられしは何事に

あやしき名
を立てゝ一
繼姫君に惡
名を立てゝ
思ひうとま
せむ一申納
言に
霜月の事な
れば一五節
の舞は十一
月の中の丑
の日に行は
るれば也
げに／＼一
實に／＼割
をあて給ふ
べし
よく／＼聞

中納言霜月のことなれば、出立をのみ營まれければ、繼母ともにいとむ氣色にて、したには、人わらはれになす由もがな、と思ひ、人しづかなる時に中納言に聞ゆるやう、「聞きながら申さざらむは後めたきことなれば、申すなり。この對の御方をば、我が女たちにも勝れておはせよかし、とこそ思ひ侍るに、この八月よりのことを露知らざりけるよ」とて空泣をしければ、中納言あきれて、「こは何事ぞ」と問ひ給へば、「六角堂の別當法師とかやいふあさましき法師の、姫君の許へ通ひけるが、この曉も寢すぐしたりけるにや、對の格子をはなちて、人の見るともなく出でにけることの心うさよ」とて、「これ偽りならば、佛神などけに／＼」といひければ、中納言「よちさることはあらじ。女房などの中にござる事はあるらむ」と宣ひければ、「中の格子を放ちていでけり。うはの空なる事をばいかでか、よく／＼聞きてこそ」などいひ給へども、なほ實にと思ひ給はざりけり。

繼母、三の君の乳母に、極めて心むくつけかりける女房に聞えあはするやう、「この對の

草のゆかり
—三の君と
姉妹なるを
いふ
おなじ蓮—
一蓮托生
五節に—五
節の舞姫に
わが子ども
—實子
はからひに
て—御はか
らひにてな
るべし君の
意見通り

君があたり今ぞ過ぎ行くいでて見よこひする人のなれるすがたを

とをかしき聲して歌ひければ、侍従聞きとがめて、窓をおしあけて「いかに」といへば
少將、「世の中のうさまさりゆけば、深き山にもなど思ひとりて」などいひ給へば、侍従、
「いでや一念隨喜とこそ承れ。まして武藏野の草のゆかりなれば、おなじ蓮にこそ」と
いへば、「うれしき善智識とかやにこそ」と戯るゝも忘れがたくて、「かくこそ笑ひ給ふと
も、哀とおほしあはする事もありなむものを」といひつゝ明し暮すほどに、九月にもな
りぬれば、中納言、北方に宣ふやう、「行末は知らず、二人の君はありつきぬ。この對の
方を今年の五節にまるらせばや、と思ふに、打あはぬことの心うさよ」とて歎きたまへ
ば、わが子どもに思ひまし給へるをねたしと思ひながら、云ふやう、「なか／＼覺すくな
き宮仕よりも、ときめかむ上達部などにあはせ給へかし」などいへば、「なみ／＼の人に
は見せむ事もあたらしさに」など宣へば、繼母「ともかくもはからひにてこそ」といひ
ながら、如何にしてかあやしき名を立てと思ひうとませむと案じけり。

と宜へば、少將さすがに見捨て難く仰せけれども、明けぬれば歸り給ひて、いつしか御文あり。

白露とともにおきるてはかなくも秋の夜すがらあかしつるかな

かく申し給へども、まだ人めもつとまじさにや、御返事もなし。

暮るれば對の御方におはしまして、見給へば、おろしこめて人もなし。三の君の方へ御座しましたれども、物憂くて立歸りなむ、としたまへば、心憂く覺えて、

たまさかにみちくる潮の程もなくたちかへりなむ事をしぞ思ふ

心憂く三の君が

おろしこめて一格子下して月掃したる也

としたにほのめかし給ふも捨てがたくて、少將宜ふやう、「何となく世の中の心憂くのみ侍れば、深き山にと思ひたつに、その時おほしいでなむや」と宜へば、三の君、いかに、何故にさることは侍るべき。たまさかに待ちつけ侍るだにも心うくこそ、まして如何にあはれにか」とてうち泣き給へば、あはれにて「誠やあらましごとぞ」とて、とかく明して、出でさまに對にやすらひて、

まして一況や御出家などの事ならば如何程悲しからん

の中をもすさみ宮仕をも忘れて、心のまよなることならば、消えもうせまほしき程なりければ、

あまの原のどかにてらす月かけを君もろともに見るよしもがな

となむ。されども、この度は御返事もなし。

ながめ給ひて—少將が

何となくながめ給ひて、三の君の御方へおはして見給へば、何心なくおはするを、いとほしくて、御物語などして、かやうに世の中のはかなきことを仰せつゞけられ、「我いかにもなりたらむ時思し召し出しなむや」と少將宣へば、三の君「時々聞え給ふさへ心憂く覺ゆるに、まして、さもあらば、我が身いかにせむ」と宣ふも、さすがに是もあはれなり、明けぬれば立ち歸らむ、とし給へば、「如何に」などきこゆれば、少將、

たえなむと思ふものから玉鬘さすがにかけて苦しと知らなむ

と宣へば、三の君、いとあはれに思ひて、

絶えはてむことぞかなしきたまかづらくる山人のたより思へば

くる—來る
繰る

かくしつと過ぎ行くほどに、少將せうしやういよ／＼深く思ひなりて、「たゞ一ひとちじの御返事おんかへりごころののかしきなり、やすき程ほどの事を、人の願ねがひかなへ給へかし」などいひて、

秋の夜の草葉くさばよりなほあさましく露つゆけかりけるわがたちとかな

など、あさからぬ様やうに聞きえければ、「あまりに人のつれなきも哀あはれも知らぬに侍まへる」とて、歌の返かへしすよめければ、「あはれと思へども、人めのつよましましさにこそ」とて

あさのふに風おとづるる草葉より露のこぼるるほどを見せばや

と書かきてうちおきたまふを、侍従じじゆうとりて、

ゆかりまで袖こそぬるれ武藏野むさしのの露けきなかに入りそめしより

と書かきそへてやりければ、少將せうしやううち見て、うれしさにも胸むねさわぎて、「一ひとことばの御返事おんかへりごころに、世の中の背そむきがたく、侍従じじゆうの心のありがたさよ」とて

武藏野むさしののゆかりの草の露つゆばかりわかむらさきのこころありせば

などいひ返しける、かくしつと多くの月日かさなるまゝに、いよく思ひまゐりて、世

すゝめ侍
従が

ゆかりまで
縁につれ
たる我まで
も

ゆかりの草

侍従

わかむらさ

からころも死出の山路を尋ねつつわがはぐくみし袖をとひなむ

とつまに書付けて遣り給ひければ、侍従是を見て、顔に押當て人めもつゝまざりけり。

とかくいとなみ侍る程に、七月七日あまりに姫君の許へ参りけるに、初秋の月いとあは

れなる夜、端近く出でて、世の中のはかなく哀なることを聞えあはせて、泣き給ひたる

を、少將たち聞きて、あはれさ限なかりければ、とぶらひ侍らむ、とて部を叩けば、侍

従は、少將なりとて、出であひて聞ゆるやう、「物おもふは悲しきこととは、此程こそ思

ひしられ侍れ」といへば、「さこそは侍りけめ。あなあはれ」などいひかよはす程に、小

夜も半に過ぎて、鐘の音聞えければ、侍従、何心もなく物語りの中に、
あかつき 曉の鐘の音こそ聞ゆなれ

といへば、

これを入相とおもはましかば

とうち詠め給ひけり。姫君も哀れとぞ聞きとがめ給ひける。さて夜も明けにけり。

この程こそ
一母の死し
たれば也
曉の一小一
條院の御歌
の上の句詞
書に「女の
許にて鐘の
音を聞き
て」
これを一上
の歌の下の
句

母の許に立
寄り給はれ
と言ひやる
也

かゝる心の
つきぬれば
―新く異常
に戀しく思
はるれば
―身のかた
まり給はむ

はての目―
四十九日

ものは頼みすくなくなむ。常よりも此度は御ゆかしくて、かゝる心のつきぬれば見奉らむことも此度ばかりにや、と思ゆるに、あはれは母宮のおはしまさどりしをこそ、悲しと思ひつるに、この老嫗さへなくなりなむ跡のゆとしさよ。ともかくも定り給はむを見奉りて後こそと思ひしに、これを見おき奉りて、死出の山を迷はむことの悲さよ。はかなくなりなむ後は、侍従をこそはゆかりとて御覽ぜさせ侍らむすらめ」などいひて、御髪をかきなでて、さめんと泣きければ、姫君も侍従も袖を顔におしあてよ、「我もともに具し給へ」と聲もしのばす泣き給ひければ、よその袂までも所せく聞えけり。さて侍従をばおきて歸らせ給ふべき山間のれば、かへり給ひにけり。かくしつよなやみまさりて、五月のつごもり比に、はかなくなりにけり。姫君、侍従が思ひさこそあるらめ、と乳母のなげきの上に、侍従が心苦しき思ひやり給ふ。侍従は、母のかなしみの中に姫君の御つれなゝを歎きつよ、さて後々のわざも細々といたなみけり。はての日、姫君の常に著給ひける鞋一かさね、侍従が許へ遣はすとて、

これ—この
文を

まほしけれども、さすがに棄てやらぬものは人の身に」などとて、うちなみだぐみ給ひて、「今はいかゞ。たゞ—こと聞えさすべきことの侍り。これ御覽せさせよ」など度々のたまひければ、侍従「昔だにも聞え煩ひし事なり。今はいよくかたき仰にこそ」といへば、「我君、一度の返事をたまひたらば、この世の思出にこそと思ふなれ」と聞ゆれば、それも如何と思へども、いなみがたくて、度々ほのめかしけれども、かなはざりけり。さるまゝに、少將思ひかねて神佛に祈りたまひける。三の君のもとへもゆかまほしけれども、思ひあまりては侍従に逢ひてこそ心を慰むれ。西の對のけしきをたゞ見すなりなむ事の心憂くて、常はかよひければ、宵曉に對を過ぎ給ふとは、古き歌のいとあはれなるを、をかしき聲にてうたひつと、袖のしほるばかりにて過ぎありき給ひける。かくしつと明し暮すほどに、姫君の乳母例ならず心地おほえければ、姫君のゆかしうおはしますに、立ち寄せ給ふべきよし、侍従が許へいひやりければ、忍びつと御座したりければ、乳母起きいでて泣くくきこゆるやう、「さだめなき世と申しながら、思ひぬる

立ち寄せ
—姫君に乳

恥かし

子日してはるのかすみ立ちまじり小松がはらに日をくらすかな

車よりおりたまひて、遊びたまふ御有様を見參らせ給ふにつけても、少將、この世に如

何にながらへてあるべしとも覺え給はず、心愛くて人めも知らぬ程にぞ悲しみける、

さて日も暮がたになりけるに、鶯の鳴きければ、初音めづらしく聞きて、三の君、

わが宿にまだおとづれぬうぐひすのさへづる野邊に長居しつべし

中の君、

初聲はめづらしけれどうぐひすのなく野邊なればいざかへりなむ

ときこのれば、少將、かくなむ、

はつこゑは今日ぞ聞きつるうぐひすの谷の戸いでて幾世へぬらむ

と宣ひて遊びくらしつよ、かたなく歸り給へば、少將殿、人のおもかけ身にそひたる心

地して、おもひは離れがたく、心の中も苦しきまよには、侍従にあひて、「あさましき人

にはかられて、かゝるもの思ふ事のわりなきよ、如何にをかしと思しけむ、消えも失せ



かひも侍ら
じ一既にに
見知られし
上なれば隠
れたりとも
效あらじ
いつかは一
何時下りた
る事ありや
御口清さよ
一すました
口をさかる
るものかな
いかに一其
の調子にて
は夫君に對
してさぞ物
争ひをせら
るゝならん
つゝまじ一

隠れさせ給ふらむ、かひも侍らじ」ときこゆれば、中の君、「車よりは、少將殿の一所こそおりさせ給ひつれ、餘の人はいつかは、知りたりがほにも宜ふものかな」といへば、少將うち笑ひて、「ゆかしき御物あらそひかな。いかなるよめにもこそはしるく侍るなれ。御口ぎよさよ。いかに兵衛佐殿ひやうまのすけのに御物あらがひのあるらむ。うしろめたさこそ」など戯れたまひけるも、たゞ嫌君いやぎみにこそと氣色けしきは見え給ひにけれ。少將殿せうしやうどの、たびく歌うたなどよみ給へり。

年を経ておもひそめてしかたをか
の松のみどりはいろふかく見の
とあれば、中の君、

ほどもなき松のみどりのいかなれば
思ひそめつつとしをへぬらむ
三の君も同じくかくなむ。

千代までと思ひそめける松なれば
みどりのいろもふかきなりけり
嫌君もつつましながら、

まつ—松、
待

そなたにこ
そ—君こそ
返歌はし給
ふべけれ
いひかはし
—相談し

よしなきあ
りき—つま
らぬ出行き
むげに—無
下に、一向
になり

や、参りあひたる嬉さよ」とて、

春霞たちへだつれど野邊にいでてまつのみどりを今日見つるかな

とてうち誦じたまへば、中の君は姫君にそれときこゆれば、「そなたにこそ」と宣へば、互にいひかはし給ひて、中の君、

かた岡のまつとも知らで春の野にたち出でつらむことぞくやしき

とあれば、少將殿、

君とわれ野邊の小松をよそに見てひきてや今日はたちかへるべき

とて、「この度は姫君に」と聞え給へども、よしなき步行をして見えつることを悲しく覺えて、うちそばみて御坐するを、「いかで」など責めさせ給へば、御返事なくとも、むげに知らぬやうに覺えて、姫君、

手もふれで今日はよそにて歸りなむひとみの岡のまつをつらさよ

といひ消ち給ひければ、少將いよく忍びがたさに、車のきはにたち寄り給ひて、「なに

松ひき野
に出て松を
引き取るは
初子の日の
遊のならば
し也。此日
子の日なる
べし

ありつがは
しき一似合
しき

とみにも一
急にも

ふみしだき
一踏みちら
し

隠れたる一
常時の跡

けり。次に三の君おり給へり。花山吹の上に萌黄の鞋なり。ありつがはしきさまは今、少しまさりてぞ見えたまへり。姫君はとみにもおり給はぬを、「いかに」と責めければ、侍従さしよりて、「いかに人をばおろし参らせて」と申しければ下りたまへり。櫻がさねの御衣に紅の單袴ふみしだき、さし歩み給へる御すがたいとらうたく、うつくしなど云ふもおろかなり。髪は鞋の裾にゆたかにあまり、丈のほどまみ口つきいとあてやかに、こと人々よりも今ひとしほ勾くはよりて見え給へば、これを人に見せばやと驚れたまふ。

おのく人ありとも知らで遊びあへるを、よくく見給ひて、少將あくがれて、大なる松の下に居給へるを、この姫君しも見つけたまひて、顔うちあかめて、いそぎ車に乗り給へるにつけても、心あるさまなり。おのく騒ぎて隠れあへるさまも、あらまほしき程なり。少將のたまふやう、「嵯峨野のゆかしさに遊びつるほどに、車の音のし侍りつれば、あやしや誰にか、とてたち忍びたるほどに、隠れたる信あれば、現れての利生とか

こえける。

うちゆりたりける―奥まで立入ることゝ許されたるもの衣のつま清げに出して―車内に特に衣服を入れて車の前後の籬の脇より外に垂れしむ之を出しぎぬといふ。

かくしつゝ新玉あらたまの年としもかへりにけり。正月十日あまりのころ、中の君、「今や嵯峨野さかの春

の氣色けしきをかしかるらむ、忍しのびつよみむ」など誘いざなひければ、おのく、まことになどい

ひて、出で立ちたまひけり。侍さむらひもうちゆりたりけるをぞ、御供おんともにまゐりけり。網代車あじみぐるま三

輛りやう、一輛りやうには姫君、今一輛りやうには中の君、三の君、一輛りやうには衣きぬのつま清きよけに出いして、若わかき

女房下仕しもづかへなど乗りたりけり。少將しょうしょうほの聞きて、嵯峨野さかへさきに行いきて、松原まつはらにかくれ居

て見れば、この車くるまども近くやりよせて立たてならべたり。雑色ざふしき、牛飼うしかひなどをば遠くのけて、

侍さむらひ二三人ばかり近くよせて、女房はしたものなど、車よりおりて松まつひき遊あそびけり。姫

君たち車のすだれあけたれば、たしかならねどほのかに見ゆ。少將しょうしょうよくかくれて見るを

も知らず、女房ども、「いとをかものしき物のけしき御覽ごらんせよかし。見苦みくしくも侍はたらず。さま

さまの草くさども萌もえいでたり。なつかしく」など聞きゆれば、中の君おりたまへり。紅梅こうばいの

上に濃こき綾あやの袷うちぎ給たまへり。さし歩あゆみ給たまへる様さまいとあてやかに、髪かみは袷うちぎの裾すそにひとしかり

いづれを梅
と一古今集
雪ふれば
木ことには
ぞ咲きにけ
るいづれを
梅とわきて
折らまし
よろづ人の
つらまじき
に一萬事人
目の傾らる
れば

侍りける。いかでか見奉らむなど思ひわたるほどに、冬にもなりにけり。侍従にいかでか物いはむ、と思ひて、思ふほどの事ども書き給ひて、直衣の腰にさしはさみて、雪のいみじう降りたる日たよすみありきて、都のもとに立ち寄りて聞けば、端近くゐざりいで給ひて、「をかしき四方の梢かな。いづれを梅とわけがたくこそ」といひて、うちはらふ中に、今すこし忍びたる聲にて、琴かきならして、「かひの白根をおもひこそやれ」といひてけり。これなむ姫君よ、と胸うちさわぎて、しのびかねつと都をうち叩けば、「あやし誰ならむ」と見れば、少將たちたまへり。侍従あさましく思ひて、かへりなむとする裳の裾をひかへて、結びたる文をやり給ひて、「よろづ人のつらまじきに」とてかへり給ひにけり。あやしくいかなる文かと見れば、

白雪の世にふるかひはなけれどもおもひ消えなむことぞかなしき

とて、さまざまの事書き給へり。姫君にこれを聞ゆれば、さすがに哀に思ひながら、「餘所なりし當時だにも思ひよらざりし。今はいよく人ぎき見ぐるし。ゆめく」とぞき

とへば―三
の君に也

今は―以下
少將の詞

何しにか―
何の爲にか
知らすべき

に、我が語かたひそめし人こそ琴こもをば弾くと聞きしか、と思ひて「これを聞き給ふにや」と問へば、「始はじめよりあはれに聞きつる」と宣のたまへば、心こころありと思ひて、「これはいかなる人の琴こもの音ね」と問ひたまへば、「我が姊あねにて侍る人の弾き給ふなり」と宣のたまひければ、「兵衛ひやうゑ佐殿すけのどののか」と問ひたまへば、「さにはあらず。宮腹みやはらにておはするなり。常に心こころをすまして琴こもを弾ひき給ふなり」と何心もなく語かたるもいとほしながら、心こころの中には、あさましく計たはれにけるものかな、と思ひつゝ、對たいの方たかにいかばかり嗚呼をこがましく思ふらむ。筑前ちくぜんが口をしさよ。と思ひて、明けもはてねど、出でて筑前ちくぜんを呼び寄せて、恨うらみ給ひけるに、いひやるかたなく、かたはらいたく思ひてぞありける。「今はいふにかひなし、なほ知らぬ顔かほにて過すさむ。あの邊あたりにだも、あなかしこく聞きえさすな」と宣のたまひければ、筑前ちくぜん顔かほうちあかめて、「なにしにか」とてぞたちちにける。

少將は、三の君をもあはれ、と思おもひながら、思ひそめてしことの末なからむのみにあらず、さしも聞きえざりし人だにもか程ほどこそ侍れ、ましていかならむ、とゆかしくぞおもひ

しこの返
事をかき給
へ

かしく思ひあひたまへり。

かくしつよ、日數も經ずしてかよひ給ひける。少將何心もなくてぞ過し給ひける。幼き

さまも理と思ひつよ、晝ちとどまりて見給へば、聞きし程にはあらねども、なべての

人には侍らざりければ、かよひ給ひけり。中納言もたばかられるも知らず。少將に逢ひ

て、よろづ聞えあはせてぞ侍りける。繼母かしづき給ふこと限なし。寢殿の東面に住ま

せければ、少將すぎざまに西の對を見れば、よしある様なれば、いかなる人の住むにや

と、ゆかしく思ひて、あかし暮す程に、少將、秋の夜のつれなくと長きねざめに、悲し

くもの哀なる小夜中に、聞ちかき萩の葉にそよめき渡る風の音も、夜ごとにかよふ心地

して、いとほだ寒き枕の下に、夜もすがらおとなふ蟋蟀の聲も、そのこととなく鳴くに、

涙おさへがたきつまとなるをりふしも、やさしき箏のことの音そらに聞えければ、あな

ゆまし、こは如何に、と思ひて、枕をそばだてて聞き給ひければ、西の對に聞きなし給

ひけり。日比よしありて見るに、いよ／＼いかなる人にか、と心をしづめて思ひ給ふ中

すぎざまに
通りがか
りに

つまとなる
機會とな
る

む―大事に
されん

ねびまさり
―年と共に
美しさ増し

申しえむこ
とも―御返
事を戴くこ
とも

さらば―然
らば先方に
は元の姫君
のつもりに
して三の君
を取持つべ
し

ゑみまけて
―大ほく
ノゝもので
この御かへ

は」とてよろこび給ひけり。その後筑前、少將殿にまゐりて、「申しえむ事はありがたく侍れど、今一度御文をたまひて聞えて見む」といへば、いとうれしくて、かくぞありける。

世とともに烟絶えせぬ富士の嶺のしたの思ひやわが身なるらむ

とかきて、筑前とりて、少將殿の御文とて繼母に奉れば、ゑみまけて、「美しくも書き給へるものかな。この御かへし」と聞ゆれば、三の君たばかられることをば知り給はず、はぢしらひたる姿いとめやすく、いとほしきさまなり。硯紙とりいだして、「それく」と責められて、顔うちあかめて、

富士の嶺の烟と聞けばたのまれずうはの空にやたちのほるらむ

と書きて引き結びたるを、筑前とりて、少將殿のもとに行きて、「御返」とて聞ゆれば、少將たばかられるも知らず、急ぎあけて見たまへば、手なんと幼びれて見えけれども、悦び給ふこと限なし。またもく通はしけり。對の御方の人々この山ほの聞きて、いとを

何か計らば
ん

思ひ放ちた
る一思ひも
よらぬ

ゆく水に一
行く水に

數かくより
もほかなき

は思ほぬ人
を思ふなり

けり」伊勢
物語の歌

對の君一姫
君をいふ西

の對に居れ
ば也

あらか一抗
辯し

いたはられ

にあるべき心地もせねば」とてうち眺めがちにておはするを、見るにもいとほしく、日
毎に行きてほのめかせども、行水に數かく心地して、いひ煩ひありく程に、繼母この事
ほの聞きて、筑前を呼びて、「このほど對の君に文つかはすなるは、いかなる人やらむ」と
問へば、暫はとかくあらがひ侍りけれども、あながちに問はれければ、ありの儘にしか
じかと聞ゆれば、繼母これを聞きて宜ふやう、「さやうの公達は、人にいたはられむとこ
そ思すべけれ。母もなき人よりは、三の君のねびまさり給ひたるに、さるべきさまと思
ふに、みよりにこそ。たばかり給へかし。さらばそこをこそ、この世ならず思ひ侍ら
め」と心ふかくいひければ、さすがに否がたさに、「まことに度々聞え侍れども、御返も
たまはねば、少將殿、筑前をのみ責めさせ給ふもわりなく侍る。さりとても後まで申し
えむことも、かたけに見ゆるも心苦し。さらばさもこそは」といへば、よろこびて、白
き小鞋一かさね、「これは三の君の」とて出し給ひければ、悦びて、「さらば少將殿には、
もとの御志の人なりと知らせ奉らむ」と申しければ、「よく宜ひたり。その由にてこそ



ならばせ給
はねば一姫
君は斯かる
事に馴れぬ
故に

卑しきこと
ならば一相
手が卑賤の
人ならば
おぼえ少
御寵愛少

なにはの事
如何なる

事
いかでか

ひ侍りなむ」とのたまへば、「すきなくしきやうに侍れども、君のかくまで思したらむ事をば、いかで愚には」と聞のれば、いとうれしくて、また文書きてたまひければ、とりて侍従にとらすれば、「ならばせ給はねば、いみじく佗しけに思したる事のいとほしさに」などいへば、筑前、「おのれも卑しきことならば、何しに申さむするに、覺えすくなき御宮仕よりは、この公達におはしまさば、中々めやすきことにてこそ、承るやうにては、その御宮仕の御事もかたくこそ、此少將殿は、今の後の御兄なれば、只今世にいで給はむする人なり、御姿よりはじめて、なにはの事に付けてもひとしき人やはおはする、御ため後めたきことをば如何でか」といへば、「いさや、中納言殿も内参のことより外にのたまはず、なみなくならむさまにおほしよらむ事はよも」といへば、姫君うれしと聞き給へり、筑前、「くだりの御かへしにても給はらむ」とて責めければ、「かやうの事もならばねば」とて、思ひ放ちたるさまを見て、かへりつよこまなくと語り聞のれば、少將、「さこそあらめ、たごなほなくも聞えさせよ、如何なるべきにか、この事かなはずば、世

かたくなは
しさー一徹
なる

おぼえずな
がらー思ひ
もよらぬ事
なれども
かくー斯様
斯様

所せきー餘
る涙が
さのみこそ
はー其位の
事なるべし

も、ありし昔の言の葉さへあはれにとぞ聞き居給へる。さても出でざまに、筑前、侍従を呼びいだして、「右のおほいどのの御子に少將殿とまうす人の御文なり。かやうの事は口入れしにくと侍りながら、やんごとなき人のいたく仰せらるゝ事の否みがたさに」といへば「いさやおほえすながら、宣ひあはすることなれば」とて姫君にしかくの文とて、ひきひろけて御側におきたれば、御顔うち赤めて、兎角の御事もきこえ給はねば、理りと思ひて斯くなどいへば、筑前、そのつとめて少將殿にまゐりて、ありのまゝに聞ゆれば、「さてもく如何おひいでさせたまひたる」と問へば、「まことに此世ならず側光ほどになむ。琴の音搔きならして御座ましよに、筑前まゐりて、そのわかしの事ども人々に語らひ侍りしかば、母宮の御事どもをりく歎き給ひし御すがた、いへばおろかにこそ。女郎花の露おもけにて、まがきの外にたふれ出でたる心地して、その事となく哀にいとほしく、よその袂までも所せきほどに」などいへば、いよく心空になりて、「はじめはさのみこそは、またくも聞えさせよ。この事かなへたらば、この世ならず思

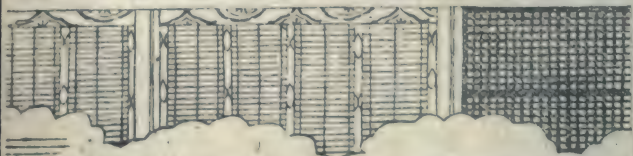
さしとある
人―妻の候
補者

くのみして過ぐす。中納言の宮腹の姫君は見しか」と尋ね給ひければ、筑前、「夫にて侍りしもの、故母宮に侍りしかば、よく見奉りて侍りし。世にうつくしく候ふ。中納言殿は宮仕をと宜へども、打叶はで思し歎くとぞ承る」といへば、「その人の事いひよりて、文など傳へてむや」と宜へば、「かなはむことは知らず、御文をもて参りてこそは見侍らめ」と聞ゆれば、よろこびて、十月ばかりに、紅葉重の薄様に、

はつしぐれ今日ふりそむるもみぢ葉の色の深きをおちひしれとぞ

と書きて、ひき結びてやり給へば、その日の暮れかよる程に、筑前は、中納言の許にまかりつれば、人々めづらしみあへる中に、侍従、「あなゆよし。いかに思ひいでて参り侍るにか。その昔の心地して、いとむつましくあはれにこそ」などいへば、筑前、「はかなきことのみ繁く候ひて、心ならず今まで参らざりし。わが身ながらつらく侍るを、さてのみやはあるべきとて、まうしひらかむとて参り侍るなり。いつと云ひながら、年よりては過ぎ来し方の戀しさの重はしさに、人々をも見奉らむとて」などいひて、姫君

申しひらか
む―無沙汰
の言譯せん



目と得る
むかひばら
—今の妻の
生める子
おどろかし
—注意し

思ふさまな
る人—氣に
入りたる女
あつかれて
—落ち付か
ぬことなり
夫にてあり
ける—親な
るべし
をさなおひ
—幼時の兒
がら
曹司—部屋

君、三の君むつれ遊び、互にむつましく思ひてあかし暮し給ひけり、「故宮の仰せられし御宮仕のこと如何に」と御乳母わすると時なくおどろかし侍りければ、中納言「われも怠る時なけれど、北方に聞えあはせむに、我子ならねば心に急がむことも難ければ、いひも出です」と思ひわづらひ給ひけり。かくて月日重りゆくほどに、右大臣なる人の御子に、四位少將とて世に勝れたる人侍りける。いかにも思ふさまなる人もがな、と朝夕は御心も空にあくがれて物悲しきに、右大臣のはした者に、そらさへといふ者の夫にてありける下仕になりて、筑前と聞ゆるなむ、中納言宮の世までは、主殿太夫といふものを夫にて侍りければ、朝夕にこの姫君をば見聞えけり。筑前、右大臣の家の北方にて人のよしわろき事語るついでに、「中納言宮腹の姫君こそ、をさなおひめでたく、二葉の小萩を見る心地せしか、いかにおひいで給ひたらむ。故母宮のうせ給ひて後は、四五年は見侍らず」といふを少將立ち聞きたまひて、いと嫉しき事を聞きつるものかな、と思して、我が曹司に筑前を呼びて、「見るらむやうに、さちとある人数多あれども、物憂



なべてのにはあらぬに
 並々の容色にはあらぬ
 ありつかはしく一似合
 住ませ一姫君を
 聞き人には一人前にて
 はていかゞ一行末如何
 にならんかきくしり
 胸ふさがりて
 まみやす
 く一死して
 し心安し

すにやとぞ見え給ひける。この姫君の御乳母子に、侍従ときこゆる侍りけり。年は姫君に今二つ許のまさりにて、姿有様ありつかはしく、ものなどいひ出したる様も、いとあらまほしくぞ見え侍りける。これぞ姫君につきそひて、互に片時も立ちはなれむも物憂く思ひてぞ明しくらし給ひける。中納言、西の對しつらひて住ませ侍らむとて、その營にてぞ侍りける。繼母こころの中にはいかど思ひけむ、人ぎきには聞ゆるやう、「誠に母宮におくれ給ひて後、迎へ奉らまほしう侍りつれども、今日々々とのみ思ひて過しつるに、わかき人々あまたおはする、互につれなく慰めて、いと嬉しきことにこそ、いかにをさなき心地に、その昔戀しくおほし出づらむ。あなあはれや」と聞ゆれば、乳母「まことに年比あやしき所に埋れておはせしに、はて如何など、かきくもり悲しく侍りしに、これを見奉れば萬はれぬる心地して、よみぢ易くこそ」など云ひつどけて、うち泣き侍りけり。

むかひばらなれば、中の君には兵衛佐なる人あはせてけり。西の對に住みたまへば、中の

慕ひまほし
き一誤ある
べし
こしらへお
き一賺しお
き

たまふる一
この處誤あ
るべし

迎へて見聞
えむ一手許
に取引りて
世話せん
中の君三の
君一次女三
女共に繼母
の娘

すめたち一所に住ませまほしく思しながら、今も昔もまことならぬ親子の中なればとて、乳母のもとに住ませきこえ給へり。日數ふるまよに、光さしそふ心地して見え給ひければ、乳母、「あはれ、この御氣色を故宮に御覽せば、いかばり思しかしづき給はむ」などいひて、御髪をかきなで、泣くより外のことなかりけり。

十餘にもなり給ひければ、乳母、中納言に申しけるは、「幼くおはします程こそ、とてもかくも侍れ。この一年二年になりて、いかにならせ給ふる、年月心もとなくなむ。悲しく故宮のおほせ候ひし御宮仕いかに」ときこえければ、中納言「嬉しくも心に懸けぬることよ。我も忘るゝ時なけれども、思ふにかなはぬ事のみにてこそは過ぎゆき侍れ。さりながら迎へて見聞えむ」とて、正月の十日と定めて歸り給ひぬ。やうやう其日にもなりぬれば、迎へ奉り給ひたれば、今二人の御女たちと打語ひておはしますを見て、いと嬉しき事にぞめやすく思しける。中の君、三の君は、とりぐにいと匂ひやかに、なべてのにはあらぬ御氣色なれど、姫君は、今一しほにほひ加はりて、光るなどはこれを申

なみ／＼ならんふるまひ尋常の人の妻となること
 おとりてや一娘を思ふこと故に劣らんや
 昔がたりになりはて一死亡し
 ことのほにつけて一事に禍れて
 故宮一亡母わたり去り
 見聞えに見てやりに

奉らせたまへ。他娘たちにおほしおとすな」と泣く／＼きこえ給へば、中納言もうち泣き給ひて、「我もおなじ親なれば、おとりてや」など語ひつゝ、明しくらす程に、世の哀にはかなく常なき所なれば、なさけなく昔語になりはてにけり。中納言おなじ道にと悲み給ひながら、後々の事もさるべきやうにして、四十九日もほどなう果てぬれば、もとの北方へ渡りたまひにけり。姫君をさなき御心地に、ことのはにつけて、故宮の御事を思しつゝ悲しみ給ひてけるに、中納言さへわたり給ひぬれば、いとど徒然かぎりなく、二葉の小萩露おもけなりければ、御乳母とかく慰めてぞ過し侍りける。

中納言、ともすれば見聞えにわたりて、かへり給へば直衣の袖をひかへて、行方もしらぬほどなれば、涙を流しつゝ暮ひまほしきけしきを、御覽するにつけても、はかなくなりにし人の俤ふと思ひ出づるにも、胸うちさわぎ、おさふる袖もあやしくて、いとど心苦しくこそ侍らむ、など語らはせ給ひて、こしらへおき、我にもあらぬ心地して歸らせ給ひにけり。かへり給ひても、姫君のおほし歎きつる面影の御心にかよりて、ことむ

住吉物語

かけたる一

兼ねたる

うへ一妻

通ひ一妻生

家において

夫の方より

通ふは古代

の通習

おひいで一

生長し

うしろめた

う一心がか

りに

むかし、中納言ちゆうなごんにて左衛門督さゑもんのかみかけたたる人侍りけり。うへ二人をかけてぞ通ひ給ひける。

一人は、時めく諸大夫しよだいおのむすめ、その腹はらに女君二人をんなぎみふたりいできたまへり。いま一人は、ふる

き宮腹みやはらの御女みよめにておはしけるが、いかなる宿世すくせにて、この中納言ちゆうなごんよなく通ひ給ひける

程に、やがて人目もつよまずなりて、摺すみわたり給ひけるが、ひかるほどの女君をんなぎみいでき

給ひける。思おもひのまよなれば、おほしかしづき給ふこと限なし。

姫君ひめぎみ日數ひかずふ經るまよに、おひいで給へり。年月かさなりて八つばかりになり給ひける年、母

宮例みやならず惱なやみ給ひけるが、日ひを經へて重おもくのみなりまさり給ひければ、中納言ちゆうなごんに聞きこえ給

ひけるやうは、「我われはかなくなりなば、この稚ちひきものよため、うしろめたうなむ侍はべるべ

き。我われなからむあとなりとも、なみくならむ振舞ふるまひせさせ給ふな。いかにもく、帝みかどに

落窪物語終

いはずとも、けにと見えたり。帥すぢは、この殿このの御徳おんとくにて、大納言だいなごんになり給へり。おもしろの駒こまは、病重やまひおもくて法師ほうしになりければ、音おとにも聞えぬなるべし。典藥助てんやくのすけは、蹴けられたるを病やまひにて死にけり。「これかくておはするを、見ずなりぬるぞくちをしき。などてあまり蹴けさせむ。暫生しばしいけて置おいたらむものを」とぞ、男君おとこぎみ宣ひける。女御にようごの君家司きんけいしに、和泉守いづみのかみなりて、御徳おんとくいみじう見ければ。むかしの安濃あにぞう、今は典侍ないしのすけなるべし。典侍ないしのすけは、二百まで生いけりとや。

みそかに―
密に

御櫛笥殿―
禁中の御裝
束所の係

なりあがり
―昇進し

臣の北方、后の御母と見え給はざりき」とて、猶むかしの人々は、みそかごともいひける。三の君は、中宮の御櫛笥殿になむなし奉り給ひける。帥は任はてて、いとたひらかに四の君の來たるを、北方うれし、とおほしたる。理ぞかし。かく榮えたまふをよく見よ、とや神佛もおほしけむ、とみにも死なでなむいましける。大殿の北方、「いといたく老い給ふめり。功德をおもほせ」と宣ひて、尼にいとめでたくなし給へりけるを、よろこび宣ひていますがりける。「世にあらむ人、繼子にくむな。繼子なむ嬉しきものはありける」と宣うて、またうち腹立ち給ふ時、魚のほしき時には、「我を尼になし給へり。産まぬ子は、かく腹ぎたなかりけり」となむ宣ひける。死に給ひて後も、只大殿のいかめしうし給ひける。衛門は宮の内侍になりにけり。後々の事は次々に出で來べし。御子の少將の君達、一よろひになむなりあがり給ひける。祖父大臣亡せ給ひにけれど、「我思はばなし落しそ」とかへすふ、宣ひければ、わづらはしくやんごとなきものになむ。弟の君をば思ひ給ひける。左大將右大將にてぞ、續きてなりあがり給ひける。母北方、御幸

に
せめて一切

宮の亮―皇
后宮職の次
官

御後見はいとよくしはべりなむ」と、后宮してもせめて申させ給へば、帝「何かは、生きて物し給はむこそ嬉からめ」とて、左大臣を太政大臣にはなし奉り給ふ。世人、「まだ四十になり給はで、位を極め給へる事よ」と驚きあへり。御女の女御、后に居給ひぬ。宮亮には、少將を中將になしてなむせさせ給ひける。兵衛佐達、皆よろこびし給ふ。太郎の兵衛佐、左近衛少將になり給ひぬ。祖父大臣、「我が兵衛佐をおそくなしたまふ」と宣へば、「いとわりなき事、おのれが子のかぎりを、事のはじめには、いかどし侍らむ」と申し給へば、「これは御子かは。翁の五郎に侍れば、何かは人の謗り侍らむ。さきには御太郎、左近の司になりしかば、こたみは右近の少將になせ。叔父にて、甥になり劣るやうやはある」と宣うて、よくよく、しぶくりに思ひ給ふめり、と内裏に切に奏せさせ給うて、右近衛少將になし給うて、「かうこそ見め。この子疾くうまれたらましかば、これにぞ我が官冠も譲らまし」と宣ひける。かなしうし給ふとは尋常なりや。「大殿の北方御幸を、めでたし、とは古めかしや。落窪に、ひとへの御袴の程は、かく太政大

いどませ—
競争せさせ

面だたしく
—面目なり

ひけり。左大臣の太郎、十四にて御冠、姫君、十三にて御裳著せ奉り給ふ。二郎君をも、おとさじとせさせ奉り給ふに、父大臣、かくいどませ給ふ。と笑ひたまふ。年かへりては、姫君内裏に参りたまはむとて、限なくかしづき給ふ程に、はかなくて年かへりぬ。二月に参らせ給ふ。書かすとも、儀式ありさま思ひやれ。かぎりなくをかしけにおはすれば、いと時めき給ふに、いとど后宮、思ひ聞え給へれば、はじめさふらひ給ふ人々よりも、こよなく花やぎ給ふ。播磨守は、辨になり給ひにけり。かの衛門が男の三河守は、左少辨にてなむありける。辨の北方にて、あまた子産み出でて、いと面だたしくて、まるりまかでしける。かよるほどに、大殿御心地なやみ給うて、太政大臣かへし奉り給へど、帝更に用ひたまはねば、いといたう老いて侍れど、公を見奉らぬが悲しさに、今まで参り侍りつるなり。今年なむ、つよしむべき年に侍れば、こもり侍らむと思ひたまふるに、この職にては、公のやんごとなき政事に参らでは、いと便なかるべし。辭し奉るかばりには、左大臣をなさせ給へ。才けしうははべらざめり。されば翁よりも

妹どもの一
駒の妹達

我やはせし
—母北方が
我やは此事
はせしとい
ひて悲しみ
し事
めやすく—
安心すべく

たまへれ」といふめれども、四の君も、なほ萬にし給ふめるものを、と思ひて、「よかなり」といふ。少將も「猶々」といひて、「我れ奉らむ」とて取りてけり。おもしろ駒は、思ひよらざりけれど、妹どもの心ありければ、子などあれば、と思ひて、たゞにやはとてしたるなりけり。

夜更けてなむ母北方歸りける。寅の時に皆くだりぬ。車十あまりなむありける。おほやけの「疾くまかれ」と宣旨くだりければ、山崎にも居たらで、やがて急ぎ下りにけり。おくりの人々も、皆帥、物かづけてなむかへしける。殿の御達皆かへり参りて、日ごろのものごたり、我やはせし、と宣ふ事をかたれば、笑ひになむわらひ給ひける。北方、しばしは見ぐるしきまで戀ひ泣きけれど、日ごろ過ぎにければ、うちわすれにけり。帥は、播磨守待ちうけて、いみじういたはりける事は書かず。左大殿、「一所はめやすくなしつ。今一所だにしたてばや」となむ宣ひける。かくて、年月經るに、めでたき事どもなむまさりたりける。大貳は、たひらかにくだり著きて、左大殿に、物いと多く奉り給

洲濱—海濱
景の遺物

ひれ—領巾
婦人の項に
懸けて飾と
せし物
おぼえなく
—案外なり

いそぎ立ちていとさわがし。北方きたのかた泣くく、かへりなむ事を思ひわびて、四の君をとらへて泣き居たる程に、黄金こがねして、透箱すうばこを衣箱ころもばこの大きさに結むすべるに、朽葉くちはの羅らに包みて入れたり。「何處どこよりぞ」と問へば、「たゞ自おのづから御覽ごらんすべきなり」と申して、使歸つかひかへりぬ」と申せば、あやしくて見れば、羅海らうみの色いろに染そめて、しきには敷きたり。黄金こがねの洲濱すはま中にあり。沈せんの船ふねうけて、島に木ども多く植うゑて、洲崎すさきいとをかし。物や書きたる、と見れば、白しろき色紙ししにいと小ちひくて、船ふねの浮うきたる所に貼ありたり。放はなちて見れば、

今はとて島こぎはなれ行く船のひれふるそでと見るぞかなしき

聞ゆるからに人わろし。よし／＼聞えじ

と書きたり。おもしろの胸むねの手なれば、おぼえなくあさまし。誰たれかしいづらむ、と北方きたのかたも見て、驚おどろきあやしがる。四の君、あはれにいひ契ちぎりなども、例たひのやうにもせざりしかば、思おもひ出づる事はなけれど、これを見るにぞ、さすがに思おもひ出でらるる。少將すうしやうは、「これこゝろを左大ひだり殿の姫君ひめぎみに奉たてり給たまへ」といへば、母北方ははきたのかた、「をかしきものにこそあめれ、猶なほ持

らうたくせ
させ—愛し
故祖父殿の
云々—この
女を四の君
の妹のやう
にいひなし
たるなり

たどに—空
手にて

らむを、らうたくせさせ給へ。故祖父殿の、いみじくかなしうし給ひしかば、こよにて
も生ふし立てむとものし侍れど、かの母北方、一人ものし給ふを、せめて心苦しがりて、
添へらるよなめれば、え留めでなむ」と宣へば、帥、「堪へむ心の限は仕うまつらむ」と
いふ。暮方にまかり出づれば、御装束一領かづけ給ひ、かしこき御馬二つ奉り給ふ。い
とこまかにし給へり。かへりて、帥、四の君に、「かうくくなむ宣へる。ちひさくおはす
る君はいくつぞ」と問へば、四の君、「十一ばかり」といらへ給へば、「老いたりと見し大
殿の、いかに幼き子持給へりける」といふもをかし。帥、「殿の御達のかへらむに、何か
賜へたる」と問へば、四の君、「何か取らせむ。さるべき物もなければ」といらへ給へば
帥、「いといふかひなき事のたまふ。この日比ありくくて、たどに歸し奉らむとおほしけ
るよ」と、恥しけに宣うて、これはおろかななる心ぞかし、と帥は思ひて、残るものありけ
るを取り出でて、大人三人には絹四匹、綾一匹、蘇枋一反、童女には絹三四、蘇枋、下
仕には絹二匹、蘇枋そへて取らすれば、帥は情ありけりとおもふ。さて時とりて、曉に

身を分けて君にしそふるものならば行くもとまるも思はざらまし

となむありける。北方への今宵の御かへりをなむ見て、母北方、泣くとはおろかなり、悲しうするむすめになむありける。「七十に我はなりなむとす。いかでか六七年生けらむとする。あひ見で死なむこと」と泣けば、四の君、いみじう悲しうて、「さればこそ、いかがとは聞え侍りしか。強ひて御心とつかはすにこそ侍るめれ。今はとどまり侍るべきにあらず。心づくしになおほしそ。さりともあひ見侍らでは、やみ侍らじ」といへば、母北方、「我やはこの事はせし。左大殿のし給ひしかば、悲しき目を見せ給はむとて、腹きたなきわざをし給ふなりけり。何か嬉しと思ひけむ」と宣へば、四の君、「今はいふかひなし。暫の程にても、御手離るべき宿世こそは侍りけめ」といひなぐさむ。少將、「世にかくばかりやは、親子の別はすれど、かよる事、云ひつゞけて泣かずかし。聞きにくしや」と制しゐたり。帥は、左大殿にまかり申しに、参り給へり。大臣、対面し給うて、物語し給ふ。「よそにても志侍りしを、今はましてなむ。そのちひさき人の下り侍

まかり申し

一嘆乞

よそにても

一他人なり

し時し

の神に手む
くる品々を
入るゝ袋

しら雲の
立つの序

近きほどに
だに―せめ
て御近處に
居る中に

又ちひさき衣箱一具あり。この御女に遣せ給へるなるべし。片つ方には、御装束一具、片つ方には、黄金の箱に白粉入れてするゑ、ちひさき御髪みげしの筒はこ入れたり。くはしく書くべけれど、むづかし。姫君の御文には、

今日のみと聞き侍れば、何ごこちせむとなむ

惜しめどもしひて行くだにあるものを我が心さへなどか後れぬ

とあり。帥見て、「いと多くの物どもなりや。いと斯くしも給はでありなむものを」といふ。御使どもに物かづく。四の君、更にきこえさせむ方なくて、

しら雲の立つそらもなくなしくて別れ行くべき方もおほえす

賜はせたる物どもを、人々見るも嬉しく、いみじう物さわがしうて。

となむある。むすめの君の御かへり、

これよりも、近きほどにだに聞えさせむ、と思ひ給へる程になむ。おくれぬものは
こよにも、

こゝの人云
云一落窪方
の人の中下
る人と中よ
き者を以て

御供にくだる人々に、北方きたかたいとよくしたる扇あふぎ二十、螺かきすりたる櫛くし、蒔繪まきゑの筒はこに白粉しろこ入
れて、こゝの人の語らひけるして、「形見に見給へ」とて取らず。御達ごたちも、思ふやうに心
ばせありて人に思はるよ、と嬉うれしく思おもひ。人もめでたういみじと思ひて、おのゝかた
らひ契ちぎりて、かへりて、「この殿をよしと思へれど、かの殿を見つれば、儀式ぎしきよりはじめ
て、けはひことに見侍るに、心こそ移りぬれ、あはれ仕つかうまつらばや」と忍しのびつよいひ
あへり。つとめて御文ごぶんあり。

よべは、ほどへむ年のつもりを、取りそへて聞えむ、と思ひ給へしを、夜短よひぢかき心地
して、はかなき身を知らぬこそ、哀あはれに思ひ給ふれ。

はるばると峯みねのしら雲立ちのきてまた歸りあはむ程のはるけさ

まことに道のほど見たまへ。

とて、蒔繪まきゑの御衣みえ櫛くし一具ひとひしに、片かたつ方かたには、正身かうじみの御装束みゑぢふく三箇さんか、いろゝの織物おりのものうちかさ
なりたり。上うへには、唐櫃からびの大きさに満みちたる幣袋はにふくろに、中なかに扇あふぎ白しろ入れて、うち覆おほひ給へり。

正身の一本
人、四君の
幣袋、道筋

こよなや—
此の上なし

歸り参りなむ」と申したれば「京におはせむ限は、仕うまつりはてよ。又下らむと思はむ人は、参りもせよ」といはせ給へれば、「これもいと苦しきことは、あるまじかめれど、暫のほど見るに、わが君に似奉るべくもあらざめり。初より見奉りそめて下りなむは、いかどせむ。同じほどの殿にだに、御心よからむ方にこそ仕うまつらめ。いはんや更にこよなや。萬の事淨土の心地する我が殿をうち捨てて、退らむこそ物ぐるほしけれ」と下仕まで思ひて、一人も下らず。おとな三十人、わらは四人、下づかへ四人なむ率てくだる員に定めたりける。日の近うなるよに、同胞たちみな渡り集まり給ひて、今はわかれ惜み、あはれなる事を宣ふ。人々参りあつまりて、装束き花めきたるを見れば、「大殿にうちつゞきては、この君ぞ幸ましくける」といへば、「これも誰がし奉る。その御幸のゆかりぞかし」と口々に云ひあへり。明後日くだりたまふとて「左大殿に對面し奉らでは、いかでかは」とて参り給ふ。車の多からむは所狭し、とて、三つばかりしてなむうち渡しける。北方對面して聞え給へる事どもは、書かず、思ひやるべし。たれもく

ゆめ／＼／＼
決して

今参下人
の新参者

一つ腹の云
云一四の君
と同胞たる
我だに

こよの御達も、いかゞ見ましとなむ嬉しき」といへば、北方、「いや／＼繼子の徳をなむ見る。さ知り給へ。このあんなる子、ゆめ／＼／＼憎み給ふな。おのが子どもよりもかなしう思ひ給へ。おのれが昔憎まざらましかば、暫にても恥を見、いたき日は見ざらまし」と宣へば、四の君、「實に理」といふ。母北方見るに、帥はいと物々しく、ありさまよければ、「さいへども、やんごとなき人のし給へる事は、こよなかりけり」とよろこぶ。かくていといそがはし。今参ども、日に二三人まゐりぬ。いと花やかなり。少將これを見るにも、左大殿をいみじう思ふ。播磨守は、國にてえ知らざりければ、人をなむ遣りける。左大殿の北方、この君に、かう／＼の事しいで給へり。この月の二十八日になむ、船にのり給ふ。その國に著き給はむ。獲まうけ給へ」といひたれば、守、よろこび思ふ事かぎりなし。一つ腹の我れだに聲どりせむとは思ひよらざりつるを、この君は、猶我等を助け給はむとて、佛神のし給ふ、と思ふ。國守のよしりて、人々の著くべき設したまふ。この守、母にも似ていとよくなむありける。左大殿より渡りし御達、「今は

心しらひー
注意し

盒器—食器
蓋あるもの

へ。旅にはあらはなる事もあるものぞ」とて奉り給ふ。北方、よろこぶ事さすが限なし。「人は、産みたる子よりも、繼子の徳をこそ見るべけれ。我子七人あれど、かく細に心しらひかへり見るやはある。物のはじめに、この子のなりの養えたりつるを思ひつるに、限なくも嬉しくもあるかな」と例よりも心ゆき喜ぶも、帥殿へいけと計ひたるが、限なく嬉しきなりけり。暮れぬれば、車二つして渡り給ひぬ。四の君、いとうれし、と思ひて、日ごろのありさま語る。むすめは、このごろの程に、いと大きに、をかしうさうぞきて居れば、まづかき撫でて、いとかなしと覺ゆ。「これをいかにして率て下らまし、と思ひなむみだれ侍る。まろが子と知らせむ、恥しき事」といへば、北方「左大殿の上は、しかく宣ひける。いとよき事なり。まろが著たるもの、此子の著たるもの、あの殿より給へる」といへば、「かくいみじく宣ひ思しける人を、なとて昔おろかにおもひ聞えけむ。まろがうへをなむ、なかく親たちに優りて。殿の御盒器をなむ一具たまへる。人々の装束、几帳屏風よりはじめて、たどおほしやれ。これ斯くし給はさらましかば、

さだめしら
云々少將
のかねて思
ひ定めし通
り

はかなき事
―細事

すくよか―
健、しやん
としたる
わたり給ふ
―北の方が

は」と宣へば、さだめしもしるく、「その事をなむ、かしこにもなけかるめる」といへば、帥、「はやよろしう定めて、此方にわたし奉り給へ。其方にまゐり給はむ事は、猶あしくなむある」といへば、少將、「さらば、かくなむものし侍らむ」とて立てば、四の君、「かならずく、よくそよのかし給へ」とのたまへば、「承はりぬ」とて出でぬ。母北方の御許に来て、腹だたせ給へる怖しさに、ありつるやうに、かうく、左大殿のうへの宣へる事、しかんくといひて、「はかなき事なれど、人におとるまじく故あり、かしこくこそ宣ひしか。心に幸あるものなりけれ」と云ふ。北方、いくべき事を、限なくよろこびて、「けに／＼よくも思しよりけるかな。三の君もいざ給へ。夜さりにてちと思ふ」と宣へば、「いとにはかならむ。明日などやよろしう侍らむ」と云ふ。明けぬれば、渡らむのいそぎし給ふ。「すくよかなる衣どものなきぞ、いといとほしき。かくしの方にやあらむ」と宣ふ。左大殿、渡り給ふと聞きて、御衣などは、鮮明にもあらじとおほしやりて、いと清けにしおきたる御衣一具、また姫君の御料なる一領、一小さい人に著せ奉り給

あへぬべき
—然るべき

その子とはな知らせさせ給ひそ。御供にて率て下り給ふとも、一人おはせむが御心細きにとて、北方のそへ奉らせ給ふにてありなむ」と宣へば、少將、いと思ふやうに思ひやりありて、めでたくぞ宣ふ。嬉しうあらまほしき御心かな。我が親の非道に腹立ち給ふこそ、物いふかひなけれ、と思ひて「いとよう宣はせたり。さらばしかものし侍らむ」とて、殿へいくも苦しけれど、戀しと思ひ給ふにこそあらめ、と思ひて、(脱文)女君も同じ所におはす。「いかで物聞えさせむ」といへば、帥「こよにて聞え給はむにもあへぬべき事ならば疾く入りて聞え給へ」といへば、少將入りて、「しかくなむ」といへば、女君實にいかで對面せむ。こよにもいと戀しくなむ思ほえ給へば、いかで参り來む、となむ昨日聞えたりし」と宣へば、帥「かしこへ渡り給はば、二所通ひせむ程に、ものしく、おのが爲になむあしかるべきを、辱くともこよに渡らせ給へかし。人侍らばこそ、つましくも思さめ。幼き人ばかりなむ。それを便なかるべくば、放れたる方におき侍りなむ。京にもものし給ふべきほどは、實に今日明日ばかりなり。對面なくては、いかでか

やすくすまじかめり。我れこそ人を随へしか。人に随ふ身となりたるが悲しき事。又
我がいふ事、おなじ心に答へたる子こそなけれ」と宜へば、少將、例の腹たち給ひぬ
と見て、「何しにかは。云ひ合せ給ふ便なれば、しか申しはべるに、かくさいなむなむ
いとこそ苦しけれ」とて立ちぬ。うれしと夜盡よろこべど、腹だに立ちぬれば、なほ辨
にてかくなむありける。少將、左大殿にまゐりて、北方に、かうくくなむ侍りつる。
その事とはいはで、戀しく見まほしく宜ふとかたれば、北方、「理にこそはあなれ。はや
渡し奉りたまへかし」少將、「帥も、渡れとも思ひ給はざらむに、ふとものし給ひなむ。
便なかるべき」といへば、北方、「それもさるべき事。さらば御みづからおはして、帥の
聞かむ折に、御消息とて、いと戀しくなむ思え給ふを、あからさまにまれ渡り給へ。速
くおはすべき程も、いとこのり少くなりたれば、いとあはれに心細うなむ。これより
まれ出で立ち給へ。京におはせむ限りは見奉らむ」と宜ふと聞えたまはむにつきて、そ
こにおのづから氣色見えなむ。それに聞ひて、わたりも迎へもし給へ。その小き君は、

あからさま
一時

まれにも
あれ

そうくー
雙々の字音
か

あははずー
かなはず
ひそみー眉
をしわめて
愁ひ

式部大夫も、送りせむとて、暇朝廷に奏して、皆下るに、帥かづけものどし給へば、人の装束にとて、絹二百匹、染草ども、皆あづけ給へば、四の君、そうくと並べて、取りふれむ方なし。爲やらむやうもおほえて、母北方にいひやる。「かうくのものどもせよとて、絹どもあめれど、いかどし侍らむ。殿よりはべる人々も、若うのみありて、云ひ合すべき人もなし。いと戀しくもおほえさせ給ふを、幼き人も見まほしく侍るを、忍びて渡り給へ」と言ひやりければ、北方、少將を呼びて、「かくなむいひたる。夜さり忍びてわたらむ。車しばし」と宣へば、「忍びてと思すとも、人もまさに知らじや。また旅だちたるに、きらくしき子もたまへる、子引きさけて居たらむ、いと見苦しからむ。亡せにける妻の子たちとて、十ばかりなるあるを、帥は喚び出でてつかひ給ふめれば、いとあはれなめり。わが左大殿のうへに申し給うて、よかなりとのたまはど、渡り給へ」といへば、北方、いとあはれ思ひて、「あの殿のゆるしなくば、親子の面も見で、くだしてむずる」とて、只ひそみにひそみ給うて、「何事もこの殿のおはせむかぎりは、え

かゝるやん
ごとなき人
—左大臣

はじめの腹
—帥の前妻
の所生

おき奉りては、いかで」と宣へば、帥、「さは一人罷りくだれとや。たどかく一二日見給ひて、やみ給ひなむとや」おほし笑ひたまふさま、いとやすらかなり。女君を、帥、容貌はをかしけなめり、心やいかどあらむ、と飽かずおもひけれど、かゝるやんごとなき人の、わざとし給へるに、今日明日下るべきに、すつべきにあらず、と思ひて、「諸心に何事もし給へ」とて、俄に迎ふれば、「けしうはあらぬ聲どり、いと疾く迎ふるは」と笑ひ給うて、御おくり、さるべき人々むつまじき、御前にはさし給へり。車三つして渡り給ひぬ。殿よりありける御達、「今は何しに参らむ」などいひければ、北方、「猶参れ」と強ひて遣り給ひつ。我がそひてありき給ふ所にもありければ、もとの御達、いつしかとも代りる給ふかな。御心いかならむ。君達の御爲、あしういみじうもあるべきかな。只今の時の人の御族とて、おしたちてあらむかしなど、おのがどち言ひあへり。はじめの腹とて、太郎は權守、三郎は藏人より冠賜はりてある。このごろ死にたる腹の女子十、二つなる男子なむありける。この二人をなむ、父かなしくすとはおろかなり。權守も、

日たけつゝ
云々―朝も
遅く歸り行
きし也

めは見聞きし、と思して、「いかに、まる見はじめ給ひし折、始めてやんごとなくのみ、おもほし増りけむ」と宣へば、殿いとよくほよ笑みて、「さて虚言ぞ」と宣ひて、近うよりて、「かの落窪といひたてられて、さいなまれ給ひし夜こそ、いみじき志はまさりしか。其夜、思ひ臥したりし本意の、皆かなひたるかな。これが答に、いみじうちやうじ伏せて、後には喜ぶばかり願みばや、となむ思ひしかば、四の君の事もかくするぞ。北方は嬉しと思ひたりや。景純などは、思ひ知りためり」と宣へば、女君、「かしこにも嬉しとのたまふとき多かめり」と宣ふ。暮れぬれば、帥いましぬ。御供の人々に物かづけ、饗などせさせ給ふ。四日よりは日たけつゝなむ出でける。もの／＼しく清けにめやすし。おもしろの駒と、ひとつ口にいふべきにあらず。帥のいふ、「罷り下るべき程いと近し。認むべき事どものいと多かるを、明けぬればまかり、暮るれば参るに、怠りてなむあしきに、彼所に人もなし。わたり給ひね。又下らむといはむ人召し集めて、はや思ほし立て、日はたゞ十餘日になむある」と宣へば、女君、「遠かなる所に、たのもしき人々を

とみ一急

こひぢ一戀
路、泥日とり一日
を定め
今始めたる
やうに一初
婚の通に

し」とせめて宣へば、何のゆかしうおほすならむとて、さし出し給へれば、「いたう書きそへためるは」とて、「御かへり給へ」とて、又さし入れたまふ。「はやく」と硯紙具してせめ給ふ。四の君、返事もこの殿の見給ひつべかなり、といと恥しくて、えとみにも書き給はず。「あな見ぐるし。はやく」と宣へば、物もおほえで書く。

我ならぬこひぢも多くありそ海の濱の眞砂は取りつきにけむ

とて、ひき結びて出し給へれば、大臣、「あなゆかしのわざや。この返事は、見でやみぬるこそくちをしけれ」といひ居給へるさま、いとをかし。使に物かづけさせ給へり。帥は、この二十八日になむ、船に乗りなむ日とりたりければ、出で立ち更にいと近し。かくて左大殿には、三日の夜の事、今始めたるやうに設け給へり。人は只かしづきいたはるになむ、男の志もかゝるものを、といとほしき事そはりて思ひなる。「細にと口入れ給へ。こよにて事はじめしたることなれば、おろかならむ、いとほし」と宣へば、女君、むかし我を見はじめ給ひし事、思ひ出でられて、いかにおもほしけむ。安濃は、心うき

君―落窪

たぐひなむある。世にもおろかには思はじ。互かたみに心あはぬ氣色したるこそ、かしこくもあらぬ事ぞ。まづ君を、例れいの懸想けきうのやうにやは、わびいられ聞えし。思ひ出でて時々聞えしかど、みそめ奉りし後なむ、等閑なほざりにてやみなましかば、と悔くやしかりし。さ思おぼゆるぞをかしき」など、語かたらひ給ひて、二所ふたどころながら起きて、こなたにおはしぬ。四の君、まだ帳ちやうの内に寢給ねへり。北方きたのかた「起き給へ」と起し給ふほどに、帥そらの文もて來たり。男君取り給うて、「まづ見侍まへらまほしけれど、隠かくさむと思す事も書きたらむとてなむ。後にはかならず見せ給へ」とて、几帳きちやうの内にさし入れ給へば、北方きたのかた取りて奉り給へど、ふとしも取り給はず。「さば讀み聞えむ」とてひきあけ給ふ。四の君、かの始はじめのおもしろの駒こまの書き出したりし文ふみを思ふに、又さもやあらむ、と胸むねつぶれて思ふに、讀よみたまふを聞けば、逢ふことのありその濱はまの眞砂まきごをば今日けふ君思ふかすにこそ取れ

いつのまに戀こひの、

となむありける。「御かへりはや聞え給へ」とあれど、答こたへもし給はず。大臣おとぎ、「その文ふみしばりに」

この北の方
―落窪の君

人―夫とす
べき帥
かなふまじ
―辭退しが
たからむ

事ども申し給へど、なか／＼初はつめよりもはしたなく、恥はづかしうおほえて、御答おたへもをさ／＼聞え給はず。この北方きたのかたの三つが弟にて、二十五になむおはしける。おもしろの駒こまは、十四にて聲こゑとりて、十五にて産うみ給へりけるなり。この北方きたのかたは、二十八になむおはしける。三日みかふか四日の程に、此君をいたはりかしづき給ふ事かぎりなし。七日になりて、西の對たいに、われ諸共もろともにわたり給ひぬ。御供おんごしの人々、養なえたるは、裝束きうそく一具ぐづつ賜ふ。人すくななりとて、我が御人おんひと、大人三人、童一人わらわひひとり、下づかへ二人とわたし給ふ。裝束きうそくどもしつらひたる儀式ぎしき、いとめでたし。母北方きたのかた、他同胞達たほからたち、只ただこよになむ來ける。暮くれ行くまよに、出で入りいそぎ給ふ。弟せうせの少將せうしやう、辱かたじけなくうれしと思ふ。夜うち更ふけて帥そらいましける。少將せうしやう、しるべして導みちびきて入りぬ。一四の君、人もいふがひなくあらず。この殿とのちかく居ゐ起たちてし給へば、かなふまじかりけり、と思ひなしてなむ出で給ひける。手あたりけはひなどのをかしけなれば、嬉うれしと思ひけり。聞え給ひけむ事は、聞かねば書かかず。明けぬれば出で給ひぬ。北方きたのかた、いかに思ふらむと歎なげき給へば、一ふ文ぶんはたび／＼やらねど、心長ながき

こゝに云々
―此方にて
用意おきた
るを用ひて

御女―面白
の駒の生ま
せたる子

殿どのに参りて、しかゞなむと、ありつる事を申し給へば、北方きたのかた 四の君の宣ひける事を
哀あはれがりて、「さも思おぼすべき事なれど、世にある人は、かよるたぐひ多かなり、と思おぼしな
すべく」とのたまふ。殿どの聞き給うて、「北方きたのかただにさ宣はば、正身まうじみものしと思おぼすとも、疾ざくし
てむ。いとよき人なり。この月晦日つごもりにくだるべし。同じくば疾くと宣ひき。はや四の君
こよにわたし給へ」と少將せうしやうに宣へば、曆こよみとりに遣りて見給ふに、この七日、いとよかりけ
り。何事にかさはらむ。人々の装束さうそくは、こよにし置かれたらむ儲まうけのものして、西にしの對たいに
てせむ、と思おほして、西の對たいしつらはせ給ふ。「四の君、はや渡り給へ」と聞え給へば、「はや
はや」といそがし給へど、本意ほんいなき事なれば、いとうたて物愛うく覺おぼえて、「今々」といひて、
更さらに思ひも立たねば、「この事ならずとも、渡り給へとあらむは、おはすまじくやあらむ。
あないひがひかし」といひて、わたし奉りつ。大人おとな二人、童わらわし一人、御供おんどもにはありける。御
女むすめは十一にて、いとをかしけなり。いかまほしと思おほしたるを、見苦みぐるしからむとてとどむ
るを、いと悲かなしとてうち泣かれぬ。左大殿ひだりのおほいぎの、待まちちうけ給ひて、對面たいめんし給うて、あるべき

をこに―俗
言のをかし
く

おはせむ限
―母北の方
の存命中

まがくし
―思はし

お―返辭

る例には、この北方をし奉るべし」などいひて、「いかど宣ふと、正身に聞かせ奉り給へ」と宣へば、「四の君渡り給へ」と宣へば、おはしたり。北方、「かうくの事なむ、かの大殿のたまふなるを、をこに人のおほしたりし御身を、いとよき事となむうれしく思ふを、いかど思す」と宣へば、四の君、おもて赤めて、「いとよき事に侍れど、かよる身を知らぬさまにや、なでふさる事か侍るべき。人のおほさむも、かつはかの殿の御取ならむ。いと見苦しからむ。心うき身なれば尼になりなむ、と思へど、おはせむ限は、例のかたみに見奉るをだに、仕うまつるに思う給へてなむ、今までだに侍る」とて泣き給ひぬれば、思ひ知り給へりけり、と哀にうち涙くみてゐたり。北方、「あなまがくし。なでふ尼にかなり給ふべき。しばしにても、猶花やかなるめ見給はむぞ、人もかくぞありけり、と思ふべき。おのがことに随ひたまふと思ひて、この事し給へ」とのたまふ。少將、「御返事はいかど申さむ」といへば、「この君はかくなむと宣へど、こよになむいと癒しき事、と只ともかくも御心して、思さむ方にしなし給へ」と宣へば、「お」とて立ちぬ。

とざまかう
ざまに一種
種と

女君―落窪

おろかには思はじ。おもしろの駒こまに、いふがひなく笑わらはれ誹せいられ給ひしを、これにて恥はぢかくし給へ、と思おぼしたるなめり。年としは四十餘よんぢあまりになむある。故こ大殿おおさまおはして、初めてし給ふとも、かばかりの事はえし給はじ。親おやにまさりて哀あはれに、とざまかうざまに、いたくよろしうなさむ、と思おぼしたる、限かぎりなく嬉うれしき事。早はやう四よの君、かの殿どのに参まゐらせ給へ」と宣のたまへば、北方きたのかた、「我がなからむ後あとに、かくてのみあるを、うしろめたなし、たゞ受領ずりやうのよからむをがなとこそおもひつるに、まして上達部かんだちめにもあなり。いと嬉うれしきことななり。かくこまかに、後うしろみ見るがあはれなる事。女君をんなぎみよりは殿どのこそ御心ごこころばへ哀あはれなれ」と言いへば、「殿どのも北方きたのかたを、いみじう思おもひ聞きえ給たまふあまり、まろまでは來きるぞ、と聞きき侍はべる時ときもあり。まろを思おもさば、此腹このはらの君達きんだちを、男おとこも女おんなも思おもほせとこそ申し給へば、いみじき幸さいはひおはしける。數かずならぬ景政かげまさらだに、女おんなは見みまほしくなむあるを、この殿どのは、すべてこの北方きたのかたより外ほかに女おんなはなし、と思おぼしたる。内裏うちに参まゐり給ひても、后宮きさいのみやの女房達にようはうだちの清きよけなるに、たはむれにも目入めいれ給はず。夜中よなかにも曉あかつきにも、かきたどりてぞまかでたまふ。女おんなの男おとこに思おもはる

いとほしき
事一氣毒な
る事、面白
の駒との關
係

き。いづれにか」と宣へば、「いさ、御心に定め給へ。まろは四の君にとなむ思ふ。いとほしきことありしかば、思ひもなほし給ふばかりに」と宣へば、「この晦日に下るべかなり。疾くしてむ。北方にさ宣へ。よろしう思ひたらば、こよにてあはせむ」と宣へば、「文にては長々とも書かむ。みづから渡らむとすれば所狭し。少將播磨守などに、くはしく宣へ」など聞えたまふ。翌朝、少將を北方よび給うて、密に宣ふ。「みづから渡りて聞えむとおもへども、見さしたる事ありてなむ。かうくの事を宣ふ。いかなるべきことにかあらむ。心にくよはあれど、一人ある女には、思ひの外なる事もあり。この人、いとよき人なめり。誰もくよろしと思ひ給へる事ならば、こよに迎へ奉りて、ともかくもせむ」となむ宣へば、「少將、いとも畏き仰にこそ侍るなれ。あしき事にても、殿のしか宣はせむは、いなび聞えさすべきにあらず。ましていとめでたき事にこそ侍るなれ。かくなむと物し侍らむ」とて、親の御許にいきて、「しかなくなむ宣ふ。いみじうよき事なり。いかなる人なりとも、只今の時の大殿ばかりの御女のやうにて宣ひあはせ給はむを

御はて一
週忌

この事のす
ぢ一筆にと
りたき希望

大臣殿、今年なむ六十になり給ひければ、左大殿、賀の事仕うまつり給ふ。事の作法いとめでたし。只思ひやるべし。舞は此二所せさせ奉り給ふ。劣らずをかしく、二所ながら舞ひ給ひければ、祖父大臣、涙を落してなむ見奉り給ひける。かく爲べき事は、すごさず、いかめしうし給へば、御徳はいやまさりなり。はかなくて月日過ぎて、女君服ぬぎ給ふ。いづれもく、子ども相榮ゆる程にて、御はての事などしつくし給ひける。繼母、かく子どもの喜びをしけるを、御徳と喜びければ、いと嬉となむ思しける。左大臣、いかで此君達によき聲どりせむ、と思して見るに、さるべきがなきと思し渡る程に、中納言の、筑紫の帥にて下るに、俄に妻うせたりけるを聞き給ひて、人からもいとよき人なり、とおほしきざして、内裏に参りあひたるにも、心とどめて語らひ給うて、さるべき折に、この事のすぢをほのめかし給ひければ、「いとよき事に侍るなり」と、申し契りてけり。左大殿、北方に申し給ふ。「しかくの人をなむ、いひちぎりたる。上達部にもあり、人からもいとよし、となむ思ふ。三の君にや婚すべき。四の君にやあはすべ

らうくし
— 功者に

うつくし
愛らし

ふたつなく
— 無頼に

らうくしく、心柄こころがらもいと賢かしこければ、若わかうおはしける帝みかどにおはしませば、遊敵あそぶたかに召よし遣つかひ、をかしきものに覺おぼして、笙さうの笛ふえ吹ふかせ給たまふ時、教せしへさせ給たまひければ、父大臣おとせ、いとかなしと思おぼしたり。祖父大臣おおぢおとせの御殿おんどのに養やしなはれ給たまふ君は、九つになむおはしける。此兄君このあにきみの殿上てんじやうし給たまふを、羨おぼましけに思おぼして、「我も内裏うちにいかで参まらむ」と申し給たまへば、大臣おとせうつくしがりて、「などか今までは言はざりつる」とて、俄にはかに殿上てんじやうせさせ給たまへば、父大臣おとせ「まだ幼おきなく侍はべるものを」と申し給たまへば、「なにか、その太郎たろうには増まりて、賢かしこくなむある。弟あにまさりなり」と宣のたまへば、父大臣おとせ笑わらひ給たまひぬ。内裏うちに参まりて奏そうし給たまふ。「これなむ翁おきなの限かぎりなかなしと思おぼえ侍はべる。思おぼしめして、かへりみせさせ給たまへ。兄あにの童わらわにおほしませ。司つかさえさすとも、兄あにには増まらむ、と見みて此子こを、太郎たろうにはさせ給たまへ」と、常に宣のたまひて、御名おんなも弟あに太郎たろうとなむつけ給たまへりける。この御弟おんあにの姫君ひめぎみは、八つにて、いみじうをかしけになむおはしければ、今より二なくかしづき給たまふ。その御弟おんあにも六つ、男子おのこ四つにておはしける。又このごろもうみ給たまふべし。かゝる儘ままに、愚おろかならず思おもひ聞きえ給たまへる、理ことわりなり。太政おとせ

馬のはなむ
け―饒別、
新任の美濃
守の

女がた―姻
戚

まつらぬなければ、皆花やかにて出で入り給ふ。左大殿の北方、馬のはなむけ、さまざまいかめしうしたまふ。殿人なるうちに、御用意かぎりなし。馬、鞍、調じ具してたまひ、「かくくはしうする事は、こゝに宣ふことあればなり。かく下りて、飽かぬ事なくよく仕うまつれ。おろかなりと聞かば、さらにかへりみじ」と宣ふ。かしこまり嬉しくて、めでたき女がたと思ひて、「かうくなむ宣ふ」と、まかでてかたる。「能く仕うまつれ、と申し給へば、御徳にかゝりたる身にこそあれ」といへば、中の君も、いとうれしと思したり。「今はいかで、三四の君に、よき人婚せむ、と人知れず見るに、さるべき人のなきこそ、くち惜しけれ」と宣ひわたる。北方、三四の君に、夏冬の御衣、御ものなど、いとゆたかに、故殿の生きてたてまつり給ひしにも優りて、いとゆたかに、御位のまさるまゝに、よろづをし給ひ、こゝろもとなき事なし。御子産み、御袴著給ふ事ども、暇なくて書かず。はじめの男君は十二にて、いと大きにおはすれば、宮仕へすともあやまちすべからず。かしこくおはすれば、春宮の殿上せさせ給ふ。書を讀み給ふにも、さとく

ひきたてよくて、やがて播磨はりまになしつ。衛門佐ゑもんすけは少將せうしやうになりぬ。「誰もくこの御徳おんとくにて」とあつまりて北方きたのかたによるこび聞かせ、「これやは御徳おんとく見たまはぬ。今よりはなほ 心にまかせてものな宜よろひそ」といへば、「實じつに理ことわり」といひてけり。こたみの司召つかさめしは、この族うぢのよろこびなりけり、と人世よじんにいふ。かく心にまかせてし給へば、父大臣おとせのせむとおほす事も、まづこの殿とのに宜よろひあはするを、「あしかんなり。なし給ひそ」とある事は、せまほしと思しながら、えし給はず。我が心にいなと思す事も、この殿との二たび三度みたびとしきりて申し給ふ事は、え聞き給はではあらねば、司召つかさめしし給ふにも、數かずならぬも、この殿とのの御徳おんとくにてぞなりける。帝みかさの御伯父おんおぢにて、かぎりなくおほしたる。御身おんみは、左大臣さだいじんばかりにて、御才おんざいは限かぎなく賢かしこく、おしはりて宜よろひむ事を言いひ交かすべき上達部かみちらめもおはせず。父大臣おとせはた、同じ御子おんこといへど、せめてかなしきあまりに、辱かたじけなくかしこきものに思おぼしたり。なか／＼御子おんこなむ、親おやの心こころばへには見えける。世よの人ひともかく知りて、「大殿おほいどのよりは、左大臣さだいじん殿どのにこそ仕つかうまつらぬ。それをぞ大殿おほいどのもよしと思おぼしたる」とて、少し物のぞみたるは、参まゐり仕つかう

おしはりて
—強情に
せめてかな
しき—非常
に受する

「よそじじ」
餘所の許へいかばこそ、ものしと思ひ給はめ。北方の御世の限はおはして、後には三
四の君に奉り給はば同じ事。はや置き給へれ」とて、みな渡り給ひぬ。女君は、「今亦も
参りこむ。かしこにも渡り給へ。故殿の御代には、君達北方をこそは、見奉り仕うまつ
らめ。何事も覺束なからず宣へ。隔なく思したらむをのみなむ、嬉しかるべき」など、哀
に語らひ置きてなむおはしにける。大殿のおはせし時よりも、をかしき物は日ごとおこた
に怠おこたらず。君達きんだちに、まめなるものは、夜中よなか 曉あかつきにもはこび奉り給へば、北方、實に我が子
ども男女おとこをんな あれど、男子はすごろなるに、我がため同胞はらからの爲する、いとありがたし、と
やうく思ひなりぬる程に、年かへりぬ。司召つかさめしに、左大臣、太政大臣に。大將殿、左大臣
になり給ひぬ。次々の御弟どもなりあがり給へれど、一所の御うへを書きいだす、あいな
ければかかず。左大臣殿の北方の御幸を、人々も御同胞達も、めでたう羨む。中の君の御
男おとこの左少辨させうべん、身いと貧まづしとて、受領望うりやうのをまむとて、左大臣殿の北方につきて申しければ、美濃
にいたはりなし給ひつ。越前守えちぜんのかみ、今年なむ代りけれど、國の事いとよくなしたりければ、

あいなけれ
ば一面白な
ければ
受領一國守

よし、聞えさせじ」とて、二人ながらい續きて立てば、さすがに、「やよ、この御返事申せ」とまねき給へど、聞き入れぬやうにていぬ。左衛門佐、「などかくあしき親をもち奉りけむ。いかで御心ようなるべからむと祈をだにもせむ。我等が爲にも大事なり」といひて、御返事はもろともにいひ合せて、大將殿へ聞え給ふ。

畏りて承りぬ。こよにも今は、殿一人をなむ、たのもしき者に思ひ聞えさすべき。

賜はせたる所々の券は、若き人々、昔人の御本意たがはむはいかでか、とつよみ侍るを、御志のかひなきやうにやはとて、こよになむ賜はり留めつる。この殿の御事は、いと心ばへ深う奉らるめりし所を、あだに物せさせ給はば、物しくや。なき御影にも、いとほしく侍るを、券なほおかせ給はね。

なき御影
故大納言

とて券返し奉る。此券を此越前守の取りて立ちければ、北方返し奉るにやあらむ、といと怪くて、「それはなどもて往く。さ宜ひつらむものを、もて来く」と呼び返しければ、あな物ぐるほし大事の物をおろかにもいふかな、と聞きけり。大將殿の聞き給ひて、

仕うまつらむ、と大將殿宣ふは、北方の御心に随ひ給ふにこそ。一つ腹の御心だに、かくやはあるとあめれば、かくこの御方の宣ふこと、まろはいかに心うし。我れ得たらむ丹波の庄は、年に米一斗だに、出で來べきにあらず。今一つは越中にて、容易く物もはかるべきにあらず。辨殿のえ給へるは、三百石の物出で來なり。かく遠くあしきは、景純が選りくれたるなり、とさいなみけれど、誰もく、大殿のしおき給ひしを皆見給ひて、かくやは宣ふべき。只これにておほせ 隔なく互にかへりみるべき人だに、かよる心を持たまへる」といへば、北方、「あなかしがまし。いたくな言ひそししづめそ。誰も誰も皆貧しければ、云ふにこそあらめ」といふ程に、左衛門佐の來あひて、心にもあらずおほえ、「身貧しけれど、よき人はかく、ことに操にをかしうぞある。まづ北方の此處におはせし程は、聞い奉り給ひしかど、聊のたまへる事聞えざりきかし。かく心苦しき御年の齡も、あはれに随ひて、心安らかなりとこそは、密に宣ふめりしか」とのたまへば、北方、「いかで我死なむ、憎み悪しきものに宣へば、罪もあらむ」と宣ふに、「あなかしこ。

さいなみ
叱責し

言ひそし
言ひまくる

罪もあらむ
後世の罪
障もあらむ

人々しく—
人らしく—
持給はぬ—
北方が
領じ給はま
しかば—落
窪が

いさ—否

おこと—汝

らむ、なにか僻みたらむ」といへば、越前守、「あはれの御心や。物思ひ知り給はぬぞかし。徳は見すと、御心にこそ、さしあたりて見ずと思すらめ。大夫左衛門佐になりたるは、誰がし給ふにか。景純は、この殿の家司にて、加階せしは誰がせしぞ。今にても見給へ。又男も人々しくならむ事は、只この御徳。まづは家持給はぬに、この家領じ給はましかば、いづこにひきつどきておはせまし。まづ只思しあはせよ。目の前なる事どもを見れば、嬉しく哀におほえ給はずや。景純等も國を治めて、徳なきにしあらねど、妻をまづ思ふとて、え奉らず。今にてもえ奉るまじきは、子は志の薄きぞかし。己が生みたらむ子どもだに、かくおろかにてつかうまつらぬ御身は、かくあはれなる御心ばへを、泣くく喜び聞え給はめ」ととにかくに云ひ知らすれば、實にと思ひていらへもせず、「御かへりいかど聞えむ」といへば、「いさ、ものいへば、ひがみたりとかしがましよういへば、聞えにくし。おこと、よき事知り、物の心知りたらむ人、推し量りて申せかし」といへば、守、「人の爲に申すにあらず、御身の爲の事なり。三四の君の御前をも、いかにも

現心—正氣

取りはづし
て—うつか
りして

越前えちぜんのかみかしこま守まも畏おそりよろこぶ。「まづかくなむとものし侍らむ」とて立てば、「もし返かへしなどし給はむ。取りてもものし給ふな。むつかし。同じ事おなをのみいへば」と宣ふ。「おびは猶なほかくて人に賜たまはせ、つかはせ給はむ」と申し給へば、「今用いまようならむをりはものせむ。疎うごき人達ひとたちにあらねば」とて、強しひて取らせ給ふ。守かみ、北方きたのかた君達きみたちに、かうくゝなむ宣へるといへば、北方きたのかた、この家はいと惜あはしかりつるに、いと嬉うれしくのたまへど、なほ我はと領りやうじ代へらるると思ふに、いと妬ねたければ、「落窪君おちくぼのきみのかくし給ふか。あなうれしのことや」といふに、越前守えちぜんのかみ、たゞ腹はらだちに腹立はらたたれて、爪つまはじきをして、「現心うつしこころにはおはせぬか。前々さきさきは、いとほしく恥はづかしき事のありけるに、面おもていたき心地こころちす。人のいふべき事か。まろらを徒いたづらになし給はむとや。ものしと思しける程は、いかばかりの恥はづをか見、ちやうぜられ給ひし。ひきかへて、かく懇ねんごろにかへりみ給ふ御徳おんさくをだに、かつ見て、かく宣ふ。まして昔むかしいかなるさまに。人ぎきも我が身もものぐるほしや。落窪おちくぼ何窪なにくぼと宣ふ」といへば、北方きたのかた、「何なにばかりの徳さくか我は見侍る。大殿おとまりは父なればせしにこそあめれ。取りはづして落窪おちくぼといひた

こゝに―落
窪が

なり所―別
莊

あるか」とうち笑ひ給へば、「更にさも侍らず。もどものし給ひし時、みな爲置きてあづ
けられたるなり」と申せば、「さかしうもし給ひけるかな。こゝに誰々も住みつき給ふめ
るを、何しにかは、とこよに宜ふめればなむ、北方知り給ふべし。このおびふたつは、
衛門佐と、そこにと、一つづつ、三のなり所の券と、おび一つとどめつる。むけにさし
おき給ひけむ御心ばへの、かひなきやうなれば」となむ宜へば、越前守「いと不便なる
事。みづから爲置き侍らぬ事なりとも、殿になむしろしめすべし。いはんや更に、我が
斯くしおくなどいひおき侍りにし、たがひては。たれもく、みな少しづつ分たれ侍る
めるものを」とて、取らねば、大將、「あやしくもいふかな。みづからの心、いかさまに
し置かばこそあらめ。かく見給へば、こゝにえ給ふ同じ事。此君は、己あらむ限は、さ
てもものし給ひてむ。打續き幼き人々あれば、たのもし、かうては、早う四の君なむ、思
ふ人すくなきやうに、ものし給ふなるを、おのれ一向に知り聞えむと思ふ。その君達の、
得給はむに添へられよ。今二所をば、御男達になむつけて、仕うまつるべき」と宜へば、

長居せば又
繼母に押籠
められむと
戯るゝ也

けしう—悪
しく

こゝがち—
此の方にの
み讓の多き

宣へば、「けしからず、今はかけてもかゝることな宣ひそ。忘れざりけりと聞き給はど、

思しつゝむ事出で來なむかし。なき人の御かはりには、よろしうおほされにしがなとこ

そ思はめ」と宣へば、「さらなる事、女君達にも、君こそは訪ひ給はめ」とのたまふ。越

前守、かく顧みたまふと聞きて、かの大殿の奉れとて、處分し集め給ひしものども、所

所の庄の券とり出て、もてまるりて、「怪しうはべれども、昔人のいひおき侍りしかばな

む」とて奉れば、大將殿見給ひければ、おび三つ。一つは我がとらせしなり。今一つは

さすがにわろし。庄の券、こよの圖などなむありける。大將殿、「けしうはあらぬ所々を

こそは領じ給ひけれ。この家は、などか君達北方の御中には奉り給はざりし。別所の

あるか」と宣へば、女君、「さもなし。こよはかう久しう住みたまへれば得じ。北方に奉り

てむなむと思ふ」と宣へば、男君「いと善きこと。これは君得給はずとも、おのれあれ

ばおはしなむ。皆うらみの心どもあらむ」とうち語らひ給うて、越前守近う喚び寄せて

「其許にぞ其事どもは知らむ。などいとこよがちには見ゆるぞ。豪家とわづらはしがりて

御服―喪中
に著る鈍色
の衣

ふち―淵に
藤衣(喪服)

おきて―指
圖し

部屋にもぞ
云々―余り

かきに移り給うて、寢殿には、大徳達いと多くこもれり。大將殿おはせぬ日なし。立ちながら對面し給ひつよ、すべきやうなど聞え給ふ。女君の御服のいと濃きに、精進のけに、すこし青み給へるが、あはれに見え給へば、男君うちなけきて、

涙がは我がなみださへ落ちそひて君がたもとぞふちと見えける

と宣へば、女、

袖朽たすなみだの川のふかければふちの衣といふにぞありける

など聞え給ひつよ、行きかへりありき給ふ程に、三十日の御忌はてぬれば、「今は彼所にわたり給ひね。子ども戀ひ聞ゆ」と宣へば、「今いくばくにもあらず、御四十九日はてて渡らむ」と宣へば、こよになむ夜はおはしける。はかなくて、御四十九日になりぬ。此殿にてなむし給ひける。此度こそはてのことなればとて、大將殿、いといかめしうおき給ひけり。子ども我もくと、ほどく／＼に隨ひてし給ひければ、いと猛に、きら／＼しき法事になむありける。事終てて、大將殿「今はいざたまへ。部屋にもぞ籠むる」と

いとをしむ
云々―高齡
なれば也

ゐたまうて
―即位せら
れて

さうくし
―寂寥なり

みじかき
―低き

なり給へば、誰もくいみじくおほし歎く。遂に七日に消え入り給ひぬ。十一月の事なりけり。いとをしむ時にもあらず、理とは思しながら、御子ども、女男あつまりて、惜みなけき給ふさまいとあはれなり。大將殿は、若君たちにそひ給うて、わが御殿におはすまよに、立ちながらおはしつゝ泣きあはれがり、かつは後の御事、あるべきやうの沙汰も、みづから入りゐなむとし給ひけれど、父大臣、「新しき帝のゐたまうて、程なく長々とあらむ暇は、いとあしかるべし」と、切にのたまふ。女君も、「幼き人々、こよに迎へむは、物忌などするに忌々しかし。籠め置きたるに、殿さへおはせずば、いとうしろめたなし。な居給ひそ」と聞え給ひければ、我が御殿にて、ならはぬひとりすみにて、君達うち眺めあそばして、さうくしくおほさる。かく疾く亡せ給ひぬるを見給ふにつけても、よくぞ思ふ事をいそぎしてける、とおほす。かの殿には、御忌なき日とて、三日といふに葬め奉り給ふ。大將殿の御送に、四位五位いと多く歩みつづきたり。實に宜ひしやう死の幸限りなしといふ。御忌のほどは、誰もく、君達、れいならぬ屋のみじ

そ。物ないはせたまひそ。いと苦しき」と宣へば、北方、又うち出づれど、子ども集りていはせず。大將殿の北方、これを聞きて、いとほしく哀とおほして、「北方のきこえたまふ事、いとことわりなり。こよには只何もかもな給びそ。君達にあまねく奉らせ給へ。ましてこよに、たれもく住みつき給へるに、思はぬ方に侍らむ、いと見ぐるし。猶はや奉らせ給へ」と、責め申し給へば、大殿、「己はえ取らすまじ。己死にはべらむ時、ともかくも心とし給へ」とて、更に聞き給はず。よき帯たまさかにありけるなども、皆大將殿に奉り給ふ。越前守など、けに少しものしと思へど、親の御氣色得給ふ人の御有様、いふべきにあらねば、うちも出でず。あるべき事どもよく認めて、大將殿の北方を、萬にうれしく、「御徳により、面目ある目を見侍りつる」と返すく申し給ひて、「はかばかしからぬ女子どもの、いと數多侍りつる。よくかへりみ給へ」と申し給へば、「承りぬ。身の堪へむ限は、いかでか仕うまつらざらむ」と宣へば、「いと嬉しき事」と宣ふ。「むすめども、此御言にしたがへ、君と思ひ奉れ」など、さかしく宜ふまよに、いとよわく

たまさかに
一世に稀に
て

したためて
大納言が

みつばよつ
ばー大夏高
樓、古今集
この殿は
うべも富み
けりさき草
の三葉四葉
に殿つくり
して

くろうー功
勞歎

天が下に云
云ーいかに
強くいふと
も

む。子どもをこそ、我に孝ずることなかりきとて思しも捨てめ、世の人の親は、もはら

幸なきをなむ。なからむ時いかにせむとは思ふなる。大將殿に於い奉りては、この家

は得給はずとも、いとよくありなむ。男君もいとたのもしう、みつ葉よつ葉もまうけ給

ひてむ。三條もさばかりに造りて奉りたり。いとよし。をのこにおきては、夫ある子ども

もは、はか／＼しく家もたるもなかりき。よしそれは、云ひもて行けば、とてもかくて

もありなむ。己が身、此二人の子どもは、こよ立ちねとちやうぜられむ折は、いづこに

かあらむとするぞ、大路に立てとや。いと道理なく物なのたまひそ」といひつゞけて泣

けば、大殿、「子ども思ひ捨つるにはあらねど、麗しくこそはせめてなくとも、世に大路

にも立て給はじ。年比のくろうには、子どもを見給へたりとも、仕うまつりてむ。越前

守、我がかはり取りそへて仕うまつれ。三條の家はわが家かは。本よりかの御領なり。

大將殿も見給ふに、少しはか／＼しきもの、え奉らで死なば、いふがひなきものとお

ほすべし。天が下に宣ふとも、こよはえ奉らじ。今日明日とも知らぬ身を、な恨み給ひ

處分—財産
の處置分配北の方—落
窪の繼母

子どもつかうまつり給ふは、物ともおほさず。大將殿たいしやうどのの北方きたのかたの添そひおはするを、嬉うれしといみじうめでたきものに思おぼして、物ものもまゐり給ふ。湯漬ゆづひをなむまゐり給ひける。たのもしけなくなりはて給ひて、「生いける時處分きうぶんしてむ。子どもこの心見るに、同胞たらからおもひせず。女どちのうちにも、うとくしくあめれば、論ろんなう怨事うらみごとども出で來なむ」とて、越前守えちぜんのかみを御前おんまへに喚よびすゑて、所々の庄きやうの券けん、帶おびなど取り出でて、選えらせ給ふに、少すこしよろしきは、只大將殿たいしやうどのの北方きたのかたに奉り給うて、「他子どもたごころも、これを少すこしにてもうらやましと思ふべからず。同じやうに力ちから入り、親おやに孝けうじたるだに、少すこし人々しきになむ。よろしき物取らす。いはんや許多こころの年ごろかへりみるを、恩おんにやと思へ」と、いとさかしう宜よろふを、君きん達たちはことわりと思おぼしたり。「此家このいへも、古ふるりてこそあめれど、廣ひろうよろしき所なり」とて、大將殿たいしやうどのの北方きたのかたに奉り給へば、北方きたのかた聞ききて泣なきぬ。「宜よろふ事どもは、さものたまひぬべけれど、又いかど羨うらやみ聞えざらむ。年ごろ若わかうより添そひ奉りて、六七十むそちになるまで見奉り、たのみ奉りつる事、又なかりつる。子ども七人もたり。などこの家を、おのれに賜たまはらざら

あまさへー
剩、その上

公一朝廷

大將殿の北
の方一元の
落窪の君

りてこそはありつめれ。あまさへ憂き恥の限こそ見せつれ。此殿は、塵ばかり仕うまつ
ることもなければ、御かへりみをかこよなく見る。かへりては恥しき心地して、我死
なば、かはりには、男子にまれ、女子にまれ、君に仕うまつれ」といとさかしういひ
ます。かよれば北方にくし、疾く死ねかし、と思ふ。その日になりて、いと清けにさう
ぞきて、男君、女君、一ところにおはする程にて、拜み奉り給へば、いとかしこしと聞え
給へば、「おのれは公もかしこくもおはしませず、只あが君のみこそ嬉しくかたじけな
く覺え給へ。此世に仕うまつらで死ぬとも、大かた守ともなり侍りて、など念じ侍る」と
と申し給ふ。それより退出給ひて、左大殿に参り給うて、また内裏に参り給ふ。人々に
祿給ふ事も同じ様にて、猛なる事もなければ書かず。大納言はその日より臥して、又お
もく苦しうし給ふ。「今は塵ばかりも思ふ事なければ、死なむ命も惜しからず」といひ臥
し給へり。いと弱くなり給ふと聞き給ひて、大將殿の北方わたり給へり。大殿、かたじ
けなく嬉し、と思ひ給へり。御むすめ五人集ひて、仕うまつりなけき給ふ。大殿、異御

し。人のはた取るべきにあらず。我のを譲らむの御心つきて、父大臣の御許に參で給ひて、「かくなむ思ひ給へるを、幼き者ども多く侍れど、それが徳を見すべき行末あるべき事にもあらぬかはりには、この事をし侍らむ」と思ひ侍る。御氣色よろしう、定めさせ給へ」と申させ給ふ。「何か、さ思はむ事を、早う然るべきやうに奏し奉らせよ。大納言はなくとも、あしくはあらじ」と我が心なる世なれば、とおほして宜へば、限なく喜びたまうて、申し給うて、奏し奉らせ給ひて、中納言、大納言になりたまふ宜旨くだし給ひつ。これを聞きて、大納言、煩ふ心地に泣くく喜び給ふさま、親にかくよろこばれ給ふに、功德ならむと見ゆ。よろこびに起きたちて、願たてさす。定業の命にても延べ給へ、と人にも願立てさする氣にや、少しおこたりて、おもひ強り、起き居て、内裏へ參るべき口見せ、とかくさすべき事、あておこなふとても、「我が子ども七人あれど、かく現世後生うれしきめ見せつるやありつる、かよりける御佛を、少しにても疎なりけむは、我が身の不幸なるめ見むとてこそありけれ。子二三人聲とりたれど、今に我にかよ

氣しるし
見せし占者
に
御佛一大将
の事

落窪物語 卷之四

修法―祈禱

沈みて―官途沈滞して

一人―一度の誤ならむ員より外―定員外

かくて、やうく中納言重く惱み給へば、大將殿いとほしく思し歎きて、修法などあまたせさせ給へば、中納言、「何かは、今は思ふ事も侍らねば、命惜くも侍らず。煩しく、何かは祈せさせ給ふ」と申し給ふ。よわるやうになり給へば、「猶死ぬべきなめり。今暫しいきてあらばやと思ふは、我がとしごろ沈みて、きのふ今日の若人共に多く超えられてなりおとりつるなむ、恥に思ひける。我が君の、かばかりかへりみ給ふ御世に、命だにあらば、成りぬと思ひつるに、又かく死ぬれば、我が身の、大納言になるまじき報にてこそありけれ、とこれのみぞ飽すおほゆる事。さては老のはて、死のはてのおもだたしさは、おのれに優る人世にあらじ」と宣ふを、大將聞き給うて、哀におほゆる事かぎりなし。女君、「いかで大納言をがな。一人なし奉りて、飽かぬ事なしと思はせ奉らむ」とのたまふを、聞き給ひて、實にさせばやと思せど、員より外の大納言になさむ事はかた

龍頭―船首
に龍頭の飾
を付したる
もの、この
處脱文ある
べし

充て―まか
せ

などなむありける。廣くおもしろき池の、鏡のやうなるに、龍頭樂人ども、船に乗りて
遊び居たるは、いみじうおもしろし。殿上人は、居あまるまで多かり。左大殿おはした
り。かづけものなむ、數知らずありける。中宮よりも大袿十襲、さまざまに奉り給ふ。
宮の御達、藏人も、みな物見むとて退出ぬ。中納言、忽に御心地もやみてめでたし。日
一日あそびくらして、事はてて夜更けてまかで給ふに、物かづけ給はぬものなし。やん
ごとなきには、御贈物そへてし給へり。左大殿、中納言殿に、いとかしこき馬二つ、
世に名だかき箏の琴二つ奉り給ふ。御前の人々に隨ひて物かづけ給ふ。腰佩せさせ給
ふ。越前守に、「この事ばかりは、我が思ふやうにせよ」とて、充て給ひければ、いとめ
やすくしたり。二日三日ばかりとどめ奉り給ひて、渡し奉りたまひける。女君かくし給
ふ事をいとうれしと聞え給ふ。大將いとかひありておほす。

所の衆―藏人所の衆

前栽ほり―

前庭に植う

べき草花を

掘り取るこ

と

旅人を云々

―下旬を脱

す

よろづ代を

云々―上旬

を脱す、十

一月の歌な

るべし

ふりはへて

―わざく

雲もなくそら澄みわたる天の川いまやひこほしふねわたすらむ

八月、嵯峨野に、所の衆ども前栽ほりに、

うちむれてほるに嵯峨野の女郎花露もこころを置かで引かれよ

九月、白菊多く咲きたる家を見る。

ときならぬ雪とや人のおもふらむまがきに咲けるしら菊のはな

十月、紅葉いとおもしろき中に行くに、散りかよれば、あふぎて立てり。

旅人のここに手向くるぬさなれや

よろづ代を經て君につかへむ

十二月、山に雪いと高く降れる家に、女ながめてるたり。

雪ふかくつもりてのちは山里にふりはへて來る人のなきかな

御杖の、

八十坂を越えよときれる杖なればつきてをのほれくらる山にも

あさほらけかすみて見ゆる吉野山春や夜のまに越えて來つらむ

二月、櫻の散るを、あふぎて立てり。

さくら花散るてふことは今年よりわすれて匂へ千代のためしに

三月三日、桃の花咲きたるを、人折れり。

三千とせになるてふ桃の花ざかり折りてかざさむ君がたくひに

四月、

郭公待ちつるよひのしのび音はまどろまねどもおどろかれけり

五月、萬蒲ふく家に郭公鳴けり。

聲立てて今日しも鳴くはほととぎす萬蒲しるべき蟪蛄なるらむ

六月、祓したり。

みそぎする川瀬の底のきよければ千年のかけをうつしてぞ見る

七月七日、七夕祭れる家あり。

三千とせに
云々一西王
母の桃は三
千年に一度
花咲き實の
る
蟪蛄一軒の
端

かうむりを
得て一叙爵
して五位に
なること

もろ心一
心
かなしくし
一愛し
一枚一枚
の下正月の
二字を脱せ
しならむ

うむりを得て三河守になりければ、衛門はたゞ七日がほどいとま申して、率てくだりけるに、女君、旅具、しろがねの鏡一具、装束よりはじめて、いとくはしくなむしてくだし給ひける。そが許にも、「かう／＼のいそぎをなむする。絹すこし」と召しにはしらせに遣したりければ、すなはち守は、男君の御許に百匹奉り。妻は、北方の御許に、茜に染めたる絹二十四匹奉り。舞すべき人の子どももの事など、召し仰せなどし給ふ。御調度つくし給ふ。黄金なむ多く入りける。父大殿、「などかくしきりて、猛なることはする」と宣はす。「さはあれど後の齡いくばくもあらじ。生ける時嬉しとおもほえさせよ。こゝなる子の事は、我せむ」と宣ひて、もろ心にいそぎ給ふ。大將殿をいみじくかなしくし給ふ、御心に入りたまふ事なればなりけり。十一月十一日になむし給ひける。此度わが殿に皆ひきつれて迎へ奉り給うてなむ。委しくはうるさければ書かず。例の人の、只いといかめしう猛なりけり。屏風の繪、ことごとくともいと多かれど書かず。しるしばかり、たゞ端の一枚、

衛府司―近
衛の武官

「老いもてゆくまよに、衛府司堪へず。若うはなやかなる若男の職にてなむ堪へたる」とて、かけ給ひつる大將、大納言に譲り給ふ。御心にななへりける世なりければ、誰かは妨げむ。いと花やぎまさり給ふ事かぎりなし。中納言いよく嬉しう喜び給ふ。いと大事にはあらねど、起き臥し惱み給ふを、大將殿の北方歎き給ひて、あはれに宜ひしを、今少し仕うまつらむと思ふに、今暫じだにおはせなむ、と念じ給ふ。今年なむ七十になり給ひける、と聞き給うて、大納言のおほしける。ゆくさき遠く、又もしてむと覺ゆる人ならばこそ、長閑になども思はめ。人もしきりたるやうに思ふとも、七十の賀せむ。我せむと思ひし本意逢けむ。ちやうすべき限はあまたよびしてき。嬉しと思ゆる事は、只一度にて止みなばいとかひなし。死にて後には、萬の事すれども、誰か見はやし、嬉しと思はむとする。此度ばかりの事、力の堪へむ限はせむ、と思ほし立ちて急ぎ給ふ。國々の守どもも、只みけしきのまよに仕うまつり、いかでくと思ひたれば、一つづつ物のたまへど、いとやすう、人々の御前の饗の事をなむあて給へりける。衛門尉は、か

しきりたる
―嬉きたる

かしこき物
―大切なる
物
あが君―吾
君、親愛の
詞

て歸り給ひぬ。されば「今一日二日だにおはしませ」と申し給へど、「狭くて、幼き者ども、いとくむつかしうて侍れば、今これら留めて、まるで來む」とて、強ひて大納言殿わたり始め奉り給へば、大殿、「いと尊く、哀に侍りつる事をさるものにて、中宮、左大將殿よりの爲には、經佛一卷を供養し給はなむ、いみじきことに侍るべき。かく猛なる事をさせ給へる事」と泣くなくよろこべば、大納言も、女君は更にもいはず、かひありて嬉しとおほす。「この翁の、いとかしこき物、と思ひ給へて、誰に傳へ置かむ、と年ごろ藏し置きて、中納言殿いまし通ひし時、もとめ給ひしかど、取り出でずなりにしは、あが君の御料にて、ものしおき給ひけるにこそありけれ。若君に奉らむ」とて、いとをかしけなる錦の袋に入れて奉り給へば、若君、しり顔にうち笑みて取り給ひつ。笛いと美しとおほす。音もかしこし。さて殿へ夜ふけて渡り給ふ。大納言、「中納言のいみじく嬉し、と思ひ給へりしかな。何事を文して、見せ奉らむ」とのたまふ。かゝる程に、左大臣宣ふ

女をこそ、神佛に申して持たらめ」といひあへり。かくて九日、いとくいかめしうして給ふ。三の君、中納言を今日や／＼と思ひ出で給ふに、さもあらで止みぬ。いみじう心うし、と思ひつる魂や、いきてそよのかしけむ。事終てて出で給ふに、暫立ちどまりて、左衛門佐のあるをよび給ひて、「など疎くは見る」と宣へば、佐、「などてかむつまじからむ」と答ふれば、「昔は忘れにたるか。いかにぞ思はずや」と宣へば、「誰」と聞ゆれば、「誰をか我は聞えむ。三の君と聞えしよ」と宣へば、「知らず、侍りやすらむ」といふれば、「かく聞えよ」。

いにしへにたがはぬ君が宿見れば戀しきこともかはらざりけり

とぞ世の中は」といひて出で給へば、佐、返事をだに聞かむとおほせかし、名残なくもある御心かなと見る。いりて、「かうく、宣ひて、出で給ひぬ」と語れば、三の君、暫立ちどまりて給へかし。なか／＼何しに音づれ給ひつらむ、といと心うしと思ひて、返しふべきにしあらねば、さて止みぬ。大納言殿、御としみの事など、いといかめしうし

方のやんごとなき人に、かく用ひて、我もくとし給ふに、こよなき幸と見ゆ。中宮の御かへり、まづ聞え給ふ。

いともく、かしこまりて承りぬ。今日の事は、只このおほせをなむ、みづからささけて、かしこまりて聞えさせ侍る。萬はこの事はてて、みづから参り侍りて、又又かしこまりごと啓すべき。

と聞え給ふ。御使には綾の單衣襲、袴、朽葉の唐衣、羅のかさねの裳かづけ給ひつ。みな事はじまりて、上達部、君達、さよけて巡り給ふ。白銀黄金の蓮の開けたるをなむ、

人々多くしたりける。中納言のみなむ、白銀を筆のかたに造りて、やい軸に彩りなして、うすものに透し給へりける。袈裟などやうのものは、數も知らず、取り積みてなむ置きたりける。焼木には蘇枋をわりて、少し色黒めて、組して結ひたりける。日ごろの中に、今日なむいと猛に物入りたらむ、と見えける。やんごとなき上達部の、持ちて巡りたまふを、見る人々、いみじう、老の幸面目ありける人かな、と譽む。「なほ人はよからむ

さくらげて一
佛への捧物
を
やい軸一
本へい軸と
あるに従ふ
べしとい
ふ、柄軸
なほびと一
直人、尋常
の人

結ぶと聞えてはべるは。

とあり。唐の羅の、朽葉叢濃なる一かさねに、いと清らなる緋の糸を、女郎花につけ給へり。珠數の緒と思したるなるべし。御かへり聞えたまふ程に、中納言殿よりとて、中の君の御文あり。見給へば

いと尊き事思し立ちけるを、かくなむとも宜はざりけるは、喜ぶ功德入れさせ給はじとにや。心うくなむ。

とて、黄金して開けたる蓮の花を一枝造りて、少し青く彩りなして、白銀を大きやかに、露になしたり。又中宮よりとて、宮の典侍御文もて参りたり。是は經營して、御使顯證ならぬ方にするて、越前守、大夫などいひし、この殿の御賜にて、左衛門佐になりたるなど、盃さし饗し給ふ。御文には、

今日はさわがしきやうに聞けば、何事もとどめつ。これは結縁のために、とあり。黄金の珠數菩提樹の緒なむ入れさせ給ひたりける。はらからも人も見るに、男

結縁一佛道
に縁を結ぶ

經營一設備
顯證一目立
つ

おぼろげー尋常

五の巻―法華經の

とむらひー訪問

女はかく云云―心かばりにわざとの謙辭か

つ入れたり。只この經佛見る、おほろけの物は入らじ、と見えたり。朝座夕座の講師に

鈍色の袷の衣どもかづけ給ふ。すべて心もとなき事なくし盡さむ、と思ひ給へり。日の

經るまよに、たふとさまされば、末さまには、人々も上達部も参り來ぬ。五の巻の捧物

の日は、よろしき人より始め、消息を聞え給へりければ、所いとせばけなり。捧物の事

も充て給ひければ、袈裟や珠數やうの物は、多くもて集りたるに、取りて奉らむとする

程に、左大殿の御文、大納言殿にあり。見給へば、

今日だにとむらひにもせむ、と思ひつれども、脚の氣おこりて、裝束する事の苦

しければなむ。これはしるしばかり、捧けさせ給へとてなむ。

とあり。青き瑠璃の壺に黄金の橋入れて、青き袋に納れて五葉の枝につけたり。北方、

女君の御許に御文あり。

急ぎ給ふ事ありとは承りしかど、宣ふ事もなかりしかば、もろ心なるさまも、人

見給はずやありけむ。これは、女はかくまめやかなるものを引き出でける、と塵を

るに、絶えたりし昔思ひ出でられていと悲しうて、目をつけて見れば、装束より始めていと清けにてゐたるを見るに、いと心憂くつらし。我が身の幸あらましかば、かくうち續きてありき給はましも、こよなき程ならで、いかによからまし、と思ふに、我が身の心うくて、人知れずうち泣きて、

思ひ出づやと見れば人はつれなくて心よわきは我が身なりけり

し始め―書
寫し始め

と人知れずいはる。事はじまりぬ。阿闍梨、律師など、いとやんごとなき人多くて、あはれに尊き經どもとて、經一部を一日に充てて、九部なむし始めたりける。無量壽經、阿彌陀經などそひたるなりけり。一日に佛一はしらを供養せむ、と始め給ひければ、合せて佛九體、經九部なむ書かせ給ひける。清けなる事かぎりなし。四部には、いろいろの色紙に、いろくの黄金白銀まぜて、書かせ給うて、軸には、いと黒うかうばしき沈をして、おき口の經箱に一部づつ入れたり。今五部は、紺の紙に黄金の泥して書きて、軸には水晶して、蒔繪の箱、蒔繪には、經の文のさるべき所々の心ばへをして、一部づ

沈―沈香
おき口―へ
りと

した—心中

上達部—公
卿位は四位
官は参議以
上
あざむ—驚
嘆す

のが許もとに渡わたり給ひにしかば、我が子となむ思ひ聞えしを、おのが本性ほんじやうたち腹はらに侍はべりて、思ひやりなく物いふ事も侍はべるを、さやうにてや、もし物しきさまに御覽ごらんせられけむ、と限かぎりなくいとほしくなむ」といへば、君は、したには少しすこをかしく思ふ事あれど、「何か、更さらに物しき事やは侍はべりけむ、思ひおく事侍はべらず。只ただいかで思ふさまに、志を見え奉りしかな、と思ひ置く事とて、侍はべりしことなむ」と宣へば、北方きたのかた、「嬉うれしくも侍はべるかな。よからぬものども多く侍はべるなれば、思ふさまにも侍はべらぬに、かくておはするをなむ、誰も誰も喜よろこび申し侍はべるめる」と申し給ふ。明あけぬれば、つとめてより、こと疾さくはじめ給ふ。上達部かんだちめいと多かり。まして四位五位、數かずしらす多かり。「年ごろしひ惑まどひ給へる中納言ちうなごんは、いかでかく時の人を聲こゑにてもたりけむ。幸人さいはひびとにこそありけれ」と云ひあざむ。聲こゑの大納言だいなごんは、まして二十はたちあまりにていと清きよけにて、物々しく出で入り、事行ことこなひありき給へば、中納言ちうなごん、いと面おもだたしく嬉うれしくて、老心地おいこころちに、涙なみだをうち落おちして喜よろこびるたり。御弟さいしやうの宰相さいしやう、中將ちうじやう、三の君の男をこの中納言ちうなごん、いと清きよけにさうぞきつと参り給へり。三の君、中納言ちうなごんを見

かけ一兼ね
さして一任
命して

途籠一土を
厚く塗りこ
めたる殿内
の一室

けはひ一容
態

たのみ給はず。八月廿一日にとなむ定め給ひける。我が御殿にてしたまはむと思せど、
繼母、君達、容易くわたらじ。とおほして、中納言殿にわたり給ふべし。となむ定め給
ひて、中納言殿をいみじう修理せさせ、砂子敷かせ、新しく御座敷など用意せさせ給ふ。
中の君の御男の左少辨、越前守なども、皆この殿の家司かけたれば、やがてそれらを行
事にさして行はせ給ふ。寢殿を拂ひしつらひて、大納言殿の御局は、北の廂かけたり、
君達北方の御局には、塗籠の西の端をしたり。明日事はじめとて、夜さりわたし奉り
給ふ。狭からむをとて、人々は留め給ひて、車六つ七つして渡り給ひぬ。この度ぞ、北
方、君達にも對面ありける。濃き綾の鞋、女郎花色の細長き給へり。色より始めてめで
たければ、かの縫物の縁に、え給ひし衣の折を思ひ出づる人あるべし。主人の北方、三
四の君、事のうちに昔物語語し給ふ。わかし落窪といひし時も、衰へずをかしけなりと
見しを、今は物々しく、北方とさへねびてけはひ殊に優れて、聞えし君達、著給へる物
こよなく劣りて見ゆ。北方、いかではせむ、と思ひなりて、物語して、「まだ幼くて、お

四日に讀誦
する法會

坊—東宮

ゆかり—縁
者

—あわたどし
多忙なり

益なし。四十九日は實に忌々しかるべし。八講なむこの世もいと尊く、後の爲にもめでたくあるべければ、して聞かせ奉らまほしき」と宣へば、男君「いとよく思したり。こよにもさなむ思ひつる。さらば年の内にし給へよ。いとたのもしけなくなむ見え給ふ」とて、明くる日よりいそぎ給ふ。八月の程にせむとて、經書かせ、佛師よばせて、佛清らなるべく、と男君女君、心に入れたまへり。國々に、絹糸、白銀、黄金など召す。御心にこよろもとなしとおほすことなし。かよる程に、俄に帝、御心地なやみ重くており給ひて、東宮位に即かせ給ひぬ。この男君の御妹の女御の御腹の、一の宮になむおはしける。その御弟の二の宮、坊にゐさせ給ひぬ。御母の女御、后にたち給ひぬ。衛門督、大納言になり給ひぬ。中納言には三の君の御男、宰相には大納言の御弟の中將なり給ひぬ。すべてこの御ゆかりのよろこびし給へる、いとめでたく、この御代にのみなりはてぬ。大納言の御おほえ、いみじかるまよに、舅の中納言、いと面だたしく嬉しとおもへり。七月の内には、公のこといとあわたどしく、暇なきうちにも、この御八講の事

に、この年ごろ思しや疎みたらむ、君達へも同じ心に聞え給へ」と宜ふを、越前守、「さなむ宜ふ。我をおほしたる事ぞ限なき」と語れば、北方、いとど徳つきにしかば、さも思ふらむ。我にもいみじくおちたり。打せしを思ひおかば、此子どもをぞ便なく思はざらまし。男君のおほし置きたるにこそありけれ。まこと彼の物纏ひし夜、ひかへたりけるは、この君なりけり、と思ひよわる事ありて、やうく文通はしていひつく。かよる程に、衛門督、女君と語らひ給ふ、「あはれ、中納言こそいたく老いにけれ。世の人は、老いたる親のためにする孝こそ、いと孝あれとおもふ。今年は七十なりや。六十なる歳、賀といひて、遊樂をして見せ給ひ、又若菜まゐるとて、年のはじめにする事、さては八講といひて、經佛かき、供養することこそはあめれ。さまざま珍しきやうにせむとは、いかなる事をかせむ。生きながら四十九日する人はあれど、子のするにては便なかるべし。これらが中に宜へ。せむと思さむ事、せさせ奉らむ」と申し給へば、女君、いと嬉しとおほして、「樂は實におもしろく、をかしき事にこそあれど、後の世まで御身に

若菜まゐる
一賀に若菜
の羹を調進
せし事定例
なり

八講一法華

經八卷を朝
夕二座つ

杉のしるし
—古今集
「わが宿は
三輪の山本
戀しくばと
ぶらひ來ま
せ杉たてる
門」
只今の時の
所—當時の
權門

は、賜はるまじきよしは聞えはべりしを、尙かうせさせ給ふ、御勤當の深きなめり、と畏り思ひ給ふる。御帶も、かよる翁の身には、闇の夜に侍るべければ、返し參らせむと思ひ給ふれど、御志の程過してとなむ候ひつる。とあり。四の君の御返し、

年ごろは、杉のしるしもなきやうにて、尋ね聞えさすべき方なくなむ思ふ給へるに、いとともく嬉しくてなむ。人もよしとは、心憂くも推しはからせ給ひけるかな。

うちすててわかれし人をそことだに知らで惑ひし戀はまされり

と聞え給へり。かくて後は、心しらひ仕うまつり給ふ事かぎりなし。大殿は、たとしへなきまで尋ねおはす。越前守大夫など、只今の時の所なれば、恥をすてて參りつかうまつる。女君は嬉しきものにおほして、いかでとし給ふ中に、大夫をば御子のごとおほしたり。「いかで今は、北方君達にも對面せむ。こなたにも渡り給へ。母君にはちひさくておくれ奉りし後、見なれ奉りし儘に、親となむ思ひ聞ゆる。いかで仕うまつらむと思ふ

たらむと、かぎりなく思ひ給へ、なげくべくなむ。

とあり。四の君のもとに御文あり。

年比いと覺束なく思ふ給へつよ、かくなむと聞えまほしながら、つよましき事多くて。忘れやし給ふらむ。

つよましき事多くて—
下に音づれざりし程に
を省く

忘れにしときはの山の岩つつじいはねど我にこひはまさらじ

と思ふにこそ。うへにも御方々にも今は對面に、と思ひ給ふれば嬉しくなむ、と聞え給へ。

とあり。同胞四人竝居たる程に、取りかはしつよ見給ひて、姉君達、「我が許にもものし給へかし」と、今は語らはまほしきぞいみじきや。落窪に居たりし程は、いかにと問ふ人もなかりしものを。大殿の御返、

やがて昨日はさむらはむと思ひしかど、方の塞がりて侍りしかばなむ。今よりはいと嬉しく、明暮も候ひぬべしと思ふ給へしも、命延びてなむ。さて賜はせたる券

これ―此の子の

りにしかば、えならで、これ出で來にし後より、はた、人の心なりけること、これ物のこよろ知るまで見む、と思しなりて、今まで侍りつる事」と二人語らひうち泣きて、四の君、

人の上と昔は見しをあり經れば今はわが身のうき世なりけり

三の君、「けに」とて、

うきことの淵瀬にかはる世の中はあすかの川の心地こそすれ

といひ明し給へり。翌朝、贈物見給うて、「色より始めて翁の身には餘りたる。この帶は、いと名高き帶を、何しに賜はらむ。返し奉らむ」と宣ふ程に、「衛門督殿より御文」といへば、いそぎ取り入るゝ人おほかり。

昨日は、暮れゆく、惜しくも侍りしかな。急がせ給ひしかば、年ごろの御物語も、聞えさせずなりにし。今よりだに、時々たち寄せ給はずば、心憂くなむ。これなどか忘れさせ給ひにし。猶はや渡らせ給ひね。さらすば、なほ便なきさまにおほし

これなどか云々―券を何故置き忘れ給ひしか

放ち棄て
かまぐりー
振き採りの
約

まるやー女
房の名
花を織りて
云々ー美装
して

身のなり
懐妊し

思ひ給へりし、部屋に籠めよとは、己こそ行ひ給ひしか。我は知らじ、ともかくもせよ、と放ち給ひしかばこそ、典薬も何も、かまぐりよりたりけめ。いま人のものめかし給ふに、我がせし事を、人のせむ様に宜ふは何ぞ。あまりはなやかなる事は長からず」といふ。越前守いみじう酔ひて、よりふしながら、いみじうめでたかりつる事を語りつゝ臥せり。「三十人の女房たちの中にこもりて、多くこそ強ひにたれ。三の君の御方のそれ、四の君の何の君、かのおもと、まるやさへなむ候ひつる。花を織りてさうぞきて、いとよしとなむ思ふ」といふを、三四の君は、一とところに臥して、聞きて、「世の中は哀なるものにこそありけれ。かの君の、落窪に住みて部屋に籠り給ひし時は、まるらに優りて、人つかひ取られむとやは思ひし。父母の思さむ事、恥かしくもあるかな。なごや、尼にやなりなまし」と三の君泣けば、四の君もうち泣きて、「そが恥かしき事、かく宿世も知り給はで、上のけんかくに思しかしづきしを、いかに人思ひ合せむ。まる等、このころ憂き事出で来にし折ぞ、尼になり侍りなむ、と思ひて侍りしを、いつしか身のなり侍

く困らす

腰ざし一巻
きたる絹を
賜はりて腰
にさす故の
名
ちこー幼兒

つぶしに倒れふしたり。中納言も督君も、御盃たびくになりて、酔ひ給ひて、萬の物語をなむし給ふ。「今は身に堪へむ事は仕うまつらむ、となむ思ひ給ふるを、おほさむ事は、なほ宣はむなむ、嬉しかるべき」と申し給へば、中納言、いと嬉しと思ひたる事限なし。暮れぬれば、かへり給ふまよに、大殿には衣箱一具に、片つ方には、直衣装束、今片つ方には日の装束一領入れて、世に名高き帯なむ添へたりける。越前守には、女の装束一具に、綾の單衣襲そへてかづけ給ふ。中納言、酔ひて出で給ふとて、「世に今まで侍りつるが心うかりつるに、嬉しき契に」など宣ふ。御供の人多くもあらねば、五位に一かさね、六位に袴一具、雑色に腰ざしせさせ給ふ。よろしからぬ御中と見つるをいかならむと怪しく思ふ。歸り給うて、北方に、衛門督の宣へる事ども、かたはしより「典薬助には、まことにやあはせむとし給ひし。恥しけに宣へるに、面赫らむ心地してなむありつる。ちごの美しけなりつる事限りなし。人々の有様、いみじき幸ありけるかな」と宣ふに、いと妬しとはおろかなるに、「いで、あな聞きにく。そのかみ、ものとやは

御臺—膳部

ものせよ—
饗應せよ

色なる人—
色好み

知る人げな
く云々—な
じみ甲斐な

る」となむ、父君申し給へば、「まだやものし給ふ」「この弟は、殿になむ召されにし。また女子侍れど、今日はつよしむ事はべり。後に御覽せさせむ」など申し給うて、御臺まゐり、御供の人々にも、わざとのまうけにはあらで、牛飼までにいと清けに饗し給ふ。男君、「衛門、少納言その越前守よび入れて、ものせよ」と宣へば、衛門、臺盤所の方に喚び入るよにつけても、いと恥しけれども、我がしたる事かは、と思ひて入りぬ。三間ばかりあるに、疊清けに敷きて、整へたるやうに、劣らず見ゆる御達、二十人ばかり居竝みたり。御前にありけるが、「立て」と宣ひければ、來集ひたるがるたるなりけり。越前守色なる人にて、いと興あり。嬉しと思ひて、目をくばりて見渡す。物もいはれず、知りたる人だに五六人ありけり。これもしかにこそありけれと見ゆ。衛門、殿の酔はし奉れと宣ふに、「青うて出で給はば便なし。若人達盃參り給へ」とて、かはるく強ふるに酔ひ惑ひぬ。衛門たすけ給へ。知る人げなくてちやうじ給ふ」などいふ。逃げむとするに、いと若う清けなる人の、をかしういひて、圍みて逃ぐべくもあらず。わびてう

さ思ひ聞えぬ—つらきものと思ひ申さぬ

なか—くに却つて

かたばらいたがり—氣の毒がり

へば、女君、「こゝには更にさ思ひ聞えぬを、この君の、さいなみし折おはしあひて聞き給うて、猶使なきものに思し置きたるなめりかし。暫な知られ給ひそ、とのみ侍るめるに、つよみてなむ、心には更に知り侍らぬなめけさも、御覽ぜられつる事をなむ、いかゞと限なく思ひ給ひつる」と宣へば、「其折に、いみじき恥なり、何事に思しつめて、かくはし給ふならむ、と思ひしを、今日聞けば、君を疎に思ひ聞えたりしとて、勘當し給ふなりけり、と承り合すれば、なか—くにいとうれしくなむ」とて、うち笑ひ給へば、女君いとあはれと思して、「さてしもこそ畏けれ」と申し給ふほどに、督君いと美しける男君を抱きて、「くは御覽ぜよ。心なむいとつくしく侍る。天が下に、北方も、え憎み給はじとなむ思う給へる」と宣へば、「そもけしからぬ事を」とかたばらいたがり給ふ。中納言は見るに、老心地にいと悲しうらうたう、只おほえに覺えて、笑みまけて、「こちこち」と宣へば、さる翁におぢで、首にかよりて抱かるれば、「實にや天が下の鬼心の人も、えにくみ奉らじ」とて、「いとく—大きにおはするは、いくつぞ。」三つになむなり侍

いとゆるし
き一けしか
らぬ

し
び一年長

中納言いと恥しうて、この事どもを聞き給うて、思し置きたりける事と、限なくいとほ
しうて、え答はかくしからず。「他子どもより、思ひおとす事も侍らざりしかど、母具
したる者は、まづこれにと云ふまよにまけられて、實にいとほしき事も侍りけむ。され
ばいと理なり。述べ聞えさすべき事も侍らず。典藥はいとゆよしき事。さるものには、
いかなるものか許し侍らむ。部屋に籠め侍りし事も、思ふやうならぬ事したり、と聞
き侍りしかば、妬く口惜しくてなむ。何事よりも、若君達をまづ見奉らむ。いづら、今
だに」と宣へば、男君、前に立てたる几帳おし遣りて、「こよに候ふめり。出でて對面し
給へ」と申し給へば、恥しけれどるざり出で給へり。父大殿見給へば、いみじく濟け
に、物々しくねびまさりて、白くきよけなる綾の單衣襲、二藍の織物の袴きて居給へり。
見るに、これよりはよし、と思ひかしづきし女どもに優りたれば、かよりけるものを、
打ち籠めて置きたりしを、實にいかに思ひけむ、とはづかしうて、「つらきものに思ひお
きて、今まで知られ給はざりける。對面しぬるは、限なくなむ心のびて、敏しく」と宣

なめげ―無
禮

およすげ―
成長し

りしに、御氣色も、こと御子どもよりも、こよなく思しおとされたりき。又北方の御心
ばへ憂くあさましく、使ひ給へる人よりも劣りに、さいなみしを見聞き侍りしかば、世
にありと聞えまつるとも、善しと思さじ、少し人なみくになりて、仕うまつりぬべか
らむ程に、知られ奉れ」と聞え侍りし。部屋に籠めて、典薬助に許させ給へりけるが、
いと心憂く思う給へしかば、世になきさまに御覽ぜらるとも、何とも思さじ、と思う給
へて、道頼が、つらしうしと思ひ置きつる事の、忘れ侍らねば、殿をば便なしとも思ひ
聞えざりしかども、北方の情なくおほえ侍りしかば、祭など見侍りしに、殿の御車とい
ひ侍りしを、なめげなるさまに、男ども、かつはいかにと見知るさまにて、いとよくも
御覽せさせずや、と覺え侍りしも、便なく思う給ふれど、明暮他御子どもものやうに、見
給ふ事の難けなりしを、まづ夜晝見奉らぬ事を申すめれば、人の親子の中は哀なりけり
と見給ふれば、いかで仕うまつらむとなむ、思ひ給へなりにたるを、幼き人々も、およ
すけ増るめるを、見せ奉らでやなど思う給へてなむ」と片端よりつぶくと聞え給へば、

忠頼―中納言の名

観なし―頼むかひなし
おもてぶせ―不面目
こゝろ―落籠
すなはち―最初

く亡せ侍りにし後に、世に人にも聞えはべらざりつれば、世になきなめり。忠頼、年若う侍らばこそ、行き廻りあひ見むとも思ひ侍らめ。老い衰へて、今日明日とも知らぬを、うち捨てて影形もなく聞えぬは、猶世にうせにけるなめり、と悲しう歎き侍りつるに、此家は、かれ侍らばこそ領じ侍らめ、今はいかゞせむ、こよにしるべきにこそ侍れとて、いたう哀にて、前につくろひ侍りつる。督殿に侍ふらむ、とうけたまはらざりつ。いとめでたう、思ふやうにとは疎なるやうにこそ候ひけれ。今までかくなむとも知られ侍らざりけるは、忠頼を便なしと思ひ置きたるにや侍らむ。又おもてぶせなり。これが事知れじと思ひて侍るにやあらむ。二つの疑恥しく、券何が賜らむ。又も参らせまほしくなむ。今まで死に侍らぬ事を、怪しと思ひ侍りつるは、この人の顔を見むとてなりけり。今なむあはれには侍る」とて、うちしほたれ給へば、督君、さすがにあはれにて、「こよにはすなはちより、御夜中曉の事も知らでや、と歎き侍りしかど、道頼が思ふ心侍りて、暫と制し侍りしなり。その故は、西の方に住み侍りしより、時を忍びてまかり通ひ見侍

越前守も一
同行せよと
ありければ
母屋一寢殿

かしこまり
一謝罪

歎かる人
一落窪

ものし一厭
はし

昨日はしかものし侍りしかば、即ち參らむとせしを、日暮れてなむ、只今參らむ。

と聞え給へり。越前守もとありければ、御車の後にて來たり。「中納言參り給へり」と

聞ゆれば、督殿、「これへ」と聞え給へれば入り給へり。南の母屋の廂にて對面し給へり。

女君は、几帳の内に入る給へり。「御前の人、北面へ」と宣へば、みないぬ。さし對ひて對

面し給ひて、「この家のかしこまりも聞ゆべく侍るを、こよに又人知れず歎かる人も侍

るめるを、かゝる序に聞えさせよとなむ。この領じ造らせ給ひけむ、偏に理なれども、

券の狀を見侍れば、こよにこそは、御前よりも、知りまさるべく侍れ、と思ひ給へしに、

道の遠からぬほどに、御消息もなくてわたらせ給ふは、人數にも思されぬなめり、と見

給へしに、などかさしも思ほしおとすべき、と心付てなむ、かく俄に渡り侍りつる。年

比つくり御心入りたりけるに、かく妨けたるやうにて渡したる、いとものし。なほこ

こは奉りてよかし、と歎き侍るめるに、同じくは、たしかに領せさせ給へ。券奉らむと

てなむ、御消息聞え侍りつる」とのたまへば、中納言、「いと畏き仰なり。年ごろ怪し

わが子ども
より云々―
落窪の方が
いかに立ち
勝りたらむ
と妬まし

日すと宣ふに、北方きたのかた、わが子どもよりも、有様ありさま、いかに珍めづらかに見えむ、と胸むねいたし。三
四の君、「かよれば、清水きよみづにて、懲こりぬやといはせたりしにこそありけれ。かく遂つひには聞
え給ふべかりけるものを、多くの恥はぢを見せ給ひしかな。かいつらね人々出でにしは、さ
ばこの君のよせ給ふなりけり。年としごろ便びんなけにてすゑ奉りしを、妬ねたしと思ひしみたまへ
るなりけり。北方きたのかた、「そがいと胸むねいたう、かくさまざまに妬ねたき答たまをせられぬる事を、いか
でしてしがな」といへば、女むすめども、「さばれ、今はなおほしそ。御妬おんじこども多かり。直ただき御
心つかひ給へ。典樂助てんがくすけをいみじく打うせたりしは、思おもひおきたるにこそありけれ。男君知
りてぞし給ひけむ」と口々にいひあかしつ。翌朝つぎあした、衛門督殿ゑもんくすのとのよりとて御文おんふみあり。中納言
とりいれさせて見給へば、

昨日きのう、越前守えちぜんのかみして聞えし御消息おんせうしは、申されけむや。御いとまあらば、今日けふ必ず立ち
よらせ給へ。聞えさすべき事あり。

と聞え給へり、御かへりには、

我が夫取り
たる一三の
君の夫藏人
少將は今左
大臣の婿な
り
すげなく
無情

し。今は取り返すべき事にもあらず。な云ひそ。たゞ憎く覺えしまゝにせしぞかし」といふに、かひなし。「少納言、侍従なども、彼所にこそありけれ」といふを、御達聞きて、「我等、などて今まで参らで、しひたる世を見つらむ」とて、羨しういみじうて、「今だに参らむ。御心ははためたかりしかば、寄せ給ひてむ」と若きものどもいふ。兄弟の君達、あさましと思ふ。中にも三の君は、我が夫取りたる人の類なれば、近うて聞え通はむを妬しとおもふ。四の君は、我を謀りてかう憂身になしたる人なれば、他人よりも、見むにつけていみじく心うかるべきを思ふ。かのいつしか孕みし子は、三つにてもたり。父にも似ず、いとをかしけなる姫君なりけり。我が身心うし。尼になりなむ、と思ひけれど、この乳兒の、いとかなしう覺えければ、絆にて、え思ひ離れであるなりけり。少輔は、いと憎き者に思ひしみて、すげなくのみもてなしければ、來煩ひてなむありける。中納言、つらき事は思ひやみて、我が身のおほえなくしひ、人にも侮られつるを歎くに、おもだたしき事ありと、いと嬉しくて、まうでむと出で立ち給ふに、「今日は日暮れぬ。明

色我にもあらで、「かの所をこそさも領ぜめ。この年比つくりつる草木をもの入れて、それ運び取り給へ。家買ひたまふ價にこそわたし給はめ」といへば、越前守、「こはなでふ事さむらはむ。よそ人のやうにもものし給ふかな。おのづからこの族に、はかなくしき人なくて、見つくる人ごとに、おもしろの駒は、いかにくと笑はるゝがはしたなきに、同じ殿ばらといへど、只今のおほえの類なき人にいふに得て、ねむごころになりぬるこそ、た

それは云々
—面白の駒
の事はいふ
に足らず
この君—落
窪君の

のもしく嬉しけれ」といへば、三郎の大夫、「いでや、それはものゝ數にもあらず。此君のちやうじられし様は、いといみじかりし」。越前守、「いかにくとちやうじ給ひし」と問へば、「いかばかりかうたてありし事」とて、片端よりつぶくと語りて、「いかに安濃などいひつらむ。見え奉らむにつけてこそ、恥しけれ」といへば、越前守、爪弾をして、「あないみじ。おのれは、國にのみ侍りて知らざりけり。浸ましきわざをこそし給ひけれ。この衛門督は、思ひおき給ひて、かく恥を見するやうにはし給ふなりけり。我等をいかに思ひ給ふらむ。すべて交らひもせずやあらまし」と恥ち感へば、北方、「あなながしがま

「花がたみ
めならぶ人
のあまたあ
れば忘られ
ぬらむ數な
らぬ身は」
國にのみあ
りて―越前
守任地にの
み在りたる
故に
はだかりぬ
―呆れて目
口を大きく
開きしこと

かの殿のさま思ふに、いと怪しく、落窪君の、此御妻にてあるにやあらむ。安濃といひしが氣色、いとよけなり。又あつらへたるやうに、かしこの人の集りたるは、思ふに、よそ人のあらむよりはさりととも、といど嬉しきは、北方のちやうぜしさまも、國にのみありて知らぬなりけり。中納言殿に来て、大殿に、「かうくゝなむ宣ひつる」とて、此包める物を、北方に奉れば、怪う覺え、何ぞとてひきあけて見るに、おのが笥なり。落窪君に取らせしにこそあめれ、と見るに、いかなる事ならむ、と思ふに、肝こころさわくに、まして底に書けるものを見るに、むげに落窪君の手なれば、日も口もはだかりぬ。年比いみじき恥をのみ見せつるは、此奴のするなりけり、と思ふに、ねたういみじきことと二つなしとは世のつねなり。一殿の内、ゆすりみちてのよしする。大殿、家取られて、いみじき仇敵と思ひし心地も、子のしたるなりけり、とおもふに、罪もなく、先々の恥もおもひ消えて、「子どもの中に幸ありけるものを、何しにおろかに思ひけむ。かの家はこの人の母の家にて、理なりけり」と云ひります。かよれば、北方妬くいみじくて、氣

安濃なりけり
越前守の心

ふるき都らば
古今集
いその上
ふるき都の時鳥撃ばかりこそ昔なりけれ
目ならぶ
目に見えぬ
ぶ、古今集

この御物どもの返り参るにつけて、思し出させ給ひてなむ」といへば、いとあやしと思ひて、「誰が御消息とかものし侍らむ」「只おのづから思ひ出で聞え給ひてむ。わたくしにも、聲ばかりは聞き知り給はずや」といふ。安濃なりけり。この殿にこそありけれ、と思ひて、「ふるき都をば、忘れ給ひけるなめれば、何かは知りけにも聞え侍らむ。まめやかに、此殿に参りて侍らむ時には、知る人に尋ね聞えむ」と云ふに、「さてもまだもさむらふは」とて、さし出でたり。少納言なり。怪しうも集りたるかな、と思ふに、又奥の方に、「目ならぶといふなれば、まろは驚かし聞えじ」といふ聲を聞けば、中の君のおもとなりし侍従君なり。越前守の思ひて、ときんゝすみける。かくのみかしこの人の聲にていひかくれば、心地もあわてて、いかなる事ならむ、と怪しうてえ答へやらず。衛門「三郎君と聞えしは、今は何にてかおはすらむ。御冠やし給へる」「しかく。此春なむ大夫といふめる」と答ふれば、「必ずまゐり給へ。對面に聞ゆべき事なむ積りて、と聞え給へ」といへば、「いとやすき事」とて、この包みたる物のかして、急ぎていぬ。道々

鏡かがみのしきを押返おしかへして書き給ふ。

明暮あけくれはうきこと見えしますかがみさすがに影かげぞ戀こひしかりける

と書き給へり。色紙しきしひ一重ひとえに包つみて、物ものの枝えだにつけて、「越前守えちぜんのかみ喚こゑびて取らせよ」とて、衛

門もんに取らせて、越前守えちぜんのかみよびて、「いかに怪あやしう思おぼすらむ、と思へど、御消息おんせうそこもせで渡わたり給

かしこまり

—謝辭

侍はべらむ。此券けんもたしかに御覽ごらんせさせ、聞きゆべき事ことも侍はべり。今日明日けふあすの程ほどに、かならずた

ち寄よらせ給へ、と大殿おとどに聞きえさせ給へ。そこたちも只今ただいま使つかなきやうに思おもふらむ。遂つひにこ

こにぞいひ語かたらははむ」とのたまふ。みけしきいとよし。越前守えちぜんのかみあやしと思ふ。「大殿おとどか

ならず立ちよらせ給へ。やがて御供おんもてに、そこにもものし給へ」と宣のたまへば、うけたまはり

て歩あゆみ出いづるに、衛門ゑもん、妻戸つまどのもとにて、「こゝに立ち寄り給へ」といはすれば、いと

ほえなく、怪あやしと思おもひながら寄よりたるに、袖口そでぐちいと清きよけに出い出して、「これ北方きたのかたに奉たてらせ給

へ。昔むかしいとやんごとなきものに思おもしたりしものなれば、今まで失うしなはせ給はざりけるは。

妻戸—開戸

渡りぬや
左衛門の督
が
見せ給ふに
一人をやり
て

わび一愁訴
し
男君一左衛
門督

言殿には、渡りぬやと見せ給ふに、「かうくめでたくして、渡り給ひぬ」と語り申せば、今は力なしと、集りて歎くをも知らで、遊びのよし。衛門かくし給ふを、思ふ様にめでたし、と男君を思ふ。翌朝、越前守「運び侍りし物ども、運び返し侍らむ」とて参りたれば、「一二日、こよの物は、外へは持ていくまじ。今日明日過して、取りに物せよ。いとたしかにありや」と宣ひて、ことに聞き入れねば、思ひ惑ふ事かぎりなし。三日が程遊びのよしりて、いといまめかしうをかし。四日の翌朝、越前守まるりて、「今日だに賜はらむ、人々の櫛の筒など様の物籠めて、いとあしくなむ」とわび申せば、いとをかしがりて、みな目録して返し給ふ。男君、「かの昔の古蓋の鏡の筒は、ありや。これに添へて返し給へかし。北方、寶と思ひためりき」と宣へば、衛門興じ喜びて、「衛門が許に侍り」とて、取り出でたれば、見ざりし人々見て、「あないみじや」とて笑ふ。いとたゞならむよりはとて、「しるしばかりに、もの書きつけ給へ」と申し給へば、女君、「いでいさや、いとほしき序に、知られ奉らむこそ苦しき」と宣へば、「なほく」と申し給へば、

あひ給はず
—あひたら
ずの誤かと
いふ
ほれて—茫
然として

猛き事—詮
とすること

いとほし—
氣の毒なり

此殿このの御世ごよなれば、誰たれかは定めむとする。多くの物をつくして造りけるが、いみじき事、
時ときにあひ給はず、物ものあしき人、いみじきものなりけり」と空そらをあふぎて、ほれて居給へ
り。衛門督ゑもんのかうごの殿には、渡り給はむとて、女房にようぼうに装束さうそく一具ぐづつして賜たまへば、程なく今めかし
う嬉うれしと思ひけり。中納言ちゅうなごんご殿には、ものをだに運びかへしに、人やり給へど、「更さらに入れ
だに入いれず」などいへば、北方きたのかた、手てをうちねたがる。「いかばかりの仇敵あながたきにて、衛門督ゑもんのかみあれ
ば、我が身も、惑まごはすらむ」と惑まごふ。越前守えちぜんのかみ、「今はかひなし。物ものだに運び返かへさむ」と申
せば、「早はやうそれは取られよ」と、鼻はなたからかに宣へど、人々更さらに入いらねば、諍いっさふべき事
にしあらねば、猛たけき事こととは、集あつりて咀のろふ。戊いぬの時ときばかりに渡り給ふ。車くるま十輛じゅうりょうして儀式ぎしき
でたし。下りて見給へば、實ひに寢殿しんでんはみなしつらひたり。屏風びやうぶ几帳きちやう立て、みな疊たたみきたり。
見給ふに、實ひにいかに思ふらむ、といとほしけれど、北方きたのかた、妬ねたしと思ひたればなりけり。
女君おんなぎみは、大臣おとぎの思おもすらむ事を推おしはかり給ふに、物ものの興きようもなく、いとほしき事を思おもはず。
男君おとぎみは、「運はこびたらむもの失うしなふな。慥たしかに返かへさむ」と宣ふ。かくめでたくのとしるを、中納ちゅうな

うつくしが
りー愛し

「天あめの下したの親おやにて、おのが家いへおし取らるゝ人ひとやある。歎なげき給たまふらむ罪つみは、後あとにもよく仕つかうまつり直ただし給へ。渡わたらじと思おもすとも、まろ、子達こだち具ぐしてわたりなむ。かくいひ立ちてとどまりたらむは、いと嗚呼をこならむ。かの家奉おまらむと思おもさば、しられ奉まもりて後に、奉まもり給へ」とのたまへば、いふがひなくて、又も聞きえ給はず。越前守えぜんのかみはかへり來きて、殿とのに申まをす。「更さらに今は、不用ふように取とられ奉まもりぬるを、恥はぢにてやみぬばかりなり。大事だいじと思おもひて申まをすに、事ことにもあらず思おもし召めして、いと美うつくしけなる子こを膝ひざにするてうつくしがりて、申まをすこと耳みみにも聞き入れ給はず。さてはかういひて入り給ひぬる。左大臣さだじん殿どのは、我われは知らず。衛門ゑもん督かみが券けんもたる方かたこそ、強つよくはすなれ、と宣のたまふ。更さらにかひなし。なかは券けんをば尋たづね取り給はずなりにし。今宵こんよ渡わたり給はむとて出車いだしぐるまの事こと、御供おんどもの人々の事ことなど、整ととのへ騒さわぐめりつるを」などいへば、更さらに物ものも思おもはず、いみじと思おもひ給へり。「落窪おとしくぼ君きみの母ははの死しぬとて、かの子こに取とらせ置おきしを、我われも忘わすれて乞こひ取とらざりし程ほどに、かく亡なせにたるぞ。何なにが、それが賣うりたるを買かうて、かくしたるぞ。いみじう人笑ひとわらはれなる事ことかな。朝廷てうていに奏まをすとも、

ても券持給へるか」と、いとなまめかしう答へて、いと白う美しけなる子の三つばかりなるを、膝に居ゑてうつくしがりる給へれば、大事と思ひて申すに、いと腹だたく侘しけれど、思ひ静めて、「この家の券うしなひ侍りて、尋ね申し侍れど、いまだ聞き出で侍らず、もしそれを人の賣りて侍るにやあらむ。只その疑のみ侍る。さてこの家、領すべき人なむ侍らぬ」と申せば、「券を盗みて賣りたるを買ひたるにもあらず。道理にまかせて、おのれより外に領すべき人なむなき、と覺ゆれば、さるやうこそあらめ、と思ひ止み給ひねかし。中納言には、今しめやかに券も自ら見せ奉らむ、と申し給へ」とて、御子かき抱きて入り給ひぬれば、越前守いふがひなくて、いたく歎きて立ちぬ。女君つづくくと聞き給ひて、「このわたらむとし給ふ所は、三條にこそありけれ。又まろと聞えしものを、年比造りて、渡らむとし給ふらむに、妨けたらむは、いかに思すらむ。親の歎き給ふらむは、罪いとおそろしく、仕うまつる人だにこそあれ、かくし給ふ事を妨げ給へば、歎かせ奉るが心憂き事。衛門がする事ぞ」と、いとほしと思したる氣色にて宣へば、

しめやかに
—徐に

まろと云々
—妨するは
我なりと

申し給へば、「衛門督に即ちいひしかば、しかくなむ云ふめりしを、まだ委しくは、あの督に逢ひて問へ。こよには知らぬ事なれば定めがたくなむ。さやうに券なくて領じ給ふが、をこなるやうになむ」と云ひ出し給へれば、衛門督殿に参りたれば、御直衣ばかり著給ひて、簾のもとに居給へれば、越前守はかしこまりてゐたり。女君も、御前なれば見出し給うて、あはれとおほす。衛門、少納言、「いかなりしをり、おそろしと思ひて、御心あやまたじと思ひけむ」と笑ふ。越前守、「殿に参りて、御けしき賜はりつれば、しかじかなむ仰せられつる。券は實にや候ふらむ、それを委しく承り定めむ。又年比殿しろしめすと、かけても承はらましかば、かくまで誰もく、仰せられ聞えさせましや。この家つくり侍る事、二年ばかりなり。その程までは首なく侍りて、かく妨げさせ給へるは、いと安からずなむ、歎き申し候ふ」と申せば、「年比は、券のこよにあれば、家といふものは、券もたる人より外にしる人なき」と聞きしかば、おだしう思ひて、我が家とも名のらでありつるは、斯うし給ふ時こそ、かゝる事ありけりともいはめ。さてもさ

おだしう—
安心に

かしこに侍
る人―二條
殿にある人
落窪の君

をこがまし
―痴愚なり
御前―前驅
いだし車―
供人の乗る
車、
またつとめ
て―其翌朝

りしに、俄に、かの中納言渡らむとなむしはべる、と聞えつれば、怪しさに、まことか
と聞かせに、男ども遣はして、案内せさせ侍るなり」と聞え給へば、「かの中納言は、我
より外に領すべき人なき家を、かくする事は、いと非道なる事、とこそ宜ふなりしか。そ
こにはいつより領じ給ふぞ。券やある。誰が取らせしぞ」と宣へば、「かしこに侍る人の
家にはべり。母方の祖父なりける宮の家なりける、傳はりて侍るを、かの中納言は耄け
て、妻にのみ随ひて、情なく、ものしき心のみ侍りしかば、にくさに、この家も取らせ
じとなむ。券いとたしかに侍り。券知らでつくりて、我より外に知るべき人あらじと侍
るこそ、をこがましけれ」とのたまへば、「更にいふべきことにもあらざなり。早くその
券見せ給へ。いとなげかしと思ひ給へり」と聞え給へば、「今見せ侍らむ」とて、二條に
おはして、あすの御前の人々召す。又いだし車は、人々にあてさせ給ふ。中納言一夜歎
きあかして、またつとめて、太郎越前守を殿にまゐらす。「みづから参らむとするを、罷
り歸りしまよに、みだり心地あしくてなむ。御氣色たまはりし事は、いかゞ侍らむ」と

ころには―
 われよりは―
 ころら―許
 多
 ひとへに―
 一心に
 しか―左様

なり、いかで御消息おんせうしもせでは渡わたるべき、殿どのも明日あすなむ渡わたせら給ふべきとて、まうで來居くるて、下人しもびとども通かよはし侍はべらす、妨きまたぐる事の侍はべれば、驚おどろきてなむ。この家いへは更さらに、外ほかに人知しるべからずとなむ思おもひ侍はべる。いかなる事にか侍はべらむ。券けんや候きよらふらむ」と、いたう歎なげきたるさまにて申し給へば、大臣おとぎ、「更さらに知らぬ事なれば、ともかくも聞きえ申まをすべからず。のたまふやうにては、衛門督ゑもんのかみの無道むどうなるやうなれど、さりともあるやう侍はべらむ。今いまかの衛門督ゑもんのかみにいひて、あるやう聞ききてなむ、委くはしくは聞きゆべき。はじめより知らぬ事なれば、ことにはいかど聞きえむ」と、いとも更さらに心こころに入れぬ氣色けしきにて答こたへ給へば、中納言ちゆうなごん、また聞きゆべき方かたなくて、いといたう歎なげきながら立ち給ひぬ。「殿どのに申しつれば、しかるゝなむ宜よろふ。いかなるべき事にか。こよらの年比としごほひとへに造つくりて、人笑わらはれにやならむとすらむ」と歎なげき給ふとは世よの常つねなり。衛門督ゑもんのかみ、内裏うちより殿どのにまかで給へれば、「中納言ちゆうなごんのいまして、しかるゝの事ことのたまへるは、まことか。いかなる事ぞ」と申し給へば、「しか、まことにはべり。こよに年比としごほわたり侍はべらむとて、さるべき所修理すしりせさせ侍はべらむとて、人遣つかはした

おこなひ—
指揮し

出立—移轉
の用意
御けしきた
まばるべき
—御意得べき

なるぞ。暫な渡しそと仰せらるれば」とて、入り立ちて、「こよは雑色所ぞ」など定めて、「こよもとはとかくせよ」など、おこなひて直さす。人々惘れ惑ひて、殿に走りて、「かうの事はべる。家司、職事ひきりてまうで来て、さらに下種ども出入せさせ侍らず。殿も明日なむわたり給ふべきとて、雑色所、政所など定めて、所々しなほさせ侍るなり」など申すに、中納言殿、老心地にまどひ給ひぬ。「いといみじきことかな。かの家は、我が手に券こそなければども、我が子の家なり。我ならでは誰領せむ。その子世にありと聞き侍らばこそ、それがするならむとも思はめ。いかなる事にかあらむ。うちあひ諍ふべき事にもあらず。父大臣に申さむ」とて、出立もし給はず。しぬこよちに、装束もしあへず、急ぎ惑ひて、左大殿にまうで給うて、「殿に御けしき給はるべき事ありてなむ参りたる」と聞え給へば、大臣對面し給うて、「何事にか」と申し給へば、「年ごろ我が領じ侍る所、三條に侍るを、この月比つくるはせ侍りて、明日まかりわたらむとて、侍ども物はこばせ侍るほどに、衛門督殿の家司とまうす者まうで来て、殿のしろしめすべき所

政所—公家
の家政を處
理する所

知る—領有
す

職事—事務
者

に嬉しきよしをぞ云ひける。昔見し人々、用意ことなれば、たよりありて、よしと思ひあへり。かくて明日わたるべしとて、中納言殿には、御方々の物運び、簾かけしつらふ。人々の物さへはこぶと聞き給ひて、衛門督殿の家司なる、但馬守、下野守、政所別當なる衛門佐、雑色などのきら／＼しきを召して、「しか／＼ある所の、三條なる家領するを、渡らむと思ふほどに、源中納言、いかにする事にかあらむ、其處を領じて造ると聞きつるを、さりととも消息して、あるやう云ひてむ、と待ちて物もいはざりつるを、明日わたるとなむ聞く。まかりて、いかなる事ぞ、こよに知るべき所を、音もせで渡るはいかなることぞ。暫な渡りそといへ、そこに物運びたらむも、な取らせそ。こよにも翌日渡らむと思ふ。男ども、雑色所定て、只居に居よ」と宣へば、皆承りて急ぎていきぬ。實に見れば、造りざまいとあらまほしう、砂子敷かせ、簾かけさせなどす。いと猛にひきつれて來ぬ。人々驚きて、「いづこの人ぞ」と問へば、「衛門督殿の家司、職事どもなり。この殿は、殿のしろしめすべき所なるを、いかにして御消息をだにせで、わたりたまふべか

くてたしな
みたる風情

けしうー悪
しく

めでたきお
ぼえー寵遇

たり。いと濃こき紅くれなるおんはの御袴はかま、白しろき生絹すやしの御單衣おんひとへ、羅うすものの直衣なほしを著きて出で居給へる様、いみじ
うなまめかしう清きよけにおはす。まづ、男君思やうふ様におはすめりと見あへり。殿どのことごとく
にうち見給うて、「けしうはあらぬ者どもなめるよ。衛門ゑもんが導みちびきなれば、足たらはぬことあ
りとも、云いふべきにあらず」とうち宣へば、「いとおほえ強つよしや」と笑わらひ給ふ。「足たらはぬ
事ありとは、御覽ごらんじ知らぬにこそは。姫君おまへの御前さきに侍まじひつる程に、え女どもを取繕とひて
御覽ごらんせさせぬなり。かやうの事は語りてこそ」とて、出でくる人を見れば、安濃あこぎなり。
「こはいかに、この殿どのには、かくめでたき覺さえにて侍まじひ給ひけるぞ」と驚おどきぬ。衛門ゑもん、今
しも見つくるやうにて、「怪あやしう、見奉りし心地こころするかな」といふに、「こよにも同じ心おなに
見奉るに、うれしうも」といふ。「年ごろは、對面たいめんなくてなりもてゆくも、哀あはれに思おもひ給へ
つるを」とて、昔物むかしもの語がたりなどするほどに、又いと白しろう、美うつくしけなる君の、三つばかりな
るを肩かたにうちかけて、「衛門君ゑもんのかみ参りたまへ」とて、出で來るを見れば、少納言せうなごんなり。「怪あやし
う昔心地むかしこころして、哀あはれなる御聲おんこゑどもかな」とて、いひるたる事どもは書かかじ。うるさし。互かたみ

のくしる一
評判する
うけひて一
承諾して

つゝましよう
て一恥かし

て、いと清けなる者の、よしありてと見おきしを、と構へかう構へ人を遣りつゝ、「かうかうして、只今の時の所なる、人々いたはり給ふ事かぎりなし」といはせられたれば、若き者どもにて、己が君のしひ惑ひ給へるは、口惜しう思ひて、何方か往かましと思ひ急ぐ程に、かういとよけにいへば、只今の世にのよしる殿ぞかし、など思ひてうけひきて、参らむと、急ぎつゝ里にいづ。落窪君とはゆめ知らず、又一所に参り集はむこともゆめ知らで、皆おのく隠しさよめきなむしける。人々して、車つかはして、片端より迎へさせ給ふに、皆まるる。いみじう人多かる殿にて、化粧したる事限なし。ひとつ所に参りぬ。同じ所におろしたれば、互に見つけて、いとをかしと思ひたりけるに、聞きしもしるく、清けなる若き人二十人ばかり、白張の單衣襲、二藍の裳、濃き袴著て、五六人、赤らかなる袴にて、綾の單衣襲引きかけたる、薄色の緞の裳、あやなど同じやうに装束きつゝ、かいわれくゝて出で來つ。人々の見るに、わびぬべし。女君は、暑氣に惱しうて見給はねば、男君、我見むとて出でおはす。いとつゝましようて、うつぶしつゝ見あひ

御爲云々、落窪は己に害を加ふる人を愛する故却て爲を思ふ我を攻撃すると也。こゝに―三條へ落窪を移らせん。我が心にて聞かせじ―我が口からはこの計畫を落窪に聞かせじ。

一の人―第一番の人

心もおはせず。御ため悪き人は、いと哀なりとのたまへば、我が身さいなまるよよし」とて笑ひ給ふ。衛門心得て、「いかゞは申すべき」とて立ちぬ。月たちぬれば、さりけなく、衛門「いつか渡り給ふべき」と案内せさせければ、この月の十九日と聞き、さなむと男君に申せば、「その日こゝに渡し奉らむ。さる心して、若き人々今少しもとめ設けよ。かの中納言の許に、よろしきものはありきや。それもとかくもいはで喚び取れ。後に妬がらせむ」と宣へば、衛門「いとよく侍りなむ」といふ。かく宣ふをいと嬉しと思ふ心の著ければ、男君も、我が心にて聞かせじと思ひて、さよめきありき給ふ。女君に申し給ふ、「人のいとよき所得させたるを、この十九日に渡らむ。人々の装束し給へ。こゝも修理せさせむ。疾くわたりなむ。急ぎ給へ」とて、紅の絹、茜、染草ども出し給へれば、ひとへにかく構へ給ふことも知り給はで、いそがせ給ふ。衛門たよりのをつくり出でて、かの中納言殿に、清けなりと見し人々よばす。うへの御方に、侍従君とていと清けなる、一の人におほえたる、三の君の御方に、すけの君、大夫のおもと、下仕にまろやと

落窪物語 卷之三

故上―落窪
の亡母

券―證文

かよる物思ものおもひに添そへて、三條さんじょういとめでたく造り立てて、「六月みなづきに渡りなむ。こよにてかくい
みじきめを見るは、こよのあしきか、と試こころみむ」とて、御女おんじよめども引き具ひしていそぎ給ふ。
衛門ゑもん聞きつけて、男君おとぎみの臥し給へるほどに申す、「三條殿さんじょうどのは、いとめでたく造り立てて、
皆みなひきゐて渡りたまふべかなり。故上こころへのこよ失うしなはで住み給へ。故大宮こおほみやのいとをかしうて
住み給ひし所なれば、いと哀あはれになむ覺ゆる。と返かへすく聞え置き給へるものを、かく目
にみすく領りやうじ給ふよ。いかで領りやうじさせはてじ」といへば、男君おとぎみ、「券けんはありや」と宣へ
ば、「いとたしかにて候ふ」とさてはいと能よくいひつべかなり。渡らむ日をたしかに案内あなない
して來」と宣へば、女君おんなぎみ、「又いかなる事をか爲出し給はむ。衛門ゑもんこそ、けしからずなり
にたれ。只ただいひはやすやうに、いみじき御心をいふ」と恨うらみ給へば、衛門ゑもん、「何かけしか
らす侍らむ。道理道理なき事に侍らばこそあらめ」といへば、男君おとぎみ、「物ものな申しそ。こよには

寶の君一
大
切の人

などして息め奉りてけり。

物し―不都合をなせり

女君云々―落蓮の君の少し腹立ちたる様也

君の人―衛門督の召使しふねく―執念深く

を、心なくしたりといふなるは。その中に、かの二條のものとの聞えしは、いかに思ひてせしぞ」と宣へば、衛門督、「なさけなし、と人の云ふばかりの事もし侍らず。打杭立て侍りし所に、車立て侍りしを、男ども、所こそ多かれ、こゝにしもといひ侍りしを、やがて只いひにいひあがりて、車の轆をなむ切りてはべりける。さて人打ちけるは、それが無禮にいひ立てりしを、にくさに、冠をなむうちおとして、男ども引きふせ侍りし。おのづから少將兵衛佐も見侍りき。いと人ものしと云ふばかりの事し侍らざりき」と宣へば、「人の誹謗な負ひそ。さおもふやうあり」と宣ふ。女君は、いとほしがりて歎き給へば、衛門、「さばれ、いたくな思しそ。大臣のおはせばこそあらめ。典藥がうたれしは、かのしるしにや」といへば、女君、「いと胸きたなかりける。我が人にはあらで、君の人になりね。それこそかくものは、しふねく思ひいへ」と宣へば、「さば衛門、わが君には仕うまつらむ。衛門が思ふ限りの事をせさせ給へば、實に御前よりも、實の君となむ思ひ奉る」といふ。あの北方は、いみじう病み苦しがる。御子ども集りて、願たて

横がみ一軸
輪を持つも
の

胴一車の胴

あら〜
危し
れりつ〜
緩歩しつ〜

人の心地、たゞ思ひやるべし。皆泣きにけり。中にも北方、女どもは、口の方に乗せて、我は後の方に乗りたりければ、こよなき横がみより引き落しけるに、轆ばかり出でたりける。辛うじて這ひ乗りにけれど、腕つきぞこなひて、おい〜と泣き給ふ。「いかなるものの報にかよる目見るらむ」と泣き給へば、御女ども、「あなかま〜」と宣ふ。辛うじて、御前の人々たづね来て見るに、かよれば、いみじと思ひて、「胴かきすゑよ」とおこなひ出でたるに、皆人々、「いと無徳にある御車のぬしたちかな」とわらふ。いと恥しうて、さわやかにもいはぬに、面を見かはして立てり。辛うじて昇いするに、北方、「あら〜」と惑ひ給へば、ねりつとやる。辛うじて殿におはしたり。御車寄せたれば、北方人にかよりて、たゞ時の間に泣き腫れており給ふを、「なぞ〜」と驚き給へば、かう〜、しかありつるよしを申す。中納言、いみじと思したる事限なし。「いみじき恥なり。我法師になりなむ」と宣へども、かつはいとほしうて、えなり給はず。世の中に、この事をいひ笑ひのよしれば、左大臣聞き給ひて、「まことにや、しか〜はせし、女車

塵ばかり一
少しばかり

まな／＼と
—まじめ顔
に
君—督

轉—車下に
ありて輿と
相連縛する
もの

のいふよ。殿をばいかにし奉らむぞ」とて、長扇をさしやりて、冠をはたとうちおとしつ。鬘は塵ばかりにて、額にはけ入りてつやくと見ゆれば、物見る人にゆすりて笑はる。翁、袖をかづきて惑ひ入るに、さと寄りて一足つつ蹴る。「後の事いかでぞある／＼」と、心のかぎりはしつ。翁の「死ぬべかなり」と云へど責むれば、息音もせず。君、まなまなと虚制止をし給ふ。いといみじけにふみ伏せて、車にかけて引きやるに、男ども見懲りて、怖ぢわなよきてえ車につかず。よそ人のやうにさすがに添ひて、他の小路にひきもて来て、道なかにうち捨て、いぬる時にぞ、辛うじて男どもより来て、轎もたけたる氣色いとあやしけなり。北方よりはじめて、乗りたる人、「物も見じ。歸りなむ」とて牛かけてうちはやめ、おひ惑ひて歸れば、いさかひしける程に、一の車の轡をふつつと切りてければ、大路中にはたとひき墜しつ。下藤の物見むと戦きさわぎ笑ふ事、かぎりなし。車の男ども、足を空にて惑ひたふれて、ふともえかよけず。「出で給ふまじきにやありけむ、かくいみじき恥の限を見る事」と、つまはじきをしつと惑ふ。乗りたる

と
おこなひて
―計らひて

はつかに―
僅に

もばら―專
ら

又せむ―返
報を也

前ぜんの人、左衛門藏人を召して、「かれおこなひて、少し遠くなせ」と宣へば、近くよりて、たゞひきにひきやらす。男おのこどもすくなくて、えふと引きとどめず。御前おまへ三四人ありけれど、「益やうなしこたびのいさかひしつべかめり。只今ただいまの大政大臣の尻しりは蹴けるとも、この殿どのの牛飼うしかひに、手てな觸ふれてむや」といひて、人の家の門いへかきに入りて立てりて、目めをはつかに見出して見る。少しは様やうおそろしきものに、世に思はれ給へれど、實じちの御心は、いとなつかしう、のどかになむおはしける。「いと無徳むとくなるわざかな。今はいかどいらふべき」など定むるに、此典藥助このてんやくのすけといふ痴者しれものの翁おきなありければ、「いかでか、心にまかせては引きやらせむ」といひて、歩み出でて、「今日の事は、もばら情なさけなくはせらるまじ。打杭うちくひうちたる方に立てたらばこそ、さもし給はめ。向むかひに立てたる車を、かくするは何なぞ。後のちの事思ひてせよ。又せむ」と痴者しれものはいへば、衛門尉ゑもんじゆう、典藥てんやくと見て、年ごろ此奴こやつにあはむとおもひしにうれしと思ふ。君もまた典藥てんやくと見給ひて、「惟成これなり、それは如何いかにいはずるぞ」と宣へば、こよろえて、はやる雑色ざふしきどもに目をくはすれば、走りよりて、「後のちの事思ひてせよ、と翁おきな

檳榔毛一屋
形の簷を檳
榔の葉の編
みたるにて
ふける車

真人一汝

かうほうす
一強放す或
は曰く斯う
はずにてう
の一字衍か

見むと聞えたまうければ、皆おはしたりける車どもさへそはりたれば、二十あまりひきつどきて、皆次第どもに立ちにけりと見おはするに、我が杭したる所の向に、ふるめかしき檳榔毛の一つ、網代一つ立てり。御車ども立つるに、男君の交らひも、うとき人にはあらで、「したしう立てあはせて、見わたしの北南に立てよ」と宣へば、「この向なる車少しひきやらせよ。御車たてさせむ」といふに、しふねがりて聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせたまふに、「源中納言殿」と申せば、君、「中納言にもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかで、この打杭ありと見ながらは立てつるぞ。少しひきやらせよ」と宣はすれば、雑色どもよりて車に手をかくれば、車の人出て来て、「など、この真人達のかうする。いたうはやる雑色かな。かう蹴立つる我が殿も、中納言おはしますなり。一條の大路も、みな領じ給ふべきか。かうほうす」と笑ふ。「西東、齋院も恐ぢて、よぎ路しておはすべかなるは」と、口あしき男又いへば、「おなじものと、殿をひとつ口にな言ひそ」などいひて、えとみにひきやらねば、男君達の御車ども、まだえ立てず。君、御

をさく—
大概

庄—庄園私
領

さうくし
—寂寥なり

老いほけ給へるうへに、物思のみをして、をさく—出でまじらひ給ふこともなく、つくづくと入り居給へり。落窪君の傳へえ給へる家、三條なる所にて、いとをかしかりける。「落窪君になむ取らせたりけるを、今は世になくなりたれば、我こそ領せめ」とのたまへば、北方も、「さらなる事。世に生きたりとも、さばかりの家、領すばかりにはあらざらまし。よきあこ達、我等が住まむにいと廣うよし」といひて、二年出でくる庄の物を盡して、築土より始めて、新しく築き廻して、古木ひとつまじらず、これを大事にて作らせ給ふ。かくて「今年の賀茂祭、いとをかしからむ」といへば、衛門督殿、「さうくしきに、御達に物見せむ」とて、かねてより御車あたらしく調じ、人々の装束ども賜びて、「よろしうせよ」と宣ひて、いそぎて、その日になりて、一條の大路に打杭うたせ給へれば、今はといへど、誰ばかりかは取らむ、と思してのどかに出で給ふ。車五輛ばかり、大人二十人、ふたつは、童子四人、下仕四人乗りたり。男君具し給へれば、前驅四位五位いと多かり。弟の侍従なりしは、今は少將、童子におはせしは兵衛佐、諸共に

ふ。御乳母は、少納言、子産みあはせたりければ、爲させ給ふ。これを寵しがり、かしづきものにし給ふ。司召に引き超え中納言になり給ひぬ。藏人少將、中將になり給ひぬ。大將殿は、かけながら大臣になり給ひぬ。左大臣の宣ふ、「かく子のうまれたるに、祖父、父よろこびをする、かしこき子なり」と申し給ふ。今はましておほえはことに、花やぎまさり給ふ。衛門督さへかけ給ひつ。中將は、宰相になり給ひぬ。中納言は、かく少將なりあがり給ふにつけても、三の君、北方は、などかなど、名残ありてだに、時々涙くましきを、いみじう妬がれど、かひあるべくもあらず。衛門督は、我が身の時になり給ふまよに、中納言殿を、吹く風につけて侮り嘲じ給ふ事しも多かれど、同じ事のやうなれば書かず。又の年の秋、また男君、うつくしう産み給へれば、左大臣の北方、「御産屋ぞ、うつくしうも、いそがしう取りつどき給へるかな。こたみは、ことにあづかり奉らむ」とて、御乳母具して迎へ奉り給ふ。帯刀は、左衛門尉にて藏人す。かく思ふやうにて、めでたくおはすれど、中納言殿に知られ給はぬことを、飽かずおほす。中納言殿は、

吹く風につけて何につけて
産み給へれば
落窪が

たとしへな
く一瞥へむ
方なく

ちやうぜじ
一苦懲らさ
じ

中納言一落
窪の父

産養一産後
に於ける三
夜七夜など
の饗應

ものに聞え給へり。かくて、たとしへなく思ひかしづききこえ給ふ君の御心を、今はと見給ひてければ、中將君ちうじやうぎのみにきこえ給ふ。「今はいかで殿どのに知られ奉らむ。老い給へれば、夜中よなか曉あかつきの事も知らぬを、見奉らでや止やみなむ、と心細こころほそくてなむ」と聞え給へば、中將殿も、「さは思おぼすべけれども、猶なほ暫念しほしねんじて、な知られ奉り給ひそ。知られて後は、いとほしくて、え北方きたのかたちやうぜじ。今少しちやうぜむと思ふ心あり。又まろも、今少し人らしくなりて、中納言ちうなごんは、よにとみには死しに給はじ」とのみ云ひ渡り給ふに、つゝみてのみ過すし給ふに、はかなくて年としかへりて、正月ひつき十三日、いとたひらかに男子おのこ産み給へれば、いと嬉うれしと思おぼして、若き人のかぎりしてうしろめたしとて、男君の御乳母おんめのむかへ給うて、「上うへなどのし給はむやうに、よろづ仕つかうまつれ」とあづけ奉り給ふ。御湯殿みゆどのなどしるたり。女君のうちとけ給へるを見て、うべなりけり、男君のあだわざし給はぬは、と思ふ。御産養うみやひ、我もくとし給へれば、委くはしく書かかず、思ひやるべし。只銀ただしろがねをのみ、よろづにしたりける。遊あそびのよする。かくめでたきまゝに、衛門ゑもん、いかで北方きたのかたに知らせばや、と思

いはけなく
—幼稚にて

しつらひて
—取り繕ひ
席を設けて
ゆかり—縁
者

をかしうにほへり。姫君は、實にたゞの人ならず、あてにけだかくて、十二ばかりにおはしませば、まだいとわかう、いはけなくをかしけなり。中の君は、若き御心にをかしとおほして、細やかに語りひ聞え給ふ。物見はてぬれば、御車よせて歸り給ふ。中將君、やがて二條にとおほせど、北方、「さわがしうて、思ふこと聞えずなりぬ。いざたまへ、一二日も心のどかに語りひ聞えむ。中將の物さわがしきやうに聞ゆるはなぞ。おのが聞えむことに随ひ給へ。中將はいとにくき心ある人ぞ。な思ひたまひそ」とて、笑ひて添ひ給うて居給へり。御車よせられたれば、くちには宮、中の君、しりには嫁君と我と乗り給ふ。つぎく、に皆乗りたまうて、中將殿皆乗り給ひて、引きつゞきて大將殿におはしぬ。寢殿の西の方を俄にしつらひて、おろし奉り給ひつ。御達のゐどころには、中將の住み給ひし西の對のつまをしたり。いみじくいたはり給ふ。大將殿も、いみじく思ふ子の御ゆかりなれば、御達にいたるまでもいたはり騒ぎ給ふ。四五日おはして、「いとなやましきほど過して、のどやかに参らむ」とて歸り給ひぬ。まして對面し給ひて後は、哀なる

一佛淨土—
彌陀の淨土
對の御方—
落窪の方

うへ—北方

猶わたり給へ。をかしき見物も、今は諸共にとなむ思ひ給ふる。

と聞えたまへり。見給ふにつけても、かの石山まうでの折、ひとりえり捨て給ひしも、思ひ出でられて心うし。一條の大路に、檜皮の棧敷いといかめしうて、御前に砂子しかせ、前栽うゑさせ、ひさしう住み給ふべきやうにしつらひ給ふ。曉にわたり給ひぬ。衛門、少納言、一佛淨土に生れたるにやあらむと覺ゆ。この君にいさよか心寄せあらむ人をば、ねたきものに云ひのよしりしを、見ならひたるに、對の御方の人とて、いたはり用意し給ふさま、いとめでたしと思ふ。乳母のおとど、さこそいひしか、出で来て、心しらひつかうまつりて、「いづれか惟成があるじの君」と、問ひありきて、若き人々に笑はる。女君は、「何かうとくしく思ひ聞えむ。思ふべき中は、睦じくなりぬるのみなむ、後もうしろやすく、心やすき」とて、うへや中の君など、おはする所に入れ奉り給ふ。見給ふに、我が御むすめ、姫君にも劣らず、をかしけにて見ゆ。紅の綾のうちあはせ一襲、二藍の織物の袷、羅の濃き二藍の小袷著給うて、恥しと思ふ給へるけしき、いと

れて、又もうち出でず。かの殿にも、かく思しかよふ所ありけりと聞えて、おほし絶えにけり。かく思ふやうにのどやかに、思ひかはして住み給ふほどに、孕み給ひにければ、ましておろかならず。

四月、大將殿の北方、宮たち、棧敷にて物見たまふに、中將君に、「二條に物見せ聞え給へ。わかく物し給ふ人は、物見まほしくし給ふものを、おのれも今まで對面せぬ心もとなきに、かゝるついでにとなむ思ふ」と聞え給へば、中將いと嬉しと思ひ給ふけしきにて、「いかなるにか侍らむ。人のやうにもものゆかしくも侍らざめり。今そよのかして参らせむ」と聞えたまうて二條におはして、「うへはかくなむ宜ふぞかし」と聞え給へば、「心地のなやましうて、あやしけになりたるも思ひ知られて、物見に出でたらば、我見えたらむに、いとわりなからむ」とて、物うけなれば、中將「たれか見む。うへ、なかの君こそは。それまろが見奉るも同じ事」とて、しひてそよのかし聞えたまふ。北方の御文にも、

うへー少將
の母北の方
心ちなやま
しうて一懷
妊して

不用なるよし少將承引せれば此媒無益なりと

又人まうくる一外に女を置く

したくづれたるにや一六帖に「あだ人は下くづれたる岸なれや思ふといへど頼まれずして」

くいふをいといみじと思ひて、「口からいと忌々しき事をも聞くかな。挟みたらむ剃刀、打ちや折らむ、と試みよ」といへば、帶刀みそかに笑ふ。君は更に動じ給ふべきにもあらず、我が子のかくいふと思ひて、不用なるよし、聞え奉らむと思ふ。中將君は、女君の例のやうならず思ひたるは、この事聞きたるなめり、とおほしぬ。二條におはして、「御心のゆかぬ罪、聞きあきらめつるこそうれしけれ」。女君、「何事ぞ」。右大臣のことなりけりな」と宣へば、女君、「虚言」とて、ほよゑみてる給へれば、「物ぐるほし。みかどの御むすめ賜ふとも、よも得侍らじ。はじめも聞えしを、たゞつらしと思はれ聞えじとなむ思へば、女の思ふ事は、又人まうくるをこそ歎くなれ、と聞きしかば、そのすぢは絶えにたり。人々とかう聞ゆとも、よもあらじとおほせ」と宣へば、「さ思はむもしたくづれたるにや」といへば、「思ひ聞ゆと聞えばこそ、あやしとも宣はめ。只つらき目を見せ奉らじ」と聞ゆれば、「志のあるかは」など聞え給ふ。帶刀、衛門に逢ひて、「更にな思ひ疑ひたまひそ。この世には、御心憂かるべきにあらず」といふ。御乳母いとほしくいは

ろしき人の、さる心持たるやはある。なふで御名だての落窪ぞ。老い僻み給ひけり。之をかの御あたりに聞き給ひて、いかゞおほすべき。今よりかよる事のたまふな。君のおほしたる事、いと恥しくいとほし。この御妻のいたはり、かうや得まほしくおはする。さらすとも惟成等が侍らば、御身ひとつは仕うまつりてむものを。かやうの心もたる人は、いと罪ふかとなり。また聞え給はば、惟成法師になりなむ、といといとほし。猶人の思ふ中さくるは、大事にはあらずや」といへば、乳母、「答もせさせすいひなすかな。誰かは、只今さり給へ捨て給へと聞ゆる。」「いで、さにはあらずや。めあはせ奉り給ふは、」「いで、あなかしがまし。取りはてても様あしからむか。などかおどろくしうはいふべからむ。かたへは妻を思ふなめり」と、いとほしながら、口ふたけにいへば、帯刀笑ひて、「よし、く、猶申しそよのかさむ、と思し召したり。たゞ惟成法師になり侍りなむ。御罪いといとほし。親の御うへをば、いかで知らざらむ」とて、剃刀腋にはさみもたり「また言ひ出で給はむをり、ふとかきそらむ」とて立てば、乳母、一人子なりければ、か

おどろくしう—大層らしく
かたへは云云—汝が斯くいふは—は汝の妻の關係あればならん

言の如く卑しむべき人にも非ず

中の劣一姉妹中の劣者

うちばめ一押籠られ

そこ一其方乳母をさす

人はなちげにも云々一人言もて二人の間をさく事かなはぬ様なり

方のさしそひて、もてかしづき給ふこそ今めかしけれ。おもほす人ありとても、それを

ばさるものにて、御文など奉りたまへ。かの君も思ふ時は、上達部の女にはあなれど、

落窪君とつけられて、中の劣にて、うちはめられてありけるものを、かくたぐひなく思

しかしづくこそ怪しけれ。人は、かたへは父母るたちてかしづかるよこそ、心にくけれ」

といふ。中將面うち赤めて、「ふるめかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしき

事もほしからず、おほえもほしからず、父母具したらむをともおほえず、落窪にもあれ、

あがりくほにもあれ、わすれじと思ふをいかゞはせむ。人のいはむはことわり、そこにさ

へかく宣ふこそ心憂けれ。只御爲に志なきに思すとも、今かれも仕うまつるやうありな

む」とて、いとたのもしけなる御氣色にて立ち給ふめるを、帯刀つくぐと聞きて、爪

はじきをはたくとして、「なでふかよる事申し給ふ。君と申しながらも、恥しけにおは

すとは見奉らずや。只今の御中は、人はなちげにもあらぬものを。かの宣へるやうに、

志たがはず、花やかなる方にやり奉りて、御徳見むとおほしたるが。あな心う。少しよ

「うきことに色はかはらず梅の花ちるばかりなるあらしなりけり
と推しはかり給へ」と宜へれば、女君、

「さそふなる風に散りなば梅の花われやうきみになりはてぬべき

うきみー
身、實

殿—父大將
殿

なまねび給
ひそ—取次
ぐな

いとさいふ
ばかりなる
云々—汝の

とのみぞ、あはれに」とあるを、いかなる事を聞きたるにかあらむ、と思ひ給へるほどに、御乳母出でて来ていふやう、「かの右大臣の事は、宜ひしやうにもものし侍りしに、わざとやんごとなき妻にもものし給はざなり。時々通ひてものし給へかし。殿に聞えて、四月となむ思ふ、と急がせ給ふなり。さる心し給へ」と聞ゆれば、いと恥しげに笑みて、「なでふ、男のいなと思ふ事を、強ひてするやうかはある。世の人にも似ず、よき身にもあらねば、さ宜ふ人もあらず。かよる事なまねび給ひそ。かたはなり。わざとの妻にもあらざなりとは、いかで知りたまふ。いとさいふばかりなる人にもあらぬを」と宜へば、乳母、「あなわりな。こともしかとおほし立ちて、急ぎ給ふものをば。よし御覽ぜよ、やんごとなき人の、強ひて宜はむ事を、いかどせさせ給はむ。何かは、君達は花やかに御妻

物しき―氣障りなる

とむらふ―訪ぬる

みけしき―御氣分

ことごころ―他心
立ちかへり―おし返し

心ならでや、物しき事も聞き給はむ。なほ宣へ」と聞え給へり。たしかならぬ事にもこそあれ、と思うて、物もいはでやみぬ。明けぬれば、帶刀に衛門がいふ、「しかくゝの事あるべかなるを、心うくもいはぬにこそ。遂にかくれあるべき事かは」といへば、「更にさること聞かず」といふ。「されど外の人さへ聞きて、人々の許に、いとほしがりとむらふものを、知らぬやうはありなむや」といへば、「怪しき事かな。君の御けしき今みむ」といふ。中將殿に参りて見れば、春の庭を見出しておはす。いとおもしろき梅のありけるを折りて、「これ見給へ。尋常になむ似ぬ。みけしきもこれになぐさみ給へ」と宣へば、女君、たゞかく聞え給ふ。

うきふしに逢ひ見ることはなけれども人のこころの花は猶うし

とてなむ、花につけて返し給へれば、中將いとあはれに、をかしとおほす。猶我ことごころありと聞きたるにや、と苦しうて、立ちかへり、「さればよ、おもほし疑ふ事こそありけれ。更に罪なしとなむ、只今は思う給ふるを、まろが心のほどは猶見給へ」とて、

月一婚禮の
さやうなる
人一右大臣
の如き人
おしたちて
一強く
さりげ一さ
る趣

濱木綿一濱
おもと幾重
の序

中には、この母北方きたのかたの、強しひて宣ふにやあらむ。さやうなる人の、おしたちて宣はば、聞かではあらじ、と人知れずおほして、心つきぬれどつれなくて、宣ひやすると待まてど、かけても云いひ出で給はず。女をんな、心うしとおもへるけしきや、なほ少すこし見えけむ。中將ちゆうじやう、「おほする事やある。みけしきにこそさりけなれ。まろは世の人の様に、思ふぞや、死しぬや、戀こひしやなども聞えず、只ただいかでもの思はせ奉らじとなむ、はじめより思へど、かゝる御みけしきの、このほど見ゆるは、いと苦しく心うしとやおほさむとて、初はじめもさいみじかりし雨あめに、わりなくて参まゐりしを、足かじろの盗人ぬすびととは興きようせられしぞかし。ほとくおろかなりし。猶なほのたまへ」と宣へば、女をんな、「何事なにごとをか思はむ。」「いさ、されど御氣色みけしきいとくるし。思ひこそへだて給へれ」と宣へば、女をんな、

へだてける人のこのころをみ熊野くまのの浦うらの濱木綿はまのわたいくへなるらむ

男君おとぎみ、あなこころう。さればよな。猶なほおほす事ありけり。

み熊野くまのに生おふる濱木綿はまのわたかさねなでひとへに君をわれぞ思へる

立ちての妻にもあらじと落窪の君を見くびりて

この御妻—落窪君

この殿—右大臣

あるよりも—もとよりある物よりも

心の中には—落窪の

そ侍るめれ」といへば、中將、「一人侍るほどならましかば、いとかしこき仰事ならましを、今はかくて通ふ所あるやうに、ほのめかし給へ」とて、立ち給ひぬれば、御乳母思ふやう、この御妻は、父母もなき様にて。たゞ君にのみこそかより給うためれば、はなやかにかしづかれ給はば、よからむかし、と思ひて、君の宣ふやうにはいはで、「いと嬉しき事なり。今よき日して、御文も取りて奉らむ」など云ひ遣りたりければ、この殿にはよしと思して、急ぎといそし。四月にぞ取らむ、とおほして、御調度、あるよりもいかめしうしかへて、若き人もとめ、經營し給ふ。「君は右大臣殿の聲になり給へるなり。この殿には知り給へりや」といへば、衛門、あさましと思ひて、「まださるけしきも聞えず、たしかなる事か」といへば、「まことにこの四月にとて、急ぎ給ふものを」と告ぐる人のありければ、女君に、「かうくこそ侍るなれ。さはしろしめしたるにや」と申せば、まことにやあらむ、と淺ましく思ひながら、「まださる事ものたまはず。誰がいふぞ」と宣へば、「かの殿なる人のたしかに知る便ありて、月をさへ申して侍る」といへば、心の

かのわたり
—北方の實
家

うしろめた
なし—懸念
なり

わざとの人
：あらず—
歴々の人の
女にもあら
ず随つて表

け給へば、「何の祿ならむ」とわらひ給ふ。少納言を見つけて、「こはかの邊にて見えし人
にはあらずや」「さなめり」「いかで参りつるぞ。交野少將の、斃になまめかしかりしこ
との残り、いかで聞き侍るらむ」と宣へば、少納言、云ひしこと忘れて、何事ならむ。
怪し、と思ひて、かしこまり居たり。「いと苦し。臥いたらむ」とて、御帳の内に、二所
ながら入り給ひぬ。少納言、めでたく清けにおはしける君かな。いみじく思ひきこえ給
へるにこそあめれ。幸ある人は、めでたきものなりけり、と思ひるたりける。

さる程に、右大臣にておはしける人の御ひとり女、「うちに奉らむと思へど、我がなから
む世など、うしろめたし。この三位中將、交らひの程などに試るに、ものたのもしけあ
りて、人の後見しつべき心あり。これに婚せむ。わざとの人のむすめにはあらず、はか
ばかしき妻どもななめり。年比かくおもひて、心とどめて見るに、思ふやうなる人なり。
只今なりもて出でなむ」と宣ひて、しりたる便ありて、男君の御乳母の許に、「かうく
なむ思ふ」といはせ給へれば、御乳母、「かくなむ侍る。いとやんごとなく、よき事にこ

思ひまつは
れて―思煩
ひて

御人―御鞞

對―對の屋
とて寢殿の
兩側に建つ
るもの

かづき―賜
はる

ぞかし、と人の聞く程は、嬉しきよしをいひて、人たちぬるほどに、少納言、中納言殿の物語ものがたりをくはしくす。かの典藥てんやくが答こたへし事かたれば、衛門ゑもんもいみじく笑わらふ。「北方きたのかた、こたびの御鞞取おんじこ取りの恥はぢがましき事」と腹立はらだち給ふ。宿世すくせにやおはしけむ、いつしかといふやうに孕はらみ給へれば、心地こちちよけに見え給ひし北方きたのかたも、思ひまつはれてなむおはすめる。「四の君の御人は、あやしき事かな。これには、いみじう譽ほめ給ふめるものを、鼻はなこそ、中なかにをかしけにておはす、とこそいはるめれ」と宣へば、少納言せうなごん「嘲弄てうろうし聞えさせたまへるなり。御鼻おんはななむ、中なかに優すぐれて見苦みぐるしうおはする。鼻はなのうち仰あふぎいらよぎて、穴あなの大おほきなることは、左右さいうに對たいたて、寢殿しんでんも造つくりつべく」などいへば、「いといみじき事かな。實けに、いかにいみじうおほえ給ふらむ」など語かたらひ給ふほどに、中將君ちゆうじやうのきみ、内裏うちよりいたう酔よひてまかだたまへり。いとあからかに清きよけにておはして、「御遊おんあそびに召よされて、此彼こゝれかれにしひられつるに、いとこそ苦くるしかりつれ。笛ふえつかうまつりて、御衣おんえかづき侍はべる」とてもておはしたり。禁色ゆるしいろのいみじくかうばしきを、「君にかづけ奉らむ」とて、女君にうちかづ

扇さしかく
し一扇にて
顔を

ねび一老成
し
汗衫一少女
の上著

こよなく一
此の上なく

のし給へ」といはせられたれば、少納言あさましくなりて、扇さしかくしたりつるも打ち置きて、ゐざり出づる心地もたがひて、「いかなることぞ。誰が宜ふぞ」といへば、「只かくて侍ふにおほし出でよ。その世には、落窪の御かたと聞えしよ、わたくしにも、いとこそうれしけれ。むかし見奉りし人は、一人もなくて、かはりたる心地のし侍りつるに」といへば、少納言、「いで、あなうれしや。我が君のおはしますにこそありけれ。世にわすれず、戀しくのみおほえさせ給へるに、佛の導き給へるにこそありけれ」と、喜びながら御前に参りたり。見るに、かの部屋に居給へりし程、まづ思ひ出でらる。君はまづねびまさりて、いとめでたうてゐる給へれば、いみじく幸おはしける、とおほゆ。そよそよとさうぞき、汗衫著たる人、いと若う清けなる、十餘人ばかり物語して、いとなまめかしけなり。「いと疾く御前ゆるされ給ふ人、いかならむ。我等こそさもなかりしか」とうらやみあへれば、「さかし、こはさるべき人ぞかし」と、笑ひ給ふさまも、いとをかしけなり。かよれば、父母の起居かしづき給ひし御姉妹どもには、こよなくまさり給へる

おほいどの
—大臣殿

恐しき人—
中の君の事
を卑下して

いふ

ゆめ—決し
て

もとの人—

三の君

おぼえ—氣
受

もので—
消息もせず
に

とぞ、いはれ給うける。いと清けに縫ひ重ねて、奉らせたまへば、おほい殿の北方、かぎりなく悦び給ひ、中將もいと思ふやうにしつ、と思ひ給ふ。さて少將にあひて、「いと恐しき人もたまへり、と怖ぢ聞え給ひしかど、間近くて、聞えかたらはむの本意ありてなむ、しひてそよのかし聞えたるを、理なくとも、ゆめもとの人とひとつに思すな」と聞え給へば、少將、「あなゆよし、よし聞え給へ。文をだにものし侍りてむや、御用意ありと承りしよりなむ、限なく頼み聞えし」と宣うて、實にかへりみし給ふべくもあらず。おほえも女君も、こよなくまさりたれば、何しにかは通はむ。かよるまよに、北方いられ惑ひて、物もやすく食はでなむ歎きける。中將殿に、よき若人ども参り集りたる、いたはり給ふと聞きて、かの中納言殿の少納言、かく落窪君とも知らで、辨の君がひきにて参りたり。女君見給ふに、少納言なれば、あはれにをかしうて、衛門を出して、「他人かところそ思ひつれ。むかしは更に忘れずながら、つよましき事のみ多くて、えかくなむとものもせで、おほつかなく思ひつるに、いと嬉しくもあるかな、早うこなたにも

答せむ―復
 譬せん
 老いしれて
 ―老老して

いられ死ぬ
 一憤死する
 手がらみ―
 手を組む

内裏うちにても用意よういありてこそ見ゆれ」と宣ふ。「怪しきことかな。しかん、こそありつれ。又なう、妬ねたくいみじき事こそなかりつれ。出づとていひ遣せたりつる消息せうそくよ。いかで、これに答せむ」ともだえ給へば、中納言ちゆうなごん、「我は老いしれて、おほえもなくなり行く。かの君は、只今大臣ただいまおほせになりぬべき勢いきほひなれば、いと答しがたし。さべうこそあらめ、名だたしう、わが妻子めごどもとて、さる恥はぢを見笑はれけむ事よ」とて、爪つまはじきをして又歎なげき給ふ。かよる程ほどに六月むなづになりぬ。中將ちゆうしやうせめていひ唆そかして、藏人少將くらうじのせうしやうを、中の君なかのきみにあはせ給へば、中納言殿ちゆうなごんに聞えて、いられ死ぬるばかり思ふ。かくせむとて、我をば賺すかしおきしにこそありけれとて、「いかで窮鬼いひすたまにも入りにしかな」とて、手がらみをし宣ふ。二條殿にじやうどのには、思ひかしづき給ふをいかに思すらむ、と思ひやりていとほしがらる。三日みかの夜の御装束おんさうそくをば、ものよくし給ふとて、この殿このどのになむ奉り給うければ、女君めきみ、いそぎ染そめさせ、裁たち縫ぬひし給ふにも、むかし思ひ出でられて哀あはれなれば、

著著る人のかはらぬ身には唐衣からころもたちはなれにし折をりぞわすれぬ

愛敬なし—
中將殿

まだし—未
だ懲りず

又や見給は
む—又辛き
目を見るな
らむ

中納言殿の御車、後れむとて立てれば、中將殿、後にも思ひあはせよ。むけにしるしくば、かひなしとや思しけむ。小舎人童を喚びて、「かの車の柄の方によりて、懲りぬやといひて来」とのたまへば、たゞよりに寄りて、かくいへば、「誰が宣ふぞ」といふに、「只かの御車より」といふに、「さればよ。なほ思ふ事ありてするにこそありけれ」と喘き怪しがりて、北方の「まだし」と云ひ出したりければ、わらははかくなむと申せば、「さがなもの、ねたう答へたなり。かくておはすとも知らじかし」と笑ひ給うて、「まだしにせぬ御身なれば、またや見給はむ」といはせられたれば、北方、「いらへなせそ、めざまし」と制せられて、せさせ給はねば、かへり給ひぬ。女君いと心憂く、「けしからずはおはせし、と大殿後に聞き給はむ事もあり。かくな宣ひそ」と制し給ひけれど、「これには、大殿や乗り給へる」と宣へば、「君達おはすれば、おなじ事」と宣ふを、「今うちかへし仕うまつらむに、御心はゆきなむ。思ひおきしこと違へじ」と宣ふ。北方かへり給うて、中納言に申し給ふ。「この大將殿の中將は、大殿をやあしくし給ふ」とあれば、「さもあらず。

たゞに思はむ人云々―尋常一様の恨などにてはかくまではせじ
大徳―僧

よろしき人―通常の人
一の人―一座の宣旨を蒙る者、攝政關白
音もせぬ君―何も言ひ得ぬ人

いとせむ方なし。足を空に車にかへり乗りて、妬ういみじう思ふ事かぎりなし。「猶たどに思はむ人、かくはせじ。大臣をやあしと思ふらむ、いかなる事にあたり給ふらむ」と集りてなけく中に、四の君おもしろの駒いはれて、いといみじと思ふ。大徳よびて、「うかうしてとられぬ。いみじき恥にこそあれ。又局ありぬべしや」といへば、大徳、「更に今はいづこのかあらむ。入りゐたるをだに、殿ばらの君達は、推しるさせ給ふに、遅くおりさせ給へるが、さしてあしきなり。いかどせむ、御車ながら明させ給ふべきなり。よろしき人ならばこそ、もしやといひ侍らめ。只今の一人、太政大臣も、此君にあへば音もせぬ君ぞや。御妹、かぎりなくときめきたまふを持給へり。我がおほえばかりを思すらむ人、うち合ふべくもあらず」などいひていぬれば、かひなし。おりなむと思ひて、六人まで乗りたりければ、いと狭くて身動もせず、苦しき事、落窪の部屋に籠り給うたりしにもまさるべし。幸うじて明けぬ。この愛敬なしの出でぬさきにとて、歸りなむと急ぎ給へど、御車の輪のふ程に、中將殿は御車に乗りたまひぬ。例の便なかめれば

塞ぎて

誰もくく一
中納言方の
人々

あらはなり
云々一顯著
なりと中將
方の人の制
する詞

うはの空一
あてもなし
に

おこなひ一
執行所

させ給へ一
局と

なくて、しばしかいむれて立ちたるを見て、「あとおひなる御物詣なめりや。常にさきだちたまはむとのみおほえたためれども、後れ給ふは」とのみ笑へば、誰もくくいとねたしと思ふ。とみにもえ歩みよらず、辛うじて局に歩み行きぬ。法師童子一人ありけるは、かの局あるじのおはする、と思ひて出でていぬ。みな入り給うて、中將、帶刀を喚びて、「かの人々笑はせよ」と囁き給ふをも知らず、我が局と頼みて来て、入らむとするに、「あらはなり。中將殿おはします」といふに、あきれて立てれば、人々わらふ。「いとあやしや。たしかに案内せさせてこそ、おりさせ給はまし。かくうはの空に御局あるまじかめるものを、いといとほしき事かな。仁王堂のおこなひせさせ給へ。それにぞ所ひろかな」と、そら知らず顔して、帶刀、我と知られむは、いとほしくて、若うはやれる者に、物をはやして云はせて笑ふに、はしたなき事かぎりなし。歸らむにもはしたに、わびしといふは愚なり。暫立てるに、人さわがしく突い倒しつべくありきちがへば、わびしく、歩みかへる心地も、只思ひやるべし。勢まさりたらば、いさかひかへしてもいぬべし、

たけかりつ
る一堅固な
りし

さば一さら
ば、以下北
の方の詞

かれが一北
方か

かしづき一
世話しいた
はり

ふたぎて一

りむ、と思ひて過ぎて行く。中將、帶刀を喚びて、「この車の居り所見て告げよ。そこに
るむ」と宣へば、走りいきて見れば、知りたる法師を喚びて、「いと疾くまうづるを、こ
の三位中將とかいふものの詣であひて、しかくして、車の輪折れて、今まで侍りつる。
局ありや。疾く下りなむ。いとくるし」といへば、「いと不便なる事かな。更に御堂の間
なむ、かねて仰せられ侍りしかば、取り置きてはべる。かの中將殿も、何處にかさむら
ひ給はむすらむ。論なうえせものに、局襲ひひしがれむかし。あはれ、いと不便なる夜
なめりかし」といへば、「さは、とく下りなむ。人なき局とて、取られなむ」とていそけ
ば、男ひとり、「御局見おかむ」とて、行くしりにたちて、帶刀見おきて、走りかへりて、
「かうくなむ申しつる。かれがいかぬ前に」とて、おろす御几帳さして、男君はなれ
給はず、かしづき給ふ事かぎりなし。中納言殿の北方、中將殿の下りぬさきにとて、み
な歩みのほる程に、これはた儀式殊に、そよくはらくと沓すりて、帶刀前に立ちて、
道なる人々はらふ。車の人々さわぎ立ちあめめば、道をふたぎて更にやらねば、はした

無徳―無益

これが―中
將が

手をもみ―
手をすり

橋殿―清水
にあり橋か
けたる如く
に造れる家

たやうに集りて押しやりつ。中將殿の御車どもはさきだてつ。御前よりはじめて、人いと多くて、うちあふべくもあらねば、片輪を堀におしつめられて、物もいはであり。「なかなか無徳なるわざかな」と應したる男どもいふ。乗りたる北方をはじめて、ねたがりまどひて、「誰がまうで給ふぞ」と問へば、「左大將殿の三位中將殿のまうで給ふなり。只今の第一の人にて、あしくいらへ給ふな」と云ふを聞きて、北方「何の仇にてとにかくに恥を見せ給ふらむ。此兵部少輔がことも、これがしたるぞかし。おいらかに否といはましかば、さても已みなまし。よそ人も、かく敵のやうなる人こそありけれ。何者ならむ」とて、北方手をもみ給ふ。いと深き堀にて頓にえ引き上げで、とかくもてさわぐ程に、輪少し折れぬ。いみじき事かなとて、になひあけて、繩もとめて来て結びなどして、「かへらむやは」とて、やうくのほる。中將殿の御車どもは、橋殿にひき立てて無期に立ちたまへるに、やよ久しうありて、辛うじてよろほひ來ぬ。「いとたけかりつる輪折れにけりや」とて、又わらふ。よき日にて、橋殿に隙もなければ、かくれのかたより下

御前—前驅

むつがる—
腹立つ

ほの聞えて
—薄々聞え
て

手礫—小石
うてかし—
礫を

御前ごぜんいとおほくて前まへおひちらして、いと猛まうにてまうで給ふ。さきなる車くるまは、尻しりばやにこされて、人々わびにたり。松明たいまつのすきかけに、人のあまた乗りたるにやあらむ、牛うしくるしけにて、えのほらねば、後の車しりくるまどもせかれて、とどまりがちなれば、雑色ざむしきどもむつがる。中將殿人ちゅうじやうどのを喚びて、「誰たが車くるまぞ」と問はすれば、「中納言殿ちゅうなごんどのの北方きたのかた、忍しのびてまうで給へる」といふに、嬉うれしくまうで逢あひにけり、と下心したごころにはをかしく思おもして、「男おとこども車くるま疾はやくやれといへ。さるまじうは、傍かたはらにひきやらせよ」とのたまへば、御前ごぜんの人々、「牛弱うしよわけに侍はにれば、えさきにのほり侍はにらじ。かたはらに引ひきやりて、この御車みくるまを過すせ」といへば、中將ちゅうじやう、「牛弱うしよわくば、おもしろの駒こまにかけ給へ」と宜のたまふ聲こゑ、いと愛敬あいぎやうづきてよしあり。車くるまにほのきこえて、「あなわびし、誰たれならむ」とわび惑なまふ。猶なまさきに立ててやれば、中將殿ちゅうじやうどのの人々、手礫たばてを抛なぐれば、中納言殿ちゅうなごんどのの人々腹立はらたちて、「事ことといへば、「えひきやらぬ、なご」とて、手礫たばてを抛なぐれば、中納言殿ちゅうなごんどのの人々腹立はらたちて、「事ことといへば、大將殿たいじやうどののやうに、中納言殿ちゅうなごんどのの御車みくるまぞ、はやううてかし」といふに、この御供みもとの雑色ざむしきども、「中納言殿ちゅうなごんどのにも恐おそる人あらむや」とて、手礫たばてを雨あめの降ふるやうに、車くるまになけかけて、か

君の縫ひし
時はよかり
しも三の君
の縫ふは筋
もゆがみて

おもておこ
し—家の面
目
あくがる—
浮かる

わざしたるぞ。いとよく縫ひし人は、何處いづちいにしぞ」と腹立はらたてば、三の君、「男につきていにしぞ」といらへ給へば、「なぞの男につくべきぞ。たゞにぞ出でにけむ。こゝに宜よろしき者ありなむや」と宣へば、三の君、「されど異なる事ことなき人も、なかるべきにこそあめれ。御心を見れば」といへば、「さはべり。おもしろの駒こまはべるなり。世にめでたき人も参りけり、と心にくくおもふ」など、まれく來ては、ねたましかけていぬれば、いみじう妬ねたみ歎なげけどかひなし。北方きたのかた、落窪おちくぼなきをねたういみじう、いかで此奴くやつがためにまどはしにけむ、と惑まどひ給ふ。われは幸さいはひありよき掣取ひきるといひしかひなく、おもておこしに思ひし君は、たゞあくがれにあくがる。よき事とていそぎしたるは、世の笑わらはれぐさなれば、病人やまひびになりぬべくなけく。正月ひつぎの晦日つごもりに、よき日ありけるに、物詣ものまうでする人ぞよかなるとて、三四の君、北方車きたのかたくるまひとつして、忍しのびて清水きみづにまうづ。折しもこそあれ、三位中將殿みちのうぢやうどのの北方きたのかた、男君をとこぎみもまうで給ふに、中納言殿ちゆうなごんどのの車くるまは、疾せくまうで給ひければ前さだち行く。しのびたりとて、御前ごぜんもなくかいすよみたり。中將殿ちゆうじやうどのは、男女をとこをんなのおはしければ、

かの御事—
少將の事

雑色—ド人

いとようし
給ふ—裁縫

を

司召—官人
の役替

かの北方—

中納言の

ちやう—懸

し責めし

かれ—離れ

すぢかひ云

云—落窪の

ていかならむ事をし給ふとも宜ふまじ。かの御事になれば大臣笑みまけ給へれば、殿に
仕うまつる人、雑色、牛飼まで、この少將殿になびき奉らぬはなし。かくて年かへりて、
朔日の御さうぞく、色よりはじめて、いと清らにし出で給へれば、いとよしとおほして、
著てありき給ふ。御母北方見給ひて、「あなうつくし。いとようし給ふ人にこそものし給
ひけれ。内の御方などの、御大事あらむには、聞えつべかめり。針目などの、いとおも
ふやうにあり」と譽め給ふ。司召に中將になり給ひぬ。三位し給うて、おほえまさり給
ふべし。三の君の藏人少將、かの中の君を聞え給ふを、「いとよき人ぞ。たゞ人とおほさ
ば、これを取り給へ。見るやうあり」と、常に申し給ふ。かの北方、これをいみじう實
に思ひて、これが事につけて、我が妻をちやうぜしぞかし、と思ふに、いと捨てさせま
ほしきぞかし。中將かくいふを、見る様ぞあらむとて、ときく返りいはせさせ給ふに、
中將たのみをかけて、三の君を、たどかれにかれのゆく、よしと褒めし装束もすぢかひ、
あやしけにし出づれば、いとどかこつけて腹立ちて、しかけたる衣ども著て、「こは何

まありまか
で―女房達
の

衛門―もと
の安濃

答す―し返
す

内―御所

徳ある―富
裕なる

おきつる―
差圖する

北方の―少
將の父左大
臣の妻

どやかに、よくおはすれば、つかうまつりよく、まありまかで、装束かへつゝ、今めか

しきことおほかり。衛門を第一の者にし給へり。帶刀、おもしろの駒の事を妻に語りけ

れば、した心には、いみじう妬かりし答すばかりの身にもがな、と思ひししるしにも

やと、嬉しけれど、「あないとほしや。北方、如何におほすらむ、さいなまるゝ人、多か

らむかし」といふ。かくてつごもりになりぬ。大將殿より、「少將君の御装束、今は疾

くし給へ。こよには内の御事に、暇なくなむ」とて、よき帛、糸、綾、茜、蘇枋、紅藍

など、多く奉り給へれば、もとよりよくし給へりける事なれば、いそがせ給ふ。さて、

少將君につき奉りて馬允になりたる田舎の人の徳ある、絹五十まるらせたれば、人々

にさまざまたまはず。衛門とりくばりしおきつるにも、目やすく見ゆ。この二條殿は、

北方の御殿なり。むすめ二所、大君は女御、太郎はこの少將、二郎は侍從にて、あそび

をのみし給ふ。三郎は童にてなむ、殿上し給ふ。乳兒におはしけるより、この少將を、

世になくかなしうし奉りたまふに、人に譽められ、帝もよき人に思しめしたれば、まし

とりばなち
 一少輔との
 中を
 つくみてー
 遠慮して
 つはりー懷
 妊の兆
 年かへらば
 一新年にな
 らば
 もとよりも
 云々一藏人
 少將のもと
 より三の君
 を深くは思
 はざりしな
 り
 捨てむ一三
 の君を

く泣く出でぬ。少輔、泣き給ふをあやしとおほしけれど、物も云はで臥しぬ。かく女も
 わびしと思ひわび、北方もとりはなちてむ、と惑ひ給へど、大殿のかく宜ふにつよみて、
 出で給ふ夜、出で給はぬ夜ありけるに、宿世心うかりける事は、いつしかつはり給へば、
 いかで子うませむと思ふ。少將の子は出でこで、此痴者の廣ることとのたまふを、四
 の君ことわりにて、いかで死なむとおもふ。藏人少將思ひしもしるく、殿上の公達、
 「面白の駒はいかに。この比年かへらば、御幸にて白馬に出し給へ。君とあれと、いづれ
 か思ひ増したる」とて笑ふに、塵もつかじと思ふ心に、いと苦しと覺の。元來も、いと
 思ふ様には覺えざりしかど、いみじういたはらるゝに、かよりてありつるを、これにこ
 とづけて捨てむ、と思ひなりて、やうく來ぬ夜のみ多ければ、三の君ものおほす。
 二條殿には、日々にあらまほしくなりまさる。男君の、もてかしづき給ふ事がぎりなし。
 「人はいくらも参らせ給へ。女房多かる所なむ心にくく、花やかにも聞ゆる」とて、此彼
 につけつゝ、ひきひきに参れば、二十餘人ばかりさぶらふ。男君も女君も、御心さまの

嫁後の披露
あらがふ—
言争ふ

まじういみじうなりて、たゞ泣きに泣く。我かゝるものあらむとも知らぬに、つきぐしく云ひければ、あらがふ方なし。藏人少將いかに思ひ給ふらむ。女の身は、心憂きものにこそありけれ、と思ひて泣けどいふがひなし。少輔、いつとなく臥したりければ、大殿、「いとほし。かれに手洗はせよ。物くれよ。かゝる者に捨てられぬといはむは、又類もなくいみじかるべし。宿世やさしもありけむ。今は泣きのよしにてか、さるものにくれらばこそあらめ」と宣へば、北方、「あたaraあが子を、何のよしにてか、さるものにくれては見む」と惑ひ給へば、「あしき事な宣ひそ。かゝるものに捨てられぬといはむは、いかがいみじかるべき」北方、「來ずならむ時や、さも思はむ。只今は、さもせまほしくぞある」と宣へば、ひつじの時まで、人も目見入れねば、少輔苦しうて出でていにけり。ようさり來たるに、四の君、泣きて更に出で給はねば、大殿腹たち給うて、「かく覺え給はむ者をば、何しにかは忍びてよび寄せ給ひし。人の知りたるからに、とかくいふは、親兄弟ふたかたに、恥見せ給はむとや」と添ひゐて責め給へば、いみじう佗しながら、泣

ひがしの
曲物

その御方
四の君の

心づきなく
一厭はしく
おいらかに
一おとなし
く

所あらはし
一露見、婚

「世に人こそ多かれ。かよるおもしろの駒をば、いかで牽きよせ給ひしぞ、いといふがひなかりける事かな。かよるものと出で入りせむこそ、わびしけれ。殿上の駒と名づけて、頭もえさし出でぬ痴者の、いかでより來にけむ。そこたちの見計りてし給へるならむ」と、笑ひ嘲哂し給へば、三の君、更に知らぬ由をいひて、いとほしがり歎き給ふ。かよる僻者なれば、世づかぬ文は、書い出したるなりけり、と人知れず思ひて、いみじくいとほし。北方の心地ただ思ひやるべし。巳午の時まで手も洗はせず、粥もくはせて、ありとある限、其御方にとて、多かりし人々も、誰かその痴者に遣れむとて、出でこず。つくづくと臥したるに、四の君見るに、顔の見ぐるしう、鼻の穴よりは人通りぬべく、吹きいらよけて臥したるは心づきなく、愛敬なくなりて、やをら物するやうにて起きて出でたるを、北方待ちうけて、宜ふことかぎりなし。「おいらかに初より、かうくしたり」と云はましかば、忍びてもあらましを、所あらはしをさへして、かくのよしりて、我も人も、ゆとしき恥をみる事、誰が媒してしはじめしぞ。云へ」と責むれば、四の君、淺

―堪へられ
す
陰 かくれ―物

ほれて―ぼ
けて

いとほしが
り―氣の毒
がり
無期に―何
時迄も

と、扇あふぎを叩たたきて笑わらひて立ちぬ。殿上てんじやうにても、物ものより殊ことに、「おもしろの駒こまはなれて來た
り」とて笑わらふなりけり。かくれに居て、「こはいかなる事ぞ」ともいひやらす笑わらふ。大殿おおい
はあきれてえ物も云はれず。人のはかりけるなめり、とおほすに、たゞ腹立はらだちにはらだ
たれ給へど、いと人多く見るとおほししづめて、「こはいかで、かくおほえなくものし給
ふぞ。いとあやしく」と宣へば、かの少將せうしやうの教へしまよに、ほれていひ居たれば、いひ
がひなしとて、盃さかづきもさよで入り給ひぬ。供ともの人々は、かく笑わらはるゝも知らで、居すゑたる
所どもにつきて、食くひのよしりて座ざに居ゐ竝なみたり。人一人ひひとりもなく立ちぬれば、少輔せうぶは
したなくて例れいの方かたより入りぬ。北方きたのかた聞きて、さらに物もおほえすあきれ惑まごふ。大殿おおいは
「老おいのうへに、いみじき恥見はぢつるかな」と爪つまはじきをし入りてゐる給へり。四の君は、几帳きやう
の内にすゑたりけるに、ふと入り來て臥ふしにければ、え逃にげず。御達ごたちはいとほしがりあ
へり。媒なかたちしたる人とても、仇敵あだがたきにもあらず、四の君の乳母めのとなれば、いふべき方かたなし。誰たれ
も誰も歎なげきあかすに、四日よかよりはとまると云ひし、と思おもひて無期むごにふせり。藏人少將くらうじのせうしやう君

物しく一厭
はしく
ほれなくし
く云々一茫
平として遅
鈍なれば
いそぎ給ふ
一待ちうけ
にかめしう
一大層に
雑色所一下
司の詰所
ゆくりもな
く一何の思
慮もなく
白きもの一
白粉
えねんぞす

いと疾くおはしぬ。北方きたのかた「さればよ。物しくおほさましかば、おそくぞおはせまし。實ひにかう様かへて、宣へるなりけり」とて、よろこびて入れ奉り給ひつ。四の君取はつかしけれど、いかどはせむとて出で給ひにけり。物うち云ひたるけはひ、ほれなくしくおくれたれば、女君、藏人少將くらうさのせうしやうなどに聞きあはするに、あやしけなれば、我こそ戀こひざらめとは云はまほしけれとおほす。夜ふかく出でぬ。三日のまうけ、いとかめしうし給ふ。侍さむらひの入るべき所、雑色所ざふしきどころなど、さまざまに物ものすゑなどして待ちたまふ。御掣おんじこの少將せうしやうまで出で給ひて、いそぎ給ふ。只今ただいまの御代みよのおほえ、たぐひなき君なれば、もてはやさむとて、大殿おほとらも出でるて待ち給ふに、まづ此方こなたへとよばすれば、ゆくりもなくのほりて居ぬ。燈ひのいと明あきに見れば、首くびよりはじめていと細ほそくちひさくて、おもては白しろきものつけ。化粧ひざりしたるやうにて白しろう、鼻はなをいらよかし、さし仰かむぎて居たるを、人々あさましうて守まもるに、この兵部少輔ひやうぶのせうぶに見なしては、えねんぜず、ほよと笑わらふ中にも、藏人少將くらうさのせうしやうは、はななくと物笑ものわらひする人にて、笑わらひたまふ事かぎりなし。「おもしろの駒こまなりけりや」

け或は近づ
けおぼえける
を―諸記し
居たるを
たえぬは人
の「けふそ
へに暮れざ
らめやと思
ふにもたえ
ぬは人の心
なりけり」
親同胞…あ
らで―四の
君の心

かづけて―
贈物與へて

へば、ふと取りて藏人少將の、翌朝の文のおほえけるをうち讀みて、「たえぬは人のとなむ書きたまへり」といへば大殿うち笑みて、「すきものなれば、いひ知りためり。はや御返事、をかしくし給へ」とて、立ち給ふを聞くに、四の君かたはらいたく、侘しく覺えてより臥しぬ。北方、三の君と、「いかに宣へるならむ」と歎けば、「女の御かたいみじく思ふとも、かういはむやは。猶おしなべて、今日は戀しといはむ事のふるめきたれば、様かへてと思ひ給へるにや、心得ず、あやしくもあるかな」と宣ふを、北方「さななり。色ごのみは、人のせぬやうをせむと思ふなるべし」といひて、「はや返事し給へ」と申し給へど、親同胞るたちて、かくあやしがり歎き給ふを聞くに、更に起きあがるべき心地もあらで、臥し給へれば、「我聞えむ」とて、北方の書き給ふ。

老の世にこひも爲知らぬ人はさぞ今日のけさを思ひわかれじ

口惜しうてなむ、女は思ひ聞ゆる。

とて、使にものかづけて遣りつ。四の君は、起きあがらで臥しくらしつ。暮れぬれば、

夜へはことなりにき。笑はずなりにしかば、うれしくなむ。委しくは對面に。文は
 まだしく侍りつる程に、よろこびながら、これをなむ遣しつる。

といへば、少將、いとほしく、女に恥見するぞなど思へども、とくいかでこれが報いせ
 む、と思ひし程に、とけて後に、引きかへてかへり見む、と思す事深くなりけり。女
 君は、なほ思ひ侘びたる氣色、いとほしうて聞かせ給はず。心ひとつにをかしければ、帶
 刀に語りてなむ、わらひ給うければ、帶刀、「いと嬉しうせさせ給ひたり」とよろこぶ。

かの殿中
 納言の方
 死ぬる心地
 する事一恥
 かしくて

かの殿には、御文待つほどに持て來たれば、いつしか取り入れて奉る。見給ふに、かよ
 れば、いみじう恥しうて、えうちも置き給はず、すくみたるやうにてる給へり。北方、「御
 手はいかどある」とて、見給ふに、死ぬる心地する事、かの落窪といふ名きかれて、思
 ひしよりもまさる心地すべし。北方うち見て、あやしう、さきんゝの聲どりの文見る中
 に、かよれば、いかならむと胸つぶれぬ。大殿、おしはなち引きよせて見給へど、目う
 とくてえ見給はで、「色ごのみの、いとうすく書き給ひけるかな。これよみたまへ」とい

おしはなち
 引きよせて
 一或は遠ざ

な一掣に
大臣がね一
大臣の候補
者

がり一許に
文やり給ひ
つや一四君
へ

たまくな
るのこの
七字衍なる
べし

て吹きちらし給へば、人々も實にと聞ゆ。女、かよる痴者とも知らで臥し給ひにけり。明けぬれば出でぬ。少將いかならむと思ひやられてをかしければ、女君に、「中納言殿には、よべ掣取し給ひにけり。」「誰ぞ」と宣へば、「まろがをちにて、治部卿なる人の子、兵部少輔、容貌いとよく、鼻いとをかしけなるを、掣どり給へる」と宣へば、女君、「ことに人のとりわきてほめぬ所」とて、笑ひ給へば、「中に優れてをかしけなる所を聞ゆるぞかし。今見給ひてむ」とて、侍に出で給ひて、兵部少輔のがり文やり給ふ。いかにぞ、文やり給ひつや。まだしくば、かう書きてやり給へ。いとをかしき事ぞ。とて、書きてやり給ふ。

世の人の今日のけさには戀すとか聞きしにたがふ心地こそすれ

たまくなるの。

と書きてやり給へれば、少輔、文やらむとて、詠み居る程に、かくて賜へれば、よき事と思ひて、いそぎ書きてやりつ。少將のかへりごとには、

とてやがて男君、

埋火うづみびのいきてうれしと思ふには我がふところにいできてぞぬる

とて、かきいだきて臥し給ひぬ。女君、いとをかしき事なりとて、笑ひ給ふ。中納言殿ちゆうなごんごんの

には、その日になりて、しつらひ給ふ事がぎりなし。今日けふといへば、少將せうしやう、兵部ひやうぶのもと

へ、「かの聞えし事は今宵こよひなり。戌いぬの時ときばかりにおはせよ」と宣へば、「こよにもしか思ひ

侍りはべ」といへり。父ていにかうくといへば、ひんしれ人は、便びんなからむとも思はで、「人に

ほめられ給ふ事ことは、よもあしからじ。早ういけ」とて、装束うきやくの事いそ急いぎ出いだしてたりけれ

ば、うちさうぞきていきけり。人々さうぞきそして待つに、「おはしたり」といへば、人

れ奉りつ。その夜は痴しれも見えて、火のほのぐらきに、容態ようたいほそやかにあてなりければ、

御ごたちは、「人にほめられたまふ君ぞかし、と思ふに、うちつけにほそやかに、媚なまめきて入

り給ひぬるかな」と云いひあへるを、聞き給ひて、北方きたのかたふみまけて、「かしこくも取りつる

かな。我われは幸さいはひありかし。思おもふやうなる聲こゑどもをとるかな。只今この君、大臣おとこがね」と

その日一婚
禮當日

ひんしれ人
一不詳貧痴
人か

さうぞきて
一装束して

そして一殊
更にして

笑みまげて
一十分に笑
ひて

取りつるか

つれなくて
—そ知らぬ
顔して

女—四の君

まさりて—
女を憐むよ
り北方を憎
む情の勝ち
たる也

火桶—圓形
なる火鉢

まさぐり—
かきなで

おきひ—猛

火

は、おのれなむ忍びて、この秋よりかよふを、少將とり給ふと聞きて、おのれに離れぬ人なれば、かうくになり。いかでえ給ふぞ、と恨みしかば、いと理なり。さらば不用にこそは、かの親たち知り給はねば、まろならぬ人もとり給ひてむも嗚呼なり。此度あらはれ給ひね、と云ひしかばなむと答へ給へ。さらばなでふ事かいはむ。よも笑はじ。さておはし通ひなば、人もおほえありて思ひなむ」といへば、「さななり」とうなづき居たり。「さらば明後日、夜うちふかしておはせ」と云ひ置きて出で給ひぬ。女いかに思はむと思へど、まさりて、憎しと思しおきてければなりけり。

二條殿におはしたれば、雪の降るを見出して、火桶に押しかゝりて、灰まさぐりて給へる、いとをかしければ、對ひる給へるに、

はかなくて消えなましかばと思ふとも

と書くを、あはれに見給ひ、まことにとおほして、男君、

いはでおきひに身はこがれまし。

あはする一
結婚せしむ
る

いららきた
る一怒りた
る

本意なしと
て一己の如
き筆を取る
は本意な
りとして

おはせぬ」と宣へば、少輔の答へ、「人のほよと笑へば恥しうて」といへば、「うとき所な
らばこそ恥かしからめ」とて、「君は、妻はなどで今まで持給へらぬぞ。縁夫ぶししては、
いと苦しきものを」と宣へば、少輔のいらへ、「あはする人のなきうちに、ひとり臥し
て侍るも、更に苦しくも侍らず」といへば、少將、「さは苦しからずとも、妻まうけでや
み給ひなむや」少輔、「あはする人や侍るとて、待ち侍るなり」。少將、「まるあはせ奉らむ、
いとよき人あり」と宣へば、さすがに笑みたる顔色は、雪の白さにて、首いと長うて、
顔つきたど駒のやうにて、鼻のいららぎたる事限なし。ひよと嘶きて引き離れていぬべ
き顔したり。對ひるたらむ人は、實に笑はでは、えあるまじし。「いと嬉しき事に侍るなり。
誰がむすめぞ」といへば、「源中納言の四の君なり。まろに婚せむといへども、え思ひす
つまじき人のはべれば、君にゆづり聞えむとおもひて、明後日となむ定めたる。用意し
たまへ」少輔のいらへ、「本意なしとて、笑ひもこそすれ」といへば、少將、笑ふがある
まじき事と思ひけるこそ、あはれにをかしけれど、つれなくて「よも笑はじ。宣はむ様

御心も云々
—北の方の
なり
あさてなむ
—婚禮日は

ば、ほよゑみ給ひて、「これもよも忘れ侍らじ。又もゆかしう侍り」と申したまへば「いかでか。けしからず、更に思ひ聞ゆまじき御心なめり」と笑ひたまふ。御心なむいとよく、容貌もうつくしうおはしましける。かくて明後日なむ。さは知り給へりや、いとほしく思したれば、かくなむと申せば、「よかなり、まるらむ」といらへ給うて、心のうちには、いとをかしと思しけるやう、北方の御をぢにて、世の中に、ひがみ痴れたるものに思はれて、治部卿なる、交らふ事もなき人の太郎、兵部少輔といふ人ありけり。少將おはして、「少輔はこゝにか」と宣へば、「曹司の方に侍らむ、人笑ふとて、え出立もし侍らず。君達御かへりみありて、これ交らひつけさせ給へ。おのれも知り侍りにき、笑ひたてられたる程だに過ぎぬれば、宮仕しつきぬるものなり」と申せば、少將、「いかが、見はなし侍らむ」とて、曹司におはして見給へば、まだ臥し給へり。痴れがましうをかしうて、「やゝ、起き給へ。聞ゆべき事ありてなむまうでき」と宣へば、足手あはせて、いとよくのびくして、辛うじて起き出で手洗ひるたり。少將、「など、かしこにも更に

〇一聞字

男も女も一
少將も落窪
も
人も住み給
はぬ云々一
二條殿は今
空家なれば
暫らく落窪
をおきたる
也
人あまたも
たる一妻妾
を多く持つ

かくて二條殿にには、十日ばかりになりぬれば、今参ども十餘人ばかり参りて、いと今め
かしうをかし、和泉守いづみのかみのいとこなる、かうくと聞きて、参らせて、〇兵庫ひらやぶといふ。安
濃あなは、大人おとなになりて衛門ゑもんといふ。小くちひさをかしけなる若人わかうぢにて、おもふ事なけにてしあり
く。男も女もたぐひなくおほしたる、理ことわりぞかし。少將せうしやう君の母北方ほくきたのに二條殿にに人すゑたり
と聞くはまことか。さらば中納言殿ちゆうなごんごうには、などよかなりとは宜ふか。少將せうしやう、「御消息聞
えてと思おもうたまへしかど、人も住すみ給はぬうちに、たど暫しばしと思ひ給うてなむ、といはせ給
へば、中納言ちゆうなごんは中なかにもさいふと聞き侍はべりしかば。男おのこは一人ひとりにてやは侍はべる。うち語かたらひて
侍はべれかし」と笑わらひ給へば、北方きたのかた、「いであなにく、人あまたもたるは、歎なげきおふなり。身
も苦くるしけなり、な思おもひ給ひそ。その居すゑたらむに思おもひつかば、さてやみ給ひね。今とむ
らひ聞えむ」とて、その後のちはをかしき物奉もつり給うて、聞えかはし給ふ。「この人よけに
ものし給ふめり。御文おんふみかきたまふ手つき、いとをかしかめり。誰たが女めづめぞ、これにて定さだまり
またひね。女子おんなこもたれば、人の覺おぼさむ事も、いと苦くるしうなむ覺おぼゆる」と少將せうしやうに申し給へ

まうけし—
準備し

むつかりて
—不平を鳴
らして

取りてむ—
婿に

つごもり—
月末

や憎にくかりし」と宣のたまへば、少將せうしやう、「いと心弱こころよわくおはしけり。人の憎にくきふし、思おぼし置くまじかりけり。いと心安こころやすし」と宣のたまひて、臥ふし給たまひぬ。かの中納言ちゆうなごんご殿どのには、「よかなりとなむ宣のたまふ」といひやりたれば、喜よろこびて、「まうけしのよしるにつけては、落窪おちくぼといふものあらば、うち預あづけて縫ぬはせまし。いかによからまし。佛ほとけ、これ生いけらば來くるやうにし給たまへ」。藏人くらうご少將せうしやう君きみも、御衣おんぎどもわろしとて、出いづと入いると、むつかりて著き給たまはずなどある時は、佗わびしうて「物ものせむ人もがな」とて、此處こゝ彼處かしこ手を分わちてもとめ給たまふ。「よかなりと宣のたまふ時ときに取りてむ。思おもひもぞかへる」とて、大殿おほざるたち急いそぎ給たまふ。十二月しほすの朔日ついでちいつか五日ごとと定さだめたる程ほどは、十一月しもつきのつごもりばかりより急いそぎ給たまふ。御聲おんこゑの少將せうしやう、「誰たれを取り給たまふぞ」と問たひければ、「左大將さだしやうご殿どのの、左近少將さこんせうしやうご殿どのとか宣のたまへる。「いとをかしき君きみぞかし。うち語かたらひて出入いでいりせむに、いとよき事ことかな」と許ゆるしければ、北方きたのかた榮はえありてうれしと思おもふ。かの少將せうしやうは、北方きたのかたのいと妬ねたにくくくて、いかでこれに佗わびしと思おもはせむ、と思おもひしみにければ、心こゝろの中に思おもひたばかるやうありてよかなり、といふなりけり。

とあり。御かへりごとには、

憂きことを歎きしほどに唐衣そでは朽ちにき何につつまむ

と聞え給へるを、哀と思す。帶刀、心しらひ仕うまつる事懸なり。和泉守の返事、

心しらひ—
注意

すさまじき
—荒涼なる

おいらかに
—おとなし
やかに

おほつかなさに、これより昨日聞えたりしかば、早うすさまじきわざして、逃け給ひにきて、使をも殆うたれぬべかりけるを、辛うじてなむ逃けて來りしかば、いかならむと思ひたまへなけきつるに、嬉しくたひらかにものし給へる事。人は今案内して聞えむ。ことにさむらふ、はかなくしき者なし。この守のいとこにて、ここにおはするこそ、さやうにもものしつべけれ。

といへり。暮るれば君おはしたり。「かの四の君の事こそ、しかなく云ひつれ。われといひて、人もとめてあはせむ」と宣へば、女君、「いとけしからず。否とおほさば、おいらかにこそし給はめ。本意なく、いかにいみじと思さむ」とのたまふ。少將、「かの北方にいかでねたき目見せむ、と思へばなり」と宣へば、女、「これはや忘れ給ひね。かの君

あからさま
に俗言の
ちよと

今やう—當
世風
厨子—置戸
棚

とな、もとめ出で給へ。そこにもよき童あらば、一二人かし給へ。あるやうは對面
に聞えむ。あからさまにおはせよ。

といひやりつ。少將君、殿におはしたれば、かの中納言殿の、四の君の事いふ人出で來
て、「もの承る。かの事一日も宣へりき。年かへらぬさきにしてむ、と思ふやうあり。
御文聞えて、といみじくせめ侍り」といへば、殿の北方、「さかさまにもいふなるかな、
強てかういふことを、聞きてよかし。人の爲にはしたなきやうなり。今まで一人ある、
見ぐるし」と宣へば、少將、「さ思はば早うとりてよかし。文は今とくやらむ。今やうは
ことに、文通はしせでもしつなり」とて、笑みて立ち給ひぬ。我が御方におはして、常
に使ひ給ふ調度ども、厨子などかしこにやり給ふ。御文、
今の間、いかに後めたうこそ。内に参りて、只今歸り出で侍りなむ。
唐衣きて見むことの嬉さをつつまば袖ぞほころびぬべき
なかくつよまじとなむ今日のこよちは。

およづけ—
ませて

こころ—落窪
の君

のどかなる
—ゆつくり
せる

と、およづけ云へば、北方きたのかた「其奴はいづち行くとも、よくありなむや、行きあふとも、我等が子ども、いかどせむ」といらへ給ふ。男子三人おのこごみたりもたまへりける。太郎は、越前守えちぜんのかみにて國に、二郎は法師。三郎さんろうぞこの童なりける。かくいひさわけど、かひなければ皆臥しぬ。

二條殿にじょうどのには、おほとなぶらまゐりて、少將君せうしやうのきみ臥し給うて、安濃あぬに、「日ごろの事よく語れこよには更に宣はず」とのたまへば、安濃あぬ、北方きたのかたの心をありのまよにいへば、君あさましかりける事かな、とおほし臥し給へり。「人ひとすくなにて、いとあひがめり。安濃あぬ、人もとめよ。殿どのなる人々にも聞えむと思へども、ゆかしけなき。安濃あぬ、大人おとなになりね。いと心およづけためり」と、いひく臥したまへり。かくうれしく宣はせて、明けぬればいといとのどかなる心地して、巳午みまの時ときまで臥し、晝方ひるつかた、殿どのに参り給ふとて、帯刀おびたぎに近く居たれ。只今來む」とて、出て給ひぬ。安濃あぬ、伯母おばの詐まごへ文ふみやる。

いそぐ事侍りてなむ、昨日きのう今日けふ聞えざりつる。今日けふ明日あしたの程に、清きよけならむ童わらわ、お

しうねく—
執念深く

爲包みし物
—衣にひり
くるみし糞
意り—過誤

つたなかり
ける云々—
辛抱しにく
くなりて案
外の不調法
も起る也
嗚呼なるも
の—愚物

まうで来てあくるに、内うちざしにさして、更にあかぬを、板いたの上に夜中よなかまで立ちゐ、あけ侍はべりし程に、風かぜひきて腹はらのごほくと申ししを、一二度は聞き過すひして、猶なほもしうねく開けむとし侍はべりし程に、みだりがはしき事の、出でまうで來にしかば、物もおほえで、まづ退まかり出でて、爲包しつづみし物を洗あらひしほどに、夜よは明けにけり。翁おきなの意おこなりならず」と述のべ申し居たるに、腹はらだちながら笑わらはれぬ。ましてほの聞く若わかき人は、死しにかへり笑わらふ。「いでや、よし、立ち給ひね。いといふがひなく妬ねたし。他人こころびにこそあづくべかりけれ」と宣のたまふに、典藥腹立てんやくはらだちて、「理わりなき事のたまふ。心にはいかでくと思へど、老おいのつたなかりける事は、あやまちやすくて、ふとひりかけらるゝをいかどせむ。翁おきななればこそ、あけむくとはせしか」と、腹立はらだちいひて立ちていけば、いとど人々ひとびとわらひ死ぬべし。童わらはなる子のいふやう、「すべて上うへのあしくし給へるぞ。何なにしに部屋へやにこめ給うて、かく嗚呼おんなるものにはあはせむとし給ひしぞ、いかに侘わびしくや思おぼしけむ。御おんむすめども多く、まろらもゆくさき侍はべれば、いき逢あひひ、相聞あひきえ觸ふるゝ事もこそあれ。いみじき事なりや」

まけぬる一
 安濃にして
 やられたる
 心肝もなく
 一確なる心
 もなく
 綱代車一糸
 又は竹の綱
 みたるにて
 屋形をり
 たる車
 出でさせ給
 ひし云々一
 大殿の出で
 給ふと直に
 そこ一足下

し、と宣ひて、かく遂にまけぬる事よ。心肝もなく相思ひ奉らざりしものを、強ひてつかひ給ひて」と、三の君をいみじく申し給ふ。大殿、とまりたりける男、一人たづね出でて問ひ給へば、「更に知り侍らず。たゞいと清けなる綱代車の、下簾かけたりし、出でさせたまひし即ち、入りまうで来て、ふと出でまかりにし」と申す。「只それにこそあなれ。女えさは打ち破りて出でじ。男のしたるなめり。なにばかりの者なれば、かくわが家を白日に入り立ちて、かくして出でぬらむ」と妬がり惑ひ給へど、かひもなし。北方この置きたる文を見て、まだ寝ざりけり、と思ふに、妬さまさりて、典樂をよび居ゑ給ひて、「かうくして逃げにけり。ぬしに預けしかひもなく、かくにがし給へる。ちかみしくはものし給はざりけるか」と宣ひて、「置きたるそこの文どもを見れば」といへば典樂が答、「いと理なき仰なりや。その胸を病み給ひし夜は、いみじう惑ひて、御あたりにも寄せ給はず。安濃もつとそひて、御忌日なり。今宵過して、と正身も宣ひて、いみじく惑ひ給ひしかば、やをら、只よりふしにき。その後の夜せめおとさむとおもひて、

あるじだち
て—主人ら
しくして

むげに—
向に

おひうたむ
—放逐せん

ひて、泣きみ笑ひみし給ふが、ひりかけの事をぞいみじく笑ひ給うける。「ふようなりける御懸想人かな。北方、いかにあさましと思ひ給はむ」と、うちとけていひ臥し給へり。帯刀、安濃と臥して、今は思ふ事なき由をいふ。暮れぬれば、御臺まゐりなどして、帯刀、あるじだちてし歩く。

かの殿には、物見てかへり給ひて、御車よりおり給ふまゝに見給へば、部屋の戸うち倒して、うちだても打ち散らしければ、誰もく驚き惑ひて見れば、部屋には人もなし。いとあさましく、こはいかにしつる事ぞ、と噪ぎみちてのゝしる。「この家には、むげに人もなかりつるか、かく寝る所まで入り立ちて、うちわり、引き放ちつらむを尤めざりつらむは」と、腹立ちて、「誰かとまりつらむ」と、尋ねのゝしるに、北方、いはむかたなき心地して、ねたくいみじき事かぎりなし。安濃を尋ね求むれど、いづちにかあらむ。落窪をあけて見給へば、ありと見し几帳、屏風、ひとつもなし。北方「安濃といふ盗人の、かく人もなき折を見つけてしたるなり。やがて、おひうたむと思ひしものを使ひよ

うちだて—
戸の兩傍の
木
らうたげ—
愛らしげ

といへば、「たゞこの北面に寄せよ」といふ。牽き入れてよするを、からうじて、この男ひとり出で来て、「何ぞの御車ぞ。皆出で給ひぬる所には」と、とがむれば、「あらず、御達の参り給ふぞ」といひて、たゞよせに寄す。御達のとまりたりけるも、皆下におりてなき程なり。安濃、「はやうおり給へ」といへば、少將、おりはしり給ふ。部屋には鎖さしたり。これにぞ籠りける、と見るに、胸つぶれていみじ。這ひ寄りて捻り見給ふに、更に動かねば、帯刀を喚び入れ給うて、うちだてを、二人してうち放ちて、遣戸を引き放ちつれば、帯刀は出でぬ。いともらうたけにて居たるを、哀れにて、かき抱きて、車に乗せ給ひぬ。「安濃も乗れ」と宜ふに、かの典藥が近々しくやありけむ、と北方思ひ給はむ、妬ういみじうて、かの遣せたりし文、二度ながらおしまきて、ふと見つくべくおきて、御髪の筒ひきさかけて乗りぬれば、をかしけにて、飛ぶやうにして出で給ひぬ。誰も誰もいと嬉し。門だにひき出でたれば、男どもいと多くて、二條殿におはしぬ。人もなければ、いと心やすしとて、下し奉り給ひて臥し給ひぬ。日比の事ども、互に聞え給

こゝには一
今までの御
殿には
われや一北
の方自身

ざととして
一さぶめき
て

にけり。明けぬれば、帶刀たはきいそぎ参りぬ。少將せうしやう、「いかどいひつる」と宣へば、「しかなく
なむ安濃あこぎがいひし」と申すに、典藥助てんやくのすけの事を、あさましねたし、實ひにいかわびに佗わびしからむ、
と思ひやるもいと哀あはれなり。「こよには暫住しはしすまじ。二條殿にでうどのに住まむ。いきて格子かうし上げさせよ
清きよめせよ」とて、帶刀たはきを遣つかしつ。胸むねうち騒さわぎて、嬉うれしき事限かぎりなし。安濃あこぎ、人知れず心地
さわぎて、せむやうをかまへありく。午うまの時ときばかりに、車くるま二つ、三四の君、我やなど乗り
給ひて、出で給ふさわぎにあはせて、北方きたのかた、典藥てんやくがもとに鑰かぎ乞こひにやりて、「危あやふし。我な
きほどに人もあくる」とて、鑰かぎもちて乗のり給ひぬる事を、いみじくにくし、と安濃あこぎおも
ふ。大殿おとども聲こゑ出し立てて、ゆかしがりて出で給ひぬ。皆のよしりて、ざととして出でた
まふ。即すなはち、安濃あこぎ、告つげに奔はしせやりたれば、少將せうしやうこよちたがひて、例れいの乗のり給ふ車くるまには
あらぬに、朽葉くちはの下簾したすだれかけて、男をとこども多くておはしぬ。帶刀たはき、馬うまにて先まだちておこせ給
へり。中納言殿ちゆうなごんごのには、鞞びこの御供おんごも、大殿おとど、北方きたのかたの御供おんごも、人々み三方かたに、男をとこどもわかち参りて、
人もなし。御門みかどにしばし立ちて、帶刀たはきかくれより入りて、「御車おんぐるまあり。いづこにかよせむ」

膳
御臺―御食

れんぞで―
こらへ兼ね
て
答せむ―し
かへしせん
心もとなく
―待遠しく

む」といひかけて、下におりぬ。帯刀、「など今まではおり給はぬぞ。世の中いかどあるとも、まだ出し奉らずや。いみじくこそおほつかなければ。君のおほしなけく事、いみじくなむ。夜など密に偷みいで奉りぬべしや。その事あないして來と宣はせつる」といへば、「更にいとこそいみじき。日に一度なむ御臺まるりにあげ給ふ。かくてかまふるやうは、北方の御をぢにて、いみじき翁のあるになむ、婚せ奉らむとて、今宵も部屋に入れとて、鑰を取らせ給へれど、内外にしかくかためたれば、立ち居ひとりぎてあけつるに、冷えて、かうくしていぬ。君は此事を聞き給ひしより、御胸をなむ、いみじくやみ給ひし」と泣きつといふ。帯刀、いみじき事にあはせて、ひりかけの程を、えねんぜで笑ふ。「いつしか偷み出で奉りて、この北方の答せむとなむ、君は宜ふ」といへば、「明日祭見に出で給ひぬべかめり。その間におはしませ」といへば、帯刀、「いとうれしき間にもあるかな。いつしか夜も明けなむ」と、心もとなくいひあかす。翁は袴にいと多くしかけてければ、けさうの心地も忘れて、先とかくかれ洗ひし程に、うつぶしふし

ひろくぐー
踏みはだか
る

つめてー鎖
し詰めて

こぼめきー
腹の鳴音
さがなー悪
し

ひりかけし
てー糞を撒
り懸けて

と胸つぶる。鎖あけて遣戸あくるに、いとかたければ、立ち居ひろくぐ程に、安濃聞き
て、すこし遠がくれて見立てるに、障子もさぐれど、さしたる程をさぐりあてず、「あや
しあやし。内にさしたるか、翁をかく苦しめ給ふにこそありけれ。人も皆許し給へる御
身なれば、えのがれたまはじめものを」といへど、誰かはいらへむ。うち叩き押し引けど、
内外につめてければ、動きだにせず。今やくくと、夜更くるまで板のうへにゐて、冬の
夜なれば、身もすくむ心地す。そのころ腹そこなひたるうへに、衣いと薄し。板の冷え
のほりて、腹ごぼくと鳴れば、翁、「あなさがな、冷えこそ過ぎにけれ」といふに、し
ひてごぼめきて、びちくと鳴る。こは如何になるにかあらむ、とうたがはし。かいさ
ぐりて、出でやするとて、尻をかゝへて、惑ひ出づる心地に、鎖をばついさして、鎖を
ば取りていぬ。安濃、鎖おかすなりぬるよ、とあいなくにくと思へど、明かすなりぬる
を、かぎりなく嬉しく思ふ。かくて遣戸のもとによりて、「ひりかけしていぬれば、よも
まうで来じ、おほとのごもりね。曹司に帯刀まうで来れるを、君の御返事も、聞え侍ら

内ざし―内
部より鎖す
こと

胸うちつぶ
れて―胸を
どきつかせ
て
大殿油―御
燈燭

とてやりつ。北方、典樂に預けつ、と思ひて、ありしやうにも、遣戸さしかためさせねば、安濃うれしと思ふ。暮れゆくまよに、いかにせむと思ひわぶ。内ざしにさしこもらむ、と思ひて、よろづに明くまじきやうにかまふ。翁、安濃に、「いかにぞ御心地は」といへば、「いみじくなむ悩み給ふ」といへば、「いかにおはせむすらむ」と我がもの顔にうち歎くを、愛敬なしと見る。明日の臨時祭、三の君に見せ奉らむ。藏人の少將のわたり給ふをと、北方は念じ居るを、安濃聞きて、いと嬉しきひまあるべかなり、と胸うちつぶれて思ふ。今宵だにのがれ給ひなば、と思ひて、遣戸の後さすべき物求めて、腋にはさみてありく。大殿油参れなど、いふ紛れに這ひよりて、遣戸の方の桶に添へて、え探らすまじくさして去りぬ。内なる君は、いかにせむ、と思ひて大きな杉唐櫃のありけるを後を昇きて、遣戸口に置きて、とかうして抑へ、戦き居て、「これあけさせ給ふな」と願を立つ。北方、鑰を典樂に取らせて、「人の寢静まりたる時に入り給へ」とて、寢給ひぬ。皆人を静まりぬる折に、典樂、鑰を取りて來てさしたる戸あく。いかならむ

みなれむ一
實、見

あへなし一
張合なし

たいめにな
む一対面し
て委細語ら
む

いともくいとほしく、夜一夜悩ませ給ひける事をなむ、翁の物のあしき心地し侍る。あが君あが君、夜さりだに嬉き目見せ給へ。御あたりにだに近く侍はば、命延びて、心地も若くなり侍るべし。あが君く。

老木ぞと人は見るともいかでなほ花咲きいでてきみにみなれむ
なほくな憎み給ひそ。

といへり。安濃、いとあへなしと思ふく書く。

いとなやましうせさせ給ひて、御みづからはえ聞え給はず。

枯れはてて今はかぎりの老木にはいつかうれしき花は咲くべき

とかきて、腹立ちやせむ、と恐しけれど、思ゆるまゝに取らせたれば、翁うちゑみて取りつ。帯刀の返事かく。

夜べはことにも、いふ方なき事を、聞えてだに慰めばや、と思ひ聞えしに、かひなくてなむ、御文からうじてなむ。いといみじき事ども出でてきて。たいめになむ。

まめやかに
—眞實に

方に、「こよに典樂のぬしの文あり。いかで奉らむ」といへば、北方うちゑみて、「心地問ひ給へるか。いとよし。まめやかに相思ひたるぞよき」とてさしかためし戸口を引きあけたれば、いとをかしうて、少將君の文、取りそへてさし入れたり、少將君の文見給へば、

いかど、日の重なるまゝに、いみじくなむ。

君がうへ思ひやりつつ歎くとはぬるる袖こそまづは知りけれ

いかどすべき世にかあらむ。

とあり。女いとあはれと思ふ事がぎりなし。

おほしやるだにさなむある。

なけばとてひまなく落つる涙川うき身ながらもあるぞ悲しき

と書きて、翁の文見む事のゆゑしうて、「安濃に返事せよ」と書きつけてさし出したれば、ふと取りて立ちぬ。安濃、翁の文を見れば、

ゆゑし—甚
しく厭はし

驚く―目覺
むる

さかし―然
り

さして―鎖
して

なむのたばかりをす。翁おきなのうち驚おどろく時は、いとどいたく苦くるしがり惱やみ給へば、「あないと
ほし。翁おきなのさぶらふ夜しも、かうなやみ給ふが、わびしき」とては、また寢ね入りぬ。明あ
けぬればいとうれし、と誰たれもく思ふ。翁おきなをつきおどろかして、「いとあかくなりぬ。出
で給ひね。しばしは人に知らせじ。長ながく思ひ給はば、宣はむ事にしたがひ給へ」といへ
ば、「さかし、我もさ思ふ」とて、寢ねぶたかりければ、目くそ閉ざぢあひたる、拂はらひあけて、
腰こしうちかどまりて出でていぬ。安濃あにぎ遣やり戸ひきたてよ、こよにおはしけりと見え奉らじ、
と思ひて、急いそぎて曹司ざうしにいたれば、帶刀たちばなが文ふみあり。見れば、
辛からうじて参りたりしかど、御門みかどさして更さらにあけざりしかば、佗わびしくてなむ、歸かへり
まうで來きにしや。おろかにぞ思おぼすらむ。少將せうしやう君の思おぼしたる氣色けしきを見侍みはえるに、心の
いとまなくなむ。これは御文おんふみなり。いかで、よさりだに参らむ。
といへり。御文おんふみ奉らむ。よき間ひまなり、と急いそぎいきて見れば、北方きたのかた部屋へやさし給ふ。あな
口惜くちをしと思ひて歸かへる道みちに、典藥てんやく行き逢ひて、文ふみくれたるを取りて、はしりかへりて、北きた

はしたなげ
に無情げ
に

誰もくく
落窪も安濃
も

程なく寢入
りて云々
翁の様

けはひ一様
子

かでは。只今あたりにはだにおはしよらむ事難くなむ。御心のうちにも、佛神を念ぜさせ給へ」といへば、君、實に頼む方なく、同胞とても相思ひたる事なく、はしたなげにのみあれば、その人といふべき事も覺えず。いみじう悲しくて、たと頼む事とは、涙と安濃とのみぞ、心になかなひたるものにて、「更にこよに今宵はあれ」とて、誰もくく泣く程に、翁、燒石裏みもて來たるを、女君侘て、手づから取る心地、恐しう侘しく覺ゆ。翁、裝束ときてかきよすれば、女、「あが君かくなし給ひそ。いみじく痛き程は、起きておさへたるなむ、少しをさまる心地する。後をおほさば、今宵はたどに臥し給へれ」といふ。いとわびしくて、いたう悩む。安濃、「今宵ばかりにてこそあれ。御忌日なれば、なほたと臥し給へれ」といへば、さもある事とや思ひけむ、「さらばこれに倚りかゝり給へ」とて、前によりふせば、わびしく、おしかよりて泣き居たり。安濃もいとにくけれど、嬉しき翁の徳に、御あたりに今宵まるりたる事と思ふ。程なく寢入りてくづれ臥せり。女君、少將君のけはひ思ひ合せられて、いとどあいなくにくし。安濃、いかにして出で

おもひ―思
ひ、火

と聞ゆれば、「よかなり」と宣へば、安濃、典藥に、「ぬしをこそ今は頼み聞えぬ。御焼石もとめて奉り給へ。皆人も寢静まりて、安濃がいばむに、よも取らせじ。これにてこそ、志のありなし見えはじめ給はめ」といへば、典藥うち笑ひて、「さななり。残の齡少くとも、一筋にたのみ給はばつかうまつらむ。石山をもと思へば、まして焼石はいとやすし。おもひにさし焼きてむ」といへば、「同じくは疾く」とせめられて、いかどはせむ。「さは入りたちたるやうなれど、いとやすし。志情を見えむ」とて石求めむとて立ちぬ。安濃、「この年比いみじく侍りつる事の中に、佗しくもいみじくも侍るかな。いかどせさせ給はむする。何の罪にてかゝる目見給ふらむ。扱も何の身にならむとて、かゝるわざはいとあし。この翁の近づき来るになむ、いと佗しき。その遣戸かけ籠めて、な入れ」と宣へば、「さては腹だちなむ、猶こめさせおはしませ。頼む方のあらばこそ、今宵は閉て籠めて、明日ばその人にいはむとも思ひ侍らぬ。少將君、歎きまどひ給へども、い

こしらへー
願し

ちかみくし
く云々女
君に接近せ
ばあしから
むが

焼石ー温石

給へ」とて、やがて預けて立ちぬれば、「醫師なり。御病もふとやめ奉りて、今宵よりは、一向に頼み給へ」とて、胸がいさぐりて、手觸るれば、女おどろくしう泣きまどへど、いひ制すべき人もなし。こしらへかねて、せめて佗しきまよに思ひて、泣くく、「いとたのもしき事なれど、只今更に物なむおほえぬ」と答ふれば、「さや、などてか思すらむ。いまは御代に翁こそ病まめ」とて、抱へて居り。北方は、典樂ありとおもひ憑みて、例のやうに鎖などもさしかためで寢にけり。安濃、典樂入りぬらむ、と惑ひ來て見るに、戸細目にあけたり。胸つぶるよものから嬉しくて、引きあけて入りたれば、典樂かどまり居り。入りにけり、と人心地もなく、「今日は御忌日と申しつるものを、心憂くも入らせ給ひにけるかな」といへば、「何か、ちかみくしくあらばこそあらめ。御胸まじなへと、上の預け奉り給ひつるなり」とて、まだ装束も解かて居り。君はいとどいたう惱み給ふにそへて、泣き給ふこと限なし。安濃とりわきて、などしもかく物をいみじく思ひてかよるは、如何なるべきにか、と思ひて、心細くかなし。「御焼石あてさせ給はむや」

物のつみ
食物のつか
へ
さわたれば
—さは接頭
語、渡れば
也

殿の御臺參る程に、這ひよりてうち叩く。「誰そ」といへば、「かうくの事侍り。さる用意せさせ給ひて。御忌日となむ申しつる。いみじくこそあれ。いかどせさせ給はむ」とも云ひやらで立ちぬ。女君、聞くに胸つぶれて、更にせむかたなし。さきぐく思ひつる事、物にもあらずおほえて、佗しきに逃げかくるべき方はなし。いかで只今死なむ、と思ひ入るに、胸痛ければおさへて、うつぶし伏して泣くこといみじ。燈などともしてければ、大殿は、夕までひし給うて、臥し給ひぬ。北方は、かの典藥のすけの事により起きまして、部屋へやの戸引き開けて見たまふに、うつぶしふして、いみじう泣き、いといたくやむ。「などかくは宣ふぞ」といへば、「胸のいたく侍れば」と、息の下にいふ。「あないとほし、物のつみかとも、典藥のぬし醫師なり、かいさぐらせ給へ」といふに、類なくにくし。「何か、風にこそはべらめ。醫師入るべき心地しはべらず」といへば、「さりととも、胸はいと恐ろしきものを」といふ程に、典藥さわたれば、「こちいませ」と呼び給へば、ふと寄りたり。「こよに胸惱み給ふめり。物のつみかとも、かいさぐり、藥などもまゐらせ

心げさう—
心に戀慕の
情を浮ぶる
なり

むくつけく
—恐しく

つれなくも
—心強くも

うけがひ—
承引

て来て、さし入るゝ手に入れたれば、引き隠して立ちぬ。「辛うじて、御笛の袋縫はせ奉り給ふとて、あけ給へる程になむ」といふ。少將、いとど哀と思へること限なし。暮れぬれば、典樂助、いつしかと心げさうしありきて、安濃がゐたる所によりて、いと心づきなけに笑みて、「安濃は、今は翁を思ひ給はむすらむ」などいへば、安濃、「いとむくつけく思ひて、「などかさあるべき」といへば、「落窪君をおのれに賜へれば、この御方の人にはあらずや」といふに、驚き惑ひて、ゆよしく思ふに、涙もつよみあへず出づれど、つれなくももてなさで、「男君おはせずて、徒然なりつるに、たのもしの御事や。さても大殿のゆるし聞え給ふか、北方の宜ふか」といへば、「大殿君もめぐみ給ふ。あが北方はまして」と、いと嬉しと思へり。安濃、萬の事よりも、いかさまにせむ。いかで、かくとだに告げ奉らむ、と思ふに、靜心もなくて、「さていつか」といへば、「今宵ぞかし」といふ。「今日は御忌日なるものを、何かうけがひあらむ」といへば、「されど人持たまへるなれば、あやふし、疾くなむ」といひて立ちぬ。安濃、佗しき事がぎりなし。北方、

あれー吾

ゆめく〜
決して

こそあれ」といへば、實にさもしてむと侘しくて、あれにもあらず苦しけれど、起きあがりて縫ふ。安濃、部屋の戸あきたりと見て、例の三郎君呼びて、「いとうれしく宣ひしかばなむ。これ北方の見給はざらむ間に奉り給へ。ゆめく〜氣色見を奉り給ふな」といへば、「よかなり」とて取りつ。いきてかたはらにゐて、笛取りて見など遊びゐて、衣の下にさし入れつ。いかで見むと思ふに、袋縫ひはてて、見せに持ていきたる程に、辛うじて見て、あはれと思ふ事がぎりなし。硯筆もなかりければ、あるまゝに針のさきしでかく書きたり。

人しれず思ふところもいはでさはつゆとはかなく消えぬべきかな
と思ひ給ふるこそ。

とて持たり。北方いまして、「ありつる袋はいとよく縫ひたり。遣戸あけたりとて、大殿さいなむ」とて、引き立てて鎖さゝむとすれば、「いかで、あなたに侍りし笥取りて、と安濃に告げ侍らむ」といへば、閉てさして、「あの櫛笥得むとあめり」と宣へば、惑ひも

落窪物語 卷之二

安濃、いかでこの御文奉らむ、と握り持ちて思ひありくに、更に部屋の戸あかず、佗しと思ふ。少將と帶刀とは、たゞ偷み出でむとたばかりをし給ふ。我故にかゝる目をも見るぞ、と思ふに、いとゞ哀れにて、いかでこれ偷み出でて後に、北方に心惑はずばかり、

ねたき目見せむ、と思ふ。ほとくしうねく、心ふかくなむおはしける。かのかたらひせし少納言、交野少將の文もて來たるに、かく籠りたれば、あさましう、口惜しう哀にて、安濃と、「いかに思すらむ。などかゝる世ならむ」と、うちかたらひて、忍びて泣く、

日の暮るとまよに、いかで奉らむ、と思ふ。少將の筒袋縫はするに、取りふれむ人のなきまよに、とみに手もふれぬ程に、持てわづらひて、「北方部屋の遣戸をあけて、入りおはして、「これ只今縫ひ給へ」といへば、「心地なむいと悪き」とて、臥したれば、「これ縫ひ給はずば、下部屋に籠め奉らむ。かやうの事を申さむとて、こよには置き奉りつるに

かやうの事
—縫物の事

二の巻にぞ
云々―他は
第二卷に譲
らむとなり

かたくなむ。いかにし侍らむ、御文おんふみもいかでか御覽ごらんせさせ侍らむとすらむ。御返りおんかへ
これよりも聞えさせ侍らむ。

と聞ゆ。帯刀たははきが許もとぎにも、おなじ様さまにいみじき事をなむいへりける。二の巻まきにぞ、ことごと
ともあんべかめる。

いかに、その部屋へやはあくや、といみじくなむ。猶なほ便宜びんぎあらば告つげられよ、さりぬべくば、かならずく奉り給うて、御返おんかへりあらばなくさむべき。いとあはれなることを思ふに。

とあり。さうじみには、おろかならず、いみじき事を書き給うて、

いと心ほそけなりし御消息みせうきを、思ひ出づるに、いとわりなくなむ。

命いのちだにあらばとたのむ逢ふことを絶たえぬといふぞいとこころうき

我が君、心づよくおほしなくさめよ。もろともにだにこめられなむ。

と書き給へり。帯刀たちはりも、

この事を思ふに、心地こころもいとあやしくてなむ、臥ふしてはべる。いかにおもほすらむ、とがたはら痛いたくいとほしきに、法師ほうしにもなりぬべく、

など書きておこせたり。御かへし。

かしこまりてなむ。いかでか御覽ごらんせさせ侍はこらむ。戸はいまだあき侍はこらす。更にいと

さうじみー
本人

かたはら痛
く一氣の毒
御かへしー
安瀟の

こぼめかして—ごとごと音させて
弟子—季子かなしうし—愛し
おそばへて—押して
さしとらせて—文を渡して

べきぞ」と宣へば、「沓をこれにおきて。取らむ」とのよしりて、うちこぼめかしてのよしれば、大殿、弟子にてかなしうし給へば、「驕りありかむ、と思ふにこそあらめ。早くあけさせ給へ」と宣へど、いみじく宣ひて、「今しばしありて、開けむ序に」と宣ふに、おそばへて、「あれおしこほちてむ」と、腹立ちのよしれば、大殿手づからいまして、あけて入れ給へれば、沓も取らで、いづらとて、つかどまりて、さしとらせて、「あやしなかりける」と出て出でぬれば、「まさにさかしき事せむや」とて、はしり打ち給ふ。かの文を、間より火の光のあたりたりたるより見れば、これは安濃が、よろづのこと書きて、はかなきさまにして、おこせたるなりけり。されど物食はむとも覺えで置きつ。北方、物ぬひにより、命は殺さじと思ひて、典薬助を日々に呼びて、「かうくくなむ、しかくの事あれば、籠めおきたるを、さる心思ひ給へ」と語らひ給へば、いともく嬉しくいみじ、と思ひて、口は耳根まで、ゑみまけてるたり。「夜さり、この落窪のるたる部屋へおはせ」など、契りたのめ給ふに、人來れば去りぬ。安濃が許に、少將の御文あり。

まかりなむ」と申せば、女君、「こよにも、

みじかしと人のこころをうたがひし我が心こそまづは絶えけれ

え聞きあへず—安濃か

と宜ふも、え聞きあへず。「しかく驚きて宜へれば、萬もえ承らずなりぬ」といへば、少將、たゞ今もはひ入りて、北方を、うちも殺さばや、と思ふ。誰も歎きあかして、明

けぬれば出で給ふとて、一率て出で奉らむ折を告げよ。いかに苦しう思すらむ」と、おろ

かならず云ひおきて、出で給ひぬ。帯刀、かくまばゆきことを、大殿も聞き給ふらむに、

こよにあらむ事も便なければ、御車の後に乗りていぬ。安濃、いかで物まるらむ、いか

便なければ—都合あしければ

に御心地あしからむ、と思ひまはして、強飯をさりけなくかまへて、いかでと思へど、

せむかたなければ、この語らふ小き子に、「かの君のかくておはしますをば、いかどおほ

す。いとほしうは思さずや」といへば、「いかどは」といふ。「さらば人に氣色見せて、こ

の御文奉るわざしたまへ」といへば、「いで」と取りて、あやにくに、かの部屋にいき

て、「これあけむく、いかでく」といへば、北方、いみじくさいなみて、「何しにあく

いかかほ—下にいとほしからざらむを略せり

聞ゆれば—
申し上ぐれ
ば

り。かくなむと聞かせ給うて、たどなきに泣き給ふ。かうく／＼なむ侍りつる」と申せば、いとどあはれと思して「更にももの思えぬ程にて、え聞えず。對面は、

消えかへりあるにもあらぬ我が身にて君をまた見むこと難きかな

と聞えよ。いみじう臭きものどもの、ならび居たる、いみじうみだりがはしく、苦しうてなむ。生きたれば、かゝる目も見らなりけり」とて、泣きたまふとは世の常なりけり。安濃が心地も、たど思ひやるべし。人や驚かむ、と密に歸りぬ。聞ゆれば、少將いと悲しく思ひまさりて、いといたう泣かるれば、直衣の袖を顔に押あててる給へれば、安濃、いみじと思ふ。しばしたためらひて、「なほ今一度聞えよ。あが君や、更にえ消えぬものになむ。

逢ふ事のかたくなりぬと聞くよひは明日を待つべき心地こそせね

かうはおもひ聞えじ」と宣へば、又まるる道に、心にもあらず、物の鳴りければ、北方ふと驚きて、「この部屋の方に、物の足音のするはなぞ」といへば、安濃、なく／＼、「疾く

まばゆく一
氣恥しく

に
やをら一解

かけづり一
走りまはる

も語る類ありて聞く。大殿の御心をさへかゝる事を、いといみじう思ふ。かの少將聞き
て、いとまばゆく、いかに女君の思すらむ、とてもかくても、我故にかゝる事を見たま
ふ事、とかぎりなく歎く。「人間によりて、かくなむとも聞えよ」とて、「いつしかと参り
たるをり、あさましとは世の常に、夢のやうなる事どもを承るに、物もおほえてなむ。
いかなる心地し給ふらむ、と思ひやり聞ゆるも、思すらむにもまさりてなむ。對面はい
かでかあらむとする」と、いと侘しく宜へり。安濃、長衣どもを脱ぎおきて、袴ひき上
けて、下廂より廻りていく。人も寢靜まりにければ、「やよ」と密に倚りて部屋のうち叩く。
音もし給はず。「大殿ごもりにけるか。安濃に侍る」といふ。ほのかに聞ければ、君やを
らよりて、「いかに來たるぞ」と泣くく、「いみじうこそあれ。いかなる事にて、かくは
し給ふにかあらむ」ともいひやらせ給はで、泣き給へば、安濃泣くく、「今朝よりこの
部屋あたりを、かけづり侍れど、えなむ侍はざりつるは、いみじくも侍りつるものか
な。云々の事、いひ出でたるなり」と申せば、いとど泣きまさり給ふ。「少將君おはした

えふとも云
云―急には
得呼ばず

御臺―御食
事

りつ」と宣へば、三の君、「なほ此度は許し給へ。らうたくわびおこせて侍りつ」と申し給へば、「ともかくも御心まで。つかひよしとはしもな宣ひそ。いと痴がまし」と、心ゆかず宣へば、さすがに煩しくて、えふともよばで、「しばし念ぜよ。今よく申す」と宣へり。安濃、思へどくつきもせず。部屋にこもり給へる君、たゞ物もおほえ給はず。安濃、はた思ひよらぬ事なく歎く。御臺をだにまるらで、籠め奉りつる嗚呼の奴はよもまゐらじ。さばかりらうたけなりつる御さまを、引き出で奉りつる程の氣色、思ひ出づるに、いみじうかなし。我が身ただ今、人とひとしくてもがな。むくいせむと思ふも胸はしる。君や夜さりおはせむとすらむ。いかに思さむすらむ。ふとしもなくなりたらむ人をいはむやうに、ゆよしう悲うて、泣き入らるれば、仕ふ人も安からず見る。女君はほどふるまゝに、物くさき部屋に臥して、死なば、少將にまた物いはずなりなむ事、長くのみいひ契りしものを、といと悲しく、夜べ物ひかへたりしのみ思ひ出でられて、いとあはれ、さればいかなる罪をつくりて、かゝる目見るらむ。織母の憎むは、例の事に人

人間一人の
居らぬ時

勘事一叱責

まほに一十
分に

男心一男を
設くる心

はしぬ。爲つと思ひて、いつしか典樂助にかたらむ、と思ひて、人間を待つ。安濃閉し出されて、いみじく悲しければ、などや出でやいなまし、と思へど、君のなりはて給はむ容體も見むとて、いかなるさまにておはすらむ、とゆかしければ、三の君の御許に「偏にうち頼み奉る。いともあさましく、知り侍らぬ事により、さいなみて、退出ねと宣へれば、宮仕をしさし侍りぬる事、といと悲しくなむ。いかで、なほ今一度だに見奉り侍りなむ。なほ上によきさまに聞えさせ給うて、この度の勘事ゆるさせ給へ。小さくてこそ仕うまつりしか、今は別れ異になり行きて侍れば、この落窪君の御事、まほに知り侍らず。いと侘しくなむ。あはれに召し仕ひ、つかうまつり侍りぬる御手を、まかで侍りなば一など、言よく契りて、密に頼み奉りたれば、三の君、實と思ひて、あはれにて、母北方に、「安濃をさへ何しにさいなむ。つかひつけてはべれば、なきはいとあしかりなむ」と宣へば、「怪しく相思ひ奉りたる童なめり。盗人がましき童にて、此奴がよくなさむとて、したるにこそあめれ。落窪は、世に心とはせむとおもはじ。男心は見えざ

ばくりと—
ぼつくりと

女の心にも
云々—北の
方の行爲が
也
なから—半

さくじり—
出過ぎ者

したる物ども取りしたよむ。君は我にもあらず、大殿の前にひき出で来て、ばくりとつ
いすゑられて、「我みづからいかずば、今過しうかりけむ」と宣へば、「はや籠め給へ。我
は見じ」と宣へば、又引き立てて籠め給ふ。女の心にもあらず、ものし給ひけるかな。
恐しかりける氣色に、なからは死にけむ、櫛戸の廂二間ある部屋の、酔酒魚など、正な
くしたる部屋の、たゞ疊一枚、口のもとにうち敷きて、「我が心を心とするものは、かゝ
るめ見るぞ」とて、いと荒らかに押し入れて、手づからついさして、鎖強くさして去ぬ。
君、萬に物の香くさく、にほひたるが侘しければ、いとあさましきには、涙も出でやみ
にたり。などかく罪し給ふ事ぞ。その事とも聞かず、おほつかなくあやし。安濃をだに
いかで逢はむ、と思へど見えす。いと憂かりけり、と身をおもひて、泣くくうつぶし
ふしたり。北方、落窪におはして、「いづら、櫛の筒のありつるは、安濃といふさくじり
居りて、早う取り隠してけり」と宣ふもしるく、「ことにとり置きてはべる」といへば、
さすがには乞ひ取らず。「こなたは、我があけざらむ限はあくな」とて、さしかためてお

あさましう
―案外に

汐さき―事
の爲しがかり

わきばみ―
わきばさみの
時、いたはり育つる

なよとか―
しなやか

あさましう、侘しう悲しうて、たゞ泣きに泣かれて、いかに聞き給ひたるにかあらむ、
といみじとはおろかなり。安濃惑ひ出でて、いかなる事をか聞しめしたるぞ。更にしあ
やまちせさせ給へる事、おはしまさざめるものを」と申せば、「いで、この汐さきを手
なさとへそ。いかにしたりつる事にかあらむ、我にはかくしへだてたまへど、大殿の
疾くより聞きて宜ふぞ。すべて、いとあしきも知らぬ主もたりて、わきばみ思ふ君に、
まさらせむと思ひつる。こよなわらは、家の内になありそ。いざ給へ。おとどの宜ふ事
あり」とて、衣の肩を引きたてよ立ち給へば、安濃泣く事いみじ。君はた、さらに我に
もあらず。物も散しながら、廻ぐるもの揃むるやうに、袖をとらへ、前におし立ててお
はす。紫苑色の綾のなよよかなる、白き、又かの少將の脱ぎおきし綾の單衣著て、髪は
此比しもつくろひければ、いと美しけにて、長に五寸ばかりあまりて、ゆらめき行く背
姿、いといみじくをかしけなり。安濃見送りて、いかになし奉り給はむとするにかあら
む、と思ふに、目眩る心地して、足すりして泣かるゝ心地を思ひしづめて、うちちら

しをり一折
檻し

面ぶせ一不
名譽

かむもいといみじ。これな棲ませたまひそと、いと恥しげに宣ひける」と、くはしく申し給うてければ、老い給へるほどよりは、爪弾をいとちからなくしくし給ひて、「いといふがひなき事をもしたるかな。かくて居れば、皆人は子の數と知りたるに、六位といへど、藏人にだにあらず、地の帶刀の、歳は二十ばかり、長は一寸ばかりなる、かゝる事はし出づべしや。さるべき受領あらば、知らず顔にて、くれてやらむとしつるものを」北方「そがいと口惜しき事。おのが思ふやうは、あまねく人の知らぬさきに、部屋にこめて守らせむ。女思ひたれば出であひなむず。さて程過ぎて、ともかうもし給へ」と申し給へば、「いとよかなり。只今追ひもていきて、この北の部屋に籠めてよ。物なくれそ。しをりころしてよ」と、老いほけて物の覺えぬまゝに宣へば、北方「いと嬉しと思ひて、衣高らかに引き上げて、落窪にいまして、ついる給ひて、「いふがひなきわざをなむし給ひたる、子どもの面ぶせにとて、大殿のいみじう腹立ち給うて、こなたにな住ませそ。疾く籠め置きたれ、我守らむ。只今追ひもて來となむ宣へる。いざ給へ」といふに、女、

笛ふえたてまつる。これをさへ忘れ給うければ、

これも猶なほあだにぞ見ゆる笛竹ふえたけの手なるるふしを忘ると思へば

とあれば、少將せうしやういとほしと思ひて、

あだなりと思ひけるかな笛竹ふえたけの千代ちよも根ねたえむふしもあらじを

となむありける。この少將せうしやう出でぬるすなはち、北方きたのかた大殿おとどに申したまふ。さる事はあり

なむやと思ふもしるく、この落窪おちくぼ君の、やさしくいみじきことし出でたりけるがいみじ

さ。さすがに、さしはなれたる人ならば、ともかくもすべきに、いとこそかたはなれ

と宣へば、大殿おとど驚おどろきまどひて、「何事ぞ」と問ひ給へば、「この藏人くらうどの少將せうしやうの方なる帯刀たらしきと

いふは、此日このひ比ひ安濃あのにすむと聞き思ひつるは、はやう正身ただみに立ちかよりにけり。文ふみの

返事かへりごとを、痴しれたる者にて、懐ふところに入れて持たりけるを、此少將せうしやう君のの前に落したりければ、

見つけ給ひて、委くはしき心つきたる君にて、誰たがぞと帯刀たらしきに責問せつもんひ給うければ、隠かくさで、し

かじかと申しければ、いと清きよけなる御聲おのこゑとり給うてけるかな。あな名だたし、人の見聞みき

すなはち一
即時

やさしく一
聆がましく

正身一主の
女即ち落窪
の君

名だたし一
外聞わるとし

となり
たばかり
計畫す

たはしき
好色がまし
き
からみまは
させて一付
き纏はせて

に籠めてむ、いかでか腹だたせよとはいはすべき、といと妬きまよに、思ひたばかり。籠めたらむ程に、男は思ひ忘れなむ。わが叔父なるが、こよに曹司して、典薬助にて、身貧しきが、六十ばかりなる、さすがにたはしきに、からみまはさせて置きたらむ、と夜一夜おもひ明すも知らで、少將、いとあはれにうち語らひて、明けぬれば出で給ひぬ。やがていそぎ縫ひかけつる程に、北方起きて、縫ひさすと見しを、まだしくば、恥ぢあたふばかり、いみじくのよしらむ、と思して、「縫ひ物たまへ。出で來ぬらむ」といはせ給へれば、いと美しけにし重ねて出したれば、本意なき心地して、口惜しく、「いかに出で來にけむ」とてやみぬ。少將の許より御文あり。

いかにぞ、夜べのぬひさし物は、腹まだたち出ずや。いと聞かまほしくてこそ。さて笛忘れて來にけり。取りて賜へ。只今うちの御あそびに參るなり。

とあり。實にいとかうばしき笛あり。つよみてやる。

腹はけしからず。人もこそ聞け。かうな思し出でそ。いとようゑみてなむあめる。

おほろけー
尋常

そこー足下

あふぎー扇
子などにて

もて出でや
云々ー表向
に聲入など
しあらむか

む、とこそ思ひつれ。更にこれは、たゞものにはあらず。かくばかりそひるて、女々しく諸共にするは、おほろけの志にはあらず。いとみじきわざかな。よくなりて、我しだいには、かなふまじきなめり、と思ふに、縫物のこともおほえず、ねたうて、なほ暫し立てれば、「知らぬわざして、まろも困じにたり。そこも眠伊におもほしためり。なほ縫ひさして臥し給うて、北方、例の腹立てさせ給へ」といへば、「腹だち給ふを見るがいと苦しきなり」とて、なほ縫ふに、あやにくがりて、火をあふぎ消ちつ。女君、「いとわりなきわざかな。取りも置かで」と、いとくるしがれば、「たゞ几帳にかけ給へ」とて手づからたよみかけて、掻いだきて臥しぬ。北方聞きはてて、いと妬しと思ふ。例の腹立てよといひつるは、さきく我が腹立つを聞きたるにやあらむ。語りたるにやあらむいと妬し、とつくくくと臥して思ふに、ゆく方なければ、猶大殿にや申してまし、と思へど、かたちはよし。さきく直衣など見るに、よき人ならば、もて出でやし給はむと、危くて、なほ帯刀に逢ひたるといひなしてむ。はなち居立れば、かよるぞ。部屋

つきなげ—
不似合
心しらひ—
心づかひ

側の方—横
の方

袷—裝束の
下方に著る
衣

いたはる—
大切にあつ
かふ

つきなげなるものから、心しらひの用意過ぎて、いとさかしらなり。女笑うく折る。
「四の君の事は、實にこそありけれ」と宣へば、「おほんゆるされあるを、知らず顔なり
や」と宣へば、「物ぐるほし。交野少將の、私物まうけむ時は、若おほやけくしくて取
られむ」と笑ふ。「夜いたう更けぬ。大殿籠し給ひね」とせむれば、「今少しなめり。早う寢
給ひね。縫ひはてむ」といへば、「ひとり起き居給はば」とて、寢給ひぬ。北方「縫はて
寢やしぬらむ」とて、後めたうて、ねしづまりたる比に、例のかいまみの穴よりのぞけ
ば、少納言はなし。こなたに几帳立てたれど、側の方より見入るれば、女、こなたの方
に後を向きて、もたる物を折る。對ひてひかへたる男あり。なまねむたかりつる目も覺
めて、驚きて見れば、白き袷のいと清けなる、搔練のいと艶やかなる一重、山吹なる、
また衣のあるは、女の裳著たるやうに、腰よりしもに引きかけたり。燈あかき影に、い
と見まほしう清けに、愛敬づきをかしけなり。又なく思ひいたはる、藏人少將よりもま
さりて、いと清けなれば、心まどひぬ。男したる氣色は見れど、よろしきものにやあら

より此方に
文もて來ば
それに思ひ
かへてわれ
との縁は限
りにし給は
んとなり
物しげに
妬ましげに

ひかへむ
引張らむ
物士上手

の僻こぼにて、文ふみくんだりやりつるが、はづるよやうなければ、人の妻め、帝みかどの御妃みづめももちたるぞかし。さていたづらになりたるやうなるぞかし。そがうちに、私わたくしものと聞ゆなれば、いと覺おぼことにおはするは」と、いとあいなく、ものしげに思おもして宜よろへば、女むすめいとあやしと思おもして、物も宜よろはず。「など物は宜よろはぬ。をかしう思おもひたまへる事を、ものしう聞ゆるが、いらへにくよ思おもさるよか。都みやこの内に、女むすめといふかぎりは、交野少將かたのせうしやう、めで惑まどはぬなきこそ、うらやましけれ」と宜よろへば、女君むすめ、「その數かずならねばにやあらむ」と、忍しのびやかに宜よろへば、少將せうしやう、「このすぢは、いとやんごとなければ、中宮ちゆうぐうばかりには、なり給ひなむをや」と宜よろへど、をさくさも知らぬ事ことなれば、答こたへず。物もの縫ぬひる給へる手つき、いと白しろうをかしけなり。安濃あぬは、少納言せうなごんありと思おもひて、帶刀たてはきが心地こころあしうしたれば、しばしと思おもひて入りにけり。下した襦じゆ縫ぬひ出いでて、袍衣うへのあひす折らむとて、「いかで、安濃あぬ起おこさむ」と宜よろへば、少將せうしやう、「ひかへむ」と宜よろふ。女君むすめ、「見ぐるしからむ」と宜よろへど、几帳きさうを戸かたの方に立てて、起おこきて、「猶なほひかへさせ給へ、いみじき物もの士しぞ、まるは」とて、對たいひて折らせ給ふ。いと

頓の事―急
の事

あへづらひ
―手傳

かぎりぞ―
交野の少將

が所に住ませ奉らむ、など、いとこまやかになむ、夜更くるまで宣はせしか。参りて後も、かの事はいかに。御文や奉るべき、と宣はせたりしかど、折あしくて、今御覽せさせむと申す」といへども、答もし給はずなりぬる程に、曹司より人たづねに来て、「頓の事聞えむ」といへば、出でたり。人おはして、「出でたまへ。聞ゆべき事なむある」といへば、「しばし待て、御消息聞えさせむ」とて入りぬ。「御あへづらひ仕うまつり侍らむ、と思ひ給ふるを、頓の事とて、人まうで來たれば、聞えさする事ののこりも、まだ多かり。艶にをかしうて侍りし。まめやかに聞えさせ侍らむ。うへにかく下りぬとな聞えさせ給ひそ。驚きさいなまむものぞ。さりぬべくばまうのほらむ」とて下りぬ。少將、几帳おしやりて、「をかしく物清けにいひつる人かな。容貌も清けなりと見つる程に、交野少將を、かたちよしと譽め聞がせ奉りつるにこそ、見まうくなりぬれ。さも答へ給はで、こなたを見おこせ給ひて、心もとなげに、口づくろひし給へるかな。はべらざらましかば、かひある御答もあらまし。文だに持て來そめなば、かぎりぞ。かれはいと怪しき人

なかく」と云ひさして、「誠に此世の中に、恥しきものと思し給へる辨少將君、世の人は交野少將と申すめるを、その殿に、かの男君の御方に、少將と申すは、少納言がいとこに侍り。殿の局に、常にまかり侍りしかば、かの人も、この殿の人と知りて、心づかひし給へりき。御貌のなまめかしさは、實に類あらじ、とこそ見侍りしが、御女多かりと聞きしはいかどとて、大君よりはじめて、くはしく問ひ聞えたまひしかば、かたはしづつ聞え侍りしに、御前の御うへを申し侍りしかばなむ、いといたう哀がり聞え給うて、我がいと思ふ様におはすなるを、必ず御文つたへてむや、と宜ひしかば、かくいと數多おはしますうちにも、御母君などおはしませねば、心細けに思して、かよるすぢの事、おほしかけず」と申し侍りしかば、「その御母おはせぬこそは、いと心ぐるしく哀まさらめ。わが本意には、いと花やかならざらむ女の、物思ひ知りたらむが、かたちをかしけならむこそ、唐土新羅まで求めむと思ふ。こよにおはする。御息所をはなち奉りては、父母おはする人やおはする。さて心にまかせておはすらむよりは、私ものにて、我

はなち―除
きて

なり出で—
立身し
ときめかし
—寵遇し

念じ—堪へ
忍び
客人—四君
の婿をいふ

設け給ふめり。北方の御心にまかせて、屈伸し給ふ。「めでたさや。誰をか取りたまふ」と宣へば、左大將殿の左近少將とか、容貌はいと清けにおはするが、内裏に、只今なり出で給ひなむ、と人々譽む。帝もときめかしおほす。御妻はなし。いとよき人の御聲なり。いかで、このわたりにもがなと思ふ、と大殿も常に宣ふとて、北方、いそぎにいそぎ給うて、四の君の御乳母子、かの殿なりける人を知りたりけるを、よろこび給うて、囁きさわぎ給ひて、文やらせ給ふめり」といへば、をかしくて、「さて」といひて、いとようほよゑみたる眉口つき、燈の明きにはえて、匂ひたるものから、恥しけなり。「少將君は、いかゞいふ」と君宣へば、「知らず。よかなりとや宣ふらむ。人知れず急ぎ給ふ」といふに、少將、そらごとと答へまほしけれど、念じかへして臥し給へり。少納言、「客人のまた添ひ給はば、御前の御身ぞ、いと苦しけにおはしますべかめる。よきこともあらば、爲させ給ふべし」といへば、「なでふかよる見苦き人が、さる事や思ひかくる」といへば、「いで、あなけしからずや。などかくは仰せらるゝ。このかしづかれ給ふ御方々は

ひだ一襲
今しばし一
下に待てを
略す

さるべき人
一親族など
を指す
うへ一北の
方

したるは、おまへ縫ひ給へ」といへば、取り寄せて縫ひて、「猶よろしくば起きさせ給へ。こここのひだおほえ侍らず」といへば、「今しばし。致へて縫はせむ」とて、辛うじて起きて、膝行出でたり。少將見れば、少納言、火影にいと清けなり。よきものこそありけれ、と見給ふ。女君を見おこせたれば、いといたう泣き、つやめきたるを見て、あはれとや思ひけむ。いふやう、「聞えさすれば、言よきやうに侍り。さりとて聞えさせねば、さる心ばへありとだに知らせたまはじ、と口惜しさになむ。え去らずさむらひはべる御かたよりも、この年比、御心ばへも見参らするに、仕うまつらまほしう侍れど、世の中の、うたて煩しう侍れば、つよましようてなむ、人知れぬ宮仕も、え仕うまつらぬ」と聞ゆれば、女君、「さるべき人も、ことに真心なるけしきも見えぬに、嬉しくも思ひ給うけるかな」と、いらへ給へば、少納言、「實にこそあやしうは侍れ。うへのあやしうおはせむは、例の事。御兄弟の君達さへ、みづから聞え給はさめるこそ、いと心づきなけれ。あたら御様を、かくてつくづくとおはしますこそあいなけれ。四の君、また御聲取し給はむとて、

いなや云々
—父大殿の
詞

がな、とこそ思はめ。かばかり急いそぐに、他の物を縫ぬひて、こゝの物に手觸てふれざらむや。何の心ぞ。夜のうちに縫ぬひたてずば、子ことも見じ」と宣へば、女答いらへもせで、つぶく」と泣き給ひぬ。大殿、然さいひかけてかへり給ひぬ。人の聞くに恥はづかしく、恥はづかの限かぎりいはれつる名を我と聞かれぬる事よ、と思ふに、只今死ぬるものにもがな、と縫物ぬいものは暫しほおしやりて、火の暗くらき方かたに向きて、いみじう泣けば、少將せうしやう、哀あはれに理ことわりにて、いかに、實ひに恥はづかしと思ふらむと、我もうち泣きて「暫しほ入りて臥ふし給へ」とて、責せて引き入れ給うて、萬よろづにいひ慰なぐさめ給ふ。落窪君おちくぼのきみとは、この人の名なりけり。我がいひつる事、いかに恥はづかしと思ふらむ、といとほし。繼母ついでははこそあらめ。中納言ちゆうなごんさへにくく云ひつるかな。いといみじう思ひたるにこそあらめ。いかでよくて見てしがな、と心のうちに思ほす。北方きたのかた、多くの物どもをえ縫ぬひ出でじ、と思ひて、少納言せうなごんとて、かたちある人の清きよけなる、「いきて諸共もろどもに縫ぬへ」とて、おこせたらば、来て、「いづこをか縫ぬひ侍はべらむ。などかおほとのごもりにけるは。さばかりおそからむものぞ、と聞え給ふものを」といへば、「心地こころちのあしければなむ。その縫ぬひさ

山梨にこそ
は一六帖
「世の中を
うしといひ
てもいづこ
にか身をば
かくさん山
梨の花」

大殿こそ
このこそは
人を呼びか
くる時の辭
今一つ下に
こそそのあり
しが脱らし
ならむ

いさ一否知
らす
さいなみ
呵責

火ともさせて、いかで縫ひ果てむとおもふ程に、北方、縫ふや、と密にいましにけり。見給へば、縫物はうち散らして、火は燈して人もなし。入り臥しにけりと思ふに、大きに腹だちて、「大殿こそ、この落窪君の心、愛敬なく見わづらひぬれ。これいまして宜へ。かくばかり急ぐものを、いづこなりし几帳にやあらむ、持ち知らぬもの設けて、つい立てて入り臥しくすることよ」と宜へば、大殿、「近くおはして宜へ」と宜へば、いらへ遠くなりぬれば、のこりの詞は聞えず。少將、落窪君とは聞かざりければ、「何の名ぞ。落窪は」といへば、女、いみじう恥しくて、「いさ」といらふ。「人の名にいかにつけたるぞ。論なう屈したる人の名ならむ。きらくしからぬ人の名なり。北方さいなみだちたちにたり。さがなくぞおはしますべき」と、いひふし給ひけり。うへのきぬ裁ちておこせたり。又おそくも縫ふとて、萬の事大殿に聞えて、「行きてのたまへ」と責められて、おはして、遣戸を引きあげ給ふより、宜ふやう、「いなや、此落窪君の、あなたに宜ふ事にしたがはず、あしかんなるはなぞ。親なかめれば、いかでよろしう思はれにし

空うけがひ
—受合ひて
實行せぬこ
と

しらぐし
—馬鹿々々
し
落ちて—頭
髪の脱けて
ゐだけ—す
わり
物折る—袴
などの折目
つく

れば、しばし暫ためらひてとて。これは只今いで來なむものを」とて、引き寄すれば、「おどろ
き馬うまのやうに手なふれたまひそ。人だねの絶たえたるぞかし、空うけがひなる人にのみい
ふは。この下襲したがさねも、只今縫たひ給はずば、こよにもなおはしそ」とて、腹立はらだちて、投げか
けて立ち給ふ。少將せうしやうの直衣なほしの、後あとの方かたより出でたるを、ふと見つけて、「いで、この直衣
はいづこのぞ」と立ちとどまりて宣へば、安濃あにぞ、いと侘わびしと思ひて、「人の縫ぬはせに奉り給
へる」と申せば、「まづ外ほかの物をし給ひて、こよのおろかに思ひ給へる、專もはらかくておは
するにかひなし。あな、しらぐしの世や」と、うちむつかりて行く背姿うしろで、子多くうみた
るに落おちて、僅はつかごに十すぢばかりにて、るだけなり。かたうちふかれて、いとをこがまし、
と少將せうしやうつくぐとかいま見ふしたり。女、あるにもあらで物折ものぢる。少將せうしやう、衣きぬの裾すそをとら
へて、「まづおはせ」とひきせむれば、笑わらひて入りぬ。「憎にくし。な縫ぬひ給ひそ。今少すこし腹はらだ
てて惑まどはし給へ。このことばはなぞ。としごろはかうや聞えつる。いかで堪たへたまへる」と
と宣へば、女、「山梨やまなしにてこそは」といらふ。暗くらうなりぬれば、格子かうしおろさせて、燈臺とうだいに

論なう―無

胸つぶるよもしるく、うへの袴たちて、「これたど今縫はせ給へ。御縫物出で來なむとなむ、聞え給ふ」といふ。君は几帳の内に臥し給へれば、安濃ぞ答ふる。「いかなるにか、昨夜より惱ませ給うて、うちやすませ給へり。今起きさせ給はむ時に、聞えさせむ」といへば、使かへりぬ。女君、縫はむとて起きたまふ。「まろ一人は、いかでつくぐ」と臥いたらむ」とて、おこし奉り給はず。北方、「いかに縫ひ給ひつや」と問ひ給へば、「さもあらず。まだ大殿ごもりだり、と安濃が申しつるは」といへば、北方「なぞのおほとのごもりぞ。物いひ知らずなありそ。我等と一つ口になぞいふは、聞きにくし。あなわかしくしき晝寢や。しか身の程しらぬこそ、いと心憂けれ」とて、うちあざ笑ひ給ふ。下襲たちて持ていましたれば、驚きて几帳の外に出でぬ。見れば、うへの袴も縫はで置きたり。氣色あしうなりて、「手をだにふれざりけるは、今は出できぬらむ、とこそ思ひつれ、あやしうおのがいふ事こそ侮られたれ。この比御心そり出でて、化粧はやりたりとは見のや」と宣ふに、女いと佯しう、いかに聞えむ、と我にもあらぬ心地して、「惱しう侍りつ

そり出でて
―それ出し
化粧はやり
―化粧に身
を入る

おほとのご
もりぬー御
寢なりぬ
經營一周旋

こどしー小
兒らし

臨時祭一十
一月下の酉
の日行はる
賀茂祭

君の御前にも参らず、籠りるたり。暮れぬればおはしぬ。「御返は、など賜はざりつる」と宣へば、「北方のおはしつる程に」と宣ひて、おほとのごもりぬ。程なく明けぬれば、出で給ふに、明け過ぎて、人騒しければ、え出で給はで、かへり入りて臥し給ひぬ。安濃、例の御臺經營しありく。少將、君、靜に臥したまひて、物語し給ふ。「四の君は、いくら大きさにかなり給ひぬる」と宣へば、「十三四のほどにて、をかしけなり」といへば、「誠にやあらむ、まろに婚せむ、と中納言宣ふなるとぞ。乳母なる人こそ、殿なる人を知りて、御文もてきて、北方もいかでとなむ宣ふとて、乳母なる人こそ俄にせめしか。かよると聞え給へといはむに、いかと思す」と宣へば、「心うしとこそ思はめ」と宣ふ。こどしければ、らうたしと思ひて、「こよはいみじう、参り來るも人氣なき心地するを、わたし奉らむ所に、おはしなむや」と宣へば、「御心にこそは」と宣へば、「さらばや」と宣ひて臥し給へり。ほどは十一月廿三日なり。三の君の夫の藏人少將、俄に臨時祭の舞人にさよれ給ひければ、北方てまどひし給ふ。安濃、論なう御縫物もて來なむものぞ、と

いとどしく
—甚しく

すむ—通ふ

人なくては
云々—使ふ
人なくては
不都合なり
感はむもの
ぞ—此所
脱文あるべし

氣色を見る
—安瀟か

みじき事かな。いかなるのよしり出で來むとすらむ。いとどしく、この御方のけしきあり、と疑ひたまふものを、いかにさわがれ給はむとすらむ」と二人汗になりていとほしがる。三の君、この文を、北方に、しかぐしてありつるとて、見せ奉り給へば、「さればよ、氣色ありと見つ。誰ならむ。帯刀がすむにやあらむ、そがもたりつらむは、迎へむと云ひたるにこそあめれ、出でがたしといひつるは、男あはせじとしつるものを、いと口惜きわざかな。男出で來なば、かうては世にあらじ。迎へてむ。人なくては大事なり。よき我兒達の、つかひ人と見置きたりつるものを、いかなる盗人の、かよるわざはし出でつらむ。まだきにいはば、かくし惑はむものぞ」此文も出ださせで、氣色を見るに、人も云ひさわがねば、あやしう思ふ。女君には、「御文はかうくし侍りにけり。おもて恥しきやうなれど、侍りつるやうに、御文かよせ給ひて、賜はらむ」といへば、君、いと佗しと思ひ給へりとは、おろかなり。北方も見給ひつらむ、と思ふに、心地もいと佗しうて、又もえ聞ゆまじ、と歎き給ふ事かぎりなし。帯刀もいとほしうて、少將

御泔の調度
一髪を洗ふ
道具

みーこのの
誤なるべし

ほれて一茫
然として

しめやぎ一
ふさぎ

末の松山一
古今集「君
をおきてあ
だし心をわ
がもたば末
の松山波も
越えなむ」

り。物縫ふ人ぞ」とてやみぬ。三の君は文を取り給ひて、あやしと思ひ居給へり。帶刀、御泔の調度などとり置きて、立つとてかいさぐるに、なし。心さわぎて起ちるふるひ、紐ときてもとむれど、絶えてなければ、いかになりぬらむ、と思ひて、顔あかめて居たり。みよりほかにありかねば、落つとも爰にこそあらめとて、御座をまづ上げてふるへども、いづこにかあらむ、人や取りつらむ、いかなる事出で來む、と思ひなげきて、頬杖をつきてほれて居たるを、少將出づとて、見給うて、「など、惟成がいたうしめやぎたる。物や失ひたる」とて笑ひ給ふに、この君のとりかくし給ふなめり、と思ふに、死ぬる心地す。いと理なけなる氣色にて、「いかで賜はり侍らむ」と申せば、「我は知らず。姫君こそ末の松山とこそいひつめれ」とて出で給ひぬ。いはむ方なくて、あの君と思はむ事恥しけれど、いかどはせむとて、安濃が許にいきて、「ありつる御かへり、みづから参らむに、もて参らむとて、出づる程に、しか召して、御鬢かよせ給へる程に、かうして取られ奉りぬ。いといみじうこそ」と、我にもあらぬけしきにていへば、安濃、「いと

いさかはれ
— 侍はれ

門させりと
も—古今集
平貞文「う
き世には門
させりとも
見えなくに
などかわが
身のいでが
てにするし
藏人少將—
三の君の夫

安濃カニヤわらふ。「語り申してけり、といふべき人のなきまよにこそ、いさかはれ侍はたれ」といふ。

よべは、まだきしぐるよ

ひとすぢに思ふ心はなかりけりいとど憂身うれみのわくかたもなき

誠まことにうき世は、門かぎさせりともいふやうに出でがたくなむ。安濃カニヤは、罪つみあらむ人はお

ぢ給ひぬべし。

とあるを、持もて出づる程に、藏人少將くらうきのせうしやう、まづ召めすといふめれば、え置きあへで、懐ふところに

さし入れて参りたり。御鬢おんげんまるらせたまはむとてなりけり。御おんうしろをまるる、とて君

もうつぶしに、我もうつぶしたる程に、懐ふところなる文ふみの落ちぬるもえ知らず。少將せうしやう見つけ給

ひて、ふと取り給ひつ。御鬢おんげんかき終はてて入り給ふに、いとをかしければ、三の君に、「これ

見給へ。惟成これなりがおとしたりつるぞ」とて奉りたまふ。「手こそいとをかしけれ」と宣ふ。

「落窪君おちくぼのみかみの手にこそ」と宣ふ。少將せうしやう、「とは誰たれをかいふ。あやしの人の名なや」といふ人あ

つとめて—
翌早朝

さがなさ—
不頁

昔は物を—
拾遺集、中

納言敦忠
「あひ見て

の後の心に
くらぶれば

昔は物を思
はざりけ
り」

出で給ひぬ。女君をんなぎみ起き給ひて、「いかにしてかく恥はぢかくす事はしつるぞ。几帳きちやうこそいと嬉うれしけれ」と宣ふ。安濃あこぎ、「しぞして侍りし」など聞ゆ。幼こきなき心地こころちにて、思ひよらぬ事し出でけり、と哀あはれにらうたくて、實けに後見うしろみとつきしかひあり、と思ふ。帶刀たちはきが語りし事どもを語りて、「いとあはれにて、御心おんこころながくば、妬ねたく思ひおとしたる世に、いかに嬉うれしからむ」といふ。その夜は、少將せうしやう内裏うちに参りて、えおはせず。つとめて御文おんふみあり。

よべは内裏うちに参りてなむ、え参り來こずなりにし。いかに、安濃あこぎ、惟成これなりが勘當かんたうし侍りはべけむ、と思ひやりしもをかしうこそ。さがなさは、誰たがを習ならひたるにか、と思ふにも怖おそしうなむ。今宵こよひは、「昔は物を」となむ。

さらでこそそのいにしへも過ぎにしを一夜ひつよへ經へにけることぞ悲しきつよましき事のみ多く思されためる世よは、はなれ給ふべしや。心やすき所もとめてむ。

と細こまやかに聞え給へり。「御かへりとく。はや持て参らむ」と、帶刀たちはきが聞ゆ。御文おんふみを見て

實にと聞き
給ふ—少將
君が

こよなけれ
ば—あまり
にわるけれ
ば

りはてぬ。かく心ひろくおはしませども、人の御志やは見ゆる」と腹立ちるたれば、女君をかしくて、「さばれ、いづれもく用はてなば、賜びてむ」といらふれば、實にと聞き給ふ。几帳おしやりて出で、女君引き入れて、「まだ若うものし給ひけるは、女どもは、これにや似たる」と宣へば、「さもあらず。皆をかしけになむおはし給ふめる。怪しう見苦しうも見え給へるかな。聞きつけて、いかゞ宣はむ」といふ。少しうちとけたるを見るまよに、いとをかしけなれば、猶あらじにて、思ひやみなましかばと思ふ。鏡の筒の代、このあこ君といふ童して遣せたり。黒漆の箱の九寸ばかりなるが、深さは三寸ばかりにて、古めきまどひて、處々兀けたるを、「これ黒けれど、漆つきて、いと清きなり」と宣へれば、をかしと笑ひて、御鏡入れて見るに、こよなければ、「あな見ぐるし、なかなか入れて持たせ給へ。いとうたてけに侍り」と聞ゆれば、「さばれ、ないひそ。賜はりぬ。實にいとよう侍り」とて、使やりつ。少將見給ひて、「かゝる古代の物を見出で給ひつらむ、古い給へるものは、さる姿にて、世に物もかしこし」と笑ひ給ふ。明けぬれば

心ゆきたる
—満足した
る

前々の御掣
取—北の方
腹の大君中
君などの
盒器—食器
の蓋あるも
の

入りぬべく見えし。暫給へと聞えむとてなむ、かうは來なり」と宣へば、「いとかう心安くものし給へば、いとよくなむ。さは給へ」とて引きよせ奉り給へり。うち俯して我が持たまへる入れ給へり。實に入りたれば、「かしこきものをも買ひてけるかな。この筭のやうに、今の世の蒔繪こそ更にかくせね」とて、かき撫で給へば、安濃、いとにくしと見て、「この御鏡の筭もなくてや」といへば、「今また求めて奉らむ」とて立ち給ふ。いと心ゆきたるさまにて、「かの几帳はいづこのぞ。いと清けなり。例に似ぬものもあり。猶けしきづきたり」と宣へば、女君、いかに聞えむと恥し。「なくてあしければ、取りにやり侍りつ」と聞ゆ。猶けしきをうたがはしく思ひ給ひぬる。後に安濃、「まめやかにをかくこそ侍れ。奉り給はむ事こそなからめ。もたまへる御調度を、かくのみに取らせ給へるよ。前々の御掣どりにしかへて、只しばしと、屏風よりはじめて取り給ひて、只我が物の具のやうにて、立て散しておはします。御盒器をだに、聞えとりたまひてき。今殿にも出でまうで來なむ。この御方の物は、たゞ見るまゝに、御かたぐの物にのみな

物忌一内祥
 悪しき夢見
 などありし
 時門を閉ぢ
 て憤み居る
 こと
 ことごとくし
 一誇大なり

ひらゝか
 扁平
 およすけ
 老人めきて

へらば、物引きかづきて臥いたらむ」と宣へば、さしもこそのごき給へと、わりなけれど、やるべきかたもなければ、几帳ながらに押し寄せて、女君の給へり。北方、「などおそくはあけつるぞ」と問ひ給へば、「今日明日御物忌に侍り」と答ふれば、「あなことごとくし。なでふ、我が家などなき所にて、物忌や侍る」と宣へば、「あが君猶あけよ」とて、開けさすれば、あらゝかに押しあけて入りまして、ついでに見れば、例ならず清けにしつらひて、几帳たて、君もいとをかしけに取りつくろひて、大方の香もいとかうばしければ、怪しくなりて、「など、こよのさまも、御さまも、例ならぬ。もし我なかりつるうちに、事やありつる」と宣へば、顔うちあかめて、「何事か侍らむ」といらへ給ふ。少將いかどあるとゆかしうて、几帳のほころびより、臥しながら見給へば、白き綾の搔練など、よからぬど重ね著て、面ひらゝかにて、北方と見えたり。口つき愛敬づきて、少しにほひたる氣つきたり。清けなりけり。たゞ眉の程にぞ、およすけ、あしけさも少し出で居たりと見る。「参りたるやうは、今日こよに買ひたる鏡のをかしけなるに、此御筒の

くさはひー
種々
心にくくー
ゆかしく
まがりー曲
物の食器

さばれ云々
少將の詞

ち休むに、この比やすみつらむ。おるよ所に來ぬはなぞ。すべて人の身人ばかり腹立たしく、よしなき物はなし。いかで、これ返してむ」と宣へば、心地には、いと嬉しき事と思ひながら、「きたなきもの、打ち散し侍りつる程なり」と聞ゆれば、「早う御手水まるれ」と宣へば、立ちてありく空もなし。御膳も出できにければ、御厨司所に来て、「あが君あが君」といひて、かの白き米多くに代へて、御臺まるりぬ。物のくさはひ見ならひたれば、少將君、便なしとのみ聞きしに、いと心にくくおほす。女君、いかならむとおほす。男君もをさく參らず。女君はたおきる給はねば、御まがりして、帶刀にいと清けにして食はせられたれば、いふやう、「許多の日比さむらひつれど、かくおろしなどや見えつる。なほ我が君のおはします氣なりけり」といへば、「嬉しき御心見えむとする。餞別」といへば、「あな恐しの事や」とて、誰もく笑ふ。かうて午時まで、ふた所臥い給へる程に、例はさしものぞき給はぬ北方、中隔の障子をあげ給ふに、かたければ、「これあげよ」と宣ふに、安濃も君も、いかにせむと佗び給へば、「さばれあげたまへ。几帳あげ給

程もなき所
—狭き所

のしりて
—喧しく騒
ぎ立て
あはせ—飯
の菜

からまし」などいひて寝ぬ。夜さへ更けぬれば、いと夙く明け過ぎぬ。「いかでかいでむとする。人しづかなりや」などいひふし給へるほどに、安濃、いといとほしきわざかな。石山よりも、今日はかへりおはしぬらむ。人もこそふと來れ、と思ふも靜心なくて、御粥、御手水など思ふに、いそぎありければ、帶刀、「などかく靜心なくはありき給ふ」といへば、「いかどは、ほどもなき所に、人をすゑ奉りたれば、人やふと來るとて、さわぎありくぞかし」といらふ。「車取にやれ。やをらふと出でなむ」と宜ふ程に、石山の人、のしりて歸りおはしぬ。不用なりとて、出で給はずなりぬ。

女、かく隠れなき所に人もこそ來れ、いかにせむと胸つぶれて、いとおそろし。安濃も、いとあわたどしく思の、御だいあはせ、いと清けにて、粥まるりたり。御手水まりり。いそぎありくが、心もとなければ、今人ひとりもがな、と思ふ。いととく車より下り給ふや遅きと北方、「安濃」と呼びのしり給へば、隔の障子をあけて出づれば、閉すべき人もおほえず。格子のはざま隔てに參りたれば、「下向したる人は、苦しければう

まさなく—
けしからず
参れ—食ひ
給へ
實法に—律
義に
しとどに—
びつしより
と濡れて
おふけなき
—分に過ぎ
たる

上げたまへば、餅もちひををかしうしたれば、少將せうしやう、誰たれかくをかしうしたらむ。かくて待ちけると思ふに、されてをかしければ、「餅もちひにこそあめれ。食くふやうありとか。いかどする」と宣へば、安濃あにぞ、「まだやは知らせ給はぬ」と申せば「いかど一人ひとりあるには、食くふわざかは」と宣へば、安濃聞きて「三つとこそは」と申せば「まさなくぞあなる。女はいくつ」と宣へば「それは御心にこそ」とて笑ふ。「これ参れ」と、女君に宣へど、恥はぢて参らず。いと實法はふに三つ食くひて、「藏人少將くらうごのせうしやうも、かくやくひし」と宣へば、「さこそは」といひるたり。夜更ふけぬれば寢給ねたまひぬ。帶刀許たちはかりいきたれば、まだしとどに搔屈かいかがまりてゐるたり。「笠かさはなくやありつらむ。かう濡ぬれたるは」といへば、忍しのびて道の程みちの事いひて笑ふ。「かばかりの御志みこころざしは、今も昔むかしもあらじ。類たぐひなしと思ひ聞え給はぬにや」といへば、「少し宜よろしかなれど、猶なほあかぬ」。「これを少し宜よろしきとは、女はおふけなきこそにくけれ。いみじくつらき御心のつどくとも、三十度みそたびばかりは、今宵こよひにゆるし聞え給ひてむ」などいへば、例れいのおのが方かたざまに、物いふなどいひて寝ねぬ。「まめやかに、今宵こよひおはせざらましかば、いみじ

勸當—御叱
り
くよりを脛
にあけて—
指貫のくく
りを膝で高
く結び上げ
て

徒歩よりおはしたるなめりと思ふに、めでたくあはれなる事二つなくて、「いかでかくは濡れさせ給へるぞ」と聞ゆれば、「惟成が勸當重し、と佗びつるが苦しさに、くよりを脛にあけて來つるに、倒れて土つきたり」とて、脱ぎ給へば。女君の御衣をとりて、著せ奉りて、「ほし侍らむ」と聞ゆれば、脱ぎ給ひつ。女君の臥し給へる所により給ひて、「かくばかり哀にて來たりとて、ふとかい抱き給はどこそあらめ」とて、かいさぐり給ふに、袖のすこし濡れたるを、男君、來ざりつるを思ひけるもあはれにて、

何事を思へるさまの袖ならむ

と宜へば、女君、

身をしる雨のしづくなるべし

と宜へば、「今宵は身を知るならば、いとばかりにこそ」とて、臥し給ひぬ。安濃、この餅を箱のふたに、をかしう取りなして參りて、「これいかで」と聞ゆれば、君いとねぶたしとて起き給はねば、「なほこよひ御覽せよ」と聞ゆれば、「なにぞ」とて、頭もたけて見

りつるこそ、をかしかりつれ」など、只二人語らひて笑ひ給ふ。「あはれ、これよりかへりなむ。屎つきたり。いと臭くて往きたらば、なか／＼うとまねなむ」と宣へば、帶刀笑ふく、「かゝる雨に、かくておはしましたらば、御志を思さむ人は、麝香の香にも嗅ぎなし奉りてむ、殿はいと遠くなり侍りぬ。行先はいと近し。猶おはしませなむ」といへば、かばかり志深きさまにて、おり立ちて、いたづらにやなさむ、と思しておはしぬ。門辛うじてあけさせて、入り給ひぬ。帶刀が曹司にて、まづ水とて御足すまます。また帶刀も洗ひて、「曉には疾く起きよ。まだ暗からむにかへらむ。とまりてあるべきにもあらず。いと異やうなる姿なるべし」と宣ひて、格子しのびやかに叩い給ふ。女君、今宵來ぬをつらし、と思ふにはあらで、大方聞え出でば、いかに北方のたまはむ。世の中ので、すべて憂きこと思ひみだれて、うち歎きて臥し給へり。安濃、思ひ設けたるかひなけに思ひて、御前により臥したれば、ふと起きて、「など、御格子のなる」とて寄りたれば、「あけよ」と宣ふ聲に驚きて、引きあけたれば、入りおはしたるさま、しほるばかりなり。

つゝやみー
眞闇

よるぼひー
足本定まら
ぬをいふ
小路ぎりに
小路を横
切り行くに
此方より縦
に行き合ひ
たる也
うちはやり
たる一氣早
なる

密ひそに開ひらけさせ給たまひて、いと忍しのびやかに出いで給たまひぬ。つゝやみにてわぶく道みちの悪あくしきを
よろほひおはする程ほどに、前まへ追おひて、數あまた多おほ火かともさせて、小路こうぢぎりに辻つじにさしあひぬ。い
と狭せまき小路こうぢなれば、先まへ歩あみかくれず、片側かたそばみて笠かさを垂たれかけて行いけば、雞ずみしやま色いろ等ども、「このま
かる者ものども、暫しばし歸かへりとまれ。かばかり雨あめもよに、夜よ中に只ただ二人ふたり行いくは氣け色しきあり。捕とらへ
よ」といへば、わびしくして、暫しばしあゆみとまりて立てれば、火かをうちふりて人々ひとら、「足あしど
もいと白しろし。盗ぬす人びとにはあらぬなめり」といへば、「眞まこと人の小こ盗ぬす人は、足あし白しろくこそ侍はべらめ」
と、いき過すぐるまよに、「かく立てるはなぞ。る侍はべれ」とて、笠かさをほとくと打うてば、尿くそ
のいと多おほかる上に屈かまりぬ。又またうちはやりたる人ひと、「強しひてこの笠かさをさしかくして、顔かほ
をかくすはなぞ」とて、ゆき過すぐる儘ままに、大おほ笠かさを引ひきかたぶけて、笠かさにつきて、尿くその上に
ゐたるを、火かを打うちふきて見て、「奴やつ袴はかまきたりけり。身み貧ぶしき人の、思おもふ妻めのがりいくに
こそ」など、口々くちくちにいひて、おはしぬれば、起たちて、「衛ゑ門もん督とくのおはするなめり。我われを
嫌疑げんぎの者ものと思おもひて、捕とらふると思おもひつるにこそ死しにたりつれ。我われを足あししろき盗ぬす人びととつけた

戌の時―夜
の八時

くれり―す
れる

降りぞまさ
れる―伊勢
物語の歌

「かすく

に思ひ思は
すとひがた
み身をしる
雨は降りぞ
まされる」

かてうげに
―かでふげ
にの誤に
て、丈夫氣
なむといふ

とあり。もて参りたるほど、戌の時も過ぎぬべし。燈の下にて見給ひて、君もいとあはれとおもほしたり。帯刀が許なる文を見給ひて、いみじうくねりためるは、實に今宵は三日の夜なりけるを、物のはじめにあしう思ふらむ、いといとほし。雨はいやまさりにまされば、思ひ侘びて、頼杖をつきて、暫よりの給へり。帯刀、わりなしと思へり。うち歎きて立てば、少將「しばしるたれ、いかにぞや、いきやせむとする」。「かちよりまかりて、いひ慰め侍らむ」と申せば、「さらば我も行かむ」とのたまふ。嬉しと思ひて、「いとよう侍るなり」と申せば、「大笠一つまうけよ。衣ぬぎて來む」とて入り給ひぬ。帯刀、笠もとめにありく。安濃、かく出で立ち給ふも知らで、いといみじと歎く。かよるまよに、「愛敬なの雨や」と腹立てば、君はづかしけれど、「などかくはいふぞ」と宣へば、「猶よろしう降れかし。折にくよも侍るかな」といへば、「降りぞ勝れる」と、忍びやかにいはれて、いかに思ふらむ、と恥しうてそひ臥し給へり。男君は、たゞ白き御衣一重を著給ひて、いとかてうげに引きつれて、帯刀と只二人いで給ひて、大笠を二人さして、門を

給ふ。

いつしか参り來むとしつる程に、かうわりなかめればなむ。心の罪つみにあらねど、疎おろかにおもほすな。

とて、帶刀たちはきも、

只今参らむ。君おはしまさむとしつる程に、かゝる雨なればくちをし、と嘆かせ給ふ。

といへり。かゝれば、いみじうくちをし、と思ひて、帶刀たちはきが返事に、

いでや、降るともといふ事もあるを、いとどしき御心みこころさまにこそあめれ。更に聞えさすべきにもあらず。御みづからは、何の心地こころのよきにか來むとだにあるぞ。かゝるあやまちし出でて、かゝるやうありや。さても世の人は、今宵來こよひこさらむよ。

と書けり。君の御返りみかへには、たゞ、

世にふるをうき身とおもふ我が袖そでの濡れはじめけるよひの雨かな

ふる一經
る、降る

乾物—乾魚

世の常なり

—嬉しといふもおろかなり

程なく云々

—通ひ初めて程なく行

かぬ夜のあ

るに氣の毒

也

さかし—然

り

とくはしくしてなむ。おこせたりける。今宵はをかしき様にて、餅を參らむ。と思ひて取りて、萬にくだもの栗などかきつくろひ居たり。日やうく暮るゝ程に、少しやみたる雨、降る事限なし。餅や得さらむと思ふ程に、男、大笠さよせて朴の櫃におこせたり。嬉しき事ものに似ず。見れば、いつの間にしたるにかあらむ、草餅二種ちひさやかにをかしうて、さまざまなり。文には、

俄に宣へりつれば、急ぎて。思ふさまにやあらざらむ。志くちをし。

といへり。雨いたう降るとて急げば、酒ばかり飲ます。返事は、すべて聞えさすれば、世の常なり、と悦びやりつ。爲ぞしつとて嬉し。物の蓋に少し入れて、君にまるる。暗うなるまよに、雨いとあやにくに、頭さし出づべくもあらず。少將、帶刀に語らひ給ふ。「くちをしう、かしこにはえ行くまじかめり。この雨よ」と宣へば、「程なくいとほしくぞ侍らむかし。さ侍れど、あやにくなる雨はいかどはせむ。心のおこたりならばこそあらめ。さる御文をだに物せさせ給へ」とて、氣色いと苦しけなり。「さかし」とて書い

許もとには、和泉いづみの家より、

昔むかしの人の御みかかはりには、あはれに思おもひ聞きえて、女子をんなこも侍はべらねば、むすめにし奉たてまつらむ、

身み一つはいとやすらかに打うちかしづきてすゑ奉たてまつらむと思おもひて、前まへ々も御おん迎むかへられども、

渡わたり給たまはぬこそ怨うらみ聞きゆれ。物ものどもはいとよかなり。いかにもく使つかひ給たまへ。鹽しほ匭くわ

奉たてまつる。あな異ことやう、宮みや仕つかする人は、かやうの物もの必ずもたらぬはなきが、今いままでは頼たの

まざりつる身みに、なきはいと見みぐるしきを、いとあやしき事こと。奉たてまつらむ餅もちは、いと安やす

き事こと、いま只ただ今いまして奉たてまつらむ。物もの具ぐ、餅もちなどめすは、御おん聲こゑどりし給たまひて、三日みかの設しやうし

給たまふか。まめやかにいかで對たい面めんもがな。いと戀こひしくなむ。何なに事も猶なほ宜よろへ。時ときの受う

領りやうは、世よに德とくあるものといへば、只ただ今いまそのほどなれば仕つかうまつらむ。

といとたのもしけに侍はべり。見みるにいと嬉うれし、君きみに見みせ奉たてまつれば、「餅もちは何なにの料れうにをひつるぞ」

と宣のたまへば、うちゑみて、「猶なほあるやうありてなむ」と問とゆ。臺たいのいとをかしけなる鹽しほ匭くわ

いと濟きよけなり、大おほきなる御おん袋ふくろに、しひ米こめ入れて、紙かみを隔へだて、くだもの、乾かほ物もの包かみて、い

かしづき
奉仕する

受領一國守
德一宮たの
しげに

侍り侍り
ばありの誤
ならむ

しひ米一し
ろい米か

たゞ今一文
の詞か、さ
ば今少し詞
ありしが落
ちしにやと
いふ

いとうれしう、聞えさせたりしものを、賜はせたりしなむ、悦び聞えさする。又あ
やしとは思さるべけれど、こよひ餅なむ、いとあやしき様にてよう侍る。取りぐす
べきくだものなど侍りぬべくは、少し賜はせよ。客人なむ、しばしと思ひ侍りしを、
四十五日の方違ふるになむ侍りける。さればこの物どもは、しばし侍るべきを、いか
が。鹽匱の清けならむを、しばし賜らむ。取りあつめて、いとかたはらいたけれど、
頼み聞えさするまよに。

とてやりつ。少將の御許より。

たゞ今

よそにては猶我が戀をますかがみそへる影とはいかでならまし
とあれば、今日なむ御返し。

身をさらぬかけと見えてはます鏡はかなくうつることぞかなしき

いとをかしけに書きたれば、いとをかしけに見給へるけしきも、志あり顔なり。安濃が

わりなく一
甚しく

便なし一窮
乏なり
やをら一靜
に
三日の夜一
婚嫁後の三
夜に餅を供
する事古の
儀式なり

とて、頭かしらがいくだしなどして居たり。女君、わりなく苦くるしと思ひて臥し給へり。安濃あにのいと清きよけに假粧けざうして、帶おびゆるらかにかけてまゐる。背面うしろ、髪かみたけに三尺じやくばかり餘あまりて、いとをかしけなり、と帶刀たはきも見送みおくる。「この御格みか子は、まゐらでやあらむする」と獨言ひとりごとして參るを、少將せうしやう君も、いとゆかしうて、「いと暗くらし、あけよと宜よろふなり」と宜へば、物ふみ立ててあけつ。男君おき給ひて、御裝束みきやうぞくし給ひて、「車くるまはありや」と問ひ給ふ。御門みかどに侍はだる」とまうせば、出で給ひなむとするに、いと清きよけにて御粥みかまるりたり。御手水みてづとびり具ぐしてまゐりたり。あやしう、便びなしと聞きし程よりは、とおほす。女君は、いとあやしう、如何いかで、と思ひ給へり。雨少しよろしうなれば、人さわがしうあらねば、やをら出で給ひなむとす。女君の御力みちからを見給へば、まめやかにいと美うつくしけなれば、いとど限かぎりなくおもほし増まりて、いとあはれと思おもはす。粥かなど少し參りて臥し給ひぬ。夜よさは三日みかの夜なれば、いかさまにせむ。こよひ餅もちいかでまゐるるわざもがな、と思ふに、又いふべきかたもなければ、和泉殿いづみのみとのへ文ふみかく。

なく

膳所
御厨司―御

ひきぼし―
海藻

としみ―精
進落ち

給ひぬ。今宵は時々御答し給ふ。世になくあるまじうおほえ給ひて、萬に語らひ給ふほどに、夜も明けぬ。「御車ゐて参りたり」と申せば、今雨やめて。しばし待て」とて、臥し給へれば、安濃、御手水、粥、いがで参らむと思ひて、御厨司にや語らはまし、と思へど、大方にもおはしまさねば、御粥もよにせじ、と思へど、いきて語らふ。「帯刀の友達なむ、昨夜物いはむとて來たりしを、雨にとまりて、まだかへらぬに、粥食せむと思ふをなむ無くて、土器少し賜へ。さてはひきぼしなどや残りたる。少し賜へ」といへば「あないとほし。心いそぎをかしうし給ふが、いとほしさ、歸らせ給はむ料に、今少しあらむ」といへば、「かへり給はむには、御としみをぞしたまはむ」とて、けしきよろしと見て、傍なる瓶子をあけて、たどとりに取るを、「少しは残し給へ」といへば、さまざまといひて、紙にとり分けて、炭取に入れて、引き隠して持て行きて、露に、「御粥いと清くして持てこ」とて、をかしけなる御臺もとめありく。御手水まらむ、と求めありけど、御方には、いづくの匱盥かあらむ。「三の御方を取りもて來て、御前にまらむ」

方違—方角
の悪きを避
けて他の處
にゆくこと

君—少將の
君

つゝましか
らす—遠慮

とみなる事にてとどめ侍らむ。恥しき人の方違に、曹司にもし給ふべきに、几帳
ひとつ、さてはとのるものに、人の乞ふ物すら便なきはえいだし侍らじ、と思ひ侍
りてなむ。さるべきや侍る。賜はせてむや。をりくはあやしき事なれど、とみに
てなむ。

とはしり書きて、やりたれば、

音づれ給はぬをこそ、いと心うく思ひ給ふれば、何もく、猶のたまはむ、と宜へ
れば、よろづとどめつ。いとあやしけれど、おのが著むとてしたりつるなり。さは
しもものし給ふらむ。几帳奉る。

とて、紫苑色のはり綿までおこせたり。いと嬉しき事がぎりなし。取り出でて見せ奉る。
几帳の紐とりおろす程に、君おはしたれたば、入れ奉りつ。女、臥したるがうたて覺ゆれ
ば、起くれば、「苦しう思し給はむに、何か起きさせ給ふ」とて、臥し給ひぬ。今宵は袴
もいとかうばし。衣も單衣もあれば、例の人ごこちし給ひて、男もつとましからす臥し

調度―道具

おはしぬら
む―少將來
り給はん

とのゐもの
―夜具

たきもの―
薰香
ゆめばかり
―少許

と、おとなしくつくろへど、「心地あし」とて只臥しに臥しぬ。この君は、いさよかよき御調度持たまへりける。母君の御物なりけり。鏡なむまめやかに美しけなりける。これをだに持給へらざらましかば、と思ひて、かきぬぐひて枕上に置く。かく大人になり、童になり、獨いそがしき心地す。「いまはおはしぬらむ」とて、「忝くとも、まだいたう身にもなれ侍らず。いとほしう、昨夜をだに、さて見え奉り給ひけむを」とて、おのが袴のふたよびばかり著て、いと清けなる、とのゐもの一つをもたりけるを、いとしのびて奉るとて、「いと馴れくしう侍れど、まだ見知る人の侍らばこそあらめ。いかどはせむ」といへば、かつは恥しけれど、今宵さへ同じやうにて見えむ事を、限なく思ひつるに、哀にて著給ひつ。「たきものは、この御裳著に賜はせたりしを、ゆめばかり包み置きて侍り」とて、いとかうばしうたきにははず。三尺の御几帳、一つはいるべかめる。いかどせむ、誰にからまし。御宿直ものも薄きを、思ひまはして、嫉の殿ばら宮づかへしけるが、今は和泉守の妻にてゐたりける許に、文遣る。

「こたみはし
—今度は返
事し給へ
かづきて—
かぶりて
まめやかに
—眞實

おまし所—
御座所

といへり。安濃、「こたみはし」といへど、いかに思ひ出で給ふらむ。と思ふに恥しう、つ
つましう侘しくて、返事書くべくもおほえねば、たゞ衣を引きかづきて臥したり。聞え
わづらひて、安濃返事かく。

御文御覽じつれど、まめやかに苦しげなる御氣色にてなむ。御返事も、さていと長
けにはなどか、いつの程にかは、みじかきも見え給はむ。またたのもしげなくとも、
うしろやすく宜ふらむ。

と書きてやりつ。帯刀見せ奉りたれば、「いみじくざれて、物よくいふべきものかな。む
けに恥しと思ひたりつるに、氣の上りたらむ」と、ほゝゑみて宜ふ。さて安濃、只一人
していひ合すべき人もなければ、心一つを千々になして、立ち居つよ、おまし所の塵は
らひそよぐりて、屏風、几帳なければ、しつらひなさむ方もなし。いと理なけれど、君
は物も覺えて臥したまへるを、おましなほさむ、と引きおこし奉れば、面あかみて實に
苦しげなるまで、御日も泣きはれ給へり、いとほしう哀にて、「御髪搔きくだしたまへ」

あいなく—
無愛

さながら—
そのまゝ
ものし—厭
はし

さゝがに—
蜘蛛

いでや、心づきなく、こは何事ぞ、昨夜の心は、かぎりなくあいなく、こゝろづきなく、腹ぎたなしと見てしかば、今ゆくさきも、いと頼もしけなくなむ。御前にはいとなやましけにて、まだ起きさせ給はざめれば、御文もさながらなむ。いとこそ心苦しけれ、御けしきを見れば。

といへり。少將君に、かくなむと聞ゆれば、我をいともものし、と思はむやは。只かの衣どもを、いといみじと思ひたりつる名残ならむ、と思す。晝間に又御文かき給ふ。

などが、いまだにいとわりなけなる御氣色のいとほしさは、ふたりだに、こひしくも思ほゆるかなささがにのいとけすのみ見ゆるけしきにごとわりな。

とあり。帶刀が文、

こたみだに御かへりなくば、便なかりなむ。今は只あひおほせかし。御心はいと長けになむ見奉り宣はする。

異やうなら
む一落躰自
身をいふ

おとなしう
一老成らし
く

れど、いみじき繼母ついでははといへど、北方きたのかたのみ、心のいみじうあさましき由は、さきくも聞かせ給へれば、さこそは思おもすらめ。只御心ただだに頼たのみ奉りぬべくば、いかにうれしからむ。「それこそまして、かく異様ことやうならむ人を見て、心とまりて思ふ人はありなむや。物の聞えあらば、北方きたのかたいかに宣はむ。我がいはざらむ人の事をだにしたらば、こゝにも置おいたらじと宣のたまひしものを」と、いみじと思ひ給へれば、「されば、なか／＼思ひはなれ奉りたらむがよからむ。かくていはれ御坐おはしまさば、いつの世に、もしよくもならせ給はむ。かくても世におはしまさじ。かくて籠こめする奉り給ひて、つかへ奉り給はむの心、いと深くてあらせ聞え給ふにはあらずや」と、いとおとなくしう云ひるたり。「御返事おんかへりことは」と問へば、たり(詞)落ちたるべし。「早う御文おんふみも御覽ごらんぜよ。今は思おもしなけくともかひあらじ」とて、御文おんふみひろけて奉れば、うつぶしながら見給へば、只かくのみぞある。

いかなれやむかし思ひし程よりは今の間思ふことのみまさはとありけれど、「いと心地こころあし」とて、御返事おんかへりことなし。安濃あぬ、返事書かへりことく。

はかなく—
それと取り
とめたる事
もなく

答もせず云
云—落窪の
君の男に逢
へるを恥ぢ
給へる様な
り

うしろめた
き—後まで
も心を勞す
べき
いといみじ
げなる袴—
すぐれてき
たなき袴
故上—なき
母上

にや。なにかおもほす。

といへり。持て参りて、「こゝに御文侍るめり。昨夜はいとあやしく、思ひかけずして臥し侍りし程に、はかなく明け侍りにけり。聞えさすとも、あらかふとぞ推しはからせ給ふらむ、と推しはかるは、理なれど、この氣色をだに見て侍らば」と、よろづ誓ひるたれど、答へもせず、起きもあがり給はねば、「猶知りて侍り、と思ほすにこそはべるめれ。心うく、許多の年比つかうまつり侍りて、かくうしろめたき事はし侍りなむや。一人おはしまさむを思う給へて、をかしき御供にも、まるり侍らすなりにしかひなく、かゝる理を聞かせたまはず、かひなき御氣色ならば、侍はむもいとほしう侍り。いづちもいづちもまからなむ」とて、うち歎けば、君いといとほしうて、「そこに知りたらむとも思はず。いとあさましう、思ひもかけぬ事なれば、いと心憂く思ふ中に、いといみじけなる袴のありさまにて見えぬこそ、いといはむ方なく佗しけれ。故上おはせませしかば、何事につけても、かく憂目見せましやは」とて、いみじう泣き給へば、「實に理にはべ

いはげなき
— 幼氣なる

脱ぎすべし
— 脱ぎ去
りて

帯刀のも君
の— 文な
り

し。「御車^{みくるま}ゐて参^{まゐ}りたり」といふを聞きて、帯刀^{たしはき}、安濃^{あぬが}に、「まゐりて申し給へ」といへば、「夜^よべはまゐらで、今朝^{けさ}まゐらむ、實^ひにまろが知りたる事^{こと}こそ思^{おも}さめ。腹^{はら}ぎたなく、人^{ひと}にうとませ奉^{ほう}らす事^{こと}」と怨^{うら}ずる、いはげなきものから、をかしければ、うち笑^{わら}ひて、「君^{きみ}疎^そみ給^{たま}はば、まろ思^{おも}はむかし」といひて、格子^{かうし}のはざまによりて、聲^{こゑ}づくれば、少將^{せうしやう}起^たき給^{たま}ふに、女のきぬを引き著^つせ給^{たま}ふに、單衣^{ひそへ}もなく、いとつめたければ、單衣^{ひそへ}を脱^ぬぎすべししておき出^いで給^{たま}ふ。女^{むすめ}、いと恥^{はづか}しき事^{こと}かぎりなし。安濃^{あぬが}、あいなくいとほしけれど、さてもはいり居^ゐたらねば、参^{まゐ}りて見るに、まだ臥^ふし給^{たま}へり。いかでいひ出^いでむ。と思^{おも}ふ程^{ほど}に、帯刀^{たしはき}のも、君^{きみ}のもあり。帯刀^{たしはき}のには、

夜^よひと夜^よ、知^しらぬ事^{こと}により、うちひき給^{たま}ひつるこそ、いと理^りなかりつれ。御爲^{みこと}に少しにても、疎^そならむ時は参^{まゐ}らじ。まいていかなる目^め見^みせ給^{たま}はむ。かねて恐^{おそ}ろしき御心^{みこころ}ばせかな。御前^{みまへ}にもいかに、よくもあらざりけるものかな、とおほし宜^なはすらむ、と思^{おも}う給^{たま}ふれば、御文^{みふみ}侍^{まへ}るめる。御かへり聞^きえ出^いでたまへ。この世^よの中^{なか}はさるべき

しとどーじ
とじと、甚
しく濡るゝ
こと

世づかぬー
世馴れぬ、
即ち男女の
交を知らぬ

なほざりー
よい加減

てき。聞えでもあらばや、と思ひしかども、聞えそめ奉りて後、いと哀あはれにおほえ給ひしかば、かうにくまれ奉るべき宿世すくせのあるなりけり、と思ひ給へらるれば、憂うきもうからずのみなむ」と、かい抱いだきて臥ふし給へれば、女死ぬべき心地こころちし給ふ。單衣ひとへぎぬはなく、袴はかま一つ著きて、所々あらはに身につきたるを思ふに、いとみじとは愚おろかなり。泪なみだよりも汗あせにしとどなり。男君も、その氣色けしきをふと見給ひて、いとほしう哀あはれにおもほす。よろづ多く宣へど、御答おんこたへあるべくもおほえず。恥はづかしさに、安濃あなごをいとつらしと思ふ。辛からうじて明けにけり。鳥の鳴く聲すれば、男君、

「君がかくなきあかすだに悲かなしきにいとうらめしき鳥の聲かな

いらへ時々はし給へ。御聲おんこゑ聞かずば、いとど世づかぬ心地こころちすべし」と宣のたまへば、辛からうじて、あるにもあらずいらふ。

人ごころ憂うきには鳥にたぐへつつなくより外ほかの聲はきこえじ

といふ聲、いとらうたければ、少將せうしやうのきみ君、なほざりに思おもししを、まめやかに思ひ給ふべ

かなぐりて
—手荒く引
き除けて

あひおぼさ
ざりける人
—相思はざ
りける人と
安濃が帯刀
を怨むなり

くはするぞや。あやしとは思ひつ。いと愛敬なかりける心もたりけるものかな」とて、
 腹立ちかなぐりて起くれば、帯刀笑ふ。「事こまかに知らぬ事も、たどおふせに負せ給ふ
 こそよからめ。うへにこの時盗人入らむやは。男にこそおはすらめ。今はまるりたまう
 ても、かひあらず」といへば、「いで、猶つれなく物ないひそ。誰とだにいへ。いといみ
 じきわざかな。いかにおもほし惑ふらむ」とて泣けば、「あな童氣や」と笑ふ。妬き事添
 ひて「あひ思さざりける人に見えける事」と、いとつらしと思ひたれば、心苦しうて、「誠
 に、少將君なむ、ものたまはむとておはしたりつるを、いかならむ事ならむ。あなかま、
 とてもかくても、御宿世ぞあらむ」といふを、「いとよくけしきをだに知らねど、君は心
 合せたりとおほさむが佗しき事。何しに今宵こゝに來つらむ」と怨むれば、「知らぬけし
 きをだに見給はずやある。腹立ち怨み給ひそ」と腹だたせもあへず、たはむれしたり。
 男君、「いとかうしもおほえたるはいかなるにか。人數にはあらねど、いとかうまでは、
 歎い給ふ程にはあらずおほゆる。度々の御文見つとだに宜はざりしに、便なきことと見

入りぬる—
少將が

とらへなが
ら—落窪の
君を

いとよう放ちて、押しあけて入りぬるに、いとおそろしくて起きあがる程に、ふとより
て捕へ給ふ。安濃、格子をあけらるゝ音を聞き、いかならむと驚き惑ひて起くれば、
帯刀さらに起さず。「こはなぞ。御格子の鳴りつるを、なぞと見む」といへば、「犬ならむ。
鼠ならむぞ。な驚き給ひそ」といへば、「なでふ事ぞ。したるやうのあればいふか」とい
へば、「何わざかせむ。寝なむ」と抱きて臥したれば、「あな佗し、あなうたて」とい
ほしくて腹立てど、動きもせず、抱き籠められてかひもなし。少將、とらへながら、装束
ときて臥し給ひぬ。女、おそろしう佗しくて、わなよき給ひて泣く。少將、「いと心憂く
思したるに、世の中のあはれなる事も聞えむ。岩ほの中もとめて奉らむとてこそ」と宣
へば、誰ならむと思ふよりも、衣どものいと佗しう、袴のいとわろびれ過ぎたるを思ふ
に、只今も死ぬるものにもが、と泣くさまいといみじけなる氣色なれば、煩しく覺えて、
物もいはで臥したり。安濃が臥したる所も近ければ、泣いたまふ聲もほのかに聞ゆれば、
さればよと思ひて、惑ひ起くるをも、更におこさねば、「我君をいかにしなし奉りて、か

かくりば
さがりたる

程らひ

あてはか

上品

侍—從者の

詰所

あからさま

に—ちよと

雨降る夜な

めり云々—

客人が斯く

我に告げた

りと戯れ云

へる也

いざ給へ—

さあ來れ

まさぐり—

弄び

逢ひにまかりぬるうちに、御前に侍はむ。大かたに人なければ、恐しくおはしまさむものぞ」といへば、「猶やは、おそろしさは、目馴たれば」といふ。君いで給へれば「いかど、御送つかうまつるべき御笠は」と申せば、「妻を思へば、いたくかたびく」と笑ひたまふ。心のうちには、衣どもぞ萎えだめる。恥しと思はむものぞ、とおもほしけれど、「はやその人呼び出でて寢よ」と宣へば、曹司に行きて呼ばすれど、「今宵はおまへに侍ふ。早う侍にまれおはしね」といへば、「只今人のいひつる事聞えむ。只あからさまに出で給へ」と聞えさすれば、「何事ぞとよ。かじがましや」とて、遣戸押しあけて出でたれば、帯刀とらへて、「雨降る夜なめり、一人な寢ぞ、といひつれば、いざ給へ」といへば、女笑ひて、「そよ、ことなかり」といへど、強ひてゐて行きて臥しぬ。物もいはで、寢入りたるさまをつくりて臥せり。女君なほ寢入られねば、琴を臥しながらまさぐりつよ、なべて世の憂くなる時は身かくさむいはほの中のすみかもとめて、といひて、とみに寢入るまじければ、また人はなかりつと思ひて、格子を木の端にて、

な直たちそ
—眞面目が
るな
しとと—し
たゝかに
物忌の姫君
—此頃行は
れたる物語
の女主人公
の名なるべ
し
簀子—縁
搔練—表裏
とも紅の打
物なる衣
袖—婦人の
身肌—近く
著る衣
側みて—横
向きて

申せば、少將、「いといたくな直たちそ」とて、しとと打ち給へば、「さばれ下りさせ給へ」とて、諸共に入り給ふ。御車は「まだ暗きに来」とて、かへしやりつ。我が曹司の遣戸口にし
ばしるて、あるべき事きこゆ。人すくななる折なれば、心やすしとて、「まづかいまみを
せさせよ」と宣へば、「しばし。心おとりもぞせさせ給はむ、物忌の姫君のやうならば」
と聞ゆれば、「笠も取りあへで、袖をかづきてかへるばかり」と笑ひ給ふ。格子のはざま
に入れ奉りて、留守の宿直人や見つくる、とおのれもしばし簀子に居る。君の見給へば、
消えぬべく火ともしたり。几帳屏風だになければ、よく見ゆ。むかひ居たるは、安濃な
めりと見ゆる。容體頭つきをかしけにて、白き衣、うへにさよやかなる搔練の袖きたり。
そひ臥したる人あり。君なるべし。しろき衣の萎えたと見ゆるを著て、搔練のはり綿
なるべし、腰より下に引きかけて、側みてあれば、顔は見えず。頭つき髪のかよりば、
いとをかしけなりと見る程に、火消えぬ。口惜と思へど、遂にはと思しなす。「あな暗の
わざや。人ありといひつるを、早いね」といふ聲も、いといみじくあてはかなり。「人に

抄りたるもの

露―あこぎ
が使ふ童の
名
さかしら―
賢ぶりたる
所置

は、露つゆといふらむ人にもものし給へ」といへり。さうくしけなる氣色けしきを見て、いかで、はかなき志を見せむ、と思ひてしたるなりけり。女見て「いで怪し、米こめくだものやけしからず。そこにし給へるにこそ」と怨うらみずれば、帶刀たはち打ち笑ひて、「知らず。まろはかやうに見ぐるしけにしてむや。嬭つうなどもの御さかしらなめり。露つゆ、これ取り隠かくしてよ」とてやりつ。二人ふたりふして、互かたみに君の御心ばへどもを語る。今宵こよひ雨降れば、よもおはせじとて、打ちたゆみて臥ふしたり。女君をんなぎみ、人なき折にて琴こといとをかしう、なつかしう彈ひき、臥ふし給へり。帶刀たはちをかしと聞きて、「かよるわざし給へるは」といへば、「さかし。故上こさへの六歳むいっにおはせし時より、教をしへ給へるぞ」といふ程に、少將せうしやういと忍しのびておはしにけり。人を入れ給ひて、「聞のべき事ありてなむ。帶刀たはち出で給へ」といはすれば、帶刀たはち心得て、おはしにけりと思ひて、心あわたどしくて、「只今對面たいめんす」とて、出でていぬれば、安濃御前あのみまへに参りぬ。少將せうしやう、「いかに、かよる雨に來たるを、徒いたづらに歸すな」と宜へば、帶刀たはち、「まづ御消息ごせきを賜たまはせて、音ねなくともおはしましにけるかな。人の御心も知らず、いとかたき事に侍る」と

笑みせじ

餌袋一鷹の

餌を入れる袋

にて、菓子

などを入れて

て持ち歩く

にも用ひた

り

君一落窪の

君

繪や聞えつ

る一繪見せ

給へといへ

るか

往ぬ一安濃

が

案内一様子

さうぐくし

一淋し

焼米一米を

をさな。

と書い給へれば、出づとて、親に「をかしき様ならむくだもの、一餌袋して置い給へ。い

ま只今とりに奉らむ」といひおきて往ぬ。安濃呼び出でたれば、「いづら繪は」といへば、

「こは、この御文見せ奉り給へ」。いいで空言にこそあらめ」といへど取りていぬ。君いと

徒然なる折にて見給ひて、「繪や聞えつる」と宣へば、「帯刀がもとに、しかく云ひつる

を、御覽じつけけるにはべるめり」といへば、「うたて、心なしと見えられたるやうにこ

そ。人に知られぬ人は、無心なるこそよけれ」とて、物憂氣におもほしたり。帯刀呼べ

ば往ぬ。物語して「誰々かとまり給へる」と、さりけなくて案内問ふ。「いとさうぐくしや。

おな 姫どもの御許に、くだもの取りにやらむ」とて、「何もあらむ物賜へ」といひにやりたれ

ば、餌袋二つして、をかしきさまにして入れたり。今一つの大きやかなるには、さまざま

まのくだもの、色々の餅、薄き濃き入れて、紙隔てて焼米入れて、「こよにてだにあやし

く、あわたしき口つきなれば、旅にてさへいかに見給ふらむ。はづかしう、この焼米

御方一落窪の君

女御殿の云云一帯刀が替て安濃に

語りし也

維成一帯刀

の實名

いたう一巧

におろし一下

され

こゆびまし

て一小指食

はへて

かた一圖

みみせじ一

繪見せじ、

御ともに参り給はずと聞くはまことか。さらば参らむ。

といひたれば、

御方みかたのなやましけにおはして、とまらせ給ひぬれば、何なにしにかは行かむ。いとつれづれなるをなむ、慰なぐさめつべくばおはせ。ありと宜よろひし繪え必ず持もておはせ、

といひたるは、「女御殿にようごどのの御方にこそいみじく多く候さぶらふべけれ。君おはし通かよはば見給ひて

む」といへるなりけり。帯刀たちはき、やがて、此文このみを少將せうしやうのきみ君に見せ奉れば、「これや惟成このなりが妻のの

手、いたうこそ書きけれ。よき折にこそありけれ。行きてたばかれ」と宜ふ。「繪え一巻おろ

し給はらむ」と申せば、君、「かのいひけむやうならむ折こそ見せめ」と宜へば、「さも侍はべ

りぬべき折にこそは侍はべるめれ」と申す。うち笑わらひ給うて、御みかたかたにおはして、しろき色し

紙しにこのゆびさして、口くちすほめたるかたを書きたまひて、

召よし侍はべれば、

つれなきをうしと思へる人はよしゑみせじとこそ思ひがほなれ

君中君三の
君など

御願はたし

一報賽

姫一老女

かぞへ一人
數

けがれ一月
事

かひすみて
一かば助辭
ひそみてな
り

ど、御方々すみ給うて、いと騒しき程なれば、さるべき折もなく、思ひありく程に、
此殿このどの、古き御願ふるごけんはたしに、石山いしやまに詣で給ふに、御供おんごもにしたひ聞ゆるまよに、率るておはす
れば、姫おうなさへ、留とどまらむ事を恥はぢと思ひて詣づるに、落窪君おちくぼのみかぞへの中にだにも入らざれば、
辨べんの御方おんかた、「落窪君おちくぼのみ率るておはせ、一人留ひとりにとどまり給はむがいとほしき事」と申し給へば、「さてそ
れがいつありきしたる。旅たびにては縫物ぬいものやあらむとする。猶なほありかせそめじ。内に籠うちこめて
置きたらむぞよき」とて、思ひかけでやみ給ひぬ。安濃あぬは、三の君の御方人おんかたうぢにて、いと似
なく装束さうそくかせて、率るておはするに、おのが君の只一人ただひとりにおはするに、いみじく思ひて、「俄にわか
にけがれ侍りぬ」と申して留とどまれば、「よにさもあらじ。かの落窪君おちくぼのみの一人おはするを、思
ひていふなめり」と腹立はらだてば、「いと理わりなき事にて侍るなり。侍さむらひへとあらば参らむ。かく
をかしき事、見じと思ふ人ありなむや。姫おうなだにしたひゆく道にこそあめれ」といへば、
實ひにさや思ひけむ、はした童わらはのあるに、さうぞかせて、とどめ給ひ、のよじりて出で給
ひぬれば、かひすみて、心細こころほそけなれど、我が君とうち語かたらひ居る程に、帶刀たらしきが許もとより、

らず。北方きたのかたの、いみじく心の悪あしくて、我がゆるさざらむ事露ばかりもしいでは、いみじからむ、と明暮あけくれおほいたるに、恐おそぢ愼つてみたまへる、となむ聞き侍はべる」と申せば、「我みまを密みかに」といひ渡り給へば、わが君の御言みことを、いなびがたくやありけむ、いかでと見ありく、十日かばかり音ねづれ給はで、思おもひ出でて宜よろへり。

日比は、

かき絶えてやみやしなましつらさのみいとどます田たの池いけの水みづぐき

思おもうたまへ忍しのびつれど、さてもえあるまじかりければ、人知れず、人わろく、

とあれば帯刀たらし、「このたびだに御かへり聞え給へ。しかくくなむ宜よろひて、心に入れぬぞ

とさいなむ」といへば、安濃あのみ、「又いふらむやうも知らず、とて、いと難かたけに思おもしたるも

のを」とて、参りて見奉れど、中の君きみの御夫おとこの右中みぎな辨べん、頼たのの事ことにて出で給ふ、袍衣ろふ縫ぬひ

給ふほどにて御かへりなし。少將せうしやう、實じつにいひ知らぬにやあらむ、と思へど、いと心深こゝろ

き御心も聞きしみにければ、さる心ばへやふさはしかりけむ、帯刀たらしをおぞしと責め給へ

いなび—こ
とわる
いかでと—
何卒然るべ
き陳ちんもあれ
かすと
ます田の池
—大和にあ
り、つらさ
の増す意を
懸く
頼の事—急
用にて
おぞし—魯
鈍なり
御方々—大

著古してく
たくたにな
りたる

掲焉に一き
は立て

ふみ一踏み
文

はかなき一
かりそめの

られむものぞ」と宣へば、御達「いといみじけにも宣ふかな、あたら君を」と、忍びて
いふもありかし。かくて少將いひそめ給うてければ、また御文薄にさしてあり。

穂に出でていふかひあらば花すすきそよとも風のうち靡かなむ

御かへりなし。時雨いたうする日、

さも聞き奉りし程よりは、物思し知らざりける、

とて

雲間なきしぐれの秋は人戀ふるころのうちにまかきくらしけり

御かへりもなし。又、

天の川雲のかけはしいかにしてふみ見るばかりわたしつづけむ

日々にあらねど、絶えず云ひ渡り給へど、絶えて御返りなし。「いみじう物つよましきう

ちに、かやうの文もまだ見知らざりければ、いかにいふとも知らぬにやあらむ。物思ひ

知りけに聞くを、などかは、はかなきかへり事をだに絶えてなき」と帯刀に宣へば、「知

いとほし—
可憐

はふらかし
—取り失ひ

表の袴—禮
服の袴
綾のはり綿
—綿に糊を
ひき染模様
をつけたる
もの、衣の
上にひきか
けて着用す
萎えたる—

ますがいとほしや」と宣へど、取しうて物も申されず。歸り給うて北方に、「落窪をさし
 規きたりつれば、いと頼みすくなけなる、白き袷一つをこそ著て居たりつれ。子どもの
 古衣やある。著せ給へ。夜いかに寒からむ」と宣へば、北方、常に著せ奉れど、はふら
 かし給ふにや、あくばかりもえ著つき給はぬ」と申し給へば、「あなうたての事や、親に
 疾くおくれて、心もはかしくしからずぞあらむかし」と答へ給ふ。賀の少將君の、表袴
 ぬはせにおこせ給ふとて、「之はいつよりもよく縫はれよ。祿に衣著せ奉らむ」と宣へる
 を聞くに、いみじき事限なし。いと疾く清けに縫ひ出で給へれば、北方よしと思ひて、
 己が著たる綾のはり綿の、萎えたるを著せ給へば、風はたどはやになる儘に、いかにせ
 ましと思ふに、少し嬉しと思ふぞ、心地の屈し過ぎたるにや。此聲の君は、悪き事をも
 かしがましくいひ、よき事をば掲湯に響むる心ざまなれば、「この装束どもいとよし。よ
 く縫ひおほせたり」と響むれば、御達、北方に申せば「あなかま、落窪君に聞かすな。
 心騙せむものぞ。かやうの者は、屈せさせ置くぞよき。それを幸にて、人にも用る

うへー大駈
の北の方即
ち落窪の實
の繼母

り
つづみ—憚

ひとりごち
—獨語

いで—發語
の詞

なり—形
かよりて—
物によりか
かりて

やんごとな
き子—貴き
子、今妻腹
をいふ

取りて参りて、「かの聞え侍りし御文」とて奉れば、「何しに。上も聞き給ひては、よしと宣ひてむや」と宣へば、「さてあらぬ時は、よくやは聞え給へる。上の御心になつよみ給ひそ」といへど、答へもし給はず。安濃、御文を紙燭さして見れば、只かくのみぞある。

君ありと聞くに心をつくばねのみねど戀しきなけきをぞする

「をかしの御手や」とひとりごち居たれど、かひなけなる御けしきなれば、おし巻きて、御櫛の笥に入れて立ちぬ。帶刀、「いかにぞ御覽じつや」、「いで、まだ答をだにせさせ給はざりつれば、置きて立ちぬ」といへば、「いでや、かくておはしますよりはよからむ、我等が爲にも、思ふやうにて」といへば、「いでや、御心のたのもしけにおはせば、なかはさも」といふ。つとめて、おとど、殿におはしけるに、落窪をさしのぞきて見給へば、なりのいとあしくて、さすがに髪のいとうつくしけにて、かよりて居たるを、あはれとや見給ひけむ、「みなりいとあし。あはれとは見奉れど、まづやんごとなき子ども、事をする程に、え心知らぬなり。よかるべき事あらば、心とものし給へ。かくてのみい

いとほるけ
げなり—容
易にらちあ
くまじ

あなかま—
制止の語

かへり—返
事

かて死なむと思ふ心深し。尼になりても、殿のうち離るまじければ、只消えうせなむわ
 ざもがな、と思ほす。帯刀、大將殿に参りたれば、「いかにぞ、かの事は」いひ侍りしか
 ば、云々なむ申す。まことにいとほるけけなり。かやうのすぢは、親ある人は、それこ
 そともかくも急げ。大殿も北方に取り籠められて、よもし給はじ」といへば、「さればこ
 そ入れに入れよとはいへ。聲どらるとも、いとはしたなき心地すべし。らうたう猶思へ
 ば、こよに迎へてむ。さらずば、あなかまとてもやみなむかし」と宣へば、「そのほどの
 御さだめ、よく承りてなむ仕うまつるべかなり」と申せば、少將、「見てこそ定むべ
 かなれ。暗にはいかでかは。まめやかに猶たばかれ、世にふとは忘れじ」と宣へば、帯
 刀、「ふとはあぢきなき文字ななり」と申せば、君うち笑ひ給うて、「長くといはむとしつ
 るを、いひ違へられぬるぞや」などうち笑ひ給うて、「これを」とて御文賜へば、しぶし
 ぶにとりて、「安濃に御文」とて引き出でたれば、「あな見苦し。何しにぞとよ。よしない
 事は聞えて」といへば、猶御返りせさせ給へかし。世に悪き事にはあらじ」といへば、

曹司一局

母君云々ー
死したる實
母を慕ひて
いふ

わびしー辛
し

露ーいささ
か

立ちかへり
ー冥土より
なり

は世にもおほしかけ給はじ。今かくなむとものし侍らむ」と申せば、「入れに入れよかし。はなれてはた住むなれば」と宣へば、帶刀、安濃にかくなむと語れば、「只今はさやうの事、かけても思したよぬ中に、いみじき色好と聞き奉りしものを」と、もてはなれて答ふるを、帶刀怨むれば、「よし、今御氣色見む」といふ。この御方のつゞきなる廂二一間、曹司にて得たりければ、おなじやうなる所は辱しとて、落窪一間をしつらひてなむ臥しける。八月朔日ごろなるべし。君一人臥して寢もねられぬまよに、「母君、我を迎へ給へ、いとわびし」といひつよ、

我に露あはれをかけば立ち歸りともにを消えよ憂はなれなむ

心なぐさめに、いとかわひなし。つとめて、物語のついでに、「これがかく申すは、いかゞはし侍らむ。かくてのみは、いかゞはしはてさせ給はむ」といふに、いらへもせず、いひ煩ひてゐたる程に、三の君の御手水まるれとて、召さるれば立ちぬ。心の中には、とありともかくありとも、よき事はありなむや。女親のおはせぬに、幸なき身と知りてい

さいなむ一
叱り懲らす

ざれたる一
色好みなる

あたらしもの
一可惜もの

わかうどほ
り一わかん
どほり

る」と宜ふ。けにいたはり給ふ事めでたければ、哀あはれに心細こころこまけにておはするを、守まもらへ慣なひて、いと心苦こころみしければ、常つねにいり居をれば、さいなむ事かぎりなし。「落窪おちくぼ君の、これをさへ呼よびこめ給ふ事」と腹立はらたたれ給へば、心のどかに物語ものがたりもせず、後見うしろみといふ名便なべんなしとて、安濃あにぞとつけ給ひき。かゝる程に、藏人くらうぢのせうしやう少將の御方おんかたなるに、帯刀たははちとて、いとざれたるもの、この安濃あにぞに文ふみかよはして、年へて後、いみじう思ひてすむ。互かたみに隔へてなくものがたりしける序ついでに、この若君わかぎみの御事をかたりて、北方きたのかたの御心のあやしうて、哀あはれにてすませ奉りたまふ事、さるは御心おんこころばへ、みかたちのおはしますやう語る。うち泣なきつよ、いかで思ふやうなる人にぬすませ奉らむ、と明暮あけくれあたらしものにいひ思ふ。この帯刀たははちが女親おやは、左大將さだいしやうと聞えける御むすこ、左近少將さこんのせうしやうにておはしけるをなむ養やしなひ奉りける。まだ妻めもおはさで、よき人の女じよのなど、人に語らせて問ひ聞き給ふ。帯刀たははち、落窪おちくぼ君のうへを語り聞えければ、少將耳せうしやうとどまりて、静しづかなる一間ひともかに細こまにかたらせて、「あはれ、いかに思ふらむ。さるはわかうどほりばらななりかし。我われにがれ密みそかにあはせよ」と宜のたまへば、「只今ただいま

あなづりー
悔り

人の聲の装束、いさよかなる暇なく、かきあひ縫はせ給へば、しばしこそ物いそがしかりしか、夜も寝もねず。いさよかおそき時は、「かばかりの事をだに、物憂けにしたまふは、何を役にせむとてならむ」と責め給へば、うち泣きて、いかで猶消えうせぬるわざもがな、となけく。三の君に御裳著せ奉り給ひて、やがて藏人少將に婚せ奉り給うて、いたはり給ふ事かぎりなし。落窪君、まして暇なく、苦しきことまさる。若くめでたき人は、多くかやうの實事する人や少かりけむ、あなづりやすくていと侘しければ、うち泣きて縫ふまよに、

世の中にいかであらじと思へどもかなはぬものは憂身なりけり

後見といふは、髪長くをかしけなれば、三の君の方に、只召しに召し出づ。後見、いと本意なく、悲しと思ひて、「我が君に仕うまつらむと思ひてこそ、親しき人のむかふるにもまからざりつれ。何の由にか、他君どりはし奉らむ」と泣けば、君、「何か、同じ所にすまむかぎりは、同じ事と見てむ。衣などの見苦しかりつるに、なかく、嬉しとなむ見

なか／＼
却つて

らうたく—
愛らしく
後見—世話
人

もなく、乳母めのこもなかりけり。たゞ母のおはしける時より、使つかひつけたる童わらわのざれたる女メぞ、後見うしろみとつけて仕つかひ給たまうける。あはれに思おもひかはして、片時かたときはなれず。さればこの君きみの容かたちは、かくかかしづき給たまふ御女おんじよめなどにも劣おとるまじけれど、出て交まじらふ事もなくて、あるものとも知る人なし。やうく物思ものおもひ知るまよに、世よの中のあはれに、心憂こころうき事ことのみ思おもひされければ、かくのみぞうち歎なげく。

日にそへてうさのみまさる世よの中に心づくしの身をいかにせむ

うさのみ云—憂うれさに
宇佐、心盡こころじん
しに筑紫を
懸かけたり
箏こしの琴—十
三絃さんげんの琴
嫡妻腹—今
の妻つまの腹

といひて、いたう物思ものおもひ知りたるさまにて、大方おほかたの心さま敏うまくて、琴こしなども習ならはず人あらば、いとよくしつべけれど誰たれかは教おしへむ、母君ははきみの、六つ七つばかりにておはしけるに、習ならはし置おい給たまうけるまよに、箏しやうこしの琴こしを、世よにをかくし弾ひき給たまひければ、嫡妻腹ひかひはらの三郎君さんろうきみ、十ばかりなるに、箏心こしこに入りたりとて、「これに習ならはせ」と北方きたのちかたの宜よろへば、時々ときとき教おしふ。つくくと暇いとまのあるまよに、物縫ものぬいふ事ことを習ならひけるが、いとをかしけにひねり縫ぬいひ給たまうければ、「いとよかめり。ことなる面貌かたちなき人は、物實ものまのやかに習ならひたるぞよき」とて、二

落窪物語

卷之一

裳著せし裳
は女子の腰
より下に著
る衣にて、
成人すれば
始めて裳を
著する祝儀
あり
わかんどほ
り―二世以
下の王孫
放出―母屋
より建て出
したる屋

今は昔、中納言なる人の、女數多もたまへるおはしき。大君、中の君には、ひじこ掣どりして、西の對、東の對に、花々として住ませ奉り給ふ。三四の君にも、裳著せ奉り給はむとて、かしづきぞし給ふ。また時々通ひ給うけるわかんどほり腹の君とて、母もなき御女おはす。北方心やいかどおはしけむ、仕うまつる御達の數にだに思さず、寢殿の放出の、又一間なる落窪なる所の、二間なるになむ住ませ給うける。君達ともいはず、御方とはましていはせ給ふべくもあらず。名をつけむとすれば、さすがに、大殿のおほさむ心あるべし、と慎み給うて、「落窪君といへ」と宣へば、人々もさいふ。大殿も、乳兒よりらうたくやおほしつかずなりにけむ。まして北方の御まよにて、はかなき事多かり。はかなくしき人

大和物語終

櫓の木以下
五行纂註に
「秋成が本
に都人村井
古巖が本に
あるとて、
上の續きを
書き加へた
り」とある
によりて附
載せり

櫓たかの木のなるふ程とは教をしへねど名にやおふとて宿はかりつる

といひたりければ、「あなうちつけの事や」とて、かくぞ云ひ出したりける。

門かき過ぎてはつせ川までわたる瀬も我がためとや君はこたへむ

その夜とまりつ。翌朝つぎあけ、男

朝まだき立つ空もなししら波のかへるかへるも歸りきぬべし

日はしたに
なりぬ一日
暮近くなれ
り

おのがうち
いひて―お
のがどちい
ひての誤歟
蜘蛛に―い
るいろに
憎―奈良―
たまほこ―
たまさかの
誤歟

數多^{あまた}出で來て、「けふ日はしたになりぬ、奈良坂のあなたには、人の宿り給ふべき家も候はず、此處^{こゝ}に泊らせ給へ」といひて、門竝^{かど}に、家二つを一つに造り合せたる、をかしけなるにぞ留めける。さりければとどまりにけり。饗應^{かたじ}など人々しければ、物など食ひて、騒^{さわが}しき程しづまり、程なく夕暮にはなりてけり。さりければ、戸の下^{もと}に佇み出でて見るに、この南の家の北なる家にて、憎^{にく}の木といふものをぞ二樹三樹植ふたりける。「怪しく他木^{ほか}をも植ふで」などいひて、さしのぞきたりけるに、清^{きよ}けなる葎^{しじふ}どもあけ渡して、女ども數多^{あまた}居り。あやしなどおのがうちいひて、供なりける人を呼び寄せて、「この人はこの南に宿れるか」と問ひけり。築地^{ついで}のくづれより見し人は、いかに忘れざりけるにか、若し男などに具^ぐして來たるにやなど、蜘蛛^{くも}手に思^{おも}ひ亂^{みだ}るゝ程に、
悔^{くや}しくも憎^{にく}ぞとだにもいひてけるたまほこにだに來てもとはねば
といひけり。この「庭さへ荒れて」といひし人の手なりけり。京さへなま戀しき旅のほどなりければ、硯^{すずり}こひ出でて、

人の秋に一人に厭いとかたる意こころをか

いひ入れて

いひ含こめ

て

すかず一ひとだ

ます

人の秋にはさへ荒れて道もなくよもぎ茂れる宿とやは見ぬといへりければ、童の口にいひ入れて、

誰が秋にあひてあれたる宿ならむわれだに庭のくさは生おほさじ

さて時々通ひけれど、いかなる人のすかずならむ、とつよましかりければ、人にもそこそこともいはで通ふ程に、みな人ものへいにけり。只一人ありて、「もし人間はば、これを奉れ」とて、文書ふみきて出しける。

我が宿はならのみやこそ男山をとこやまこゆばかりにはあらはさで訪へ

とありければ、この男おとこいたく口惜くちかしがりて、その家に置きたるものに、物などくれて問ひけれど、ふつと云はで只「奈良へ」とぞいひける。尋ねむかたなし。さるほどに思ひ忘れにけるに、この男の親、初瀬はつせに参りける供ともにありて、實まことさる事ありきかし。こよやそならむかし、こよそれならむなど思ふ程に、供ともなる男どもなどに語らひなどしけり。さてかの初瀬はつせに詣まうでて、三條より歸りけるに、飛鳥本あすかもとといふ所に、相知れる法師ほくも俗も

女、このかへし。

かかるものみるまみるまぞうとまるる心あさまの沼に生ふれば
と返したりける。この男に女のいへりける。

いつはりをただすの森のゆふたすきかけてを誓へわれを思はば
女の思ふ男をして、たしかにいだすを見て、

あらはれることあらがふな櫻ばな春はかぎりと散るを見えつつ
かへし。

色に出であたに見ゆともさくら花風の吹かずば散らじとぞ思ふ

○西の京五條わたりに、築地處々崩れて、草生ひ茂りて、さすがに所々葎しよん數多あまたさよけ渡
したる所あり。簾すだすの下に、女どもなど數多見えければ、この男なほも過ぎで、供なる童し
て、「などかく荒れたるぞ」と云ひければ、「誰がかくは宜ふぞ」と云ひければ、「大路行く
人」といひけるに、崩くずれより女ども數多出でて、かく云ひかけたりける。

たゞすの森
一鴨の河
合、糺すの
いひ懸
いだすを見
て一下に
「本の男」の
三字脱する

葎一日除、
障子やうの
もの
なほも過ぎ
で一只是通
らずして

べし

簀子一縁

身のうみの思ひなぎさは今宵かな浦に立つ浪うちわすれつつ

とぞ詠みたりける。かよりければ、これをあはれがりてぞ、あはれに明しける。これも

返しなし。さて又の夜の月をかしかりければ、簀子にゐて、大空を眺めてるたりける程に、

夜の更けゆけば、風いと涼しう吹きつゝ、苦しきまで覺えければ、物のゆゑ知る友だち

の許に、「これのみぞかねて月見るらむ」とて、かゝる歌を詠みて遣しける。

なけきつつ空なる月をながむればなみだぞ天の川とながるる

さりける程に、いと深からぬ事なりければ、もとの官になりけり。この友だちどもは、

躬恒、友則がほどなりけり。

○同じ男、知れる人の許に常に通ふに、いとにくさけなる女のあるを、女は成人になれ

ば、こよくなだらかになるなれど、この女を憂しと笑ひけれど、見るたびにやうく

好くなりもて行く。殊の外に生まさりして見えければ、

沼水に君はあらねどかかるものみるまみるまにおひ増りけり

なだらか
無難
みるま
一みぬま
くの誤な
らむといふ

かなしく—
愛する

なまいどみ
て—生桃—
競ひ合ふ様
にて

うきたつた
の山—誤脱
あるべし

かくとしも
なし—同じ
く誤脱ある

人の命いのちといふもの、幾世いくよしもあるべきものにあらず、思ふ時は、はかなき官つからも何にかは
あるべき。かゝる浮世にはまじらず、一向ひたがるに山深ふかくはなれて、行おこなひにや就つきなむ、と思ひ
ければ、近くをだに放はなたず、父母ていぼのかなしくする人なりければ、萬よろづのうきもつらきもこ
れにぞさはりける。時しも秋にしもありければ、物のいとあはれに覺えて、夕暮にかゝる
獨言ひとりごとをぞ云ひたりける。

「浮世うきよには門鎖かざりせりとも見えなくななど我が宿のいでがてにする」

と云ひてひがみ居りける間に、なまいどみて時々物などいひける人の許つたより、薦つたの紅葉の
おもしろきを折りて、やがてその葉に、「これを何とか見る」とて書き遣たごせける。

うきたつたの山の露のもみぢ葉は物おもふ秋の袖にぞありける

といひやりけれど、返かへしもせずなりにければ、かくとしもなし。かゝる事どもを聞き衰
がりて、この男の友だちども、集あつりて來て慰なぐさめければ、酒飲ませなどして、聊遊いらいみそびのけ
ぢかきぞしける。夜になりければ、この男、かゝる歌をぞ詠みたりける。

染むるに用
ふるもの、
俯臥の意を
懸く

兄末—兄弟
の誤敷
たいくし
—怠慢
なめし—無
禮なり
聞えない—
聞えなし

抄云

又或本に世の常の外なりしこと加はれり。そのてにをはなどいさよかおほつかなき所などもあれど、たぐへる本を見侍らねば、改めきこえむよしもなし。さすがに捨て難き事どもなればことに左に書き連ね侍る。

○今は昔、二人して一人の女をよばひけり。先立ちてよばひける男、官まさりて、その時の帝ちかう仕うまつりけり。後よりよばひける今一人の男は、その同じ帝の母後の御兄末にて、官後れたりけり。それをいかど思ひけむ、後よりよばひける男に、かの女は逢ひにけり。さりければ、この初より云ひける男は、宿世の深くありけると思ひけり。かくて萬によろしからず、たいくしき事を、物の折ごとに、帝のなめしと思し召しぬべき事を、作り出でつゝ聞えないける間に、この男は宮仕いと苦しうして、只逍遙をして、歩行を好みければ、衛府官にて、宮仕をもせずといふ事いで来て、そのありける官をぞ取り給ひてける。さりければ、男、世の中を憂しと思ひてぞ、籠りて思ひける。

摘みて、蒸物といふ物にして、茶碗に盛りて、箸には梅の花の盛なるを折りて、その花
 瓣に、女の手にてかく書けり。

君がため衣の裾を濡らしつつ春の野に出でて摘める若菜ぞ

男これを見るに、いと哀に覺えて引き寄せてくふ。女わりなう恥しと思ひて臥したり。
 少將起きて、小舎人童を走らせて、則ち車にて、まめなるものさまに持て來たり。
 「むかへに人のあれば、今又も参り來む」と出てぬ。それより後、絶えず自らも來訪ひ
 けり。萬の物くへども、なほ五條にてありしもの、珍らしうめでたかりき。と思ひ出で
 ける。年月を経て仕うまつりし君に、少將おくれ奉りて、かはらむ世を見じと思ひて、
 法師になりけり。もとの人の許に袈裟洗ひにやるとて、

霜雪のふるやがしたに獨寢のうつぶしぞめの麻のけさなり

となむありける。

まめなるも
 の一實なる
 物、實用の
 品々

仕うまつり
 し君一仁明
 天皇

うつぶしぞ
 め一五倍子
 は内の空な
 るものなれ
 ばいひ黒く

とひとりごつ。少將。

來たれどもいひしなれねば鶯の君に告げよとをしへてぞ鳴く

物しき一耽
づべき

と聲をかしてうていへば、女驚きて、人もなしと思ひつるに、ものしきさまを見えぬる事

と思ひて、物も云はずなりぬ。男縁に昇りて居ぬ。「などかもの宣はぬ、雨の理なくはべ

りつれば、やむまではかくてなむ」といへば、「大路よりはまさりて、此處はなかく」

なかく一
却つて濡れ
給はむな

と答へけり。時は正月十日の程なりけり。簾の内より褥さし出でたり。引き寄せて居ぬ。

やをら一そ
ろりと

簾も縁は蝙蝠に食はれて所々なし。内のしつらひ見いるれば、昔覺えて疊などよかりけ

れど、口惜しくなりにけり。日もやうく暮れぬれば、やをらすべり入りて、この人を

奥にも入れず。女くやしと思へど、制すべきやうもなくて、いふかひなし。雨は夜一夜

降りあかして、又の翌朝ぞ少し空晴れたる。男は女の入らむとするを、「只かくて」とて

入れず、日も高うなれば、この女の親、少將に饗應すべき方のなかりければ、小舎人童

ばかりとどめたるに、堅鹽肴にして酒を飲ませて、少將には、廣き庭に生ひたる菜を

知らず顔にて御通し申すべきに非ずとて

黒主―大友氏近江の人
滋賀郡の大領たりし時の事ならむ
さざら波―小波
眞岑の宗貞
！僧正通昭
土やぐら―土にて塗りたる倉
薄色の衣―たて紫横白糸
濃き―紅色の

どもを造りて、菊花のいとおもしろきを植ゑて、御まうけ仕うまつれりけり。國守は怖ぢおそれて、外にかくれをりて、只黒主をなむ居ゑ置きたりける。おはしまし過ぐる程に、殿上人「黒主は、などてさては候ふぞ」と問ひけり。院も御車おさへさせ給ひて、「何しに此處にはあるぞ」と問はせ給ひければ、人々問ひけるに申しける。

さざら浪間もなく岸を洗ふめりなきさきよくは君とまれとか

と詠めりければ、これにめで給ひてなむ、とまりて、人々に物賜ひて歸らせ給ひける

●良岑宗貞少將、ものへ行く道に、五條邊にて雨いたう降りければ、荒れたる門に立ち隠れて見ゆるれば、五間ばかりなる檜皮屋の下に、土やぐらなどあれど、殊に人など見え

えず、歩み入りて見れば、階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣の上に著て、丈だちいとよき程なる人の、髪丈ばかりならむ、と見ゆるなるが、

よもぎ生ひて荒れたる宿を鶯の人來と鳴くやたれとか待たむ



廣幡中納言
—源庶明
たばかり—
相談し
物のおほゆ
れば—書き
さして止め
たる也

ける。さていふやう、「御前に御遊などし給へるを、辛うじてなむ聞えつれば、誰がものし給ふならむ、いと怪しき事、たしかに問ひ奉りて來となむ宜ひつる」といへば、「眞實には下つ方よりなり。みづから聞えむ事を聞え給へ」と云ひければ、「さなむ申す」と聞えければ、「さにやあらむと思ふに、いと怪しうもをかしうも覺え給ひけり。暫といはせて立ち出でて、廣幡中納言の侍從にものし給ひける時、「かゝることなむあるを、かいどすべき」とたばかり給ひけり。さて左衛門の陣に、宿直所なりける屏風疊など持ていきて其處になむ下い給ひける。「いかでかくは」と宜ひければ、「何かはいとあさましう、物のおほゆれば」。

○亭子の帝、石山につねに詣で給ひけり。國司、民疲れ國亡びぬべしとなむ佗ふる、と聞し召して、「こと國々の御莊などに、仰せて」と宜へりければ、持て運びて、御まうけを仕うまつりて詣で給ひけり。返江守、いかに聞し召したるにやあらむ、と歎き恐れて、また無下にさて過し奉りてわや、とて歸らせ給ふ。打出の濱に、尋常ならずめでたき假屋

又無下に云
云—一向に

式部卿の宮
—敦慶親王

わりなく—
むやみに

おもひ—思

ひ、火

渡る—通行

す

いさ—否不
知の意

切に—さし
迫りて

富士の嶺の絶えぬおもひもあるものをくゆるは辛き心なりけり

とありけり。かくて久しう参り給はざりける比、女いといたう待ち侘びにけり。いかなる心地しければか、さるわざはしけむ、人にも知らせで、車に乗りて内裏に参りにけり。左衛門の陣に車を立てて、渡る人を呼び寄せて、「いかで少將君に物聞えむ」といひければ、「怪しきことかな。誰と聞ゆる人のかよる事はし給ふぞ」などいひすさびて入りぬ。また渡れば同じ事いへば、「いさ殿上などにやおはしますらむ。いかでか聞えむ」など云ひて入りぬる人もあり。袍衣きたる者の入りけるを、強ひて呼びければ、怪しと思ひて來たりけり。「少將君やおはします」と問ひけり。「おはします」といひければ、「いと切に聞えさすべき事ありて、殿より人なむ参りたる、と聞え給へ」とありければ、「いと易きことなり。そもくかく聞え次ぎたらむ人をば忘れ給ふまじや。いと哀に夜更けて、人少にてもものし給ふかな」と云ひて、入りていと久しかりければ、無期に待ち立てりける。辛うじて、これもいひつがでや出でぬらむ、いか様にせむと思ふ程になむ、出で來たり

方もとほら
ぬとたまひ
とくちいひ
いすゑをい
ひひさし
つしとあり

伊衛藤原
敏行の三男
風一風邪

いささめに
かりそめ
に
野分過し
秋の暴風
すら無事に
過し君なる
ものを
今の左大臣
一忠平

○伊衛宰相、中將にもものし給ひける時、故兵部卿宮の別當し給ひければ、常に参りなれ
て、御達も語らひ給ひけり。その君、内裏より罷出給ひけるまゝに、風になむあひ給ひて
煩ひ給ひける。訪問に薬の酒肴など調じて、兵衛命婦なむやり給ひける。その返事に「い
と嬉しく訪ひ給へる、あさましう、かゝる病もつくものになむありける」とて、

青柳のいとならねども春かせの吹けばかたよる我が身なりけり

とあれば、兵衛命婦、かへし、

いささめに吹く風にやはなびくべき野分過しし君にやはあらぬ

○今の左大臣、少將にもものし給ひける時に、式部卿宮に常に参り給ひけり。かの宮に、
やまとといふ人候ひけるを、物など宜ひければ、いとわりなく色好む人にて、女いとを
かしうめでたし、と思ひけり。されど常にあふ事かたかりけり。やまと、

人知れぬ心のうちにもゆる火はけぶりも立たでくゆりこそすれ

と云ひやりければ、かへし、

ひけむ。これは僧都そうづになりて、京極僧都きやうごくのそうづといひてなむ、いますがりける。

○昔内舍人うぢねりなりける人、大三輪おほみわの御幣使みでぐらづかひに大和國やまとのくにに下りけり。井手みでといふ邊わたりに、清けな

る人の家より、女ども童わらはいで來て、このいく人を見る。きたなけなき女、いとをかしけ

なる子を抱いだきて、門かぢのもとに立てり。この兒ちごの顔かほのいとをかしけなりければ、目を留とどめ

て、「その子こ此方こち率らゐて來」といひければ、この女を寄り來たり。近くて見るに、いとをかし

けなりければ、「ゆめ他夫たむこし給たまふな。我われにあひ給へ。大おほになり給はむ程ほどに參り來む」と云

ひて、「これを記念かたみにし給へ」とて、帶おびを解ときて取らせけり。さて子のしたりける帶おびを解

き取りて、持もたりける文ふみに引きゆひて、持もたせていぬ。この子こ年とし六七じゅうななばかりにありけり。

この男おとこ色いろ好このみなりける人なれば、いふになむありける。これをこの子は忘れず思おもひもたり

けり。男は早はやう忘れにけり。かくて七八なな年としばかりありて、また同じ使つかに差さされて、大和

へいくとて、井手のわたりにやどりて、居ゐて見れば、前まへに井ゐなむありける。それに水みづ汲く

む女どもあるが、いふやう。

ゆめ一決いっけつして

持もたせて一

この男おとこの從したが者ものに也

女どもある

がいふやう

以下いげ闕くわ文ぶん

にや一本いっぽんに

は「その行

てありける。かく世にいますがりと聞く時だにとて、母もやりければ、いきたりければ「法師の子は法師なるぞよき」とて、これも法師になしてけり。かくてなむ、

たぶさ―手

首

三世―過去

現在未來

すげなく―

無情に

人のわざ―

人の佛事

山―比叡山

頭―巖

折りつればたぶさにけがるたてながら三世の佛に花たてまつる

といふも、僧正の御歌になむありける。この子を推し爲し給ひける大徳は、心にもあらでなりたりければ、親にも似ず、京にも通ひてなむしありきける。この大徳の親族なりける人の女の、内裏に奉らむとてかしづきけるを、密にかたらひてけり。親聞きつけて、男をもすげなくいみじういひて、この大徳を寄せすなりにければ、山に坊してゐて、言の通ひもえせざりけり。いと久しうありて、この騒がれし女の兄どもなどなん、人のわざしに山に登りたりける。この大徳のすむ所に来て、物語などしてうち休みたりけるに、衣の頭にかきつけける。

白雲のやどる嶺にぞおくれぬるおもひのほかにある世なりけり

と書きたりけるを、この兄の兵衛尉は、え知らで京へいぬ。妹見つけてあはれと思

つれなきやうにて一知らぬかほにて

いかゞいふとて一何といふか試みむとて

ひと寺一寺申悉く

左近將監一後出家して素性法師

聲にて、讀經し陀羅尼讀む。この小野小町怪しがりて、つれなきやうにて、人を遣りて

見せければ、「養一つ著たる法師の、腰に火打笥など結びつけたるなむるたる」と云ひけり。かくて猶聞くに、聲いと尊くめでたう聞ゆれば、たゞなる人にはよもあらじ。もし

少將大徳にやあらむ、と思ひけり。いかゞいふとて、「この御寺になむはべる。いと寒きに、御衣ひとつ貸し給へ」とて、

いはのうへの旅寢をすればいと寒し昔のころもを我にかさなむといひやりたりける返事に、

世をそむく昔の衣はただひとへ貸さねばうとしいざふたりねむ

といひたるに、更に少將なりけり、と思ひて、たゞにも語らひし中なりければ、逢ひて物もいはむ、と思ひていきければ、搔い消つやうに失せにけり。ひと寺覚めさすれど、更に逃けて失せにけり。かくて失せにける大徳なむ、僧正までなりて、花山といふ寺にすみ給ひける。俗にいますがりける時の子どもありけり。太郎は左近將監にて、殿上し

童の侍るこ
と一里にの
こしと妻子
の事

しかば、かゝる山の末にも籠り侍りて、死なむを期にてと思ふ給ふるを、未なむかく怪しき事は生き廻らひ侍る。いともかしこく訪はせ給へる事、童の侍ることは、更に忘れはべる時もはべらず」とて、

「かぎりなき雲井のよそに別るとも人をこころにおくらさむやは

となむ申しつる、と啓し給へ」と云ひける。この大徳の顔容貌姿を見るに、悲しきこと物に似ず。その人にもあらず、影の如くになりて、只養をのみなむ著たりける。少將にありし時のさまの、いと清けなりしを思ひ出でて、涙も留まらざりけり。悲しとても、片時人のゐるべくもあらぬ山の奥なりければ、泣くく、「さらば」と云ひて歸り來て、この大徳尋ね出でて、ありつるよしを上うへの條啓せさせけり。后宮きうぐうもいといたう泣きたまふ。さぶらふ人々もいらなくなむ泣き哀がりける。宮の御かへりも、人々の消息も、いひつけて又遣れりければ、ありし所にも又なくなりにけり。

○小野小町といふ人、正月に清水に詣でにけり。行などして聞くに、怪しう尊たみき法師の

いらなく
はげしく

いづら―何方

五條の后―
仁明天皇の
皇后順子
ゆくりもな
く―不慮に

かしこき御
蔭に云々―
帝に近習し
馴れ仕へま
つりしをい
ふ

とあり。見れば、この良少將の手に見なしつ。「いづら」といひて、持て來し人を世界に覺むれどなし。法師になりたるべしとは、これにてなむ皆人知りにける。されど何地にかあらむといふ事、さらにえ知らず。かくて世の中にありといふ事を聞き召して五條后宮より、内舍人を御使にて山々たづねさせ給ひける。此處にありと聞きていけばうせぬ。彼處にありと聞きて尋ねれば又うせぬ。えあはず辛うじて、隠れたる所にゆくりもなくいにけり。え隠れあへで逢ひにけり。「宮より御使になむ参り來つる」とて、「仰事は、かう帝もおはしまさず、睦しく覺し召しよ人をかたみと思ふべきに、かく世に失せかくれ給ひにければ、いとなむかなしき。などか山林に行ひ給ふとも、こゝにだに消息し給はぬ。御里とありし所にも、音もし給はざなれば、いと哀になむ泣き侘ぶなる。いかなる御心にて、かうは物し給ふらむと聞えよ、とてなむ仰せられつる。此處彼處尋ね奉りてなむ、参り來つる」といふ。少將大徳うち泣きて、「仰事畏まりて承りぬ。帝崩れ給ひてかしこき御蔭にならひて、おはしまさぬ世に、暫もあり經べき心地もし侍らざり

その道成し
給へ―成道
成佛せさせ
給へ

え聞かず―
消息を知ら
ず
御はてに―
一週忌

うるて行へば、この女導師にんどうしに云ふやう、「この人かなくなりたるを、生きて世に在るものならば、いま一度逢ひこたづひ見せ給へ、身をなけ死にたるものならば、その道成みちなし給へ、さてなむ死にをるとも、この人のあらむやうを、夢ゆめにても現うつしにても聞き見せ給へ」といひて、我が装束そうそく上下かみしも、帶太刀おびたまでみな誦經ずきやうにしけり。みづからも申しもやらす泣きけり。初は何人の詣でたるならむ、と聞き居たるに、我が上をかく申しつゝ、我が装束などかく誦經ずきやうにするを見るに、心も肝きももなく、悲しきこと物に似ず、走りや出でなましと千度ちたうおもひけれど、思ひかへしくゝゝるて、夜一夜泣き明あかして朝あしたに見れば、養も何も涙なみだのかよひたる所は、血の涙なみだにてなむありける。「いみじう泣けば、血の涙といふものは、ある物になむありける」とぞいひける。「その折なむ、走りも出でぬべき心地せし」とぞ後に云ひける。かよれど猶え聞かず。御はてになりて御服ぬぎに、萬の殿上人河原まんどのうぢのかわらに出でたるに、童わらわの異様ことさまなるなむ、柏葉かしはに書きたる文ふみをもて來たる。取りて見れば、

皆人は花のころもになりぬめり苦くるしみのたもとよかわきだにせよ

よろしく思ひけるには云々―普通に愛せし二人には遁世の意を打明け語りしな
り
限なく思ひて―深く思ひて
ともかくもなれ云々―本妻の意中

て世にも勞あるものに仕うまつる、帝限なく思されてある程に、この帝うせたまふ。御葬の夜、御供に皆人仕うまつりける中に、其夜よりこの良少將うせにけり。友達、妻もいかならむ、とて、暫は此處彼處覓むれども、音耳にも聞えず。法師にやなりにけむ、身をや投けてけむ。法師になりたらば、さてなむあるとも聞えなむ。猶身を投けたるなるべし。と思ふに、世の中にもいみじう哀がり、妻子どもは更にもいはず、夜晝精進潔齋をして、世間の神佛に願をたて惑へど、音にも聞えず。妻は三人なむありけるを、よろしく思ひけるには、「猶世に經じとなむ思ふ」と、二人にはいひける。限なく思ひて、子どもなどある妻には、塵ばかりもさる氣色も見せざりけり。この事をかけてもいはば、女もいみじと思ふべし。我もえかくなるまじき心地のしければ、寄りだに來で俄になむ失せにける。ともかくもなれ。かくなむ思ふともいはざりける事の、いみじき事を思ひて泣きいられて、初瀬の御寺にこの妻詣でにけり。この少將は、法師になりて、蓑一つを打ち著て、世間世界を行ひありきて、初瀬の御寺に行ふ程になむありける。ある局ちか

いなやき云
云一雉子
雁、鴨の三

物を隠して
よみ込みた
り

深草帝一仁
明天皇

良少將一良
岑宗良

時まうす音
中にて

近衛の官人
夜行して時
を奏する聲

れぞ過ぎに
ける一庭に

手の刻を兼
ぬ

す」とて、それに雉、鴈、鴨を加へておこす。他國に、いたづらに見えける物どもなりけり。さりける時に、女かくいひやりける。

いなやきじ人にならせるかり衣わが身にふればうきかもぞつく

●深草帝とまうしける御時、良少將といふ人いみじき時にてありけり。いと好色に

なむありける。忍びて時々あひける女、同じ内裏にありけり。今宵必ず逢はむと契りたる夜ありけり。女いたう化粧して待つに、音もせず、目をさまして、夜や更けぬらむと思ふ程に、時まうす音のしければ、聞くに、丑三と申しけるを聞きて、男の許にふといひ遣りける。

人心うしみつ今はたのまじよ

といひやりたりけるに、驚きて、

夢に見ゆやとねぞ過ぎにける

とぞつけて遣りける。暫と思ひてうち休みける程に、寢過ぎたるになむありける。かく

とて遣せたり。「弱くなりたり」とて、いといたく泣きさわぎて、返事などもせむとする程に、死にけりと聞きて、いとみじがりけり。死なむとする事、今々となりて詠みたりける。

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを
と詠みてなむ絶えはてにける。

○在中將物見に出でて、女のよしある車のもとに立ちぬ。下簾の間より、この女の顔いとよく見てけり。物など云ひかはしけり。此も彼もかへりて、明日に詠みて遣りける。
見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日や詠め暮さむ
とあれば、女かへし。

見もみずも誰と知りてか戀ひらるる覺束なみの今日のながめや
とぞいへりける。これらは物語にて、世にある事どもなり。

○男、女の衣を借り著て、今の妻の許いきて更に見えず。「この衣を皆著破りて返しおこ

物語にて―
世間に傳は
る話説
更に見えず
―一向訪ひ
來す

○在中將に、后きさいのみや宮より菊きく召よしければ、奉りけるついでに、

植うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

と書かいつけて奉りける。

○在中將の許もとに、人の飾かざり粽ちまきをおこせたるかへしに、かく云ひやりける。

あやめかり君は沼ぬまにぞ感まじひけるわれは野に出でてかるぞわびしき

とて、雉き子こをなむやりける。

○水みづ尾おの帝のの御時、左大辨さだいべんの女むすめ、辨御息所べんのみやすんじころとていきますがりけるを、帝御髪みみげおろし給ひ

て後に、一人ひとりいますがりけるを、在中將忍びて通かよひけり。中將、病いと重おもくして煩わづらひけ

るを、本妻もとつまどももあり、これはいと忍びてある事なれば、え往いきもとぶらひ給はず、忍

び忍びになむ訪まをひける事日々ごとにありけり。さるに訪まをはぬ日なむありける。病もいとおも

りて、その日ひになりなりにけり。中將の許より、

つれづれといとど心のわびしきに今日は訪まをはすてくらしてむとや

飾粽一色々の糸いとして飾れる粽、粽は五月五日の食品
水尾帝一清
和天皇

の意に喩ふ
二條の後の
宮―藤原高
子清和帝の
皇后
ひじきもの
―鹿尾菜、
引數物
大原野―乙
訓郡にあり
藤氏の氏神
の社
かづけ―下
賜
忘草―萱草

思ひあらば葎ひぐらの宿やせに寝ねもしなむひじきものには袖をしつつも

となむ宣のたまへりける。返しを人わたなむ忘れわすれにける。さて后宮きさいのみや、東宮とうぐうの女御にようごと聞きえて、大原野おほはらのに

詣まうで給たまひけり。御供かんだちめに上達部てんじやうぶ、殿上人てんじやうじん、いと多く仕つかうまつりけり。在中將ちゆうしやうも仕つかうまつれ

り。御車みぐるまのあたり、生暗なまくらき折をりに立たてりけり。御社みやしろにて、大方おほしの人々たぐひ祿賜ろくたまはりて後のちなりけ

り。御車みぐるまの後のちより奉たれる、御單衣みせへの御衣おんををかづけさせ給たまへりけり。在中將ちゆうしやう賜たまはる儘ままに、

大原やをしほの山も今日こそは神代かみよのこともおもひ出いづらめ

と忍しのびやかにいひけり。昔むかしをおほし出いでて、をかしとおほしけり。

○また在中將ちゆうしやう内裏うちにさぶらふに、御息所みやすんじやうの御みかたより、忘草わすれぐさをなむ、「これは何なにとかいふ」

とて賜たまへりければ、中將ちゆうしやう、

忘草わすれぐさおふる野邊のべとは見るらめどこはしのぶなり後のちもたのまむ

となむありける。おなじ草くさをしのぶ草くさ、わすれ草わすれぐさといへば、それによりてなむ詠よみたり

ける。

秋萩をいろどる風の吹きぬれば人のこころもうたがはれける

とありければ、かへし、

秋の野をいろどる風は吹きぬともこころは枯じ草葉ならねば

となむいへりける。かくてすまずなりて後、中將の許より、衣をなむしに遣せたりける。「それに洗濯などする人なくて、いとわびしくなむある。なほ必ずして給へ」となむありければ、内侍、「御心もてある事にこそあなれ。」

大幣となりぬる人のかなしきはよるせともなく鹿ぞなくなる」

となむ云ひ遣りたりける。中將、

流るとも何とか見みむ手に取りてひきけむ人ぞ幣と知るらむ

となむいひける。

○在中將、二條后宮、まだ帝にも仕うまつり給はで、平人におはしましけるよに、よ

ばひ奉りける時、鹿尾菜といふ物おこせて、かくなむ、

御心もて云云―御心がらにて末とぐる女のなきなり
大幣―櫛に木綿つけたるものにて被する時人の取るものなれば引く事あまた

我方―前妻
西こそ―前妻、西の間
にあり
しか―然鹿
兩意

染殿内侍―
西三條右大
臣良相の女
能有大臣―
文徳天皇の
皇子の源姓
を賜り臣下
となれる人
あひ見で―
逢藍の兩意
在中將―業
平

と答へければ、「この鹿の鳴くは聞き給ふや」といひければ、「さ聞き侍り」と答へけり。男、「さてそれをいかか聞き給ふ」と云ひければ、女ふといひける。

我もしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け

と詠みたりければ、限なくめでて、この今の妻をば送りて、もとのごとなむ棲みわたりける。

○染殿の内侍といふいますがりけり。それを能有大臣と申しけるなむ、時々すみ給ひける。物をよくし給ひければ、御衣どもをなむあづけさせ給ひけるに、綾どもを多く遣はしたりければ、「雲鳥の紋の綾をや染むべき」と聞えたりしを、ともかくも宣はせねば、「得なむ仕うまつらぬ。さだめ承はらむ」と申し奉りければ、大臣御返事に、
雲鳥のあやの色をもおもほえずひとをあひ見で年の經ぬれば

となむ宣へりける。

○同じ内侍に、在中將すみける時、中將の許によみてやりける。



馬槽—馬の糧を入るゝ

器

きんぢ—な
んぢ

かきふるひ

—かきさら

つて

しかなから

—そつくり

あからめも

せで—わき

めも振らず

猶もあらず

—そのまゝ

本の住所に
もおかず

ける。それをこの男の従者、眞楨といひける童を使ひけるして、この槽をさへ取りに遣せたり。この童に女の云ひける、「きんぢも今は此處に見えじかし」などいひければ、「などてか候はさらむ。ぬしおはせずとも候ひなむ」など云ひ立てり。女「ぬしに消息聞えば申してむや。文は世に見給はじ。只詞にて申せよ」といひければ、「いとよく申し候はむ」と云ひければ、かくいひける。

「船もいぬまかぢも見えじ今日よりはうき世の中をいかで渡らむ

と申せ」と云ひければ、男にいひければ、物かきふるひ往にし男なむ、しかなから運び返して、もとの如くあからめもせで添ひ居にける。

○大和國に男女ありけり。年月かぎりなく思ひて棲み渡りけるを、いかどしけむ女を得てけり。猶もあらずこの家に率て來て、壁を隔てて棲みて、我が方には更に寄りこず。いと憂しと思へど、更にいひも嫉まず、秋の夜の永きに、目を覺して聞けば、鹿なむ鳴きける。物もいはで聞きけり。壁を隔てたる男「聞き給ふや、西こそ」と云ひければ、「何事

すなる。見せ奉らむ」と云ひければ、限なく喜びて負はれにけり。高き山の麓に棲みければ、その山にはるく入りて、高き山の嶺の下り來べくもあらぬに、置きて逃けて來ぬ。「やゝ」といへど、答もせで家に來て思ひ居るに、いひ腹立てけるをり、腹立ちてかくしつれど、年比親の如く養ひつゝあひ添ひにければ、いと悲しく覺えけり。この山のかみより、月もいと限なく明くて出でたるを眺めて、夜一夜寢もねられず悲しくおほえければ、かく詠みたりける。

我がこころなぐさめかねつさらしなや姨捨山に照る月を見て

と詠みてなむ、またいきて迎へ持て來にける。それより後なむ、姨捨山といひける。慰めがたしとは、これが由になむありける。

○下野國しもつけのくにに男女をとこをんな棲みわたりけり。年比としごひすみける程に、男妻おとめをまうけて、心變りかははてよ、この家にありける物どもを、今の妻のかりかき拂ひ持て運びいく。心憂しと思へど猶なほさせて見けり。塵ちりばかりの物も残さず皆持ていぬ。只残りたるものは、馬槽うまばらのみなむあり

がり許に
させて一爲
させて

山の井の—
山間の清水
の浅く湛ふ
るものなれ
ば浅くの序
とす

さがなく—
不良

ふたへ—腰
の屈み折れ
たるさま
所狭がり—
邪魔物にす
捨てたうび
よ—捨て給
へ

れば、いと恐しけなりけるを、いと恥かしと思ひけり。さて詠みたりける。

安積山かけさへ見ゆる山の井の浅くは人をおもふものかは

と詠みて、木に書きつけて、庵にきて死にけり。男、物などもとめて持て来て、死にて伏せりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌を見て、歸り来てこれを思ひしに、傍に臥せりて死けり。世の故事になむありける。

○信濃國更級といふ所に男棲みけり。わかき時に親は死にければ、伯母なむ親の如くに、若くよりあひ添ひてあるに、この妻の心いと心憂き事多くて、この姑の老い屈まりて居たるを常に憎みつゝ、男にもこの伯母の御心のさがなく悪しき事を云ひ聞かせければ、昔の如くにもあらず、疎なる事おほく、この伯母のためになり行きけり。この伯母いといたう老いて、ふたへにてゐたり。これを猶この嫁所狭がりて、今迄死なぬ事と思ひて、よからぬ事をいひつゝ「もていまして、深き山に捨てたうびよ」とのみ責めければ、責められ侘びて、さしてむと思ふなり。月のいと明き夜、「をうなどもいざ給へ、寺に尊き業

と詠みて死にけり。いとあさましうてなむ、男いだきもちて泣きける。

内舍人―公
卿の子の元
服以前殿上
の事を習は
ん爲に奉仕
する職
ゆくりなく
―不意に

ありし―元
の

○昔、大納言の女、いと美しうて持ち給ひたりけるを、帝に奉らむとてかしづき給ひけるを、殿に仕うまつりける内舍人にてありける人、いかでか見けむ、此女を見てけり。容貌いと美しけなるを見て、萬の事おほえず心にかよりて、夜晝いとわびしく病になりておほえければ、「一切に聞えさすべき事なむある」と云ひ渡りければ、「あやし、何事ぞ」といひて出でたりけるを、さる心設して、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乗せて、陸奥國へ、夜ともいはす晝ともいはす逃けて往にけり。安積郡安積山といふ所に庵を造りてこの女をすゑて、里に出でつゝ、物など求めて來つゝくはせて、年月を経てありへけり。この男いぬれば、たゞ一人物も食はで山の中に居たれば、かぎりなく侘しかりけり。かかる程に孕みにけり。この男ものもとめに出でにけるまよに、三四日來ざりければ、待ち侘びて立ち出でて、山の井にいきて影を見れば、我がありしかたるにもあらず、怪しきやうになりけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知らでありけるに、俄に見



もと一上の

句

坊一東公に

る。

皆人のその香にめづるふぢばかま君がみためと手折りつるけふ

帝、御かへし、

折る人のこのころにかなふ藤ばかまうべ色ことにほひたりけり

○大和國なりける人の女、いと清らにてありけるを、京より來たりける男の、かいまみて見けるに、いとをかしけなりければ、偷みてかき抱きて、馬にうち乗せて逃けて往にけり、いとあさましようおそろしう思ひけり。日暮れて立田山にやどりぬ、草の中に泥障を解き敷きて臥せり。女恐しと思ふこと限なし。佗しと思ひて、男のものいへど、答もせで泣きければ、男、

誰が御祓のふつけ鳥かからころも立田の山にをりはへて鳴く

女、かへし、

立田川岩根をさして行く水のゆくへも知らぬわがごとやなく

誰が御祓一
ゆふ付鳥の
枕詞、鳥を
御祓の料に
神社に奉る
事あればな
り

つりー御鷹
の役にて奉
仕せし
そらしー逃
がし

怠々しー等
閑なり

いはでおも
ふぞ云々
古今六帖に
「心には下
行く水のわ
きかへりい
はでおもふ
ぞいふにま
される」

覓もむるに更にえ見出いでず。山々に人をやりつゝ覓もめさすれど更になし。自らみづかも深き山に
入りて、惑まどひありき給へどかひもなし。この事を奏そうせて暫しばしもあるべけれど、二日三日に
あけず御覽ごらんせぬ日なし。いかゞせむとて内裏うちに参りて、御鷹おんたかの失せたる由を奏したまふ
時に、帝ものも宣はせず、聞きこし召しつけぬにやあらむ、とてまた奏し給ふに、面おもてをの
みまもらせ給ひて、物も宣はず、怠々たいくしと思おぼしたるなるけり。と我にもあらぬ心地して、
畏かしこまりていますがりて、「この御鷹おんたかの覓もむるに侍らぬこと、いかさまにかし侍らむ。など
か仰事おほせごともし給はぬ」と奏そうし給ふ時に、帝みかど、
いはで思ふぞいふにまされる

と宣ひけり。かくのみ宣はせて、ことごとくも宣はざりけり。御心にいといふかひなく、
惜しく思さるゝになむありける。これをなむ世の中の人、もとをばとかくつけたる。元もと

○平城帝位ならのみかどにおはしましける時、嵯峨帝さかのみかどの坊はうにおはしまして、詠よみてたてまつれ給ひけ

の御用を勤めしむる者

事とも思さず一此の女

の事を何にも思し召さ

ずはや御心附なかりし

なり
猿澤の池一奈良

れくたれ髪一寝亂れ髪

玉藻に比してありし面

影を慕ふ御手鷹一帝

の御手づから拵ふさせ

給ふ鷹預り仕うま

とよめる時に、帝みかど

猿澤の池もつらしなわぎも子が玉藻たまもかづかばみづぞひなまし

とよみ給ひけり。さてこの池に墓はかせさせ給ひてなむ、歸かへらせおはしましけるとなむ。

○同じ帝、立田川の紅葉もみぢいとおもしろきを御覽ごらんじける日、人丸ひさまら、

立田川もみち葉ながるかみなびの三室みむろの山にしくれふるらし

みかど、

立田川もみちみだれてながるめり渡らばにしき中なかつや絶たえなむ

とぞあそばしたりけり。

○同じ帝狩かりいとかしこく好み給ひけり。陸奥國むものくに岩手郡いはでのこほりより奉おんたかれる御鷹おんたか世になくかしこか

りければ、二なう覺おぼして御手鷹おんでたかにし給ひけり。名をば岩手いはでとなむつけ給へりける。それ

を、かの道に心ありて、預り仕あつかひうまつり給ひける大納言おほなごんに預あづかり給へりける。夜晝よるじゆこれをあ

づかりて、取とり養かひ給ふ程に、いかがし給ひけむ、そらし給ひてけり。心肝こころももを惑まどはして

かいまめば
—垣間見ば
偷に窺ひ見
ること

面櫛—髪を
上げて額に
櫛さすこと
賤しき體

平城の帝—
奈良に都し
給ひし頃の
帝にて誰と
も定かなら
ず

采女—少領
己上の女の
形容端正な
るものを奉
らしめ陪膳
その他御側

つよましくて立てりけり。さてかいまめば、我にはよくて見えしかど、いと怪しきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけて居り。手づから飯盛り居りけり。いとみじと思ひて、來にけるまよに往かずなりにけり。この男は王なりけり。

●昔、平城帝につかうまつる采女ありけり。顔容いみじう清らにて、人々よばひ、殿上人などもよばひけれど、逢はざりけり。その逢はぬ心は、帝を限なくめでたきものに

なむ思ひ奉りける。帝召してけり。さて後又も召さざりければかぎりなく心憂し、と思ひけり。夜晝心にかよりて覺え給ひつよ、戀しく佗しう覺え給ひけり。帝は召ししかど、

事とおほさず。さすがに常には見え奉る。なほ世に經まじき心地しければ、夜密に出でて、猿澤池に身を投けてけり。かく投げつとも、帝は得しろし召さざりけるを、事の

ついでありて、人の奏しければ聞し召してけり。いといたう哀がり給ひて、池の邊におほ行幸したまひて、人々に歌詠ませ給ふ。柿本人丸、

わきも子ながねくたれ髪を猿澤の池のたまもと見るぞかなしき

前栽一庭前
の植込

しらなみト
白波、盜賊

たぎり一沸
騰し
ふてつー捨
てつ

つれなきー
無情なる

と見えて、前栽の中に隠れて、男や來ると見れば、端に出で居て、月のいとみじうおもしろきに、頭かい梳りなどして居り。夜更くるまで寢ず、いといたうち歎きて眺めければ、人待つなめり、と見るに、使ふ人の前なりけるに云ひける。

風吹けば沖つしらなみたつた山夜半にや君がひとり越のらむ

と詠みければ、我がうへを思ふなりけり。と思ふに、いと悲しうなりぬ。この今の妻の家は、立田山越えてゆく道になむありける。かくて猶見居りければ、この女うち泣きて臥して、鏡に水を入れて、胸になむすゑたりける。あやし、如何にするにかあらむとてなほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。又水を入れる。見るにいと悲しくて、走り出でて、「いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞ」と云ひて、かきいだきてなむねにける。かくて外へも更に往かて、つと居にけり。かくて月日多く經て思ひやるやう、つれなき顔なれど、女のおもふ事いといみじき事なりけるを、かく往かぬを、いかに思ふらむ、と思ひ出でて、ありし女の許往きたりけり。久しくいかざりつれば、

車に著たりける一車中にて著居たる

あしからじ云々拾遺集に見えたる返歌、後人の加筆歟いとわろくなり一家社の贅しくなりしなり

ことわざ一
他の男

あけて見るに、悲しきこと物に似ず、よよとぞ泣きける。さて返しは如何したりけむ、知らず。車に著たりける衣脱ぎて、包みて文など書き具してやりける。さてなむかへりける。後はいかどなりにけむ、知らず。

あしからじとてこそ人の別れけめ何かなにはの浦はすみうき

○昔、大和國葛城郡に住む男女ありけり。この女、顔容貌いと清らなり。年比思ひか

はしてすむに、この女、いとわろくなりければ、思ひ煩ひて、限りなく思ひながら妻を

まうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。殊に思はねど、往けばいみ

じういたはり、身の装束いと清らにせさせけり。かくにぎはよしき所に慣ひて來れば、

この女いとわろけにて居て、かく外にありけど、更に妬けにも見えすなどあれば、いと

哀と思ひけり。心地にも限りなく妬く心憂く思ふを、忍ぶるになむありける。留まりな

むと思ふ夜も、猶「往ね」といひければ、わがかくありきするを、妬まで他事するにやあ

らむ、さるわざせずば恨むる事もありなむなど、心のうちに思ひけり。さて出でて往く

すゞろーむ
やみ

下簾ー車の
簾の内に懸
くる帷

まらればー
見つむれば
いらなくー
ひどく

打ちひかせ
ー打擲し引
きすり

幼き者ー初
心者
あしかりー
蘆刈、悪し
かり

となむ思ひける。かくて「この蘆あしの男に物など食くはせよ、物いと多く蘆あしの價あたいに取らせよ」といひければ、「すゞろなるものに、何か物多く賜はむ」など、ある人々いひければ、強しひてもえいひにくくて、いかで物を取らせむ、と思ふ間に、下簾したすだれの間まのあきたるより、この男まもれば我が妻めに似にたり。怪あやしさに、心ををさめて見るに、顔かほも聲こゑもそれなりけり、と思ふに、思ひあはせて、我がさまのいといらなくなりけるを思ひはかるに、いとはしたなくて、蘆あしもうち捨すてて走り逃にげにけり。暫しばしと云はせけれど、人の家に逃にげ入りて、蘆あしの後方しりへに屈かまり居をりけり。この車より、「猶この男尋たづね牽ひて來こ」といひければ、供の人手かかを分わかちて覺もめ騒さわげり。人、「そこなる家になむ侍まる」といへば、この男に「かく仰おとよ事ことありて召ますなり。何の打ち引ひかせ給たまふべきにもあらず、物をこそ賜たまはせむとすれ。幼せうき者なり」といふ時に、硯すずりを乞こひて文ふみを書く。それに、

君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞ住すみうき

とかきて、封ふみじて、「これを御車みぐるまに奉たれ」といひければ、怪あやししとおもひて持もて來きて奉たる。



ば、「其許にはな物し給ひそ。おのれ獨罷らむ」といひて、出で立ちていにけり。難波に
被して歸りなむとする時に、「この邊に見るべき事なむある」とて、「今少しとやれかくや
れ」といひつよ、この車を遣らせつよ、家のありしわたりを見るに、屋もなし人もなし
何方へいにけむと悲しう思ひけり。かよる心ばへにてふりはへ來たれど、我が睦しき從
者もなし。かよれば尋ねさすべきかたもなし。いと哀なれば、車を立てよ眺むるに、供

促してむ—
急がせ立て
ん

の人は「日暮れぬべし、とく御車促してむ」といふに「暫」といふ程に、蘆荷ひたる男
の、乞兒のやうなる姿なる、この車の前よりいきけり。これが顔を見るに、その人とい
ふべくもあらず、いみじきさまなれど、我が男に似たり。これを見てよく見まほしさに、
「この蘆持ちたる男呼ばせよ、蘆買はむ」といはせけり。さりければ、用なきもの買ひ
給ふとは思ひけれど、主の宜ふことなれば、呼びて買はず、「車のもと近く荷ひ寄せさせ
よ、見む」など云ひて、この男をよく見るにそれなりけり。いと哀に、「かよる物商ひて
世に經る人、いかならむ」と云ひて泣きければ、供の人は、なほおほかたの世を哀がる

さすらへー
流浪す
宮たてたり
—宮仕に出
てたりの意
歎
心ともえや
らず—態々
の使は遣り
得ず

うたて—
本なし
我が男—後
の夫
念じつ—
堪へ忍びて

となむ獨語ちける。さてとかう女さすらへて、或人のやごとなき所に宮たてたり。さて
宮仕みやづかへしありく程に、装束さうぞくきよけにし、むつかしき事などもなくてありければ、いと清け
に顔容かほかたち貌もなりにけり。かゝれど、かの津の國を片時かたときも忘れず、いと哀あはれと思ひやりけり。
便たよりの人に文ふみつけて遣りたりければ、「さいふ人も聞えず」など、いとはかなく云ひつゝ來
けり。我が陸むつましう知れる人もなかりければ、心ともえやらず、いと覺束おぼつかなく如何いかであらむ
とのみ思ひやりけり。かゝる程に、この宮仕へする所の北方きたのかたうせ給ひて、此彼こゝかれある人を
召めし使つかひ給ひなどする中に、この人を思ひ給ひけり。思ひつきて妻めになりにつけり。思ふ
事もなくめでたけにてゐるたるに、只人ただ知れず思ふ事一つなむありける。いかにしてあら
む、悪あしうてやあらむ善よくてやあらむ、我が在所ありどころもえ知らざらむ。人を遣りてたづねさ
せむとすれど、うたて、我が男聞きてうたてあるさまにもこそあれ、と念ねんじつゝあり渡
るに、猶いと哀に覺ゆれば、男に云ひけるやう「津つの國くにといふ所のいとをかしけなるに、
いかで鄭波なにはに祓はらしがてら罷まからむ」と云ひければ、「いとよき事、我も諸共もろごもに」といひけれ

わたらひ一
活計

いとほしき
一氣の毒な
り

さしはへ一
目ざして

そよ一風聲
に然りの意
を兼ね

と下種にはあらざりけれど、年比わたらひなどもいとわろくなりて、家も毀れ、使ふ人なども徳ある所に行きつよ、只二人棲み渡る程に、さすがに下種にもあらねば、人に雇はれ使はれもせず、いと佗しかりけるまよに、思ひわびて二人云ひけるやう、「猶いとかう佗しうてはえあらじ」。男は「かくはかなくしていますかめるを見捨てては、いづちもいづちもえ行くまじ」。女も「男を捨てては、何方かいかむ」とのみ云ひ渡りけるを、男「已はとともかくても經なむ、女のかく若き程に、かくてあるなむいといとほしき。京に上りて宮仕をもせよ。よろしきやうにもならば、我をもとぶらへ。已も人の如もならば、必ず尋ねとぶらはむ」など、泣くくいひ契りて、便の人にいひつきて、女は京に來にけり。さしはへ何處ともなくて來れば、このつきて來し人の許にゐて、いと哀と思ひやりけり。前に荻薄いと多かる所になむありける。風など吹きけるに、かの津の國を思ひやりて、いかであらむなど悲しくてよみける。

ひとりしていかにせましと佗びつればそよとも前の荻ぞこたふる

まみれ―濡
れ汚れ
わびにて―
困じて

御徳に―御
恩恵により
むくつけし
―恐し

て、弓、胡籛、太刀などを入れてぞ埋みける。今一人は、おろかなる親にやありけむ、
さもせずぞありける。かの塚の名をば、處女塚とぞいひける。ある旅人、この塚のもと
に宿りたりけるに、人のいさかひする音のしければ、怪しとは思ひて見せけれど、「さる事
もなし」といひければ、怪しと思うく、眠りたるに、血にまみれたる男、前に來て、跪き
て、「われ敵にせめられてわびにて侍り。御太刀暫貸し給はらむ。妬き者の報し侍らむ」
といふに、恐しと思へど貸して侍り。覺めて夢にやあらむと思へど、太刀は誠にとらせ
て遣りてけり。とばかり聞けば、いみじう前の如諍ふなり。暫ありて初の男來て、「いみ
じう喜びて、御徳に年比妬き者うち殺し侍りぬ。今よりは長き御守護となり侍るべき」と
て、この事の初より語る。いとむくつけしと思へど、珍しき事なれば、問ひ聞く程に、夜
も明けにければ人もなし。朝に見れば、塚のもとに血などなむ流れたりける。太刀にも
血つきてなむありける。いとうとましく覺ゆる事なれど、人の云ひけるまよなり。

○津の國の難波の邊に、家して住む人ありけり。あひ知りて年比ありけり。女も男も、い

一春澄善羅の女治子、
絲所は采女
町の北にあ
り縫殿の別
所

かたみ一羅
み、籠

女一女にな
りての意

みぎほ一身
江

かぎりて一
幕の周圍を
結びめぐら
して

勝ちまけもなくてやはてむ君により思ひくらぶの山は越のとも
生きたりし折の女になりて、

逢ふ事のかたみに植うるなよ竹のたちわづらふと聞くぞ悲しき
また、人、

身をなけて逢はむと人に契らねどうき身は水にかけをならべつ
又、一人の男になりて、

同じ江に住むはうれしきかなれどなど我とのみ契らざりけむ
かへし、女、

うかりける我が水底をおほ方はかかるちぎりのなからましかば
又、一人の男になりて、

われとのみ契らずながら同じ江にすむは嬉しきみぎはとぞ思ふ
さてこの男は、吳竹の節ながきを切りて、かぎりて、狩衣、袴、烏帽子、帯などを入れ

故後の宮—
温子

伊勢御息所
の下、一本

「男の心に
て」の五字
あり

女一の宮—
拘子内親王
寛平第五皇

女、母温子

兵衛の命婦
—藤原高經
の女

つかの間—
暫時の間

糸所の別當

此處にもて來てなむ遂に埋みてける。されば女の墓をば中にて、左右になむ男の塚ども
今もあなる。かよる事どもの昔ありけるを、繪にみな書きて、故后宮に人の奉りけ

れば、これがうへを、みな人々、この人に代りて詠みける。

伊勢の御息所、男の心にて、

影とのみ水のしたにて逢ひ見れば魂なき骸はかひなかりけり

女になり給ひて、女一の宮、

かぎりなく深く沈める我が魂は浮きたる人に見えむものかは

また、宮、

何處にか魂を求めむわたつ海のここかしことも思ほえなくに

兵衛命婦、

束の間ももろ共にとぞ契りける逢ふとは人に見えぬものから

糸所の別當

いたづき—
勞苦し

當時—其の
時

き所よりいまする人あり。或は此處ながらそのいたづき限なし。此も彼も、いとほしきわざなり」といふ時に、いとかしこく喜びあへり。「申さむと思ふ給ふるやうは、この川に浮きて侍る水鳥を射給へ。それを射當て給へらむ人に奉らむ」といふ時に、「いとよき事なり」といひて射る程に、一人は頭の方を射つ。今一人は尾の方を射つ。そのかみ何れといふべくもあらぬに、女思ひわづらひて、

住みわびぬわが身なけてむ津の國の生田の川は名のみなりけり

と詠みて、この平張は川に臨みてしたりければ、つぶりと落ち入りぬ。親あわて騒ぎのしる程に、このよばふ男二人、やがて同じ所に落ち入りぬ。一人は足をとらへ、今一人は手をとらへて死にけり。そのかみ親いみじく騒ぎて、取り上げて泣きのよしりては

ふりす。男どもの親も來にけり。この女の塚の傍に、また塚ども作りて掘り埋む。時

に津の國の男の親いふやう、「同じ國の男をこそ同じ所にはせめ。他國の人のいかでかこの國の土をは犯すべき」といひて妨ぐる時に、和泉の方の親、和泉國の土を船に運びて、

はふり—葬

住む男、姓は菟原になむありける。今一人は、和泉國の人になむありける。姓は血沼と

なむいひける。かくてその男ども、年齢、顔容貌、人の程、たゞ同じばかりになむあり

ける。志の優らむにこそはあはめ、と思ふに、志の程只同じやうなり。暮るれば諸共に

來あひぬ。物遣すれば、只同じやうにおこす。いづれ優れりといふべくもあらず。女思

ひ煩ひぬ。この人の志の疎ならば、いづれにも逢ふまじけれど、此も彼も月日を経て、

家の門に立ちて、萬に志を見えければ、しわびぬ。此よりも彼よりも、同じやうに遣する

物ども、取りも入れねど、いろくりに持ちて立てり。親ありて、「かく見苦しく年月を經

て、人のなけきを徒に負ふもいとほし。ひとりくりに逢ひなば、今一人が思ひは絶え

なむ」といふに、女「こよにもさ思ふに、人の志の同じやうなるになむ思ひ煩ひぬる。

さらばいかどすべき」といふに、そのかみ生田川のつらに、平張をうちて居にけり。か

かれば、そのよばひ人どもを呼びに遣りて、親のいふやう、「誰も御志の同じやうなれば、

このをさなきものなむ思ひ煩ひにて侍る。今日いかにまれ、この事を定めてむ。或は遠

しわびぬ
處置に苦め
り

いとほし
氣の毒なり

つら一畔

平帳一日被

ひの天幕

をさなき者

一己の娘



浅みどりか
ひある一鳥
飼を隠しよ
めり
しほたれ一
深く感歎し
上下一上藤
も下藤も
南院の七郎
君一是忠親
王の七男源
清平の事歎
侘し一辛し

「玉淵はいと勞ありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題を、よく仕うまつりたらむにしたがひて、實の子とは思ほさむ」と仰せ給ひけり。承りて、すなはち、

浅みどりかひある春に逢ひぬれば霞ならねど立ちのほりけり

と詠む時に、帝のよしり哀がり給ひて、御しほたれ給ふ。人々もよく酔ひたる程にて、
醉泣いと二なくす。帝、御袿一襲、袴たまふ。「ありとある上達部、皇子達、四位五位、
これに物ぬぎて取らせざらむものは、座より立ちね」と宣ひければ、片端より上下みな
かづけたれば、かづき餘りて、二間ばかり積みてぞ置きたりける。かくて歸り給ふとて、
南院の七郎君といふ人ありけり、それなむこの遊女の住む邊に、家造りて住むと聞しめ
して、それになむ宣ひあづけらる。「かれが申さむ事院に奏せよ。院より賜はせむものも、
かの七郎君許遣さん。すべてかれに侘しき目な見せそ」と仰せられければ、常になむ訪
ひかへりみける。

○昔、津の國に住む女ありけり。それをよばふ男、二人なむありける。一人は、その國に

川尻―攝津
淀川尻
白―大江玉
淵の女
すなはち―
即時に
あはとこそ
見れ―彼は
と遙に見る
かづけ物―
纏頭
鳥飼の院―
攝津

○亭子の帝、河尻におはしましにけり。遊女に白といふものありけり。召しに遣したりければ、参りてさぶらふ。上達部、殿上人、皇子達の數多候ひ給ひければ、下に遠くさぶらふ。「かう遙に候ふよし、歌仕うまつれ」と仰せられければ、即ち詠みて奉りける。

濱千鳥飛び行くかぎりありければ雲立つ山をあはとこそ見れ
と詠みたりければ、いとかしこくめで給ひて、かづけ物賜ふ。

いのちだに心になふものならば何かわかれの悲しからまじ
といふ歌も、この白が詠みたる歌なりけり。

○亭子の帝、鳥飼の院におはしましにけり。例のごと御遊あり。この邊の遊女ども數多参りて候ふ中に、「聲おもしろく、よしあるものは侍りや」と問はせ給ふに、遊女ばらの申すやう、「大江玉淵が女といふものなむ、珍らしう参りて侍る」と申しければ、見させ給ふに、さまかたちも清けなりければ、あはれがり給ひて、うへに召し上げ給ふ。「そもそも實か」など問はせ給ふに、鳥飼といふ題を、人々に詠ませ給ひにけり。仰せ給ふやう、

あり
けにや一故
にや

小總驛一相
模

泣きつめ一
泣きとほし

みのわびし
さ一身の侘
しさ、箕輪

かりそめ一
暫時

ゆきかひ一
往復路、甲

斐路

○この在次君、在中將の東に往きたるけにやあらむ、この子どもも、他國がよひをなむ

時々しける。心あるものにて、他國の哀に心細き所にては、歌詠みて書きつけなどなむ

しける。小總驛といふ所は、海邊になむありける。それに詠みて書きつけたりける。

わたつ海と人を見るらむ逢ふことの涙をふさに泣きつめつれば

又箕輪の里といふ驛にて、

いつはとは別かねど絶えて秋の夜ぞ身の侘しさは知り勝りける

と詠みて書きつけたりけり。かくて他國ありきくして、甲斐國に到りて住みける程に、病

して死ぬとて、詠みたりける。

かりそめのゆきかひ路とぞ思ひしを今はかぎりの門出なりけり

とよみてなむ死にける。この在次君の一所に具して知りたりける人、三河國より上ると

て、この驛どもに宿りて、この歌どもを見て、手は見知りたりければ、見つけていと哀

と思ひけり。

べみーべき
により

在中將一在
原業平
在次君一業
平の次男滋
春

召人一妻
すむ一過

この男の兄
弟一在次君
の兄弟には
棟梁師尙等

時は返事し給へ」と、親も繼母もいひければ、責められて、かくなむいひ遣りける。

思へどもかひなかるべみ忍ぶればつれなきともや人の見るらむ

とばかり云ひやりて、物もいはさりけり。かく云ひける心ばへは、親など男あはせむといひけれど、一生に男せでやみなむといふ事を、世と共にいひける。さいひけるも著く、男もせで二十九にてなむ、亡せ給ひにける。

○昔在中將の御息子、在次君といふが妻なる人なむありける。女は山陰中約言の御姪にて、五條の御となむ云ひける。かの在次君の妹の、伊勢守の妻にて、いますがりけるが許に往きて、守の召人にてありけるを、この妻の兄の在次君は、忍びてすむになむありける。我のみと思ふに、この男の兄弟なむ、又あひたる氣色なりける。さりければ女の許に

忘れなむと思ふ心の悲しさはうきも憂からぬものにぞありける
となむ詠みたりける。今は皆ふることになりたる事なり。

おほい子―
長姉
らうくし
― 勞々の字
音、巧者な
り
おとうと―
妹
よしづきて
をかしく―
人がらの由
めき趣あり
て

といへりければ、男も本妻も、いといたう哀がり泣きけり。漕ぎ出でて往ぬれば、え返事もせず、車は船の行くを見て得往かず、船に乗りたる人は車を見るとて、面をさし出でて漕ぎ行けば、遠くなるまゝに、顔はいと小くなるまで見遣せければ、いと悲しかりけり。

○故御息所の御姉、おほい子に當り給ひけるなむ、いとらうくしく、歌よみ給ふ事も、おとうとたち、御息所よりも勝りてなむいますがりけり。若き時に、女親はうせ給ひにけり。繼母の手にいますがりければ、心に物の叶はぬ時もありけり。さて詠み給ひける。ありはてぬ命まつ間の程ばかり憂きことしけく歎かずもがな

となむよみ給ひける。梅の花を折りて、また、

かかる香の秋もかはらず匂ひせば春戀してふながめせましや

とよみ給へりける。いとよしづきて、をかしくいますがりければ、よばふ人もいと多かりけれど、返事もせざりけり。「女といふもの、遂にかくて終て給ふべきにもあらず。時

猶男せじ云
云一女の心
に悔いて再
び密夫に逢
はじと思ふ
也

ありならむ
一居り馴れ

となむいひける。よばふ男もありけり。世中よのなかこよろうし。猶男せじ、などいひけるものなむ、この男をやうく思ひやつきけむ、この男の返事かへりごとなどして遣りて、この本妻もとこのめの許に、文をなむひき結びて遣せたりける。見れば、かく書けり。

身をうしとおもふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむらむ

となむ、こりすまに詠みたりける。かくて心の隔へだてもなく哀あはれなれば、いとあはれと思ふ程

に、男は心かはりにければ、ありしごとともあらねば、かの筑紫に、親兄弟おやからなどありけれ

ば往いきけるを、男も心變りこころかはければ、留とどめでなむやりける。本妻もとこのめなむ諸共もろともにありならひに

ければ、かくていく事をいと悲かなしと思ひける。山崎に諸共に往いきてなむ、船ふねに乗せなどし

ける。男も來たりけり。この後妻前妻うしろなりこなみ、一日一夜萬の事を云いひ語かたひて、翌朝つごめて船ふねに乗りぬ。

今は男、本妻もとこのめは、歸りなむとて車くるまに乗りぬ。これもかれもいと悲しと思ふほどに、船ふねに

乗り給ひぬる人の文をなむ持もてきたる。かくのみなむありける。

ふたり來し道とも見えぬ浪なみの上うへを思ひかけても歸かへすめるかな

かる枕詞なれどもこゝには寢具の事

よしいゑ一
よしうゑを
誤寫せしな
らむとい
ふ、橘良殖
延喜十九年
參議となる
ひとの國が
ちに一地方
官などにて
他國に有り
がちなり

外の便一別
方面よりの
書信

に、

御狩するくりこま山のしかよりもひとり寝る夜ぞわびしかりける

○よしいゑといひける宰相の兄弟、大和掾といひてありけり。それが本妻の許に、筑紫より女を牽て來てするたりけり。本妻も心よく語ひ居たりけり。かくてこの男は、此處彼處ひとの國がちにのみありきければ、二人のみなむるたりける。この筑紫の妻、忍びて男したりけり。それを人のかく云ひければ、詠みたりける。

夜半に出でて月だに見ずば逢ふ事を知らず顔にもいはましものを

となむ。かゝるわざをすれど、本妻いと心よき人なれば、男にもいはでのみなむあり渡りけれども、外の便よりかく男すなり、と聞きて、この男思ひたりけれど、心にも入れで、たゞさるものにて置きたりけり。さてこの男、女他人にも云ふ、と聞きて、「その人と我といづれをか思ふ」と問ひければ、女、

はなすすき君がかたにぞなびくめるおもはぬ山のかぜは吹けども

來ぬ人をまつ葉にふる白雪の消えこそかへれ逢はぬ思ひに

とてなむ、「ゆめこの雪おとすな」と、使にいひてなむ奉りける。

○故兵部卿宮、昇大納言の女にすみ給ひけるを、例の御座所にはあらで、廂に御座敷き

て、大殿籠などして歸り給ひて、程久しうおはしまさざりけり。かくて宜へりける、「かの

廂に敷かれたりしものは、さながらありや、取りたてやし給ひてし」と宜へりければ、

御返事に、

敷きかへすありしながらに草枕塵のみぞゐるはらふひとなみ

とありければ、御返しに、

草まくらちりはらひには唐ころも袂ゆたかにたつを待てかし

とありければ、又、

唐衣たつを待つ間のほどこそは我がしきたへの塵もつもらめ

となむありければ、おはしまして、又「宇治へ狩しになむ往く」と宜ひける。御かへし

ゆめ―決し
て
昇大納言―
河原左大臣
源融の男
大殿籠―御
寢
さながら―
其の儘
人なみ―人
無き故に

しきたへの
―敷傍、床
枕などに

かくれぬ一
隠沼、水草
などに蔽は
れたる沼

水隠に云々
一此男丈短
き故にいへ

り
先帝一醍醐
天皇

承香殿の御
息所一帝の
御母

あくた川一
芥、厭く

隠れ沼の底の下草みがくれて知られぬこひはくるしかりけり
かへし、女、

水隠みかくれにかくるばかりのした草は長からじともおもほゆるかな

この小薬師といひける人は、丈たぢなむいと短みじかかりける。

○先帝の御時に、承香殿の御息所の御曹子みきやうじに、中納言君といふ人候さぶらひけり。それを故

兵部卿宮若男ひやうみきやうのみやわかをこにて、一宮いちのみやと聞えて色好いろこのみ給ひけるころ、承香殿は、いと近き程になむあ

りける。らうあり、をかしき人々あり、と聞き給ひて、物など宣ひかはしけり。さりけ

るころほひ、この中納言君ちうなごんのきみに、忍しのびて寢給ねたまひそめてけり。時々おはしまして後、この宮

をさく、訪ひ給はざりけり。さるころ、女の許もとより奉りける。

人をとくあくた川てふ津つの國くにの名には違たがはぬ君にぞありける

かくて物も食くはで、泣くく病やまひになりて戀こひ奉りける。かの承香殿の前の松に、雪の降

りかよりたりけるを折りて、かくなむ聞え奉りける。



くゆる一ふ
すぶる、悔
ゆる

つれづれ
退屈

故兵部卿宮
一 元良親王

かりにのみ
一 狩に、か
りそめに
しか山一志
賀、鹿

かへしは、上手なればよかりけめど、え聞かねば書かず。

○又男、「日比さわがしくてなむえ参らぬ、かく急ぎ罷りありく中にも、え参り來ぬことをなむ、いかにと限なく思ひ給ふる」とありければ、女、

騒ぐなるうちにも物はおもふなり我がつれづれを何にたとへむとなむありける。

○志賀の山越の道に、岩江といふ所に、故兵部卿宮家をいとをかしう造り給ひて、時々

おはしましけり。いと忍びておはしまして、志賀に詣づる女どもを見給ふ時もありけり。

大方もいとおもしろう、家もいとをかしうなむありける。とし子、志賀に詣でける序に、

この家に来て廻りつゝ見て、哀がりめでなどして書きつけたりける。

かりにのみ來る君待つとふり出でて鳴くしか山は秋ぞかなしき

となむ。

○小薬師久曾といひける人、ある人をよばひて遣せたりける。

大和物語 下之卷

○先帝の御時に、ある御曹子みせうじにきたなけなき童わらはありけり。帝御覽みかみじて、密ひそかに召よしてけり。これを人にも知らせ給はで、時々召しけり。さて宜はせける。

飽あかでのみ經ゆればなるべし逢はぬ夜もあふ夜も人を哀あはれとぞ思ふ

と宜はせけるを、童の心地こころにも、限かぎりなく哀におほえければ、忍しのびあへで、友ともだちに「さなむ宜ひし」と語りければ、この主しゆなる御息所みやすんざころ、聞きて追いひ出で給ひけるものか。いみじう。

○三條右大臣の女むすめ、堤中納言ついでのもうなごんに逢ひはじめ給ひける間は、内藏助うちざうすけにて、内裏うちの殿上てんじやうをなむし給ひける。女は逢はむの心やなかりけむ、心ものかすなむいますがりける。男も宮づかへし給ひければ、え常つねにもいまさざりけるころ、女、

薰物かほもののくゆる心はありしかどひとり絶たえて寢ねられざりけり

ものか、い
みじう一驚
嘆なげし下に余
意いを含めて
書き捨てた
る筆法
三條右大臣
一定方
堤中納言一
兼輔

り纏頭を賜はる時は肩にかけて拜すればなり濃き—紅色の髪を振り覆ひて—顔をかくして

御供おんごもに公忠候きんたごきぶらひけり。それにある御曹子ごそうしより、濃こき袷うちぎひこ一襲かさね著あたる女の、いと清きよけなる出で来て、いみじう泣なきけり。公忠を召して見せ給ひければ、髪かみを振り覆おほひていみじう泣く。「などてなくぞ」といへど、答こたへもせず。帝みかどいみじう怪あやしがり給ひけり。公忠思おもふらむ心のうちは知らねどもなくを見るこそかなしかりけりと詠よめりければ、いと二になくめで給ひけり。

契りし月の
云々―いつ
歸り來むと
約せし月、
天上の月を
も兼れたり
先帝―醍醐
天皇
弓張―漢に
八九日の月
を上弦と爲
し廿三四日
を下弦と爲
す
いれば―
入、射

○これも筑紫なりける女、
秋風のこころやつらき花すすき吹き來る方をまづそむくらむ

○先帝の御時、四月の朔日の日、鶯の鳴かぬを詠ませ給ひける。公忠、

春はただきのふばかりを鶯のかぎれるごとも鳴かぬ今日かな

となむ詠みたりける。

○同じ帝の御時、躬恒を召して、月のいとおもしろき夜、御遊などありて、弓張と

いふは何の意ぞ、そのよし仕うまつれ」と仰せ給ひければ、御階の下に候ひて仕うまつ

りける。

照る月を弓はりとしもいふ事は山邊をさしていればなりけり

縁に大桂かづきて、又、

白雲のこのかたにしもおりるは天つ風こそ吹きて來つらし

○同じ帝、月のおもしろき夜、密に御息所たちの御曹子どもを、見ありかせ給ひけり。

このかた―
此方と此層
とを兼れた

好古
みづはぐむ
―老人の齒
脱して更に
小齒の生ず
ること、水
汲むを懸く

そこ―底、
其許

人をまつ云
云―檜垣歌
集に見えた

と詠みたりければ、あはれがりて、著たりける袖あこめじこかさね一襲脱ぎてなむ遣りける。

○又同じ人、大貳だいにの館たちにて、秋の紅葉を詠ませければ、

鹿しかの音ねはいくらばかりの紅くれなるぞふり出いづるからに山の染むらむ

この檜垣の御、歌なむ詠むといひて、すき者ものども集りて、「詠み難がたかるべき末すゑをつけさせむ」とて、かくいひけり。

わたつ海みの中にぞ立てるさを鹿しかは

とて、末をつけさするに、

秋のやまべやそこに見ゆらむ

とぞつけたりける。

○筑紫なりける女、京に男を遣りてよみける。

人を待つ宿はくらくぞなりにける契ちぎりし月のうちに見えねば

となむいへりける。

く―不慮に
松―松明

かさらぎの

云々―天の

川上の橋、

家持の歌を

本としてよ

めり

たのため給ひ

―約束し

結びどき―

嫁期

檜垣の御―

名高き筑紫

の遊女

勢あり―世

馴れて

野大貳―太

宰大貳小野

男の許より「かのたのため給ひし事、このごろの程になむ思ふ」といへりける返事に、

我が宿のひともとすすきうら若み結びどきにはまだしかりけり

となむ詠みたりける。誠にまだいと小き女になむありける。

○筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いと勢あり、をかしくて世を経けるものにな

むありける。年月かくてあり渡りけるを、純友が騒に遭ひて、家も焼けほろび、物具も

みな捕られはてよ、いといみじうなりにけり。かゝりとも知らで、野大貳追討使にくだ

りたまひて、それが家のありし邊を尋ねて、「檜垣の御と云ひけむ人に、いかで逢はむ。何

處にか住むらむ」と宣へば、「この邊になむ住み侍りし」など、供なる人もいひけり。「あ

はれかゝるさわぎに、いかになりにけむ。尋ねてしがな」と宣ひける程に、頭白き嬪の

水汲めるなむ、前より怪しきやうなる家に入りける。ある人ありて、「これなむ檜垣の御」

と云ひけり。いみじうあはれがり給ひて呼ばすれど、恥ぢて來でかくなむいへりける。

ぬばたまの我が黒髪はしら川のみづはぐむまでなりにけるかな



本院の北の方―時平妻
 帥の大納言―國經、時平の伯父、時平その妻を奪へり
 我が君實云云―我が妻として行末を頼まんと思ふが如何のしり―
 評判高し
 泉の大將―定國
 故左の大臣―時平
 ゆくりもな

春の野にみどりにはへるさねかづら我が君實きみざねとたのむいかにぞ

といへりける。その後左大臣うしろのちのりの北方きたのうへにて、のしり給ひける時、詠みて遣たづせたりける。

ゆくすゑの宿世すくせも知らず我がむかし契ちぎりしことはおもほゆや君

となむいへりける。その返かへし、それより前々まへまへも、歌は多かりけれどえ聞かず。

○泉大將いづみのたいしやう、故左大臣こひだりのちのりに夢まろで給へりけり。ほかにて酒などまゐり、酔よひて夜いたく更たよりけ

て、ゆくりもなくものし給へり。大臣おとど驚おどろき給ひて、「何處いづくにもものし給へる便たよりにかあらむ」

など聞え給ひて、御格子みかくしあけ騒さわぐに、壬生忠岑みぶのたけのみね御供みまけにあり、御階みはしの下もとに松まつともしながら、

ひざまづきて御消息おんせき申す。

「かささぎの渡せる橋の霜の上を夜半よなに踏ふみ分けことさらにこそ

となむ宜よろふ」とまうす。主人あまのぢの大臣おとど、いと哀あはれをかしと思おもひて、その夜一夜ひとよ、御酒おんさけまゐ

り遊び給ひて、大將おとどにものかづけ、忠岑たけのみねも祿賜ろくたまはりなどしけり。

○この忠岑たけのみねが女むすめありと聞きて、或人あるひとなむ得えむといひけるを、いと善よき事なりといひけり。

蔭多く一子
孫繁昌

笛竹の一ひ
とよの序

ことばのふ
き一口笛、
詞のいひな
しの意を兼
ぬ

こちく一胡

竹、此方來

増基君一後
撰の作者増
基法師と同
人歟

はし殿一山
谷にかけし
橋などの如
くに造れる
屋

千千の音はことばのふきか笛竹のこちくの聲も聞え來なくに

○とし子が志賀に詣でたりけるに、増基君といふ法師ありけり。それは比叡にすむ、院の殿上もする法師になむありける。それこのとし子の詣でたる日、志賀にまうであひにけり。はし殿に局をしてるて、萬の事をいひかはしけり。今はとし子歸りなむとしけり。それに増基の許より、

逢ひ見ても別るる事のなかりせばかつが物は思はざらまし
かへし、

いかなればかつが物を思ふらむ名残もなくぞわれは悲しき
となむありける。詞もいと多くなむありける。

○同じ増基君、遣れる人の許は知らず、かう詠めりけり。

草の葉にかかれるつゆの身なればや心動くになみだ落つらむ

○本院の北方、まだ帥大納言の妻にいますがりける折に、平仲が詠みて聞えける。

齋宮—柔子
なり

三條の右の

大殿の女御

—定方の女

養子女御

としぎり—

年簾の約、

菓樹の年に

よりてなら

ぬ事

左の大臣の

中納言—小

野宮左大臣

實頼の中納

言なりし時

りけるを、つひに大臣になり給ひける御悦おんよろこびに、太政大臣おんみかど、梅を折りてかざし給ひて、

遅おそく疾はやくつひに咲きける梅の花たが植うゑおきし種たねにかあるらむ

とありけり。その日の事どもを、歌など書きて、齋宮さいぐうに奉り給ふとて、三條右大殿さんじょうみぎのだいじんの女

御ご、やがてこれに書きつけ給ひける。

いかでかくとしぎりもせぬ種たねもがなあれゆく庭にわの蔭かげとたのまむ

とありけり。その御返おんかへし、齋宮さいぐうよりありけり。忘れにけり。かくて願ねがひ給ひけるかひあり

て、左大臣ひだりのみかどの中納言、渡り住み給ひければ、種たね皆みなひろごり給ひて、蔭かげ多おほくなりにけり。

さりける時に、齋宮さいぐうより、

花はなざかり春は見に來む年としぎりもせずといふ種たねは生なひぬとか聞く

○實任まことにな少貳せうじといひける人のむすめの男をとこ、

笛ふえたけのひとよも君きみと寢ねぬときは千種ちかたのこゑに音ねこそなかるれ

といへりければ、女むすめかへし、

ありそー荒
磯、有

眞樹一乙腰
の男

やまむ一病
まむ歇まむ

おほい君一
大君、長姉

ゆふつけ鳥
一鶏、木綿
付けて神祭
に用ふるよ
りの名

太政大臣一
忠平

枇杷大臣一
仲平、忠平
の兄

むかしより思ふこゝろはありそ海の濱のまさごは數も知られず

○同じ女に、陸奥國みちのくにの守かみにて死しにし藤原眞樹ふじはらのさねきが、詠おこみて遣おこせたりける。病いと重くして
おこたりける比ひなり。「いかで對面たいめん給はらむ」とて、

からくして惜あはみとめたる命もて逢ふことをさへやまむとやする
といへりければ、おほい君、かへし、

諸共もろごもにいざとはいはで死出しでの山などはひとり越えむとはせし

といひたりけり。さて來たりける夜もえ逢ふまじき事やありけむ、え逢あはざりければ歸
りにけり。さて朝あしたに、男おとこの許もとより云おこひ遣おこせたりける。

あかつきはゆふつけ鳥のわび聲におとらぬ音ねをぞ鳴きて歸りし

おほい君、かへし、

あかつきの寢覺ねざめのみみに聞きしかど鳥よりほかの聲はせざりき

○太政大臣おほきおとこは、大臣おとこになり給ひて年比おはするに、枇杷大臣ひはのおとこは、えなり給はでありわた

ど思ひ出さ
れし意を添
へていふ

ひぢー濡れ

少貳の乳母
―村上天皇
の御乳母

桂の皇女―
季子内親王

閑院のおほ
い君―源宗
子の女

逢ふことのなみの下草水がくれてしづ心なく音こそなかるれ

○桂の皇女、七夕の比、忍びて逢ひ給へりけり。さて遣り給へりける。

袖をしもかさざりしかど七夕のあかぬ別れにひぢにけるかな

○右大臣の、頭におはしける時に、少貳の乳母の許に詠みて給ひける。

秋の夜を待てとたのめし言の葉に今もかかれる露のはかなさ

となむ。

秋も来ず露も置かねど言の葉は我がためにこそ色かはりけれ

○公平の女、死ぬとて、

ながけくも頼みけるかな世の中をそでに涙のかかる身をもて

○桂の皇女、よしたねに、

露しけみ草のたもとを枕にてきみまつむしの音をのみぞなく

○閑院のおほい君、



別路の淵瀬
―佛説にい
ふ冥途の

川、三途の

こち風―東
風、此方を
かけたなり

雨もよに云
云―今夜は
よも来らじ
と人待つ女
の情を表せ
り

なれしをす
れる―尉も
舞人も青摺
の袍着る故
に昔相馴れ
し時の事な

○おなじ女、後に兵衛尉庶忠ひやうゑのじやうもしたに逢ひて、詠みて遣せたりける。風吹き雨降りける日のこ
とになむ。

こち風はけふ日暮しに吹くめれど雨もよにはたよにもあらじな
とよみけり。

○兵衛尉はた離れて後、臨時祭りんじのまつりの舞人まねうたにさされて行きけり。この女ども、物見に出でたりけ
り。さてかへりて詠みてやりける。

昔きてなれしをすれる衣手こもせをあなめづらしとよそに見るかな
かくて兵衛尉、山吹につけておこせたりける。

もろともに井出いであの里こそこひしけれひとりをりうき山吹のはな
となむ。かへしは知らず。かくてこれは、女通ひける時に、

大空もただならぬかな神無月我のみしたにしぐるとおもへば
これも同じ人、

かりそめに
—俗言のち
よと

巨城—仁明
一世の源氏
歟

公平の女—
橋氏、後撰
の作者
縣井戸—
一條の北東洞
院の西角
おほい子—
長女
信明—源公
忠の男

かりそめに君がふしみし床夏の根も枯れにしをいかで咲きけむ
となむありける。

○同じ女、巨城が牛を借りて、又後に借りたりければ、「奉りし牛は死にき」と云ひたりける、返事に、

我が乗りしことをうしとや消えにけむ草にかかれるつゆの命は

○同じ女、人に、

おほ空はくもらずながら神無月としての経るにもそでは濡れけり

○大膳大夫公平の女ども、縣井戸といふ所に住みけり。おほい子は、后宮に少將の御といひて候ひけり。三にあたりけるは、備前守信明、まだ若男なりける時になむ、初の男にしたりける。住まざりければ、詠みて遣りける。

この世にはかくてもやみぬ別路の淵瀬をたれに問ひてわたらむ
となむありける。

ときは―常
磐、時常磐
山は山城

ふる―經る
降る

あめの下―
雨、天

尙侍―貴子
保明太子の
御息所、後
重明親王の
北の方とな
る

わすらるゝときはの山のねをぞなく秋野の蟲のこゑにみだれて
かへし、

なくなれどおほつかなくぞ思ほゆる聲聞くことの今はなければ
又同じ宮、

雲井くもゐにて世をふるころは五月雨さみだれのあめの下にぞ生いけるかひなき
かへし、

降ればこそ聲も雲井くもゐに聞えけめいとどはるけき心地こゝちのみして
同じ宮に、こと女をんな、

逢ふことの願ねがふばかりになりぬればただに歸しし時ぞこひしき

○南院いままゑの今君いまぎみといふは、右京大夫うぎやうのちゆう宗子むねこ君きみの女むすめなり。それ太政大臣おほさきおとぎの尙侍なかしのかん君きみの御かた
に候まをひけり。それを兵衛君ひやうゑのきみ、あや君あやと聞えける時、曹子さうじにしばくおはしけり。おはし
絶えにければ、床夏とこなつの枯れたるにつけて、かくなむ。

あさくこそひとは見るらめ關川せきかはの絶ゆる心はあらじとぞおもふ
かへし。

せき川の岩間をくぐる水あさみ絶えぬべくのみ見ゆるところを
かくて、この女出でて物聞えなどすれど、逢あはでのみありければ、親王みこおはしましたり
けるに、月のいと明あかかりければ、詠み給ひける。

夜な夜なにいづと見しかど憊ほかなくて入りにし月といひてやみなむ
と宣ひけり。かくて扇を落し給へりけるを、取りて見れば、知らぬ女の手にてかく書け
り。

忘らるる身はわれからのあやまちになしてだにこそ君をうらみめ
と書けりけるを見て、その傍かたはらに書きつけて奉りける。

ゆゆしくも思ほゆるかな人ごとに疎うじまれにける世にこそありけれ
となむ、又この女、

惑ひ來にけり—京へ也

と怪しかりければ、又一人惑ひ來にけり。かくて又山に入りけり。さておこせたりける。

からくして思ひ忘るる戀しさをうたて鳴きつるうぐひすのこゑかへし。

さてもきみわすれけりかし鶯の鳴くをりのみやおもひ出づべきとなむいへりける。又淨藏大徳。

我がためにつらき人をば置きながらなにの罪なき世をや怨みむともいひけり。この女は二なくかしづきて、皇子たち上達部よばひ給へど、帝に奉らむとてあはせざりけれど、この事出で来ければ、親も見すなりにけり。

親も見す—見捨てし也
兵部卿の宮—元眞親王

○故兵部卿宮、この女のかよること、まだしかりける時、よばひ給ひけり。親王、萩の葉のそよぐことにぞうらみつるかぜにうつりてつらき心を

これも同じ宮、

さばかり—
それだけ

滋幹—大納
言藤原國經
の子

てへ—とい

へ

猶しもはた
あらざりけ
事實無根に
も非ざりし
也
うたてあり
一甚しくな
れり

○滋幹少將に、女、

こひしさに死ぬる命を思ひ出でて問ふ人あらばなしとこたへよ

少將、かへし、

からにだに我きたりてへ露の身の消えばともにと契り置きてき

○中興なかおきの近江介あふみのすけが女物むすめものの怪けに煩わづらひて、淨藏じやうざう大徳たいとくを驗者けんざにしける程に、人とかくいひけり。

猶しもはたあらざりけり。忍しのびてあり經へて後、人の物いひなどもうたてあり。猶世に經

じなど思ひ云ひてうせにけり。鞍馬くらまといふ所に籠こもりて、いみじう行ひ居り。さすがにい

と戀しう覺えけり。京を思ひやりつゝ、萬の事いと哀におほえて行ひけり。泣くくう

ち伏して、傍かたはらを見れば、文なむ見えける。何ぞの文ぞと思ひて取りて見れば、この我が

思ふ人の文なり。書けることは、

墨染すみぞめのくらの山に入る人はたどるたどるもかへり來きななむ

と書かけり。いとあやしく誰たれして遣おこせつらむ、と思ひ居り。持もて來くべき便たよりもおほえず、い



くれぬーく
らみぬ

下種―賤者

なでふー如
何なれば

そのかみー

その時

塗籠―壁に
て圍みたる

室、奥にあ
り調度など
入れ置く所

あまの川そらなるものと聞きしかど我が目の前の涙なりけり

と書きたり。尼になりたるなるべし、と見るに目もくれぬ。心肝をまどはして、この使に問へば、「早う御髪おろし給ひてき。かよれば御達も、昨日今日いみじう泣き惑ひ給ふ。下種の心地にも、いと胸痛くなむ。さばかりに侍りし御髪を」といひて泣く時に、男の心地いといみじ。なでふかよる色好歩行をして、かくわびしき目を見るらむ、と思へどかひなし。なくく返事書く。

世をわぶる涙ながれてはやくとも天の川にはさやはなるべき

いとあさましきに、え物も聞えず、「みづから只今参りて」となむ云ひたりける。かくて即ち來にけり。そのかみ女は塗籠に入りけり。事のあるやう、さばかりを、使ふ人々に云ひて泣く事かぎりなし。「物をだに聞えむ。御聲をだにし給へ」といひけれど、更に答をだにせず。「かよるさはりをば知らで、なほ只いとほしさに、いふとや思ひけむ」とてなむ、男は世にいみじきことにしける。

かしがまし
くーやかま
しく

司長官―其
の頃平仲は
左兵衛尉な
れば左兵衛
督の事なる
べし
おひ起し―
強ひて起し
て
類して―連
れて
尉の君―平
仲

せむ。かしがましくかくな人々いひ騒ぎそ」となむいひける。かよりけるやうは、平仲
その逢ひける翌朝、人おこせむと思ひけるに、司長官、俄に物へいますとて、よりいま
して、寄り臥したりけるを、おひ起して、「今まで寝たりける」とて、逍遙しに遠き所へ
牽ていまして、酒飲みのとしりてかへしたまはず、辛うじて歸るまよに、亭子の帝の御
供に、大井に牽ておはしましぬ。其所に又二夜候ふに、いみじう酔ひにけり。夜更けて
歸り給ふに、この女の許いかむとするに、方の塞がりければ、大方みな遠ふ方へ、院の
人々類していにけり。この女、いかに覺束なく怪しと思ふらむと戀しきに、今日だに日
も疾く暮れなむ、行きて有様もみづからいはむ、かつ文を遣らむと酔ひ覺めて思ひける
に、人なむ來てうち叩く、「誰そ」と問へば、猶「尉の君に物聞えむ」といふ。さしのぞ
きて見ればこの家の女なり。胸潰れて「此方來」と云ひて、文を取りて見れば、いと香
しき紙に、切なる髪を少し搔いわがねて包みたり。いと怪しうおほえて、書いたる事を
見れば、

よばひーい
どみ
下待ちけれ
どー下に來
ずの詞を合
ませたり
ありくゝて
―今まで多
くの懸想人
にも靡かず
ありきたり
て
ことわざ―
他に夫を有
つこと

に髪長くなどして、よき若人になむありける。いといたう人々懸想じけれど、思ひあがりて男などもせでなむありける。されど切によばひければ逢ひにけり。この朝文をも遣せず、夜まで音もせず。心うしと思ひ明して、又の日待てど文も遣せず。その夜下待ちけれど、朝に、つかふ人など、いとあだにもものし給ふと聞きし人を、ありくゝてかく逢ひ奉り給ひて、みづからこそ暇もさはり給ふ事ありども、御文をだに奉り給はぬ、心憂き事などこれかれ云ふ。心地にも思ひるたる事を人も云ひければ、心憂く悔しと思ひて泣きけり。その夜もしやと思ひて待てど又來ず。又の日も文も遣せず、すべて音もせで五六日になりぬ。この女、音をのみ泣きて物も食はず、使ふ人など大方は「な思しそ、かくてのみ止み給ふべき御身にもあらず。人には知らせてやみ給ひて、ことわざをもし給ひてむ」と云ひけり。物もいはでこもり居て、つかふ人にも見えで、いと長かりける髪をかい切りて、手づから尼になりにけり。つかふ人集りて泣きけれど、いふかひもなし。「いと心憂き身なれば、死なむと思ふにも死なれず。かくだになりて、行をだに

上の條—前
條の事實

いみじう悲しくて、泣く／＼歸りにけり。かくてありけることを、上の條奏しければ、帝も限なく哀がり給ひける。

○土佐守にありける酒井人眞といひける人、病してよわくなりて、鳥羽なりける家に行くとて詠みける。

行く人はそのかみ來むといふものを心ほそしや今日の別れば

そのかみ—
その當時
來む—歸り
來む
故后の宮—
溫子皇后
御達—女房
達
おもしひ—
思、緋
極練—表裏
紅の打らた
る物

○平仲が色好みけるさかりに市に行きけり。中比はよき人々いちに行きてなむ、色好むわざはしける。それに故后宮の御達、市に出でける日なむありける。平仲色好みかよりて、二なう懸想じけり。後に文をなむ遣せたりける。女ども「車なりし人は多かりしを、誰にある文にか」となむ云ひやりける。さりければ男の許より、

百敷のたもとのかずは見しかどもわきておもひの色ぞ戀しき

といへりける、武藏守の女になむありける。それなむいと濃き搔練著たりける。それをもと思ふなりけり。さればその武藏なむ、後は返事はしていひつきにける。かたち清け

おこたりて
―快癒して

むづかしう

―不快に

心もとなく

―氣懸りに

て

あさまし―
驚嘆すべし

○おなじ少將、病にいたう煩ひて、少しおこたりて、内裏に参りたりけり。近江守

公忠君、掃部助にて藏人なりける比なりけり。その掃部助に逢ひて云ひけるやう、亂心

地はまだおこたりはてねど、いとむづかしう、心もとなく侍ればなむ参りつる。後は知

らねど、かくまで侍る事。まかり出でて、明後日ばかり参り來む、よきに奏し給へなど

云ひ置きて罷出ぬ。三日ばかりありて、少將の許より、文をなむおこせたりけるを見れ

ば、

悔しくぞ後に逢はむと契りける今日をかぎりといはましものを

とのみ書きたり。いとあさましくて、涙をこぼして使に問ふ。「いかど物し給ふ」と問へ

ば、使も「いと弱くなり給ひにたり」といひて泣くを、聞くに「更にも聞えず、みづから

只今参りて」と云ひて、里に車とりにやりて待つほどいと心もとなし。近衛御門に出で

立ちて、待ちつけて乗りて馳せゆく。五條にぞ少將の家あるに、往きつきて見れば、い

といみじく騒ののしりて門鎖しつ。死ぬるなりけり。消息いひ入るれど何のかひなし。



著ることゝ
勅許され

ぬぐをのみ
—喪服を脱
ぐ事をのみ

ぬぐをのみ悲しと思ひしなき人のかたみの色は又もありけり

とてなむ泣き給ひける。その程は中辨ちゆうべんになむ物し給ひける。

○亭子ていじの帝みかどの御供みまがひに、太政大臣おほきおとぎ、大井おほいに仕つかうまつり給へるに、紅葉小倉山もみぢをぐらのやまに、いろくいと面白おもしろかりけるを、限かぎりなくめで給ひて、行幸みゆきもあらむに、いと興ある所になむありける。必ず奏してせさせ奉らむなど申し給ひて、ついでに、

小倉山をぐらのやまみねのもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ

となむありける。かくて歸かへり給ひて奏そうし給ひければ、いと興ある事なりとて、大井の行幸といふ事はじめ給ひける。

○大井おほいに季繩すゐなはのせうしやう少將せうしやうすみける比、帝宣のたまひける、「花おもしろくなりなば、必ず御覽ごらんせん」とありけるを、おほし忘れておはしまさざりければ、少將、

散りぬればくやしきものを大井川きしの山吹今日さかりなり

とありければ、いたう哀あはれ給ひて、急いそぎおはしましてなむ御覽ごらんじける。

となむありける。御かへしあれど、本になしとあり。

かくて九の君、侍従の君にあはせ奉り給ひてけり。同じ比御息所を、宮おはしまさずなりにければ、左大臣の右衛門督におはしける比、御文奉り給ひけり。かの君、聲どられ給ひぬ、と聞き給ひて、大臣、御息所に、

浪の打つ方も知らねどわたつ海のうらやましくも思ほゆるかな

○太政大臣の北方うせ給ひて、御はての月になりて、御わざの事急がせ給ふころ、月のおもしろかりけるに、端に出でる給ひて、物のいと哀におほされければ、

隠れにし月はめぐりてきにしかど影にも人は見えすぞありける

○おなじ太政大臣、左大臣の御母、菅原君かくれたまひにける。御服はて給ひにける比、亭子の帝、内裏に御消息きこえ給ひて、色聴され給ひける。さりければ、大臣いと清らに蘇芳襲など著給ひて、后宮にまゐり給ひて、院の御消息のいと嬉しく侍りて、かく色聴され侍ることなど聞え給ふ。さて詠ふ給ひける。

御返しあれど云々後人の傍注歎左大臣一師尹の兄實頼

うらやましくし一浦を兼ぬ

太政大臣一真信公忠平御はて一四十九日色聴され一禁色の衣を

貝
 中務の宮—
 代明親王
 おとうと—
 左兵衛督—
 藤原師尹
 もとの宮—
 宮の内殿
 すもり—卵
 のかへらす
 して巢にの
 ころもの
 御息所—善
 子
 式部卿の宮
 —敦實親王
 齋宮—柔子
 内親王敦實
 の妹

ひけり。御忌など過しては、遂に一人は過し給ふまじかりければ、かの北方の御おとうと
 九の君をやがて得給はむと思しけるを、何かはさもと親兄弟も思したりけるに、いかどあ
 りけむ、左兵衛督君、侍従に物し給ひける比、其御文持て來となむ聞き給ひける。扱心
 づきなしと思しけむ、もとの宮になむ渡り給ひにける。其時に、御息所の御許より、
 なき人の巢守にだにもなるべきに今はとかへる今日の悲しさ
 宮の御かへし、

巢守にと思ふ心はとどむれどかひあるべくもなしとこそ聞け
 となむありける。

○おなじ右大臣の御息所、帝おはしまさずなりて後、式部卿宮なむすみ奉り給ひけるを、
 いかどありけむ、おはしまさざりける比、齋宮の御許より、御文奉り給へりけるに、御
 息所、宮のおはしまさぬ事、など聞え給ひて、奥に、
 白山にふりにし雪のあと絶えていまはこしぢの人もかよはず

左大臣—小野宮實賴

そへに—勿論

齋宮の親王

—雅子内親

王延喜帝の

皇女

御占に—齋

宮は卜定ず

るものにて

その卜に合

ひたまひし

也

かひ—致、

○故權中納言、左大臣の君をよばひ給ふ、年の十二月の晦日に、

物思ふと月日のゆくも知らぬ間に今年も今日にはてぬとか聞く

となむありける。又かくなむ。

いかにしてかくおもふことをだに人傳ならで君にかたらむ

かくいひくゝて、遂に逢ひにけるあしたに、

今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり

○これも同中納言、齋宮の皇女を年ごろよばひ奉り給ひて、今日明日あひなむとしける

程に、伊勢齋宮の御占に合ひ給ひにけり。いふかひなく口惜しと、男思ひ給ひけり。さ

てよみて奉り給ひける。

伊勢の海ちひろの濱にひろふとも今はかひなくおもほゆるかな

となむありける。

○故中務宮の北方亡せ給ひて後、小き君達を引き具して、三條の右大臣殿にすみ給

故兵部卿宮
—元良親王
吳竹の—梁
の孝王の修
竹園の故事
によりて親
王の意を添
ふ
ひとよ二よ
—一節二節
一夜二夜
祭の使—賀
茂祭の
近衛の中少
將などの勤
むる役
ゆくし—忌
はし

修理がかへし、

たましひはをかしき事もなかりけり萬のものは骸からにぞありける

○同じ女に、故兵部卿宮御消息こひやうぶやきうのみやおんせうそこなどし給ひけり。「おはしまさむ」と宣ひければ聞えける。

高くともなにかはせむ吳竹くれたけのひとよふたよのあだのふしをば

○三條右大臣さんでうのみぎのおぎ、中將にいますがりける時、祭の使まつりつかひにさされて、出で立ち給ひけり。通ひ

給ひける女の、絶えて久しくなりにけるに、「かよる事なむ出で立つ。扇持あふぎもたるべかりけ

るを、騷さわがしうてなむ忘れにける。一つ賜たまへ」と云ひ遣り給へりけり。よしある女なりけ

れば、よくて遣せてむと思ひ給ひけるに、色などもいと清きよなる扇の、香かなどもいと

うばしうて遣せたり。引き返したる裏うらの、端はしの方に書きたりける。

ゆゆしとて忌むとも今はかひもあらし憂うきをば是これに思ひよせてむ

とあるを見て、いと哀おほと思して、かへし、

ゆゆしとて忌みける物を我が爲ためになしといはぬは誰たがつらきなる

かくて、右馬頭うまのかみ行かずなりにける比、詠みて遣せせたりける。

いかでなほ網代あじろの氷魚ひりやにこととはむ何によりてか我を問はぬと
といへりければ、かへし。

網代より外には氷魚のよるものが知らずはうちの人に問へかし

○又おなじ女に通ひける時、つとめて詠みたりける。

明けぬとていそぎもぞする逢坂あふさかの露立ちぬともひとに聞かすな

男はじめごろよみたりける。

いかにして我は消えなむ白露のかへりてのちのものはおもはじ

かへし、

頃かたはなる君があさがほ見てしがなかへりてのちはものやおもふと

おなじ女に、氣け近く物など云ひて、歸りて後に詠みてやりける。

心をし君にとどめて來にしかばもの思ふことは我にやあるらむ

網代―冬字
治田上邊に
かけて氷魚
の寄り來る
を捕る

うち―字
治、内

つとめて―

翌朝

消えなむ白
露の―白露
の如く消え
なむ

ば、雪の降りけるに云ひ遣せたりける。

山里に我をとどめてわかれ路のゆきのまにまに深くなるらむ

と云ひたりければ、

やまざとに通ふところも絶えぬべし行くもとまるも心細さに

となむ返したりける。

○おなじ男、紀伊國に下るに、寒しとて、衣をとり遣せたりければ、女、

紀のくにのむろの郡に行く人は風のさむさもおもひ知られじ

かへし、男

紀の國の牟婁の郡に行きながら君とふすまのなきぞかなしき

○修理の君に、右馬頭すみける時、方の塞がりければ、「方違にまかるとて、え参りこぬ」

といへりければ、

これならぬことをも多く違ふれば恨みむ方もなきぞわびしき

ふすま—
衾、臥間
修理の君—
葛原直行の
女

むろ—牟
婁、室



萬の事をか
けて―あら
ゆる神佛を
ひきて

桃園宰相―

源保光

うつせ貝―

空貝、空し

きの序

大納言殿―

顯忠

すゞろに―

不意に

兵庫頭―衛

府に屬し兵

器を掌る寮

の長官

かへしはえ聞かず。

○おなじ右近、桃園宰相君なむ、すみ給ふなど云ひのよしりけれど、虚言なりければ、

かの君に詠みて奉りける。

よし思へ海士のひろはぬうつせ貝空しき名をば立つべしや君

となむありける。

○正月の朝日、大納言殿に兼盛参りたりけるに、物など宣はせて、すゞろに「歌よめ」

と宣ひければ、ふと詠みたりける。

今日よりは萩の焼原かき分けて若菜つまむとたれをさそはむ

とよみたりければ、二なくめで給ひて、御かへし、

片岡にわらび萌えずは尋ねつつこころやりにや若菜つままし

となむよみ給ふ。

○但馬國に通ひける、兵庫頭なりける男の、かの國なりける女をおきて、京へ上りけれ

ば、御文奉りける。

忘じれと頼めし人はありと聞くいひし言の葉いづちいにけむ

となむありける。

○同女おなじをんなの許もとに、更さらに音ねもせで、雉子うづひをなむ遣わせ給たまへりける。返事かへりごとに、

栗隈くりこまの山やまに朝立あしたたつきじよりもかりにはあはじと思おもひしものを

○同女おなじをんな内裏うちの曹子そうごにすみける時、忍しのびて通とほひ給たまふ人ありけり。頭かぶなりければ、殿上とのうへに常つねにありけり。雨あめの降ふる夜、曹子そうごの葺しきのつらに立ちより給たまへりけるも知らで、雨あめの漏もりければ、庭にわを引ひきかへすとて、

思おもふ人雨あめと降ふりくるものならば我がもる床とこはかへさざらまし

となむうち云いひければ、哀あはれと聞き給たまひて、ふと這はひ入り給たまひにけり。

○同女おなじをんな、男おとこの忘わすれじと、萬よろづの事をかけて誓ちかひけれど、忘わすれにける後にいひやりける。

頭かぶ—先藏人
頭かぶ—機はたにあ
りて日光ひかりを
遮かざる月

の翁の悲泣
して留めし
事かの物語
に見ゆ

朝拜—正月
元日天皇大
極殿に出御
百官の賀を
受け給ふ儀
威儀の命婦
—威儀を整
へて近侍す
る女官

南院の君だ
ち—是忠親
王の御子等
故后の宮—
穩子
故權中納言
—敦忠

○監けんの命婦みやうめ、朝拜てうはいの威儀ゐぎの命婦みやうめにて出でたりけるを、彈正だんじやうの親王みこ見給ひて、俄まじに惑まじひ懸け想さうし給ひけり。御文ありける御返事に、

うちつけに惑ふところと聞くからに慰なぐさめやすくおもほゆるかな

王この御歌はいかどありけむ、忘れにけり。また同じ親王みこに、おなじ女、

こりすまの浦にかづかむ浮海松うきみるは浪さわがしくありこそはせめ

○宇多院の花おもしろかりける比、南院の君達きんだち、これかれ集りて歌よみなどしけり。右う京大夫宗于きやうのかみむねゆき

来て見れど心もゆかずふるさとはむかしながらの花は散れども

他人たにびのもありけらし。

○季繩少將すまなほのせうしやうむすめうこんの女右近こきさいのみや、故后宮に候ひけるころ、故權中納言の君おはしける。頼たのめたまふ

事などありけるを、宮に參る事絶えて、里にありけるに、更に訪まひ給はざりけり。内裏うち邊わたりの人來たりけるに、「いかにぞ參り給ふや」と問ひければ、「常に候ひ給ふ」といひけれ

中納言

ゆきのまに
まに一行、
雪

喜種一源長
獻の手清和
天皇の孫

院一享子院
八月十五夜
一觀月の御
遊
竹取がの歌
一赫奕姫の
昇天は八月
十五夜竹取

君が行く越の白山知らねどもゆきのまにまにあとはたづねむ
となむ詠み給ひける。

○桂の皇女の御許に、喜種が來たりけるを、母御息所聞きつけ給ひて、門を鎖せ給ひければ、夜一夜立ち煩ひてかへると、「かく聞え給へ」とて、門の間よりいひ入れける。

こよひこそ涙の川にゐる千鳥なきてかへるときみは知らずや
これも同じ皇女に、おなじ男、

永き夜をあかしの浦に焼く鹽のけぶりは空に立ちやのほらむ

かくて忍びて逢ひ給ひける程に、院に八月十五夜せられけるに、「参り給へ」とありければ、参り給ふに、院にては逢ふまじければ、「せめて今宵はな参り給ひそ」と留めけり。されどめしなりければ、得留まらでいそぎ参り給ひければ、喜種、

竹取がよよに泣きつつ留めけむ君はきみにとこよひしも行く

○同じ宮おはしましける時、亭子院に住み給ひけり。この宮の御許に、兼盛参りけり。召し出でて、物ら宣ひなどしけり。亡せ給ひて後、かの院を見るにいとあはれなり。池のいとおもしろきに、哀なりければ詠みける。

池はなほむかしながらの鏡にてかけ見しきみがなきぞかなしき

○人の國の守にて下りける馬の餞別を、堤中納言して待ち給ひけるに、暮るゝまで來ざりければ、云ひ遣り給ひける。

別るべきこともあるものを終日に待つとてさへも歎きつるかな

とありければ、まどひ來にけり。

○おなじ中納言、かの殿の寢殿の前に、少し遠く立てりける櫻を、近く掘り植ゑ給ひけるが、枯れざまに見えければ、

宿近くうつして植ゑしかひもなくまちどほにのみ見ゆる花かな

○同じ中納言、藏人にてありける人の、加賀の守にて下りけるに、わかれ惜みける夜、

篠塚の驛—
三河寶飯郡
篠東郷あり
其處歟

うまや〜
—驛驛、今
や今や

冠—元服
金の使—陸
奥の買金使

三條右大臣
—藤原定方

かくてこの男、陸奥國へ下りける便につけて、哀なる文ども遣せけるを、道にて病してなむ死にけると聞きて、女いと哀となむ思ひける。かく聞きて後、篠塚驛といふ所より、便につけて、哀なる事どもを書きたる文をなむ持て來たりける。いとかなしくて、「これは何時のぞ」と問ひければ、使の久しくなりてもて來たるになむありける。女、

篠塚のうまやうまやと待ちわびし君は空しくなりぞしにける

と詠みてなむ泣きける。童にて殿上して、大七といひけるを、冠して、藏人所におりて、金の使かけて、親の供に往くになむありける。

○故式部卿宮うせ給ひける時は、二月の晦日、花の盛になむありける。堤中納言の詠み給ひける。

咲きにほひ風まつほどの山ざくら人の世よりは久しかりけり

三條右大臣の御かへし、

春春の花は散るとも咲きぬべしまた逢ひがたき人の世ぞ憂き

ならしげ―
檜柴、馴ら
しの序

めとりぐく
り―紋染

いゝ魚

奉りける。

我がやどをいつかは君がならしげのならし顔には折りにおこせる

御かへし、

かしは木に葉守はもりの神のましけるを知らでぞ折りしたたりなさるな

○忠文ただぶみが、陸奥むちのくにの將軍くたになりて下りける時、それが息子むすこなりける人を、監けんの命婦みやうぶ忍びてあ

ひ語らひけり。餞別うまのはなびけに、めとりぐくりの狩衣かりぎぬ、鞋うちぎ、幣ぬさなどやりたりける。このえたる男、

よひよひに戀こひしさまさるかり衣かりぎぬこころづくしのものにぞありける

とよみたりければ、女めでて泣きけり。

○同じ人に、監けんの命婦みやうぶ、楊梅やまももを遣やりたりければ、

みちのくの安達あだちの山やまももろともに越こえばわかれのかなしからじを

となむいひける。さて堤つみなる家みやに住みける。さて鮎あはをなむ取りて遣やりける。

賀茂川かもちがはの瀬せにふす鮎あはのいを取りて寢ねでこそあかせゆめに見えつや

なげき—
歎、木

やらひ—追
ひ

いき難き—
往き、生き

いなおほせ
鳥—鶴鶴な
りといふ
こぼれたる
家—壊れた
る

枇杷殿—左
大臣仲平

返し、をかしかりけれどえ聞かず。又雪の降る夜來たりけるを、物は云ひて「夜更けぬ。歸り給ひね」といひければ、歸りける程に、戸を鎖してあざけりければ、

我はさは雪ふる空に消えねとや立ちかへれどもあけぬ板戸は

となむ云ひてゐたりける。かく歌も詠みあはれに云ひるたれば、いかゞせましと思ひて、のぞきて見れば、顔こそ猶いとにくけなりしか、となむ語りしとか。

○とし子、千兼を待ちける夜、來ざりければ、

小夜更ていなおほせ鳥の鳴きけるを君が叩くと思ひけるかな

○又とし子、雨の降りける夜千兼を待ちけり。雨にやさはりけむ、來ざりけり。こぼれたる家にて、いたく漏りけり。「雨のいたく降りしかば、え參らずなりにき。さる所に、いかで物し給ひつる」といへりければ、とし子、

君を思ひひまなき宿とおもへども今宵の雨は漏らぬ間ぞなき

○枇杷殿より、とし子が家に柏木のありけるを、折りにたまへりけり。折らせて書きつけ

いひければ
—本妻の性
急に罵りし
かば

とばかり—
暫時

南院の五郎
—是忠親王
の五子今扶
王

承香殿—醍
醐の母后胤
子此の殿に
居たり

うちとかく
るは—籬を
内外に懸く
るに内裏と
いへるはの
意を兼ね

りて云ひけり、「世の中の思の外ほかにあること、異世界こゝせかいにもものし給ふとも、忘れて消息せうそくし給へ。おのれもさなむ思ふ」といひけり。この女つよみに物など入れて、車取りに遣りて待つほどなり。いとあはれと思ひけり。さて女いにけり。とばかりありておこせたりける。

わすらるなわすれやしぬる春がすみ今朝立ちながら契りつること

○南院なんゐんの五郎、三河の守かみにてありける。承香殿しょうかうでんにありける伊豫の御ごを懸想けさうじけり。來こむと云ひければ、御息所の御許に、「内裏うちへなむ參る」といひ遣おこせたりければ、

玉すだれうちとかくるはいとどしくかけを見せじと思ふなりけり

といへりけり。又、

歎きのみ茂きみやまのほととぎす木こがくれ居ゐても音をのみぞ鳴く

などいひけり。かくて來たりけるを、「今はかへりね」とやらひければ、

死ねとてやとりもあへずばやはるるいといき難き心地こそすれ

淨藏一僧の
名、三善清
行の第八子

藤の花色のあさくも見ゆるかな移ろひにけるなごりなるべし

○のうさんの君といひける人、淨藏とはいと二なう思ひかはす中なりけり。限なく契りて、思ふ事をもいひかはしけり。のうさんの君、

思ふてふ心はことにありけるをむかしの人になにをいひけむといひ遣せたりければ、淨藏大徳のかへし。

ゆくすゑの宿世を知らぬ心には君にかぎりの身とぞいひける

○故右京大夫、人の女を忍びて得たりけるを、親聞きつけて、のよしりてあはせざりければ、佗びて滞りにけり。さて朝に詠みてやりける。

さもこそは峯の嵐は荒らからめなびきし枝をうらみてぞ來し

うらみー
恨、裏見
らうたしー
愛らし
いちばやく

○平仲、にくからす思ふ若き女を、妻の許に牽て來て置きたりけり。にくけなる事どもを云ひて、妻遂に逐ひ出しけり。この妻に隨ふにやありけむ、らうたしと思ひながら得留めず。いちばやく云ひければ、近くだにえ寄らで、四尺の屏風に寄りかゝりて、立て



うさ—字
佐、憂さ
五條の御—
山隆中納言
の姪

河原院—六
條鴨川の畔
にあり、源
融の作りて
宇多に奉れ
るもの
さうくし
—寂寥なり
ふち—淵、
藤
御曹子—御
局、官女

忘るやと出でて來しかどいづくにもうさは離れぬ物にざりける

○五條の御といふ人ありけり。男の許に我が像を繪に書きて、女の燃えたる像を書きて、烟をいと多く薫らせて、かくなむ書きたりける。

君を思ひなまくし身を焼く時はけぶり多かるものにざりける

○亭子院と、御息所たち數多、御曹子して住み給ふ事、年比ありて、河原院のいとおもしろく作られたりけるに、京極の御息所、一所の御曹子をのみして渡らせ給ひにけり。春の事なりけり。とまり給へる御曹子ども、いと思の外にさうくしき事をおもほしけり。殿上人など通ひ参りて、藤の花のいとおもしろきを、「これが盛をだに御覽ぜで」などいひて見ありくに、文をなむ結びつけたりける。あけて見れば、

世の中の淺き瀬にのみなり行けばきのふのふぢの花とこそみれ

とありければ、人々見て限なくめで衰がりけれど、誰が御曹子のし給へるともえ知らざりけり。男どもの云ひける。

うしろめたし不安心
名取の御湯
陸前國名
取郡なる温
泉
とりのみゆ
けば鳥の
み行けばに
て名取の御
湯をかくし
てよめり
などすなど
りの六々一
同じく名取
の御湯をよ
みこめり

花ざかり過ぎもやするとかはづ鳴く井手の山吹うしろめたしも
といひけり。かくて名取の御湯といふ事を、恒忠君の妻詠みたりけるといふなむ、この
黒塚の主人なりける。

おほ空の雲の通路見てしがなとりのみゆけばあとはかもなし

となむ詠みたりけるを、兼盛大君おなじ所を、

鹽釜の浦には海人や絶えにけむなどすなどりのみゆるときなき

となむよみける。さてこの心がけし女、他男して京へ上りたりければ、聞きて、兼盛上
りものし給ふなるを、告げ給はせで」と云ひたりければ、「井手の山吹うしろめたし」とい
へりける文を、「これなむ陸奥國の土産」とて、おこせたりければ、男、
年を経てぬれわたりつる衣手を今日のなみだに朽ちやしぬらむ
といへりけり。

○世の中を倦じて、筑紫へ下りける人、女の許におこせたりける。

女、かへし、

駒にこそまかせたりければ、かなくも心のくると思ひけるかな。

○近江介平中興、女をい^{むすめ}といたうかしづきけるを、親なくなりて後、とかくはふれて、

他國^{ひまのくに}にはかなき所にすみけるを、あはれがりて、兼盛が詠^よみておこせたりける。

をちこちのひと目まれなる山里^{いへ}に家居せむとはおもひきや君

と詠みてなむ遣^{おこ}せたりければ、返事^{かへりごと}もせで、よよとぞ泣きける。女もいとらうある人な

りけり。

○おなじ兼盛、陸奥國^{あきのくに}にて、閑院の三の御子の女^{むすめ}にありける人、黒塚^{くろづか}といふ所にすみけ

り。その女どもにおこせたりける。

みちのくの安達^{あだち}の原のくろ塚に鬼こもれりと聞くはまことか

といひたりけり。かくて「その女^{むすめ}を得む」といひければ、親「まだいとわかくなむある、

今さるべからむ折にを」と云ひければ、京にいくとて、山吹^{やまぶき}につけて、

らうある人
―行き届け
る人
閑院の三の
御子―貞元
親王の第三
子源兼信
鬼こもれり
―美女を戯
れて鬼とい
へり

博奕―盤と
采とに行ふ
雙六に似た
るかけ遊び

しをり―道
しるべ、折
檻

もと來し駒
―老馬道を
知る事管仲
の言にある
よし蒙求に
見えたり

秋の野をわくらむ鹿も我が如や繁きさはりに音をば鳴くらむ

○右京大夫宗于君、三郎にあたりける人、博奕をして親にも、兄弟にも憎まれければ、「足の向かむ方へ行かむ」とて、他國へいきける。さて思ひける友たちの許へ、詠みて遣せたりけり。

しをりして行く旅なれどかりそめの命しらねば歸りしもせじ

○男、限なく思ひける女を置きて、他國へ往にけり。いつしかと待ちけるに、死にきといひて來たりければ、

今來むといひて別れし人なればかぎりと聞けど猶ぞ待たるる

となむいひける。

○越前權守兼盛、兵衛君といふ人にすみけるを、年比はなれて又往きけり。さてよみける。

夕さればみちも見えねど故郷はもとこし駒にまかせてぞゆく

齋院さいいんの御ごかへし、

我が宿に色をりとむる君なくばよそにもきくの色を見ましや

○戒仙かいせん、山に登りて、

雲ならで小高こたかき嶺にゐるものはうき世を背そむく我が身なりけり

○齋院よりうちに、

おなじ枝えだをわきて霜しもおく秋なれば光もつらくおもほゆるかな

御かへし、

花の色を見ても知りなむ初霜はつしもの心わきてはおかじとぞおもふ

これも、うちの御ご、

わたつ海うみの深き心をおき乍なごらうらみられぬる物にぞありける

○陽成院やうせいゐんにありける、坂上さかのうへのとほみちといふ男おとこ、おなじ院にありける女、障さやる事ありて

恨うらみうらみ浦

うち—天皇

おなじ枝を

云々—御兄

弟の御中隔

あるよりの

御迷國と見えたり

うちの御—

天皇の御歌

おき—置、

沖

うらみ—浦



先帝いとあはれに思し召したりけり。

○平仲、閑院の御に絶えて後、程經て逢ひたりけり。さて後に云ひおこせたる。

うちとけて君は寢つらむ我はしも露のおきるてこひにあかしつ

女、かへし。

白露のおきふし誰を戀ひつらむ我は聞きおはすいそのかみにて

○陽成院の一條君、

奥山にこころを入れてたづねずばふかき紅葉のいろを見ましや

○先帝の御時、刑部君とて、候ひ給ひける更衣の、里にまかり出で給ひて、久しう参り

給はざりけるに遣しける。

大空をわたる春日のかけなれやよそにのみしてのどけかるらむ

○おなじ帝、齋院の皇女の御許に、菊につけて、

行きて見ぬ人のためにとおもはずば誰か折らまし我がやどの菊

齋院の皇女
—君子内親
王宇多皇女

いそのかみ
—ふるの枕
詞なれば君
にふるされ
たればの意
とす

外山―前山

日も―天
日、時日

ぬれ衣―宛

十三のみこ
の母―醍醐
の皇子章明
親王の母藤
原桑子
かしこく―
甚しく

にかあらむ、と云ひて深き山に籠り給ひぬとありしは、何處ぞ」と云ひ遣り給ひたりければ、

何ばかり深くもあらず世の常の比叡を外山と見るばかりなり

となむいひたりける。横川といふ所にあるなりけり。

○おなじ人に、ある人、「山へのほりたまふべき日はとほくやある、いつぞ」といへりければ、

登りゆく山の雲居の遠ければ日も近くなるものにぞありける

とぞいひ遣せたりける。かくのみ、よからぬ事の、あるがうへに出で来ければ、

のがるとも誰か著ざらむぬれ衣あめの下にし住まむかぎりは

○堤中納言君、十三のみこの母御息所を、内裏に奉りける初に、帝はいかと思し召すらむなど、いとかしこく思ひ歎き給ひけり。さて帝に詠みて奉り給ひける。

人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道に惑ひぬるかな

はかなき—
無常

或人—或婦
人
驗者—祈禱
者

庭のしも—
霜、下
切懸—板壁
の如きもの

たつき—
鐘、廣刃の
斧

いひつつも世ははかなきを形見には哀といかで君に見えまし
と詠み給ひければ、誰もく返しはせて、集りてよよとなむ泣きける。怪しかりける者
どもにこそはありけれ。

○惠秀といふ法師の、或人の御驗者仕うまつりけるほどに、とかく世の中にいふ事あり
ければ、詠みたりける。

里はいふ山にはさわぐしら雲の空にはかなき身とやなりなむ
となむありける。又この人の御許に詠みたりける。

朝ほらけわが身は庭のしもながら何を種にてこころおひけむ
この大徳、坊にしける所の前に、切懸をなむせさせける。そのけづりくづに書きつけ
る。

籠する飛驒の匠のたつき音のあなかしかましなぞや世のなか

などいひて、「おこなひしに、深き山に入りなむとす」といひて往にけり。ほどへて「何處

正明一是忠
親王の子源
氏

うなる一男
女共にいま
だ結髪せぬ
ほどの童

おく露の云
云一暫時の
逢瀬は

汗疹一童女
の上に着る
衣

曹子一局

このむすめ
姉にあたる
一とし子の
女の中にて
姉にあたる

おく露のほどをも待たぬ朝顔は見すぞなかなかあるべかりける

○桂の皇女に、式部卿宮すみ給ひける時、その宮に候ひけるうなるなむ、この男宮を、いとめでたし、と思ひかけ奉りけるをも、え知り給はざりけり。螢の飛びありきけるを、「かれ捕へて」と、この童に宣はせければ、汗疹の袖に螢を捕へて、包みて御覽せさす」とて聞えさせける。

つつめども隠れぬものは夏蟲の身よりあまれるおもひなりけり

○源大納言君の御許に、とし子は常に参りけり。曹子して住む時もありけり。をかしき人にて、萬の事を常に云ひかはし給ひけり。徒然なる日、このおとど、とし子、またこのむすめ、姉にあたるあやつ子といひてありけり。母に似て心もをかしかりけり。又とこの許に、よぶ子といふ人ありけり。それも物のあはれ知りて、いと心をかしき人なりけり。これ四人集ひて、萬の物語し、世の中のはかなき事、世間の哀なる事いひく、かのおとどの詠み給ひける。

えければ、かくなむ。

白雲のここのへに立つ峯なればおほうち山といふにぞありける

○伊勢國に、前齋宮おはしましし時に、堤中納言、勅使にて下りたまひて、

吳竹のよよのみやこと聞くからにきみは千年のうたがひもなし

御かへしは聞かず。かの齋宮のおはします所は、多氣の都となむいひける。

○出雲が兄弟、一人は殿上して、我はえせざりける時に詠みたりける。

かく咲ける花もこそあれ我がために同じ春とやいふべかりける

○先帝の五の皇子の御女は、一條君といひて、京極御息所の御許に候ひ給ひけり。よ

くもあらぬ事ありて、罷出給ひて、靱負督の妻にしていますがりて、

たまさかに問ふ人あらばわたの原歎きほに舉げていぬと答へよ

○伊勢守もろみちの女を、正明中將君に婚せたりける時に、其處なりけるうなるを

ば、右京大夫呼び出でてかたらひて、朝によみておこせたりける。

前齋宮—柔
子内親王宇
多皇女
吳竹の—よ
よの序、齋
宮を竹の都
の縁にて取
り出づ
出雲—出雲
の守
五のみこの
御女—五は
四の誤にや
清和第四皇
子貞平親王
の女に一條
君あり

あはれてふ
云々—古今
集「紫の一

本ゆゑに武
藏野の草は
みながら哀
とぞ見る」

そうづの君
—僧都の君
か、名不詳

躬恒—凡河
内躬恒

堤中納言—
藤原兼輔

大内山—嵯
峨仁和寺の
山

○亭子ていじの帝みかぎに、右京大夫うきやうのかみよみて奉りける。

あはれてふ人もあるべく武藏野の草とだにこそ生ふべかりけれ
また、

しぐれのみ降る山里この木このしたは居る人がらやもりすぎぬらむ

とありければ、願かへりみ給はぬ心ばへなりけり。帝御覽じて「何事ぞ、これを心得ぬ」とて、
そうづの君に見せ給ひける、と聞きしかば、「かひなくなむありし」と語り給ひける。

○躬恒みつねが、院に詠みて奉りける。

立ち寄らむ木のもともなき薦つたの身は常磐とこはながらに秋ぞかなしき

○右京大夫うきやうのかみの許に、女、

色ぞとはおもほえずともこの花は時につけつつおもひ出でなむ

○堤中納言つゝみのちうなごん、内裏うちの御使うぢにて、大内山おほうちやまに、院ゐんの帝みかぎおはしますに参り給へり。物心ものこころ細ほけに
ておはします、いとあはれなり。高き所なれば、雲しもは下よりいと多く立ち昇るやうに見

客人は、貫之、友則などになむありける。

三條右大臣

—定方

上達部—公

卿

類しては—

うちつれて

かづけ物—

装束などの

贈物

なりいづべ

き—出身す

べき

ふける—吹

井、紀伊の

名所、風の

吹くに懸く

○故式部卿宮に、三條右大臣、他上達部など類して参り給ひて、暮うち御遊などし給ひて、夜更けぬれば、此彼酔ひて、物がたりし、かづけ物などせらる。女郎花をかざし給ひて、右大臣、

女郎花折る手にかかるしら露はむかしの今日にあらぬなみだか

となむありける。他人々の多かれど、よからぬは忘れにけり。

○故右京大夫宗子君、なりいづべき程に、我が身のえなり出でぬことを、思ひ給ひける

ころほひ、亭子の帝に、紀伊國より石つきたる海松をなむ、奉りたりけるを題にて、人

人歌よみけるに、右京大夫、

沖つ風ふけるの浦に立つなみのなごりにさへやわれはしづまむ

○おなじ右京大夫、監の命婦に、

よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

となむありける。

かいせう―
不詳、後撰
の作者に戒
仙あり此歟
あらはひ―
洗濯

むづかりて
―憤りて

いますぐら
ぬ事―居給
はぬ事

○かいせうといふ人法師になりて、山にすむ間に、あらはひなどする人のなかりければ、親の許に、衣をなむ洗ひに遣せたりけるを、いかなる折にかありけむ、むづかりて、「親兄弟のいふ事も聞かで、法師になりぬる人は、かくうるさき事いふものか」と言ひければ、詠みて遣りける。

今は我いづち行かまし山にても世のうきことは猶も絶えぬか

○同じ人。かの父の兵衛佐、うせにける年の秋、家にこれかれ集りて、宵より酒飲みなどす。いますぐらぬことの哀なる事を、客人も主人も戀ひけり。朝ほらけに霧立ち渡れりけり。客人、

朝霧の中に君ますものならば晴るるまにまにうれしからまし
と云ひけり。かいせう、かへし、

ことならば晴れずもあらなむ秋霧の紛れに見えぬ君と思はむ

先帝—醍醐

天皇

右大臣の女

御—三條御

息所

しとく—師

徳

室—僧房

せかなくに絶えと絶えにし山水やまみづのたれ忍しのべとか聲を聞かせむ

○先帝の御時に、右大臣の女御みまご、うへの御局みつぼにまうのほり給ひて、おはしましやすると

下待したまち給ひけるに、おはしまさざりければ、

日ぐらしに君まつ山のほととぎす間はぬ時にぞ聲もをしまぬ

となむ聞えけり。

○比叡ひえの山に、念覺ねんかくといふ法師やまこもりの山籬やまかきにてありけるに、しとくにてましくける大徳だいとくの

早う死にけるが、室むろに松の木まつの枯れたるを見て、

主ぬしもなき宿の枯れたる松見れば千代過ぎにける心地こころちこそすれ

と詠みければ、かの室むろに泊とまりたりける弟子ども、あはれがりけり。この念覺はとし子が

兄あにいなりけり。

○梓かつらの皇女みかみ、密みそかに逢ふまじき人にあひ給ひたりけり。男の許もとに、詠みて遣やこせ給へりける。

それをだに思ふ事とて我が宿を見きとないひそ人のきかくに

かへし、

かしは木の森の下草おいのよにかかる思ひはあらじとぞおもふ
となむいひける。

○良少將、太刀の緒にすべき革を求めければ、監の命婦なむ、我が許にありといひて、
久しく出さざりければ、

あだ人のたのめわたりしそめかはの色の深さを見でや止みなむ

とよめりければ、監の命婦めでくつがへりて、もとめてやりけり。

○陽成院の二の皇子、俊蔭中將の女に、年比すみ給ひけるを、女五の皇女を得奉り給ひ
て後、更に訪ひ給はざりければ、今はおはしますまじきなめりと思ひ絶えて、いと哀に
て居給へりけるに、いと久しくありて思ひがけぬ程に、おはしましたりければ、え物も
聞えで、逃けて戸の内に入りけり。歸り給ひて、皇子あしたに、「などか、年比の事も
申さむとて、まうで來たりしに、隠れ給ひにし」とありければ、詞はなくてかくなむ。

そめかは―
染革、筑前
の名所染川
陽成院の二
の皇子―元
平親王
女五の皇女
―依子内親
王

とありけり。

○おなじ人、同じ親王の許に、久しくおはしまさざりければ、秋のことなりけり。

世に經れど戀もせぬ身の夕さればすすろに物の戀しきやなぞ

とありければ、かへし。

夕ぐれに物おもふ時は神無月われもしぐれにおとらざりけり

となむありける。心に入らであしくなむ詠み給ひける。

○故式部卿宮を、桂の皇女、切によばひ給ひけれど、おはしまさざりける時、月のいと

おもしろかりける夜、御文奉り給へりけるに、

久かたの空なる月の身なりせば行くとも見えで君は見てまし

となむありける。

○良少將、兵衛佐なりけるころ、監の命婦になむ住みける。女のもとより、

柏木の森の下草おいぬとも身をいたづらになさずもあらなむ

七種の若菜
を服すれば
人をして病
なからしむ
るよし漢土
の傳説
おなじ人―
前の御息所
桂の皇女―
宇多の皇女
孚子内親王
良少將―良
半義方
かしは木―
兵衛の異名

釣殿の宮に
云々―陽成
院の配綏子
内親王の宮
殿、こゝに
て天皇が若
狭の御を召
されし也
式部卿の宮
―敦慶親王
すみける―
通ひける
二條の御息
所―藤原善
子、右大臣
定方の女、
醍醐帝の女
親―
若菜―七日

○陽成院のすけの御、繼父まといちちの少將の許に、

春の野ははるけながらも忘草わすれぐさ生ふるは見ゆるものにぞありける

少將、かへし、

春の野におひじとぞ思ふわすれぐさつらき心のたねしなければ

○故式部卿宮こしきまぎやうのみやの、出羽いではの御ごに、繼父まといちちの少將せうしやうのすみけるを、離れて後、女薄すくきに文をつけ

て遣りたりければ、少將、

秋風になびく尾花おはなはむかし見したもとに似てぞこひしかりける

出羽の御、かへし、

たもとともしのばざらまし秋風をなびく尾花のおどろかさすは

○故式部卿こしきまぎやう、二條の御息所に絶え給ひて、又の年の正月ひつきの七日ななかの日、若菜わかな奉り給ひける

に、

ふるさとと荒れにし宿やどの草の葉も君がためとぞまづは摘みける

訪はぬ人の
云々一條
の君の召使
の女に逢ひ
たればこと
づけし也

きかくき
くの延音

本院の北の
方一藤原時
平の妻

御おとうと
一妹

猿澤の云々
一奈良の帝
を恨みて身
を投げし采
女に比せし
ならむ

くなりける程にしも、訪はざりければ、あやしと思ひありく程に、訪はぬ人の従者の女なむ逢ひたりけるを見て、かくなむ。

「思ひきや過ぎにし人の悲しきに君さへつらくならむものとはと聞えよ」といひければ、かへし。

なき人を君がきかくにかけじとて泣く泣く忍ぶほどな恨みそ

○本院の北方の御おとうとの童名を、おほつほねといふいまそがりけり。陽成院の帝に奉りけるに、おはしまさざりければ、詠みて奉りける。

あらたまのとしは経ねども猿澤の池の玉藻は見つべかりけり

○又釣殿の宮に、若狭の御と云ひける人を召したりけるが、又も召しなかりければ、詠みて奉りける。

敷ならぬ身に置くよひの白玉は光見えさすものにぞありける

と詠みて奉りければ、見給ひて、「あなおもしろの玉の歌よみや」となむ宣ひける。



孝子院の若
宮一韶子内
親王

の若宮につき奉り給ひて程經はつへにけり。子どもなどありければ、事も絶えず、同じ所になむ住み給ひける。さて詠みてやり給ひける。

すみの江の松ならなくに久くも君と寝ぬ夜のなりにけるかな
とありければ、かへし。

久くはおもほえねどもすみの江の松やふたたび生なひ代かるらむ

となむありける。

○おなじ大臣おとぎ、かの宮をえ奉り給ひて、帝みかどのあはせ奉り給へりけれど、はじめころ忍しのびて、夜々よるよる通ひ給ひける比、かへりて、

あくといへばしづ心なき春の夜の夢とや君をよるのみは見む

○右馬允藤原千兼さだむねといふ人の妻に、とし子といふ人なむありける。子ども數多あまた出いで來て、思ひて棲すみける程に、なくなりければ、限かぎりなく悲しくのみ思ひありく程に、内うちの藏くら人ににてありける。一條君いちじょうといひける人は、とし子をいとよく知れりける人なりけり。か

同じおとぎ
一源大納言
千兼一忠房
の男
内の藏人一
女藏人
一條の君一
貞平親王の
女

神の一夜づつ巡行する如く君も通ふ方多ければ
おほとのごもり—御寢桃園の兵部卿宮—敦固親王
北の方—慶子内親王
堤—賀茂川堤
かは—彼は、川
忠房—太宰大貳廣敏孫
信濃掾興嗣の男

大澤のいけの水ぐき絶えぬともなにか恨みむさかのつらさは

御返はこれにや劣りけむ、人忘れにけり。

○桃園の兵部卿宮うせ給ひて、御はて九月晦日にし給ひけるに、とし子、かの宮の北方に奉りける。

大かたの秋のはてだに悲しきに今日はいかでか君くらすらむ限なく悲しと思ひて、泣き居給へりけるに、かくいへりければ、

あらばこそ初も終も思ほえめ今日にもあはで消えにしものをとなむかへし給ひける。

○監の命婦、堤にありける家を、人に賣りて後、粟田といふ所に住きけるに、その家の前を渡りければ、詠みたりける。

ふるさとをかはと見つつも渡るかな淵瀬ありとは宜もいひけり

○故源大納言君、忠房のぬしの御女、東の方を、年比思ひてすみ渡り給ひけるを、亭子院

たぐへやる
―附加しや
る

たぐへやる我がたましひをいかにしてはかなき空にもて離るらむ
となむ、下りける日いひやりける。

○男女オトコメ 相知りて年経けるを、いさよかなる事によりて離れにけり。飽くとしもなく、
やみにしかばにやあらむ、男も哀と思ひけり。かくなむ云ひ遣りける。

逢ふことは今はかぎりとおもへども涙は絶えぬものにぞありける

女、いとあはれと思ひけり。

○監の命婦けんのみづめの許に、中務宮おはしまし通ひけるを、「方の塞がれば、今宵はえなむ参う
でぬ」と宜へりければ、その御返事に、

逢ふ事のかたはさのみぞふたがらむひと夜めぐりの君となれば

とありければ、方塞がりたりけれど、おはしましてなむ、大殿ごもりにける。かくて又、
久しく音もし給はざりけるに、「嵯峨の院に狩すとてなむ、久しく消息なども物せざり
ける。いかに覺束なく思ひつらむ」など宜へりける。御かへりことに、

監の命婦―
近衛將監の
女などの命
婦たりし者
中務の宮―
元良親王
一夜めぐり
―天一神の
こと、その

—正月除目に四位に叙せられんことを望みし也

玉櫛笥—ふ

たの枕詞

あけながら

—開け、赤、

赤は五位の

袍色

前坊の君—

前皇太子保

明親王

きさいの宮

—保明の母

藤原穩子

ゆふし—忌

はし

あらず、といふ。定なることいかで聞かむ、と思ふ程に、京のたよりあるに、近江守公忠君の文をなむ持て來たりけり。いとゆかしう嬉しうて、あけて見れば、萬の事ども書きもていき、月日などかきて奥に、

玉櫛笥ふたとせ逢はぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし

これを見て、限なく悲しくてなむ泣きける。四位にならぬよし、文の詞にはなくて、只かくなむありける。

○前坊の君うせ給ひにければ、大輔、限なく悲しくのみ覺ゆるに、きさいの宮、后に立ち給ふ日になりければ、ゆふしとて隠しけり。さりければ、詠みて出しける。

わびぬれば今はと物を思へどもここに似ぬはなみだなりけり

○朝忠中將、人の妻にてありける人に、忍びてあひわたりけるを、女も思ひかはしてすみける程に、かの男、他國の守になりて下りければ、これもかれも、いとあはれと思ひけり。さて詠みて遣しける。



鬚籠―竹籠
の竹の端を
編み残して
鬚の如くし
たるもの
とし子―藤
原千兼の妻
よりくみ―
鬚籠などを
板に結び付
くる紐
かたかけ―
島蔭などの
こと
しら浪の―
さわぐの序
野大貳―太
宰大貳小野
好古
正月の加階

てけり。さてその十月朔日かみなつきついたちの日、このもの、いそぎ給ひける人の許におこせたりける。

千々の色ちぢにいそぎし秋は過ぎにけり今は時雨しげんに何を染めまし

その物急いそぎ給ひける時は、まもなく、これよりも彼よりも言ひかはし給ひけるを、それより後は、そのこととやなかりけむ、消息せうそくもいはで、十二月しはすの晦日つごもりになりければ、

かたかけの船にや乗りししら浪の騒さわぐときのみ思ひいづる君

となむいへりけるを、その返かへしをもせで、年越としこえにけり。さて二月ふたつきばかりに、柳のしなひ、物よりけに長きなむ、この家あやぢにありけるを折りて、

青柳あやぢのいとうちはへてのどかなる春日はるびしもこそ思ひいでけれ

とてなむ、遣やり給へりければ、いと二になく愛めでて、後までなむ語りける。

○野大貳やだいじ、純友すみともがさわぎの時、討手うての使つかひにされて、少將おほやけにて下くだりけり。公おほやけにも仕つかうまつり、四位にもなるべき年に當りければ、正月ひつきの加階かかいたうほ賜りのこと、いとゆかしう覺えけれど、

京より下る人もささく聞えず。或人に問へど、四位になりたりともいふ。或人はさも

違ひつゝ—
内裏の意志
に反しつゝ

大徳十僧

たびね—旅
籠、目根

故源大納言

—源清隆

京極御息所

—時平の女

名は褒子宇

多帝の皇后

供に、これなむ後れ奉らで候ひける。かゝる御ありきし給ふ、いと悲しきことなりとて、
内裏より少將、中將など、此彼候へとて、奉らせ給ひけれど、違ひつゝありき給ふ。和
泉國に至り給ひて、目根といふ所におはします夜あり、いと心ほそうかすかにておはし
ます事を思ひて悲しかりけり。さて目根といふことを、歌に詠めと仰事ありければ、こ
の良利大徳、

故郷のたびねの夢に見えつるはうらみやすらむまたと問はねば

とありけるに、皆人泣きてえ詠ますなりにけり。その名をなむ、寛運大徳といひて、後
までもさぶらひける。

○故源大納言宰相におはしける時、京極御息所より、亭子院の御賀仕うまつり給ふとて

「かゝる事をなむせむと思ふ、捧物、一枝二枝せさせて賜へ」と聞え給ひければ、鬚籠を

敷多せさせ給ひて、とし子に色々に染めさせ給ひけり。敷物の織物ども、色々に染め、よ

りくみ何かと皆あづけてせさせ給ひけり。そのものどもを、九月晦日に、皆いそぎはて

大和物語

上之卷

亭子院—宇
多天皇
おり居—位
を退き
弘徽殿—清
涼殿の北、
女御などの
居る所
伊勢の御—
藤原繼蔭の
女、宇多天
皇の更衣、
御は婦人の
尊稱

○亭子院の帝、今はおり居給ひなむとする比、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけける。

わかるれどあひもをしまぬ百敷を見ざらむことのなにか悲しき
とありければ、帝御覽じて、その傍に書きつけさせ給ひける。

身一つにあらぬばかりをおしなべて行き廻りても何か見ざらむ
となむありける。

○帝おり居給ひて、又の年の秋、御髪おろし給ひて、所々山踏し給ひて、行ひ給ひけり。
備前の掾にて、橘良利といひける人、内裏におはしましける時、殿上に候ひて、御髪お
ろし給ひければ、やがて御供に頭おろしてけり。人にも知られ給はで、歩き給ひける御

伊勢物語終

と詠めりけるにめでて、行かむと思ふ心なくなりけり。

〔百廿四〕 昔ひがし、男、いかなりけることを思ひける折にか、よめる。

思ふこといはずただに止やみぬべきわれとひとしき人しなれば

〔百廿五〕 昔ひがし、男、わづらひて、心地死こころぬべくおほえければ、

つひにゆく道みちとはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを



は氏子中の女その合へる男の數程鍋をかづきて詣づる風俗ありきといふおもひー思、火手にむすびー手にすくふこと、深く契りかはしう諭

〔百廿一〕 昔、男、梅壺より雨に濡れて人のまかり出づるを見て、

うぐひすの花をぬふてふ笠もがな濡るめる人にきせてかへさむ

かへし、

鶯のはなを縫ふてふかさはいなおもひをつけよ乾してかへさむ

〔百廿二〕 昔、男、契れることあやまれる人に、

山城の井手のたま水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

といひやれど、答もせず。

〔百廿三〕 昔、男ありけり。深草に住みける女を、やうくあきがたにや思ひけむ、

かよる歌を詠みけり。

年を経てすみこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ

女、かへし、

野とならば鶉となりて鳴きをらむ狩にだにやは君はこざらむ

「何事も皆よくなほりにけり」となむいひやりける。

〔百十七〕 昔、帝、住吉に行幸し給ひけり。

われ見てもひさしくなりぬ住吉の岸のひの松いく代へぬらむ

御神現形したまひて、

むつまじと君は知らなみ瑞穂の久しき世よりいはひそめてき

〔百十八〕 昔、男、久しく音もせて忘るゝ心もなく、「参り來む」といへりければ、女、

玉葛はふ木あまたになりぬれば絶えぬころのうれしけらなし

〔百十九〕 昔、女、あだなる男のかたみとて、置きたるものどもを見て、

かたみこそ今はあだなれこれなくは忘るる時もあらましものを

〔百二十〕 昔、男、女のまだ世へすと覺えたるが、人の許にしのびて物聞えて、後ほど

經て、

世へす一男
に合はぬ
筑摩のまつ
り一この祭

近江なる筑摩のまつりとくせなむつれなき人のなべのかすみむ

仁和の帝—
光孝天皇
もとつきに
ける—もと
より鷹飼の
方につきた
る

長からぬいのちのほどに忘るるはいかにみじかき心なるらむ

〔百十四〕 昔、仁和の帝、芹川に行幸し給ひける時、今はさること似けなく思ひけれど、もとつきにける事なれば、大鷹の鷹飼にてさぶらはせ給ひける摺狩衣の袂に、書きつけける。

翁さび人などがめそ狩ごろも今日ばかりとぞたづもなくなる

おほやけの御氣色あしかりけり、おのがよはひを思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりとや。

〔百十五〕 昔、陸奥國にて、男女すみけり。男「都へいなむ」といふ。この女、いと悲しうて、「馬のはなむけをだにせむ」とて、沖井手、都島といふ所にて、酒飲ませてよめる。

おきのるて身を焼くよりも悲しきはみやこしまへの別なりけり

〔百十六〕 昔、男、すどろに陸奥國まで惑ひいにけり、京に思ふ人にいひやる。

なみ間より見ゆる小島の濱びさしひさしくなりぬ君に逢ひみで

いへりければ、男。

思ひ餘り出でにし魂のあるならは夜深く見えばたまはずびせよ

〔百十一〕 昔、男、やんことなき女の許に、なくなりけるを弔ふやうにて、いひやりける。

古はありもやしけむいまだ知るまだ見ぬ人を戀ふるものとは

かへし、

下紐のしるしとするも解けなくに語るがことは戀はずぞあるべき

又、かへし、

戀しとはさらにもいはじ下紐の解けむを人はそれと知らなむ

〔百十二〕 昔、男、戀にいひ契りける女の、ことざまになりければ、

須磨のあまの鹽やくけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

〔百十三〕 昔、男、やもめにて居て、

たまはずび一人魂を見たる時のまじなひ、後世には魂は見つぬしは誰とも知られども結ひぞとむる下がへのつまの歌を三度唱へて衣の下がへの積を結ぶ事あり
いたみしき故に

身をしろ雨
— 涙

しとよ—俗
言のびつし
より

衣手—袖

といへりければ、男いたうめでて、今までまきて文箱ふせこに入れてありとなむいふなる。

男、文おこせたり。えて後の事なりけり。「雨の降りぬべきになむ見わづらひ侍はべる。身

さいはひあらば、この雨は降らじ」といへりければ、例れいの男、女に代りて詠みてやらす。

かすかすに思ひ思はずとひがたみ身をしろ雨は降りぞまされる

と詠みてやれりければ、蓑みのも笠かさもとりあへで、しとよに濡ぬれてまどひ來にけり。

〔百八〕むかし、女、人の心を怨みて、

風吹けばとはになみこす石いしなれやわが衣手ころもてのかわくときなき

と、常つねのことぐさにいひけるを、聞きおひける男、

よひ毎にかはづのあまた鳴く田には水こそまされ雨は降らねど

〔百九〕昔むかし、男、友ともだちの人を失うしなへるが許にやりける。

花よりも人こそあだになりにつれ何れをさきに戀こひひむとか見し

〔百十〕昔むかし、男、密みそかに通ふ女ありけり。それが許より、「今宵夢こよひゆめになむ見え給ひつる」と

食はせよ

わくし貫く

なめしし無

禮なり

ちはやぶる

神の枕詞

くくるし候

染にするこ

と

をさくしし

巧なる

案草案

ひびてし瀧

れて

〔百五〕 貴、男「かくては死ぬべし」といひやりたりければ、女、

しら露は消なばけなむ消えずとて玉にぬくべき人あらむを

といへりければ、なめしと思ひけれど、志はいやまさりけり。

〔百六〕 貴、男、親王たちの酒遣し給ふ所にまうでて、立田河のほとりにて、

ちはやぶる神代も聞かすたつた河からくれなるに水くくるとは

〔百七〕 貴、あてなる男ありけり、その男の許なりける人を、内記にありける藤原敏行

といふ人よばひけり。されどまだ若ければ、文をさくしからず、ことばらいひ知ら

ず、我や歌は詠まざりければ、かのあるじなる人、案を書きて書かせてやりけり。めで

まどひにけり。さて、男のよめる。

つれづれのながめにまさる涙川そでのみひちて逢ふよしちなし

かへし、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひづらめなみだ川身さへ流ると聞かばたのまむ

背くとて雲には乗らぬものなれど世のうき事ぞよそになるてふ

となむいひやりける。齋宮の宮なり。

〔百三〕 昔、男ありけり。いとまめに實様にて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむ仕うまつりける。心あやまりやしたりけむ、親王たちの使ひ給ひける女をあひいへりけり。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめば彌はかなくもなりまさる哉

となむ詠みてやりける。さる歌のきたなけさよ。

〔百四〕 昔、ことなる事なくて尼になりける人ありけり。形をやつしたれど、物やゆかしかりけむ、賀茂の祭見に出でたりけるを、男、歌よみてやる。

世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよともたのまるるかな

これは、齋宮の物見給ひける車に、かく聞えたりければ、見さしてかへり給ひにけりとなむ。

深草の帝
仁明天皇

さる歌の云々
主ある女に通じて
思ひ改めも
せぬ心を謗
りしなり
うみ海、
倦み

あまー海
士、尼

めくはせよ
目くはせ
せよ、和布

まらうどさ
ね—主賓

あるじのは
らから—業
平
すまひ—辭
し

太政大臣—
藤原其房

うんじて—
俺みて

聞きて、殿上（たむけの上）にありける。左中辨藤原良近（よしの）といふ人をなむ、まらうどさねにて、その日は舞應（まひ）まうけししたりける。なさけある人にて、瓶（びん）に花をさせり、その花の中に、あやしき藤（ふじ）の花ありけり。花のしなひ三尺六寸（さんしゃくろくすん）ばかりなむありける。それを願（ねが）にて歌よむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる。あるてまうけし給ふと聞きて来た（き）りければ、とらへて詠ませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、強（つよ）ひて詠ませければ、かくなむ。

咲く花のしたにかくる人多みありしにまさる藤（ふじ）のかけかし。

「など、かくしも詠む」といひければ、「太政大臣（たうていだいじん）の榮花（もはな）の盛（も）にみまぞかりて、藤氏（ふじのうぢ）のことに榮（も）ゆるを思ひて詠める」となむいひける。皆人請（みなびと）らすなりにけり。

〔百二〕昔（むかし）、男ありけり。歌はよまざりけれど、世の中を思ひ知りたりけり。あてなる女の尼（あま）になりて、世の中を思ひうんじて、京（みやこ）にもあらず、遙（はるか）なる山里（やまのあたりに）に住みけり。もと親族（おとこ）なりければ、詠みてやりける。

我がたのむ
古今集、

かぎりなき

ひをりの日

―五月六日

右近衛の官

人どもの騎

射をする日

あやなく―
わけもなく

我がたのむ君がためにと折る花は時しもわぬものにぞありける

と詠みて奉りたりければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に祿たまへりけり。

〔九十九〕 昔、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の下簾よ

りほのかに見えければ、中將なりける男の詠みてやりける。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日やながめ暮さむ

かへし、

知る知らぬ何かあやなくわきていはむ思のみこそしるべなりけれ

後は誰と知りにけり。

〔百〕 昔、男、後涼殿のはざまを渡りければ、あるやんごとなき人の御局より、忘草を

忍草とやいふとて、さし出ださせ給へりければ、賜はりて、

わすれ草生ふる野邊とは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまむ

〔百一〕 昔、左兵衛督なりける在原行平といふ人ありけり。その人の家によき酒ありと



えー縁

天の逆手―
吉事には手
を前方にて
打ち凶事
には手を後
方にまはし
て打つとの
説あれど詳
ならず
堀河大臣―
右大臣藤原
基經、後に
太政大臣
太政大臣―
忠仁公藤原
良房

り。さりければこの女の兄せうご、俄にはかにむかへに來たり。さればこの女、かへでの初紅葉はつもみぢをひ
ろはせて、歌を詠みて書きつけておこせたり。

秋かけていひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ

と書きおきて、「かしこより人おこせば、これをやれ」とていぬ。さて、やがて、後のちつひ
に、今日まで知らず。善よくてやあらむ、悪あしくてやあらむ、いにし所も知らず、かの男
は、天あまの逆手さかてをうちてなむ呪のろひ居をるなる。むくつけきこと、人の呪のろひ事は、負おふものに
やあらむ、負おはぬものにやあらむ、今こそは見め、とぞいふなる。

〔九十七〕昔むかし、堀河ほりかは大臣のおほいもうちぎみと申すいまぞかりけり。四十賀よそぢのが、九條きゅうじょうの家にてせられける

日、中將ちゅうじやうなりける翁おきな、

さくら花散りかひ曇れおいらくの來むといふなる道みちまがふがに

〔九十八〕昔むかし、太政大臣おほきおほいもうちぎみと聞ゆるおはしけり。仕つかうまつる男なかつき、九月くつきばかりに、梅うめのつ

くり枝えだに雉きじをつけて、奉たてるとて、



千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

〔九十五〕 昔、二條后に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見かはしてよばひわたりけり。「いかで物ごしにだに對面して、おほつかなく思ひつめたること、すこしはるかさむ」といひければ、女いと忍びて、物ごしに逢ひにけり。物語などして、男、

ひこほしに戀はまさりぬ天の河へだつる關をいまはやめてよ

はるかさむ
—晴さむ
ひこほし—
牽牛星

この歌にめでて、逢ひにけり。

〔九十六〕 昔、男ありけり。女をとかくいふこと月日へにけり。石木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、やうくあはれと思ひけり。その比六月のもちばかりなりければ、女、身に瘡一つ二つ出で來にけり。女いひおこせたる、「今は何の心もなし、身に瘡も一つ二つ出で來たり。時もいと暑し。少し秋風吹き立ちなむとき必ずあはむ」といへりけり。秋立つころほひに、こよかしこより、その人の許へ行なむずなりとて、口舌出で來にけ

瘡—腫物

口舌—やか
ましき事

小

にやき

おふなおふ

な一分に睡
ひて

なぞへなく

一此類なく

睡じて一あ
さけりて

ちへまさる

一非常に立

舞る、異本
たちまさる

〔九十三〕 貴男、身は睡しくて、いとになき人を思ひかけたりけり、少し頼みぬべき

様にやありけむ、臥して思ひ起きて思ひ、思ひわびて詠める、

おふなおふな思ひはすべしなぞへなく高き睡しき苦しかりけり

昔もかゝる事は、世のことわりにやありけむ、

〔九十四〕 貴、男女、ありけり、いかがありけむ、その男捷ますなりにけり、後に男あ

りけれど、子ある中なりければ、こまかにこそあらねど、時々ものいひおこせけり、女

がたに、繪かく人なりければ、扇にかきにやれりけるを、今の男のものすとて、一日二

日おこせざりけり、かの男いとつらくて、「おのが聞ゆる事をば今まで給はねば、ことわ

りと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」とて、啼じて詠みてやれりけ

る、時は秋になむありける、

秋の夜は春日わするものなれやかすみに露やちへまさるらむ

となむ詠めりける、女、かへし、

あぢきなく
云々―益も
無く、神の
崇にて死し
たりといづ
れの神に無
き名を負す
るならむ
物ごしに―
簾又は障子
を隔てゝ
匂ふとも―
「匂ふらめ」
とも
棚なし小舟
―舟棚のな

おほかたは月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの

〔八十九〕 昔、賤しからぬ男、我よりは勝りたる人を思ひかけて、年經ける。

人知れずわれ戀死なばあぢきなくいづれの神になき名おふせむ

〔九十〕 昔、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれとや思ひけむ、「さらば、明日物ごしにても」といへりけるを、かぎりなく嬉しく又疑はしかりければ、おもしろかりける櫻につけて、

さくら花けふこそかくも匂ふらめあな頼みがたあすの夜のこと

といふ心ばへもあるべし。

〔九十一〕 昔、月日の行くをさへなけく男、三月の晦日がたに、

をしめども春のかぎりの今日の日の夕暮にさへなりにけるかな

〔九十二〕 昔、戀しさに來つゝかへれど、女に消息をだにえせて詠める、

あしべ漕ぐ棚なし小舟いくそたび行きかへるらむ知る人もなみ

笑ふことに
つひに歌
の拙きを笑
ひ興さめて

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のまばきに

と詠めりければ、かたへの人笑ふことにやありけむ、この歌にめでこ止みにけり、歸り
来る道遠くて、うせにし宮内職、もちよしが家の内くるに日暮れぬ、やどりの方を見や
れば、海士のいさり火多く見ゆるに、かのあるじの男よむ、

はるる夜の星か河邊の曇かもわが住むかたのあまの焚く火か

と詠みて家に歸り來ぬ、その夜、南の風吹きて波いとたかし、つとめて、その家のめのこ
ども出でて、浮海松の波に寄せられたるを拾ひて、家の内にもて來ぬ、女がたより、そ
の海松を高杯に盛りて、棚をおほひて出したる、棚にかけり、

波つ海のかざしにさすといはふ瀬も君がためには情まざりけり

田舎人の歌にては、あまれりやたらすや、

(八十八) 昔いと若きにはあらぬ、これかれ友だらども、集りて月を見て、それがな

かにひとり、

波つ海―海
神
かごし―挿
頭、髪にさ
す飾



とてまみけり。男も女も、あひ離れぬ。宮仕になら出でにける。

(八十七) 貴男、津の國毛原郡重屋の里にしるよしして、いきて住みけり。昔の歌に、

あしの屋のなだの鹽屋いとまなみ黄楊の小橋もささず来にけり

いとまなみ
— 暇無き故
に

と詠みけるぞ。この里を詠みけるなりける。ここをなむ重屋の淵とはいひける。この男

このかみ—
兄、兼平右

なま宮仕しければ、それを使にて、衛府兵ども集り来にけり。この男のこのかみも衛府督

兼衛輔佐、
行平左兵衛

なりけり。その家の前の海のほとりに遊びありきて、「いざ、この山の上にあるといふ布

督なりし時
の事なるべ

引の瀧見に登らむ」といひて登りて見るに、その瀧ものよりことなり。高さ二十丈、廣さ

し

五丈ばかりなる石のおもてに、白絹に岩を包めらんやうになむありける。さる瀧の上に、

わらふだ—
調座、藝に

わらふだの大きしてさし出でたる石あり。その石の上に走りかよる水は、小柑子、栗の

て遣れる歌
物

大きにてこほれ落つ。そこなる人にみな瀧の歌よます。かの衛府督まづ詠む。

我が世をば今日かあすかと待つかひの涙の瀧といづれ高けむ

あるじ、次によむ。

俗なる禪師
なる一俗人
と法師と

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もといのる人の子のため

〔八十五〕 昔、男ありけり。童より仕うまつりける君、御髪おろし給うてけり。正月には必ずまうでけり。おほやけの宮仕しければ、常にはえまうです。されど、もとの心失はでまうでけるになむありける。昔仕う奉りし人、俗なる、禪師なる、あまた参り集りて、正月なればことだつとて、大御酒賜ひけり。雪こほすがごと降りて、終日に止まず。みな人酔ひて、雪に降り籠められたり、といふを題にて歌ありけり。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞ我が心なる

と詠めりければ、親王といいたうあはれがり給うて、御衣脱ぎて賜へりけり。

〔八十六〕 昔、いと若き男、若き女をあひいへりけり。おのく親ありければ、つよみていひさして止みにけり。年比へて女の許に、猶こよろざし果さむとや思ひけむ、男、歌を詠みてやれりけり。

今までに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまさま年の経ぬれば

小野一山城
愛宕郡にお
り

小野にまうでたるに、比叡山の麓なれば、雪いと高し。強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つれなくといと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事なと思ひ出でて聞えけり。さても侍ひてしがな、と思へど、公事どもありければ、元侍はで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

とてなむ泣くく來にける。

●(八十四) 昔、男ありけり。身はいやしなから、母なむ宮なりける。その母長閑といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばく得まうです。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さる程に十二月ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、歌あり。

老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まくほしき君哉

かの子いたう打ち泣きて詠める。

宮一伊登内
親王、業平
の母
いとかなし
うし一勝れ
て愛し
とみ一頼の
字音、念の
意

ひととせにひとたび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ
かへりて宮みやに入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒飲さけのみ物語ものがたりして、あるじの親王みこ、酔よひて入り
給ひなむとす。十一日の月も隠かくれなむとすれば、かの馬頭うまのかみのよめる。

あかなくにまだきも月の隠かくるるか山のはにけて入れずもあらなむ

親王みこに代り奉りて、紀有常きのありつね、

おしなべて峯みねもたひらになりななむ山の端はなくは月も入らじを

〔八十三〕昔むかし、水無瀬みなせにかよひ給ひし惟喬親王これたかのみこ、例れいの狩かりしにおはします。供ともに馬頭うまのかみなる

翁おきなつかう奉まっれり。日ひごろ經へて宮みやにかへり給うけり。御送おんおくりして疾さくいなむと思ふに、大御おほみ

酒さけたまひ祿ろくたまはむとて遣つかはさざりけり。この馬頭うまのかみ心もとながりて、

まくらとて草くさひき結むすぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

と詠やみける。時は三月やよひの晦つごもり日ひなりけり。親王みこ大殿籠おほどのこもらであかし給うてけり。かくしつよ

まうで仕つかうまつりけるを、思おもひの外ほかに御髮みぐしおろし給うてけり。正月じつぎにをがみ奉らむとて、

あかなくに
―飽あかぬに
まだき―時
より早く
おしなべて
―一般いぱんに
入らじを―
一本いっぴんかくれ
じ
祿―御下賜
品
大殿籠おほどのこもらで
―御寢おんねなら
で

上中下—上
萬中萬—萬

おほみさま
ある—大御
酒を獻す

の家、その院の櫻（さくら）ことにおもしろし、その木の下（もと）におり居て、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり、馬頭（うまがしら）なりける人の詠める、

世のなかに絶えてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし
となむ詠みたりける、また、人の歌、

散ればこそいとど櫻（さくら）はめでたけれうき世になにか久しかるべき

とて、その木の下は立ちてかへるに、日暮（ひぐさ）になりぬ、御供（みまけ）なる人、酒をらたせて野より出できたり、この酒を飲みてむとて、よき所をもとめ行くに、天河（あまの川）といふ所に至りぬ、親王（おみ）に馬頭（うまがしら）おほみさまある、親王の宜（よろこ）ひける、一交野（まじり）を狩りて天河の邊（かたぎは）に至るを題（だい）にて、歌よみて盃（さかづき）させしと宜（よろこ）ひければ、かの馬頭（うまがしら）よみて奉りける、

狩りくらし權邊津女（むらぎづな）に宿からむあまの河原（かはら）にわれは來にけり

親王（おみ）この歌をかへすくゝ誦（よ）し給うて、かへし得し給はず、紀有常御供（きあるつねのみまけ）に仕（つか）うまつれり、
それがかへし、

伊勢物語



かたる一乞
食、卑下し
ていふ

惟喬親王一
文德天皇の
第一皇子、
母は紀名虎
の女

しろく語りて仕み給ひけり。十月の晦日がた、菊の花うつろひさかりなるに、紅葉の千種に見ゆる折、親王連おはしまさせて、夜ひと夜酒飲しあそびて、夜あけもて行くほどに、この殿のおもしろきを褒むる歌よむ。そこにありけるかたる翁、振敷の下にはひありきて、人にみな詠ませ果て詠める。

鹽竈しほがまにいつか來にけむあさなぎに釣する舟はここによらなむ

となむ詠みける。陸奥國あきのくににいきたりけるに、怪しくおもしろき所々おはかりけり。わがみかど六十餘國よそくにの中に、鹽竈しほがまといふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、かの翁おきな更にことをめでて、鹽竈しほがまにいつか來にけむ、とはよめりける。

(八十二) 昔、惟喬親王と申すみこおはしましけり。山崎やまざきのあなたに水無瀬みづなせといふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の花盛には、その宮へなむおはしましける。その時右馬頭みぎのうまのあたまなりける人を、常に牽ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懸にもせて酒を飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野の渚まじのしづみ



舍人一説傳
輔使の官

氏一在厚氏

千尋ある竹
一崑崙山の
北に生ふと
いふ、親王
を竹に比す
る事は梁の
孝王の故事
に由る

人々に歌よませ給ふ、右馬頭なりける人のをまむ、青き酒をきざみて、馬輪のかたに、この歌をつけて奉りける。

あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなれば
となむよめりける。

(七十九) 昔、氏のなかに親王うまれ給へりけり、御産屋に人々歌よみけり、御祖父がたなりける翁の詠める、

わが門に千ひろある竹を植ゑつれば夏冬たれか隠れざるべき

これは、貞數親王、時の人、中將の子となむいひける、兄の中納言行平の女の腹なり。

(八十) 昔、おとろへたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり、三月の晦日に、その日雨そほふるに、人の許へ折りて奉らすとて詠める、

れつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

(八十一) 昔、左大臣いまだぞかりけり、賀茂川の邊六條わたりに、家をいとおも

と詠みたりけるを、今見ればよくもあらざりけり。そのかみはこれや勝りけむ、あはれがりけり。

〔七十八〕 昔、多賀幾子と申す女御おはしましけり。亡せ給ひて、七々日の御わざ安祥

寺にてしけり。右大將藤原常行といふ人いまぞかりけり。その御わざにまうで給ひて、

かへさに
歸路に

かへさに、山科の禪師の親王おはします。その山科の宮に、瀧落し、水走らせなどして、

おもしろく造られたるにまうで給うて、「年比よそには仕う奉れど、近くはいまだ仕うま

つらず。今宵はこよに侍はむ」と申し給ふ。親王喜び給うて、夜のおましのまうけさせ

おまし―御
座

せたまふ。さるに、かの大將、いでてたばかり給ふやう、「宮仕のはじめに、たどなほ

なほ―何も
せず黙して

やはあるべき。三條の大行幸せし時、紀國の千里の濱にありけるとおもしろき石奉れ

御隨身―近
衛の舎人の

りき。大行幸の後奉れりしかば、或人の御曹子の前の溝にするたりしを、「島このみ給ふ

弓箭を執り
帶劍して供
する者

君なり。この石を奉らむ」と宣ひて、御隨身舎人してとりに遣す。いくばくもなく持

て來ぬ。この石、聞きしよりは見るは勝れり。これをたどに奉らばすどろなるべしとて、

其神一犬原
野神社、藤
原氏の祝神
天兒屋命を
祀り

田村の帝一
文徳天皇

右馬頭一雙
平のこと
目はたがひ
一捧物を山
と見ろがへ
て

御所にさぶらひける時、人々の禱たまはるついでに、御車よりたまはりて、詠みて奉りける。

おははらやをしほの松も今日こそは神代のこともおもひ出づらめとて、心にも悲しとや思ひけむ、いかが思ひけむ知らずかし。

(七十七) 貴、田村の帝と申すみかどおはしましけり。その時の女御、多賀幾子と申すみまぞかりけり、それ亡せ給ひて、安祥寺にて、みわざしけり。人々捧物奉りけり。奉りあつめたるもの千捧ばかりあり、そこばくの捧物を木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける。それを、右大將にいまぞかりける藤原常行と申すいまぞかりて、謀の終るほどに、歌よむ人々を召しあつめて、今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ。右馬頭なりける翁、目はたがひながら詠みける。

山のみな移りて今日に逢ふことは春のわかれをとふとなるべし

に兼名花を
引きて曰
く、「月中有
河上有桂
高五百丈」

〔七十四〕 むかし、男、女をいたう怨みて、

岩根ふみかさなる山にあらねども逢はぬ日おほく戀ひわたる哉

〔七十五〕 昔、男、「伊勢國に牽ていきて逢はむ」といひければ、女、

大淀の濱に生ふてふみるからにこころはなぎぬかたらはねども

といひて、ましてつれなかりければ、男、

袖ぬれて蟹の刈り乾すわたつ海のみるを逢ふにて已まむとやする

女、

岩間より生ふるみるめしつねなくは汐干汐満ちかひもありなむ

また、男、

なみだにぞ濡れつつしほる世の人のつらきこころは袖のしづくか

世に逢ふことかたき女になむ。

〔七十六〕 昔二條後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近

世に―世に
すぐれての
意

みるめからかたやいつこそ梓さしてわれに教へよあまのつり舟

(七十二) 貴男、伊勢の賣宮に、内の御使にて参れりければ、かの宮にすぎこといひける女、私事にて、

ちはやぶる神のいがきも越えぬべし大宮人の見まくほしさに

男、

懇しくは來ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに

(七十二) 貴男、伊勢國なりける女に、又え逢はで、國の國へいくとて、いみじう怨みければ、女、

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる涙かな

(七十二) 貴、そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女の、あたりをありきて思ひける。

月のうちの桂一和名抄

うらみ一浦見、戀か

いがき一忌部、神社の四圍の垣いさむ一戀す

齋宮のかみ
かけたる—
國守にて齋
宮寮の頭を
兼ねたる

かち—徒歩

續松—たい
松

と詠みてやりて、狩に出でぬ。野にありけど、心はそらにて、今宵だに人しづめて、いと疾く逢はむと思ふに、國守、齋宮のかみかけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜酒飲しければ、もはら逢ひごともえせて、明けば尾張國へ立ちなむとすれば、男も人知れず血の涙を流せどえあはず。夜やうく明けなむとする程に、女がたより出す盃のさらに、歌を書きて出したり。とりて見れば、

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば

と書きて末はなし。その盃のさらに、續松の炭して歌の末を書きつぐ。

またあふさかの關は越えなむ

とて、明くれば尾張國へ越えにけり。

齋宮は水尾の御時、文徳天皇の御女。これたかの皇子のいもうと。

〔七十〕昔、男、狩の使より歸り來けるに、大淀のわたりに宿りて、齋宮のわらはべにいひかけける。

わかれて一強
ひて
使買一使の
申のまたる
人

なりければ、いと懇こころよにいたはりけり、あはれ願ねがには背そむにいだし立ててやり、夕ゆふさりはかへりつよそこに來こさせけり、かくて懇こころよにいたつきけり、二ふた日ひといふ夜、男おとこ、われて建たはむといふ女をんなも、はた建たはじとも思おもへらず、されどいと人目ひとめ家いへければ、元建もとたはず、使買つかひとある人なれば、遠とほくも宿しゆくさず。女の聞きこも近ちかくありければ、女をんな、人をしづめて、いひとつばかりに男おとこの許もとに來りけり、男おとこ、はた寢ねられざりければ、外とほの方かたを見出みだして臥ふせるに、月の顯あるに、小こき童わらわをさきに立てて人立ひとたてり、男おとこいと槍やりしくて、我われが寢ねる所ところにゐて入りて、いひとつより丑うし三さんつまであるに、まだ何事なにごとも語かたはぬに歸かへりにけり、男おとこいと悲かなしくて寢ねすなりにけり、つとめて、いぶかしけれど、我われが人をやるべきにしもあらねば、いと心もとなくて待まちち居ゐれば、明あけ離はなれてしばしある程ほどに、女の許もとよりことばは無なくて、

君きみや來こし我われや行ゆきけむおもほえず夢ゆめかうつつか寢ねてかさめてか

男おとこ、いといたう泣なきて詠よめる、

かきくらす心のやみにまどひにき夢ゆめうつつとはこよひさだめよ

みつー三
津、見つ

うみー倦
み、海

かくろふー
隠す

おりあつー
馬より下
りて

狩の使ー勅
使を立てて
鷹もて鳥を
取らせらる
る使

難波津なにはづをけふこそみつの浦うらごととにこれや此世をうみわたる舟

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

〔六十七〕 むかし、男、逍遙せうようしに、思ふどちかい連ねて、和泉國いづみのくにへ二月ふたつきばかりにいきけ

り。河内國かうちのかくに生駒山いこまのやまを見れば、曇りくもみ晴れみ、たちるる雲やます、朝あしたより曇りて、晝ひる晴れた

り。雪いと白う木の末すえに降りたり。それを見て、かの行く人の中に、たゞ一人ひとりよみける。

昨日きのふけふ雲のたちまひかくろふは花のはやしを憂うれしとなりけり

〔六十八〕 昔むかし、男、和泉國いづみのくにへいきけり。住吉郡すみよしのほりすみよしの里住吉さきすみよしの濱はまを行くに、いと

おもしろければ、おりるつゝ行く。ある人、「住吉すみよしの濱はまを詠よめ」といふに、

かり鳴なきて菊きくのはなさく秋はあれど春のうみべにすみよしの濱はま

とよめりければ、みな人々ひとびとよますなりにけり。

〔六十九〕 昔むかし、男ありけり。その男、伊勢國いせのくにに狩かりの使つかひにいきけるに、かの伊勢いせの齋宮いづきのみや

なりける人の親おや、「常つねの使つかひよりは、この人能よくいたはれ」といひやれりければ、親おやのこと

しをり―折
壁し

をば流し通してければ、この女のいとこの御息所、女をばまかすでさせて、蔵に籠めてしをり給うければ、蔵にこもりて泣く、

海士のかる藻にすむ虫のわれからと音をこそななめ世をば怨みじ

と泣きをれば、この男、人の國より夜ごとに来つゝ、笛をいとおもしろく吹きて、聲をかきうてぞ哀にうたひける。かよれば、この女蔵に籠りながら、それにぞあはるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける、

さりともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして

と思ひ居り、男は女しあはねば、かくし歩きつゝ、人の國にありきて新しくうたふ、

いたづらに行きては来ぬるもの故に見まくほしさに誘はれつつ

水尾の御時なるべし、大息所も染殿の肩なり、五條后とも、

〔六十六〕昔、男、津の國に知る所ありけるに、兄弟友達などひきゐて、難波のかたに

いきけり、渚を見れば、舟どものあるを見て、

地
知る所―領

名の門



曹子—官人
女官などの
川區區

上殿寮—宮
庭の洒掃を
掌る者

風—調宜

御手洗川—
神社の傍を
流るる川

といひて、曹子におり給へば、例のこのみ曹子には、人の見るをし知らずで上り居ければ、この女思ひわびて里へのゆく、されば例のよき事と思ひて、いき通ひければ、曹子聞きて笑ひけり、つとめて上殿寮の見るに、言はとりて奥に抛け入れてのほりぬ、斯くかたはにしつゝ有りわたるに、身も徒になりぬべければ、遂に亡びぬべしとて、「此男いかんせむ、我がかゝる心やめ給へ」と佛神にも申しけれど、いや増りにのみ覺えつゝ、猶わりなく戀しうのみ覺えければ、除穢師、巫よびて、戀せじといふ鼓の具してなむいさける、破へけるまゝに、いとど悲しきこと數まさりて、ありしよりけに戀しく覺えければ、戀せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけすもなりにけるかな

といひてなむ往にける、

この帝は、顔貌よくおはしまして、佛の御名を御心に入れて、御聲はいと尊くてまをし給ふを聞きて、女はいたう泣きけり、かゝる君に仕うまつらで、宿世つたなく悲しきこと、この男にほだされて、とてなむ泣きける。かゝる程に帝聞し召しつけて、この男

さむしろ一
狭き席

別
けじめ一差

公一清和天
皇

おぼして一
寵愛して

色許された

る一禁制の

色の衣を着

ることを特

許せられた

る

さむしろに衣ころもかたしきこよひもやこひしき人に逢はでのみ寝む

とよみけるを、男、哀あはれと思ひて、其夜は寝ねにけり。世よの中の例れいとして、思ふをば思ひ、思

はぬをば思おもはぬものを、此人は、思ふをも思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。

〔六十四〕昔、男女おとこをんなみそか、密に語かたふわざもせざりければ、いづくなりけむ怪あやしさに詠よめる。

吹く風にわが身をなさは玉たますだれ隙ひまもとめつつ入るべきものを

かへし、

とりとめぬ風にはありとも玉簾たますだれた誰がゆるさばかひまもとむべき

〔六十五〕昔、公おほやけおほしてつかう給ふ女の、色許いろゆるされたるありけり。大御息所おほみやすんじころとてい

ますかりけるいとこなりけり。殿上てんじやうに侍きゑらひける在原ありはらなりける男の、まだいと若わかかりける

を、この女あひ知りたりけり。男、女おんながた方なたゆるされたりければ、女のある所にきて向ひ居

りければ、女、「いとかたはなり。身も亡びなむ、かくなせそ」といひければ、

思ふには忍しのぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

これやこの我にあふ身をのがれつつ年月ふれどまよりがほなき

といひて、衣脱ぎて取らせけれど、棄てて逃げにけり、いつらいぬらむとも知らず、

(六十三) 昔、世ごころづける女、いかで心なさけあらむ男にあひ得てしがなと思へど、

いひ出でむらたよりなさに、まことならぬ夢がたりをす、子みたりを呼びて語りけり、

二人の子は、情なくいらへて止みぬ、三郎なりける子なむ、「よき御男ぞいで來む」とあ

はするに、この女けしきいとよし、こと人はいと情なし、いかでこの在耳中將にあはせ

てしがな、と思ふ心あり、病しありきけるにいき違ひて、道にて馬の口をとりて、「かうか

うなむ思ふ」といひければ、あはれがりていきて寢にけり、さて後男見えざりければ、女

男の家にいきてかいまみけるを、男ほのかに見て、

百年に一年たらぬつくも髪われを戀ふらしおちかけに見ゆ

とて、出で立つけしきを見て、むばら唐橘にかゝりて、家に來てうち臥せり、男、かの

女のせしやうに、思ひて立てりて見れば、女なけきて寢とて、

つくし髪
つくしは江
浦草、蘭の
類、老女の
髪の短く亂
れたるに喻
ふ

そめ河―筑
前の名所終
河

たはれ嶋―
肥後の名所
風流島
濡衣―無き
名を負ふこ
と

こけるから
とも―櫻花
をこき散せ
し枝とも

〔六十一〕 昔じかし、男おとこ、筑紫つくしまでいきたりけるに、「これは色好むいろこのといふすきもの」と簾すだれの中なる人のいひけるを聞きて、

そめ河がをわたらむ人のいかでかは色いろになるてふことのなからむ女、かへし、

名にしおはばあだにぞあるべきたはれ嶋波しまなみの濡衣ぬれぎぬきるといふなり

〔六十二〕 昔じかし、男おとこの年としごろ音ねづれざりける女、心かしこくやあらざりけむ、はかなき人のことにつきて、人の國なりける人につかはれて、もと見し人の前まへにいで來て、物くはせなしどしけり。「夜よさりこのありつる人給へ」と主人あにぢにいひければ、遣おこせたりけり。男「我をば知らずや」とて、

いにしへのにほひはいづら櫻花こけるからともなりにけるかな

といふを、いとばつかしと思ひて、答こたへもせて居たるを、「などいらへもせぬ」といへば、
涙なみだのこほるとに目も見えず、ものもいはれず」といふ。また男、

うちわびて落穂ひろふときかませば我ら田圃に行かましものを

〔五十九〕 貴男、京をいかゞ思ひけむ、東山にすまむと思ひ入りて、

住みわびぬ今はかざりと山ごとく身をかくすべき宿もとめてむ

かくて、ものいたく病みて死に入りたりければ、面に水そよぎなどして、息出でて、

わがうへに露ぞおくなる天の河とわたるふねの穂のしづくか

となむいひていき出でたりける。

〔六十〕 貴男ありけり、宮仕いそがはしく、心らまめならざりける程の家刀自、ま

めに思はむといふ人につきて、人の國へいにけり、この男、宇佐の使にていきけるに、

ある國の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、一女あるじにかはらけとらせよ、さらす

は飲まじ」といひければ、かはらけ取りて出したるに、着なりける橘をとりて、

さつき待つ花たちばなの香をかけばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

身をかくす

―後編集

「爪木ころし」

とわたる―

河門を渡る

まの―眞實

祇承の官人

―御使を馳

走する役人

撰集には
「夢路にま

どふ袂には
天つ空なる
露ぞおきけ
る」とあり

われから—
海草に住む
虫の名、我
からの意を
兼ね

すだく—多
く集る

思はずはありもすらめど言の葉のをりふしごとこに頼たのまるるかな
〔五十六〕 むかし、男、臥ふして思おひ起きて思おひ、思おひあまりて、

わが袖そでは草くさのいほりにあらねども暮つゆるれば露つゆのやどりなりけり

〔五十七〕 昔むかし、男をとこ、人しれぬ物思ものおもひけり。つれなき人の許もとに、

戀こひわびぬ蟹あまの刈かる藻もに宿やるてふわれから身みをも碎くだきつるかな

〔五十八〕 昔むかし、心こころつきて色好いろこのみなる男おとこ、長岡ながおかといふ所ところに家造いえつくりて居いりけり。そこの隣となりなりけ

る宮腹みやはらに、事こともなき女共むすめどもの田舎いななりければ、田刈たからむとて、此男このおとこのありけるを見て、「いみ

じのすき者の所行しやうぎやうや」とて、集あつりて入り來きければ、此男このおとこ、にけて奥おくに隠かくれにければ、女むすめ、

荒あれにけりあはれいく世よの宿やどなれや住すみけむ人の音ねづれもせぬ

といひて、この宮みやに集あつり來き居ゐてありければ、この男おとこ、

葎むぐらおひて荒あれたるやどのうれたきはかりにも鬼おにのすだくなりけり

となむいひ出したたりける。この女むすめども「穂ほひるはむ」といひければ、

かたみに一
互に

飾籠一籠は
五月五日の
節物、それ
を五色の糸
にて巻き飾
りたるもの

たのむ一又
「たどる」と
し、此歌後

のく水とすざるよはひと散る花といづれ待ててふことを食くらむ

あたくらべ、かたみにしける男女の、思ひありきしける事をいふなるべし、

〔五十一〕 昔、男、人の節籠に菊うよけるに、

續糸しうよば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

〔五十二〕 昔、男ありけり、人のもとより節籠をおこせたりける事事に、

あやめかり君は酒にぞ感ひけるわれは野に出でてかるぞわびしき

とて、をなむやりける。

〔五十三〕 昔、男、逢ひがたき女に逢ひて、物語などする程に、鳥の鳴きければ、

いかでかはとりの鳴くらん人しれす思ふこころはまだ夜ぶかきに

〔五十四〕 むかし、男、つれなかりける女にいひやりける。

行きやらぬゆめ路をたのむたもとは天つそらなる露やおくらむ

〔五十五〕 昔、男、思ひかけたる女のえ得まじうなりての世に、

志保



うら若みねよけに見ゆる若草をひとのむすばじことをしぞ思ふ
ときこえけり。かへし。

初草はつくさのなごめづらしきことの難がたぞうらなくものを思ひけるかな

〔五十〕むかし、男ありけり、怨うらみむる人をうらみて、

とりの子を十づつとをはかさぬともおもはぬ人を思ふものは
といへりければ、

とりの子
鳥羽

朝露あさつゆは消えのこりてもありぬべし誰かこの世をたのみはつべき

また、男

吹く風かぜに去年こぞのさくらは散ちらすともあな頼たのみがた人のこころは

また、女 かへし、

行く水みづにかすかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

また、男

めかるれば
— 遇はれば

大幣— 祓す
る時陰陽師
の持つ串に
さしたる幣
にて、祓終
れば之を人
々ひき寄せ
て撫づるな
り

あさましう對面せで、月日の經にけること、忘れやし給ひにけむといたく思ひわびてなむ侍る。世の中の人の心は、めかるれば忘れぬべきものにこそあめれ。といへりければ、よみてやる。

めかるともおもほえなくにわすらるる時しなければ面影にたつ
〔四十七〕 昔、男、ねんごろにいかでと思ふ女ありけり。されど、この男をあだなりと聞きて、つれなさのみ増りつよいへる。

大幣のひく手あまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ
かへし、男、

大ぬさと名にこそ立てれ流れても遂による瀬はありてふものを
〔四十八〕 昔、男ありけり、馬のはなむけせむとて、人を待ちけるに、來ざりければ、今ぞ知るくるしきものと人待たむ里をばかれず訪ふべかりけり

〔四十九〕 むかし、男、妹のいとをかしけなりけるを見居りて、

家刀自一
家の主跡
し一雲、爽

ば、家刀自によそよそとせせて、女の装束被ひけりとす。主の男、歌よみて雲の腰に結びつけさす。

いでて行く君がためにと脱ぎつれば我さへもなくなりぬべき哉

この歌はあるが中に面白ければ、心留めてよます。態に味ひて、

(四十五) 實、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男にものいはじ、と思ひけり。うち出でむこと難くやありけむ。物病になりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親聞きつけて、泣く／＼告げたりければ、感ひ来りけれど、死にければ、つれ／＼と籠り居りけり。時は六月晦日、いと暑きころはひに、宵はあそび居りて、夜ふけてやよ涼しき風吹きけり。雲たかく飛びあがる。この男見ふせりて、

ゆくほたる雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりに告げこせ

暮れがたき夏の日くらしながむればその事となくものぞ悲しき

(四十六) 昔、男、いとうるはしき友ありけり。片時去らすあひ思ひけるを、人の國へいきけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経ておこせたる女に、

がらあはれ
とぞ見るし
とある歌の
意

えあらざりける中なりければ、二日三日ばかりさはる事ありて、え行かでかくなむ。

出でて來しあとだにいまだかはらじを誰が通路と今はなるらむ
物の疑はしさに詠めるなりけり。

〔四十二〕 昔、賀陽親王と申す皇子おはしましけり。その親王女を思しめして、いとかしこう恵みつかう給ひけるを、人なまめきてありけるを、我のみと思ひけるを、また人聞きつけて、文やる。郭公のかたを書きて、

ほととぎす汝がなく里のあまたあれば猶疎まれぬ思ふものから
といへり。この女、けしきをとりて、

名のみたつしでの田長は今朝ぞなく庵あまたにうとまれぬれば
時は五月になむありける。男、かへし、

いほり多きしでの田長はなはたのむわが住む里に聲し絶えずは

しでの田長
一郭公の異
名、賤の田
長の義
馬のはなむ
け一錢別

〔四十四〕 昔、縣へゆく人に、馬のはなむけせむとて、呼びて、うとき人にしあらざりけれ

あり
いでていな
ば一服治癒
建いといひ
ては

なほさりに
一通り
袍を洗ひて
袍は禮服
の上衣、元
日の川愈に
なるべし

縁彩一六位
の着る縁色
の服

武藏野の心

一古今集に
「紫の一木

ゆふに武藏
野の草は皆

らあらごとと思ふに、眞實に絶え入るにければ、感ひて願など立てけり、今日の入相ばかりに絶え入りて、又の日の皮の時ばかりになむ、からうじて息あてたりける。昔の若人は、さるすける物思をなげしける。今の新まきに死なむや。

(四十二) 昔、女はらから二人ありけり、二人は賤しき男の賣しき、一人はあてなる男持たりけり。賤しき男もたる。十二月の晦日に、袍を洗ひて、手づから張りけり。志はいたしけれど、さる賤しき業も習はずりければ、袍の肩を張りやりてけり、せむ方もなくてたゞ泣きに泣きけり。これを、かのあてなる男聞きて、いと心苦しかりければ、いと濟らなる縁彩の袍を、見いでてやるとて、

むらさきの色濃きときはめはるに野なる草木ぞわかれざりける

武藏野の心なるべし。

(四十二) 昔、男、色好としるく、女をあひ云へりけり。されど憎く將あらざりけり、

屢いきけれど猶いと後めたく、さりとて、いかではた得あるまじかりけり。猶はた、

べみーべし

なほー平凡

さかしらー

賢ぶる

すまふー争

ひ拒む

出でていぬ

ー古本には

此の次に女

の歌として

「いづこま

で送りはし

つと人間は

ばあかぬ別

の涙川ま

で」の一首

この螢ほたるのともす火にや見ゆらむ、ともし消けちなむずるとて、乗のれる男のよめる。

出でていなばかぎりなるべみ燈ともしけち年としへ経ぬるかとなく聲こゑを聞け

かの至いたる、かへし、

いとあはれなくぞきこゆる燈ともしけち消きゆるものとも我は知らずな

天あめの下の色好いろこのみうたの歌にては、なほぞありける。至いたるは順したがふがおほぢなり。親王みこの本意ほんいなし。

〔四十〕昔むかし、若わかき男、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親おやありて、思ひもぞ

つくとして、この女を外ほかへ逐おひやらむとす。さこそいへ、まだ逐おひやらす。人ひとの子こなれば、

まだ心いきほひなかりければ止とどむる勢いきほひなし。女もいやしければ、すまふ力なし。さる間あひだ

に思はいやまさりにまさる。俄にわかに親おやこの女を逐おひうつ。男、血ちの涙なみだを流ながせども、止とどむる

よしなし。るて出でていぬ。男泣く泣くよめる。

いでていなば誰かわかれのかたからむありしにまさる今日は悲しも

とよみて絶たえ入りにけり。親おやあわてにけり。なほさりに思ひてこそいひしか。いとかくし

われならで下種とくなあまがほの夕かけ待たぬ花にはありとも

かへし、

ふたりして結びし縁をひとりしてあひ見らまでは解かじとぞ思ふ

〔冊八〕 むかし、紀有常（有常）が行きたるに、ありきておそく來けるに、詠みてやりける、

君により思ひならひぬ世のなかのひとはこれをや縁といふらむ

かへし、

ならはねば世の人ごとに何をかも戀とはいふと問ひしわれしも

〔冊九〕 昔、西院（西院）の帝と申すみかどおはしましけり。その帝のみこ、崇子（崇子）と申すいま

そかりけり。その皇子うせ給ひて、御葬（御葬）の夜、その宮の隣なりける男御（男御）葬見むとて、

女車（女車）にあひ乗りて出でたりけり。いと久しうゐていで奉らず。うちなきて止みぬべか

りける間に、天（天）の下の色好源（色好源）至（至）といふ人、これも物見るに、この車を女車（女車）と見て、

寄り來てとかくなまめく間に、かの至（至）蓋（蓋）をとりて車に入れたりけるを、車なりける人、

西院の帝一
淳和天皇

こもり江―
蘆などにお
ほひ隠され
たる江

沫緒に云々
―結び方の
名、結び固
めたる仲な
れば中絶す
とも後に又
逢はんと也
うしろめた
く―不安心

蘆邊あしべよりみち來るしほのいやましにきみに心をおもひますかな
かへし、

こもり江に思ふところをいかでかは舟ふねさす棹さざのさして知るべき
田舎人いなかびとのことばにては、よしやあしや。

〔卅四〕 むかし、男、つれなかりける人の許もとに、

いへばえにいはねば胸むねの騷さわがれてころひとつに歎なげくころかな
おもなくていへるなるべし。

〔卅五〕 むかし、心にもあらで、絶たえたる人の許もとに、

玉たまの緒を沫緒あわをによりてむすべれば絶たえてののち後も逢あはむとぞ思ふ
〔卅六〕 むかし、男、忘れぬるなめりと問言まひこしける女の許もとに、

谷せばみ峯みねまではへるたまかづら絶たえむと人にわが思はなくに

〔卅七〕 むかし、男、色好いろこのみなりける女に逢あへりけり。うしろめたくや思ひけむ、

花にあかぬ敷はいつもせしかども今日のごよひに似る時はなし

〔三十〕むかし、男、はつかなりける女のもとに、

逢ふことは玉の緒ばかりおもはえてつらき心のながく見ゆらむ

〔卅一〕昔、男、宮の中にて、ある御連の局の前をわたりけるに、何の仇にか思ひけむ、

「よしや草葉よならむさがみむ」といふ、男、

罪もなき人をうけへばわすれ草おのがうへにぞ生ふといふなる

といふを、ねたむ女もありけり、

〔卅二〕むかし、物いひける女に、年比ありて、

いにしへのしづのをたまきくりかへし昔を今になすよしもがな

といへりけれど、何とも思はずやありけむ、

〔卅三〕むかし、男、津國兔原郡に通ひける女、このたびいきては又は來じ、と思へる

氣色なれば、男、

其の緒が
り一時

うけへば
元祖すれに

袖に湊の―
涙の多き喩
貫簀―水の
飛び散らぬ
やうに鹽の
上にかけて置
く簀

かたみ―竹
籠、難きの
意を懸く
花の賀―花
の頃行ふ賀

みるめなき我が身を浦と知らねばやかれなで蟹の足たゆく來

〔廿六〕 昔、男、五條わたりなりける女をえ得ずなりにける事、とわびたりける人の返

事に、

おもほえず袖に湊のさわぐかなもろこしふねの寄りしばかりに

〔廿七〕 昔、男、女の許に一夜いきて、又もいかずなりにければ、女の手洗ふ所に、貫

簀をうちやりて、鹽の影に見えけるを、みづから、

我ばかり物思ふ人はまたもあらじと思へば水の下にもありけり

と詠むを、かの來ざりける男たち聞きて、

水口にわれや見ゆらむかはづさへ水のしたにてもろごゑになく

〔廿八〕 むかし、色ごのみなりける女、出でていにければ、

などてかくあふごかたみになりにけむ水漏らさじと結びしものを

〔廿九〕 昔、春宮の女御の御方の花の賀に、召しあけられたりけるに、

といひまじりければ、

あづさ弓ま弓つき弓としを經てわがせしがごとうるはしみせよ

といひて、いなむとしければ、女。

あづさ弓ひけどひかねど言よりこころは君によりにしものを

といひけれど、男がへりにけり、女いと悲しくて、後に立ちて追ひぬけど、え追ひつかで、清水のある所にふしにけり、そこなる石に、およびの血して書きつけよる、

あひ思はでかれぬる人をとどめかね我が身は今ぞ雨えはてぬめると書きて、そこにいたづらになりにけり、

(廿五) 昔、男ありけり、逢はじともいはざりける女の、さすがなりけるが許にいひやりける、

秋の野に笹わけし朝の袖より逢はでぬる夜ぞひぢまさりける

色ごのみなる女、かへし、

あづさ弓の
三十一種、種、
横にて作れ
る弓、かく
弓に品々あ
る如く我も
種々の苦勞
を經てしな
は汝を愛せ
し如くに新
夫を愛せよ
および一掃
いたづらに
云々一死ぬ



眞藤一内子

ら御座をとりて、氣子の器にもりほるを見て、心うがりて行かすなりにけり、さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山くもなかくしそ雨は降るとも

といひて見いだすに、「からうじて大和人来む」といへり、よろこびて待つに、たびく過ぎぬれば、

君こむといひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬもの戀ひつつぞふる

といひけれど、男すますなりにけり、

〔廿四〕 昔、男女、片田舎にすみけり、男、宮づかへしにとて、別情みて行きけるまゝ

に、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、又いと戀にいひける人に、「今宵はあはむ」と契りたりけるに、この男きたりけり、「この戸あけ給へ」と叩きけれど、あけて、歌をなむよみて出したりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそにひまくらすれ

よりかくなむ。

筒井筒つづみづつるづつにかけしまろがたけすぎにけらしな妹見いもざるまに

女、かへし、

くらべこしふりわけがみも肩かたすぎぬ君ならずして誰かあぐべき

などいひくして、遂つひに本意ほんいの如くあひにけり。さて年比としごほふる程に、女、親おやなく、たよりな

くなるまよに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内國高安郡かうちのくにたかやすのこほりにいきかよ

ふ所いで來にけり。さりけれど、このもとの女、悪わるしと思へる氣色けしきもなく、出しいだやり

ければ、男、こと心こころありて、かゝるにやあらむと思ひ疑うたがひて、前栽せんさいの中なかにかくれ居ゐて、

河内かうちへいぬる顔がほにて見れば、この女むすめいとうけさうじて、うち眺ながめて、

かぜ吹けばおきつしら波たつた山よはにや君がひとり越こゆらむ

とよみけるを聞きて、かぎりなく悲かなし、と思ひて、河内かうちへもいかずなりにけり。まれま

れかの高安たかやすに來て見れば、はじめこそ心にくよもつくりけれ、今はうちとけて、手づか

井筒—丸く
筒形に掘り
たる井
まる—自稱
の詞
前栽—庭前
の植込
けさう—化
粧、顔づく
り
しら波—盜
賊の意を懸
く



あひ見ては
—あひは見
で(新釋)

〔廿二〕昔むかしはかなくて絶たえにける中なか、なほや忘れざりけむ、女の許もとより、

うきながら人をばえしも忘れねばかつうらみつつなほぞ戀こひしき

といへりければ、「さればよ」といひて、男、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶たえじとぞおもふ

とはいひけれど、その夜よいにけり。いにしへゆくさきの事ことどもなどいひて、

秋あきの夜のちよを一夜ひつよになすらへて八千夜やちよしねばや飽あく時のあらむ

かへし、

秋あきの夜の千夜ちよをひと夜よになせりともことば残りのこりて鳥とりや鳴なきなむ

いにしへよりも、あはれにてなむ通かよひける。

〔廿三〕昔むかし、田舎ゐなかわたらひしける人ひとの子こども、井ゐのもとに出いでて遊あそびけるを、成人おとなにな

りにければ、男おとこも女をんなも、はぢかはしてありけれど、男おとこは、この女をんなをこそ得とめと思おもふ、女をんな

は、この男おとこをと思おもひつよ、親おやのあはすれども聞きかでなむありける。さてこの隣ごなりの男おとこの許もと

思ふがひなき世なりけりとし月をあだにちぎりて我やすまひし
といひてながめ居り。

玉がづら—
女の顔にか
くるもの

人はいさ思ひやすらむ玉がづらおもかけにのみいと見えつつ
この女いと久しくありて、念じわびてにやありけむ、いひおこせたる。

今はとてわするる草のたねをだに人のこころにまかせずもがな

かへし。

忘草わすれ草ううとだに聞くものならばおもひけりとは知りもしなまし

又々ありしよりけにいひかはして、男。

忘るらむとおもふ心のうたがひにありしよりけにもものぞ悲しき

かへし。

中空なつかに立ちる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな

とはいひけれど、おのが世々よよになりにければ、うとくなりけり。

忘草—萱草
の異名、文
選養生論
に、萱草忘
憂
けに—まさ
りて

みしてし

人なりければ、歸りくる道に、三月ばかりに、かへでの紅葉のいとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる、

きみがため手折れる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれどてやりたりければ、返事は、京につきてなむもて來たりける。

いつの間にうつろふ色のつきぬらむ君がさとはは春なかるらし

心 こと心―異
〔廿一〕昔、男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるを、いかなる事かありけむ、いさよかなる事につけて、世の中をうしと思ひて、出でていなむと思ひて、かよる歌をなむよみて、ものに書きつけける。

いでていなば心輕しといひやせむ世のありさまを人は知らねば

けしう―怪
しう
何處をはかり―何處を
それとあて
どにする
とよみ置きて出でていにけり。この女かく書きおきたるを見て、けしう心おくべきことも覺えぬを、何によりてかかよらむ、といといたう泣きて、いづ方に求め行かむ、と門に出でて、とみかうみ見けれど、何處をはかりとも覺えざりければ、歸り入りて、

とをな一機
じ祝

御達一其處
にて宜しき
女房衆
かれ一離れ

天雲のよそ
にのみして
一古今集
にさゆきか
へり空にの

みむとて、菊の花のうつろへるを折りて、男の許へやる。

くれなるに匂ふはいづらしら雪の積もとををに降るかとも見の

男、知らずよしに詠みける。

くれなるにほふがうへの白菊は折りける人のそでかとも見の

〔十九〕 昔、男、宮づかへしける女の方に、御達なりける人をあひ知りて、軽もなくが

れにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものかとも思ひたら

ず。女、

天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから

と詠めりければ、男、かへし。

天雲のよそにのみしてふることはわが居る山のかぜはやみなり

と詠めりけるは、また男ある人となむいひける。

〔二十〕 昔、男、大和にある女を見て、よばひてあひにけり。さて程經て、宮づかへする

夜のもの―
夜具

みけし―御
衣

手を折りてあひみしことをかぞふれば十といひつつ四は經にけり
かの友だちこれを見て、いと哀と思ひて、夜のものまで送りて詠める。

としだにも十とてよつは經にけるをいくたび君をたのみきぬらむ
かくいひ遣りければ、

これやこの天の羽ころもむべしこそ君がみけしとたてまつりけれ
よろこびに堪へで、又、

秋やくる露やまがふと思ふまであるはなみだの降るにぞありける
〔十七〕 年比おとづれざりける人の、櫻の盛に見に來たりければ、あるじ、

あだなりと名にこそ立てれさくらばな年にまれなる人も待ちけり
かへし、

今日こそは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

〔十八〕 昔なま心ある女ありけり。男ちかうありけり。女、歌よむ人なりければ、心

まやうにて
一人に逢は
せて

さがなき
よからぬ
三代の帝
仁明、文徳、
清和
ごとく如く

まがる一尼
になる

(十五) 貴、みちの國にて、なでふ事なき人の妻に通ひけるに、怪しうさやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

信夫山しのびてかよふ道もがな人のこのころのおくもみるべく

女限なくめでたし、と思へど、さるさがなきえびす心を見ては、いかどはせんは、

(十六) むかし紀石常といふ人ありけり、三代の帝に仕うまつりて、時に遇ひけれど、

後は世かはり時うつりにければ、世の常の人のこともあらず。人からは心美くしうあて

はかなること好みて、こと人にも似ず貧しく経ても、なほ昔よかりし時の心ながら、

世の常のことも知らず、年比あひなれたる妻やうく床はなれて、遂に尼になりて、姉

の先だちてなりたるところへ行くを、男、まことにむつまじき事こそなかりけれ。今は

とて行くを、いとあはれとは思ひけれど、貧しければするわざもなかりけり。思ひわび

て、懇に相談らひける友だちの許に、「かうく、今はとてまがるを、何事も聊なる事もえ

せて遣はすこと」と書きて、奥に、



さすがに
一燈の光所
訪問のさす
がにの意を
兼ぬ

うるさし
憂し

死なすは
死なむより

は
くはこ一
見、置

くだ一
はめなで
はめなむと

も
栗原の一古
今集、をぐ
る時みつの
小島の人な
らば

武蔵殿さすがにかけたたのむには訪はぬらつらし訪ふもうるさし
とあるを見てなむ、ほへがたき心地しける、

訪へばいふ訪はねばうらむ武蔵あふみかかる折にや人は死ぬらじ

〔十四〕 むかし、男、陸奥國にすてろに行き来りにけり、そこなる女、京の人はめづら

かにや覺えけむ、せちに思へる心なむありける、さて、かの女、

なかなかに戀に死なすはくはこにぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞ、ひなびたりける、さすがに哀とや思ひけむ、いきて庭にけり、夜ふかく出で

にければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくだ鶏のまだきに鳴きて伏をやりつる

といへるに、男、京へなむまかるとて、

栗原のあねはの松の人ならばみやこのつとにいざといはましを

といへりければ、よろこほひて、「思ひけらし」とぞいひ居りける、

むこがね、かへし、

我が方かたによると鳴くなるみよし野のたのむの雁かりをいつか忘れむとなむ。人の國ひこにても、なほかゝることなむ止やまざりける。

〔十一〕 昔むかし、男おとこ、東あづまへ行きけるに、友ともだちどもに道みちよりいひおこせける。忘わするなよほどはくも井ゐになりぬとも空そらゆく月のめぐりあふまで

〔十二〕 昔むかし、男おとこありけり。人の女むすめをぬすみて、武藏野むさしのへるて行くほどに、盗人ぬすびとなりければ、國守くにのかみにからめられにけり。女おんなをば叢くさむらの中に隠かくしおきて逃にげけにけり。道みちくる人、「この野は盗人ぬすびとあなり」とて、火ひつけむとす。女おんなわびて、

武藏野むさしのは今日けふはな焼やきそ若草わかくさのつまもこもれりわれもこもれりと詠よみけるを聞ききて、女おんなをば取りて、ともに牽ひていにけり。

〔十三〕 昔むかし、武藏むさしなる男おとこ、京みやこなる女おんなの許もとに、「聞きゆれば恥はかし、聞きえねば苦くるし」と書かきて、表書うはがきに武藏むさしと書かきて、おこせて後あと、音おともせずなりにければ、京みやこより、女おんな、

若草の―つ
まの枕詞
武藏野は―
古今集「春
日野は」



潮水を浸し
集めて堆を
爲すもの

こと人―他
人
あてなる人
―貴人
なほ人―た
だ人
たのむ―田
の面

それを角田河といふ。その河の邊にむれるて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるか
な、とわびあへるに、渡守、「はや舟に乗れ、日も暮れなむ」といふに、乗りて渡らむと
するに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴
と脚とあかき、鳴の大きな水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、み
な人えしらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こそりて泣きにけり。

〔十〕昔、男、武藏國までまどひ歩きけり。さて、その國なる女をよばひけり。父は「こと
人にあはせむ」といひけるを、母なむ、あてなる人にと心づけたりける。父はなほ人
にて、母なむ藤原なりける。さてなむ、あてなる人にと思ひける。このむこがねに詠み
て遣せたりける。住む處なむ、入間郡みよし野の里なりける。

みよし野のたのむの雁もひたぶるに君がかたにぞよると鳴くなる

てある人の曰く、「かきつばなといふ五文字を句の上につきて、歌の心を詠め」といひければ、よめる。

唐衣きつつ馴れにしつましあればはるばる來ぬる歌をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人、歌の上に調落してほとびにけり。行きくして駿河國にいたりぬ。宇津の山に至りて、我が入らむとする道は、いと暗う細きに、馬はしけり、物心ほそく、すごろなるめを見る事と思ふに、修行者あひたり、「かゝる道は、いかでかいまする」といふに、見れば、みし人なりけり。京にその人の御許にとて、文かきてつく、駿河なるうつの山邊のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降り、

時しらぬ山はふじの嶺いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ

その山は、こゝにたとへば、比叡山を二十ばかり重ねあけたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。猶行きくして、武藏國と下總國とのなかに、いと大なる河あり、

鹽尻―海濱
にて鹽を製
するに砂に



(七) 昔、男ありけり。京にありわびて、東にいきけるに、伊勢、尾張のあはひの面づらを行くに、浪のいと白くたつを見て、

いとどしく過ぎ行くかたの戀しきにうらやましくもかへる浪かな

となむ詠めりける。

(八) 昔、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東の方に行きて、すみ所もとむとて、友とする人、一人二人して行きけり。信濃國、淺間の畝に、烟のたつを見て、

信濃なる淺間のたけに立つけぶりをちこちびとの見やはとがめぬ

(九) 昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあらし。東の方

にすむべき國もとめにとて、往きけり。もとより友とする人、一人二人していきけり。

道しれる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひ

けるは、水のく河の蜘蛛なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の邊の木の下にあり居て、餠くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見

蜘蛛—蜘蛛の手のやうに幾筋にもなりて
餠—乾飯



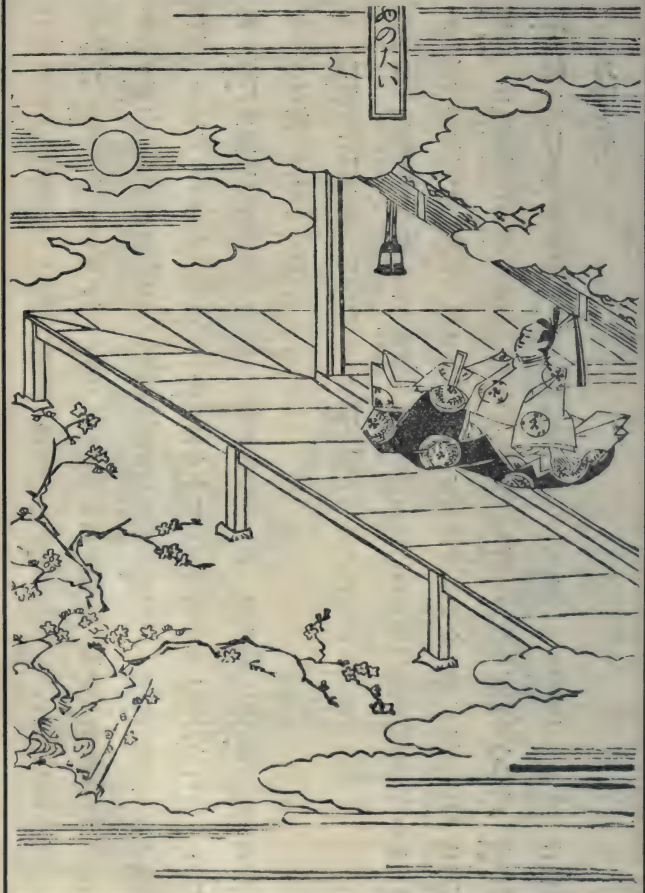
神一宮

胡蝶一矢を
籠りて倉に
負ふ具

におきたりける露を、一かねは何ぞいとなむ男に問ひける、ゆくさきおほく夜もふけに
ければ、鬼ある所とら知らず、神さへいといみじう鳴り、雨もいたうふりければ、あば
らなる蔵に、女をば奥におし入れて、男は巧胡蝶を負ひて、戸口に居り、はや夜も明け
なむ、と思ひつゝ居たりけるに、鬼はや一口にくひてけり、「あなや」といひけれど、神
鳴る騒にえ聞かざりけり、やうく夜も明けのくに、見れば、ゐて来し女もなし、足す
りをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人のとひしとき露と答へてきえなましものを

これは、二條后の、いとこの女御の御許に仕うまつるやうにてる給へりけるを、容のい
とめでたくおはしければ、ぬすみて負ひて出でたりけるを、御兄堀河大臣、太郎國經大
納言、まだ下蔭にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、留めてとり
返し給うてけり、それをかく鬼とはいふなりけり、まだいと若うて、后の、ただにおは
しける時とや。





でふせりて、去年を思ひ出でてよめる。

月やあらぬ春や昔のはるならぬ我が身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのくくと明るるに、泣くく歸りにけり。

〔五〕 昔、男ありけり。東の五條わたりにいと忍びていきけり。密なる所なれば、門よりもえ入らで、童のふみあけたる築地のくづれより通ひけり。人しゆくもあらねど、度重りければ、あるじ聞きつけて、その通路に、夜毎に人をすゑて守らせければ、いけどもえ逢はで歸りけり。さてよめる。

人知れぬわがかよひ路の關守はよひよひごとにうちも寐ななむ

と詠めりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してけり。二條后に忍びて参りけるを、世のきこえありければ、兄等の守らせ給ひけるとぞ。

〔六〕 昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いとくらきに率てゆきけり。芥川といふ河をいきければ、草の上



をもちり摺りたるもの

まめ―眞實

そぼふる―

しよぼく

と降る

ひしきもの

―鹿尾菜、

引敷物

二條后―藤

原高子、清

和天皇の女

御

大后宮―文

徳天皇の御

母藤原順子

五條后

西の京に女ありけり。その女世の人には勝れりけり。其人、かたちよりは心なむ勝りたりける。獨のみにもあらざりけらし。それをかのまめ男うち物がたらひて、歸り來ていかが思ひけむ。時は三月のついたち、雨そほふるにやりける。

おきもせず寐もせて夜をあかしては春のものとして眺めくらしつ

〔三〕 昔、男ありけり。懸想じける女のもとに、鹿尾菜といふものをやるとて、

おもひあらば葎の宿にねもしなむひしきものには袖をしつつも

二條后の、まだ帝にも仕うまつり給はで、ただ人にておはしける時のことなり。

〔四〕 昔、東の五條に、大后宮おはしましける。西の對にすむ人ありけり。それを本意

にはあらで、志ふかかりける人、行きとぶらひけるを、正月十日ばかりの程に、ほかに

隠れにけり。あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思

ひつよなむありける。又の年の正月に、梅の花盛に、去年をこひて、いきて、立ちてみ

居てみ見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月の傾くま



伊勢物語

初冠―始めて冠を着る儀式、元服

しのぶもち
すり―陸奥
信夫郡より
出る織物、
縦横に紋様

〔初段〕 むかし、男、初冠して、奈良の京、春日の里にしるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。おもほえず古里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の著たりける狩衣の裾をきりて、歌をかきてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ著たりける。

春日野のわかむらさきの摺衣しのぶのみだれかぎり知られず

となむ、おひつきていひやりける。ついでおもしろき事ともや思ひけむ。

陸奥のしのぶもちすり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやく風流をなむしける。

〔二〕 昔、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まださだまらざりける時に、

のよし歌りて、兵士どもあまた凡して山へ登りけるよりなむ、その山をばふじの山と名づけける。その後、いまだ雲の中へたら昇るとぞいひ傳へたる。

なみだ
無

この衣きぬきつる人は、物思ものおもひもなくなりにければ、車くるまにのりて百人許はかり天人具てんじんぐして昇のぼりぬ。其その後のち翁おきな姫おんな血ちの涙なみだを流ながして惑まどへどかひなし。あの書ふみきおきし文ぶんを讀よみて聞きかせけれど、「何なにせむにか命いのちも惜おししからむ。誰たが爲なにか何事なにごとも益ちゆうもなし」とて、藥くすりもくはず、やがて起たきもあがらず病びみふせり。中將ちゆうじやう人々ひとびとを引具ひきぐして歸かへり参まゐりて、赫映かくやひめ姫ひめをえ戦たたかひ留とどめずなりぬる事ことをこまぐと奏そうす。藥くすりの壺つぼに御文おんぶんそへて参まゐらす。展ひろげて御覽ごらんじて、いといたく哀あはれがらせたまひて、物ものもきこしめさず、御遊みあそびなどもなかりけり。大臣だいじん、上達部かんだちのを召めして、「何いづれの山あめか天あめに近ちかき」と問とはせ給たまふに、ある人ひと奏そうす、「駿河國するがのくににある山やまなむ、この都みやこも近ちかく、天あめも近ちかく侍はべる」と奏そうす。是こゝをきかせ給たまひて、

あふこともなみだに浮うかぶわが身みには死しなぬくすりも何なににかはせむ

かの奉ほうる不ふ死しの藥くすりの壺つぼに、御文具おんぶんぐして御使みつかひに賜たまはす。勅使ちよくしには、つきのはがきはといふ人を召めして、駿河國するがのくににああなる山やまの頂いたゞきにもて行くべきよし仰おほせ給たまふ。嶺みねにてすべきやう教をしへさせ給たまふ。御文おんぶん不ふ死しの藥くすりの壺つぼならべて、火ひをつけてもやすべきよし仰おほせ給たまふ。そ

に包まむとすれば、ある天人つゝませず、羽衣を取り出でて着せむとす、その時に結映
映、「しはし得て」といひて、「衣着つる人は心ごとになるなり、物一言いひおくべき事
あり」といひて女かく、天人おそしと心もとながり給ふ、結映映、「物知らぬことな宜
ひそ」とて、いみじく解かに、おほやげに御文章りたまふ、あわてぬさまなり、

かく數多の人をたまひて留めさせ給へど、許さぬ理まうで来て、とわゐて罷りぬれ
ば、口惜しく悲しきこと、宮仕つかう奉らすなりぬるも、かくわづらはしき身にて
侍れば、心得すおほしめしつらめども、心づよく奉らすなりにし事、なめげなる
ものに思し召し止められぬるなむ、心にとまり侍りぬる、

とて、

いまはとて天のはごろもきるをりぞ君をあはれと思ひいでぬる

とて、壺の樂そへて、頭中將を呼び寄せて奉らす、中將に天人とりて傳ふ、中將とりつ
れば、ふと天の羽衣うち着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ、

なめげなる
無禮らし
き

して開きぬ。嫗抱きてゐたる赫映姫外に出でぬ。えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣きをり。竹取心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、赫映姫いふ、「こゝにも心にもあらでかくまかるに、昇らむをだに見送り給へ」といへども、「何しに悲しきに見送り奉らむ。我をばいかにせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね」と泣きて伏せれば、御心まどひぬ。「文を書き置きてまからむ。戀しからむ折々、とり出でて見給へ」とて、うち泣きて書くことばは、

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、返すく本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも落ちぬべき心地す。

天の羽衣一重さ六銖、經緯なしとぞ
と、書きおく。天人の中にもたせたる筈あり、天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。ひとりの天人いふ、「壺なる御藥奉れ。きたなき所のもの食しめしたれば、御心地あしからむものぞ」とて、持てよりたれば、聊なめ給ひて、少しかたみとて、ぬぎおく衣



しれて―ば
けて
羅蓋―薄絹
にて張れる
蓋
をさなき人
―愚なるも
のよ

まへいきければ、あれも戦はで、心地ただしれにしれて守りあへり。立てる人どもは、
装束のきよらなること物にも似ず。飛車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王と覺
しき人、「家に造磨まうで來」といふに、猛く思ひつる造磨も、物に酔ひたる心地してうつ
ぶしに伏せり。いはく、「汝、をさなき人、聊なる功德を翁つくりけるによりて、汝が助に
とて片時の程とて降ししを、そこらの年比そこらの金たまひて、身をかへたるが如くな
りにたり。赫映姫は、罪をつくりたまへりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおは
しつるなり。罪のかぎりはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、あたはぬことなり。
はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、「赫映姫を養ひ奉ること二十年あまりになりぬ。
片時と宣ふに怪しくなりはべりぬ。また他處に赫映姫と申す人ぞ、おはしますらむ」と
いふ。「ことに御座する赫映姫は、おもき病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せ
ば、その返事はなくて、屋の上に飛車をよせて、「いざ赫映姫、穢き所にいかでか久し
くおはせむ」といふ。立て籠めたる所の戸、即ただあきに開きぬ。格子どもも人はなく

なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。親たちのかへりみをいさよかだに仕
う奉らで、罷らむ道も安くもあるとじきに、月比ら出で居て、今年ばかりの暇を申しつ
れど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心をのみ慕はして去りなむ事
の、悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人はいとけうらにて、老いませずなむ、思ふ
こともなく侍るなり。さる所へ罷らむするもいみじくも侍らず、老いおとろへ給へる様
を見奉らざらむこそ戀しからめ」といひて泣く。翁一胸いたき事なし給ひそ、聞しき姿
したる使にもさはらじ」とねたみ居り。かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家
のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十合せたるばかりにて、ある
人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りており来て、地より五尺ばかりあ
がりたる程に立ち違ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうに
て、相戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取りたてむとすれども、手
に力もなくなりて、袂え屈りたる中に、心さかしき者、ねむじて射むとすれども、外ざ

ねむじて一
こらへて

塗籠―屋の
内に土をあ
つく塗りこ
めて今の土
藏の様に
し、器財な
どを入れ置
く所

さが―其が
まさなし―
正體なし
いますかり
つる―在り
つるの敬語

て居り。母屋の内には女共を番にするて守らす。廻塗籠の内に赫映姫を抱かへて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、「かばかり守る所に、天の人にもまけむや」といひて、屋の上をる人々に曰く、「つゆも物空にかけらば、ふと射殺し給へ。守る人々の曰く、「かばかりして守る所に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して外にさらさむと思ひ侍る」といふ。翁これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞きて、赫映姫は、「鎖し籠めてまもり戦ふべきしたくみをしたりとも、あの國の人をえ戦はぬなり。弓箭して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば皆あきなむとす。相戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ」。翁のいふやう、「御迎に來む人をば、長き爪して眼をつかみつぶさむ。さが髪をとりてかなぐり落さん。さが尻をかき出でて、こよらのおほやけ人に見せて恥見せむ」と腹立ちをり。赫映姫いはく、「聲高にな宣ひそ。屋のうへに居る人どもの聞くに、いとまさなし。いますかりつる志どもを思ひも知らで、罷りなむすることの口惜しう侍りけり。ながき契のなかりければ、程

あてやかに
一貫く上品
に

あてやかに美しかりうることを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲ま
れず、同じ心に歎しがりけり。この事を聞きこしめして、竹取が家に御使つかはさせ給
ふ。御使に竹取いで違ひて、泣くこと限なし。この事を歎くに、髪も白く、腹も腫り、
目もただれにけり。翁今年は五十許なりけれども、物思には片時になむ老になりにつ
ると見ゆ。御使、仰事とて翁にいはいと心苦しく物思ふなるは、誠にか」と仰せ給
ふ。竹取泣く泣く申す。「この望になむ、月の都より轉瞬の速にまうで来なる、尊くと
はせ給ふ。この望には人々たまはりて、月の都の人まうで来ば、とらへさせむ」と申す。
御使かへり参りて、翁のありさま申して、奏しつる事ども申すを、聞し召して宜ふ。「一
目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、明暮見馴れたる轉瞬をやりては、如何思ふべき」
かの十五日、司々に仰せて、物使には少將高野大國といふ人をさして、六衛のつかさせ
て、二千人の人を竹取が家につかはす。家に罷りて築地の上に千人、屋の上に千人、家
の人々と多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帶し

六衛のつか
さし左右近
衛、左右兵
衛、左右衛
門

さらす―逃
れず

今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、此國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契なりけるによりてなむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりければ、この月の十五日に、かの本の國より迎に人々まうでこむす。さらすまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり」といひて、いみじう泣く。翁「こはなでふ事を宣ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大さおはせしを、我が丈たち竝ふまで養ひ奉りたる我が子を、何人が迎へ聞えむ。まさに許さむや」といひて、「我こそ死なめ」とて、泣きのしることいと堪へがたけなり。赫映姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。片時の間とてかの國よりまうで來しかども、斯くこの國には、數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事もおほえず。ことにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず罷りなむとする」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も年比ならひて、立ち別れなむことを、心ばへなど

うましき
樂しきあが物一
が本尊とし
頼む人

いみじくおほし敷く事あるべし。よくよく見奉らせたまへ」といふを聞きて、結城結城にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見たまふぞ、うましき世に」といふ。結城結城、「月を見れば世の中心細くおはれに侍り、なでふ物をぞ敷き侍るべき」といふ。結城結城のあつた所にいたりて見れば、なほ物思へるけしきなり、これを見て、「あが佛何事を思ひ給ふぞ、思すらむこと何事ぞ」といへば、「思ふことなし、物なむ心細く覺ゆる」といへば、兼、「月な見給ひさ、これを見給へば、もの思すけしきはあるぞ」といへば、「いかでか月を見ずにはあらむ」とて、なほ月出づれば、出で居つゝ敷き思へり。夕暗には物思はぬ氣色なり。月の程になりぬれば、なほ時々はうち敷き泣きなです。是を、使ふ者ども、「猶もの思す事あるべし」とさよやけど、親を始めて何事とも知らず。八月十五日ばかりの月にいで居て、結城結城いといたく泣きたまふ。人目も今はつよみ給はず泣き給ふ。これを見て、親ども、「何事ぞ」と問ひさわく。結城結城泣く泣くいふ、「さきんくも申さむと思ひしかども、かならず心惑はし給はむものぞと思ひて、

赫映姫の傍
に云々傍
にも寄りつ
かぬ程の劣
り方なり
こと人―他
人

○天の羽衣

人間―人の
見ぬ隙

思おぼされざりけれど、さりとして夜よをあかし給ふべきにもあらねば、かへらせ給ひぬ。常に仕つか
う奉まつる人を見たまふに、赫映かぐや姫ひめの傍かたはらに寄るべくだにあらざりけり。こと人よりはけうら
なりとおほしける人の、かれに思おぼしあはすれば人にもあらず。赫映かぐや姫ひめのみ御心おほんこころにかかり
て、ただ一人ひとりすぐしたまふ。よしなくて御方おんかた々々にもわたりたまはず。赫映かぐや姫ひめの御許おんもとにぞ、
御文おほんふみを書きて通かよはさせ給ふ。御返事おんかへりごこさすがに憎にくからず聞えかはし給ひて、おもしろき木
草くさにつけても、御歌おほんうたを詠よみてつかはす。

かやうにて、御心おほんこころを互たがひに慰なぐさめたまふ程に、三年みとせばかりありて、春はるの初はじめより、赫映かぐや姫ひめ、月
のおもしろう出でたるを見て、常つねよりも物思ものおもひたる様さまなり。ある人の、月つきの顔かほみるは忌いむ
事ことと制せいしけれども、ともすれば人間ひびまには月つきを見ていみじく泣なき給ふ。七月ふづきのもちの月に
出で居ゐて、切せちにも思おもへるけしきなり。ちかく使つかはるよ人々、竹取たけざりの翁おきなに告つげていはく、
「赫映かぐや姫ひめ例れいも月つきをあはれがり給ひけれども、この比ころとなりては、ただ事ことにも侍さむららざめり、



きと—俄に

あるじ—饗
應

奏す。帝、「などかさあらむ、猶率ておはしませむ」とて、御輿を寄せ給ふに、この赫映姫、きと影になりぬ。はかなく口惜しとおほして、實にただ人にはあらざりけり、こおほして、「さらば御供には率ていかじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに歸りなむ」と仰せらるれば、赫映姫もとの形になりぬ。帝、なほめでたく思し召さるゝ事せきとめ難し。かく見せつる造鷹を悦び給ふ。さて仕うまつる百官の人々に、あるじいかめしう仕う奉る。帝、赫映姫を留めて歸りたまはむ事を、飽かず口惜しく思しけれど、たましひを留めたる心地してなむ、歸らせたまひける。御輿に奉りて後に、赫映姫に、

歸るさのみゆき物うくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆる
御返事を、

葎はふ下にもとしはへぬる身のなにかはたまのうてなをも見む
これを帝御覽じて、いとど歸り給はむそらもなく思さる。御心は更に立ちかへるべくも

やさしー恥
かし

昨日今日帝の宜はむ事につかひ、人間やさし」といへば、翁答へて曰く、「天の下の事は
とありともかゝりとも、御命の危きこそ大なるさばりなれ、御仕う奉るまじき事を参り
て申さむ」とて、参りて申すやう、「御の事のかしこそにかの重を参らせむとて仕う奉
れば、宮仕に出し立てなば死ぬべし」と申す。遣賈が手にうませたる手にてもあらず。
昔山にて見つけたる、かよれば心ばせり世の人に似ぞ侍る」と奏せさす。帝おほせ給
はく、「遣賈が家は山本近かゝなり、御侍の行幸し給はむやうにて見てむや」とのたまは
す。遣賈が申すやう、「いとよき事なり、何か心もなく侍らむに、ふと行幸して御覽せ
られなむ」と奏すれば、帝俄に目を定めて、御侍に出で給ひて、赫映姫の家に入りたま
ひて見給ふに、光みちて清らにて居たる人あり。是ならむと思して近くよらせ給ふに、
逃けて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎて顔へど、初よく御覧じつれば、顔なくめで
たしと覺えさせ給ひて、許さじとすとて、率ておはしまさむとするに、赫映姫答へて奏す、
「おのが身は、この國に生れて侍らばこそ使ひ給はぬ、いとゐておはし難くや侍らむ」と

何か心しな
くて云々
とかくの考
のなき所に
不意に
ふたぎて
裏きて

たいくし
く疎略に

冠—官位

やまけむと思しめして、竹取の翁を召しておほせ給ふ、「汝が持て侍る赫映姫を奉れ。顔容よしと聞しめして、御使を給ひしかど、かひなく見えすなりにけり。かくたいくしくやはならはすべき」と仰せらる。翁畏まりて御返事申すやう、「此の女の童は、絶えて宮仕つかうまつるべくもあらず侍るを、もてわづらひ侍り。さりととも罷りて仰せ給はむ」と奏す。是を聞き召して仰せ給ふやう、「などか翁の手におほし立てたらむものを、心に任せざらむ。この女もし奉りたるものならば、翁に冠をなどかたばせざらむ」。翁喜びて家に歸りて、赫映姫にかたらふやう、「かくなむ帝の仰せ給へる。猶やは仕う奉りたまはぬ」といへば、赫映姫答へて曰く、「もはら左様の宮仕つかう奉らじと思ふを、強ひて仕う奉らせ給はば消え失せなむす。御官冠つかう奉りて死ぬばかりなり」。翁いらふるやう、「なし給ひそ。官冠も、我が子を見奉らでは何にかはせむ。さはありともなどが宮仕をし給はざらむ。死に給ふやうやはあるべき」といふ。「猶そらごとかと、仕う奉らせて、死なすやあると見給へ。數多の人の志疎ならざりしを、空しくなしてしこそあれ。

うたても一
悪くも

宜はせつるになむ参りつる」といへば、「さらばかくと申し侍らむ」といひて入りぬ。赫
映カクヤウに、「はやかの御使に對面し給へ」といへば、赫映カクヤウ、「よき事にもあらず、いかで
か見のべき」といへば、「うたても宜ふかな。帝の御使をばいかでか疎ソにせむ」といへば、
赫映カクヤウ答ふるやう、「帝の召して宜はむこと、かしこしとも思はず」といひて、更に見
のべくもあらず、うめる子のやうにはあれど、いと心恥しげに疎ソなるやうにいひけれ
ば、心のまよにもえ責めず。嬪ヒナ内侍の許にかへり出でて、「口惜しくこの幼き者は、こ
はく侍るものにて、對面すまじきと申す」内侍、「必ず見奉りて参れ」と仰事ありつる
ものを、見奉らではいかでか歸り参らむ。國王の仰事を、まさしに世に住み給はむ人の、
承り給はではありなむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、詞はづかしくいひければ、これ
を聞きて、まして赫映カクヤウ聞くべくもあらず。「國王の仰事を背かば、はや殺し給ひてよ
かし」といふ。この内侍歸り参りて、このよしを奏す。帝聞しめして、「多くの人を殺し
てける心ぞかし」と宣ひて、止みにけれど、なほ思しめしおはしまして、この女の謀に

これを赫映姫、聞きてとぶらひにやる歌、

年をへてなみ立ちよらぬ住の江のまつかひなしと聞くはまことか

とあるを讀みて聞かす。いと弱き心地に頭もたけて、人に紙をもたせて、苦しき心地に辛うじて書き給ふ。

かひはかくありけるものをわびはてて死ぬる命をすくひやはせぬ

と書きはてて絶え入りたまひぬ。これを聞きて、赫映姫少し哀とおほしけり。それよりなむ少し嬉しきことをば、かひありとはいひける。

さて、赫映姫容世に似ずめでたきことを、帝きこしめして、内侍中臣のふさ子に宣ふ、

○御狩のみ
ゆき

「おほくの人の身を徒になしてあはざしなる赫映姫は、いかばかりの女ごとまかりて見てまるれ」と宣ふ。ふさ子、承りてまかれり。竹取の家に畏りて請じ入れてあへり。姫

いうに—優
に

に内侍のたまふ、「仰ごことに、赫映姫の容いうにおはすとなり。よく見て參るべきよし

しらみ、白
蟻、氣絶し
て境の上り
たる貌

竈燭、又紙
燭と書く、
松材を細く
削り油を塗
りて燈火の
料とす
御ぐし、御
頭
いはけたる
心効く不
賢なる

さむとて、綱を引き通くして、頭懸のる即、やしまの壁の上へのけざまに懸る給へり、人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり、御日はしらめにてふし給へり、人々御日に水をすくひ入れ奉る、辛うじて息いで給へるに、また壁の上より、手とり足とりしてさけおろし奉る、辛うじて、「御心地はいかがおほさる」と問へば、息の下にて、「ものは少し覺のれど、腰なむ動かれぬ、されど子安貝をふと握りもたれば、酸しく覺のるなり、まづ斷傷さして來、この貝類みむ」と、御ぐしちだけて御手をひろげ給へるに、熱のまり置ける古費をにぎり給へるなりけり、それを見給ひて、「あなかひなのわざや」と宜ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしとはいひける、かひにもあらず、と見給ひけるに、御心地もたがひて、唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず、御腰は折れにけり、中納言は、いはけたるわざして病むことを、人に聞かせじとし給ひけれど、それを病にていと弱くなり給ひにけり、貝をえ取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はむことを、目にそへて思ひ給ひければ、ただに病み死ぬるよりも、人ぎき緊しく覺え給ふなりけり。



讀ばかり云
々―誰か之
を爲し得む
と思ひ廻ら
すにその人
を思ひ寄ら
れば

りて、人をばみくべき」と宣ふ、くらつ殿申すやう、「燕ツバメは子うまむとする時は、尾をさ
さけて七尾廻りてむじ、産み落すめる、さて七尾廻らむ折ひき上げて、そのをり平安具
は取らせ給へ」と申す、中納言喜ひ給ひて、萬の人にも知らせ給はで、みそかに寮にい
まして、男どもの中に交りて、夜を裏になして取らしめ給ふ、くらつ殿かく申すを、い
といたく喜ひ給ひて宣ふ、「こゝに使はるゝ人にもなきに、願をかなふる事の精しさ」と
宣ひて、御女ぬぎてかづけ給ひつ、「更に夜さりこの寮にまうで来」とのたまひて通しつ、
日暮れぬれば、かの寮におはして見給ふに、誠に燕巢ツバメノネつくれり、くらつ殿申すやうに
尾をささけて廻るに、荒籠アラカゴに人を敷せて釣りあけさせて、燕の巢に手をさし入れさせ
て擇るに、「物もなし」と申すに、中納言、「あしく擇ればなきなり」と腹たちて、「譯ばかり
おほえむに」とて、「我のほりて擇らむ」と宣ひて、籠にのりて釣られ登りて、窺ひ給へるに、
燕尾ツバメノビをささけていたく廻るに合せて、手を捧けて擇り給ふに、手にひらめるものさば
る時に、「われ物にぎりたり、今はおろしてよ、着しえたり」と宣ひて、集りて疾くおろ

あななひ
あぐらに同
じ

額を合せて
一親しく語
り合ふ様

あれて一遠
離して

もあるかな。もともえ知らざりけり。興あること申したり」と宣ひて、まめなる男ども
二十人ばかり遣して、あななひに上げすゑられたり。殿より使ひまなく給はせて、「子安
貝とりたるか」と問はせ給ふ。燕も人の數多のほり居たるにおちて、巢に上りこず。か
かるよしの御返事を申しければ、聞き給ひて、いかがすべきと思しめし煩ふに、かの寮
の官人くらつ磨と申す翁申すやう、「子安貝とらむと思しめさば、たばかり申さむ」とて、
御前に参りたれば、中納言額を合せてむかひ給へり。くらつ磨が申すやう、「この燕の
子安貝は、あしくたばかりて取らせ給ふなり。さてはえ取らせ給はじ。あななひにおど
ろおどろしく二十人の人の上りて侍れば、あれて寄りまうで來すなむ。せさせ給ふべきや
うは、このあななひを毀ちて、人みな退きて、まめならむ一人を荒籠に載せすゑて、
綱をかまへて、鳥の子産まむ間に綱を釣りあけさせて、ふと子安貝を取らせ給はむなむ
よかるべき」と申す。中納言宣ふやう、「いとよきことなり」とて、あななひを毀ちて、
人みな歸りまうで來ぬ。中納言、くらつ磨に宣はく、「燕はいかなる時にか子を産むと知

本の上し
との密

〇燕の子安
貝

大炊寮一宮
内省の東に
あり諸國の
稻田及び公
私の熟食等
の事を掌る
つく一東
柱、和名鈔
に、豆賀波
之良
あぐら一今
いふ足場

し本の上は、腹をきりて笑ひ給ふ。糸を鼻かせて遊りし星は、雲鳥の巢に皆咄ひもていにけり。世界の人のいひけるは、「大伴大膳言は、龍の首の玉を取りておはしたる」「舌さもあらず、御眼二つに牛の様な玉をぞ添へていましたる」といひければ、「あなたへ贈」といひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、あなたへがたとはいひ給めける。

中納言石土麻呂は、家につかはるゝ男どもの許に、「燕の巢くひたらば告げよ」と宜ふを、うけたまはりて、「何の料にかあらむ」と申す。答へて宜ふやう、「燕のちたる子安貝とらむ料なり」と宜ふ。男ども答へて申す、「燕をあまた殺して見るにだにも、腹になきものなり。ただし子産む時なむいかでかいだすらむ。はらくくと、人だに見れば失せぬ」と申す。又人の申すやう、「大炊寮の飯炊く屋の棟のつくの穴毎に燕は巢くひ侍り。これにまめならむ男どもをゐてまかりて、あぐらを結ひて上げて窺はせむに、そこらの燕子うまさらむやは、さてこそ取らしめ給はめ」と申す。中納言喜び給ひて、「をかしき事に

風いとおも
き云々―風
邪に冒さる
る毎に重く
煩ふ人にて
によぶく
―呻吟しつ
る

ば、國くにの司つかさまうで訪まゐふにも、え起きあがり給たまはで、船底ふなぞこに臥ふし給たまへり。松原まつはらに御筵みじらしき
ておろし奉たごる。その時にぞ、南海なんかいにあらざりけりと思おもひて、辛からうじて起き上あり給たまへるを
見れば、風かぜいとおもき人ひとにて、腹はらいとふくれ、こなたかなたの目めには、李すもを二ふたつつけた
るやうなり。これを見奉たごりてぞ、國くにの司つかさもほゝゑみたる。國くにに仰おほせたまひて、腰輿たごしつく
らせ給たまひて、によぶく荷になはれて家いへに入り給たまひぬるを、いかで聞きけむ、遣つかはしし男をとこども
参まゐりて申まをすやう、「龍たつの首くびの玉たまをえ取とらざりしかばなむ、殿どのへもえ参まゐらざりし。玉たまのとり
難がたかりしことを知り給たまへればなむ、勘當かんだうあらじとて参まゐりつる」と申まをす。大納言だいなごん起き出で
て宣のたまはく、「汝等なんぢらよくもて來こずなりぬ。龍たつは鳴神なるかみの類たぐひにてこそありけれ。それが玉たまを取とら
むとて、そこらの人々の害がいせられなむとしけり。まして龍たつを捕とらへたらましかば、又またこと
もなく、我われは害がいせられなまし。よく捕とらへずなりにけり。赫映姫かたやひめてふ大盜人おほろすびのやつが、人
を殺ころさむとするなりけり。家のあたりだに今は通とほらじ。男をとこどももなありきそ」とて、家
に少すこし残のこりたりける物ものどもは、龍たつの玉たまとらぬ者ものどもにたびつ。これを聞ききて、離わかれ給たまひ

け一敘
あかりて一
明るくなり
て

るかな」とて、樹取泣く、大納言これを聞きて宜はく、「船に乗りては樹取の申すことをこそ、高き山としたため、など斯くたのもしけなきことを申すぞ」とあをへどを吐きて宜ふ、樹取答へて申す、「神ならねば何業をか仕らむ、風吹き浪はけしけれど、雷さへいただきに落ちかゝるやうなるは、龍を殺さむと求め給ひ候へば、かくあなり、はやてり龍の吹かするなり、はや神に祈り給へ」といへば、「よき事なり」とて、「樹取の御神聞しめせ、をちなく心幼く龍を殺さむと思ひけり、今より後は毛の末一筋をだに動し奉らじ」と、祝詞をはなちて立居、泣くく呼ばひ給ふこと、千度ばかり申し給ふけにやあらむ、やうく雷なりやみぬ、少しあかりて、風はなほ早く吹く、樹取のいはく、「これは龍のしわざにこそありけれ、この吹く風はよき方の風なり、あしき方の風にはあらず、よき方に赴きて吹くなり」といへども、大納言は、是を聞き入れ給はず、三四日ありて吹き返しよせたり、瀆を見れば、播磨の明石の瀆なりけり、大納言、南海の瀆に吹き寄せられたるにやあらむ、と思ひて、息つき臥し給へり、船にある男ども國に告げたれ

召繼—取次
などの雑役
をするもの
をぢなき—
無智なる事
を知らで

こころ—多
年

だ、舍人二人召繼として、やつれ給ひて、難波の邊におはしまして、問ひ給ふことは、「大伴
大納言の人や、船に乗りて龍殺して、そが首の玉とれるとや聞く」と問はするに、船人
答へていはく、「怪しきことかな」と笑ひて、「さるわざする船もなし」と答ふるに、をぢ
なきことする船人にもあるかな。え知らでかくいふ、とおほして、「我が弓の力は、龍あら
ばふと射殺して首の玉は取りてむ。遅く来るやつばらを待たじ」と宣ひて、船に乗りて、
海ごとにありき給ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎ出で給ひぬ。いかがしけむ、
はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもてありく。いづれの方とも知らず、船を海
中にまかり出でぬべく吹き廻して、浪は船にうちかけつよまき入れ、雷は落ちかゝるや
うに閃きかゝるに、大納言は惑ひて、「まだかゝるわびしき目は見ず、如何ならむとする
ぞ」と宣ふ。楫取答へて申す。「こゝら船に乗りてまかりありくに、まだかくわびしき目
を見ず。御船海の底に入らずは雷落ちかゝりぬべし。若しさいはひに神の助あらば、南
海に吹かれおはしぬべし。うたてある主の御許に仕へ奉りて、すすろなる死をすべかめ

いしる一書
所・精選の
こと

すき事一好
色

つきなき一
便宜なき

ばいかがは背くべき」と宜ひて、龍の首の玉とりにと、出し立て給ふ。この人々の道
糧食物に、龍の内の明鏡、鏡など、ある限とり出でて、譲へて遣はす。「この人々ども、歸
るまでいぢるをして我は居らむ、この玉とり得ては家に歸りくな」と宜はせけり。おの
おの傳承りて罷り出でぬ。「龍の首の玉とり得ずは歸り來な」と宜へば、いづちもく
足のむきたらむ方へいなむとす。かゝるすき事をし給ふ事、と請りあへり、賜はせたる
物はおのく分けつと取り、成は己が家に歸りぬ。成はおのが行がまほしき所へいぬ。
龍と君と申すとも、かくつきなき事をおはせ給ふ事、と、ことゆかぬもの故、大納言を訪
りあひたり。「赫映映するむには、例のやうには見にくし」と宜ひて、麗しき屋をつく
り給ひて、漆を塗り、蔦欄をし、いろへし給ひて、屋の上には糸を染めて、いろくりに
貸かせて、内々のしつらひには、いふべくもあらぬ綾織物に輪をかきて、間毎に張りたり。
もとの妻どもは追ひはらひて、赫映映を必ずあはむとまうけして、獨り明し暮し給ふ。遣
しし人は、夜書待ち給ふに、年越ゆるまで音もせず、心もとながりて、いと忍びて、た

あへなし—
張合なし

○龍の首の
珠

まして、赫映姫かぐやひめにすみ給ふとな。こよにやいます」など問ふ。或人のいはく、「かはころも裘は火にくべて焼きたりしかば、めらくと焼やけにしかば、赫映姫あひ給はず」といひければ、是を聞ききてぞ、とけなきものをば、あへなしとはいひける。

大伴御行おほさとのみゆきの大納言だいなごんは、我が家にありとある人を召し集めて、宣はく、「龍たつの首くびに五色しきの光ひかりある玉たまなり、それを取りて奉たてまつりたらむ人には、願ねがはむ事をかなへむ」と宣ふ。男おのこども仰おほせの事を承うけたまはりて申さく、「仰おほせのことはいと尊たふせし。ただしこの玉たやすくえ取らじを、况いはんや龍たつの首くびの玉はいかがとらむ」と申しあへり。大納言のたまふ、「君きみの使つかひといはむものは 命いのちを捨てても、己おのが君きみの仰おほせ事をば叶へむとこそ思ふべけれ。この國になき天竺唐土てんぢくたうどにもあらず。この國の海山うみやまより龍たつは下おり上のぼるものなり。いかに思ひてか、汝等なんぢらかたきものと申すべき」。男おのこども申すやう、「さらばいかがはせむ。難かたきものなりとも、仰おほせ事に従したがひて求めにまからむ」と申す。大納言見笑みわらひて、「汝等君なんぢらの使つかひと名を流ながしつ。君きみの仰おほせ事を



人の一右大臣

なごりなく
！悉く

れり。かく呼びすゑて、この度は必ずあはむ、と嫗おんなの心にも思ひをり。この翁おきなは、赫映かぐや姫ひめのやもめなるを歎なげかしければ、よき人にあはせむ、と思ひはかれども、切せちに否いなといふことなれば、え強しひぬはことわりなり。赫映かぐや姫ひめ翁おきなにいはいはく、「この裘かほころもは、火ひに焼やかむに焼やけずはこそ眞まことならむと思ひて、人のいふことにもまじめ。世になき物なれば、それをまことと疑うたがはむと思はむと宣のたまへ。猶なほこれを焼やきて見みむ」といふ。翁おきな「それさもいはれたり」といひて、大臣おとぎに「かくなむ申まをす」といふ。大臣おとぎ答こたへてはいはく、「この皮かわは唐土からこしにもなかりけるを、辛からうじて覚さめ尋たづね得えたるなり。何なんの疑うたがひあらむ。さは申まをすとも、はや焼やきて見み給たまへ」といへば、火ひの中にうちくべて焼やかせ給たまふに、めらくくと焼やけぬ。「さればこそ異物ことものの皮かわなりけり」といふ。大臣おとぎこれを見み給たまひて、御顔おんかほは草くさの葉はの色いろしてゐる給たまへり。赫映かぐや姫ひめは、あなうれしと喜よろこびて居ゐたり。かの詠よみ給たまひける歌うたの返かへし、箱はこに入れて返かへす。なごりなくもゆと知りせばかは衣ころもおもひの外ほかにおきて見みましを。とぞありける。されば歸かへりいましにけり。世の人々、「安倍大臣あべのおとぎは、火鼠ひねずみの裘かほころもをもてい

いろへて一
彩色して

うべー宜

御身一右大
臣自肩

化粧一観づ

くり

おしひー

思、大

家一竹取の

家

といへる事を見て、「何おほす、いま金少しの事にこそあなむ、必ず通るべき物にこそあなむ、
なれ、（おほく）嬉しくして遣せたる哉」とて、唐土の方に向ひて伏し拜み給ふ、此衣入れたる
箱を見れば、種々のうるはしき珊瑚をいろへて作り、（おほく）衣を見れば、緋青の色なり、毛
の末には金の光輝きたり、けに寶と見え、うるはしきこと比ぶべき物なし、火にやけ
ぬ事よりも、清なる事比なし、「うべ、（おほく）綺映の好しがり給ふにこそありけれ」と宣
ひて、「あなかし」とて、箱に入れ給ひて、物の枝につけて、御身の化粧いといたくして、
やがてとまりなむものぞ、と思して、歌よみ加へて持らていまして、その歌は、
かぎりなきおもひに焼けぬかはごろも袂かわきて今日こそは着め
といへり、家の門に持ていたりて立てり、竹取いで来て取り入れて、（おほく）綺映に見す、（おほく）綺
映、かの衣を見ていはく、「うるはしき皮なあり、わきて眞の皮ならむとも知ら
ず、竹取答へていはく、「とまれかくまれ、まづ請じ入れ奉らむ、世の中に見えぬ衣の様
なれば、是を眞と思ひ給ひね、人ないたくわびさせ奉らせ給ひせ」といひて、呼びする奉

火鼠ひねずみの裘かはごろも、我が國くにになきものなり。音には聞けども、いまだ見ぬものなり。世にある物ものならば、此國にももてまうで來なまし。いと難かたき商あきなひなり。然れども、若てんし天竺てんぢくにたまさかにもて渡りなば、もし長者ちやうじやの邊あたりにとぶらひ求めむに、なき物ならば、使つかひに添そへて金こがねをば返かへし奉らむ。

といへり。かの唐土たうど船來ふねきけり。小野房守おののふさもりまうで來きてまう上のぼる、といふことを聞きて、あゆみ疾さうする馬うまをもちて、走らせ迎へさせ給ふ時に、馬に乗りて筑紫つくしよりただ七日に上りまうで來たり。文を見るに、いはく、

火鼠ひねずみの裘かはごろも、辛からうじて、人を出して求めて奉る。今の世にも昔の世にも、この皮は容たは易やすくなきものなりけり。昔かしこき天竺てんぢくのひじり、この國にもて渡りて侍りける、西にしの山寺やまでらにあり、と聞き及びて、公おほやけに申して、辛からうじて買ひ取りて奉る。價あたひの金こがね少すくなし、と國司くにし使つかひに申ししかば、王卿わうけいが物加ものくはへて買ひたり。今金五十兩たまはるべし。船の歸らむにつけてたび送れ。もし金賜こがねたまはぬものならば、裘かはごろもの質しちかへしたべ。

僧
ひじり—聖

たび送れ—
送り給へ



ちようぜさせ—打擲せしめ

宮司—皇子の宮に奉仕せる人々

御供に云々—世人には勿論從者にも耻ぢて身を隠し給はんとてなり

○火鼠の裘

とらせ給ふ。工匠等いみじく喜びて、「思ひつる様にもあるかな」といひて、かへる道にて、車持皇子血の流るよまでちようぜさせ給ふ。祿得しかひもなく、皆とり捨てさせ給ひてければ、逃げうせにけり。かくて、この皇子、「一生の恥これに過ぐるはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず、天の下の人の見おもはむことの恥かしき事」と宣ひてただ一所深き山へ入り給ひぬ。宮司さぶらふ人々、みな手を分ちて求め奉れども、身まかりもやし給ひけむ、え見つけ奉らずなりぬ。皇子の御供に隠し給はむとて、年比見え給はざりけるなりけり。是をなむ、たまさかるとはいひ始めける。

右大臣阿倍御主人は、財豊に家ひろき人にぞおはしける。その年わたりける唐土船の王卿といふ者の許に、文を書きて、火鼠の裘といふなるもの買ひておこせよ、とて、仕まつる人の中に、心たしかなるを選びて、小野房守といふ人をつけてつかはす。もていたりて、かの浦に居る王卿に金をとらず。王卿文をひろけて見て、返事かく。

御使し御使
人の事にて
こもにては
妾などの意

ただかに一
端に

うれへ一態
訴

皇子若千餘日やしき工匠等と謀其に、同じ所に隠れ居給ひて、少しとき玉の枝を
作らせ給ひて、官も賜はらむと仰せ給ひき、これを、この比家するに、御使とおは
しますべき橘映姫の要む給ふべきなりけり、と承りて、この言より賜はらむ、と
申して賜はるべきなり、

といふを聞きて、橘映姫、暮るまよに思ひわびつる心地を憂えて、翁をよび取りて
いふやう、一詠に蓬萊の木かところ思ひつれ、かくあさましき處事にてありければ、は
や疾くかへし給へ一といへば、翁答ふ、ただかに遣らせたる物と聞きつれば、かへさむ
こといと易し」と諾きをり、橘映姫の心ゆきはてて、ありつる歌のかへし、

まことかと聞きて見つれば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける

といひて、玉の枝も返しつ、竹取の翁さばかり誦らひつるが、さすがに覺えて眠りをり、
皇子は、立ちあした、居ちはしたにて居給へり、日の暮れぬれば、すべり出で給ひぬ、か
のうれへせし工匠等をば、橘映姫呼びすゑて、一様しき人どもなり」といひて、縁いと多く

こころ—多
く

作物所—禁
中の細工所

け—家の
子

うで來にし。大願たいぐわんの力にや、難波なにばより昨日けふなむ都にまうで來つる。さらに潮しほにぬれたる衣きぬをだに脱ぬぎかへなでなむ、こちまうで來つる」と宣のたまへば、翁おきな聞ききて、うち歎なげきてよめる。
吳竹くれたけのよよのたけとる野山のやまにもさやはわびしきふしをのみ見し
これを皇子みこ聞ききて、「こころの日比ひごと思おもひわび侍はべりつる心は、今日けふなむおちるぬる」とのたまひて、かへし、

わが袂たもとけふかわければわびしさのちぐさの数かずもわすられぬべし

と宣のたまふ。かゝる程ほどに、男おとこども六人むにん連つらねて、庭にわに出いできたり。一人ひとりの男おとこ、文ふみ挾はさみに文ふみをはさみて申まをす。「作物所つくもじころの寮つかさのたくみ漢部内磨あやべのうちまろまをさく、玉たまの木きを作りて仕つかうまつりしこと、心を碎くだきて、千餘せんじゆ日に力を盡つくしたること少すくからず。しかるに祿ろくいまだ賜たまはらず、これを賜たまはりて、分わかちてけごに賜たまはせむ」といひて捧さかげたり。竹取たけとの翁おきな、この工匠たくみ等らが申まをすことは何事なにことぞ、とかたぶきをり。皇子みこは我われにもあらぬ氣色けしきにて、肝消きんじゆえぬべき心地こころちしてゐ給たまへり。是これを赫映かくや姫ひめ聞ききて、「この奉かみる文ふみを取とれ」といひて見みれば、文ふみに申まをしけるやう、

舟のうちを
なむせめて
一舟の中よ
り強ひて

ほうかむる
り一寶珠
魂なるべ
し、仙女の
名
そばひら
嶺平、山の
側

辰の時許に、海の中に遙に山見ゆ。舟のうちをなむせめて見る。海の上に漂へる山いと大きにてあり、その山の峰高くうるはし。これや我が覚むる山ならむと思へど、さすがに畏しく覺えて、山の圖を指し廻らして、二三日ばかり見ありくに、天人の船したる女、山の中より出で来て、銀の金鏡をもて水を汲みありく、これを見て船よりおりて、この山の名を何と申すと問ふに、女答へて曰く、これは蓬莱の山なり、と答ふ。之を聞くに嬉しき事限なし。この女に、かく宜ふは誰ぞ、と問ふ。我が名はほうかむるり、といひて、ふと山の中に入りぬ。その山を見るに、更に登るべきやうなし。その山のそばひらを廻れば、世の中になき花の木ども立てり。金銀瑠璃色の水流れ出でたり。それにはいろくの玉の橋渡せり。そのあたり照り輝く木ども立てり。その中に、この取りて持てまうで來たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばとて、この花を折りてまうできたるなり。山は限なくおもしろし。世に驚ふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さらに心もとなくて、船に乗りて追風ふきて、四百餘日になむま

むくつけげ
なるもの—
恐ろしきも
の

とは申しつるを、かく淺ましく持て來ることをなむ、ねたく思ひ侍る」といへど、なほ翁は閨の内しつらひなどす。翁、皇子に申すやう、「いかなる所にか、この木はさぶらひけむ、怪しく麗しくめでたきものにも」と申す。皇子答へて宣はく、「一昨々年の二月の十日比に、難波より船に乗りて、海中に出でて、行かむ方も知らず覺えしかど、思ふこと成らでは、世の中に生きて何かせむ、と思ひしかば、ただ空しき風に任せてありく。命死なばいかかはせむ、生きてあらむ限はかく歩き、蓬萊といふらむ山にあふや、と浪にただよひ漕ぎありきて、我が國の内を離れてありき廻りしに、或時は浪荒れつゝ海の底にも入りぬべく、或時は風につけて知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さむとしき。或時には來し方行末も知らず、海にまぎれむとしき。或時には糧盡きて、草の根を食物としき。或時にはいはむ方なくむくつけげなるもの來て、食ひかからむとしき。或時には海の貝を取りて命をつぐ。旅の空に助くべき人もなき所に、いろいろの病をして、行方すらも覺えず、船の行くに任せて、海に漂ひて、五百日といふ

文中に見ゆ
る花・園
して囀

おはしましたり」と告ぐ、「旅の御姿ながらおはしましたり」といへば、建ひ奉る。皇子のたまはく、「命を捨てて、かの玉の枝持てきたり」とて、「結映姫に見せ奉り給へ」といへば、翁もちて入りたり。この玉の枝に文をぞつけたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らで更に歸らざらまし

これらをみはれと見て居るに、竹取の翁走り入りていはく、「この皇子に申し給ひし蓬葉の玉の枝を、一つの所をあやしき處なく、あやまたずもておはしませり。何をもちてか、とかく申すべきにあらず。旅の御姿ながら、我が御家へも寄り給はずしておはしましたり。はやこの皇子にあひ仕うまつり給へ」といふに、物もいはず頬杖をつきて、いみじう歎かしけに思ひたり。この皇子、今さら何かといふべからずといふまゝに、縁にはひのほり給ひぬ。翁ことわりに思ふ、「この國に見えぬ玉の枝なり。この度はいかでかいなみまをさむ。人さまもよき人におはす」などいひ居たり。結映姫のいふやう、「親ののたまふ事を、ひたぶるにいなみ申さむことのいとほしさに、得がたきものをのかし、

ひたぶるに
一向に

おはしましぬと—遠く舟出しつと内匠—祭裡の工匠知らせ給ひつる云々—十六ヶ所の知行所くど一窓、竈の後の穴くどはくら(倉)の誤ならんとも言ふ優曇華—經

して、赫映姫の家には、玉の枝とりになむまかる、といはせて下り給ふに、仕うまつるべき人々、みな難波まで御送りけり。皇子、「いと忍びて」と宣はせて、人も數多率ておはしまさず、近う仕うまつる限して出で給ひぬ。御おくりの人々、見奉り送りて歸りぬ。おはしましぬと人には見え給ひて、三日許ありて漕ぎ歸り給ひぬ。かねて事みな仰せたりければ、その時一の工匠なりける内匠六人を召しとりて、容易く人寄り來まじき家を作りて、構を三重にしこめて、工匠等を入れ給ひつよ、皇子も同じ所にこもり給ひて、知らせ給ひつるかぎり十六所をかみにくどをあけて、玉の枝をつくり給ふ。赫映姫のたまふやうに、違はずつくり出でつ。いとかしこくたばかりて、難波に密にもて出でぬ。「船に乗りて歸り來にけり」と殿に告げやりて、いといたく苦しげなる様して居給へり。迎に人おほく参りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物覆ひて持ちて参る。いつか聞きけむ、「車持皇子は、優曇華の花持ちてのほり給へり」とのよしりけり。これを赫映姫聞きて、我はこの皇子にまけぬべし、と胸つぶれて思ひけり。かゝる程に門を叩きて、「車持皇子

ひし黒一眞
眞

實直の御なる鉢のひた黒に候つきたるを取りて、鉢の袋に入れて、作花の枝につけて、鉢映姫の家にもて来て見せければ、鉢映姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり、ひろけて見れば、

高山のみにここにころをつくしはてみいしの鉢のなみだながれき
鉢映姫、光やあると見るに、曇ばかりの光だになし、

おく露のひかりをだにぞやどさまし小倉山にてなにもとめけむ
とて、かへし出すを、鉢を門に棄てて、この歌の返をす、

しら山にあへば光のうするかとはちを棄ててもたのまるるかな
とよみて入れたり、鉢映姫返もせずなりぬ、耳にも聞き入れざりければ、いひ煩ひて歸りぬ、かれ鉢を棄てて又いひけるよりぞ、面なきことをば、はちを棄つとはいひける、

○蓬萊の玉
の枝

車持皇子は、心たばかりある人にて、公には、筑紫國に湯あみに罷らむ、とて、暇まう

おいらかに
云々―かゝ
る難題をか
けむよりは
何ぞ手短に
この邊へも
寄り付くな
とは言はぬ
○佛の御石
の鉢
したくみ―
工夫

れに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として立てる木あり。それ一枝折りて賜は
らむ」といふ。「今一人には、唐土にある火鼠の裘を賜へ。大伴大納言には、龍の首に
五色に光る玉あり。それを取りて賜へ。石上中納言には、燕のもたる子安貝一つ取りて
賜へ」といふ。翁、「難き事どもにこそあしめれ、此國にある物にもあらず。かく難き事を
ばいかに申さむ」といふ。赫映姫、「何か難からむ」といへば、翁、「とまれかくまれ申さ
む」とて、出でて、「かくなむ。聞ゆるやうに見せ給へ」といへば、皇子達、上達部聞きて、
「おいらかに、あたりよりだにな歩きぞ、とやは宣はぬ」といひて、倦じて皆歸りぬ。
猶この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物も持て來ぬものかは、
と思ひめぐらして、石作皇子は心のしたくみある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百
千萬里の程行きたりとも、いかでか取るべき、と思ひて、赫映姫の許には、今日なむ天
竺へ石の鉢とりにまかる、と聞かせて、二年ばかり經て、大和國十市郡にある山寺に、

かひて風の
鳴りあはしく

うけつ一領
承す

うそを吹き
一口笛を吹
く

らぬ人々にこそあめめれ」結城のいはく、「例はかりの深きを見むといはむ、いさゝ
かの事なり、人の志ひとしかなり、いさでか中に実勝は知らば五人の人の中のかしき
物見せ給へらむに、御志勝りたりとて仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申し給
へ」といふ、「よき事なり」とうけつ、日暮るゝ程、例の集りぬ、人々或は笛を吹き、或
は歌をうたひ、或は唱歌をし、或はうそを吹き、扇をならしなどするに、霜出でていは
く、「野くらもきたなけなる所に、年月を経てもものし給ふ事、梅りたるかしこまりを申す、
翁の命けふ明日とも知らぬを、かく宜ふ君途にも、よく思ひ定めて仕うまつれ」と申せ
ば、深き御心を知らでは、となむ申す、さ申すも理なり、いづれ若勝おはしさまねば、
のかしきもの見せ給へらむに、御志の程は見のべし、仕うまつらむ事は、それになむ定
むべき、といふ、これよき事なり、人の恨もあるまじ」といへば、五人の人々も、「よき
事なり」といへば、翁入りていふ、結城、「石、作皇子には、天竺に佛の御石の鉢とい
ふ物あり、それをとりて賜へ」といふ、「車持皇子には、東の海に蓬萊といふ山あなり、そ

門も廣く—
一家繁昌に

かうても—
此儘獨身に
ても

一人々々に
—誰か一人

に

思の如くも
云々—我が

ありく。これを見つけて、翁おきな 赫映姫かぐやひめにいふやう、「我が子の佛變化ほとけへんげの人と申しながら、

こよら大さまで養やしなひ奉る志疎おろかならず。翁の申さむこと聞き給ひてむや」といへば、赫映

姫ひめ、「何事なにごとをか宣のたまはむ事を承らざらむ。變化へんげの者にて侍りけむ身とも知らず、親おやとこそ思

ひ奉れ」といへば、翁、「嬉うれしくも宣のたまふものかな」といふ。「翁年七十としなそぢに餘りぬ。今日けふとも

明日あすとも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす、女は男にあふことをす、その後

なむ門かぎも廣ひろくなり侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさむ」。赫映姫かぐやひめのいはく、「なでふ

さる事かし侍らむ」といへば、「變化へんげの人といふとも、女をんなの身もち給へり。翁のあらむ限

は、かうてもいまずかりなむかし。この人々の年月としづきを経て、かうのみいましつゝ宣のたまふ事

を思ひ定めて、一人々々ひとりにあひ奉り給ひね」といへば、赫映姫かぐやひめはく、「よくもあらぬ容

を、深き心も知らで、あだ心こころつきなば、後悔のちくやしき事もあるべきをと思ふばかりなり。世

のかしこき人なりとも、深ふかき志を知らではあひ難がたしとなむ思ふ」といふ。翁おきなはく、「思おもひの

如くも宣のたまふかな。そもく如何やうなる志あらむ人にかあはむと思おもはす。かばかり志疎おろかな



情を通ずること

おろかなる

—志淺き

わび歌—戀
ひ侘びて詠
める歌

さりとも—
今は心強く
斷るとも

りを離れぬ公達、夜を明し日を暮す人多かり。おろかなる人は、益なき歩行はよしなかりけりとて、來ずなりにけり。その中に猶いひけるは、色好といはるゝかぎり五人、思ひ止む時なく夜晝來けり。その名、一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂、只この人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人々なりければ、赫映姫を見まほしうして、物も食はず思ひつゝ、かの家に行きて、たゞすみ歩きけれども、かひあるべくもあらず。文を書きてやれども、返事もせず、わび歌など書きて遣れども、かへしもせず、效なしと思へども、十一月十二月の降りこほり、六月の照りはたよくにもさはらず來けり。この人々、ある時は竹取を呼び出でて、「娘を我に給べ」と伏し拜み、手を擦り宣へど、「己がなさぬ子なれば、心にも従はずなむある」といひて、月日を過す。かよれば、この人々家に歸りて物を思ひ、祈をし、願を立て、思やめむとすれども止むべくもあらず。さりとも遂に男合せさらむやは、と思ひて頼をかけたなり。強に志を見え

けしきも一掃

す、いつきかしづき實上程に、この父の喜けうらなること世になく、家の内は嘆き處な

く美談となり、兼心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も土ふぬ、腹立たし

きことも慰みけり、兼竹をとること久しくなりぬ、勢區の者になりけり、この子いと

大になりぬれば、名をば三宅戸實部秋田を呼びてつけさす、秋田なよ竹の輪映草とつけ

つ、此のほど三日うちあけ遊ぶ、萬の遊をぞしける、男女きはす呼び集へて、いとかし

うらあけ遊
ぶ一酒宴し
遊ぶ

のつとどひ

世界の異、貴なるも賤しきも、いかで、この輪映草を得てしかな見てしかな、と首に聞き

めでて感ふ、そのあたりの垣にも家の外にも居る人だに、容易く見るまじきものを、夜

は安き寝らねず、闇の夜に出でても穴を抉り、こよかしこより覗き垣間見まどひあへり、

よばひ一呼
びの延旨、
呼び誘ひて

さる時よりなむ、よばひとはいひける、人の物ともせぬ處に感ひありけども、何の驗あ

るべくも見えず、家の人どもに物をだに言はむとて、いひ懸くれども、事ともせず、あた

竹取物語

○かぐや姫
おひたち

よごとにより
節と節との
間毎に
髪上—童形
の放ち髪を
上げ結ぶこ
と
裳著—裳を
始めて着す
る祝

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつと、萬の事につかひけり。名をば讚岐造磨となむいひける。その竹の中に、本光る竹ひとすぢありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。翁いふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中に、おはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家に持て來ぬ。妻の姫にあづけて養はす。美しきこと限なし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。竹取の翁この子を見つけて後に、竹をとるに、節を隔ててよごとに、金ある竹を見つくること重りぬ。かくて翁やうく豊になり行く。この兒やしなふ程に、すくくと大になりまさる。三月許になる程に、よきほどなる人になりぬれば、髪上などさだして、髪上せさせ裳著す。帳の内よりも出さ

卷之三……………三六

卷之四……………三六

住吉物語……………二〇一—二〇〇

唐物語……………二〇一—二〇八

平安朝物語集索引……………二〇一—二〇〇

目錄

○竹取物語	一—四八
○伊勢物語	四九—一三三
○大和物語	一三三—二六六
上之卷	一三三
下之卷	二〇四
○落窪物語	二六七—四九六
卷之一	二六七
卷之二	三三八

No.	Name	Age	Sex	Religion	Occupation	Education	Marital Status	Income	Assets	Liabilities	Net Worth
1	John Doe	45	M	Protestant	Teacher	High School	Married	\$12,000	\$50,000	\$10,000	\$40,000
2	Jane Smith	38	F	Catholic	Nurse	College	Single	\$8,000	\$20,000	\$5,000	\$15,000
3	Robert Brown	52	M	Jewish	Engineer	University	Married	\$15,000	\$75,000	\$15,000	\$60,000
4	Elizabeth White	60	F	Methodist	Retired	High School	Widowed	\$6,000	\$30,000	\$2,000	\$28,000
5	Michael Green	28	M	Buddhist	Student	College	Single	\$3,000	\$10,000	\$1,000	\$9,000
6	Sarah Black	42	F	Anglican	Homemaker	High School	Married	\$4,000	\$15,000	\$3,000	\$12,000
7	David Gold	35	M	Muslim	Software Developer	University	Single	\$9,000	\$40,000	\$2,000	\$38,000
8	Anna Silver	55	F	Hindu	Accountant	College	Married	\$7,000	\$25,000	\$4,000	\$21,000
9	James Copper	48	M	Sikh	Manager	High School	Married	\$11,000	\$45,000	\$8,000	\$37,000
10	Maria Iron	32	F	Buddhist	Teacher	College	Single	\$5,000	\$18,000	\$1,000	\$17,000

竹取物語 流布本素本二冊物。參照竹取物語解。

伊勢物語 流布本定家卿自筆本に
ると稱するもの。參照玉選抄、拾穗抄、古意。

大和物語 大和物語首書。參照直解。

落窪物語 古活字本。參照上田秋成校訂本。

住吉物語 古活字本。參照寶曆板流布本。

唐物語 清水濱臣校訂本。

本集の校訂につきては鳥野幸次、中村健兩氏を煩はしたること多し。特に記して謝意を表す。

大正二年二月

校訂者 武 笠 三

も延喜以前の作として信せらる。伊勢物語は所謂歌物語の嚆矢にして、大和物語は之に繼ぎたるもの、共に古來歌人必讀の書として推重せらる。作者は何れも詳ならず、伊勢は業平の自記に後人の加筆せるものといふ説信に近かるべく、大和は、花山天皇在原滋春の二説共に信を置くに足らざれども、亦以て略其時代を推すべし。落窪物語は、源氏物語に先だてる人情小説にして、文章洗練、敘事緊密、平安朝に於ける名作の一たり、亦其作者を詳にせず。住吉物語は、原作早く亡び、今存せる者は、鎌倉時代の假托の作に過ぎずと雖も、今姑らく唐物語と共に附載す。唐物語は支那の故事を、なだらかなる邦文に書下したる者、亦鎌倉初期を下らざるべしと謂はる。

今回の覆刻に際して用ひたる本左の如し。

緒言

我邦古今の載籍、屢冠するに「物語」の名を以てし、其内容區々にして類を同じうせず。而して平安朝は、實に「物語」の始めて我が文學史上に現はれ來れる時代なり。此時代の「物語」は、大凡分ちて二類となすべし。一は假作物語にして、竹取、源氏等之に屬し、一は事實に據りたる小話集にして、伊勢、大和等之に屬す。

本集題して平安朝物語集といふと雖も、其長篇大作は、別に之を刊行すべきを以て、爰には短篇數種を收めたり。

竹取物語は、古來我が小説の鼻祖として尊ばるゝ傳奇的物語にして、滑稽の裏に寓するに人情を以てし、頗る興味に饒なり。其作者を詳にせずと雖

懐邊に携へ行き、軽く片手に挿げ得べ
き書類は、要するに最も有用なる書類
なり。

ロ
マ
ン
ソ
ン

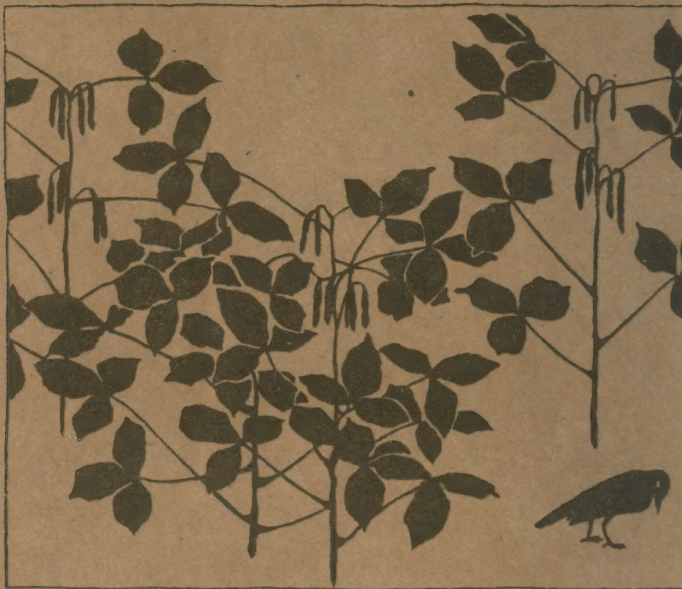
PL
777
.2
73
1913



平安朝物語集

全





PL
777
.2
T3
1913

Takekasa, Hifumi
Heian-cho monogatari shu

G

PL
777
.2
T3
1913

TEIRI CARD

.....
.....
.....

PLEASE DO NOT REMOVE
THIS CARD FROM THIS POCKET
DO NOT PUT INTO LIBRARY

